埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第199集

行田市

築道下遺跡 II

行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告 II
〈第 2 分冊〉

1 9 9 8

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

＜第１分冊＞
口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
Ⅰ．調査の概要 …… 1
1．発掘調査に至るまでの経過 …… 1
2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
3．発掘調査・整理・報告書作成の組織 …… 3
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ．遺跡の概要 …… 7
Ⅳ．Ｂ・Ｃ区の調査 …… 11
1．遺跡の概観 …… 11
2．遺構と遺物 …… 13
(1) 住居跡 …… 13
(2) 掘立柱建物跡 …… 310
(3) 土壙 …… 373
＜第２分冊＞
目次
表目次
挿図目次
図版目次
(4) 井戸跡 …… 427
(5) 不明遺構 …… 461
(6) ピット …… 476
(7) 溝 …… 499
(8) 周溝状遺構 …… 536
(9) 中世墓 …… 539
(10) その他の遺物 …… 581
a 縄文土器 …… 581
b 埴輪 …… 582
c 臼玉 …… 583
d 玉類・石製模造品 …… 586
e 土玉 …… 589
f 土錘 …… 591
g 紡錘車 …… 592
h 砥石 …… 594
i 金属製品 …… 597
j 木製品 …… 600
k 製鉄関連遺物 …… 601
l 小形土製品 …… 602
m グリッド取り上げ遺物 …… 603
Ⅴ．結語 …… 605
付編 …… 648

表目次

第 1 表　土壙計測表(1) …… 423
第 2 表　土壙計測表(2) …… 424
第 3 表　土壙計測表(3) …… 425
第 4 表　土壙計測表(4) …… 426
第 5 表　井戸跡計測表(1) …… 458
第 6 表　井戸跡計測表(2) …… 459
第 7 表　井戸跡計測表(3) …… 460
第 8 表　ピット計測表(1) …… 495
第 9 表　ピット計測表(2) …… 496
第 10 表　ピット計測表(3) …… 497

第 11 表　ピット計測表(4) ……498
第 12 表　調査区内出土臼玉一覧表(1) ……585
第 13 表　調査区内出土臼玉一覧表(2) ……586
第 14 表　調査区内出土玉類・石製模造品一覧表 589
第 15 表　調査区内出土土玉一覧表 ……591
第 16 表　調査区内出土土錘一覧表 ……591
第 17 表　調査区内出土紡錘車一覧表……592
第 18 表　調査区内出土砥石一覧表 ……594
第 19 表　調査区内出土金属製品一覧表……599
第 20 表　調査区内出土木製品一覧表……601
第 21 表　調査区内出土製鉄関連遺物一覧表 ……602
第 22 表　掘立柱建物跡一覧表(1) ……631
第 23 表　掘立柱建物跡一覧表(2) ……632
第 24 表　掘立柱建物跡一覧表(3) ……633
第 25 表　板石塔婆一覧表 ……635

挿図目次

第497図　井戸跡(1) ……429
第498図　井戸跡(2) ……430
第499図　井戸跡(3) ……431
第500図　井戸跡(4) ……433
第501図　井戸跡(5) ……435
第502図　井戸跡(6) ……437
第503図　井戸跡(7) ……439
第504図　井戸跡出土遺物(1) ……440
第505図　井戸跡出土遺物(2) ……441
第506図　井戸跡出土遺物(3) ……442
第507図　井戸跡出土遺物(4) ……443
第508図　井戸跡(8) ……446
第509図　井戸跡(9) ……448
第510図　井戸跡(10) ……449
第511図　井戸跡(11) ……452
第512図　井戸跡(12) ……454
第513図　井戸跡出土遺物(5) ……455
第514図　井戸跡出土遺物(6) ……456
第515図　井戸跡出土遺物(7) ……457
第516図　第 3 号性格不明遺構 ……461
第517図　第 8 号性格不明遺構 ……462
第518図　第 3 ・ 8 号性格不明遺構出土遺物 ……464
第519図　第 9 号性格不明遺構(1) ……466
第520図　第 9 号性格不明遺構(2) ……467
第521図　第 9 号性格不明遺構出土遺物(1) ……468
第522図　第 9 号性格不明遺構出土遺物(2) ……469
第523図　第10号性格不明遺構 ……471
第524図　第10号性格不明遺構出土遺物(1) ……472
第525図　第10号性格不明遺構出土遺物(2) ……473
第526図　第11号性格不明遺構 ……474
第527図　第12号性格不明遺構 ……475
第528図　第11・12号性格不明遺構出土遺物……475
第529図　ピット(1) ……478
第530図　ピット(2) ……480
第531図　ピット(3) ……483
第532図　ピット(4) ……485
第533図　ピット(5) ……489
第534図　ピット(6) ……492
第535図　ピット出土遺物(1) ……493
第536図　ピット出土遺物(2) ……494
第537図　溝跡(1) ……502
第538図　溝跡(2) ……504
第539図　溝跡(3) ……508
第540図　溝跡(4) ……510
第541図　溝跡(5) ……514
第542図　溝跡断面図(1) ……517
第543図　溝跡断面図(2) ……518
第544図　溝跡断面図(3) ……519
第545図　溝跡断面図(4) ……520
第546図　溝跡出土遺物(1) ……521
第547図　溝跡出土遺物(2) ……522
第548図　溝跡出土遺物(3) ……523

第549図　第38号溝跡出土遺物(1) ……526
第550図　第38号溝跡出土遺物(2) ……527
第551図　第38号溝跡出土遺物(3) ……528
第552図　第38号溝跡出土遺物(4) ……529
第553図　第38号溝跡出土遺物(5) ……530
第554図　第38号溝跡出土遺物(6) ……531
第555図　第38号溝跡出土遺物(7) ……532
第556図　周溝状遺構(1) ……537
第557図　周溝状遺構(2) ……538
第558図　墓跡(1)全体図 ……540
第559図　墓跡(2) ……541
第560図　第60号溝跡 ……543
第561図　墓跡(3) ……546
第562図　墓跡(4) ……547
第563図　墓跡(5) ……548
第564図　墓跡(6) ……549
第565図　墓跡(7) ……550
第566図　墓跡(8) ……551
第567図　墓跡(9) ……552
第568図　墓跡(10) ……555
第569図　墓跡(11) ……556
第570図　墓跡出土五輪塔 ……558
第571図　板石塔婆(1) ……563
第572図　板石塔婆(2) ……564
第573図　板石塔婆(3) ……565
第574図　板石塔婆(4) ……566
第575図　板石塔婆(5) ……567
第576図　板石塔婆(6) ……568
第577図　板石塔婆(7) ……569
第578図　墓跡出土蔵骨器(1) ……571
第579図　墓跡出土蔵骨器(2) ……572
第580図　墓跡出土台石・石蓋 ……574
第581図　その他の出土遺物(1) ……575
第582図　その他の出土遺物(2) ……576
第583図　第60号溝跡出土遺物 ……578
第584図　茶毘跡 ……579
第585図　調査区内出土縄文土器 ……581
第586図　調査区内出土埴輪 ……582
第587図　調査区内出土臼玉(1) ……583
第588図　調査区内出土臼玉(2) ……584
第589図　調査区内出土玉類・石製模造品(1) …587
第590図　調査区内出土玉類・石製模造品(2) …588
第591図　調査区内出土土玉 ……590
第592図　調査区内出土土錘 ……592
第593図　調査区内出土紡錘車(1) ……593
第594図　調査区内出土紡錘車(2) ……594
第595図　調査区内出土砥石(1) ……595
第596図　調査区内出土砥石(2) ……596
第597図　調査区内出土金属製品(1) ……597
第598図　調査区内出土金属製品(2) ……598
第599図　調査区内出土木製品 ……600
第600図　調査区内出土製鉄関連遺物……601
第601図　調査区内出土小形土製品 ……602
第602図　表土出土・グリッド取り上げ遺物 ……604
第603図　SJ-143出土坏類の形態 ……605
第604図　SJ-109出土坏類の形態 ……607
第605図　坏b形態 ……609
第606図　SX９出土坏A類の細分 ……610
第607図　SX９坏A２類に相当する土器 ……612
第608図　鈴木による動態的変遷模式……613
第609図　赤熊による編年図 ……614
第610図　富田による土器様相 ……615
第611図　富田による年代案 ……616
第612図　赤熊による北武蔵型坏の系統関係 ……617
第613図　系統関係に修正を加えた北武蔵型坏 …618
第614図　模倣坏と省略形 ……619
第615図　模倣坏と北武蔵型坏の系統と変遷傾向 622
第616図　掘立柱建物跡全体図 ……625
第617図　掘立柱建物跡形態模式図 ……626
第618図　側柱建物跡規模グラフ ……627
第619図　総柱建物跡形態・規模グラフ……629
第620図　第二・第三墓群側面観 ……643

図版目次

図版 1　B・C区96年度調査範囲(北西側)
B・C区96年度調査範囲(南東側)
図版 2　B・C区 SD-56まで
B・C区 SD-56から60まで
図版 3　B・C区 SD-60から77まで
B・C区 SD-77から85まで
図版 4　B・C区 SD-85以南
B・C区全景(北西から)
図版 5　第66号住居跡
第66号住居跡カマド遺物出土状況
第66号住居跡貯蔵穴
第71号住居跡
第71号住居跡カマド遺物出土状況
第71号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第72号住居跡
第72号住居跡遺物出土状況
図版 6　第72号住居跡遺物出土状況
第72号住居跡カマド遺物出土状況
第72号住居跡カマド
第72号住居跡貯蔵穴
第74号住居跡
第78号住居跡
第78号住居跡遺物出土状況
第85号住居跡カマド
図版 7　第90号住居跡
第90号住居跡カマド遺物出土状況
第90・91・123・124・125号住居跡
第100・101号住居跡
第102・103号住居跡
第102号住居跡
第103号住居跡
第103～105号住居跡
図版 8　第106号住居跡遺物出土状況
第106号住居跡カマド遺物出土状況
第106号住居跡貯蔵穴
第107号住居跡
第107号住居跡カマド遺物出土状況
第108号住居跡
第109号住居跡遺物出土状況
第109号住居跡遺物出土状況
図版 9　第110・111号住居跡
第110号住居跡カマド
第111号住居跡
第111・112号住居跡
第118号住居跡
第118～120号住居跡
第119号住居跡カマド断面
第119号住居跡・第250号土壙
図版 10　第121・122号住居跡
第121・122号住居跡・第52・53号井戸跡
第122号住居跡
第122号住居跡カマド・貯蔵穴遺物出土状況
第90・91・123・125号住居跡
第90・91・123～125号住居跡
第124号住居跡
第124号住居跡カマド遺物出土状況
図版 11　第124号住居跡貯蔵穴
第125号住居跡カマド遺物出土状況
第125号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第126号住居跡遺物出土状況
第126号住居跡遺物出土状況
第126号住居跡カマド遺物出土状況
第127号住居跡・第252・256号土壙
第127号住居跡遺物出土状況
図版 12　第127号住居跡遺物出土状況
第129・130号住居跡・第253号土壙
第131～133号住居跡
第131～133号住居跡・土師質土器焼成遺構
第132・133号住居跡・土師質土器焼成遺構
第134号住居跡

第126・135～138号住居跡
第135号住居跡カマド遺物出土状況
図版13　第136号住居跡遺物出土状況
第137号住居跡カマド遺物出土状況
第137号住居跡カマド遺物出土状況
第137号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第137・138号住居跡
第139号住居跡
第140・151号住居跡
第140・151号住居跡遺物出土状況
図版14　第140・151号住居跡カマド
第141号住居跡・第254号土壙
第141号住居跡遺物出土状況
第141・142号住居跡・第254号土壙
第143・144号住居跡
第143・144号住居跡遺物出土状況
第143号住居跡遺物出土状況
第143号住居跡カマド・貯蔵穴遺物出土状況
図版15　第144号住居跡
第145・146号住居跡
第146号住居跡・第267号土壙遺物出土状況
第147～149号住居跡
第147～150号住居跡
第150号住居跡カマド・貯蔵穴
第152号住居跡・第59号井戸跡
第153～155号住居跡
図版16　第154～156号住居跡・第275号土壙
第154号住居跡カマド遺物出土状況
第156・157・159・167号住居跡貯蔵穴
第156・157号住居跡
第156号住居跡カマド
第156号住居跡貯蔵穴
第156・162・163号住居跡
第157号住居跡貯蔵穴
図版17　第156～159号住居跡
第157号住居跡カマド・第73号井戸跡
第159号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第161号住居跡
第165号住居跡
第165号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第166号住居跡
第167～169号住居跡・第275号土壙
図版18　第167号住居跡遺物出土状況
第167号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第169～171・175号住居跡・第273号土壙
第174号住居跡
第175号住居跡
第175号住居跡カマド・貯蔵穴
第175号住居跡カマド断面
第175・179・190号住居跡
図版19　第177号住居跡
第178号住居跡・第76号井戸跡
第179・190号住居跡・第8号不明遺構
第180～182号住居跡
第181・182号住居跡
第183号住居跡貯蔵穴
第183号住居跡カマド遺物出土状況
第184・186号住居跡
図版20　第184・186号住居跡
第184・187号住居跡
第186・213～215号住居跡
第188・192号住居跡
第189号住居跡
第189号住居跡遺物出土状況
第191号住居跡
第193号住居跡遺物出土状況
図版21　第193～195号住居跡
第194号住居跡
第195号住居跡
第197号住居跡
第197号住居跡遺物出土状況
第197号住居跡カマド
第198・200号住居跡
第199・200・209・210号住居跡

図版22　第199・200・209・210号住居跡
第201・202号住居跡
第201・202号住居跡遺物出土状況
第203号住居跡
第204号住居跡（柱穴のみ）
第205～207号住居跡
第208号住居跡
第209・210号住居跡
図版23　第211号住居跡・第9号不明遺構
第212・213号住居跡
第212～216号住居跡
第212号住居跡カマド
第186・214号住居跡
第186・212・215号住居跡
第216・217号住居跡
第216号住居跡カマド
図版24　第218号住居跡
第218～220・238号住居跡
第220号住居跡カマド遺物出土状況
第223・224号住居跡
第224号住居跡
第226～228・243号住居跡
第227・228号住居跡
第227号住居跡貯蔵穴
図版25　第229・230号住居跡
第229号住居跡カマド
第229～234号住居跡
第229・230・233・234号住居跡
第230号住居跡掘り方
第232～237号住居跡
第235号住居跡遺物出土状況
第235号住居跡カマド
図版26　第235・237・245・257号住居跡
第226・227・239・243・253・254号住居跡
第240・253・254号住居跡
第240・253・254・号住居跡カマド
第237・245・246・271号住居跡
第237・245・246・271号住居跡
第241・242号住居跡
第248号住居跡・第336・347号土壙
図版27　第248号住居跡カマド
第249・250号住居跡
第249・250号住居跡
第251号住居跡
第252号住居跡
第252号住居跡カマド遺物出土状況
第257号住居跡
第251・258～261号住居跡
図版28　第258・259号住居跡・第100号井戸跡
第259号住居跡カマド遺物出土状況
第260号住居跡遺物出土状況
第260号住居跡カマド遺物出土状況
第260号住居跡貯蔵穴
第260・262号住居跡・第339号土壙
第257・263・271・287号住居跡
第263号住居跡カマド
図版29　第264・265・268号住居跡
第264号住居跡カマド
第265号住居跡
第266・267号住居跡
第267号住居跡カマド
第215・264・268・278号住居跡
第268号住居跡カマド
第264・268号住居跡
図版30　第245・246・269号住居跡
第271号住居跡
第271号住居跡遺物出土状況
第246・272・273号住居跡
第272号住居跡カマド
第273号住居跡
第272～274・277・301号住居跡
第274・277号住居跡カマド
図版31　第275号住居跡
第276号住居跡

第279・280・284・285号住居跡
第279・280・281・284号住居跡
第281～283号住居跡
第281号住居跡遺物出土状況
第282・283・296号住居跡
第283号住居跡カマド
図版32　第283号住居跡貯蔵穴
第282・283・295～297号住居跡
第286号住居跡
第263・287～289号住居跡
第287～290号住居跡
第287号住居跡遺物出土状況
第287号住居跡遺物出土状況
第287号住居跡カマド
図版33　第288～290号住居跡
第289号住居跡遺物出土状況
第290号住居跡遺物出土状況
第291・295・296号住居跡
第291号住居跡カマド遺物出土状況
第291号住居跡貯蔵穴
第292・293号住居跡
第292・293号住居跡
図版34　第293号住居跡遺物出土状況
第294号住居跡
第283・295・297号住居跡
第295号住居跡カマド
第295号住居跡貯蔵穴
第296号住居跡遺物出土状況
第281・283・291・295～297号住居跡
第283・296・297号住居跡
図版35　第297号住居跡貯蔵穴
第298～300・309号住居跡
第273・274・301号住居跡
第303・304号住居跡
第305・300・322号住居跡
第305号住居跡カマド
第307・308号住居跡
第307号住居跡カマド
図版36　第308・309号住居跡遺物出土状況
第308号住居跡カマド
第308号住居跡貯蔵穴
第274・301・309～311号住居跡
第309号住居跡カマド
第310～312号住居跡
第310号住居跡カマド
第311号住居跡カマド・貯蔵穴
図版37　第313～315・317・330号住居跡
第313号住居跡カマド
第314号住居跡カマド
第316・317・330・337号住居跡
第316・317号住居跡カマド
第318～320号住居跡
第318～320号住居跡
第318号住居跡カマド
図版38　第304・318～320号住居跡
第304・320号住居跡
第322・323号住居跡
第323号住居跡貯蔵穴
第324・334・335号住居跡
第325・326号住居跡
第315・322・323・327・329号住居跡
第313・315・317・330・337号住居跡
図版39　第327号住居跡遺物出土状況
第327号住居跡カマド
第330号住居跡遺物出土状況
第331～333・336・339号住居跡
第333・336（柱穴）339・340号住居跡
第334・335号住居跡
第308・334・335・423号住居跡
第334・335・423号住居跡
図版40　第334号住居跡カマド
第335号住居跡カマド
第331・333・338・339号住居跡
第333・339・340号住居跡

第331～335・345・350号住居跡
第338・339号住居跡
第338・339・341～343号住居跡
第424号住居跡
図版41　第30号掘立柱建物跡
第30号掘立柱建物跡
第31号掘立柱建物跡
第31号掘立柱建物跡
第31号掘立柱建物跡
第31号掘立柱建物跡
第32号掘立柱建物跡
第32号掘立柱建物跡
図版42　第32号掘立柱建物跡
第32号掘立柱建物跡
第32号掘立柱建物跡ピット断面
第32号掘立柱建物跡ピット6
第32号掘立柱建物跡ピット8
第32号掘立柱建物跡ピット12
第33号掘立柱建物跡
第34号掘立柱建物跡
図版43　第37号掘立柱建物跡確認状況
第37号掘立柱建物跡
第38号掘立柱建物跡確認状況
第38号掘立柱建物跡
第39号掘立柱建物跡確認状況
第39号掘立柱建物跡
第40号掘立柱建物跡確認状況
第41号掘立柱建物跡確認状況
図版44　第42号掘立柱建物跡確認状況
第42号掘立柱建物跡
第43号掘立柱建物跡確認状況
第43号掘立柱建物跡
第49・50号掘立柱建物跡確認状況
第49号掘立柱建物跡
第50号掘立柱建物跡
第51号掘立柱建物跡確認状況
図版45　第51号掘立柱建物跡確認状況
第53号掘立柱建物跡
第55・56号掘立柱建物跡
第55・56号掘立柱建物跡
第57号掘立柱建物跡
第60号掘立柱建物跡
第61号掘立柱建物跡・第150号住居跡
第63号掘立柱建物跡・第74号井戸跡
図版46　第63号掘立柱建物跡
第63号掘立柱建物跡ピット1断面
第64号掘立柱建物跡
第65号掘立柱建物跡・第61・62号井戸跡
第65号掘立柱建物跡・第167・170号住居跡
第66号掘立柱建物跡・第152号住居跡
第67号掘立柱建物跡・第67・68号井戸跡
第68号掘立柱建物跡・第153・156号住居跡
図版47　第70号掘立柱建物跡
第71号掘立柱建物跡
第72号掘立柱建物跡・第84号井戸跡
第73号掘立柱建物跡・第76号井戸跡
第74号掘立柱建物跡・第189号住居跡
第75号掘立柱建物跡・第188・189号住居跡
第77号掘立柱建物跡・第81号井戸跡
第78号掘立柱建物跡
図版48　第79号掘立柱建物跡
第79号掘立柱建物跡ピット3断面
第80号掘立柱建物跡
第81・82号掘立柱建物跡
第83号掘立柱建物跡・第97号井戸跡
第84号掘立柱建物跡
第85号掘立柱建物跡・第249号住居跡
第86号掘立柱建物跡・第93号井戸跡
図版49　第88号掘立柱建物跡
第90号掘立柱建物跡・第115号井戸跡
第91号掘立柱建物跡・第304・307・308号住居跡
第92号掘立柱建物跡
第93号掘立柱建物跡
第95号掘立柱建物跡・第303・304・315号住居跡

第96号掘立柱建物跡・第134号井戸跡
第97・98号掘立柱建物跡・第338号住居跡
図版50　第181号土壙
第183号土壙遺物出土状況
第184号土壙遺物出土状況
第185号土壙
第186号土壙
第187号土壙
第188号土壙
第203号土壙
図版51　第204号土壙
第205号土壙遺物出土状況
第246号土壙遺物出土状況
第247号土壙遺物出土状況
第250号土壙
第250号土壙断面
第250号土壙遺物出土状況
第250号土壙遺物出土状況
図版52　第251号土壙遺物出土状況
第254号土壙
第255号土壙遺物出土状況
第255号土壙断面
第256号土壙遺物出土状況
第256号土壙遺物出土状況
第260号土壙
第262号土壙
図版53　第262号土壙遺物出土状況
第328号土壙
第333号土壙遺物出土状況
第335号土壙
第336号土壙
第339号土壙遺物出土状況
第340号土壙
第348号土壙
図版54　第351号土壙
第351号土壙遺物出土状況
第351・358・375号土壙
第363・364号土壙
第365号土壙
第366号土壙
第366号土壙遺物出土状況
第370号土壙遺物出土状況
図版55　第376号土壙
第378号土壙
第383号土壙人骨出土状況
第386号土壙
第387号土壙
第389号土壙
第395号土壙
第396号土壙
図版56　第30号井戸跡
第30号井戸跡木製品出土状況
第32号井戸跡
第34号井戸跡
第37号井戸跡
第43・44号井戸跡断面
第44号井戸跡遺物出土状況
第46号井戸跡
図版57　第47号井戸跡
第50号井戸跡
第51号井戸跡
第54号井戸跡
第55号井戸跡
第56号井戸跡
第57号井戸跡
第58号井戸跡
図版58　第58号井戸跡遺物出土状況
第59号井戸跡
第64号井戸跡
第64号井戸跡土層断面
第66号井戸跡
第68号井戸跡
第68号井戸跡土層断面
第68号井戸跡遺物出土状況

図版59　第75・78（手前）号井戸跡
第77号井戸跡
第79号井戸跡
第81号井戸跡下駄出土状況
第81号井戸跡
第82号井戸跡
第83・85号井戸跡
第86号井戸跡
図版60　第89号井戸跡
第90・91（手前）号井戸跡
第90号井戸跡
第91号井戸跡
第93号井戸跡
第95号井戸跡
第96号井戸跡
第98号井戸跡
図版61　第99号井戸跡
第100号井戸跡
第101号井戸跡
第102号井戸跡
第103号井戸跡
第104号井戸跡遺物出土状況
第107号井戸跡
第108号井戸跡
図版62　第108・110号井戸跡
第113号井戸跡
第114号井戸跡
第115号井戸跡
第120号井戸跡
第122号井戸跡
第123号井戸跡
第129号井戸跡
図版63　第8号不明遺構
第8号不明遺構遺物出土状況
第9号不明遺構
第9号不明遺構遺物出土状況
第10号不明遺構
第10号不明遺構遺物出土状況
第3号周溝状遺構
第4号周溝状遺構
図版64　中世墓跡群全景(1)
中世墓跡群全景(2)
中世墓跡群全景(3)
蔵骨器1出土状況
蔵骨器2出土状況
蔵骨器3出土状況
蔵骨器4出土状況
蔵骨器5出土状況
図版65　蔵骨器6出土状況
板石塔婆出土状況
五輪塔出土状況
台石出土状況
第1号荼毘跡
第2号荼毘跡
第3・4号荼毘跡
埋納焼骨
図版66　第66・71・72・78・90・91号住居跡出土遺物
図版67　第100～102・106号住居跡出土遺物
図版68　第107～109・111・119号住居跡出土遺物
図版69　第122・124・125号住居跡出土遺物
図版70　第125・126号住居跡出土遺物
図版71　第126・127号住居跡出土遺物
図版72　第127・129・131・133・134号住居跡出土遺物
図版73　第134号住居跡出土遺物
図版74　第134号住居跡出土遺物
図版75　第134～137・141号住居跡出土遺物
図版76　第141・143号住居跡出土遺物
図版77　第143・145～147号住居跡出土遺物
図版78　第147～150号住居跡出土遺物
図版79　第150～155号住居跡出土遺物
図版80　第155～157・159・167号住居跡出土遺物
図版81　第167・170・171・175・180号住居跡出土遺物
図版82　第180・181・183・184号住居跡出土遺物
図版83　第184～186・188・189・191号住居跡出土遺物

図版 84　第192・194～197号住居跡出土遺物
図版 85　第197号住居跡出土遺物
図版 86　第197～201号住居跡出土遺物
図版 87　第201・207・211・212・214・216・220号住居跡出土遺物
図版 88　第220・223・226・227・229号住居跡出土遺物
図版 89　第229・233～235号住居跡出土遺物
図版 90　第236・237・239・240・242号住居跡出土遺物
図版 91　第245・248・249・251・255・256号住居跡出土遺物
図版 92　第257～260号住居跡出土遺物
図版 93　第261・263～265号住居跡出土遺物
図版 94　第265・268・271～274号住居跡出土遺物
図版 95　第275・281～283・287号住居跡出土遺物
図版 96　第287号住居跡出土遺物
図版 97　第287号住跡居出土遺物
図版 98　第289～292・295号住居跡出土遺物
図版 99　第296～300号住居跡出土遺物
図版100　第300・302・305・308・309号住居跡出土遺物
図版101　第310～312・315～317号住居跡出土遺物
図版102　第317・318・327号住居跡出土遺物
図版103　第327・329・330・335・338号住居跡出土遺物
図版104　第338・341・344号住居跡出土遺物
第30・38号掘立柱建物跡出土遺物
図版105　第60・67・84・号掘立柱建物跡出土遺物
第159・203～205・246号土壙出土遺物
図版106　第247・252・255号土壙出土遺物
図版107　第255・256・260・261号土壙出土遺物
図版108　第262・265・268・272号土壙出土遺物
図版109　第275・282・300・304・308号土壙出土遺物
第318・322～324号土壙出土遺物
図版110　第336・339・343・361・366号土壙出土遺物
第370・373・380・382号土壙出土遺物
図版111　第382・392・401号土壙出土遺物
第89・98号井戸跡出土遺物
図版112　第98・100号井戸跡出土遺物
図版113　第100・105・110・116・131・132号井戸跡出土遺物
第8号不明遺構出土遺物
図版114　第8・9号不明遺構出土遺物
図版115　第9号不明遺構出土遺物
図版116　第9号不明遺構出土遺物
図版117　第9・10号不明遺構出土遺物
図版118　第10～12号不明遺構出土遺物
第805・806号ピット出土遺物
図版119　第849・880・893号ピット出土遺物
第38号溝跡出土遺物
図版120　第38号溝跡出土遺物
図版121　第38号溝跡出土遺物
図版122　第38号溝跡出土遺物
図版123　第38号溝跡出土遺物
図版124　第38号溝跡出土遺物
図版125　第38・54号溝跡出土遺物
表土出土遺物
グリッド取り上げ遺物
図版126　第66・71・72号住居跡出土遺物
図版127　第72・90・106・107号住居跡出土遺物
図版128　第108・122号住居跡出土遺物
図版129　第123～126号住居跡出土遺物
図版130　第126・134・137号住居跡出土遺物
図版131　第140・143・150・156号住居跡出土遺物
図版132　第159・175・176号住居跡出土遺物
図版133　第180・183・189・193号住居跡出土遺物
図版134　第197・201・216号住居跡出土遺物
図版135　第216・220・227・229・233・235号住居跡出土遺物
図版136　第235・239・245・248号住居跡出土遺物
図版137　第248・272号住居跡出土遺物
図版138　第277・278・283・287・289号住居跡出土遺物
図版139　第292・293号住居跡出土遺物
図版140　第293・296・302・305・308号住居跡出土遺物
図版141　第308・311号住居跡出土遺物
図版142　第318・323・330号住居跡出土遺物
第32号掘立柱建物跡出土遺物

図版143　第38号掘立柱建物跡出土遺物
第187・205・250・255・256号土壙出土遺物
図版144　第256・260・262・318号土壙出土遺物
図版145　第336・339・348・370・422号土壙出土遺物
図版146　第79・88・93・98・141号井戸跡出土遺物
図版147　第717・759・806・807号ピット出土遺物
図版148　第38・54号溝跡出土遺物
表土出土遺物
グリッド取り上げ遺物
図版149　第71号住居跡出土遺物
図版150　第72・90号住居跡出土遺物
図版151　第90・102・112号住居跡出土遺物
図版152　第122～124号住居跡出土遺物
図版153　第125・126号住居跡出土遺物
図版154　第135・141・143号住居跡出土遺物
図版155　第143・150・156号住居跡出土遺物
図版156　第157・165・184・189号住居跡出土遺物
図版157　第193・196・201・205・206号住居跡出土遺物
図版158　第216・220・235号住居跡出土遺物
図版159　第239・259・263・272号住居跡出土遺物
図版160　第274・277号住居跡出土遺物
図版161　第277・278・287・289号住居跡出土遺物
図版162　第289・296・308号住居跡出土遺物
図版163　第308・311・318・327号住居跡出土遺物
図版164　第246・339号土壙出土遺物
第712・717号ピット出土遺物
図版165　第810号ピット出土遺物
第38号溝出土遺物
図版166　調査区内出土縄文土器
調査区内出土埴輪
図版167　調査区内出土玉類
調査区内出土土玉
図版168　調査区内出土土錘
調査区内出土砥石(1)
図版169　調査区内出土砥石(2)
調査区内出土砥石(3)
図版170　調査区内出土製鉄関連遺物
調査区内出土陶磁器
図版171　井戸跡出土陶磁器(1)
井戸跡出土陶磁器(2)
図版172　井戸跡出土陶磁器(3)
溝跡出土陶磁器(1)
図版173　溝跡出土陶磁器(2)表
溝跡出土陶磁器(2)裏
図版174　第132号井戸跡出土遺物1
同左
第132号井戸跡出土遺物2
同左
第8号性格不明遺構出土遺物9
同左
図版175　第8号性格不明遺構出土遺物8
第98号井戸跡出土遺物5
第38号溝跡出土遺物122
第38号溝跡出土須恵器墨書
第38号溝跡出土須恵器墨書
第38号溝跡出土須恵器墨書
図版176　調査区内出土石製模造品(1)
図版177　調査区内出土石製模造品(2)
図版178　調査区内出土石製模造品(3)
図版179　調査区内出土紡錘車
図版180　調査区内出土金属製品(1)
図版181　調査区内出土金属製品(2)
図版182　調査区内出土金属製品(3)
図版183　調査区内出土木製品
図版184　中世墓跡出土五輪塔1
中世墓跡出土五輪塔2
中世墓跡出土五輪塔3
中世墓跡出土五輪塔4
中世墓跡出土五輪塔5
中世墓跡出土五輪塔7
図版185　中世墓跡出土五輪塔6
中世墓跡出土五輪塔6
中世墓跡出土五輪塔6
中世墓跡出土五輪塔6

中世墓跡出土台石（側面）
中世墓跡出土台石（上面）
図版186　中世墓跡出土板碑集合
図版187　中世墓跡出土板碑(1)
図版188　中世墓跡出土板碑(2)
図版189　中世墓跡出土板碑(3)
図版190　中世墓跡出土板碑(4)
図版191　中世墓跡出土板碑(5)
図版192　中世墓跡出土陶磁器 4
中世墓跡出土蔵骨器 1
中世墓跡出土蔵骨器 2
図版193　中世墓跡出土蔵骨器 3
中世墓跡出土蔵骨器 4
中世墓跡出土蔵骨器 5―1
中世墓跡出土蔵骨器の蓋 6
中世墓跡出土蔵骨器 5―2
同左
図版194　中世墓跡出土陶磁器(1)
中世墓跡出土陶磁器(2)
図版195　中世墓跡出土陶磁器(3)
中世墓跡出土陶磁器(4)

(4) 井戸跡

第30号井戸跡（第497図）

R-9グリッドから検出した。遺構は、38号溝を壊していた。

平面の形状は、円形で、直径1.03m、深さ1.37mであった。

出土遺物は、中世陶器片と曲物の底板が出土した。

第31号井戸跡（第497図・第504図）

S-11グリッドから検出した。遺構は、第137号溝跡に壊されていた。

平面の形状は不整な円形で、規模は、長軸1.92m、短軸1.37m、深さは、1.2mまで確認したが、崩落の危険が有り、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、常滑産の甕1点出土した。

第32号井戸跡（第497図）

S-6グリッドから検出した。52号溝跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径0.92m、深さは、1.5mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第33号井戸跡（第497図）

S-12グリッドから検出した。遺構は、60号溝跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸2.19m、短軸1.54m、深さは、0.93mまで確認したが、崩落の危険があり、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第34号井戸跡（第497図）

T-10グリッドから検出した。遺構は、38号溝跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径2.46m、深さは、1.0mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第35号井戸跡（第497図）

T-13グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸2.05m、短軸1.8m、深さは、1.5mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第37号井戸跡（第497図）

S-11グリッドから検出した。遺構は、第137号溝跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.94m、短軸1.5m、深さは、1.64mであった。

覆土下層中からは、径15cm～20cmの礫が投げ込まれたように出土した。

出土遺物は、検出できなかった。

第39号井戸跡（第498図）

T-11グリッドから検出した。遺構は、106号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径1.04m、深さは、1.0mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第40号井戸跡（第498図）

U-12グリッドから検出した。遺構は、205号土壙を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径1.2m、深さは、1.0mであった。

出土遺物は、耳環が出土した。

第41号井戸跡（第498図）

U-12グリッドから検出した。遺構は、109号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径1.02m、深さは、0.9mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第42号井戸跡（第498図）

T-11グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.22m、短軸1.13m、深さは、0.78mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第43号井戸跡（第498図）

T・U-12グリッドから検出した。遺構は、44号井戸跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.70m、短軸1.20m、深さは、1.78mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第44号井戸跡（第498図）

T-12グリッドから検出した。遺構は、43号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、直径1.5m、深さは2.1mまで確認したが、底面まで調査は行わなかった。

出土遺物は、木製品として棒状木製品、円柱状木製品が出土した。

第45号井戸跡（第498図・第504図）

U-13グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、直径1.22m、深さは1.2mであった。

出土遺物は、青磁碗の破片が出土した。

青磁碗は、口縁部のみの破片であった。同安窯系の製品と考えられる。表面には、僅かに櫛掻文が施されているのを確認した。

第46号井戸跡（第498図）

T-10グリッドから検出した。遺構は、38号溝跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径1.66m、深さは1.3mであった。

出土遺物は、檜の角材が出土した。

第47号井戸跡（第498図）

S-9グリッドから検出した。遺構は38号溝跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径0.72m、深さは2.22mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第50号井戸跡（第498図）

W-13グリッドから検出した。遺構は、261号土壙に壊されていた。

平面の形状は、円形で、規模は、長軸0.94m、短軸0.86m、深さは1.66mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第51号井戸跡（第499図・第504図）

W-14グリッドから検出した。遺構は、150号竪穴住居跡、60号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.3m、短軸1.16m、深さは、2.36mであった。

覆土には、炭化物層（3層）が認められ、オオムギと思われる炭化した穀類が多量に出土した。

出土遺物は、中世の常滑産の鉢1点、紡錘車、木製品としてモミ属の板材が出土した。

常滑産の鉢は、高台を有し、焼成及び色調は、甕と似ており、粗い。底部のみの破片であったが、割れ口には漆が付着していた。補修時の接着の痕跡と考えられる。

第52号井戸跡（第499図）

U-13グリッドから検出した。遺構は、121号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.9m、短軸0.74m、深さは、1.24mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第53号井戸跡（第499図）

U-13グリッドから検出した。遺構は、121号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.6m、短軸0.56m、深さ1.16mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第54号井戸跡（第499図）

V-13グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.24m、短軸1.10mであった。深さは、1.65mであった。

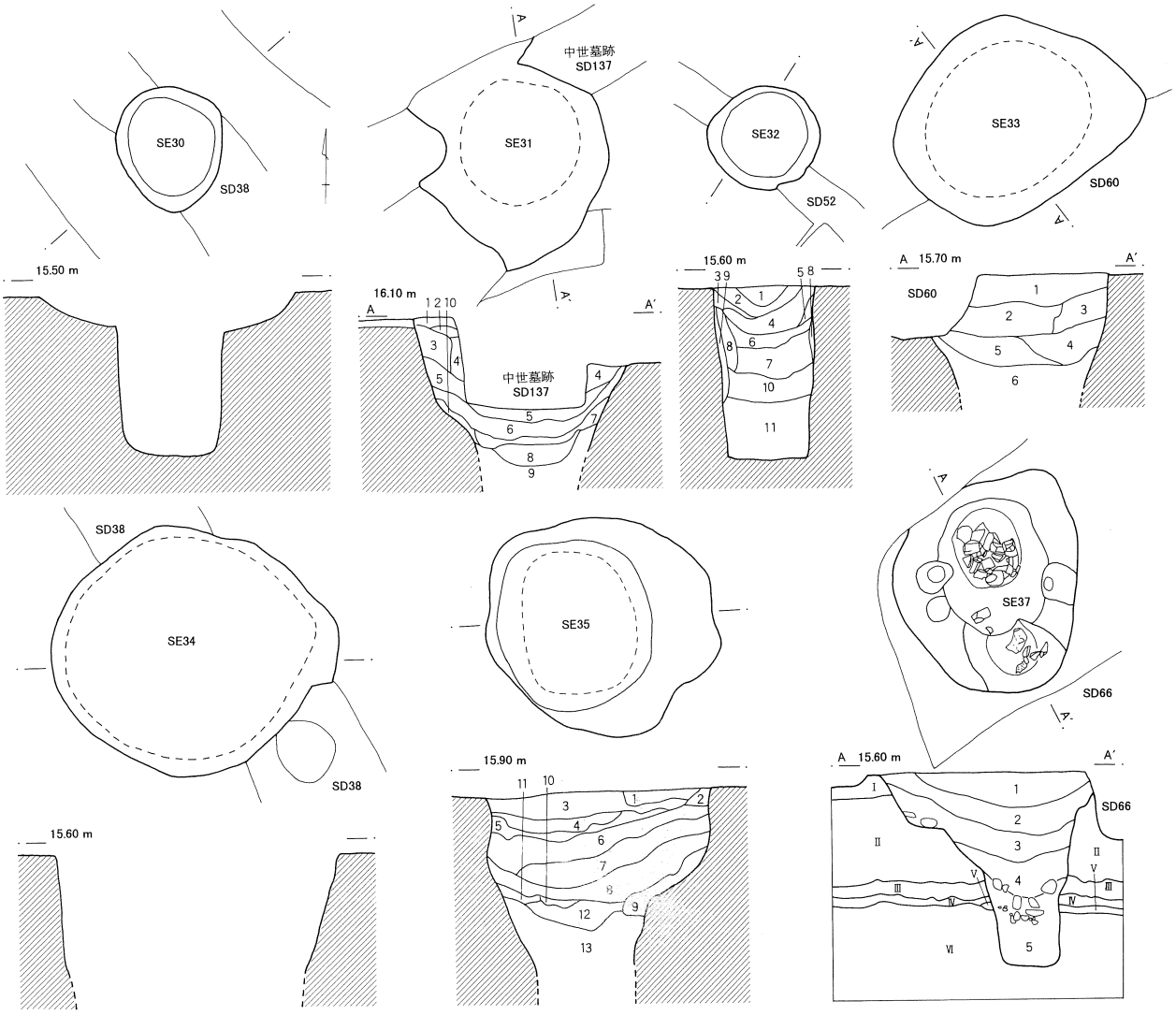
出土遺物は、検出できなかった。

第55号井戸跡（第499図）

W-14グリッドから検出した。遺構は、61・66号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.25m、短軸1.10

第497図　井戸跡(1)



第31号井戸跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 氾濫土 井戸埋没後堆積 締り強
2 灰黄褐色 (10YR5/2) 中世墓跡1層に対応 腐植黒色土層中に氾濫土多
3 鈍黄褐色 (10YR4/3) R微量 締り強
4 暗褐色　(10YR3/3) 3層と同じ R・土師器片微量 締り弱
5 暗褐色　(10YR3/4) 3・4層から漸移変化 RC少 粘性有 常滑片含
6 鈍黄褐色 (10YR4/3) 壁崩落 B C少 中世陶器片含 粘性有
7 暗褐色　(10YR3/3) 6層に準ず B多 粘性有
8 褐灰色　(10YR4/1) 上層との境界明瞭 鉄分 植物残滓含 グライ土化
9 褐灰色　(10YR4/1) 8層基本 壁崩落土砂質B多
10 灰黄褐色 (10YR4/2) 灰白色粘質土主体

第32号井戸跡覆土

1 暗灰黄色　(2.5YR5/2) 締り強 C若干
2 灰黄色　(2.5YR6/2) 締り強 R微量
3 黄灰色　(2.5YR4/1) 締り強 R多
4 鈍黄褐色　(10YR4/3)　締り強 鉄分多 RC若干
5 灰黄褐色　(10YR4/2)　やや粘性有 C若干混
6 灰黄褐色　(10YR5/2)　粒子粗い土 鉄分多 C多混
7 黒褐色　(10YR3/2)　粒子粗い土 鉄分不含 C多
8 黒褐色　(10YR2/3)　やや粘性有 C微量
9 鈍黄褐色　(10YR5/3)　やや粘性有 C微量
10 鈍赤褐色　(5YR4/4)　粘性有 鉄分が層をなし堆積
11 オリーブ黒色 (10YR3/1)　粘性有 鉄分若干混 C微混

第33号井戸跡覆土　(故意の埋め戻し) 腐植土基本

1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質B多 R・土師片微量 白色パミス多
2 黒褐色 (10YR2/3) 上層と同系だがB少 R極多 パミス減少
3 黒褐色 (10YR2/3) 2層に準ず RB極少
4 黒色　(10YR2/2) 5層に準ず 締り弱　B少 パミス微量
5 黒褐色 (10YR2/3) B極多 若干R
6 褐色　(10YR4/6) B主体

第35号井戸跡覆土

1 褐色　(10YR4/4)　締り良 BR・C 砂質
2 灰黄褐色 (10YR4/2)　締り良 BR・土器片・C多
3 鈍黄褐色 (10YR5/4)　締り弱 B多 土器片・C 砂質
4 鈍黄褐色 (10YR4/3)　締り弱 B多 R・C少 砂質
5 暗褐色　(10YR3/3)　締り良 B多帯状 RC多 砂質
6 鈍黄褐色 (10YR4/3)　4層と同 締り無 B多 R・C少 砂質
7 暗褐色　(10YR3/3)　締り良 B多 帯状ブロック RC 砂質 鉄分
8 黒褐色　(10YR2/3)　締り良 B RC少量 鉄分 粘質
9 褐色　(10YR4/6)　締り良 崩落土 B多 粘質
10 黒褐色　(10YR3/1)　締り良 B溶解 鉄分少 粘質土
11 灰黄褐色 (10YR4/2)　締り良 B溶解 10層より多 鉄分少 粘質土
12 暗緑灰色 (7.5YG4/1) 締り良 B少 C・鉄分少 粘質土
13 暗灰色　(7.5YG3/1) 締り良 B若干 砂質

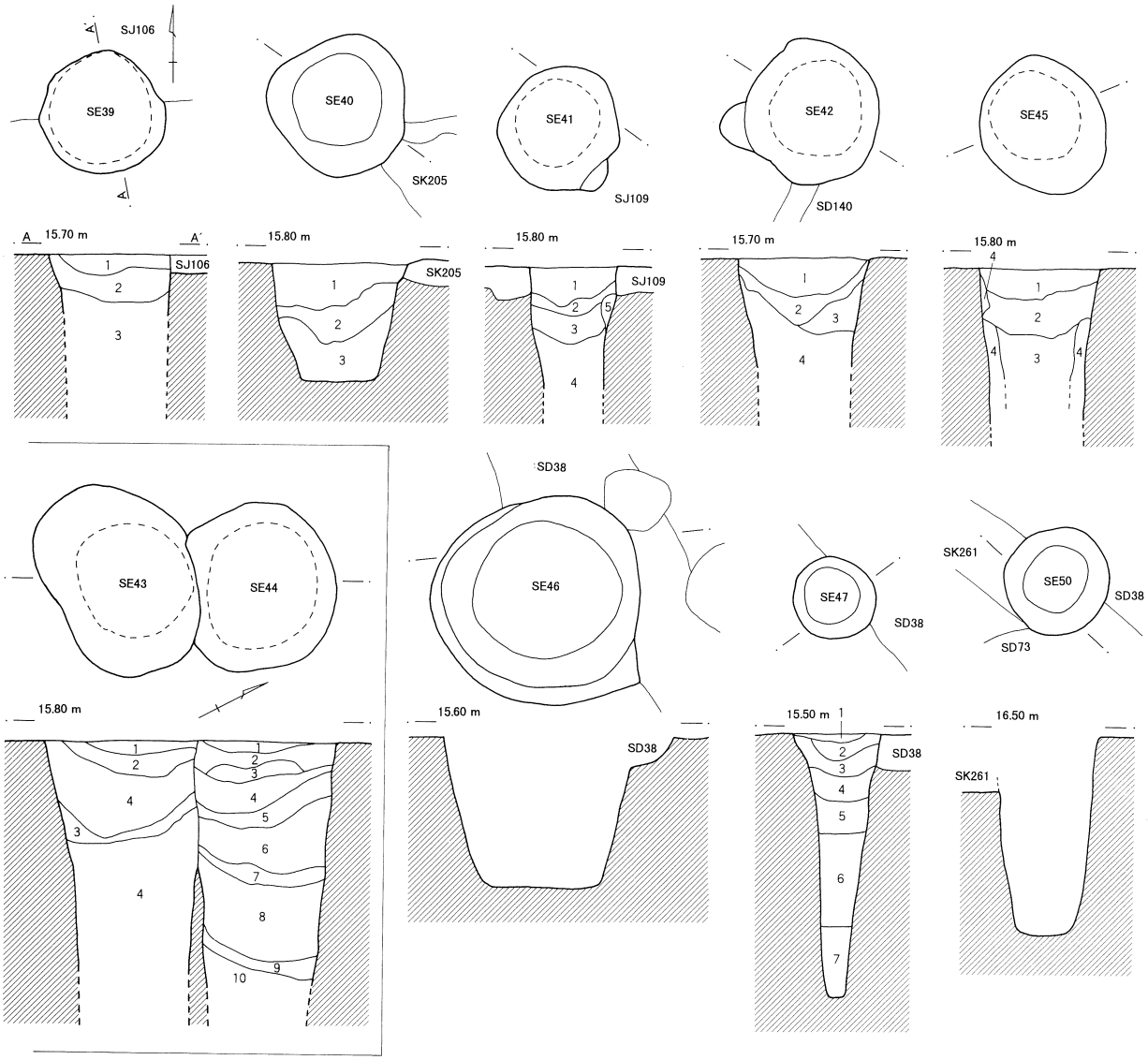
第37号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) 締り良 R 土器片・C少 鉄分多
2 暗褐色 (10YR3/3) 締り良 1層より粘性強 BC・土器片少
3 黒褐色 (10YR3/2) 締り良 粘性強 2層よりB多 RC若干
4 黒色　(10YR2/2) 締り良 RC若干 中央より石出土
5 褐色　(10YR4/6) ヘドロ状 粘質土 砂とシルトの中間位的

河性堆積層 (砂の地山)

Ⅰ 褐色　(10YR4/6) Ⅱ層のシルト化 遺構確認面
Ⅱ 褐色　(10YR4/6) 砂・F多のため黄茶～茶色
Ⅲ 褐色　(10YR4/6) 砂 Ⅱ層に比し色調明るく 締り弱
Ⅳ 灰黄褐色 (10YR4/2) Ⅲ～Ⅴ層の漸移 砂 ややシルト化
Ⅴ 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂 Ⅲ層的だが色調暗い (F)
Ⅵ 褐灰色　(10YR4/1) Fのため青味強 シルト化 固く締まる

第498図　井戸跡(2)



第39号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/3) 締り良 B少

2 暗褐色 (10YR3/3) 締り良 B多

3 黒褐色 (10YR2/3) 締り良 B若干

第40号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) 砂質B多 スコリア少・R

2 黒褐色 (10YR2/3) 1層基本 混有物極少 粘性強

3 黒褐色 (10YR2/3) 砂質B大型未溶化多 粘性B全体溶解

第41号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) 小型B（粘質）多 SJ-109の崩落流れ込み R多

2 暗褐色 (10YR3/3) 1層基本 B多 R不含

3 黒褐色 (10YR2/3) 2層と同 粘性有

4 暗褐色 (10YR3/4) 下層はB主体 粘性有

5 褐色 (10YR4/6) B

第42号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質B多 R少

2 暗褐色 (10YR3/4) 1層基本 B粒少

3 黒褐色 (10YR2/3) 1層に近似 Bブロック小型化減少

4 黒褐色 (10YR2/3) 砂質B多 スコリア少

第43号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) 少量の砂質B・粘質土 B少

2 暗褐色 (10YR3/3) 多量の砂質B・粘質土 B

3 暗褐色 (10YR3/3) 2層の基層土 上層の混有物少

4 暗褐色 (10YR3/3) 粘性有

第44号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) 溶化進行B・R少

2 暗褐色 (10YR3/4) 未溶化砂質B少 R多 上層とは色調の差で境界明瞭

3 暗褐色 (10YR3/4) 未溶化差質B粒少 溶化進行Bブロック多 R微量

4 暗褐色 (10YR3/4) 2層基本 粘性強 B多

5 暗褐色 (10YR3/4) 4層基本 B多 6層の影響で締り弱 粘性強

6 鈍黄褐色 (10YR4/3) B多 水の影響でシルト化進行

7 黒色 (10YR2/2) 粘性極強 腐植土層 炭化物など微細な植物遺体少

8 黒褐色 (10YR3/1) 締り良く緻密 灰色粘土粒多

9 鈍黄褐色 (10YR4/3) 上下層との境界明瞭 Bの粘土化層

10 黒褐色 (10YR3/1) 5層と同 粘性強

第45号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) R・被加熱B多 土師片若干

2 黒褐色 (10YR2/3) 1層とほぼ同 R・被加熱B多 C多

3 黒色 (10YR2/2) 2層以上との境界明瞭 B単一的 粘性強

4 黒色 (10YR2/2) 3層基本 大型B多

第47号井戸跡覆土

1 黒褐色 (7.5YR3/1) B若干

2 極暗褐色 (7.5YR2/3) B若干 R微量

3 黒褐色 (7.5YR2/2) B多 RC若干

4 黒色 (7.5YR2/1) Bブロック状混 C多 遺物出土

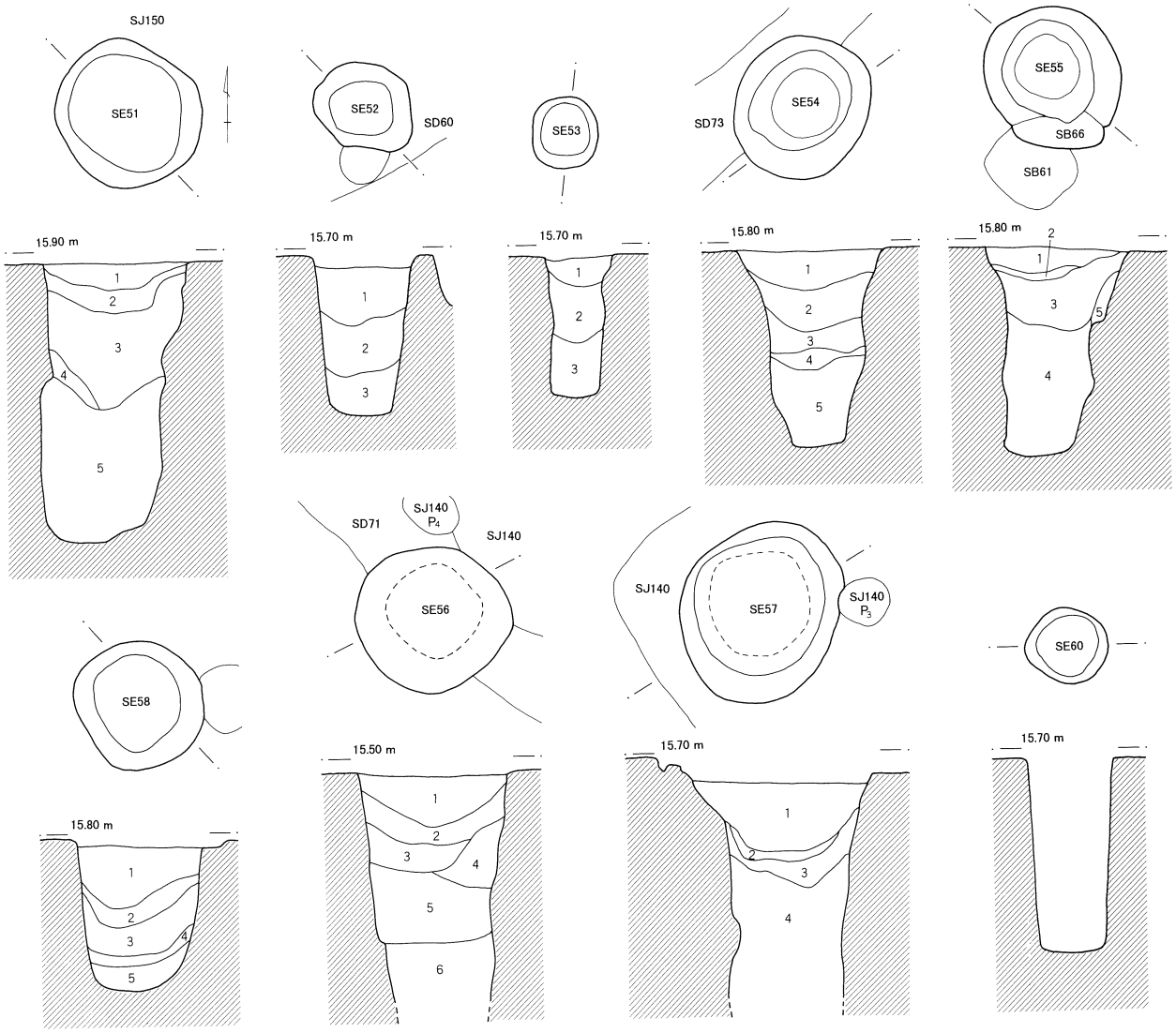
5 灰褐色 (7.5YR4/2) 水分少 C若干

6 黒色 (2.5Y3/1) 粘性有 灰色粘土ブロック混

7 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘性有 砂多混

0　2m

第499図　井戸跡(3)



第51号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/3)　BR 締りやや有

2 黒褐色 (10YR3/2)　B

3 黒色　(10YR1.7/1) C層（炭化米・炭化木実・炭化粒子）

4 黒色　(10YR1.7/1) 3層にBブロック混入 壁崩落土

5 黒褐色 (10YR3/1)　C 締り弱

第52号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) R 粘土ブロック 締りやや有

2 黒褐色 (10YR2/3) R多 締りやや有

3 黒褐色 (10YR2/3) B 粘土ブロック 締りやや弱

第53号井戸跡覆土

1 黒色　(10YR2/1) R多 締りやや有

2 黒褐色 (10YR2/3) RC 締りやや有

3 黒褐色 (10YR2/3) B 粘土ブロック 締りやや有 粘性有

第54号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) Rやや多 締り有 C

2 黒褐色 (10YR3/2) CRB 締り弱

3 暗褐色 (10YR3/3) B 締りやや弱 粘性有

4 黒褐色 (10YR3/2) 粘性有 締り有 B

5 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質土層 B

第55号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) B多 締り有 R多

2 褐色　(10YR4/6) B 黒褐色土(10YR2/3)

3 黒色　(10YR2/1) 炭化？種子 殻類多 締り無

4 黒色　(10YR2/1) 炭化？種子 穀類多 上層より粘性有

5 暗褐色 (10YR3/4) R B 粘性やや有

第56号井戸跡覆土

1 褐色　(10YR4/4)　BCR

2 褐色　(10YR4/4)　Bやや多 R多混入

3 鈍黄褐色 (10YR5/4)　B多 締りやや弱 粘性有

4 鈍黄褐色 (10YR5/4)　B多 締り粘性やや有　(壁崩落土)

5 黒色　(7.5YR2/1) 粘土質 木片 種子混入 B若干

6 褐灰色　(7.5YR4/1) 粘土質土層　(木破片 曲物底板出土) C混入

第57号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) CR多 B混入 締りやや弱

2 黒褐色 (10YR3/1) シルト質 BR混 締り粘性有

3 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト質 BR 締り粘性有

4 黒色　(5Y2/1)　シルト質 BC 粘性強 B混入

第58号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) BR 締りやや有

2 黒色　(10YR2/1) C層 B 締り無

3 黒色　(10YR2/1) C層 R 締り無 2層より粘性有 炭化植物種子 穀類多

4 黒褐色 (2.5Y3/1) C多 締り良 粘土質

5 褐色　(10YR4/6) 2.5Y3/1ブロック多 締り無 砂質

0　2m

m、深さ1.78mであった。

覆土には、木片、炭化物を含んでいた。特に覆土3・4層からは、オオムギと思われる炭化穀類が多量に出土した。

出土遺物は、検出できなかった。

第56号井戸跡（第499図・第504図）

V-12グリッドから検出した。遺構は、140・151号竪穴住居跡、71号溝跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.25m、短軸1.22mであった。深さは、1.9mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片、曲物の底板が出土した。また、自然遺物として、栗の実が出土した。

第57号井戸跡（第499図・第504図）

V-12グリッドから検出した。140・151号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.6m、短軸1.3mであった。深さは、1.8mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片、白磁皿の破片が出土した。

第58号井戸跡（第499図・第504図）

W-14グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.1m、短軸1.0mであった。深さは、1.2mであった。

出土遺物は、中世常滑産の甕が出土した。

甕は、器高70cm前後に復元できる、大型の甕の破片である。井戸跡壁面に貼り付けられた状態で出土した。器面には、肩部から底部までの間に、帯状に連続した押印文が、5段にわたって施されていた。

第59号井戸跡（第500図）

W-14・10グリッドから検出した。152号竪穴住居跡、60・66号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸2.06m、短軸1.8mであった。深さは1.87mであった。

覆土は、黒色土を主体とし、炭化物を多く含んでいた。特に5-1、5-2層では、炭化木片、穀類を多く含んでいた。

出土遺物は、検出できなかった。

第60号井戸跡（第499図）

W-12グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.7m、短軸0.65mであった。深さは、1.64mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第61号・62号井戸跡（第500図・第504図）

61・62号井戸跡は、V-16グリッドから検出した。遺構の北側は、調査区外へ展開していた。

61号井戸跡は、62号井戸跡の内側で、入れ子状になっていたため、土層断面の観察で初めて検出したものである。土層断面の観察では、62号井戸跡を壊して掘り込まれていた。

平面の形状は円形と考えられ、規模は、直径1.2m、深さは、1.1mであった。

62号井戸跡は、61号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は不整な円形で、規模は、直径2.1m、深さは、1.3mであった。

61・62号井戸跡からは、須恵器坏が2点出土したが、どちらの遺構に伴うかは明らかにできなかった。

第63号井戸跡（第500図）

AB-16グリッドから検出した。遺構は、260号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、長軸1.22m、短軸0.99m、深さ1.03mであった。

出土遺物は検出できなかった。

第64号井戸跡（第500図）

W-14グリッドから検出した。遺構は、150号竪穴住居跡、266号土壙を壊していた。

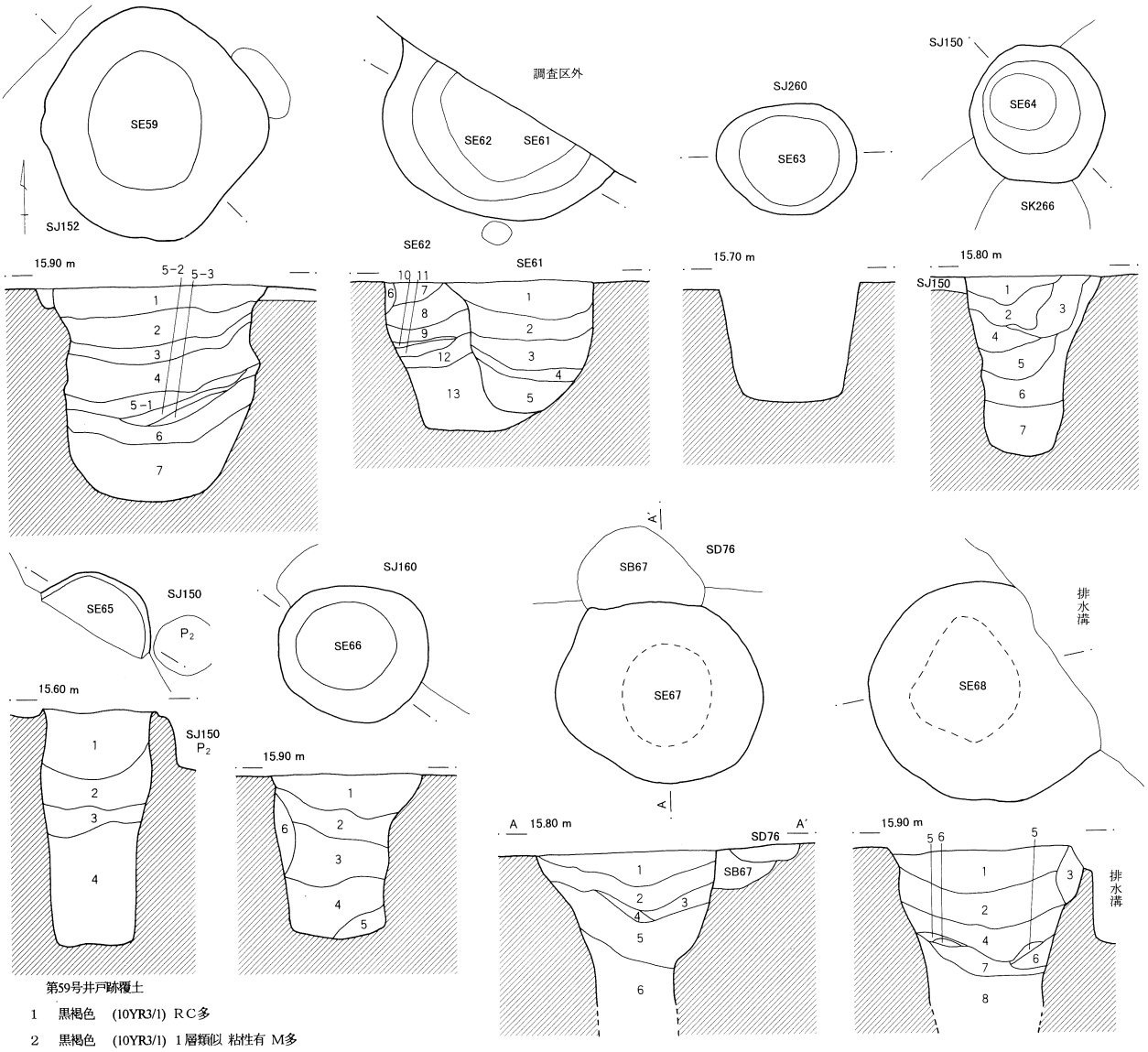
平面の形状は円形で、規模は、長軸1.27m、短軸1.15mであった。深さは、1.57mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第65号井戸跡（第500図）

W-14グリッドから検出した。遺構の大半は、後世の攪乱によって破壊されていたため、遺構の全体を検出することはできなかった。また、本遺構は、150号竪穴

第500図　井戸跡(4)



第59号井戸跡覆土

1　黒褐色　(10YR3/1) RC多
2　黒褐色　(10YR3/1) 1層類似 粘性有 M多
3　黒色　(10YR2/1) BRM多
4　黒褐色　(10YR2/2) R多
5-1 黒色　(10YR2/1) C層（植物質のピート層に似る）締り無
5-2 暗褐色　(10YR3/4) B 粘質土
5-3 黒色　(10YR2/1) 5-1と同 C層（植物質ピート層に似る）締り無
6　暗褐色　(10YR3/4) B多
7　暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質 粘性やや有 締り無

第61・62号井戸跡覆土

1 暗褐色　(10YR3/4) B・灰色粘質土多 粘性強 RC少
2 暗褐色　(10YE3/4) 1層に準ず 灰色粘土多 R増
3 灰黄褐色 (10YR4/2) 2層基本 R少 鉄分多
4 灰黄褐色 (10YR4/2) 灰色粘質土主体
5 灰黄褐色 (10YR4/2) 3層と同
6 暗褐色　(10YR3/4) 茶褐色B主体 壁崩剥土
7 暗褐色　(10YR3/4) R多 C微量 粘性弱
8 暗褐色　(10YR3/4) B多 R微量
9 暗褐色　(10YR3/4) 3層基本 B極少 粘性増
10 黒色　(10YR2/2) 単純灰層
11 暗褐色　(10YR3/4) 8層と同 B多 R微量
12 暗褐色　(10YR3/4) 9層と同 B極少 粘性増
13 黒褐色　(10YR2/3) 3層基本 灰色粘質土多 鉄分多

第64号井戸跡覆土

1 黒褐色　(10YR3/2) RBC混入
2 灰黄褐色 (10YR4/2) RBC混入
3 黒褐色　(10YR3/2) B主体
4 鈍黄橙色 (10YR6/4) BC 締り粘性やや強
5 黒色　(10YR2/2) C層 B（有機物含）
6 黒褐色　(10YR3/2) BC 締りやや有 粘性有
7 灰色　(5Y4/1)　粘土層

第65号井戸跡覆土

1 黒褐色　(10YR3/2) BR 締り有
2 鈍黄褐色 (10YR4/3) BCR 締りやや有
3 黒褐色　(10YR4/3) BC 締り有
4 褐色　(10YR4/6) 粘土層 C

第66号井戸跡覆土

1 暗褐色　(10YR3/3) RB 締り有 B主体
2 鈍黄褐色 (10YR4/3) BR 締り有
3 黒褐色　(10YR3/2) BC混入（有機物層）
4 黒色　(10YR2/2) RC 締り有
5 鈍黄橙色 (10YR6/4) 粘土質層
6 黒褐色　(10YR3/2) B多

第67号井戸跡覆土

1 黒色　(10YR2/1) RC 締り有 B均一
2 黒褐色 (10YR3/1) RCB 締りやや弱 粘性有
3 黒褐色 (10YR3/1) B 粘性有 崩落土
4 黒色　(10YR2/1) C層 有機物混入 締り弱
5 黒色　(10YR3/2) B多
6 暗褐色 (10YR3/3) B 砂質土 締り粘性やや弱

第68号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/3) R未風化少 C風化微量 B風化少
白色粘土ブロック風化多 やや粘性有
2 黒褐色 (10YR3/2) 1層に同 R風化やや多 Cやや多 B風化やや多
白色粘土ブロックやや多 粘性有
3 黒色　(10YR2/1) R風化多少 C不含 B風化少 粘性有
4 黒色　(10YR2/1) 1層に同 B小ブロック下層に多 やや粘性有
5 黒色　(10YR2/1) RC不含 B風化少 最も粘性強
6 黒色　(10YR2/1) 5層主体 B風化多 粘性強
7 黒色　(10YR2/1) 5層主体 B多
8 黒色　(10YR2/1) 5層主体 B多

0　2m

住居跡を壊していた。

平面の形状は円形と考えられ、規模は、直径1.06mであった。深さは、2.04mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第66号井戸跡（第500図）

V-14グリッドから検出した。遺構は、160号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.32m、短軸1.15mであった。深さは、1.44mであった。

覆土は、炭化物を含む黒褐色土が主体で、特に3層は、炭化穀類、種子、木片などが多く含まれていた。

出土遺物は、検出できなかった。

第67号井戸跡（第500図）

X-17グリッドから検出した。遺構は67号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.87m、短軸1.57mであった。深さは、1.26mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第68号井戸跡（第500図）

W-17・18グリッドから検出した。遺構の東側は、調査区外へ展開していたため、遺構の全体を検出することはできなかった。また、本遺構は、63号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、直径2.0mであった。深さは、1.35mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、曲物の底板が出土した。

第69号井戸跡（第501図）

U-10グリッドから検出した。遺構は124号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、直径0.62mであった。深さは、1.76mであった。井戸跡の壁面は、下部の方で抉れていた。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第70号井戸跡（第501図）

V-10グリッドから検出した。遺構は、123号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにすることができなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.5m、短軸0.48mであった。深さは、1.74mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第71号井戸跡（第501図）

V-15グリッドから検出した。遺構は、156・169号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.74mであった。深さは、1.26mであった。

出土遺物は、剣形石製模造品が出土した。

第72号井戸跡（第501図）

V-15グリッドから検出した。遺構は、157号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.7m、短軸0.66mであった。深さは、1.12mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第73号井戸跡（第501図）

V-16グリッドから検出した。遺構は、157号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.7m、短軸0.6mであった。深さは1.38mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第74号井戸跡（第501図）

X-18グリッドから検出した。遺構は、63号掘立柱建物跡、283号土壙を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.1m、短軸1.0mであった。深さは、1.2mであった。

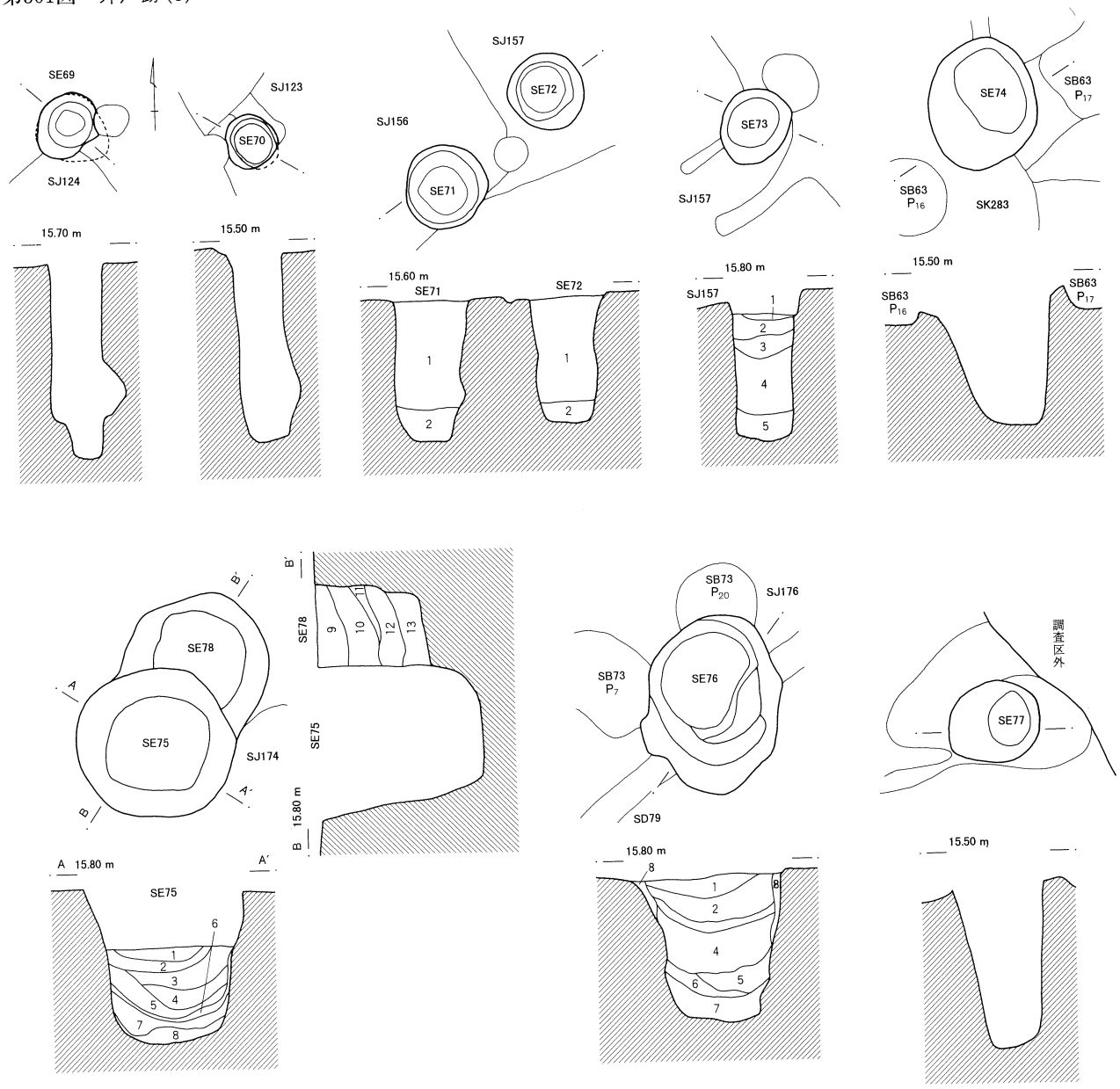
出土遺物は、検出できなかった。

第75号井戸跡（第501図）

X-15グリッドから検出した。179号竪穴住居跡、78号井戸跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.44m、短軸1.34

第501図　井戸跡(5)



第71・72号井戸跡覆土

1 赤灰色 (10YR4/1) 若干RC 粘土ブロック混入

2 灰色　(7.5Y4/1) 粘性強 若干C

第73号井戸跡覆土

1 黄灰色 (2.5Y6/1) B未風化多 R未風化少

2 黄灰色 (2.5Y6/1) B風化少 R未風化少 C未風化少 B微粒多

3 黄灰色 (2.5Y5/1) B風化少 R風化少 C未風化少

4 黄灰色 (2.5Y5/1) 3層に同 3層よりB少

5 黄灰色 (2.5Y4/1) 灰色粘土層 最下層砂質

第75・78号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) C（炭化米）

2 黒褐色 (10YR3/1) 粘土質土主体 C混入

3 黒色　(10YR2/2) C（大麦） 締りやや有 砂質土混入

4 黒褐色 (10YR3/1) R塊 C混

5 黒色　(10YR2/1) C

6 褐灰色 (10YR4/1) 褐色土主体 粘性強

7 黒色　(10YR2/1) C R多

8 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土と粘土混在 締りやや有

9 黒色　(10YR2/2) R

10 黒褐色 (10YR3/1) CR

11 黒色　(10YR2/1) C層

12 黒褐色 (10YR2/3) 10YR3/4のブロック多

13 暗褐色 (10YR3/4) 10YR4/6褐色土ブロック砂質土多

第76号井戸跡覆土

1 暗褐色　(10YR3/3) RC若干 B 締りやや弱

2 黒褐色　(10YR2/3) 1層に比べRやや多 B少 粘土ブロック 締りやや有

3 黒褐色　(10YR2/3) 砂質土 R混在 締り弱

4 黒色　(10YR2/2) B多 締りやや弱

5 黒褐色　(10YR3/2) B混入 締りやや有

6 黒褐色　(10YR2/3) B砂質土多 締り粘性有

7 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質主体 F多 締り弱

8 褐色　(10YR4/4) B主体

0　2m

mであった。深さは、1.4mであった。

覆土は、炭化物を含む黒褐色土を主体とし、特に、1層と3層では、炭化した穀類（米・大麦）を多量に含んでいた。

出土遺物は、鞴の羽口が1点出土した。

第76号井戸跡（第501図）

Y-16グリッドから検出した。遺構は、63・73号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.6m、短軸1.2mであった。深さは、1.34mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第77号井戸跡（第501図）

X-18グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.74mであった。深さは、1.5mであった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第78号井戸跡（第501図）

X-15グリッドから検出した。本遺構は、75号井戸跡に壊されていたため、遺構の全体を明らかにすることはできなかった。また、179号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.3m、短軸1.3mであった。深さは、1.0mであった。

覆土は、炭化物を含む黒色～黒褐色土を主体とし、特に11層では、炭化した穀類、木片を多量に含んでいた。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第79号井戸跡（第502図・第504図・第505図）

V-15グリッドから検出した。遺構は、156号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.4m、短軸0.3mであった。深さは、1.4mであった。

出土遺物は、土師器甕2点、甑1点、須恵器壺1点、板状の木製品が出土した。

第80号井戸跡（第502図）

Y-14グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、直径0.52m、深さは、1.45mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第81号井戸跡（第502図・第505図）

X-14グリッドから検出した。遺構は、302号土壙、ピット763を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.8m、短軸1.5mであった。深さは、2.2mであった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片が出土した。また、木製品として、箸、下駄が出土した。

第82号井戸跡（第502図）

Y-18グリッドから検出した。遺構は、195号竪穴住居跡、ピット746に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.04m、短軸1.0mであった。深さは、0.82mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第83号井戸跡（第502図）

X-13グリッドから検出した。遺構は、85号井戸跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.06m、短軸0.96mであった。深さは、1.54mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

遺構の時期は、本遺構に壊されていた85号井戸跡が、中世に属すると考えられることから、本遺構は、中世以降のものと考えられる。

第84号井戸跡（第502図）

W-16グリッドから検出した。遺構は、190号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

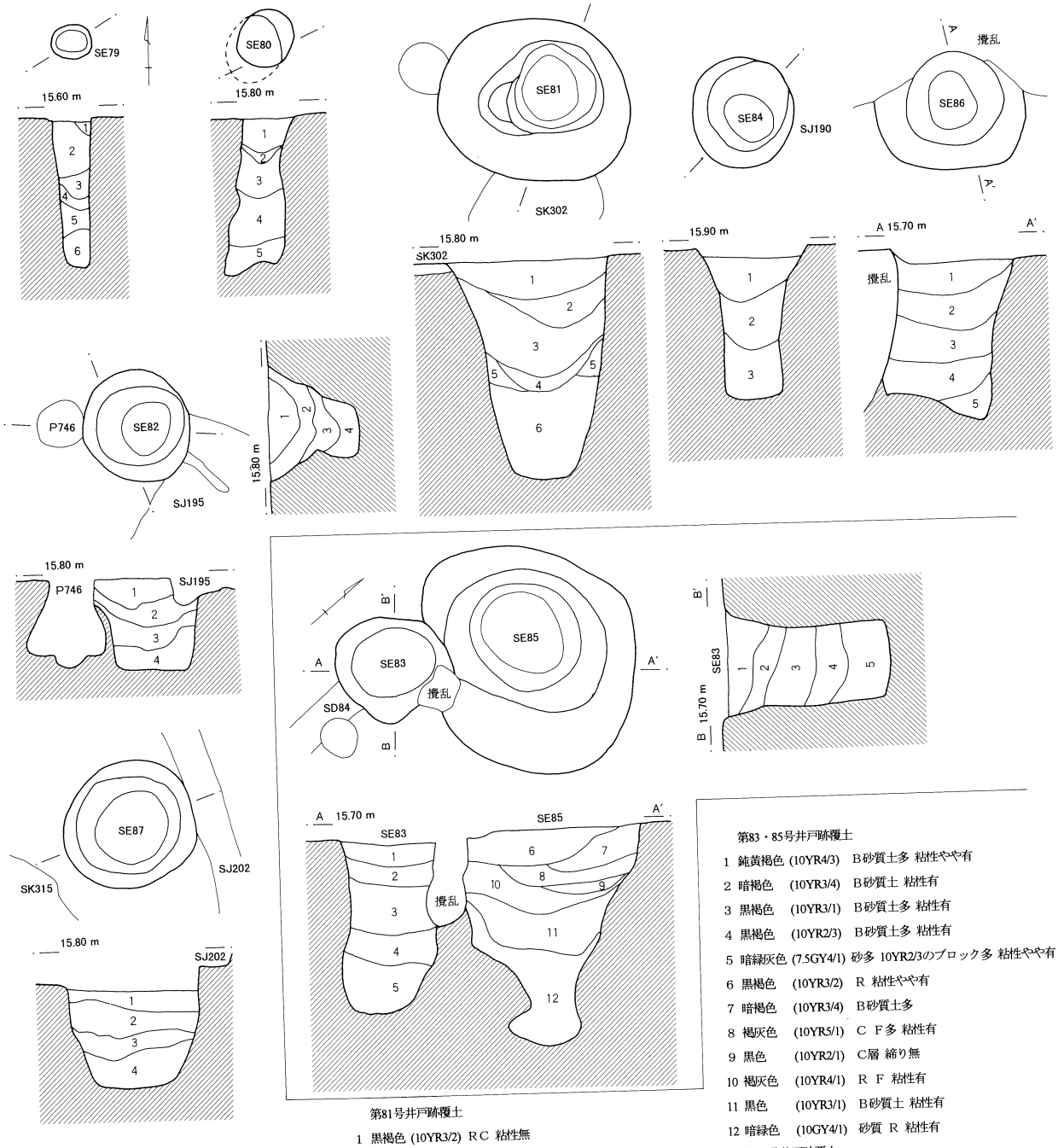
平面の形状は円形で、規模は、長軸1.0m、短軸1.0mであった。深さは、1.4mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第85号井戸跡（第502図・第505図）

W・X-13グリッドから検出した。遺構は、83号井戸跡に壊されていた。

第502図　井戸跡(6)



第79号井戸跡覆土

1 褐灰色 (10YR4/1) R風化少 B風化少 C風化少
2 褐灰色 (10YR4/1) 1層に同 ややC多
3 褐灰色 (10YR4/1) 1層に同 粒子粗い
4 黒褐色 (10YR3/1) R風化少 B風化少
5 黒褐色 (10YR3/1) 4層に同 ややC少
6 黒褐色 (10YR3/1) 4層に同 やや粘性強

第80号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) 黒褐色土主体 B未風化少 R未風化少
2 黒褐色 (10YR2/3) 1層よりR風化多
3 黒褐色 (10YR2/3) 1層よりRC多
4 黒色 (7.5YR2/1) 1層よりRC大 若干多
5 黒色 (7.5YR2/1) 1層よりR少 やや粘性強

第81号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) RC 粘性無
2 黒褐色 (10YR3/2) R少 粘性無
3 黒褐色 (10YR3/1) R B砂質土 粘性有
4 黒褐色 (10YR2/3) R微量 粘性有
5 暗褐色 (10YR3/4) B砂質土ブロック多 粘性やや有
6 暗褐色 (10YR3/3) B砂質土ブロック やや砂質

第82号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) 締り弱 B溶混微量 R少
2 黒褐色 (10YR2/3) 1層に準ず 締り強 B溶混多 下層の影響でC多
3 黒色 (10YR2/2) カマド灰層状 MR主体 締り無
4 黒色 (10YR2/2) B溶混多 締り粘性強

第84号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) RC 粘性やや有
2 黒褐色 (10YR3/1) R 粘性有
3 褐灰色 (10YR4/1) 粘性有 締り無 B砂質土多

第83・85号井戸跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR4/3) B砂質土多 粘性やや有
2 暗褐色 (10YR3/4) B砂質土 粘性有
3 黒褐色 (10YR3/1) B砂質土多 粘性有
4 黒褐色 (10YR2/3) B砂質土多 粘性有
5 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂多 10YR2/3のブロック多 粘性やや有
6 黒褐色 (10YR3/2) R 粘性やや有
7 暗褐色 (10YR3/4) B砂質土多
8 褐灰色 (10YR5/1) C F多 粘性有
9 黒色 (10YR2/1) C層 締り無
10 褐灰色 (10YR4/1) R F 粘性有
11 黒色 (10YR3/1) B砂質土 粘性有
12 暗緑色 (10GY4/1) 砂質 R 粘性有

第86号井戸跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR4/3) B砂質土多 粘性やや有
2 暗褐色 (10YR3/4) B砂質土 粘性有
3 黒褐色 (10YR3/1) B砂質土多 粘性有
4 黒褐色 (10YR2/3) B砂質土多 粘性有
5 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂多 10YR2/3ブロック多 粘性やや有

第87号井戸跡覆土

1 黒色 (10YR2/2) R C (M) 多 締り弱 2層との境はC薄層
2 黒褐色 (10YR2/3) 灰黄色粉質Bブロック (未溶化) 多 R微量
3 黒褐色 (10YR2/3) 灰黄色粉質Bブロック少 水の影響でF多
4 黒褐色 (10YR3/2) 3層基本 F多 黒色土ブロック多

0　2m

平面の形状は円形で、規模は、長軸2.3m、短軸2.0mであった。深さは、2.0mであった。覆土は、黒褐色～暗褐色土を主体とし、地山ブロック・炭化物を含んでいた。特に、9層は、炭化した木片、穀類を多く含んでいた。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片が出土した。

第86号井戸跡（第502図・第505図）

W・X-13・14グリッドから検出した。遺構は、後世の攪乱によって破壊されていたため、全体を検出することはできなかった。

平面の形状は円形と考えられ、規模は、直径1.3mであった。深さは、1.0mであった。

出土遺物は、土師器高坏の脚部が出土した。

第87号井戸跡（第502図）

Z-19グリッドから検出した。遺構は201・202号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.3m、短軸1.14mであった。深さは、1.12mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第88号井戸跡（第503図・第505図）

Z-19グリッドから検出した。遺構は、79号掘立柱建物跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は長軸0.82m、短軸0.57mであった。深さは、1.10mであった。

出土遺物は、土師器甕、甑、坩が出土した。また、木製品として、箸が出土した。

第89号井戸跡（第503図・第505図）

AA-19グリッドから検出した。遺構は、38号溝跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、直径1.37mであった。深さは、1.74mであった。

出土遺物は、土師器坏2点が出土した。

第90号井戸跡（第503図・第506図）

AA-20グリッドから検出した。遺構は、318号土壙を壊していた。また、91号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、直径0.89m、短軸0.85mであった。深さは、1.09mであった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の口縁部が出土した。

第91号井戸跡（第503図）

AA-20グリッドから検出した。遺構は、318号土壙、90号井戸跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.17m、短軸1.10mであった。深さは、1.56mであった。

出土遺物は、加工木材が出土した。

第92号井戸跡（第503図）

Z-18グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.73mであった。深さは、1.20mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第93号井戸跡（第503図・第506図・第507図）

AA-20グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.3m、短軸1.22mであった。深さは、1.57mであった。

出土遺物は、中世の常滑産の甕、片口鉢が出土した。また、蛤と考えられる貝殻が出土した。

第94号井戸跡（第503図・第513図）

AA-18グリッドから検出した。216号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.37m、短軸1.3mであった。深さは、1.50mであった。

出土遺物は、中世の青磁碗、須恵器高坏が出土した。青磁碗は、龍泉窯系と考えられる。

第95号井戸跡（第503図）

AA-20グリッドから検出した。遺構は、38号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.20m、短軸0.95mであった。深さは、1.14mであった。

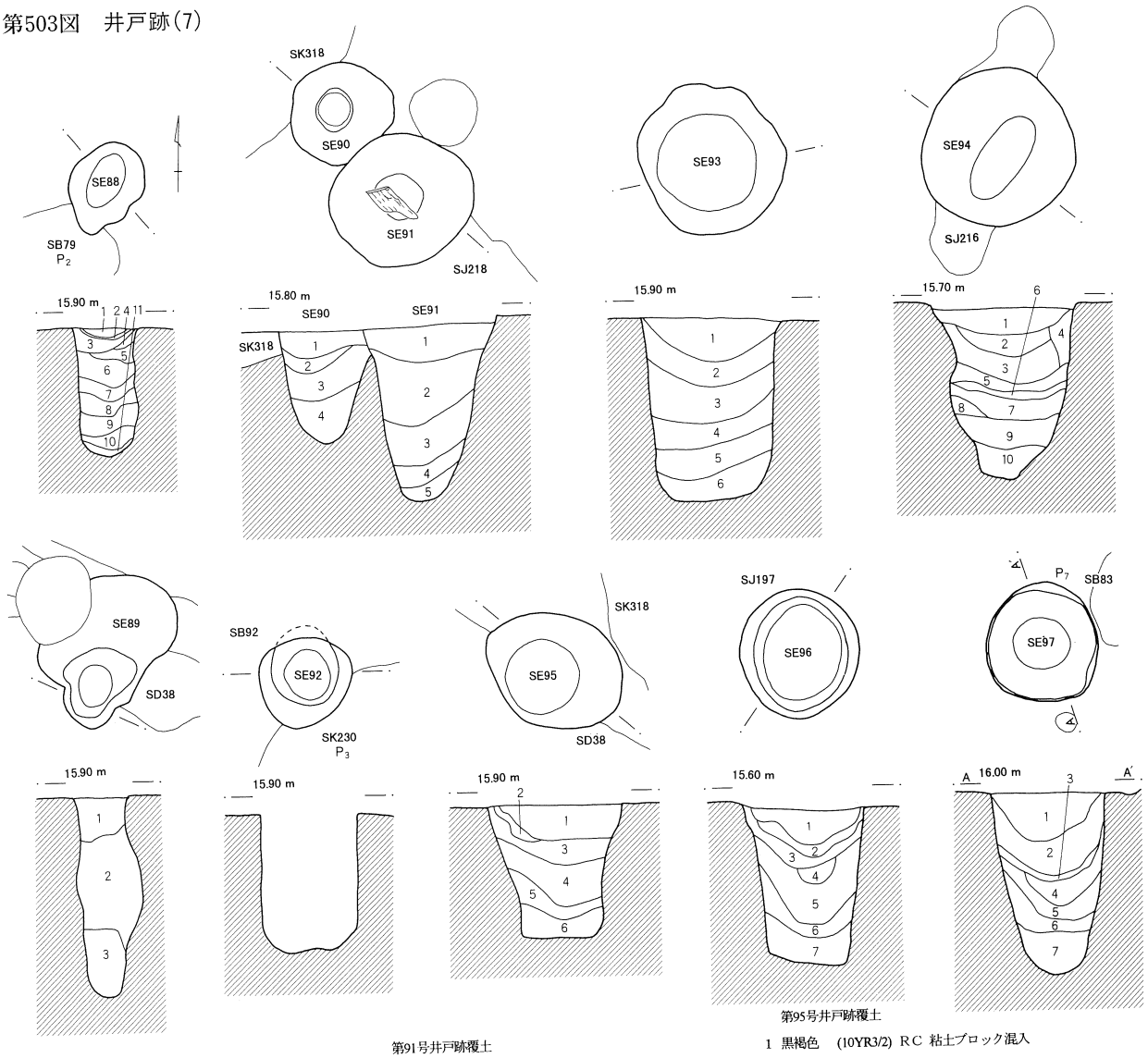
出土遺物は、検出できなかった。

第96号井戸跡（第503図）

Y-17グリッドから検出した。遺構は、197号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.06m、短軸1.02

第503図　井戸跡(7)



第88号井戸跡覆土

1 灰黄褐色 (10YR4/2) R B混入 締り有
2 黒色　(10YR2/1) C層
3 鈍黄褐色 (10YR5/4) B主体
4 灰黄褐色 (10YR4/2) B多
5 灰黄褐色 (10YR4/2) B 締りやや有
6 暗褐色　(10YR3/3) B均一多
7 暗褐色　(10YR3/3) C B
8 暗褐色　(10YR3/3) B均一多
9 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘性強 締りやや有 B
10 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘土粒子 B 締りやや弱 粘性強
11 黒色　(10YR2/1) C層

第89号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/3) やや砂質 R B若干
2 黒褐色 (10YR2/3) RC混入 砂質粒子
3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 RC若干

第90号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) B砂質土
2 黒色　(10YR2/1) M層
3 黒褐色 (10YR3/1) 粘性有
4 暗褐色 (10YR3/4) B砂質土多 粘性やや有

第91号井戸跡覆土

1 黄褐色 (10YR5/8) 砂質 10YR3/2 (黒褐色) 多
2 黄褐色 (10YR5/8) 砂質 10YR3/2 (黒褐色) F
3 黄褐色 (10YR5/8) 10YR3/2 (黒褐色) 多 粘性無.
4 黒褐色 (10YR3/2) B砂質土多 粘性有
5 黒褐色 (10YR3/1) B砂質土 粘性有

第93号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) 粘土粒子 B砂質土多 粘性無
2 黒褐色 (10YR3/2) RC 粘性無
3 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや有 RC多
4 暗褐色 (10YR3/4) 粘性やや有 R B砂粒多
5 黒褐色 (10YR3/1) 粘性有 R少
6 黒褐色 (10YR3/1) 粘性有 C多

第94号井戸跡覆土

1 黒色　(10YR2/2)　締り強 粘性弱 B多 R少
2 黒色　(10YR2/2)　締りやや有 粘性有 B R少
3 黒色　(10YR2/2)　締り弱 粘性強 B少 R微量
4 黒色　(10YR2/2)　締り弱 粘性強 B多 R不含
5 黒色　(10YR1.7/1) 締り無 RB微量
6 黒褐色 (10YR3/2)　R主体 締り無
7 黒色　(10YR1.7/1) 5層に準ず 締り弱 6・9層の影響でR多
8 褐色　(10YR4/6)　B主体 壁崩落土
9 黒褐色 (10YR3/2)　6層に準ず R少散漫
10 暗褐色 (10YR3/3)　締り無 混有物不含の褐色土単一層

第95号井戸跡覆土

1 黒褐色　(10YR3/2) RC 粘土ブロック混入
2 黄褐色　(10YR5/6) B主体
3 暗褐色　(10YR3/3) 1層より明るい
4 黄褐色　(10YR5/6) B主体
5 灰黄褐色 (10YR5/2) B多
6 褐色　(10YR4/6) B主体

第96号井戸跡覆土

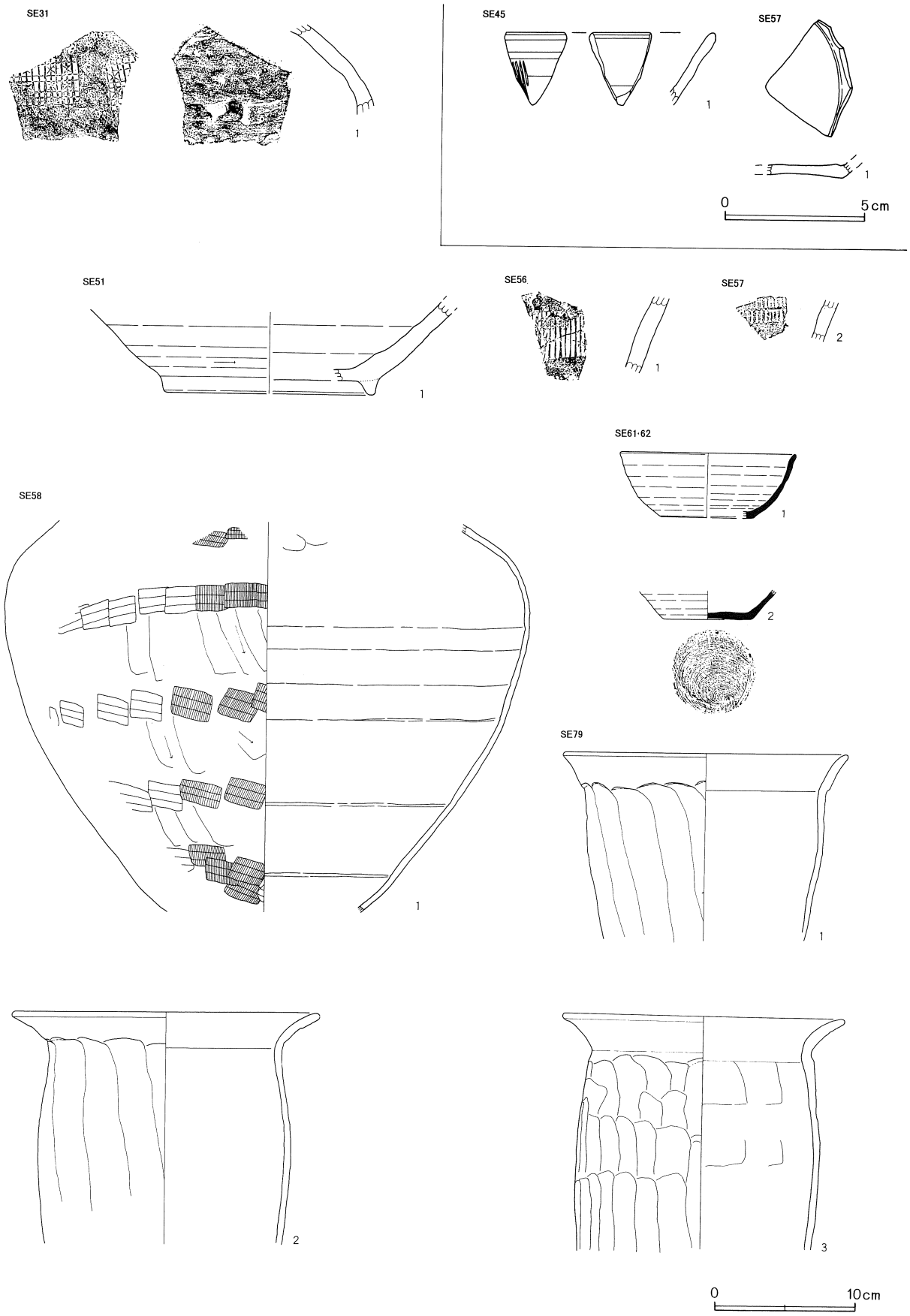
1 灰黄褐色 (10YR4/2) RC多 M混在
2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 砂質粒子多 締り弱 B粘土ブロック混入
3 鈍黄褐色 (10YR4/3) RC 炭化物混在 締りやや弱
4 灰黄褐色 (10YR4/2) RC 締りやや有
5 暗褐色　(10YR3/3) B粘土ブロック多 締り粘性やや有
6 黒褐色　(10YR3/2) 5層に比べブロック少 締り粘性やや有
7 灰色　(5Y5/1)　粘土ブロック ややシルト化

第97号井戸跡覆土

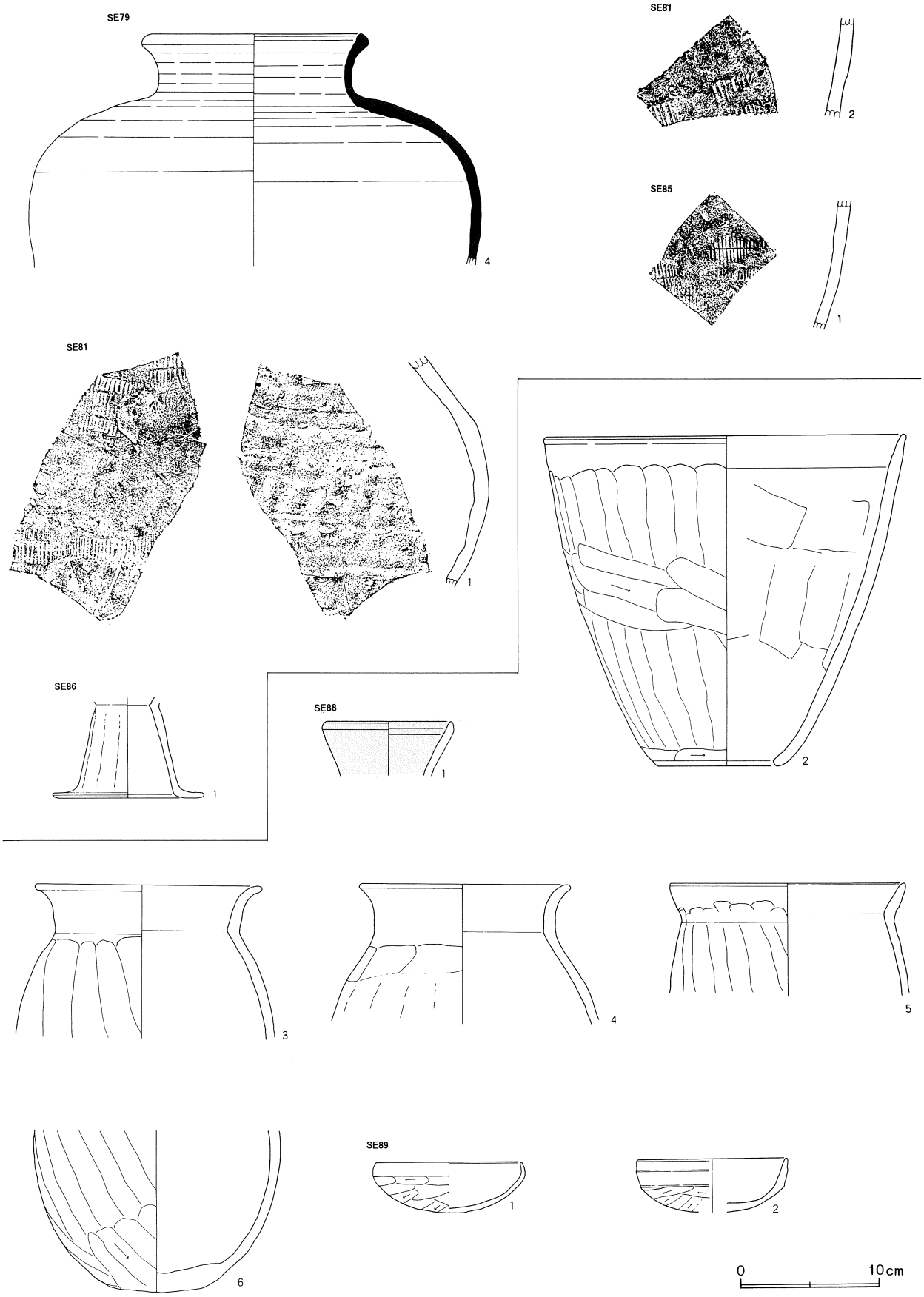
1 黒褐色 (10YR2/3) R B砂質土多 粘性やや有
2 黒褐色 (10YR2/3) B砂質土ブロック多 粘性やや有
3 黒褐色 (10YR2/2) B砂質土粒多　粘性有
4 黒褐色 (10YR2/3) B砂質土ブロック多 粘性有
5 褐色　(10YR4/6) B砂質土ブロックと10YR2/3 (黒褐色) ブロック
6 暗褐色 (10YR3/4) B砂質土粒多 粘性有
7 暗褐色 (10YR3/3) B砂質土粒少 粘性有

0　2m

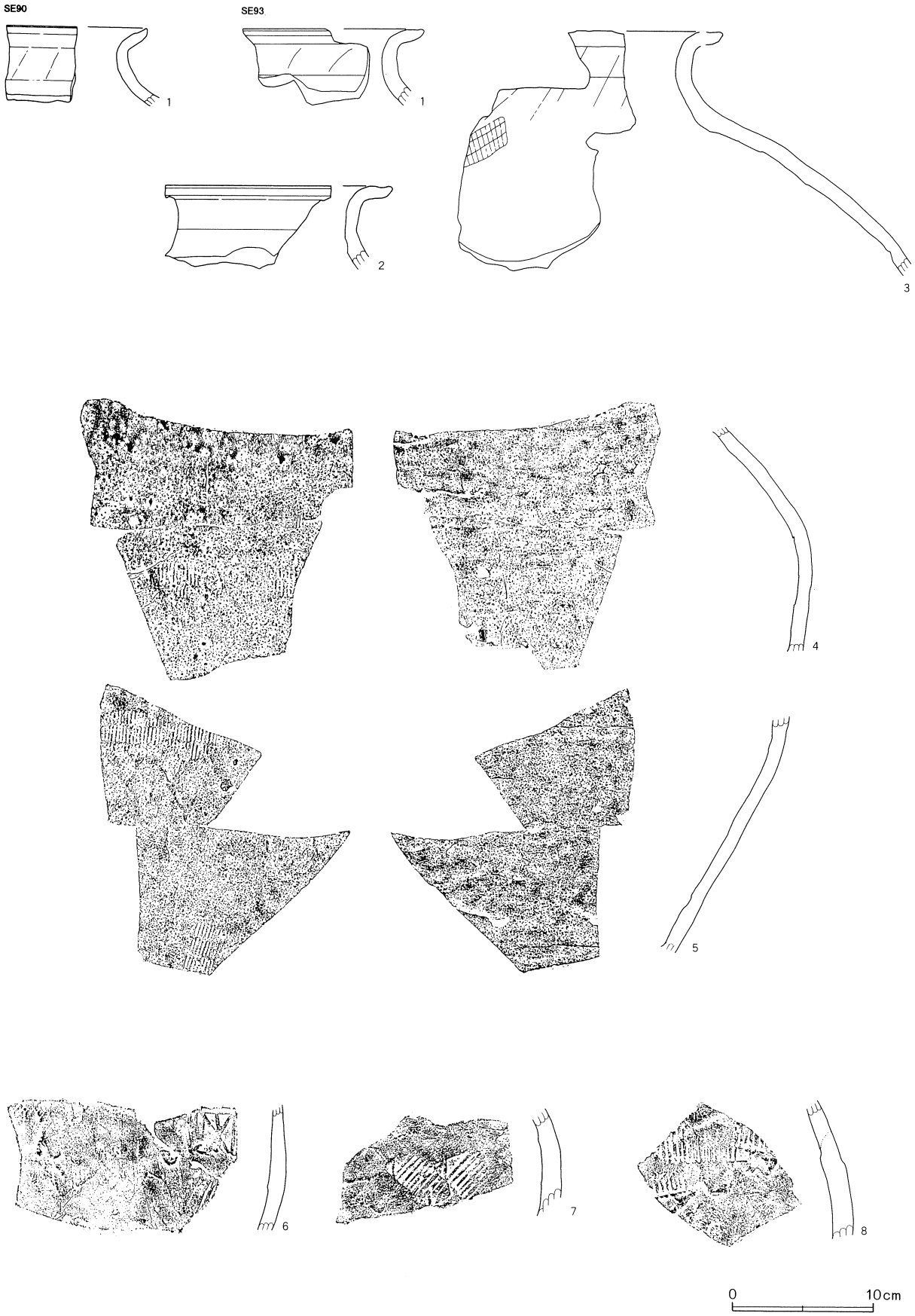
第504図　井戸跡出土遺物(1)



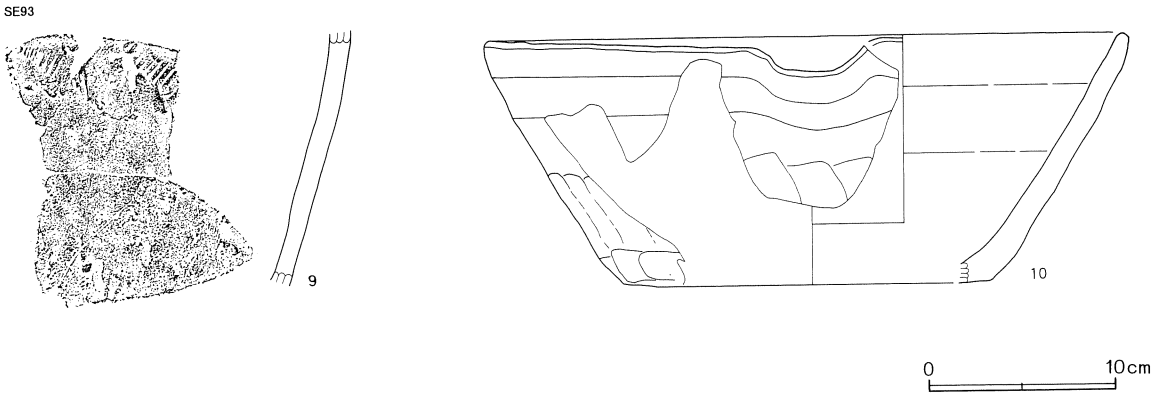
第505図　井戸跡出土遺物(2)



第506図　井戸跡出土遺物(3)



第507図　井戸跡出土遺物(4)



井戸跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
31-1	甕				ABJ	1	鈍橙	破片	常滑
45-1	青磁椀					1	明オリーブ灰	破片	同安窯系
51-1	鉢			(14.8)	BFJ	1	鈍褐	破片	常滑
56-1	甕				ABJ	2	橙	破片	常滑
57-1	白磁皿					1	灰白	破片	
57-2	甕				BJ	1	褐	破片	常滑
58-1	甕				BJ	1	暗赤褐	20	常滑 肩部に自然釉
61・62-1	坏	(12.5)	4.6	(6.7)	ACFIJ	2	灰	30	南比企
61・62-2	坏			6.3	AFI	1	灰	80	南比企
79-1	甑	20.0			ABDEHJ	3	暗灰黄	60	
79-2	甕	(22.0)			BCDEJK	3	明褐	50	
79-3	甕	20.0			BEJL	3	橙	70	
79-4	壺	(15.0)			ABEFIJ	1	暗灰	35	
81-1	甕				ABJ	1	暗灰	破片	常滑
81-2	甕				ABJL	1	暗赤褐	破片	常滑
85-1	甕				BJ	1	褐	破片	常滑
86-1	高坏		(7.0)	11.0	ABDEJ	2	橙	100	2次焼成
88-1	壺	9.0			ABD	3	明黄褐	40	赤彩
88-2	甑	25.6	23.8	8.6	ABDEHJ	2	鈍黄	80	
88-3	甕	(16.0)			DEHJK	2	橙	15	
88-4	甕	(15.2)			ADEHK	2	鈍黄橙	10	
88-5	甕	(16.8)			ABDEFHJ	3	鈍褐	40	
88-6	甕				BEL	5	赤褐	60	
89-1	坏	10.3	3.6		ABDEJ	2	橙	100	
89-2	坏	(10.8)			DJ	2	暗褐	40	
90-1	甕				ABJ	1	暗褐	破片	常滑
93-1	甕				BFJ	2	暗オリーブ褐	破片	常滑
93-2	甕				BFJ	2	暗オリーブ褐	破片	常滑
93-3	甕				BJL	1	灰	破片	常滑 肩部に自然釉
93-4	甕				BJL	1	オリーブ灰	破片	常滑 自然釉
93-5	甕				BJL	1	暗褐	破片	常滑
93-6	甕				BJ	2	灰	破片	常滑
93-7	甕				ABJ	2	灰	破片	常滑
93-8	甕				BFJ	2	灰	破片	常滑
93-9	甕				BFJ	2	灰	破片	常滑
93-10	片口鉢	(34.0)	13.2	(19.8)	BFJ	2	明赤褐	10	常滑

mであった。深さは、1.36mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第97号井戸跡（第503図）

AB-19グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.02m、短軸1.01mであった。深さは、1.56mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第98号井戸跡（第508図・第513図・第514図）

AA-17グリッドから検出した。遺構は、259号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸2.06m、短軸2.02mであった。深さは、1.32mであった。

出土遺物は、須恵器坏8点、高台付坏1点、椀2点、高台付椀1点、皿1点、内面黒色土器3点、須恵器甕3点、土師器甕1点、台付甕3点が出土した。

1～8は、須恵器の坏で、胎土の特徴から、全て南比企産と考えられる。底部の調整は、糸切後、無調整であった。

また、墨痕のある坏が2点あった（3・5）。3は、外面口縁端部と、内面底部中央の窪んだ部分に認められた。5は、ほぼ内面全体に、墨が溜まっていたように付着していた。内面は、墨痕によって観察が困難であったが、摩滅していたため、転用硯の可能性もある。

9は無台の椀で、底部の調整は、糸切後、無調整であった。胎土の特徴から、南比企産と考えられる。

10は、高台付椀で、底部の調整は、糸切後、無調整であった。全体的に薄手で、高台は、下方にやや踏ん張る形態であった。また、体部下端は、強いナデ整形が施されていた。胎土には、細かい片岩を含んでおり、末野産と考えられる。

11は、椀である。底部を欠損していたため、高台の有無は不明である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部端部は、面取り風に内側に傾斜していた。また、内面のほぼ全面と、外面に煤状の付着物が認められた。

12は、高台付坏である。高台は、外側に開き、端部はゆるく窪んでいた。色調は、灰褐色～橙色で、いわゆる赤焼けの状態であったが、焼成は良好で、硬質であった。胎土の特徴から、南比企産と考えられる。

13は、高台付皿である。内面底部には、径7cm前後の円形の赤焼けの部分があり、重ね焼の痕跡と考えられる。

14～16は、内面に黒色処理を施した土器である。14は高台付皿で、15・16は坏である。いずれも、ロクロによる成形で、底部の調整は、糸切後、無調整であった。内面は、細かいヘラミガキが施され、黒色処理されていた。

17～19は、須恵器甕である。17は底部から胴部にかけての破片である。胴部下端は、ヘラケズリされる。全体的に薄手で、硬質であった。18は口縁部の破片である。19は口径39.2cmの大甕である。胴部以下を欠損していたため全体の調整は不明であるが、肩部には、横方向のタタキが施されていた。胎土には、白色針状物質を含むことから、南比企産と思われる。

20～23は、土師器甕である。20は、口縁部の破片で、口縁がコの字状となる。21は、小型の甕で、口縁部はコの字状となる。胴部以下を欠損していたが、台付甕と考えられる。22・23は台付甕の脚部の破片である。脚部は、八の字状に外側に開いていた。

第99号井戸跡（第508図・第514図）

AB・AC-18グリッドから検出した。遺構は、239号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.34m、短軸1.3mであった。深さは、2.30mであった。

出土遺物は、土師器坏が1点出土した。

第100号井戸跡（第508図・第514図）

AA-17グリッドから検出した。遺構は336号土壙を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.7m、短軸1.48mであった。深さは、1.0mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、須恵器坏3点、椀1点、また、甑篭が出土した。

第101号井戸跡（第508図）

Y-17グリッドから検出した。遺構は、223号竪穴住

居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.74m、短軸0.68mであった。深さは、1.56mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第102号井戸跡（第508図）

AA-17グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.54m、短軸0.50mであった。深さは、1.30mであった。

出土遺物は、検出できなかった。。

第103号井戸跡（第508図）

AB-16グリッドから検出した。遺構は、215号竪穴住居跡と重複していたが、新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.74m、短軸0.64mであった。深さは、1.20mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第104号井戸跡（第508図・第514図）

AA-18グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.76m、短軸0.74mであった。深さは、1.74mであった。

出土遺物は、土師器甕1点が出土した。

第105号井戸跡（第508図・第514図）

AC-20グリッドから検出した。遺構は、84号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.10m、短軸0.94mであった。深さは、1.80mであった。

出土遺物は、須恵器坏1点、高台坏1点が出土した。

第106号井戸跡（第508図）

AA-19グリッドから検出した。遺構は、229・239号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.9m、短軸0.78mであった。深さは、1.1mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第107号井戸跡（第509図）

AC-18グリッドから検出した。遺構は、263号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.06m、短軸1.02mであった。深さは、1.05mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第108号井戸跡（第509図）

AD-18グリッドから検出した。遺構は、289号竪穴住居跡、110号井戸跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.63m、短軸1.39mであった。深さは、1.6mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第109号井戸跡（第509図）

AD-17グリッドから検出した。遺構は、302号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.1m、短軸1.06mであった。深さは、1.65mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第110号井戸跡（第509図・第514図）

AD-18グリッドから検出した。遺構は、108号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.28m、短軸1.1mであった。深さは、1.6mであった。

出土遺物は、須恵器坏1点が出土した。

第111号井戸跡（第509図）

AC-19・20グリッドから検出した。遺構は、357号土壙に壊されていた。また、264・265号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.82m、短軸0.6mであった。深さは、1.40mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

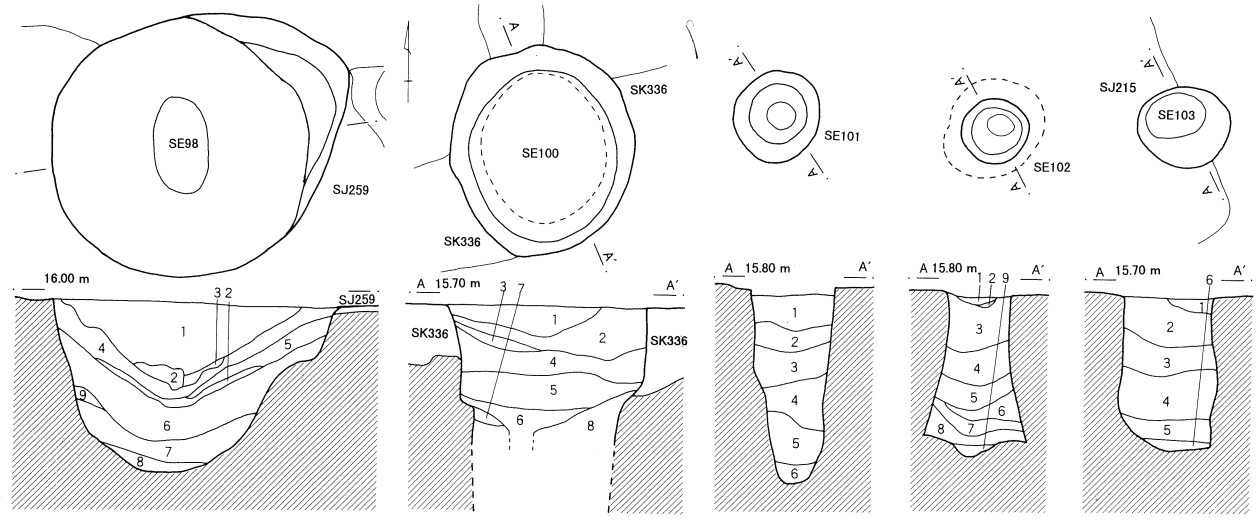
第112号井戸跡（第509図）

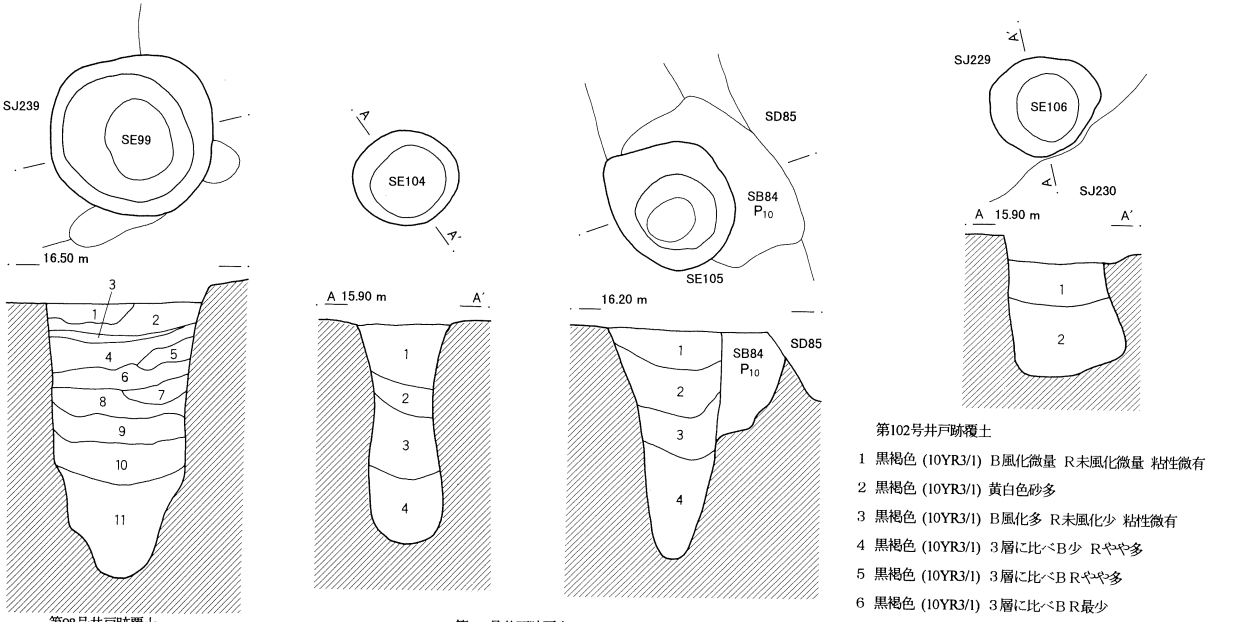
AC-20グリッドから検出した。遺構は357号土壙に壊されていた。また、264号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.56m、短軸0.5mであった。深さは、1.40mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第508図　井戸跡(8)





第98号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3)　R多 C 締り強
2 黒色　(10YR1.7/1) R少 C主体
3 黒色　(10YR2/2)　RC M主体
4 黒褐色 (10YR2/3)　R微量 1層基本 遺物無
5 黒褐色 (10YR2/3)　RC 壁際ではB多
6 黒色　(10YR2/2)　R微量 B薄層帯状に数層挟む
7 黒褐色 (10YR3/1)　6層に準ず Bは暗灰色砂質土になる
8 褐灰色 (10YR4/1)　青灰色暗質土 粘土化強
9 褐色　(10YR4/6)　B

第99号井戸跡覆土

1 黄褐色　(2.5Y5/6) RB若干 Bブロック多
2 黒褐色　(2.5Y3/2) 粘土質ブロック混入 R若干
3 黄褐色　(2.5Y5/6) 粘土ブロック・Bブロック主体
4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) RC若干 B
5 暗灰黄色 (2.5Y5/2) B若干混入
6 鈍黄褐色 (2.5Y4/3) B 締りやや有
7 鈍黄褐色 (2.5Y4/3) B 締りやや有
8 鈍黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土ブロック・B主体 締り有
9 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 7層に近似 やや暗 B大型ブロック
10 黒褐色　(2.5Y3/2) B大型ブロックやや多 9層より締る
11 黒褐色　(2.5Y3/1) 粘性もつB粘土主体

第100号井戸跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/3) R多 M多散在
2 暗褐色 (10YR3/4) I層基本 R少 粘性有
3 暗褐色 (10YR3/4) R 被加熱ブロック 住居カマド破壊土
4 暗褐色 (10YR3/3) B多薄層状 R微量
5 暗褐色 (10YR3/3) III層基本 B増大 帯状層を数層形成
6 暗褐色 (10YR3/3) IV層基本 B
7 褐色　(10YR4/6) 砂質B
8 黒褐色 (10YR2/3) 若干R 単一的 色調極暗 粘性極強

第101号井戸跡覆土

1 褐灰色 (10YR4/1) B多少風化少 R風化少 C風化少
　やや硬く 若干粘性有
2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多
3 黒褐色 (10YR3/1) 1層に同じ
4 黒色　(10YR2/1) B風化少 R風化少
5 黒褐色 (10YR3/1) 2層に同じ 粘性有
6 黒褐色 (10YR3/1) 灰黒色の砂層

第105号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1)
2 黒褐色 (10YR2/1)
3 褐色　(10YR4/6)
4 黒褐色 (10YR3/2)

第102号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) B風化微量 R未風化微量 粘性微有
2 黒褐色 (10YR3/1) 黄白色砂多
3 黒褐色 (10YR3/1) B風化多 R未風化少 粘性微有
4 黒褐色 (10YR3/1) 3層に比べB少 Rやや多
5 黒褐色 (10YR3/1) 3層に比べBRやや多
6 黒褐色 (10YR3/1) 3層に比べBR最少
7 黒褐色 (10YR3/1) 6層に茶黄白色粘土ブロック少 風化
8 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや有
9 褐灰色 (10YR4/1) 灰色の砂層

第103号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) B風化少
2 黒褐色 (10YR2/3) B風化多 R風化少 C風化少
3 黒色　(10YR2/2) 2層よりB大多
4 黒色　(10YR2/1) 2層よりB少 やや砂質
5 黒色　(10YR2/1) 2層に同じ ややB少
6 黒色　(10YR2/1) 4層に同じ ややB多

第104号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) Rやや風化少 C風化少
　一部壁際に崩落に伴うブロック有
2 黒色　(10YR2/1) 1層に比べRやや少 B風化少 やや粘性有
3 黒色　(10YR2/1) 1層に比べR不含 B風化多 粘性有
4 黒色　(10YR2/1) 3層同様 灰褐色土ブロック極風化 B多

第106号井戸跡覆土

1 黒色 (10YR2/1) 粘性有 RB
2 黒色 (10YR2/1) 砂粒 若干BR

0　2m

第113号井戸跡（第509図）

Y-15グリッドから検出した。遺構は、82号溝跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.48m、短軸0.4mであった。深さは、1.8mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

図示可能な遺物は検出できなかった。また、馬歯が出土した。

第114号井戸跡（第509図）

AC-22グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.73mであった。深さは、1.8mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第115号井戸跡（第509図）

AC-21グリッドから検出した。遺構は、90号掘立柱建物跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.76mであった。深さは、1.67mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第116号井戸跡（第510図・第514図）

AD-17グリッドから検出した。遺構は、302・311号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.9m、短軸1.64mであった。深さは、1.2mであった。

出土遺物は、須恵器坏1点、甕1点が出土した。

第117号井戸跡（第510図）

AD-18グリッドから検出した。遺構は、317号竪穴住居跡、448号土壙を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.40m、短軸1.34mであった。深さは、1.30mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第118号井戸跡（第510図・第515図）

AD-18グリッドから検出した。遺構は、312号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.56m、短軸1.40mであった。深さは、1.84mであった。

出土遺物は、須恵器蓋1点が出土した。

第119号井戸跡（第510図）

AD-19グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.86m、短軸0.84mであった。深さは、1.54mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第120号井戸跡（第510図・第515図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は、316号竪穴住居跡、124号井戸跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.58m、短軸1.5mであった。深さは、2.80mであった。

出土遺物は、白磁碗1点、用途不明の木製品が出土した。

白磁碗は、底部の破片で、高台と口縁部を欠損していたため、全体は不明である。底部は厚く、高台も高くなると考えられる。四耳壺の可能性もあるが、内面にも施釉されていることから、碗と判断した。見込み部分には、沈線が認められた。胎土は灰色味の強い灰白色であった。

第121号井戸跡（第510図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は、4号周溝状遺構を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.64m、短軸0.6mであった。深さは、1.40mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第122号井戸跡（第510図）

AD-22グリッドから検出した。遺構は、333・339号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.60m、短軸1.46mであった。深さは、1.36mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

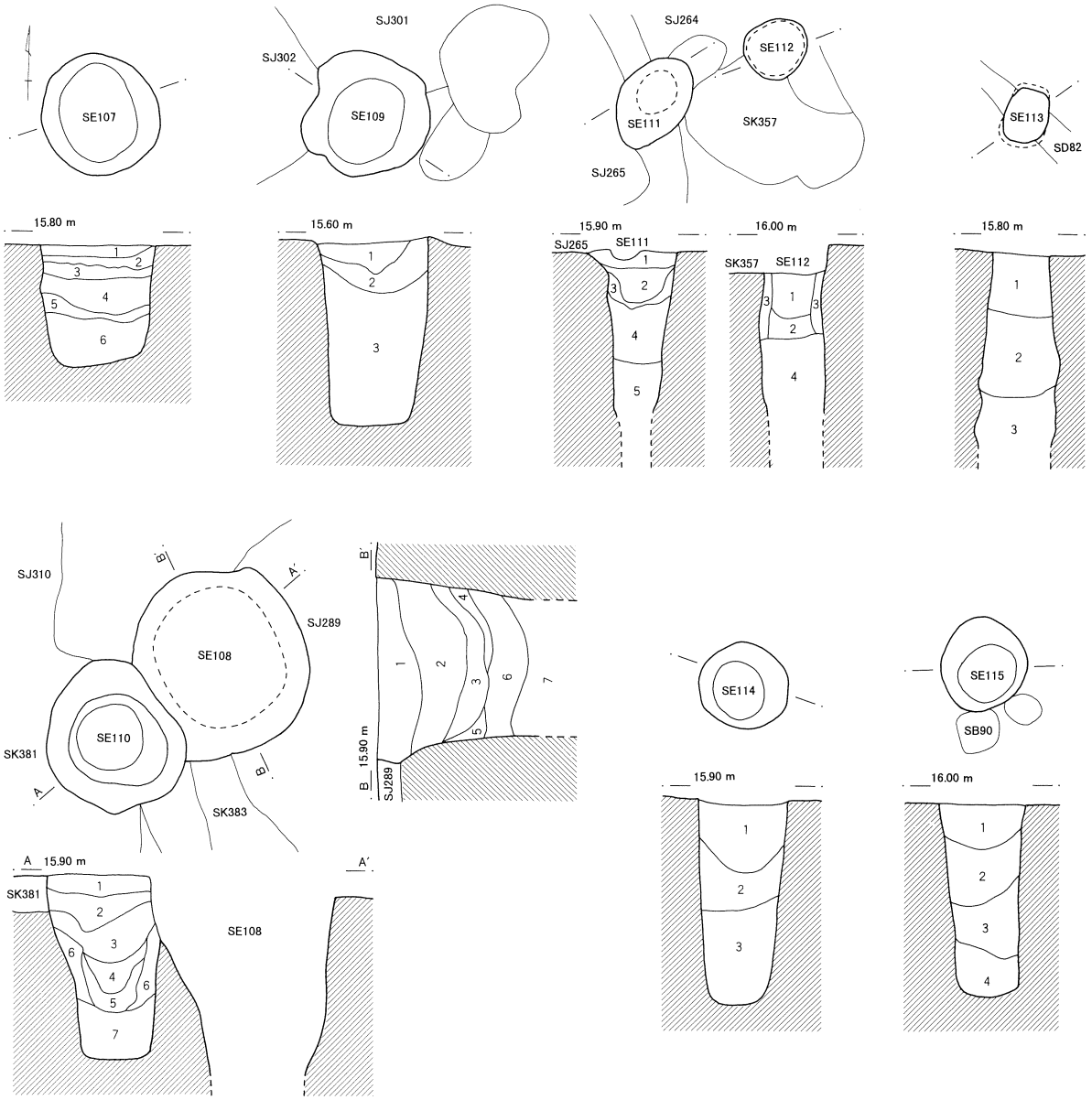
第123号井戸跡（第511図）

AD-22グリッドから検出した。遺構は、339号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、長軸0.7m、短軸0.65mであった。深さは、1.21mであった。

出土遺物は、建築部材と考えられる木製品が1点出

第509図　井戸跡（９）



第107号井戸跡覆土

1 灰黄褐色 (10YR4/2) ＲＣ混入
2 明黄褐色 (10YR6/6) Ｂ主体
3 鈍黄褐色 (10YR4/3) ＢＲ混入
4 灰黄褐色 (10YR4/2) Ｂ 粘性 締り有
5 暗褐色　(10YR3/3) ＢＣ
6 褐色　(10YR4/4) Ｂ混入 締り粘性有

第108号井戸跡覆土

1 黒褐色　(10YR3/2) ＢＣＲ 締りやや弱
2 黒褐色　(10YR3/2) ＢＲＣ １層に比べ粘性有
3 褐灰色　(10YR4/1) ＲＣ 締り粘性弱
4 黒褐色　(10YR3/1) Ｃ主体 締り弱
5 灰黄褐色 (10YR4/2) Ｂ混入 締り弱
6 黒褐色　(10YR3/1) 粘性有 締りやや弱
7 黒褐色　(10YR3/1) 粘土質土に若干Ｃ

第109号井戸跡覆土

1 黒色　(10YR2/2) 暗褐色土基本 灰白色粘質土微量 Ｒ多
2 黒褐色 (10YR2/3) １層基本土 Ｒ不含 灰白色粘質土多
3 黒褐色 (10YR2/3) Ｒ微量 大型Ｂ多 灰白色土少 締り弱
故意の埋戻し

第110号井戸跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR4/3) Ｒ多 ＣＢ混入
2 黒褐色　(10YR2/3) １層に比べＲ少 粘性 締りやや弱
3 黒褐色　(10YR3/2) ２層に比べやや明 Ｂ
4 黒褐色　(10YR3/2) 粘性強 締りやや有
5 褐灰色　(10YR4/1) Ｂ粘土 締り有 粘性強
6 灰黄褐色 (10YR5/2) Ｂ多 Ｂ崩落土
7 鈍黄褐色 (10YR5/4) Ｂ 粘性強

第111・112号井戸跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR4/3) Ｒ若干 白色粘土粒子混入
2 褐色　(10YR4/4) Ｂ多
3 黄褐色　(10YR5/6) ２層に比べＢ大多 締りやや弱
4 灰黄褐色 (10YR4/2) ＲＢ ２層より暗い
5 黒褐色　(10YR3/2) ４層より粘性有 Ｂ混入

第113号井戸跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR4/3) ＲＣ微量 締りやや有 粘性弱
2 暗褐色　(10YR3/3) Ｂ混入 締り粘性有
3 鈍黄褐色 (10YR4/3) Ｂやや多 締り弱 粘性有

第114号井戸跡覆土

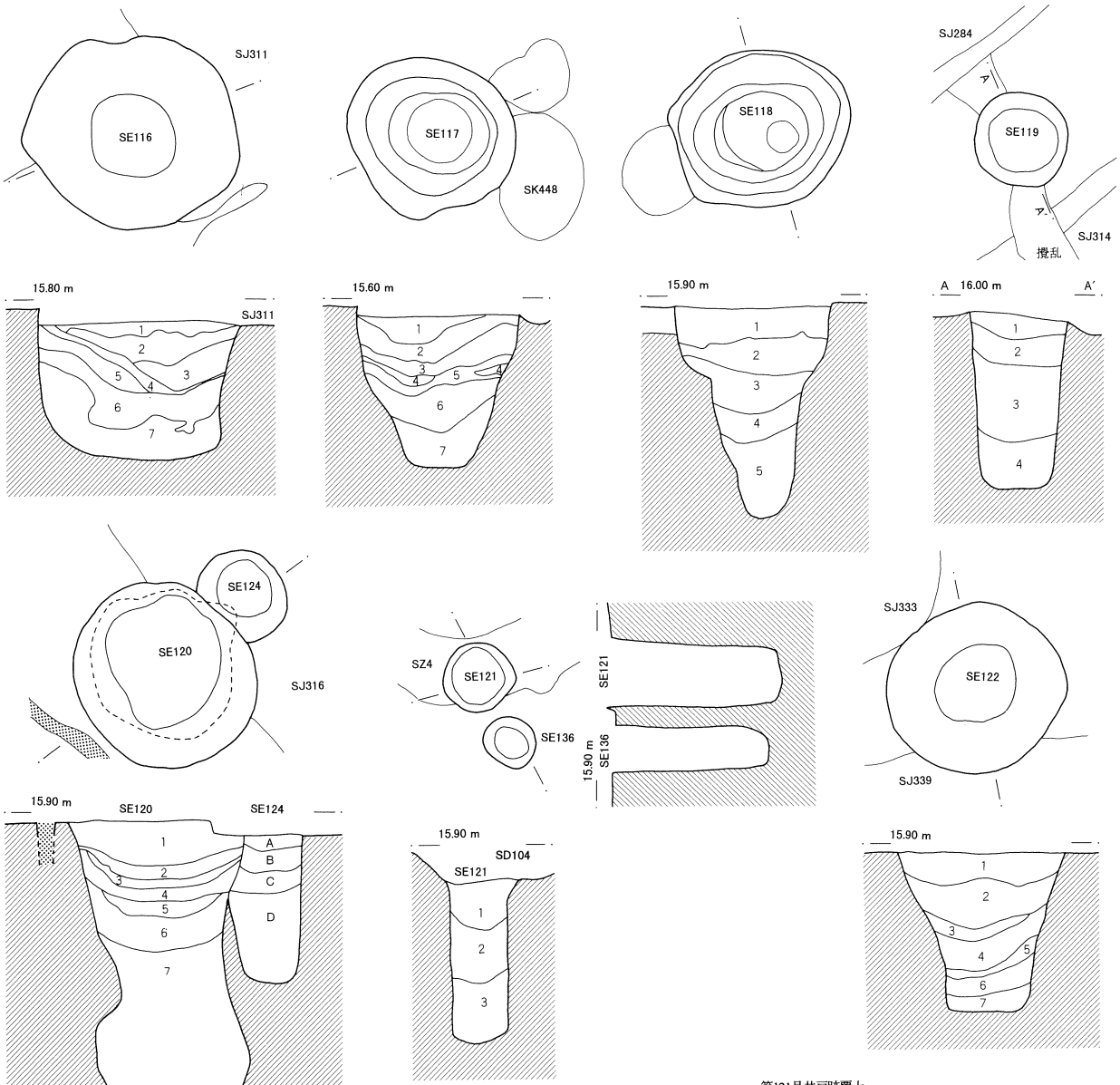
1 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや有 Ｒ
2 黒褐色 (10YR3/1) 粘性有 Ｂ砂粒
3 黒褐色 (10YR3/1) Ｂ砂粒多 締り無

第115号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) Ｒ土器片多
2 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや有 Ｂ砂粒多
3 黒褐色 (10YR3/2) やや砂質 Ｂ砂粒
4 黒色　(10YR2/1) 粘性有 Ｃ多

0　2m

第510図　井戸跡(10)



第116号井戸跡覆土

1 暗褐色　(10YR3/3) ＲＣ多 締り強

2 黒色　(10YR2/1) M層 ＲＣ少 締り無 カマド灰層状

3 暗褐色　(10YR3/3) 未溶化Bブロック Ｃ多

4 暗褐色　(10YR3/4) ３層と同系だがＢＣ不含 締り粘性有

5 褐色　(10YR4/3) 未溶化Bブロック

6 暗褐色　(10YR3/4) ４層に準ず ２層のM多

7 褐色　(10YR4/3) 褐色Bブロック 混有物無 溶化未進行

第117号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) B微量 R多量 C 締り強

2 褐色　(10YR4/6) B

3 黒褐色 (10YR3/2) １層基本 未溶化B多

4 暗褐色 (10YR3/4) 灰褐色粘質土主体 未溶化B・C多

5 暗褐色 (10YR3/4) 灰褐色粘質土ブロック 締り弱

6 暗褐色 (10YR3/4) ４層に同じ Ｃ不含

7 褐色　(10YR4/4) 溶化B主体 粘性強

第118号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) 暗褐色土主体 ＲＣ多 締り有

2 黒褐色 (10YR2/3) １層土とM主体 締り弱

3 暗褐色 (10YR3/3) 暗褐色土単一 粘性強

4 暗褐色 (10YR3/3) ３層基本 溶化進行B多

5 暗褐色 (10YR3/4) 溶化進行大型B主体 ４層土混入

第119号井戸跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR4/3) ＣＲやや多 B混在 締りやや有

2 褐色　(10YR4/4) B多 締りやや有

3 暗褐色　(10YR3/4) ２層に比べBやや少 締りやや有

4 褐色　(10YR4/6) B多 締りやや弱

第120号井戸跡覆土

1 黒褐色　(10YR3/1) B風化少 R風化少 C風化微量 やや粘性有

2 黒褐色　(10YR3/1) １層に比べＢＲ少 Ｃ多 やや粘性有

3 黒褐色　(2.5Y3/1) Bやや風化多

4 黒褐色　(10YR3/1) R風化少 B風化少 やや粘性有

5 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) B風化少 やや粘性有

6 黒褐色　(10YR3/1) B風化少 R風化少 やや粘性有

7 黒褐色　(10YR3/1) B風化少 R風化少 粘性強

第121号井戸跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) ＣＲ微量 粘性やや有

2 黒褐色 (10YR3/1) B砂 粘性有

3 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 Ｃ 粘性有

第122号井戸跡覆土

1 黒色　(10YR2/2) R B砂質土

2 黒褐色　(10YR3/1) 上層に比べ粘性有 R B砂質土 黒色砂状粒

3 鈍黄褐色 (10YR4/3) B砂質土多

4 黒褐色　(10YR3/1) B砂質土

5 鈍黄褐色 (10YR4/3) B砂質土多

6 黒褐色　(10YR3/1) 粘性有 粘土状褐灰色土多

7 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性やや有 B砂質土 F

第124号井戸跡覆土

A 褐色　(10YR4/4) ＲＣ B混入

B 黒褐色 (10YR2/3) A層より締り有 ＲＣ

C 暗褐色 (10YR3/3) Bやや多 粘性有

D 黒褐色 (10YR3/2) B混入 締りやや有 粘性強

土した。

第124号井戸跡（第510図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は、316号竪穴住居跡を壊していた。また、120号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.82m、短軸0.72mであった。深さは、1.28mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第125号井戸跡（第511図）

AD-18グリッドから検出した。遺構は、312号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.84m、短軸0.81mであった。深さは、1.1mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、８世紀代の土師器、須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第126号井戸跡（第511図）

AD-17グリッドから検出した。遺構は、311号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.77m、短軸0.5mであった。深さは、1.3mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第127号井戸跡（第511図）

AC-22グリッドから検出した。遺構は、128号井戸跡に隣接していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.8m、短軸0.76mであった。深さは、1.3mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第128号井戸跡（第511図）

AC-22グリッドから検出した。遺構は、127号井戸跡に隣接していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.3m、短軸1.2mであった。深さは、1.35mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第129号井戸跡（第511図・第515図）

AD-22グリッドから検出した。遺構は、338･339号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.27m、短軸1.2mであった。深さは、1.42mであった。

出土遺物は、須恵器長頸瓶１点が出土した。

第130号井戸跡（第511図）

AE-22グリッドから検出した。遺構は、338号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.85m、短軸0.82mであった。深さは、1.22mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第131号井戸跡（第511図・第515図）

AD-22グリッドから検出した。遺構は、97号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.66m、短軸0.56mであった。深さは、1.53mであった。

出土遺物は、土師器坏１点、甕１点が出土した。

第132号井戸跡（第511図・第515図）

AE-17グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.0m、短軸0.78mであった。深さは、1.44mであった。

出土遺物は、覆土中から、土師器暗文坏２点、須恵器椀が出土した。

１・２は、土師器坏である。２点とも平底で浅身の坏である。外面は、底部はヘラケズリの後ヘラミガキされていた。口縁部は、下半部が斜め、または横方向のヘラケズリ、上半部はヘラナデされ、その後横方向のヘラミガキが施されていた。内面は、放射状(松葉状)の暗文が施され、見込み部分はナデによって消されていた。胎土は、角閃石などを含んでいるものの、精選され、硬質であった。

３は、須恵器椀である。底部の調整は、糸切り後、周辺部をヘラケズリしていた。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁端部は、面取り風に内側に傾斜していた。

また、石製品として砥石が出土した。

第133号井戸跡（第512図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は、340号竪穴住居跡、ピット880を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.5m、短軸0.46

mであった。深さは、2.72mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第134号井戸跡（第511図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は、96号掘立柱建物跡を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸0.78m、短軸0.4mであった。深さは、1.66mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第135号井戸跡（第511図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は、340号竪穴住居跡・ピット885を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.53m、短軸0.48mであった。深さは、1.53mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第136号井戸跡（第510図）

AD-21グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.46m、短軸0.40mであった。深さは、1.36mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第137号井戸跡（第512図）

AC-22グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.50m、短軸0.44mであった。深さは、1.36mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第138号井戸跡（第512図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は、85号溝跡に壊されていた。また、299号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.54m、短軸0.46mであった。深さは、1.36mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第139号井戸跡（第512図）

AD-20グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.44m、短軸0.40mであった。深さは、1.42mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第140号井戸跡（第512図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は、300号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.64m、短軸0.62mであった。深さは、1.30mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第141号井戸跡（第512図・第515図）

AE-21グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.44m、短軸0.42mであった。深さは、1.94mであった。

出土遺物は、土師器壺1点が出土した。

第142号井戸跡（第512図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は、300号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.58m、短軸0.52mであった。深さは、1.70mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第173号井戸跡（第512図）

AA-17グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は長軸0.86m、短軸0.70m、深さ1.08mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第183号井戸跡（第512図）

AC-19グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.44m、短軸0.40mであった。深さは、1.62mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第184号井戸跡（第512図）

AB-20グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.52m、短軸0.44mであった。深さは、1.30mであった。

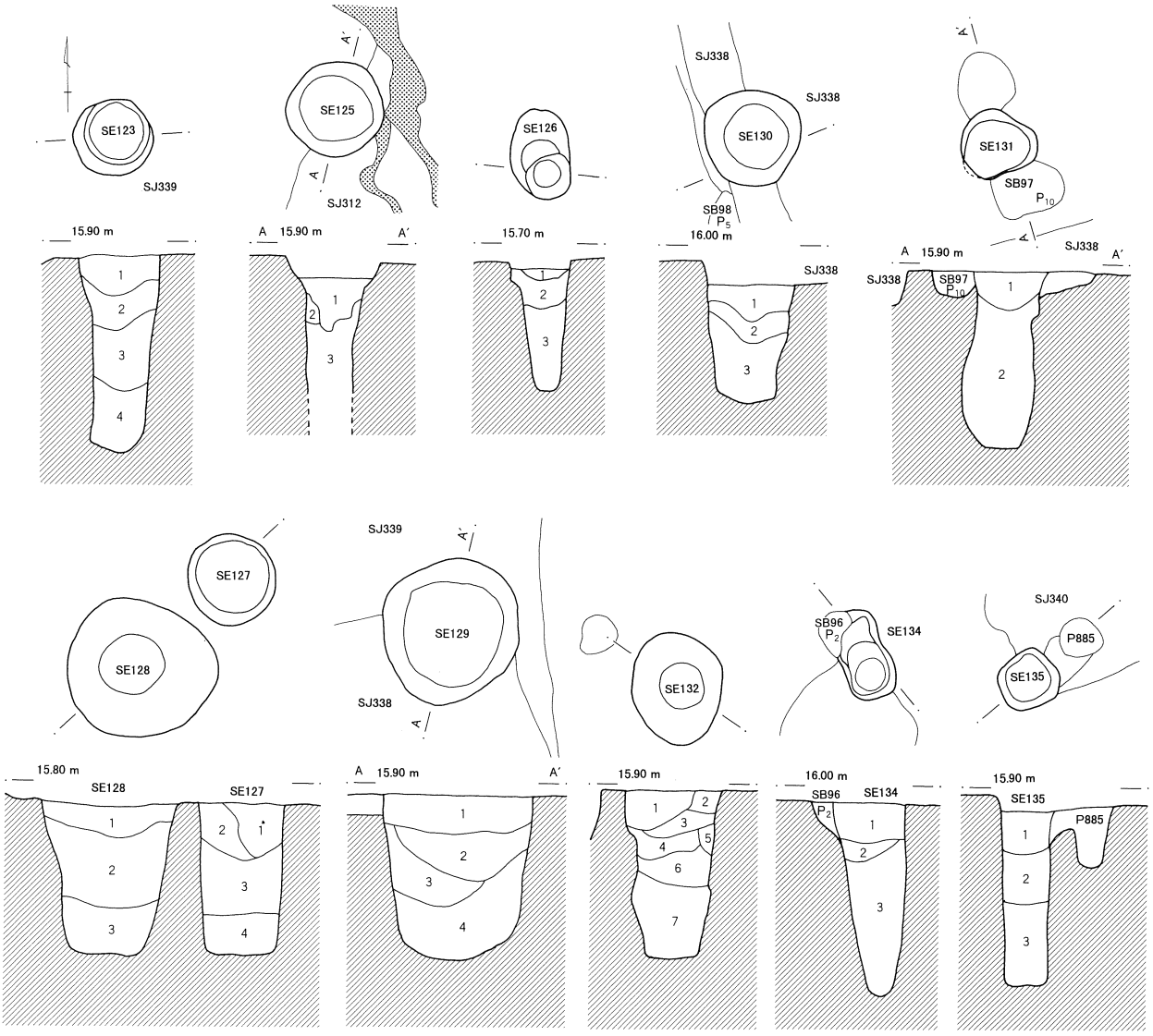
出土遺物は、検出できなかった。

第185号井戸跡（第512図）

AA-19グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.56m、短軸0.50mであった。深さは、1.44mであった。

第511図　井戸跡(11)



第123号井戸跡覆土
1 黒褐色 (10YR2/2) 粘性やや有 R B砂質土多
2 黒褐色 (10YR2/3) 粘性やや有 R多 B砂質土多 C多
3 黒褐色 (10YR3/1) 粘性有 R
4 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 木片 C多

第125号井戸跡覆土
1 暗褐色 (10YR3/3) 上位は粒 下位は小型ブロック B溶混多 RC少
2 褐色 (10YR4/6) 大型B溶化ブロック
3 暗褐色 (10YR3/4) 1層に準ず 溶化Bブロック多 粘性強

第126号井戸跡覆土
1 黒褐色 (10YR2/3) 緻密 締り粘性有 RC流入
2 黒褐色 (10YR2/3) 緻密 締り粘性有 溶化B小型ブロック
3 黒褐色 (10YR2/3) 緻密 締り粘性有 褐色土単一 分層

第127号井戸跡覆土
1 褐色 (10YR4/4) B 締りやや弱
2 鈍黄褐色 (10YR4/3) B多 若干CR混入
3 褐色 (10YR4/6) B多 締り有
4 暗褐色 (10YR3/3) B 締り粘性有

第128号井戸跡覆土
1 褐色 (10YR4/4) B 締り有
2 鈍黄褐色 (10YR4/3) B多 締り有
3 暗褐色 (10YR3/3) B 粘性締り有

第129号井戸跡覆土
1 鈍黄褐色 (10YR4/3) RCB 締り有
2 暗褐色 (10YR3/3) B多 締りやや弱
3 黒褐色 (10YR3/2) B 締りやや有
4 鈍黄褐色 (10YR5/4) B多 締りやや有

第130号井戸跡覆土
1 褐色 (10YR4/4) BCR混入 締りやや有
2 褐色 (10YR4/6) B 締り有
3 鈍黄褐色 (10YR5/4) B混入 ブロックやや多 粘性有

第131号井戸跡覆土
1 灰黄褐色 (10YR4/2) RC B微量 締りやや有
2 黒褐色 (10YR3/2) 粘性強 BC 締りやや有

第132号井戸跡覆土
1 灰黄褐色 (10YR4/2) RC多 B
2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 1層に近似 B
3 暗褐色 (10YR3/3) 1層に比べRC少
4 黒褐色 (10YR3/2) 3層に比べ暗い RC
5 褐色 (10YR4/4) B 締り有
6 黒褐色 (10YR3/2) Bきめ細かい 締りやや有 若干RC
7 黒色 (10YR2/2) 粘性締まり有 B

第134号井戸跡覆土
1 黒褐色 (10YR3/1) R 粘性有
2 黒褐色 (10YR3/1) 粘性有 B砂粒多
3 黒褐色 (10YR3/2) 粘性有 B砂粒 C多

第135号井戸跡覆土
1 暗褐色 (10YR3/4) R B砂質土多 粘性有
2 黒褐色 (10YR2/2) C 粘性有
3 黒褐色 (10YR3/1) CR

0　2m

出土遺物は、検出できなかった。

第186号井戸跡（第512図）

AB-17グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.74m、短軸0.72mであった。深さは、1.54mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第187号井戸跡（第512図）

AB-17グリッドから検出した。269号竪穴住居跡と重複していたが、新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.44m、短軸0.42mであった。深さは、1.78mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第188号井戸跡（第512図）

AE-19グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.46m、短軸0.40mであった。深さは、1.74mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第189号井戸跡（第512図）

AB-17グリッドから検出した。遺構は、100号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.66m、短軸0.66mであった。深さは、1.44mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第190号井戸跡（第512図）

AB-17グリッドから検出した。遺構は、269号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.40m、短軸0.38mであった。深さは、1.65mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第192号井戸跡（第512図）

X-18グリッドから検出した。遺構は、194号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.48m、短軸0.48mであった。深さは、1.55mであった。

出土遺物は、木製品として壺が出土した。

第193号井戸跡（第512図）

X-18グリッドから検出した。遺構は、194号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.42m、短軸0.40mであった。深さは、1.74mであった。

出土遺物は、木製品として板材が出土した。

第194号井戸跡（第512図）

AC-18グリッドから検出した。遺構は、263号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.36m、短軸1.28mであった。深さは、2.30mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第195号井戸跡（第512図）

AC-20グリッドから検出した。遺構は、298号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.54m、短軸0.48mであった。深さは、1.50mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

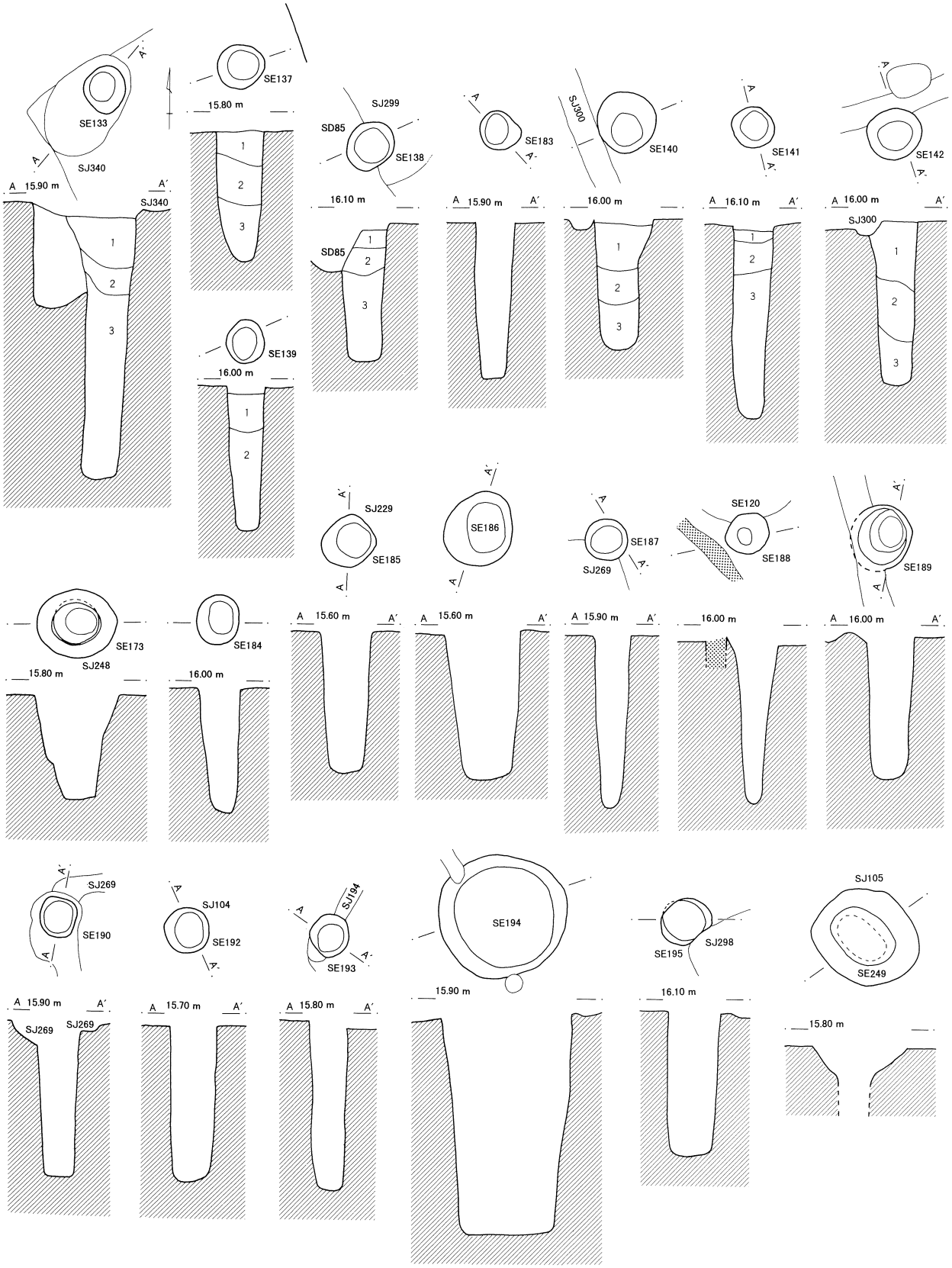
第249号井戸跡（第512図）

U-13グリッドから検出した。遺構は、105号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、径1.2m、深さは、1mまで確認したが、底面までの調査は行わなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第512図　井戸跡(12)



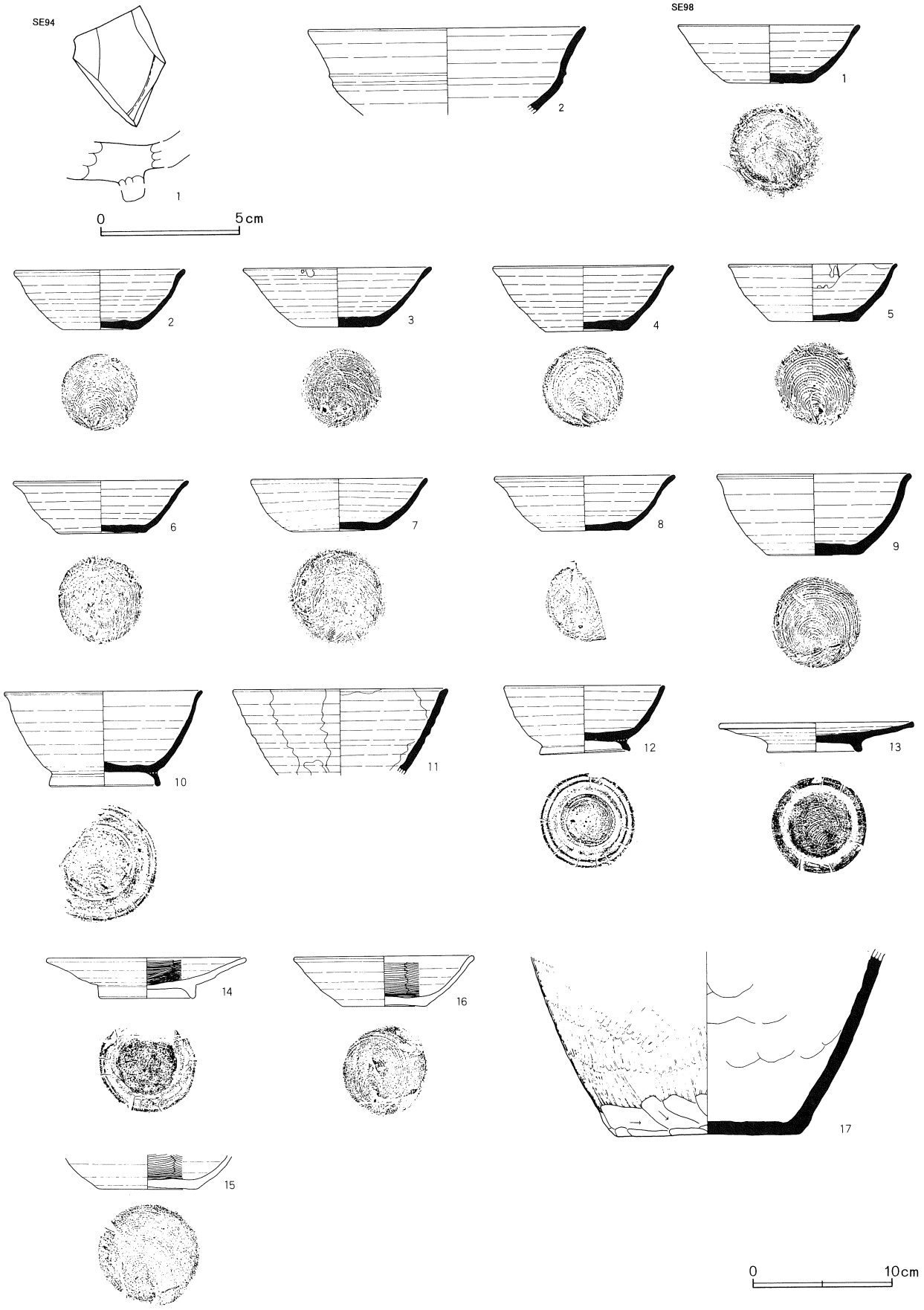
第133・138・139・142号井戸跡覆土
1 暗褐色 (10YR3/4) R B砂多 粘性有
2 黒褐色 (10YR2/2) C 粘性有
3 黒褐色 (10YR3/1) C 粘性有

第137・140号井戸跡覆土
1 暗褐色 (10YR3/4) R B砂質土多 粘性有
2 黒褐色 (10YR2/2) C 粘性有
3 黒褐色 (10YR3/1) CR

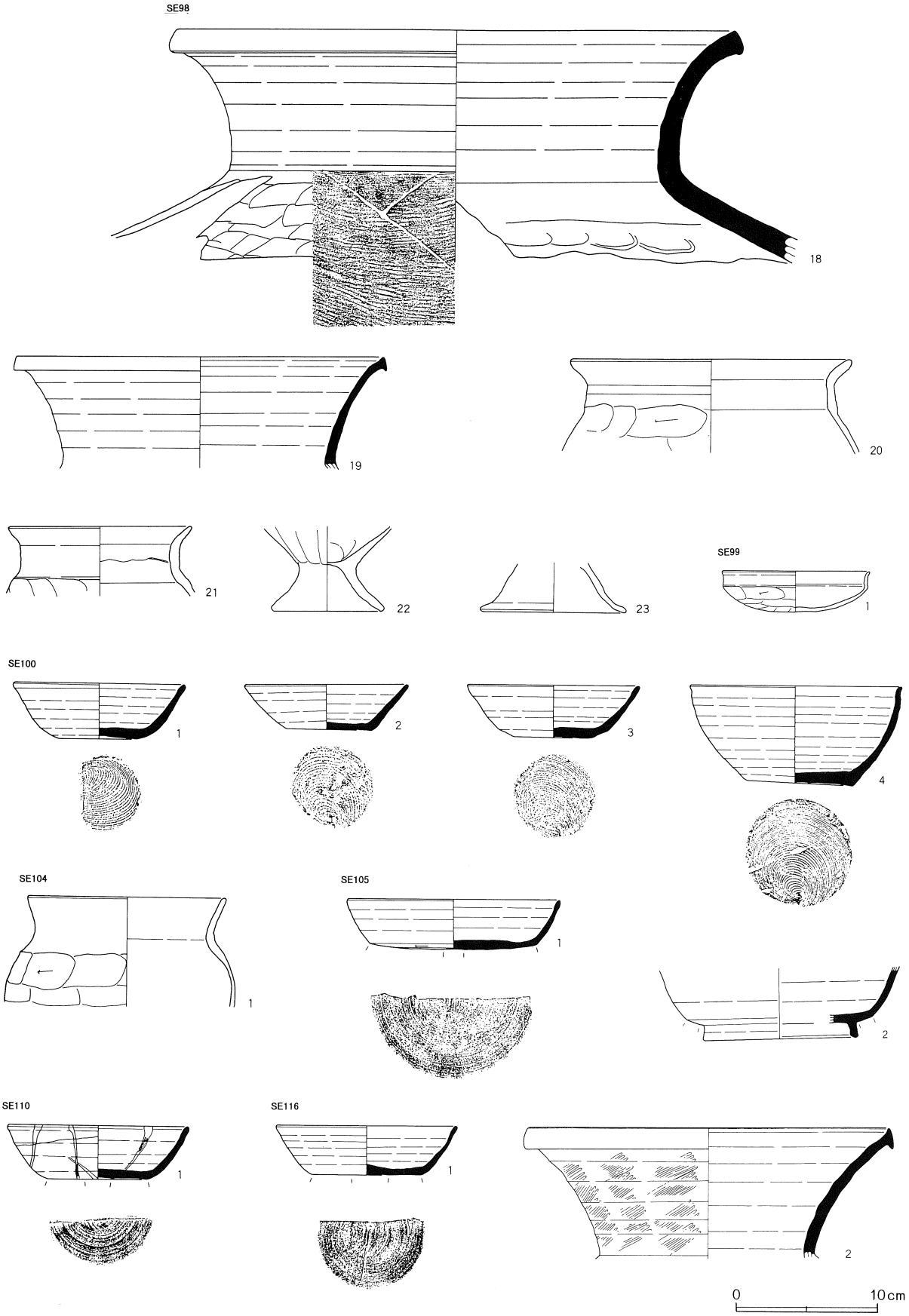
第141号井戸跡覆土
1 褐色 (10YR4/6) B砂質土ブロック多
2 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや有
3 黒褐色 (10YR3/2) B砂質土ブロック多

0　2m

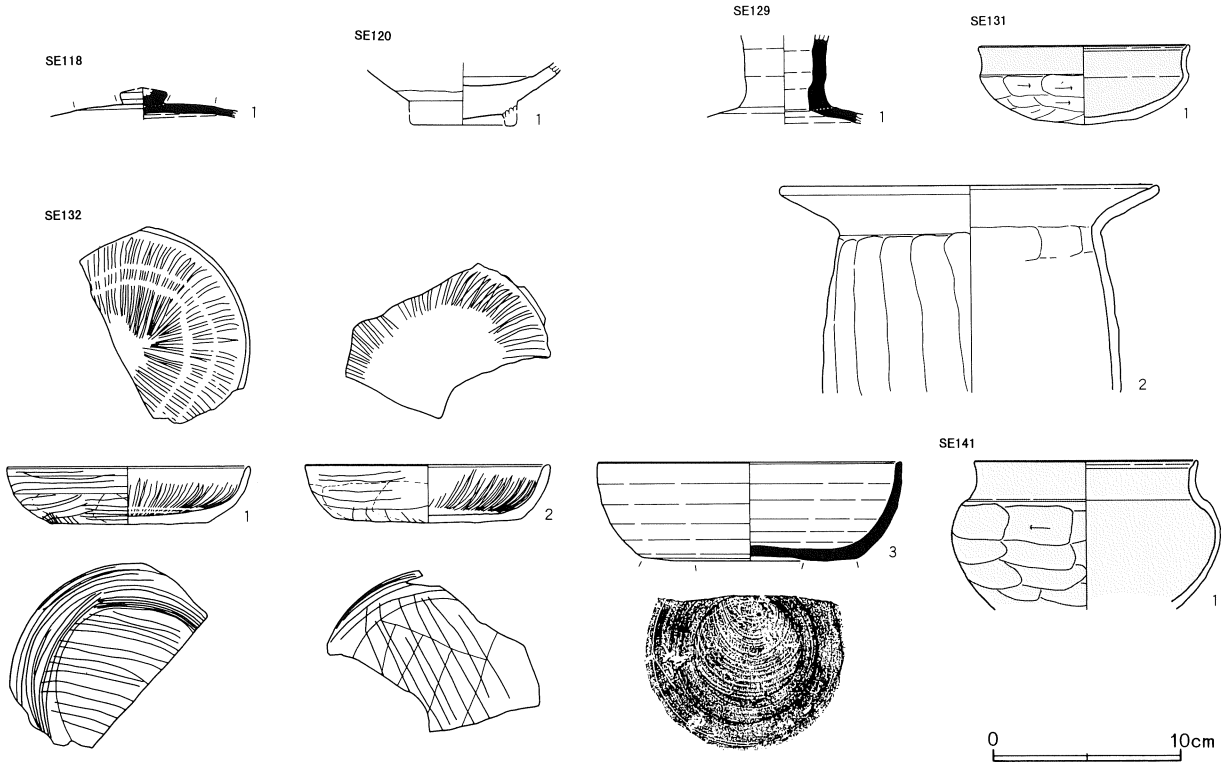
第513図　井戸跡出土遺物(5)



第514図　井戸跡出土遺物(6)



第515図　井戸跡出土遺物(7)



井戸跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
94-1	青磁椀					1	オリーブ灰	破片	龍泉窯系
94-2	高坏	19.8			BCIK	1	暗灰	20	南比企
98-1	坏	12.9	4.2	6.0	BCFIJ	2	灰	90	南比企
98-2	坏	12.1	4.3	5.5	BCFIL	2	灰	70	南比企
98-3	坏	13.6	4.2	6.0	BCIJ	2	灰オリーブ	80	南比企 墨痕あり
98-4	坏	12.8	4.7	5.9	BCEFIJ	2	橙	50	南比企
98-5	坏	(12.0)	4.1	5.9	BFIL	2	灰	60	南比企 墨痕あり
98-6	坏	12.6	3.7	6.3	CFIJ	2	灰	95	南比企
98-7	坏	12.6	3.7	6.5	BCFIJ	2	灰白	95	南比企
98-8	坏	12.8	4.0	6.2	BCEFIJ	2	橙	40	南比企　赤焼け
98-9	椀	13.8	5.8	6.8	BCFIJ	2	灰	70	南比企
98-10	高台付椀	14.0	6.8	7.5	ABFHJ	2	灰	50	
98-11	椀	15.4			ADFHJK	3	鈍黄橙	60	末野？ 煤状付着物
98-12	高台付坏	11.4	4.8	6.3	BCFIJ	1	灰褐	100	南比企
98-13	高台付皿	(13.8)	2.1	6.7	BCFIK	2	赤灰	50	南比企
98-14	高台付皿	(14.2)	2.9	6.5	ADJ	2	黄橙	50	内黒
98-15	坏			7.2	ADEJL	3	浅黄橙	30	内黒 底部完存
98-16	坏	(12.8)	3.6	6.0	ABDFJ	2	黄橙	40	内黒 器面荒れ
98-17	甕			(13.0)	BFI	1	灰	40	底部完存
98-18	甕	39.6			ABCIJL	2	灰	60	南比企
98-19	甕	(26.0)			BCFIK	1	灰	10	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
98-20	甕	(19.6)			ADEHJ	3	鈍褐	20	
98-21	甕	(13.0)			ABDEJ	3	明赤褐	20	コの字
98-22	台付甕			7.6	ABDEHJ	2	明赤褐	80	台部完存
98-23	台付甕			10.2	ABDEHJ	2	橙	100	
99-1	坏	(10.2)	2.9		BDEHJ	2	橙	60	
100-1	坏	(12.0)	3.9	5.5	BDFIJ	2	灰白	50	南比企
100-2	坏	11.6	3.2	6.0	BFIJK	2	灰	60	南比企
100-3	坏	(12.0)	3.7	5.5	BFIJK	2	灰	60	南比企
100-4	椀	(15.0)	6.8	7.5	ABFIJK	2	灰	50	南比企
104-1	甕	(14.0)			ABDEJ	3	鈍橙	40	
105-1	坏	(15.0)	3.5	11.8	BCFIJ	2	灰	50	南比企
105-2	高台付椀			(10.8)	BCFI	1	暗灰	25	南比企
110-1	坏	12.8	3.7	7.0	CFI	2	灰	50	南比企
116-1	坏	(12.8)	3.4	7.6	BCFI	2	灰	40	南比企
116-2	甕	(25.6)			BCFI	1	暗灰	10	南比企
118-1	蓋				BCFIL	2	灰	40	南比企 つまみ径2.5cm
120-1	白磁椀					1	灰白	30	
129-1	長頸瓶				BF	1	暗灰	80	産地不明
131-1	坏	(11.2)	4.2		BCFL	3	橙	50	赤彩
131-2	甕	20.0			ADEK	3	灰褐	50	
132-1	坏	(13.0)	3.1		ABDJ	3	橙	40	暗文
132-2	坏	(13.0)	3.1		BDJ	3	橙	30	暗文
132-3	椀	16.1	5.2	11.5	BCEFIL	2	灰	50	南比企？
141-1	壺	12.0			BCEJK	3	明褐	40	赤彩

第5表　井戸跡計測表(1)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
30	R-9	円形	1.03		1.37	曲物・中世陶器片	中世		SD38
31	S-11	不整円形	1.92	1.37	(1.2)	常滑甕	中世	中世墓外堀	
32	S-6	円形	0.92		1.5				SD52
33	S-12	円形	2.19	1.54	(0.93)		中世	SD60	
34	T-10	円形	2.46		1.0		中世		SD38
35	T-13	円形	2.05	1.8	1.5		古代		
37	S-11	円形	1.94	1.5	1.64		中世	中世墓外堀	
39	T-11	円形	1.04		(1.0)		古代		SJ106
40	U-12	円形	1.2		1.0	耳環			SK205
41	U-12	円形	1.02		(0.9)				SJ109
42	T-11	円形	1.22	1.13	0.78				
43	T・U-12	楕円形	1.7	1.2	(1.78)				SE44
44	T-12	円形	1.5		(2.1)	木製品		SE43	
45	U-13	円形	1.22		1.2	青磁椀	中世		
46	T-10	円形	1.66		1.3	檜角材	中世		SD38
47	S-9	円形	0.72		2.22		中世		SD38
50	W-13	円形	0.94	0.86	1.66			SK261	
51	W-14	円形	1.3	1.16	2.36	常滑鉢・板材	中世		SJ150・SB60
52	U-13	円形	0.9	0.74	1.24		中世		SJ121
53	U-13	円形	0.6	0.56	1.16				SJ121
54	V-13	円形	1.24	1.1	1.65				
55	W-14	円形	1.25	1.1	1.78	木片・炭化穀類	中世		SB61・66
56	V-12	円形	1.25	1.22	1.9	常滑甕・曲物	中世		SJ140・151 SD71
57	V-12	円形	1.6	1.3	(1.8)	常滑甕・白磁皿	中世		SJ140・151
58	W-14	円形	1.1	1.0	1.2	常滑甕	中世		
59	W-14・10	円形	2.06	1.8	1.87	炭化木片、穀類			SJ152・SB60・66
60	W-12	円形	0.7	0.65	1.64				

第6表　井戸跡計測表(2)

番号	位　置	形　態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
61	V-16	円　形	1.2		1.1	須恵坏	古　代		SE62
62	V-16	不整円形	2.1		1.3		古　代	SE61	
63	AB-16	楕円形	1.22	0.99	1.03				SJ260
64	W-14	円　形	1.27	1.15	1.57		中　世?		SJ150・SK266
65	W-14	円　形	1.06		2.04				SJ150
66	V-14	円　形	1.32	1.15	1.44	炭化穀類・種子			SJ160
67	X-17	円　形	1.87	1.57	(1.26)				SB67
68	W-17・18	円　形	2.0		(1.35)				SB63
69	U-10	円　形	0.62		1.76				
70	V-10	円　形	0.5	0.48	1.74				
71	V-15	円　形	0.8	0.74	1.26	石製模造品			
72	V-15	円　形	0.7	0.66	1.12				
73	V-16	円　形	0.7	0.6	1.38				SJ157
74	X-18	円　形	1.1	1.0	1.2				SB63・SK283
75	X-15	円　形	1.44	1.34	1.4	炭化穀物・鞴の羽口			SJ179・SE78
76	Y-16	楕円形	1.6	1.2	1.34				SB63・73
77	X-18	円　形	0.8	0.74	1.5	曲物			
78	X-15	円　形	1.3	1.3	1.0	炭化穀類			SE75
79	V-15	円　形	0.4	0.3	1.4	甕・甑・須恵壺・板			
80	Y-14	円　形	0.52		1.45				
81	X-14	円　形	1.8	1.5	2.2	常滑甕・箸・下駄	中　世		SK302・P763
82	Y-18	円　形	1.04	1.0	0.82		古墳？		SJ195・P746
83	X-13	円　形	1.06	0.96	1.54		中世？		SE85
84	W-16	円　形	1.0	1.0	1.4				
85	W・X-13	円　形	2.3	2.0	2.0	常滑甕	中　世		
86	WX13・14	円　形	1.3		1.0	高坏脚部			
87	Z-19	円　形	1.3	1.14	1.12				SJ201・202
88	Z-19	楕円形	0.82	0.57	1.1	甕・甑・坩・箸	古　墳		
89	AA-19	円　形	1.37		1.74	坏		SD38	
90	AA-20	円　形	0.89	0.85	1.09	常滑甕	中　世	SE91	SK318
91	AA-20	円　形	1.17	1.1	1.56	加工木材	中　世		SK318・SE90
92	Z-18	円　形	0.8	0.73	1.2				
93	AA-20	円　形	1.3	1.22	1.57	中世常滑甕・片口鉢	中　世		
94	AA-18	円　形	1.37	1.3	1.5	青磁・高坏	中　世		SJ216
95	AA-20	楕円形	1.2	0.95	1.14				
96	Y-17	円　形	1.06	1.02	1.36				SJ197
97	AB-19	円　形	1.02	1.01	1.56				
98	AA-17	円　形	2.06	2.02	1.32	須恵坏・椀・内黒等	古　代		SJ259
99	AB・AC18	円　形	1.34	1.3	2.3	坏			SJ239
100	AA-17	円　形	1.7	1.48	1.0	須恵坏・椀・瓢箪			SK336
101	Y-17	円　形	0.74	0.68	1.56			SJ223	
102	AA-17	円　形	0.54	0.5	1.3				
103	AB-16	円　形	0.74	0.64	1.2				
104	AA-18	円　形	0.76	0.74	1.74	甕	古　代		
105	AC-20	楕円形	1.1	0.94	1.8	須恵坏・高台坏	古　代		SB84
106	AA-19	円　形	0.9	0.78	1.1				SJ229・239
107	AC-18	円　形	1.06	1.02	1.05				SJ263
108	AD-18	円　形	1.63	1.39	(1.6)		中世？		SJ289・SE110
109	AD-17	円　形	1.1	1.06	1.65				SJ302
110	AA-18	円　形	1.28	1.1	1.6	須恵坏	古　代	SE108	
111	AC19・20	楕円形	0.82	0.6	1.4			SK357	SJ264・265

第７表　井戸跡計測表(3)

番号	位　置	形　態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
112	AC-20	円　形	0.56	0.5	(1.4)			SK357	
113	Y-15	楕円形	0.48	0.4	(1.8)	馬歯			SD82
114	AC-22	円　形	0.8	0.73	1.8				
115	AC-21	円　形	0.8	0.76	1.67				
116	AD-17	円　形	1.9	1.64	1.2	須恵坏・甕			SJ302・311
117	AD-18	円　形	1.4	1.34	1.3				
118	AD-18	楕円形	1.56	1.4	1.84	須恵蓋	古　代		SJ312
119	AD-19	円　形	0.86	0.84	1.54				
120	AE-19	円　形	1.58	1.5	2.8	白磁器椀・木製品	中　世		SJ316・SE124
121	AD-21	円　形	0.64	0.6	1.4		中世？		
122	AD-22	円　形	1.6	1.46	1.36		中世？		SJ333・339
123	AD-22	円　形	0.7	0.65	1.21	木製品（建築部材）	中世？		SJ339
124	AE-19	円　形	0.82	0.72	1.28			SE120	SJ316
125	AD-18	円　形	0.84	0.81	(1.1)	青磁碗・須恵高坏	古代？		SJ312
126	AD-17	楕円形	0.77	0.5	1.3		中世？		SJ311
127	AC-22	円　形	0.8	0.76	1.3		中世？		
128	AC-22	円　形	1.3	1.2	1.35		中世？		
129	AD-22	円　形	1.27	1.2	1.42	須恵長頸瓶	古代？		SJ338・339
130	AE-22	円　形	0.85	0.82	1.22				SJ338
131	AD-22	円　形	0.66	0.56	1.53	坏・甕			SB97
132	AE-17	楕円形	1.0	0.78	1.44	坏・須恵椀			
133	AD-21	円　形	0.5	0.46	2.72				SJ340・P880
134	AD-21	長方形	0.78	0.4	1.66				SB96
135	AD-21	円　形	0.53	0.48	1.53				SJ340・P885
136	AD-21	円　形	0.46	0.4	1.36				
137	AC-22	円　形	0.5	0.44	1.36				
138	AD-21	円　形	0.54	0.46	1.36			SD85	
139	AD-20	円　形	0.44	0.4	1.42				
140	AD-20	円　形	0.64	0.62	1.3				
141	AE-21	円　形	0.44	0.42	1.94	壺			
142	AD-20	円　形	0.58	0.52	1.7			SJ300	
173	AA-17	円　形	0.86	0.7	1.08				
183	AC-19	円　形	0.44	0.4	1.62				
184	AB-20	円　形	0.52	0.44	1.3				
185	AA-19	円　形	0.56	0.5	1.44				
186	AB-17	円　形	0.74	0.72	1.54				
187	AB-17	円　形	0.44	0.42	1.78				
188	AE-19	円　形	0.46	0.4	1.74				
189	AB-17	円　形	0.66	0.66	1.44				
190	AB-17	円　形	0.4	0.38	1.65				
192	X-18	円　形	0.48	0.48	1.55	木製壺			
193	X-18	円　形	0.42	0.4	1.74	板状木製品			
194	AC-18	円　形	1.36	1.28	2.3				
195	AC-20	円　形	0.54	0.48	1.5			SJ298	
249	U-13	円　形	1.2		1.0		中　世		

(5) 性格不明遺構

性格不明遺構は、6基検出した。遺構の形状は土壙と同様で、本来は、土壙として一括して扱うべき遺構であったが、覆土中に焼土・炭化物を多量に含み、また、土器片が多量に出土した遺構もあった。

このため、遺構の性格は不明であったが、他の土壙とは区別する意味で、性格不明遺構（SX）と呼称し、番号を付した。

第3号性格不明遺構（第516図・第518図）

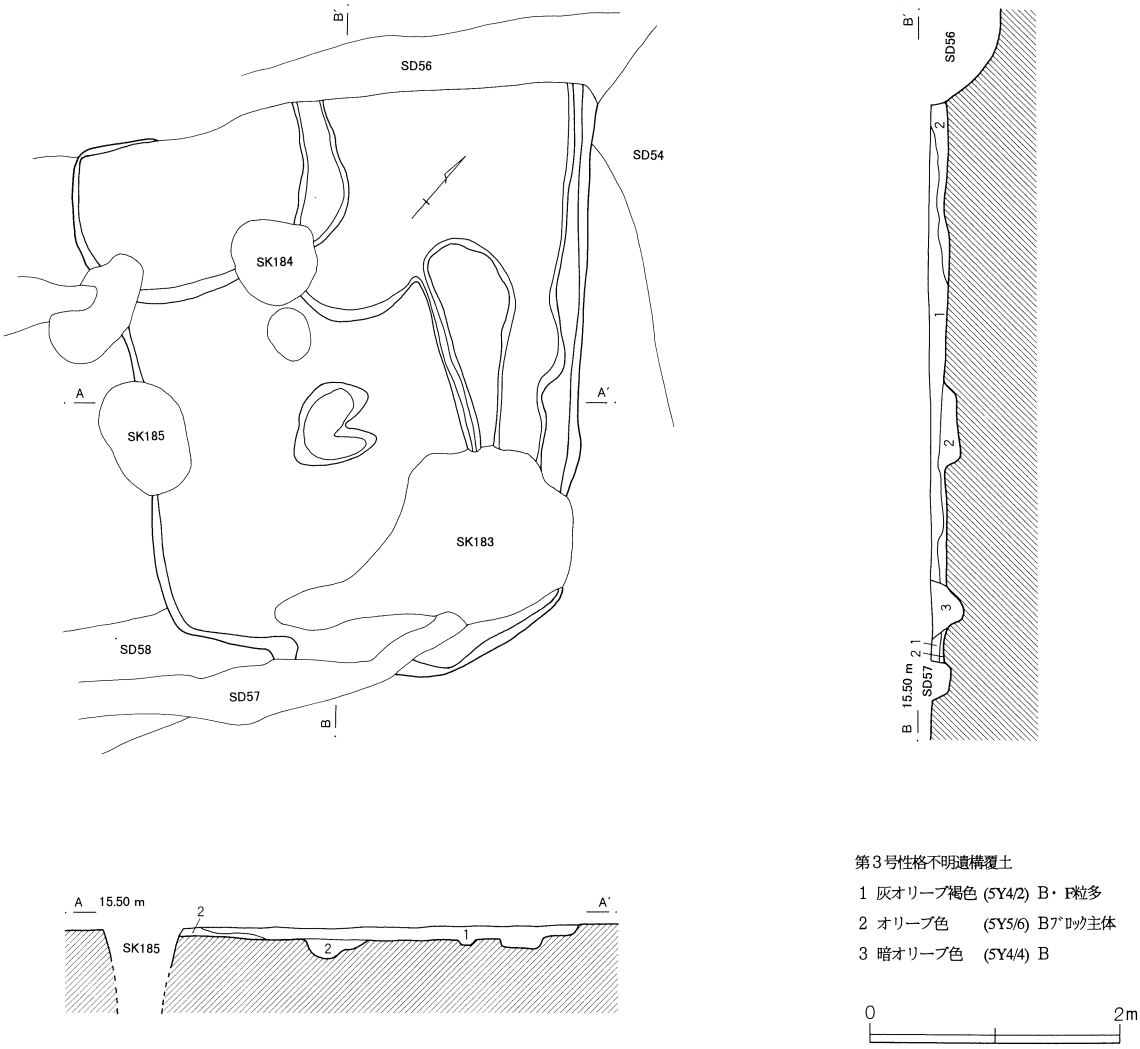
Q・R-9グリッドから検出した。遺構の長軸の一端は、56号溝跡に壊されていたため、遺構の全体は検出できなかった。

平面の形状は、歪んだ長方形で、短軸の南東辺から、徐々に開く形状であった。遺構の規模は、長軸は残っている部分で4.5m、短軸3.7m、深さ0.1～0.2mであった。主軸方位はN-40°-Wであった。一見竪穴住居跡風であったが、カマド・炉跡が検出できず、また底面には凹凸があり、竪穴住居跡とは考えにくい。

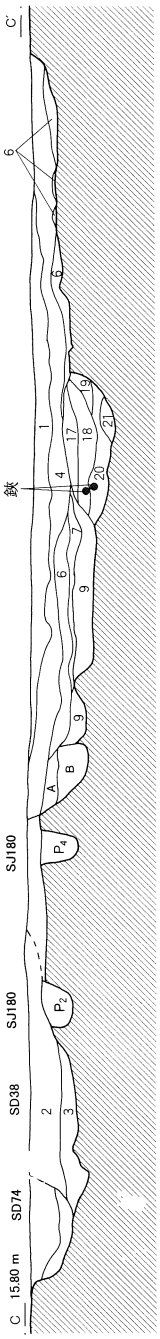
遺構は、183・184・185号土壙、56・57号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、183号土壙・56・57号溝跡に壊されていたことを確認したが、他の遺構との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器坏・甑、湖西産と思われる須恵器長頸瓶が出土した。

第516図　第3号性格不明遺構



第517図　第８号性格不明遺構



第38号溝跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) R・C粒 白色軽石状粒子（浅間B軽石か？）

2 黒褐色 (10YR3/2) F粒 R 粘性有

3 褐灰色 (10YR4/1) F粒 RC 2層より粘性有

第8号性格不明遺構覆土

4 灰黄褐色 (10YR4/2) R F粒多 粘性有

5 褐色 (10YR4/4) 砂層 F粒多 粘性無

6 褐灰色(10YR4/1) R F・B多 粘性やや有

7 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂層 F粒多

8 褐灰色(10YR4/1) 砂多 F粒多 粘性有

9 褐灰色 (10YR5/1) 砂多 R 下部にF多

10 黄褐色 (10YR5/6) 砂質 R

11 灰黄褐色 (10YR4/2) R微量 粘性やや有

12 褐灰色(10YR4/1) 粘土質 B多 粘性有

13 黒褐色 (10YR3/1) 粘土質 F多 粘性有

14 鈍黄褐色 (10YR4/3) F・B多 粘性やや有

15 褐灰色 (10YR4/1) 砂質 B・F多

16 褐灰色 (10YR4/1) 粘土質 B粒

17 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質 RB多 F粒

18 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質 R微量 F

19 褐灰色 (10YR4/1) 砂質 F粒多 R

20 褐灰色 (10YR4/1) 粘土質 R不含 F

21 褐灰色 (10YR5/1) 粘土質 砂含 F多 R

SX-8に壊されるピット

A 黒褐色 (10YR3/1) C多

B 暗褐色 (10YR3/4) Bﾌﾞﾛｯｸ多

SD74に壊される落ち込み

ア 暗褐色 (10YR3/4) R少

イ 黄褐色 (10YR5/6) Bﾌﾞﾛｯｸ状

ウ 黒褐色 (10YR3/2) R・C微量

0 2m

第8号性格不明遺構（第517図・第518図）

Z-15・AA-15グリッドから検出した。

平面の形状は、不整円形で、径は、8m～9m、深さは、遺構確認面から50cm～70cmであった。

壁面および底面には、径1m～2m、遺構確認面から深さ70cm～1m前後の、土壙状の落ち込みが連続して掘り込まれていた。

この土壙状の落ち込みは、遺構確認面の黄褐色シルト層を掘り込み、一部は、その下層の黄灰色シルト層まで達していた。

これらのシルトは、竪穴住居跡の貼床や、掘立柱建物跡の掘り方の充填に一般的に使われていたことから、8号性格不明遺構は、こうしたシルトを採掘するために掘り込まれた可能性もある。

遺構の覆土は、21層に分層できた。ただし、1～3層については、8号性格不明遺構よりも新しい38号溝跡の覆土である。

このうち、最上層で確認した1層は、8号性格不明遺構の上面も覆っていた。38号溝跡の2層以下、および8号性格不明遺構4層以下の覆土が、粘性のある黄灰色あるいは褐灰色シルトを主体としているのに対し、1層は、締まりのある黒褐色土であった。下層との境は明瞭で、クラック状になっている部分も認められ、明らかに下層とは区別できた。このことから、1層は、8号性格不明遺構・38号溝跡埋没後に堆積した、別の堆積層と考えられる。

8号性格不明遺構の覆土は、4層から21層となる。粘性のある黄灰色あるいは褐灰色のシルトを主体とし、酸化鉄分、焼土粒子、地山(黄褐色シルト)ブロック等を含んでいた。また、5・7・10・15・18層は砂層であり、粘性のあるシルト層の間で検出した。

遺構は、179・180号竪穴住居跡、38・74号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、179・180号竪穴住居跡より新しく、38・74号溝跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・蓋・長頸瓶・甕等、奈良時代（8世紀）を中心とした時期の遺物が出土した。また鉄製品として鈸が出土した。

1は、土師器坏である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。2は、台付甕の脚部の破片である。裾部は、やや外反気味に広がる。

3～5は須恵器坏である。底部の調整は、3のみ全面回転ヘラケズリ、他は周辺部ヘラケズリであった。3点とも、胎土に白色針状物質を含んでおり、南比企産と思われる。

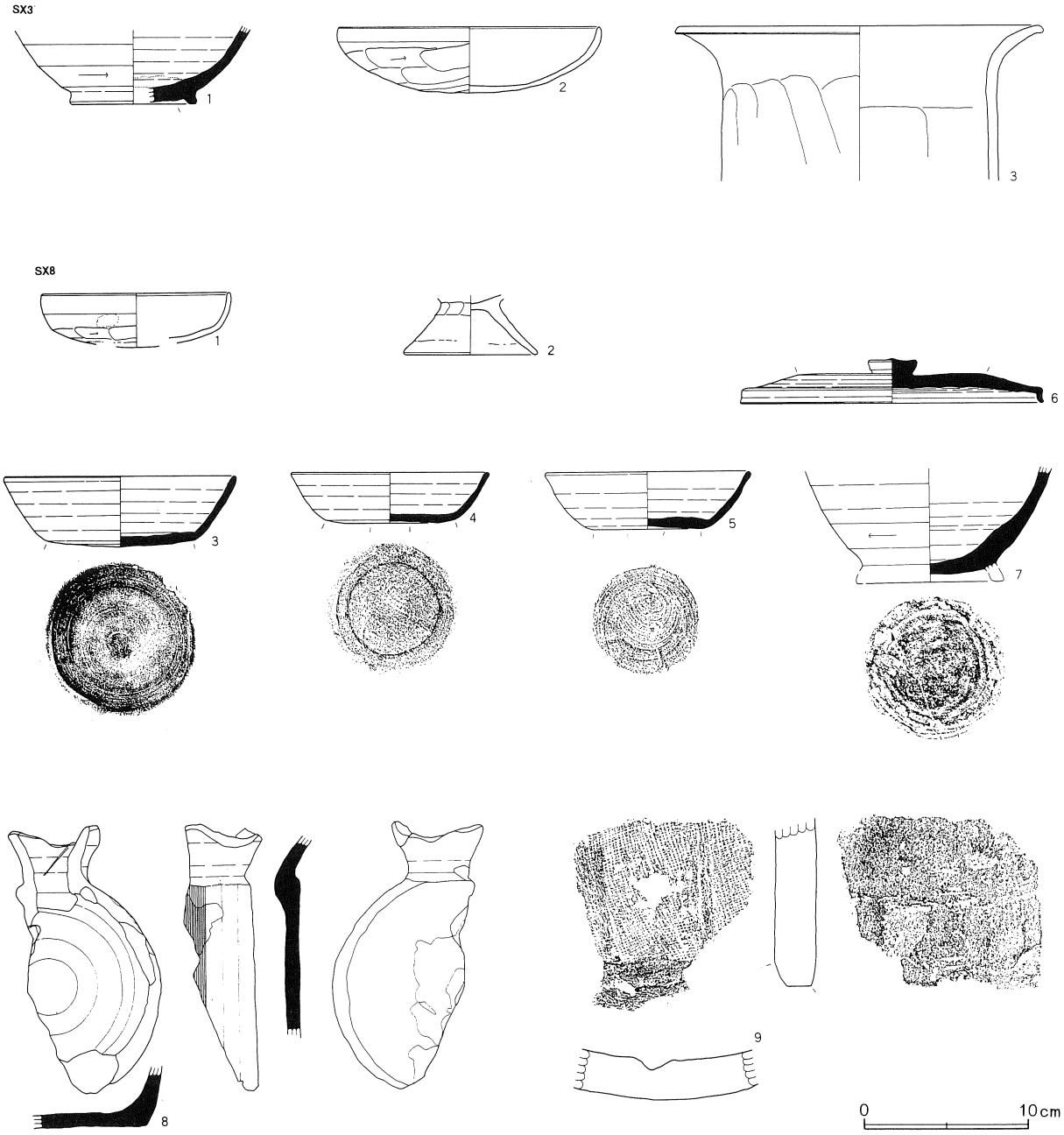
6は、南比企産と思われる須恵器蓋である。

7は、長頸瓶と考えられるが、胴部以上と高台を欠損していた。

8は、提瓶と考えられるが、破片であり、全体像は不明である。取っ手の痕跡は確認できなかった。また外面及び割れ口には、漆が付着していた。

また、他に布目のある平瓦（9）が1点出土した。

第518図　第3・8号性格不明遺構出土遺物



性格不明遺構出土遺物観察表(1)

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　考
3－1	長　頸　瓶			(7.6)	BF	1	灰　白	40	湖西
3－2	坏	(16.0)	4.0		BDEHJ	3	橙	25	
3－3	甕	(22.0)			ABDEFHJ	2	橙	30	
8－1	坏	(11.6)			BDJ	2	橙	40	
8－2	台　付　甕			8.3	ABDEHJ	2	橙	90	
8－3	坏	14.2	4.3	9.0	ABFIJ	2	灰	70	南比企　全面ヘラ
8－4	坏	12.2	3.1	8.0	ABFI	2	灰	80	南比企　周辺ヘラ
8－5	坏	12.4	3.5	6.7	ABFIJ	2	灰	70	南比企　周辺ヘラ
8－6	蓋	18.4	2.7		BFIJ	2	灰	60	南比企
8－7	長　頸　瓶				ABDFJK	2	灰	80	不明
8－8	提　　瓶				ABJK	2	灰	30	末野？
8－9	平　　瓦				ABJ	2	灰	破片	凹面布目痕

第9号性格不明遺構（第519図～第522図）

Z・AA-15グリッドから検出した。遺構は322・325号土壙に壊されていた。

遺構の平面の形状は不整形で、数基の土壙が重複しているようにも見えるが、覆土は連続していた。

遺構の規模は、長径5.8m、短径4.2mであった。深さは、0.8m～1.0mであった。

覆土は、黒褐色土を主体とし、焼土、炭化物、灰を多量に含み、北から南へやや傾斜して堆積していた。また、特に3層は、炭化物と灰からなり、一部炭化物と灰が互層となっていた。また、4層は、焼土層で、一部炭化物を含み、互層となっている部分もあった。

遺物は、土師器、須恵器の破片が、3層の上面付近から多量に出土した。概ね覆土の堆積状況と同じように、北から南へ傾斜していた。

遺構は、覆土の状況から、この場で火を焚いた可能性がある。遺構の性格は、土器焼成遺構を想定することもできるが、出土遺物には、小破片が多く、土師器と須恵器が共伴し、土師器の坏類には、複数の系統が認められること等から、土器焼成遺構とは考えにくい。

また、遺物は、焼土・炭化物層の上面から出土しており、また、土器に、二次焼成を受けたものが少ないことから、この場で、木材等を燃やした後、一括して投げ込まれたものと思われる。

出土遺物は、土師器坏・甕・甑、須恵器坏・蓋・甕・フラスコ型長頸瓶等が出土した(1～50)。また、鉄製品として、棒状不明品が出土した。

土師器坏は、口縁部の破片が358点出土した。このうち、図示可能なものは、30点（1～30）であった。器形の特徴から、幾つかに分類できた。

1～9は、口縁部が内屈する土師器坏である。この種の口縁部片は、128点出土した。口径10cm未満のもの（1・2）、10cm～13cm未満のもの（3～7）、14cm以上のもの（8・9）と、大きく3つに分けられた。

口縁端部は横ナデ、口縁以下は、ヘラケズリ調整される。概ね無調整部をもたず、やや古い様相を示す。

10～13は、口縁部に段を有する土師器坏である。この種の破片は、81点出土した。器高にばらつきがあるものの、口径は10cm～11cm以下と小型である。

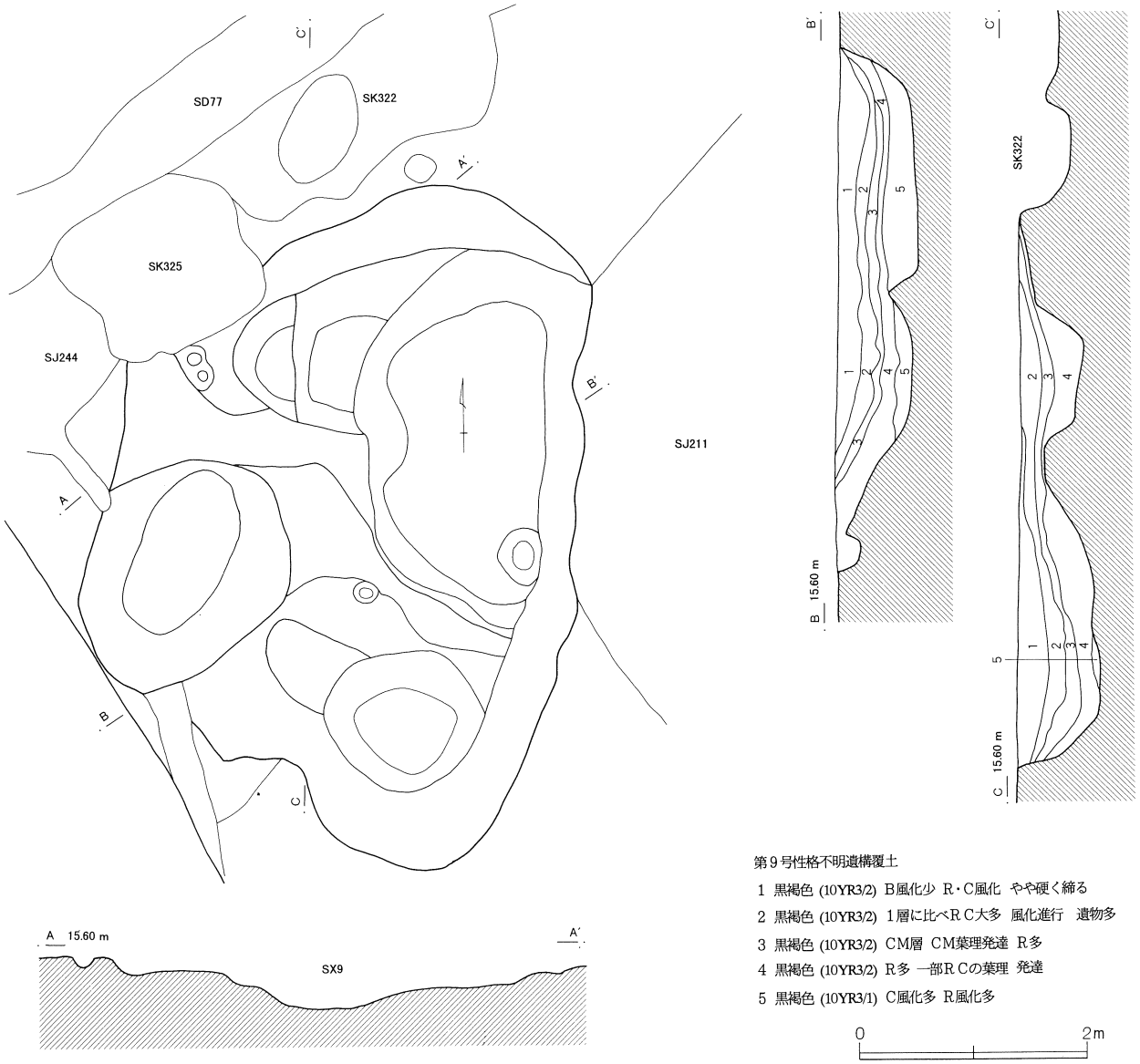
14～21は、丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を有する土師器坏である。口縁端部は、短く立ち上がる。この種の破片は、65点出土した。口径は全て10cm以下と小型である。体部は、器面が荒れ、調整は不明瞭であったが、下半部はヘラケズリ、上半部は指押えと思われ、凹んでいた。

22～25は、古墳時代の鬼高式の須恵器模倣坏の系譜を引く坏である。この種の口縁部の破片は、22点出土した。全て口縁端部に沈線を有し、赤彩されたものと、赤彩されないものに分けられた。

26は、口縁部が緩いS字状となる、いわゆる比企型坏である。内面口縁端部には沈線を有し、赤彩が施される。この種の破片は22点出土した。

27は、底部平底気味、口縁部は直線的に立ち上がる土師器坏である。口縁端部に沈線を有し、赤彩が施さ

第519図　第９号性格不明遺構(Ⅰ)



れていた。この種の破片は５点出土した。

28は、椀型の坏である。内面口縁端部に沈線を有し、赤彩が施される。この種の破片は、５点出土した。

29・30は、内面に暗文の施された土師器坏である。口縁部と体部の境に稜を有し、口縁端部は短く立ち上がる。椀型の深身の坏と、浅身の坏がある。この種の暗文坏は、35点出土した。

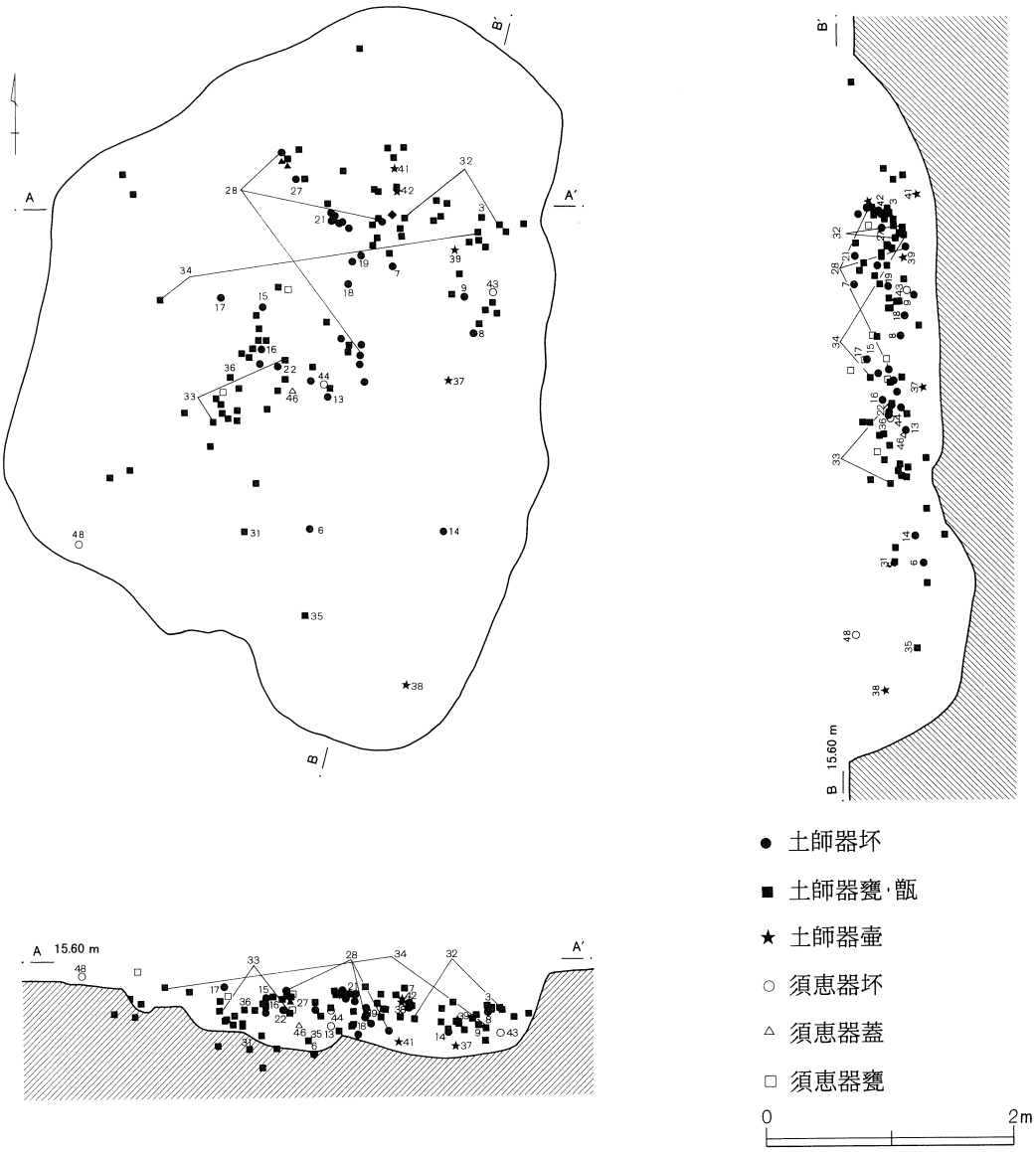
31～34は、土師器甕である。全て胴部下半部を欠損していたが、長胴となると思われる。口縁部は、内外面とも横ナデ、胴部は、外面は横または縦方向のヘラケズリ、内面はナデ調整が施されていた。

35・36は、土師器甑である。２点とも胴部下半部を欠損していた。口縁部は、内外面とも横ナデ、胴部は、外面は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ調整が施されていた。

37～41は、土師器壺である。５点とも、胴部または底部を欠損していた。口縁部は、内外面とも横ナデ、胴部は、外面は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ調整が施されていた。

42は、土師器の小型壺である。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁は僅かに外反しながら立ち上がる。口縁部と胴部の境は、稜が明瞭である。調整は、口縁部は、内外面とも横ナデ、胴部は、外面は横方向のヘラケズリ、内面はナデ調整が施されていた。

第520図　第９号性格不明遺構(2)



43・44は、須恵器坏である。坏は、蓋受の立ち上がりを有するもの（43）と、蓋受を持たないもの（44）がある。

43は、丸底で、蓋受部分はU字形となっていた。胴下半部はヘラケズリされていた。

44は、蓋受のない坏である。口径は8.0cmと小型である。口縁部は直線的に立ち上がり、底部はやや丸底気味である。底部はヘラケズリ調整される。

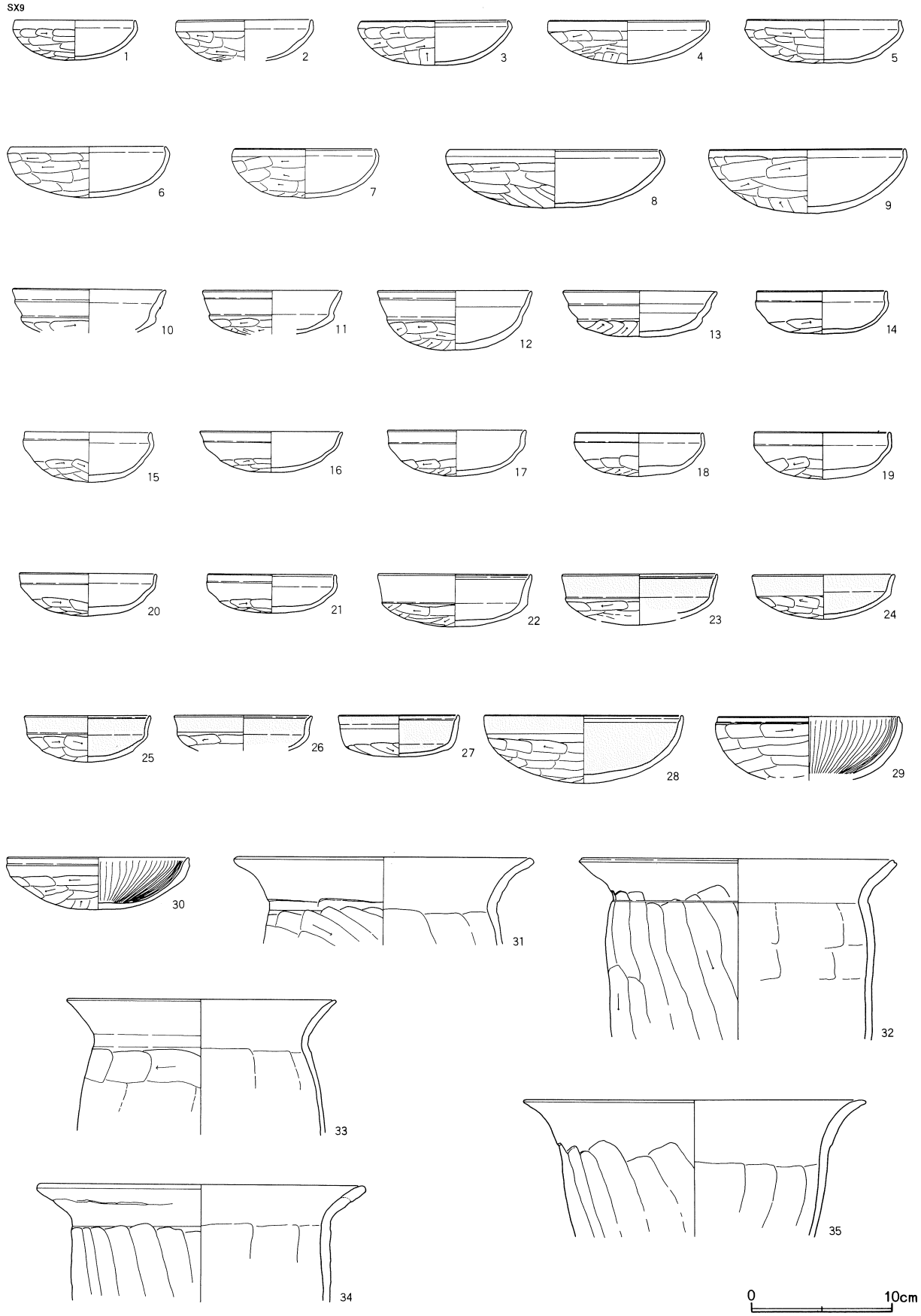
坏の破片は、この他に10点出土したが、在地産のものは含まれず、全て搬入品であった。43は湖西産、44は産地の特定はできなかった。

45～48は、須恵器蓋である。蓋は、かえりを持たないもの（45・46）と、身受のかえりを有するもの（47・48）がある。口径は、４点とも10cm以下と小型である。蓋は、全て湖西産と思われる。蓋の破片は、この他に12点出土したが、在地産のものは含まれず、全て搬入品であった。

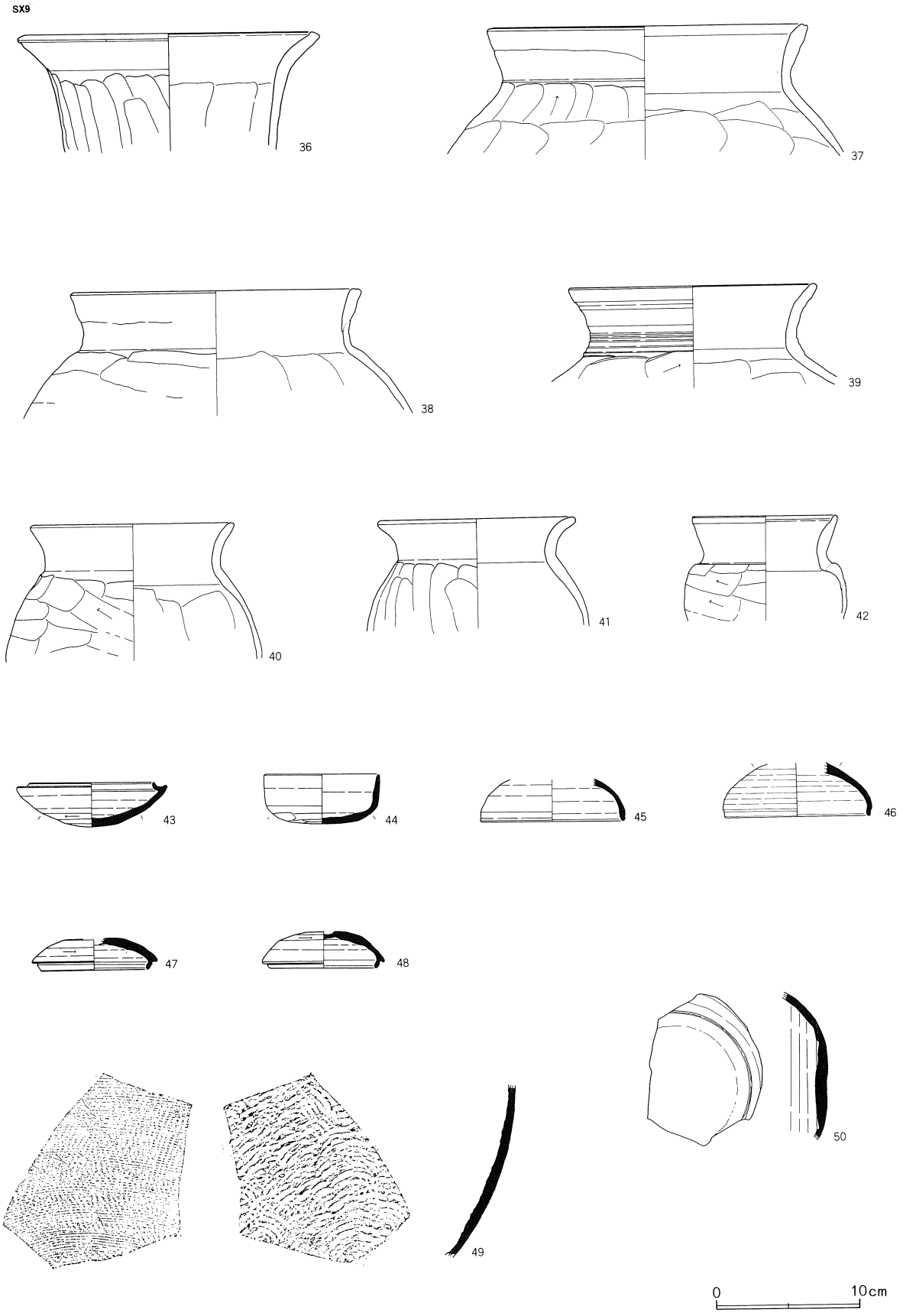
49は、須恵器甕である。胴部の破片である。外面は、タタキの後、横方向にカキメが施される。内面には、青海波文が認められる。須恵器甕の破片は、この他に22点出土したが、在地産の甕は含まれず、全て搬入品であった。

50は、フラスコ形長頸瓶の胴部の破片である。胎土の特徴から、湖西産と考えられる。

第521図　第９号性格不明遺構出土遺物(Ⅰ)



第522図　第９号性格不明遺構出土遺物(2)



性格不明遺構出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
9-1	坏	(8.6)	2.9		BDEHJ	3	橙	40	
9-2	坏	(9.6)			BDEHJ	2	鈍橙	20	内屈
9-3	坏	10.6	3.2		BDHIJ	2	橙	100	内屈
9-4	坏	(11.5)	3.1		BDEHJ	2	橙	20	内屈
9-5	坏	(10.8)	3.1		BDEJ	2	橙	30	内屈
9-6	坏	(11.0)	3.4		BDEHJ	2	橙	60	内屈
9-7	坏	(10.0)	3.5		BDEJ	2	橙	40	内屈
9-8	坏	(15.0)	4.1		BDEFHJ	2	橙	40	内屈
9-9	坏	(14.0)	4.6		BDEJ	2	浅黄橙	50	内屈
9-10	坏	(11.0)			BDEJ	3	鈍黄	15	有段
9-11	坏	(9.8)			BDJ	3	黒褐	20	有段
9-12	坏	10.9	4.2		BDEHJ	3	橙	60	有段
9-13	坏	10.8	3.3		BDHJ	3	鈍黄橙	60	有段
9-14	坏	9.2	3.1		BDEJ	3	橙	100	
9-15	坏	9.0	3.6		BDEJ	4	橙	60	器面荒れ
9-16	坏	10.2	2.9		BDEJ	4	橙	70	器面荒れ
9-17	坏	9.8	3.3		BDEJ	4	橙	70	器面荒れ
9-18	坏	(9.0)	3.1		BDEJ	4	橙	60	
9-19	坏	9.6	3.4		BDEJ	4	浅黄橙	60	器面荒れ
9-20	坏	(9.7)	3.0		BDEJ	4	浅黄橙	60	器面荒れ
9-21	坏	(9.2)	2.8		BDJ	4	橙	60	器面荒れ
9-22	坏	(10.8)	3.8		BEKL	3	黒褐	50	
9-23	坏	11.0			BEJK	2	赤褐	30	赤彩 比企型影響
9-24	坏	10.1	3.2		BEJ	3	赤褐	50	赤彩
9-25	坏	9.0	3.3		BEJK	2	鈍褐	50	赤彩
9-26	坏	(9.8)			BEJK	2	浅黄橙	15	比企型？ 赤彩
9-27	坏	8.6	3.0		BEK	2	浅黄橙	40	赤彩
9-28	坏	14.0	4.8		BEK	2	赤褐	80	赤彩
9-29	坏	(13.0)			BDEJ	2	暗褐	20	暗文
9-30	坏	(13.0)	3.7		BDEJ	3	橙	25	暗文
9-31	甕	(21.0)			BDEHJ	2	明赤褐	20	
9-32	甕	(22.0)			ABDEHJ	2	明赤褐	40	
9-33	甕	(19.0)			BDEJ	3	橙	10	
9-34	甕	(23.0)			BEHJ	2	鈍橙	10	
9-35	甑	(24.0)			BDHJ	3	鈍橙	10	
9-36	甑	(20.0)			BDEH	2	橙	10	
9-37	壺	(22.0)			BDEJ	2	鈍褐	20	
9-38	壺	(20.0)			BDEJ	2	鈍褐	10	
9-39	壺	(17.0)			BDEF	2	鈍褐	20	
9-40	壺	(14.0)			BEH	2	鈍橙	30	
9-41	壺	(13.6)			BDEHJ	2	明赤褐	10	
9-42	壺	(10.0)			BE	4	オリーブ黒	10	
9-43	坏	8.8	3.0		BF	1	灰	95	湖西
9-44	坏	8.0	3.4		BF	1	青灰	60	湖西？
9-45	蓋	(10.0)			BFJ	1	灰	30	湖西
9-46	蓋	(10.0)			BFJ	1	灰	20	湖西
9-47	蓋	(8.8)			BF	1	青灰	40	湖西
9-48	蓋	(7.4)			BF	1	灰	70	湖西？
9-49	甕				BJ	1	灰	破片	
9-50	長頸瓶				B	1	灰	破片	湖西 フラスコ形

第10号性格不明遺構（第523図～第525図）

AC-21・22グリッドから検出した。遺構は、270・306・321号竪穴住居跡を壊していた。

遺構平面の形状は、不整形で、方形の土壙と、楕円形の土壙が重複しているようにも見えるが、覆土は連続していた。全体的には、L字形であった。

遺構の規模は、長軸5.4m、短軸4.5m、深さは0.15m～0.7mであった。

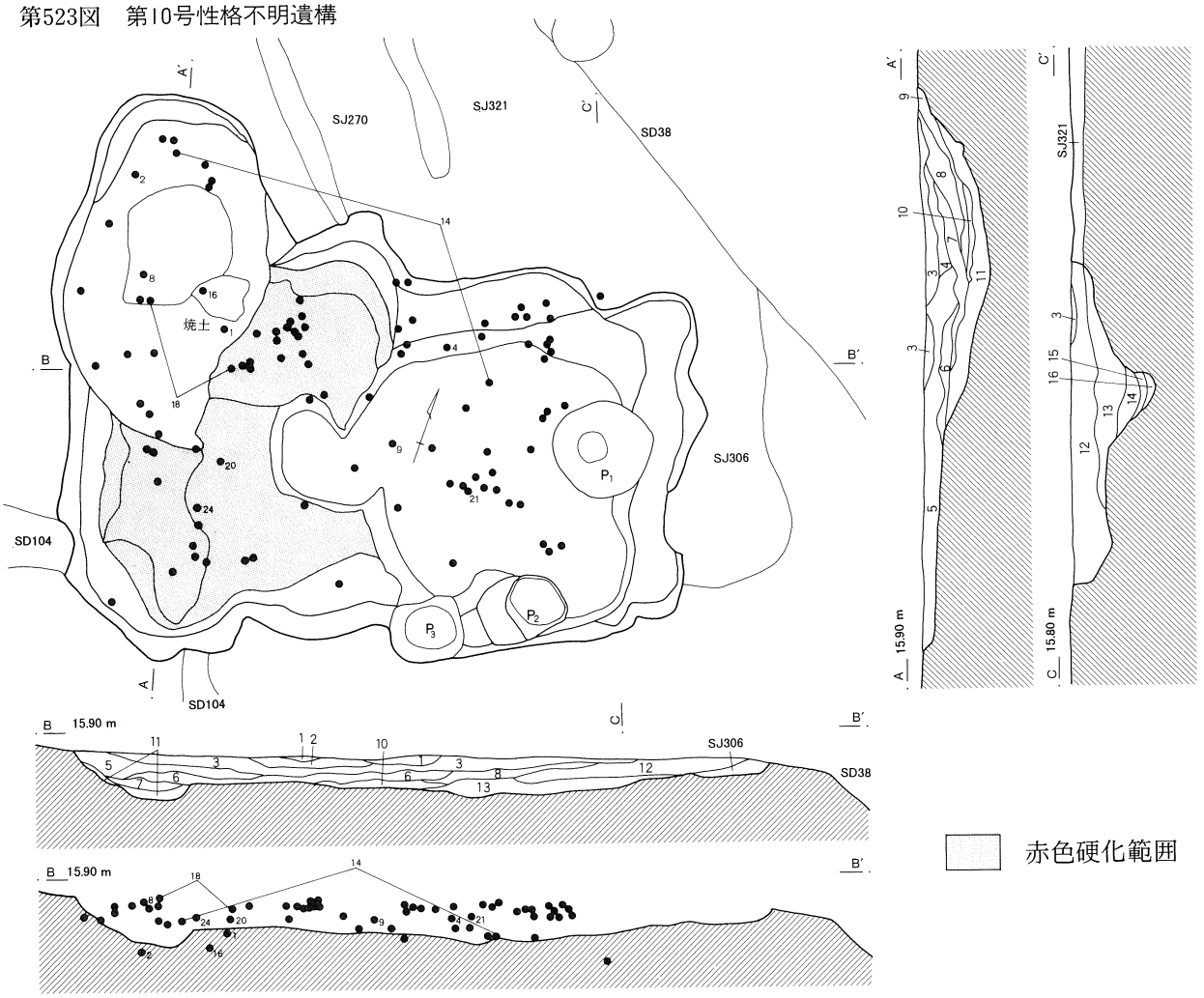
底面は、地山の黄褐色シルトであったが、硬く締まり、赤褐色に変質した硬化面も検出したが、被熱によるものではなく、酸化鉄分が集積しているような状況であった。

また、底面は概ね平坦であったが、遺構東側の楕円形になる部分では、土壙状に窪んでいた。しかし、硬化面は土壙状の窪みの11層上面まで広がっていたことから、遺構全体は概ね平坦で、11層は堀方であったと考えられる。

底面には、径50cm～80cm、底面からの深さが60cm前後のピットが3基掘り込まれていた。重複する他の遺構とも考えられたが、覆土は連続して堆積していた。

覆土には、焼土粒子・灰・炭化物を含んでいた。このうち、7・9層は炭化物を主体とした黒色土で、また、10層は、灰を主体とした褐灰色土であった。しかし、焼土は覆土中に粒子を含む程度で、焼土層は検

第523図　第10号性格不明遺構



第10号性格不明遺構跡覆土

1 鈍黄褐色 (10YR5/4) R
2 黒褐色 (10YR3/2) RC
3 鈍黄褐色 (10YR5/4) 混入粒子不含
4 灰黄褐色 (10YR4/2) R 粘性有
5 黒褐色 (10YR3/1) R 粘性有
6 灰黄褐色 (10YR4/2) B
7 黒色 (10YR2/1) MC多 M層
8 褐灰色 (10YR4/1) C粒 C層
9 黒色 (10YR2/1) MCR C層
10 褐色 (10YR5/1) M多 M層 締り無
11 褐色 (10YR4/6) 黒褐色ﾌﾞﾛｯｸ多
12 黒褐色 (10YR3/2) R多
13 褐灰色 (10YR4/1) M多 締り無
14 褐色 (10YR4/4) R 締り有
15 褐灰色 (10YR4/1) 褐灰色 M多 締り無
16 褐色 (10YR4/4) R 締り有

出できなかったため、この場で火を焚いていたかどうかは、明らかにできなかった。

出土遺物は、覆土中から、土師器・須恵器の破片が多量に出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏・甕・高坏、須恵器坏・蓋・長頸瓶など、21点であった。また、鉄製品として鏃・刀子・棒状不明品が出土し、図示不可能であったが、鉄滓も出土した。

1～15は、土師器坏である。1・2は、口縁部がやや内屈気味に立ち上がる。口縁部は横ナデ、体部外面はヘラケズリが施される。3・4は、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は横ナデ、体部下半はヘラケズリ、上半部には無調整部を残していた。このうち3は、P1から出土した。

5～9は、口縁部に段を有する坏である。口縁部は横ナデ、体部外面は、粗いヘラケズリが施されていた。

このうち、5は、P1とP2の出土遺物が接合した。

10・11は、内面全面と口縁部外面に赤彩され、内面口縁端部には沈線が認められた。

12は、口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部と体部の境に弱い稜を有する。

13～15は、椀状の坏である。13・14は内面に放射状の暗文が施されていた。

16は、土師器の高坏と考えられるが、脚部のみ残存していた。

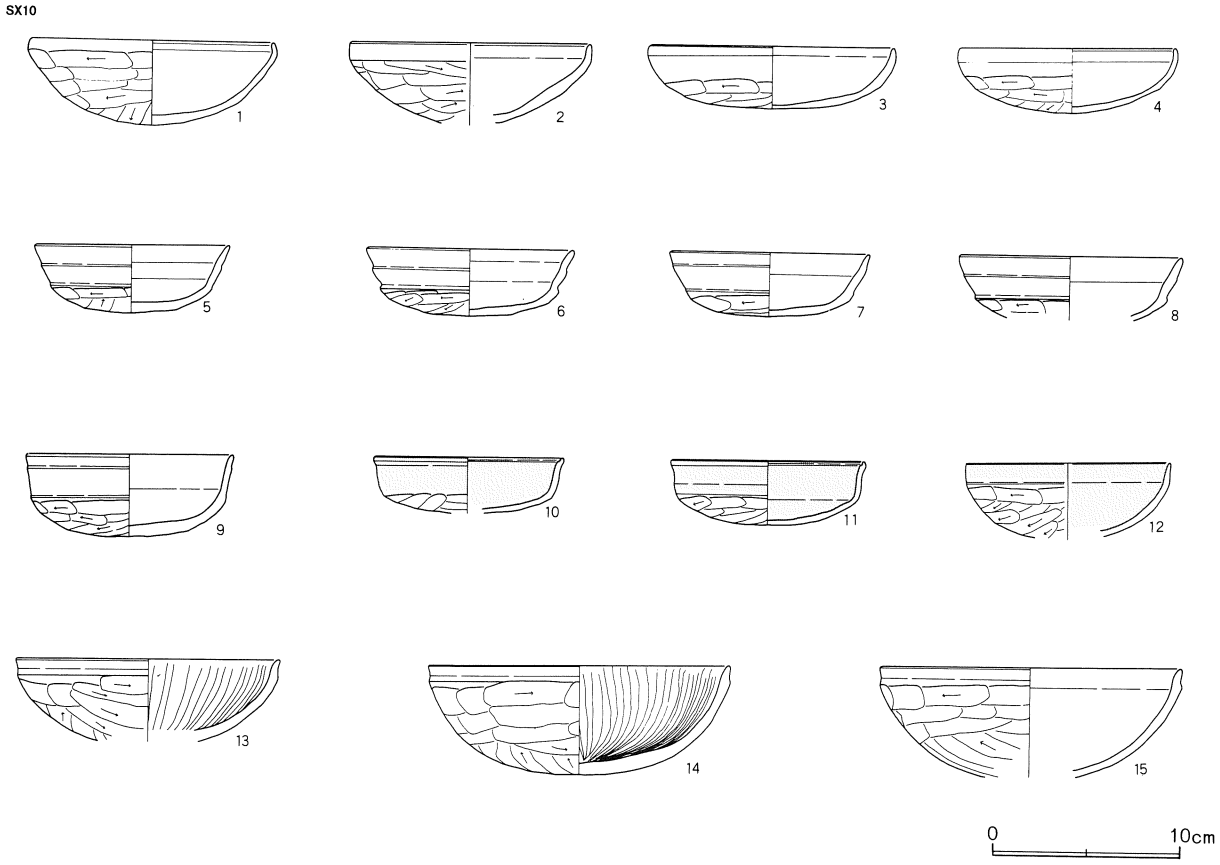
17は、土師器甕である。P2から出土した。体部は縦方向のヘラケズリが施されていた。

18は、須恵器坏である。丸底気味で、底部の調整は、全面回転ヘラケズリであった。胎土の特徴から、末野産と思われる。

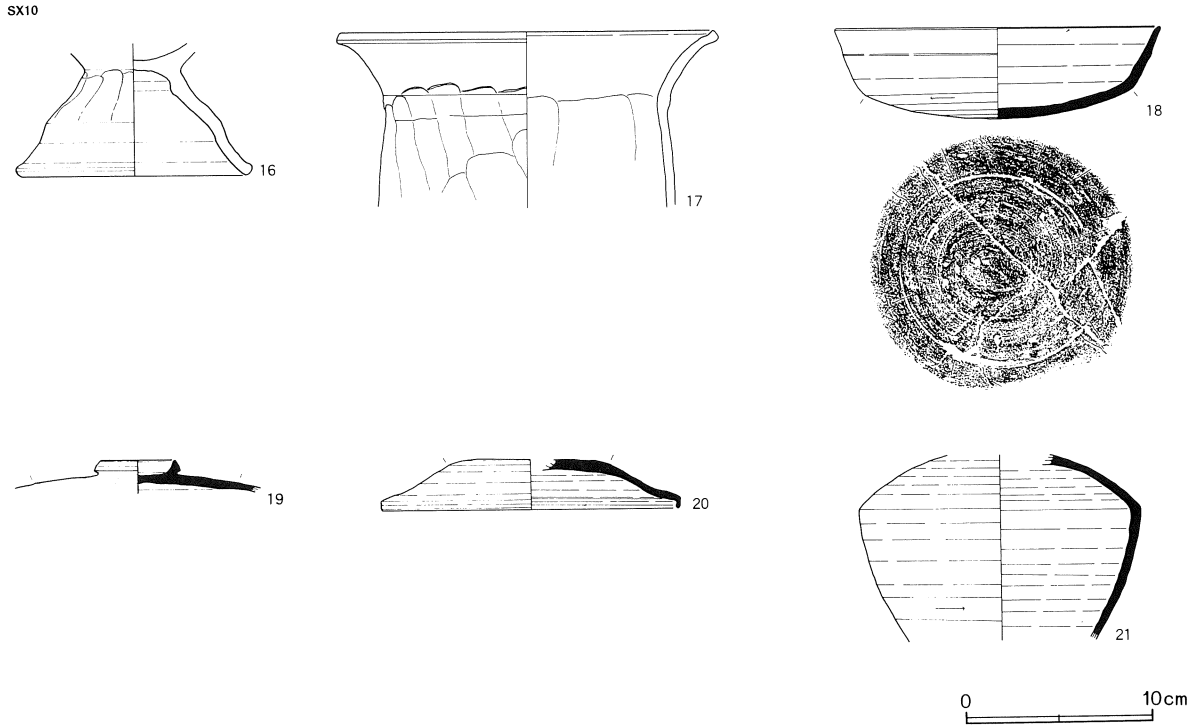
19・20は、須恵器蓋である。19は、天井部とつまみが残存していた。つまみの形状は環状で、胎土の特徴から、群馬産と考えられる。20は、つまみを欠損していた。胎土の特徴から、南比企産と考えられる。

21は、長頸瓶と考えられる。頸部以上と底部を欠損していた。硬質で、湖西産と考えられる。

第524図　第10号性格不明遺構出土遺物(1)



第525図　第10号性格不明遺構出土遺物(2)



性格不明遺構出土遺物観察表(3)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
10-1	坏	13.0	4.5		BDHJ	3	橙	60	内屈
10-2	坏	(13.0)			BDEFHJ	3	橙	20	
10-3	坏	13.0	3.3		BDEHJ	3	橙	70	内屈
10-4	坏	11.1	3.4		BDEHJ	2	橙	60	黒斑あり
10-5	坏	(10.6)	3.6		BCEFHJ	2	橙	50	有段
10-6	坏	(11.0)	3.6		BDJ	2	暗褐	15	有段
10-7	坏	10.6	3.4		BDEJ	2	浅黄橙	60	有段
10-8	坏	(11.8)			BDEHJ	2	浅黄	30	有段
10-9	坏	(11.4)	4.0		BDEHJ	2	鈍黄橙	40	有段
10-10	坏	(10.0)			BEFL	2	鈍褐	40	比企型 赤彩
10-11	坏	(10.4)	3.4		BEJ	2	鈍橙	40	比企型 赤彩
10-12	坏	10.8	4.0		BFIJ	2	赤褐	60	赤彩
10-13	坏	(14.0)			BDEFHJ	2	橙	15	暗文
10-14	坏	16.0	5.8		BDHJ	2	浅黄橙	70	暗文
10-15	坏	(16.0)			BDEHJ	2	浅黄	20	
10-16	高坏			12.0	BEHJK	3	暗赤褐	60	
10-17	甕	20.0			BDEHJ	2	鈍黄	60	
10-18	坏	17.4	4.9	14.3	BFHKL	3	灰オリーブ	80	末野
10-19	蓋				BFL	1	灰	15	群馬産？ つまみ径4.0cm
10-20	蓋	(15.8)			BIJ	1	灰	15	
10-21	長頸瓶				BF	1	灰白	15	湖西

第11号性格不明遺構（第526図・第528図）

AE—20グリッドから検出した。遺構は、322・328号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、長軸3.7m、短軸3.5m、深さ0.4～0.5mであった。

覆土は、炭化物、焼土粒子、灰を含む黒褐色土～暗褐色土が主体で、特に３層と５層は、焼土、灰、炭化物を多量に含んでいた。

出土遺物の多くは、３層と５層の上層である１層と２層から出土した。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏、須恵器坏・蓋・甕など６点であった。また、鉄滓が出土した。

１・２は、土師器坏である。鬼高式の模倣坏と考えられるが、口縁端部には、沈線が施されていた。また、１には、外面口縁部と内面全面に赤彩が施されていた。

３は、須恵器坏である。蓋受の立ち上がりを有していた。胎土の特徴から、湖西産と考えられる。

４は、須恵器蓋である。天井部はヘラケズリされていた。胎土の特徴から、湖西産と考えられる。

５・６は、須恵器甕である。同一固体と考えられるが、接合できなかった。

第12号性格不明遺構（第527図・第528図）

AE-19・20グリッドから検出した。遺構は、地震による噴砂に壊されていた。また、327号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は、長い逆三角形ないし逆台形であった。遺構の規模は、長軸3.5m、短軸2.0m、深さは0.35m前後であった。

遺構底面は、噴砂の攪乱によって不明瞭であったが、三角形ないし台形の広い辺に向かって、緩い段差を作りながら傾斜していた。

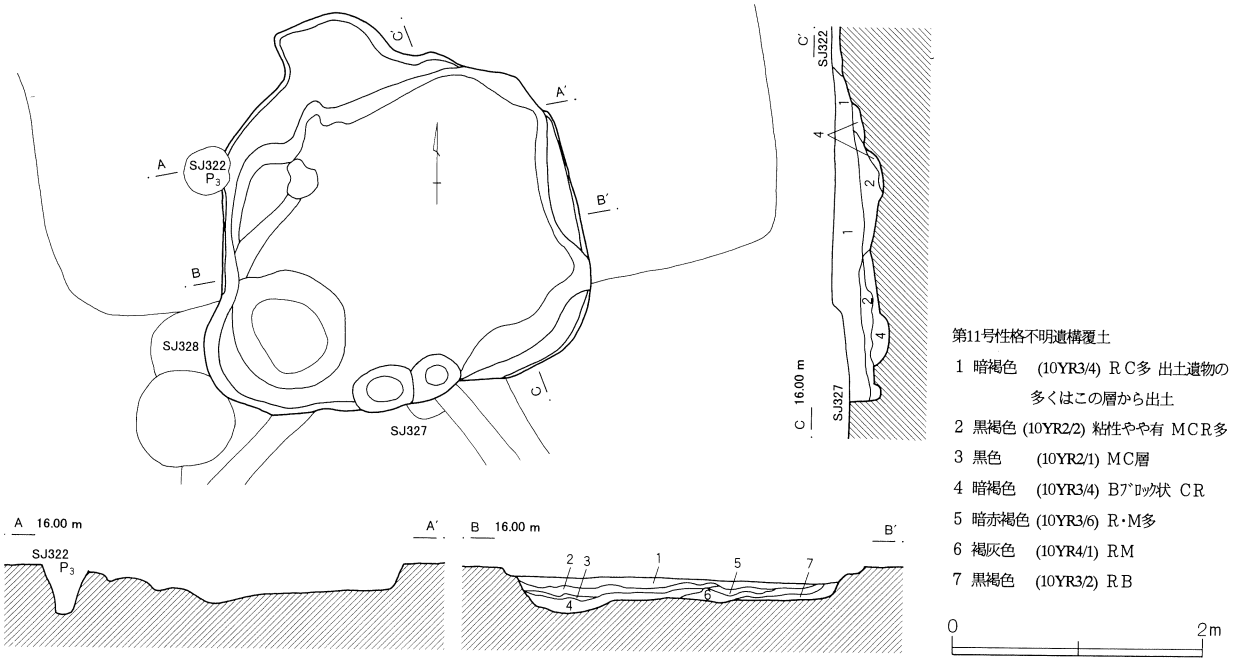
覆土には、焼土、炭化物、灰を多く含む黒褐色土が堆積していた（１層）。

遺構は、調査当初、土師器焼成遺構とも考えられたが、遺構底面および壁面には、焼けた痕跡は検出できなかった。

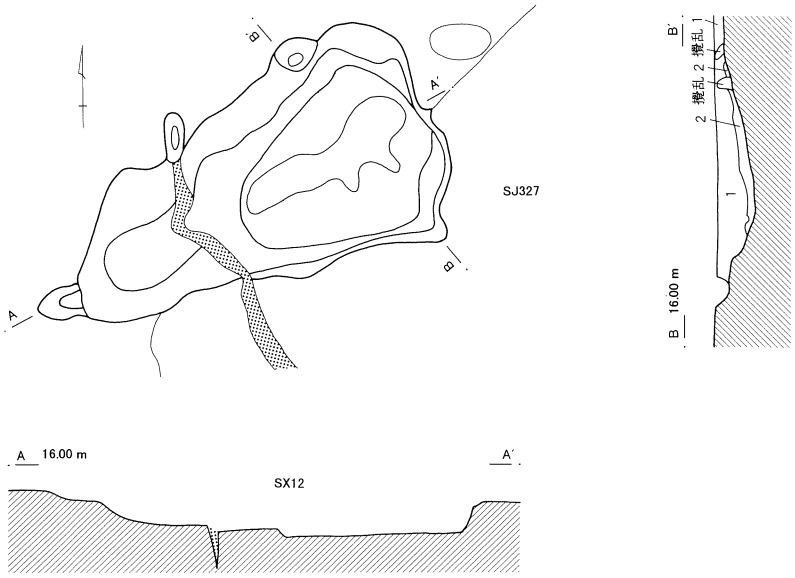
出土土器は、１層中から、土師器・須恵器片が多く出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏３点であった。また、覆土中より鉄滓、羽口が出土した。

１～３は、土師器坏である。３点とも、口縁部に段を有していた。体部には、粗いヘラケズリが施されていた。

第526図　第11号性格不明遺構



第527図　第12号性格不明遺構



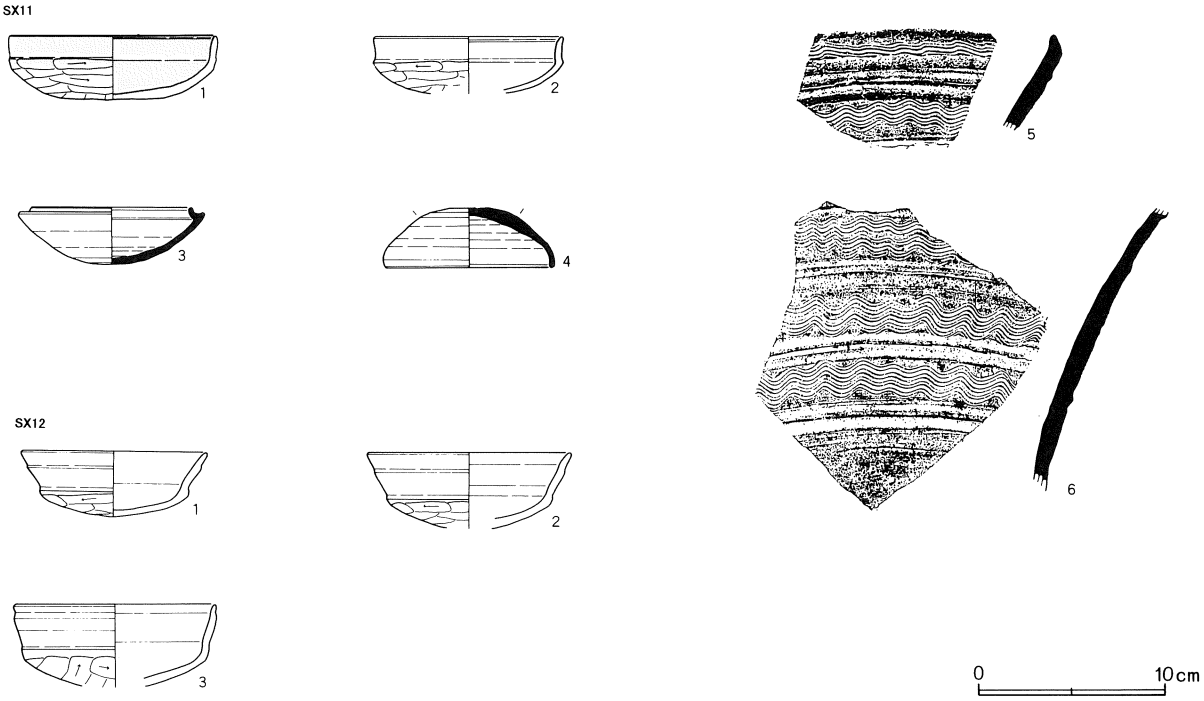
第12号性格不明遺構覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) Rﾌﾞﾛｯｸ・C・M多

2 褐色　(10YR4/6) B主体

0　2m

第528図　第11・12号性格不明遺構出土遺物



性格不明遺構出土遺物観察表(4)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
11-1	坏	(11.0)	3.4		BEK	2	橙	40	赤彩
11-2	坏	(10.0)			BEJ	2	鈍橙	20	
11-3	坏	(8.6)	3.1		BFJ	1	灰	20	湖西
11-4	蓋	(9.0)	3.1		BF	1	灰	50	湖西
11-5	甕				BFHL	1	暗灰	破片	
11-6	甕				BFHL	1	暗灰	破片	
12-1	坏	(9.8)	3.5		BDJ	2	鈍褐	40	
12-2	坏	(10.8)			BDJ	2	鈍褐	50	
12-3	坏	(10.8)			BDJ	2	浅黄橙	20	

(6) ピット

ピットは、総数で188基検出した。ピットについての事実記載は、遺物出土状況の説明を要するもの、遺構の性格上重要と考えられるもののみを記載した。

事実記載のないピットについては、一覧表を参照されたい。

また、土層断面の観察によって、柱痕が確認できたピットを多く検出した。これらは、床面、カマド等が失われた竪穴住居跡、あるいは掘立柱建物跡、柵列跡等、建物遺構の柱穴であった可能性がある。このため、ピット周辺の精査を試みたものの、建物遺構の検出に至らなかった。こうした遺構は、全て「ピット」と呼称し、番号を付した。

したがって、今回の報告で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡として報告した遺構以外にも、建物遺構が存在していた可能性は高いと考えられる。

ピット687（第529図）

R-9グリッドから検出した。遺構は184号土壙と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにすることができなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.45m、短軸0.34m、深さ0.5mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット688（第529図）

R-9グリッドから検出した。遺構は81号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、長方形で、長軸1.1m、短軸0.85m、深さ0.58mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット692（第529図）

T-10グリッドから検出した。遺構は38号溝を壊していた。

平面の形状は、円形で、直径0.38m、深さ0.32mであった。

出土遺物は、青白磁の合子の破片が出土したが、中世墓跡から出土したものと接合した。

遺構の時期は、中世と考えられる。

ピット693（第529図）

T-9グリッドから検出した。遺構は、ピット694・695に隣接していた。

平面の形状は、円形で、直径0.48m、深さ0.52mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（2層）。

遺構は、建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット694（第529図）

T-9グリッドから検出した。遺構は、ピット693・695に隣接していた。

平面の形状は、円形で、直径0.44m、深さ0.41mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（2層）。

遺構は、建物の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット695（第529図）

T-9グリッドから検出した。遺構は、ピット693・694に隣接していた。

平面の形状は、円形で、直径0.45m、深さ0.58mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（2層）。

遺構は、建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット696（第529図）

U-9グリッドから検出した。

平面の形状は、不整円形で、直径0.6m、深さ0.4mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（1層）。

遺構は、建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット697（第529図）

U-9グリッドから検出した。遺構は246号土壙を壊していた。

平面の形状は、円形で、直径0.58m、深さ0.27mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット698（第529図）

T-8グリッドから検出した。遺構は49・50号掘立柱建物跡に隣接していた。

平面の形状は、L字形で、長軸0.8m、短軸0.71m、深さ0.44mであった。平面の形状から、掘立柱建物跡のコーナー部分の掘り方の可能性もあったが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット699（第529図）

T-8グリッドから検出した。遺構は、71号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.51m、短軸0.44m、深さ0.4mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット701（第528図）

S-10グリッドから検出した。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.87m、短軸0.6m、深さ0.4mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（1層）。

遺構は、建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット702（第529図）

T-10グリッドから検出した。遺構は59号掘立柱建物跡、38号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.76m、深さ0.7mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット704（第529図）

U-10グリッドから検出した。遺構は120号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、長方形で、長軸0.86m、短軸0.71m、深さ0.8mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（1層）。

遺構は、建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット705（第529図）

U-10グリッドから検出した。ピット706に壊されていた。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.7m、短軸0.47m、深さ0.3mであった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

ピット706（第529図）

U-10グリッドから検出した。ピット705を壊していた。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.77m、短軸0.44m、深さ0.38mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット707（第530図）

X-12グリッドから検出した。遺構は126号竪穴住居跡・73号溝跡と重複していた。73号溝跡に壊されていたが、126号竪穴住居跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.72m、深さ0.81mであった。

出土遺物は検出できなかった。

第529図　ピット(1)

ピット687覆土
1 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) B多
2 黒褐色　　(10YR2/2) B少

ピット688覆土
1 黄褐色 (10YR5/6) B多
2 黒褐色 (10YR2/2) B少
3 黒褐色 (10YR3/1) Bﾌﾞﾛｯｸ多
4 褐色　(10YR4/6) Bﾌﾞﾛｯｸ

ピット692覆土
1 褐色 (10YR4/6) B・粘土ﾌﾞﾛｯｸ 締り有
2 褐色 (10YR4/6) B若干混入 R粒・ﾌﾞﾛｯｸ
3 褐色 (10YR4/6) Bやや多 粘性有

ピット693・694・695覆土
1　黒褐色 (10YR2/3) B 締りやや弱
2　黒褐色 (10YR2/3) B・C粒 若干R混入
3　暗褐色 (10YR3/3) B・C粒混入 締り有
3'暗褐色 (10YR3/3) Bやや多

ピット696・701・704覆土
1　黒褐色 (10YR2/3) B粒・ﾌﾞﾛｯｸ
2　暗褐色 (10YR3/3) B・C粒 締りやや弱
3　暗褐色 (10YR3/3) B多 締り有 粘性有
4　黒褐色 (10YR2/3) B混入 締り有
4'黒褐色 (10YR2/3) 4層に比べややB少

ピット697覆土
1 黒褐色 (10YR2/2) R粒・ﾌﾞﾛｯｸ・C粒
2 黒褐色 (10YR2/3) R粒・ﾌﾞﾛｯｸ多 締り弱

ピット698覆土
1 黒褐色　(10YR2/3) R若干・C粒
2 鈍黄褐色 (10YR2/3) B混入 締り有
3 黒褐色　(10YR2/2) 1層に比べややB多
4 褐色　　(10YR4/4) B・粘土ﾌﾞﾛｯｸ

ピット699覆土
1 黒褐色　(10YR2/2) C粒・R 締り有
2 鈍黄褐色 (10YR2/3) B・C粒・R若干
3 褐色　　(10YR4/4) B・粘土ﾌﾞﾛｯｸ

ピット705・706覆土
1 黒褐色　(10YR2/3) C粒・R
2 黒褐色　(10YR2/3) C粒・R
3 黒褐色　(10YR2/3) B・C粒・R
4 暗褐色　(10YR3/3) B 締りやや有
5 鈍黄褐色 (10YR4/3) Bやや多 締り有

0　2m

ピット708（第530図）

W-12グリッドから検出した。遺構は126号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.72m、深さ0.23mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット709（第530図）

U-10グリッドから検出した。遺構は119号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.37m、深さ0.27mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット714（第530図）

V-14グリッドから検出した。遺構は150号竪穴住居跡・265号土壙と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.5m、深さ0.1mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット717（第530図・第535図）

V-13グリッドから検出した。遺構は126号土壙に隣接していた。

平面の形状は、円形で、0.82m、深さ1.14mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（1層）。

遺構は、建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は土師器甕が6点出土した。

ピット718～720（第530図）

W-12グリッドから検出した。3基のピットは、直線的に等間隔に並んでいた。

平面の形状は、円形で、直径0.25～0.48m、深さ0.3m前後であった。

3基のピットからは、それぞれ柱痕が確認でき（2層）、覆土も共通していた。掘立柱建物跡、あるいは柵列の柱穴の可能性が高いが、この3基に伴うと考えられる他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット721・722（第530図）

V-11グリッドから検出した。2基のピットは、隣接していた。

平面の形状は、2基とも円形で、直径0.4m前後、深さ0.3m前後であった。

2基のピットからは、それぞれ柱痕が確認でき（1層）、覆土も共通していた。竪穴住居跡、掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高いが、この2基に伴うと考えられる他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット728（第530図）

W-15グリッドから検出した。遺構の上部は268号土壙に壊されていた。

平面の形状は、円形で、直径0.57m、深さ0.81mであった。

覆土は、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡の柱穴風で、柱痕を検出した（1層）。

遺構は、建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット729（第530図）

W-16グリッドから検出した。74号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は、長方形で、長軸0.82m、短軸0.7m、深さ0.43mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット731（第530図）

W-16グリッドから検出した。遺構は67号掘立柱建物跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.72m、深さ1.27mであった。

出土遺物は検出できなかった。

第530図　ピット(2)

ピット707・708覆土

1 暗褐色（10YR3/3）BR微含

2 黒褐色（10YR2/3）B多

3 黒褐色（10YR3/1）2層よりB多

4 褐色　（10YR4/6）B多

ピット717覆土

1 黒褐色（10YR2/3）R C 締りやや有

2 黒褐色（10YR2/2）シルト質粒子 締り有

3 黒褐色（10YR2/2）2層より粘性有

ピット718～720覆土

1 暗褐色（10YR3/4）B

2 黒褐色（10YR3/2）B

3 黒褐色（10YR3/1）B少

4 褐色　（10YR4/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット721・722覆土

1 暗褐色（10YR3/4）B

2 黒褐色（10YR3/2）B

3 黒褐色（10YR3/1）B少

4 褐色　（10YR4/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット728覆土

1 黒褐色　（10YR2/3）BF多 締り有

2 黒褐色　（10YR2/2）R 粘性有

3 鈍黄褐色（10YR4/3）Bﾌﾞﾛｯｸ

ピット734覆土

1 黒褐色（10YR2/3）R

2 暗褐色（10YR3/3）B 粘性有

3 暗褐色（10YR3/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット731覆土

1 暗褐色（10YR3/4）RB混入

2 褐色　（10YR4/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

3 暗褐色（10YR3/4）C粒 R混入 締り弱

4 暗褐色（10YR3/4）BR混入

5 暗褐色（10YR3/4）B多 締り有

ピット732覆土

1 黒褐色（10YR3/2）R 粘性有

2 黒褐色（10YR3/1）R多

3 暗褐色（10YR3/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット733・740覆土

1 黒褐色（10YR3/1）R

2 黒褐色（10YR2/3）R

3 暗褐色（10YR3/4）Bﾌﾞﾛｯｸ

4 黒褐色（10YR3/1）B（柱痕）

5 黒褐色（10YR3/1）R 粘性やや有（柱痕）

6 黒褐色（10YR2/3）B多（掘り方）

7 褐色　（10YR4/6）B多（掘り方）

0　2m

ピット732（第530図）

V-15グリッドから検出した。遺構は68号掘立柱建物跡に壊されていた。また、168号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.4m、短軸0.34m、深さ1.23mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット733・740（第530図）

W-14グリッドから検出した。2基の遺構は、重複していた。土層断面の観察の結果、ピット733の方が新しいことを確認した。

平面の形状は、不整形で、長軸0.8m前後、短軸0.5～0.6m、深さ0.6m前後であった。

ピット740からは、柱痕が確認できた（4・5層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他に柱穴は検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

ピット734（第530図）

X-16グリッドから検出した。遺構は、190号竪穴住居跡、72号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は、不整形で、直径0.65m、深さ1.42mであった。

出土遺物は、土師器坏、須恵器蓋の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

ピット741（第531図）

X-16グリッドから検出した。

平面の形状は、不整形で、長軸0.45m、短軸0.29m、深さ0.26mであった。

出土遺物は砥石が出土した。

ピット744（第531図）

Y-15グリッドから検出した。遺構は74号溝跡に壊されていた。

平面の形状は、円形で、直径0.35m、深さ1.15mであった。

覆土は、粘性のある褐灰色～黒褐色土であった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット746（第531図）

Y-17・X-17グリッドから検出した。遺構は82号井戸跡を壊していた。

平面の形状は、円形で、直径0.42m、深さ0.83mであった。断面の形状は、袋状で、底面付近が抉れた形状であった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット747（第531図）

X-16・W-16グリッドから検出した。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.38m、短軸0.32m、深さ0.32mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット748（第531図）

X-16グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.6m、深さ0.6mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット749（第531図）

X-16グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.6m、深さ1.48mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット750（第531図）

X-16グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.4m、深さ0.62mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット751（第531図）

X-16グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.48m、深さ1.39mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット752（第531図）

X-13グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.6m、深さ1.72mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット753（第531図）

X-13グリッドから検出した。ピット754･764に壊されていた。

平面の形状は、不整形で、直径0.48m、深さ0.43mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット754（第531図）

X-13グリッドから検出した。遺構は、ピット753・764と重複していた。753号ピットを壊していたことを確認したが、ピット764との新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.4m、深さ0.43mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット755（第531図）

X-13グリッドから検出した。

平面の形状は、方形で、直径0.4m、深さ0.25mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット756（第531図）

X-13グリッドから検出した。

平面の形状は、方形で、直径0.4m、深さ0.38mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット758（第531図）

X-13グリッドから検出した。遺構は77号掘立柱建物跡・ピット759に壊されていた。

平面の形状は、円形で、直径0.5m、深さ0.72mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット759（第531図・第535図）

X-13グリッドから検出した。遺構は77号掘立柱建物跡･ピット758と重複していた。758号ピットを壊していることを確認したが、77号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.53m、深さ0.43mであった。

出土遺物は須恵器高盤が出土した。

ピット760（第531図）

Y-19グリッドから検出した。遺構は、1号周溝状遺構と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.43m、深さ0.34mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット762（第531図・第535図）

Z-18グリッドから検出した。遺構は38号溝跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は、不整円形で、長軸0.44m、短軸0.38m、深さ0.5mであった。

出土遺物は須恵器坏が出土した。

ピット763（第531図）

X-14グリッドから検出した。遺構は301号土壙と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.42m、深さ0.57mであった。

遺構からは、柱痕を検出した（1・2層）。建物の柱穴と考えられるが、他に柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット764（第531図）

X-13グリッドから検出した。遺構はピット753･754と重複していた。ピット753を壊していたが、ピット754との新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、不整形で、長軸0.53m、短軸0.38m、深さ0.74mであった。

出土遺物は検出できなかった。

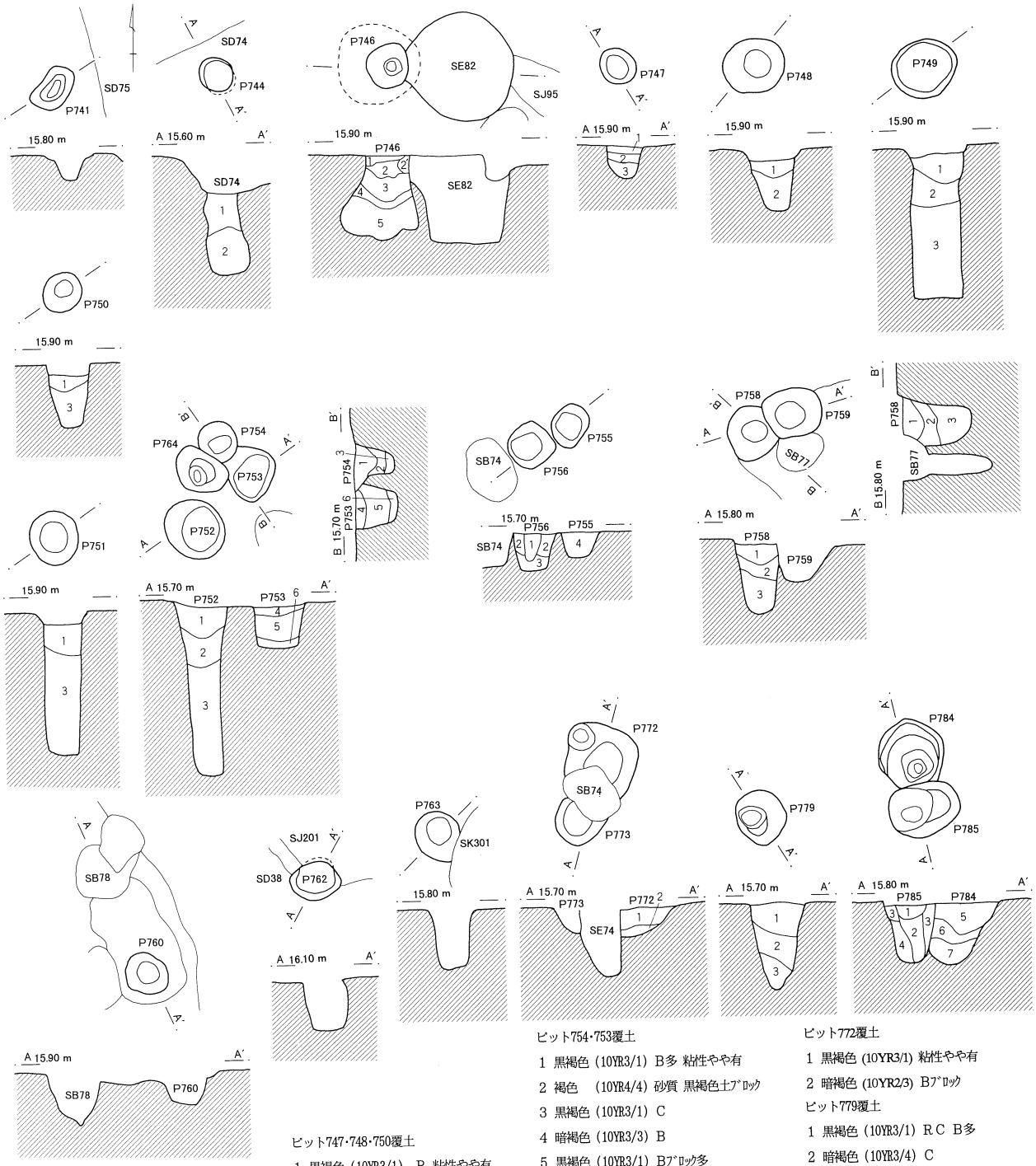
ピット772・773（第531図）

X-13グリッドから検出した。遺構は74号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は、2基のピットともに円形で、直径は、ピット772は0.7m、ピット773は0.42m、深さ0.3m～0.4mであった。

出土遺物は検出できなかった。

第531図　ピット(3)



ピット744覆土
1 灰褐色（10YR4/1）B未風化多 C少
2 黒褐色（10YR3/1） 1層に比べB少 R少

ピット746覆土
1 黒褐色（10YR2/3）下層からのR多
2 黒褐色（10YR2/3）SE82の3層と同
2' 黒褐色（10YR2/3） 1層と2層の混合
3 黒褐色（10YR2/3）大型Bﾌﾞﾛｯｸ 締り強
4 黒褐色（10YR2/3）Bﾌﾞﾛｯｸ少
5 黒褐色（10YR2/3）3層基本 Bﾌﾞﾛｯｸ

ピット747・748・750覆土
1 黒褐色（10YR3/1） R 粘性やや有
2 褐色 （10YR4/4） B多 やや砂質
3 暗褐色（10YR33/3）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット749・751覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R C 粘性やや有
2 黒褐色（10YR3/2）R・B多
3 黒褐色（10YR3/1）B多 粘性有

ピット752覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R 粘性やや有
2 黒褐色（10YR3/2）R 粘性有
3 黒褐色（10YR3/1）B 粘性有

ピット754・753覆土
1 黒褐色（10YR3/1）B多 粘性やや有
2 褐色 （10YR4/4）砂質 黒褐色土ﾌﾞﾛｯｸ
3 黒褐色（10YR3/1）C
4 暗褐色（10YR3/3）B
5 黒褐色（10YR3/1）Bﾌﾞﾛｯｸ多
6 褐色 （10YR4/4）砂質

ピット755・756覆土
1 褐色 （10YR4/4）砂質
2 黒褐色（10YR3/1）粘性やや有
3 暗褐色（10YR2/3）Bﾌﾞﾛｯｸ
4 黒褐色（10YR3/1）R

ピット758覆土
1 暗褐色（10YR3/3）R 粘性やや有
2 黒褐色（10YR3/2）R 粘性有
3 褐色 （10YR4/4）砂質 C B多

ピット772覆土
1 黒褐色（10YR3/1）粘性やや有
2 暗褐色（10YR2/3）Bﾌﾞﾛｯｸ

ピット779覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R C B多
2 暗褐色（10YR3/4）C
3 黒褐色（10YR3/2）C（種子の塊）多

ピット785・784覆土
1 褐色 （10YR4/4）B多
2 暗褐色（10YR3/3）C少
3 黒褐色（10YR3/1）B少
4 黒褐色（10YR3/1）Bﾌﾞﾛｯｸ多
6 黒褐色（10YR3/1）B多
7 暗褐色（10YR3/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

0　2m

ピット779（第531図）

X-13グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.52m、深さ0.85mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット784（第531図）

X-14グリッドから検出した。遺構はピット785に壊されていた。

平面の形状は、不整円形で、直径0.64m、深さ0.6mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット785（第531図）

X-14グリッドから検出した。遺構はピット784を壊していた。

平面の形状は、不整円形で、直径0.69m、深さ0.58mであった。

ピット785からは、柱痕を検出した（1・2層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他に柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット795・796・797（第532図）

Z-19、AA-19グリッドから検出した。3基のピットは、ほぼ等間隔に、直線的に並んでいた。

平面の形状は、何れも円形で、直径0.5～0.7m前後、深さ0.4m～0.8m前後であった。

3基のピットは、柵列跡、あるいは掘立柱建物跡の柱穴の可能性があるが、他に柱穴が検出できなかったため、それぞれ単独のピット番号を付した。

出土遺物は、ピット797から土錘が出土した。

ピット798（第532図）

Z-20グリッドから検出した。遺構は、調査区外へ展開していたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

平面の形状は、円形と考えられ、直径0.53m、深さ0.67mであった。

ピット798からは、柱痕を検出した。掘り方も、褐色系と黒褐色系の土が版築状に交互に充塡され、掘立柱建物跡の柱穴の可能性がある。

出土遺物は検出できなかった。

ピット805（第523図・第535図）

AA-19グリッドから検出した。

平面の形状は、不整形で、長軸0.61m、短軸0.46m、深さ0.32mであった。

出土遺物は、土師器坏が出土した。

ピット806（第532図・第535図）

AB-17グリッドから検出した。遺構は258・260号竪穴住居跡・348号土壙と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.55m、深さ1.62mであった。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器壺・長頸瓶が出土した。

ピット807（第532図・第536図）

Z-17グリッドから検出した。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.36m、短軸0.28m、深さ0.75mであった。

出土遺物は土師器甕が出土した。

ピット808（第532図）

AA-16グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.39m、深さ1.14mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット809（第532図）

AA-16グリッドから検出した。

平面の形状は、円形で、直径0.35m、深さ1.0mであった。

出土遺物は検出できなかった。

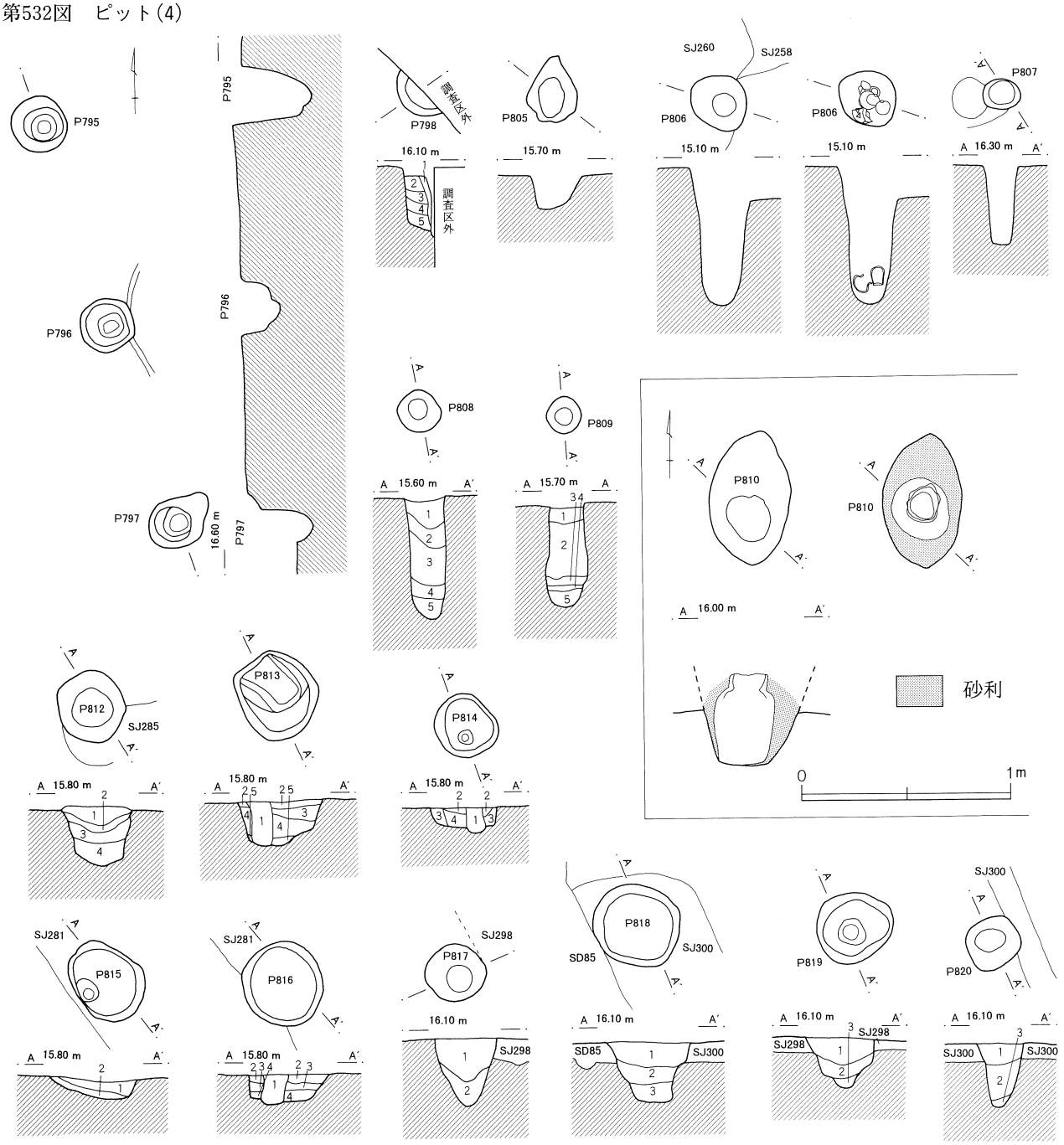
ピット810（第532図・第536図）

AA-17グリッドから検出した。遺構は248号竪穴住居跡を壊していた。

ピットには、壺が埋設されていた。壺は、重複する248号竪穴住居跡の確認時には、既に口縁部が露出していた。

遺構は、長軸0.4m、短軸0.25mの楕円形で、深さ30

第532図　ピット(4)



ピット798覆土

1 暗褐色　(10YR3/3) B多

2 鈍黄褐色 (10YR4/3) Bﾌﾞﾛｯｸ多

3 褐色　　(10YR4/6) Bﾌﾞﾛｯｸ多

4 黒褐色　(10YR3/2) B・C

5 鈍黄褐色 (10YR4/3) Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット808覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) B風化少 R風化少

2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB・R少

3 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB・R更に少

4 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB・R多

5 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多 R少

ピット809覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) B層状 R風化少

2 黒褐色 (10YR3/1) B風化少 R風化少

3 黒褐色 (10YR3/1) 2層にB多量混入

4 黒褐色 (10YR3/1) 2層に同じ やや砂質

5 黒褐色 (10YR3/1) B多 やや砂質

ピット812覆土

1 黒色 (10YR2/2)B風化多 R風化少 C少

2 黒色 (10YR2/2)1層よりB少 R多

3 黒色 (10YR2/2)1層よりB・R・C少

4 黒色 (10YR2/2)B風化少

ピット813覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) B風化少 R風化微量

2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多

3 黒褐色 (10YR3/1) 1層より更にB多

4 黒褐色 (10YR3/1) 3層よりB少

5 黒褐色 (10YR3/1) 3層よりB微少

ピット814覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) B風化少

2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多

3 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多

4 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多

ピット815覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) B少 R少 C風化少

2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多

ピット816覆土

1 黒褐色 (10YR3/1) B風化少 R風化少

2 黒褐色 (10YR3/1) B未風化多

3 黒褐色 (10YR3/1) 2層よりB風化弱 少

4 黒褐色 (10YR3/1) 2層よりB風化弱 多

ピット817～820覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) R多

2 暗褐色 (10YR3/4) B多

3 褐色　(10YR4/4) B多

0　2m

cm程度掘り込んで掘り方としていた。そこに壺を埋設し、壺の周囲と上部を径5㎜前後の砂利を充塡していた。

遺構は、墓跡の可能性もあるが、壺の内部には、小石を含んだ暗褐色土が流入していただけで、骨、その他の遺物は出土しなかった。

埋設されていた壺は、中世の在地産と考えられる。口縁端部は欠損していたが、意図的に打ち欠いていたかどうかは不明である。

ピット812（第532図）

AG-18グリッドから検出した。遺構は285号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、長軸0.67m、短軸0.6m、深さ0.55mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット813（第532図）

AG-18グリッドから検出した。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.81m、短軸0.74m、深さ0.45mであった。

遺構からは、柱痕を検出した（1層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他に柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット814（第532図）

AG-18グリッドから検出した。

平面の形状は、不整円形で、直径0.6m、深さ0.23mであった。

遺構からは、柱痕を検出した（1層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他に伴うと考えられる柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット815（第532図）

AG-18グリッドから検出した。遺構は281号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.81m、短軸0.61m、深さ0.2mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット816（第532図）

AG-18グリッドから検出した。遺構は281号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.8m、深さ0.3mであった。

遺構からは、柱痕を検出した（1層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他に伴うと考えられる柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット817（第532図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は298号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は、円形で、0.54m、深さ0.65mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット818（第532図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は300号竪穴住居跡を壊し、85号溝跡に壊されていた。

平面の形状は、円形で、直径0.83m、深さ0.57mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット819（第532図）

AC-21グリッドから検出した。遺構は298号竪穴住居跡、ピット961を壊していた。

平面の形状は、不整円形で、長軸0.71m、短軸0.66m、深さ0.48mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット820（第532図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は300号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は、円形で、直径0.5m、深さ0.63mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット821（第533図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は300号竪穴住

居跡を壊していた。

平面の形状は、円形で、直径0.94m、深さ0.69mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット822（第533図）

AC-21グリッドから検出した。遺構は、333号竪穴住居跡、４号周溝状遺構と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.73m、深さ2.31mであった。

出土遺物は、板状の木製品が出土した。

遺構は、他のピットに比べ、深いことから、井戸跡の可能性もある。

ピット823（第533図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は、298・300号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット845（第533図）

AC-21グリッドから検出した。遺構は249号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、0.43m、深さ0.51mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット846（第533図）

AC-21グリッドから検出した。遺構は249号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径1.1m、深さ1.21mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット848（第533図）

AC-21グリッドから検出した。遺構は249号竪穴住居跡・ピット849と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、不整形で、長軸1.45m、短軸1.04m、深さ0.35mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット849（第533図・第536図）

AC-20・21グリッドから検出した。遺構は249号竪穴住居跡・ピット848と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、不整形で、長軸0.86m、短軸0.87m、深さ0.35mであった。

出土遺物は須恵器坏が出土した。

ピット850（第533図）

AC-20グリッドから検出した。

平面の形状は、楕円形で、長軸1.04m、短軸0.75m、深さ0.5mであった。

ピットからは、柱痕を検出した（１層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他に伴うと考えられる柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット851（第533図・第536図）

AG-18グリッドから検出した。遺構は292号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は、不整円形で、長軸0.66m、短軸0.66m、深さ0.6mであった。

出土遺物は土師器甕が出土した。

ピット855（第533図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は300号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.62m、深さ0.37mであった。

ピットからは、柱痕を検出した（１層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット856（第533図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は300号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.6m、短軸0.5m、

深さ0.7mであった。

ピットからは、柱痕を検出した(1層)。建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は鉄製品として棒状不明品が出土した。

ピット857（第533図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は300号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.94m、短軸0.54m、深さ0.22mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット858（第533図）

AD-22グリッドから検出した。遺構は331号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸1.12m、短軸0.67m、深さ0.82mであった。

ピットからは、柱痕を検出した(1層)。建物遺構の柱穴と考えられる、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット859（第533図）

AD-22グリッドから検出した。遺構は331号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.82m、短軸0.65m、深さ0.92mであった。

遺構からは、柱痕を検出した(1層)。建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット860（第533図）

AD-19グリッドから検出した。遺構は316号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は、円形で、直径0.52m、深さ0.48mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット861（第533図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は316号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は、不整形で、長軸0.92m、短軸0.57m、深さ0.53mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット862（第533図）

AE-20グリッドから検出した。遺構は317号竪穴住居跡を壊し、ピット863に壊されていた。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.56m、短軸0.54m、深さ1.23mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット863（第533図）

AD-20・AE-20グリッドから検出した。遺構は317号竪穴住居跡・ピット862を壊していた。

平面の形状は、長方形で、長軸0.5m、短軸0.37m、深さ0.23mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット864（第533図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は317号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、不整形で、長軸0.65m、短軸0.38m、深さ0.7mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット865（第533図）

AD-19グリッドから検出した。遺構は317号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.45m、短軸0.36m、深さ0.39mであった。

出土遺物は検出できなかった。

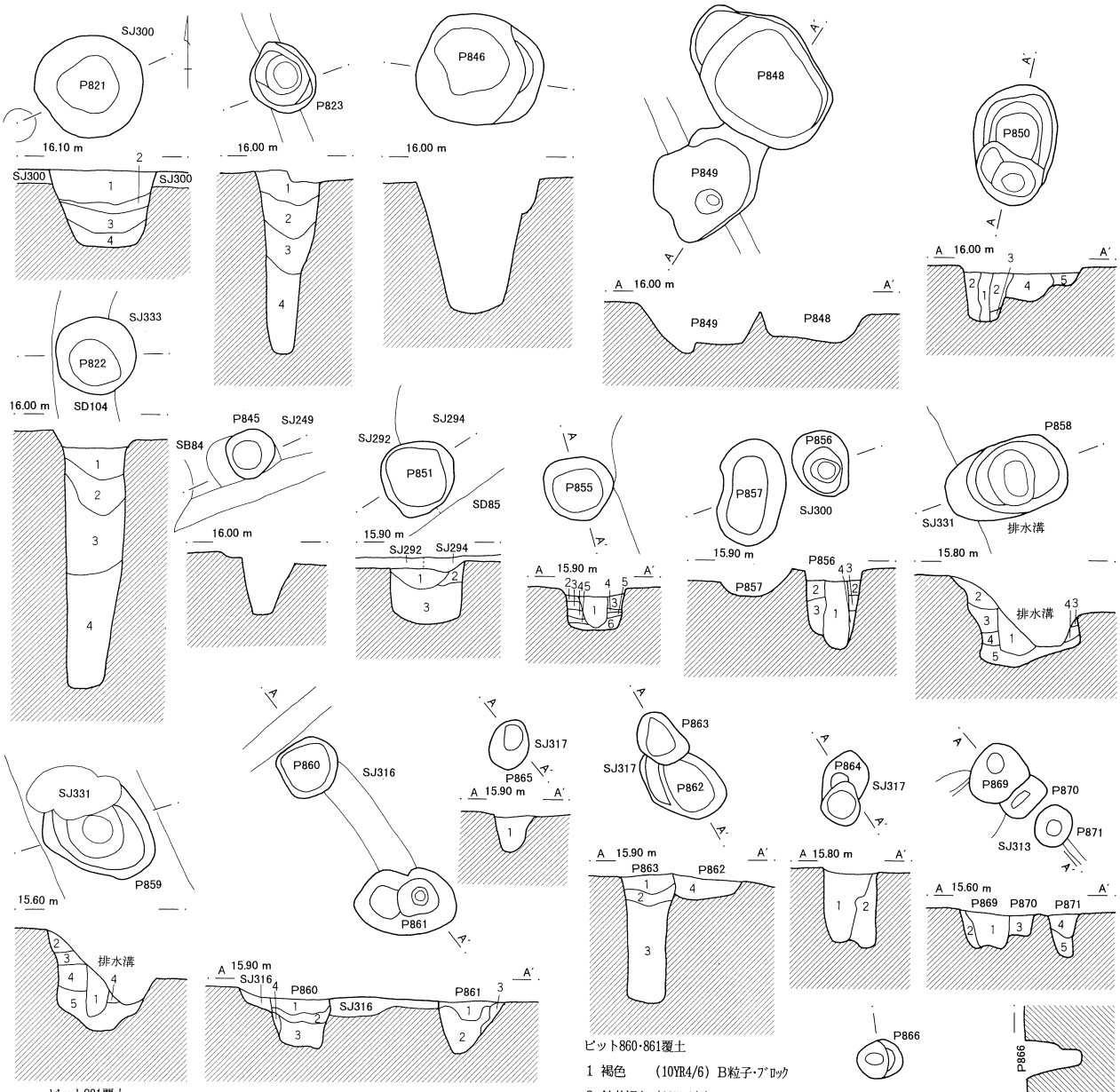
ピット866～868（第533図）

AE-20グリッドから検出した。3基の遺構は、直線的に並んでいた。

平面の形状は、円形または楕円形で、径0.4m～0.5m、深さ0.3m～0.5mであった。

3基のピットは、掘立柱建物跡、あるいは柵列の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

第533図　ピット(5)



ピット821覆土

1 黒褐色（10YR3/1）R・B多

2 黒色　（10YR2/1）C多

3 黒褐色（10YR4/6）B粒少

4 暗褐色（10YR3/3）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット822・823覆土

1 黒褐色（10YR3/1）R多 粘性やや有

2 暗褐色（10YR3/3）R少 粘性やや有

3 黒褐色（10YR3/1）Bﾌﾞﾛｯｸ多 粘性有

4 黒褐色（10YR3/1）褐灰色粘土 木片

ピット850覆土

1 鈍黄褐色（10YR5/4）R・C粒若干

2 褐色　（10YR4/4）R・C粒・B混入

3 鈍黄褐色（10YR4/3）B主体

4 灰黄褐色（10YR4/2）B混入 R・C粒

5 暗褐色　（10YR3/4）B・Bﾌﾞﾛｯｸ混入

ピット851覆土

1 黒褐色（10YR3/1）B風化多 R風化少

2 黒褐色（10YR3/1）1層に風化Bﾌﾞﾛｯｸ多

3 黒褐色（10YR3/1）1層に風化Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット855・856覆土

1 黒褐色（10YR3/1）粘性やや有

2 黒褐色（10YR3/2）B 粘性やや有

3 褐色　（10YR4/6）Bﾌﾞﾛｯｸ多 砂質

4 黒褐色（10YR3/2）B粒多 粘性やや有

5 褐色　（10YR4/6）B粒・ﾌﾞﾛｯｸ多 砂質

6 黒褐色（10YR3/1）B粒多 粘性やや有

ピット858・859覆土

1 暗褐色（10YR3/3）Bﾌﾞﾛｯｸ多 締り無

2 黒褐色（10YR3/1）B 粘性やや有

3 褐色　（10YR4/1）Bﾌﾞﾛｯｸ多 砂質

4 黒褐色（10YR3/1）B粒 粘性やや有

5 褐色　（10YR4/6）Bﾌﾞﾛｯｸ　砂質

ピット860・861覆土

1 褐色　（10YR4/6）B粒子・ﾌﾞﾛｯｸ

2 鈍黄褐色（10YR5/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多 締り有

3 褐色　（10YR4/4）B粒子 粘土ﾌﾞﾛｯｸ

4 明黄褐色（10YR6/6）B主体

ピット862・863覆土

1 鈍黄褐色（10YR4/3）R・C粒 Bﾌﾞﾛｯｸ

2 黒褐色　（10YR3/2）B粒子・ﾌﾞﾛｯｸ

3 鈍黄褐色（10YR3/2）R・C粒 粘性有

4 褐色　（10YR4/4）R・C粒 締り弱

ピット864覆土

1 鈍黄褐色（10YR4/3）R・C粒 締り有

2 褐色　（10YR4/4）BR・C粒 締り有

ピット865覆土

1 暗褐色（10YR3/4）B・C粒 締りやや弱

ピット869～871覆土

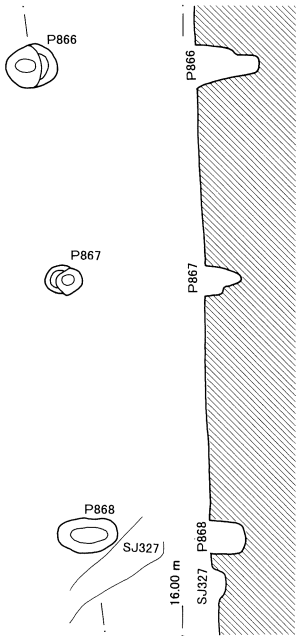
1 褐色　（10YR4/4）R・C粒微量

2 黄褐色　（10YR5/6）B 締りやや有

3 鈍黄褐色（10YR5/4）Bやや多

4 灰黄褐色（10YR4/2）R・C粒若干

5 黒褐色　（10YR3/2）4層に比べ暗い



0　2m

出土遺物は検出できなかった。

ピット869（第533図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は313号竪穴住居跡・ピット870を壊していた。

平面の形状は、不整形で、長軸0.54m、短軸0.43m、深さ0.36mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット870（第533図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は313号竪穴住居跡を壊し、ピット869に壊されていた。

平面の形状は、長方形で、長軸0.43m、短軸0.22m、深さ0.24mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット871（第533図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は313号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.28m、短軸0.23m、深さ0.47mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット872（第534図）

AE-19グリッドから検出した。遺構は330号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.5m、短軸0.43m、深さ0.47mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット873（第534図）

AD-22グリッドから検出した。遺構は、338号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.68m、短軸0.5m、深さ0.22mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

ピット876（第534図）

AD-17グリッドから検出した。

平面の形状は、楕円形で、長軸1.04m、短軸0.84m、深さ0.65mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット877（第534図）

AE-22グリッドから検出した。遺構は410号土壙と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.72m、深さ0.7mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット878（第534図）

AE-22グリッドから検出した。遺構は351号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、長方形で、長軸0.54m、短軸0.4m、深さ0.39mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット879（第534図）

AD-20グリッドから検出した。遺構は300・305号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、長方形で、長軸0.51m、短軸0.48m、深さ0.38mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット880（第534図・第536図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は340号竪穴住居跡・133号井戸跡と重複していた。133号井戸跡に壊されていたが、340号竪穴住居跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、長方形で、長軸0.61m、短軸0.42m、深さ1.1mであった。

出土遺物は土師器坏が出土した。

ピット883（第534図）

AE-21グリッドから検出した。遺構は341・342号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸0.81m、短軸0.55m、深さ0.42mであった。

ピットからは、柱痕を検出した（1層）。建物遺構の

柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット884（第534図）

AE-21グリッドから検出した。

平面の形状は、不整円形で、長軸0.67m、短軸0.64m、深さ0.45mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット885（第534図）

AD-21グリッドから検出した。遺構は135号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は、不整形で、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.58mであった。

ピットからは、柱痕を検出した（1層）。建物遺構の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット891・892（第534図）

AD-20・21グリッドから検出した。2基のピットは、重複していた。遺構の新旧関係は、ピット891の方が新しかった。

平面の形状は、円形または楕円形で、ピット891の規模は、長軸0.4m、深さ0.4m、ピット892は長軸1.0m、短軸0.58m、深さ0.72mであった。

ピット892からは、柱痕を検出した（1層）。遺構の規模から、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、他の柱穴は検出できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット893（第534図・第536図）

AD-19グリッドから検出した。遺構は338号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.29m、深さ0.56mであった。

出土遺物は土師器坏が出土した。

ピット897～899（第534図）

AE-22グリッドから検出した。3基のピットは、ほぼ直線的に並んでいた。遺構は、351号竪穴住居跡、101号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、3基ともに円形で、直径0.3m～0.4m、深さ0.3m～0.5mであった。

3基のピットは、規模、形状が似ており、掘立柱建物跡、あるいは柵列跡の可能性もあるが、他に伴うと考えられる柱穴は検出できなかったため、単独のピットとして番号を付した。

出土遺物は検出できなかった。

ピット901～904（第534図）

AD-17グリッドから検出した。4基のピットはそれぞれ重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。また、301号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形または楕円形で、長軸0.4m～1.0m、深さ0.3m～0.6mであった。

出土遺物は検出できなかった。

ピット905（第534図）

AD-17グリッドから検出した。遺構は311号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、楕円形で、長軸1.2m、短軸0.68m、深さ0.63mであった。

出土遺物は検出できなかった。

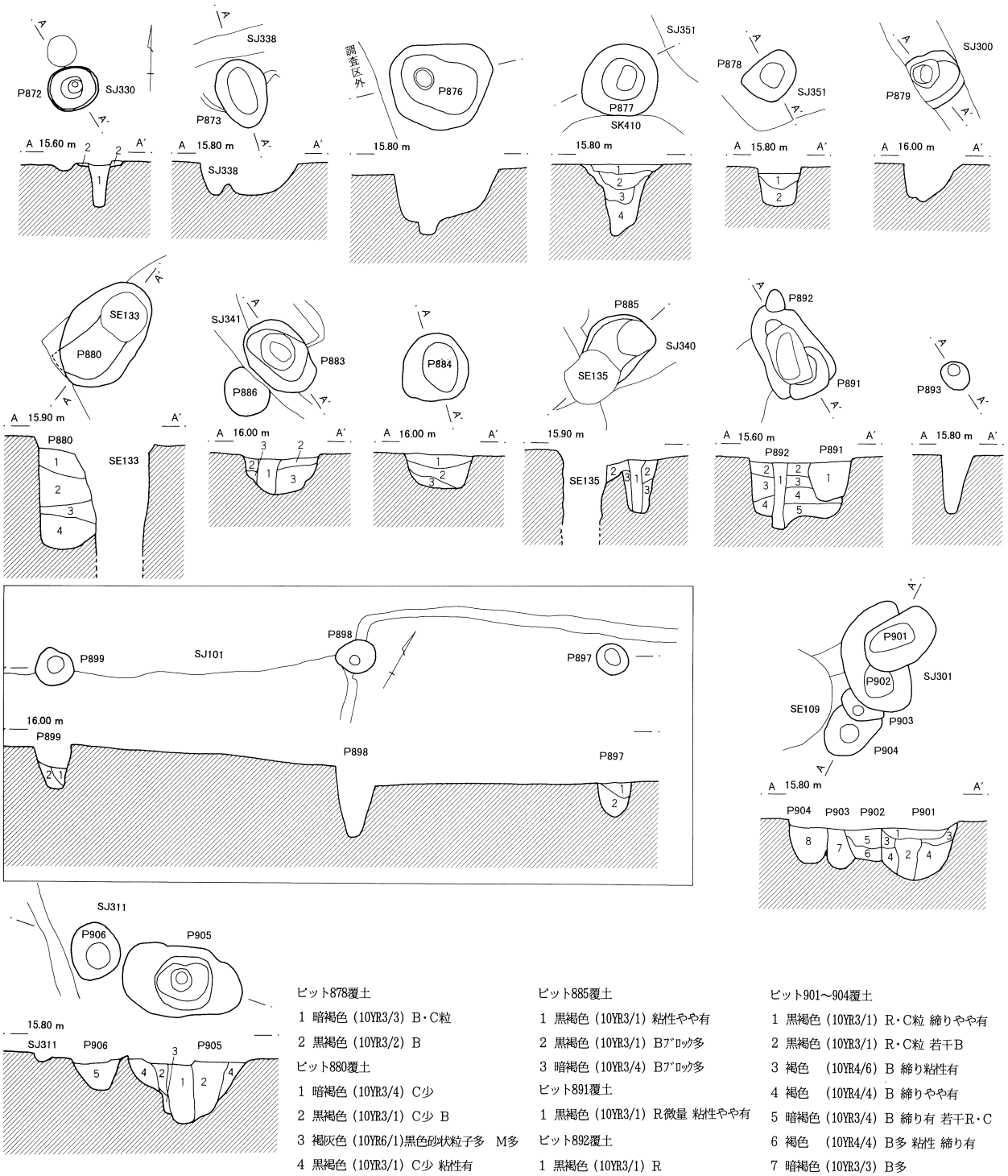
ピット906（第534図）

AD-17グリッドから検出した。遺構は311号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は、円形で、直径0.54m、深さ0.34mであった。

出土遺物は検出できなかった。

第534図　ピット(6)



ピット872覆土
1 灰黄褐色（10YR4/2）R・C粒
2 黄褐色　（10YR5/6）B粒子・ﾌﾞﾛｯｸ

ピット877覆土
1 暗褐色　（10YR3/3）R・C粒 締り有
2 黒褐色　（10YR3/2）R粒・ﾌﾞﾛｯｸ C粒
3 鈍黄褐色（10YR5/4）B粒・ﾌﾞﾛｯｸ
4 黄褐色　（10YR5/6）5層に比べ粘性強

ピット878覆土
1 暗褐色（10YR3/3）B・C粒
2 黒褐色（10YR3/2）B

ピット880覆土
1 暗褐色（10YR3/4）C少
2 黒褐色（10YR3/1）C少 B
3 褐灰色（10YR6/1)黒色砂状粒子多　M多
4 黒褐色（10YR3/1）C少 粘性有

ピット883覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R 粘性やや有
2 黒褐色（10YR3/1）Bﾌﾞﾛｯｸ多
3 暗褐色（10YR3/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット884覆土
1 褐色　（10YR4/4）R Bﾌﾞﾛｯｸ多
2 黒褐色（10YR2/3）R B粒子多
3 褐色　（10YR4/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット885覆土
1 黒褐色（10YR3/1）粘性やや有
2 黒褐色（10YR3/1）Bﾌﾞﾛｯｸ多
3 暗褐色（10YR3/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

ピット891覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R微量 粘性やや有

ピット892覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R
2 黒褐色（10YR3/2）CR
3 暗褐色（10YR3/3）Bﾌﾞﾛｯｸ多
4 黒褐色（10YR3/2）Bﾌﾞﾛｯｸ少
5 褐色　（10YR4/4）Bﾌﾞﾛｯｸ多

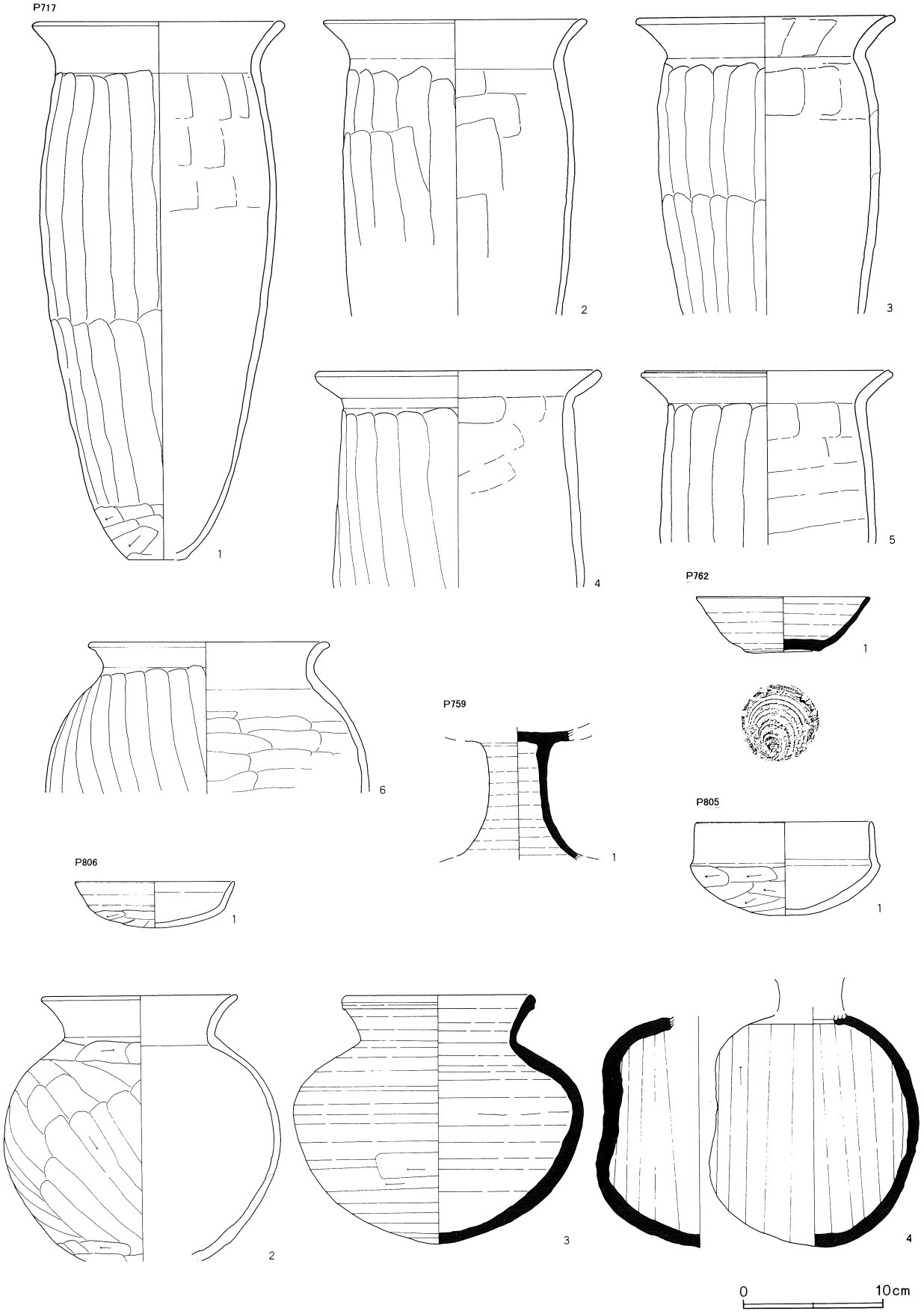
ピット897・899覆土
1 黒褐色（10YR3/2）B 締りやや有
2 黒褐色（10YR2/3）B

ピット901～904覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R・C粒 締りやや有
2 黒褐色（10YR3/1）R・C粒 若干B
3 褐色　（10YR4/6）B 締り粘性有
4 褐色　（10YR4/4）B 締りやや有
5 暗褐色（10YR3/4）B 締り有 若干R・C
6 褐色　（10YR4/4）B多 粘性 締り有
7 暗褐色（10YR3/3）B多
8 黒褐色（10YR3/1）BR 締り有

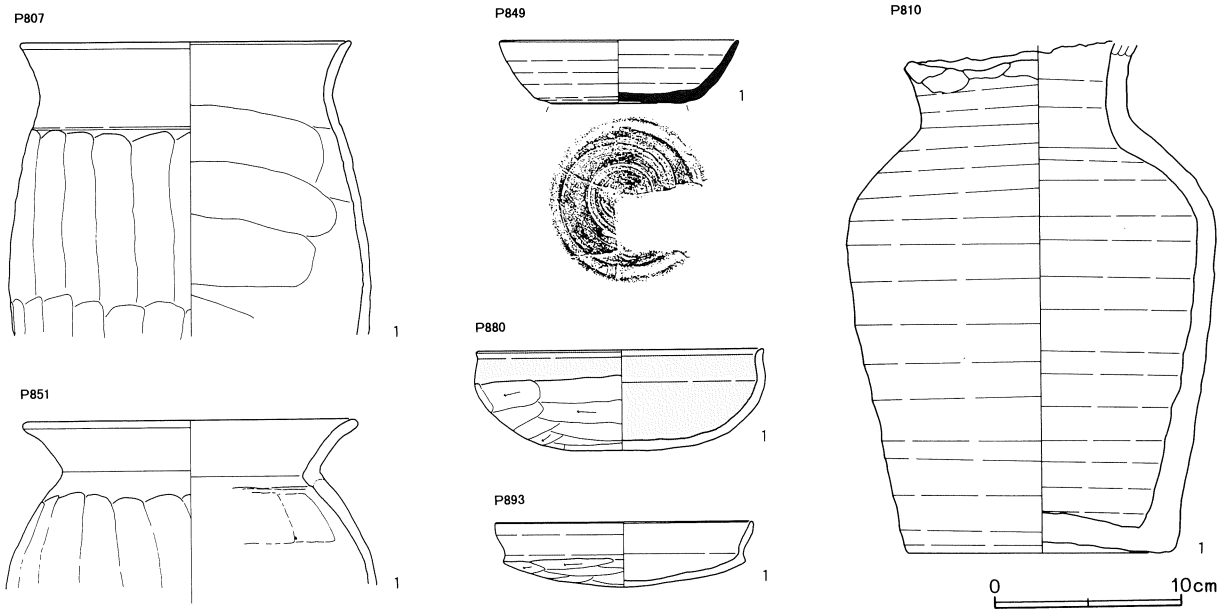
ピット905・906覆土
1 黒褐色（10YR3/1）R・C粒 若干B
2 褐色　（10YR4/6）B 締り粘性有
3 褐色　（10YR4/4）B 締りやや有
4 黒褐色（10YR3/1）R・C粒 締りやや有
5 黒褐色（10YR3/2）B 締りやや有

0　2m

第535図　ピット出土遺物(1)



第536図　ピット出土遺物(2)



ピット出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存率	備　　考
717-1	甕	17.2	38.4	(4.3)	ABDHJK	2	鈍　褐	70	
717-2	甕	18.0			ACDFHKL	2	橙	80	
717-3	甕	18.0			ADEHJK	3	赤　褐	30	
717-4	甕	(20.0)			ABDEHJ	3	橙	40	
717-5	甕	17.4			ADEHJK	3	鈍黄橙	40	
717-6	甕	(17.0)			ADEHJ	3	鈍黄橙	20	
759-1	高　　盤				ABFIJK	2	灰	80	南比企
762-1	坏	12.4	4.0	5.5	BCIJKL	2	橙	60	南比企
805-1	坏	12.5	6.7		BDEHJK	3	橙	60	
806-1	坏	11.4	3.3		ABDEJ	4	橙	95	歪みあり
806-2	壺	13.8			ABDEHJ	2	浅黄橙	40	
806-3	壺	13.4	17.6		BIJL	2	灰	90	南比企？
806-4	長　頸　瓶				ABFHK	2	灰	100	フラスコ形
807-1	甕	17.5			ABDHJKL	2	橙	60	
810-1	壺			14.0	BJK	3	灰　白	95	在地？ 器面荒れ
849-1	坏	12.8	3.3	7.3	BFI	2	灰	70	南比企
851-1	甕	(17.4)			BEFHJL	2	橙	15	
880-1	坏	15.5	5.3		BEFL	2	明赤褐	100	赤彩
893-1	坏	(13.6)	3.5		BDEHJ	2	橙	60	

第８表　ピット計測表(1)

番号	位　置	形　態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
687	R-9	楕円形	0.45	0.34	0.5				
688	R-9	長方形	1.1	(0.85)	0.58				
692	T-10	円　形	0.38		0.32	青白磁合子	中　世		
693	T-9	円　形	0.48		0.52				
694	T-9	円　形	0.44		0.41				
695	T-9	円　形	0.45		0.58				
696	U-9	不整円形	0.6		0.4				
697	U-9	円　形	0.58		0.27				
698	T-8	L字形	0.8	0.71	0.44				
699	T-8	楕円形	0.51	0.44	0.4				
701	S-10	楕円形	0.87	0.6	0.4				
702	T-10	円　形	0.76		0.7				
704	U-10	長方形	0.86	0.71	0.8				
705	U-10	楕円形	0.7	0.47	0.3				P706
706	U-10	楕円形	0.77	0.44	0.38			P705	
707	X-12	円　形	0.72		0.81				SD73
708	W-12	円　形	0.72		0.23				
709	U-10	円　形	0.37		0.27				
710	U-10	円　形	0.65	0.43	0.53				
711	V-14	不整円形	0.65	0.43	0.53				
714	V-14	円　形	0.5		0.1				
715	V-13	楕円形	0.51	0.37	0.49				
717	V-13	円　形	0.82		1.14	甕			
718	W-12	円　形	0.48	0.32	0.3				
719	W-12	円　形	0.25	0.25	0.26				
720	W-12	円　形	0.3	0.29	0.28				
721	V-11	円　形	0.42	0.32	0.3				
722	W-11	円　形	0.4	0.3	0.32				
724	W-12	円　形	0.4	0.33	0.36				
725	W-12	円　形	0.37	0.34	0.3				
726	W-12	円　形	0.24	0.2	0.15				
727	W-12	楕円形	0.4	0.29	0.45				
728	W-15	円　形	0.57		0.81		古　代		SK268
729	W-16	長方形	0.82	0.7	0.43			SD74	
731	W-16	円　形	0.72		1.27				
732	V-15	楕円形	0.4	(0.34)	1.23			SJ168	SB68
733	W-14	不整形	0.85	0.54	0.62		古　墳		
734	X-16	不整形	0.65		1.42	坏・甕・須恵壺・長頸瓶	古　代		SJ190・SB72
737	X-17	不整形	0.8	0.6	0.44				
738	X-17	不整形	0.88	0.57	0.53				
739	X-17	楕円形	0.7	0.54	0.45				
740	W-14	不整形	0.79	0.6	0.54				
741	X-16	不整形	0.45	0.29	0.26	砥石			
742	X-16	円　形	0.34	0.34	0.31				
743	X-16	円　形	0.52	0.53	0.28				
744	Y-15	円　形	0.35		1.15				SD74
745	X-14	円　形	0.38	0.25	0.19				
746	X・Y-17	円　形	0.42		0.83			SE82	
747	X・W-16	楕円形	0.38	0.32	0.32				
748	X-16	円　形	0.6		0.6				
749	X-16	円　形	0.6		1.48				

第9表　ピット計測表(2)

番号	位　置	形　態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
750	X-16	円　形	0.4		0.62				
751	X-16	円　形	0.48		1.39				
752	X-13	円　形	0.6		1.72				
753	X-13	不整形	0.48		0.43				P754・764
754	X-13	円　形	0.4		0.43		古　代	P753	
755	X-13	方　形	0.4		0.25				
756	X-13	方　形	0.4		0.38				
758	X-13	円　形	0.5		0.72				SB77・P759
759	X-13	円　形	0.53		0.43	須恵高盤		P758	
760	Y-19	円　形	0.43		0.34				
761	X-13	円　形	0.48	0.46	0.54				
762	Z-18	不整円形	0.44	0.38	0.5	須恵坏	古　代		
763	X-14	円　形	0.42		0.57				
764	X-13	不整形	0.53	0.38	0.74			P753	
765	X-14	円　形	0.42	(0.38)	0.26				
766	X-13	円　形	0.45	(0.3)	0.46				
767	X-13	円　形	0.34	0.32	0.1				
768	X-13	円　形	0.5	0.49	0.13				
769	X-13	円　形	0.3	0.28	0.1				
770	X-13	不整形	0.48	(0.34)	0.11				
771	X-13	方　形	0.2		0.27				
772	X-13	円　形	0.7		0.31				SB74
773	X-13	円　形	0.42		0.37				SB74
774	X-13	楕円形	0.38	0.27	0.37				
775	X-13	円　形	0.52	0.47	0.26				
776	X-13	不整円形	0.55	0.52	0.45				
777	X-13	不整円形	0.46	0.37	0.55				
778	X-12	円　形	0.36	0.37	0.55				
779	X-13	円　形	0.52		0.85				
780	X-14	円　形	0.37	0.35	0.37				
781	X-14	楕円形	0.32	0.28	0.15				
782	X-14	不整形	0.6	1.01	0.37				
783	X-14	楕円形	0.38	0.28	0.15				
784	X-14	不整円形	0.64		0.6				
785	X-14	不整円形	0.69		0.58			P784	
786	X-14	不整形	0.67	0.4	0.78				
787	X-14	円　形	0.26	0.26	0.31				
788	X-14	円　形	0.45	0.43					
789	X-14	不整形	0.5	0.47	0.54				
790	X-14	不整形	0.65	0.53	0.62				
791	X-14	楕円形	0.44	0.35	0.31				
792	X-14	円　形	0.25	0.24	0.24				
793	X-14	円　形	0.25	0.25	0.14				
794	X-14	円　形	0.3	0.26	0.26				
795	Z-19	円　形	0.52	0.51	0.77				
796	Z-19	円　形	0.51	0.5	0.39				
797	Z19・AA19	不整形	0.67	0.46	0.63	土錘			
798	Z-20	円　形	0.53		0.67				
805	AA-19	不整形	(0.61)	0.46	0.32	坏			
806	AB-17	円　形	0.55		1.62	坏・甕・須恵壺	古　墳		
807	Z-17	楕円形	0.36	0.28	0.75	甕	古　墳		

第10表　ピット計測表(3)

番号	位　置	形　態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出 土 遺 物	時期	本遺構より新	本遺構より古
808	AA-16	円　形	0.39		1.14				
809	AA-16	円　形	0.35		1.0				
810	AA-17	楕円形	0.4	0.25	0.3	中世在地壺		SJ248	
812	AG-18	円　形	0.67	0.6	0.55				
813	AG-18	楕円形	0.81	0.74	0.45				
814	AG-18	不整円形	0.6		0.23				
815	AG-18	楕円形	0.81	0.61	0.2				
816	AG-18	円　形	0.8		0.3				
817	AD-20	円　形	0.54		0.65			SJ298	
818	AD-20	円　形	0.83		0.57			SJ300	SD85
819	AC-21	不整円形	0.71	0.66	0.48			SJ298・P961	
820	AD-21	円　形	0.5		0.63			SJ300	
821	AD-20	円　形	0.94		0.69			SJ300	
822	AC-21	円　形	0.73		2.31	板状木製品			
823	AD-21	不整円形	0.6	0.56	1.67				
824	AB-20	円　形	0.35	0.35	0.22				
825	AB-20	楕円形	0.34	0.21	0.15				
826	AB-20	楕円形	0.49	0.42	0.45				
827	AB-20	楕円形	0.46	0.36	0.21				
828	AB-20	円　形	0.52	0.49	0.47				
829	AB-20	円　形	0.44	0.43	0.25				
830	AB-20	円　形	0.7	0.62	0.49				
832	AB-20	不整形	0.39	0.34	0.34				
833	AB-20	円　形	0.26	0.27					
834	AB-20	楕円形	(0.45)	0.43	0.1				
835	AC-20	円　形	0.84	0.7	0.29				
836	AC-20	円　形	0.37	0.35	0.64				
837	AB-21	円　形	0.34	0.3	0.48				
838	AB-21	楕円形	0.39	0.35	0.44				
842	AB-20	不整円形	0.69	0.5	0.28				
843	AB-21	楕円形	0.75	0.54	0.53				
844	AC-21	円　形	0.43	0.43	0.43				
845	AC-21	円　形	0.43		0.51				
846	AC-21	円　形	1.1		1.21				
848	AC-21	不整形	1.45	1.04	0.35				
849	AC20・21	不整形	(0.86)	0.87	0.35	須恵坏	古　代		
850	AC-20	楕円形	1.04	0.75	0.5				
851	AG-18	不整円形	0.66	0.66	0.6	甕			SJ292
855	AD-21	円　形	0.62		0.37				
856	AD-20	楕円形	0.6	0.5	0.7	鉄製品			
857	AD-20	楕円形	0.94	0.54	0.22				
858	AD-22	楕円形	1.12	0.67	0.82				
859	AD-22	楕円形	0.82	(0.65)	0.92				
860	AD-19	円　形	0.52		0.48			SJ316	
861	AE-19	不整形	0.92	0.57	0.53			SJ316	
862	AE-20	楕円形	(0.56)	0.54	1.23			SJ317	P863
863	AD・AE20	長方形	0.5	0.37	0.23			SJ317・P862	
864	AE-19	不整形	0.65	0.38	0.7				
865	AD-19	楕円形	0.45	0.36	0.39				
866	AE-20	円　形	0.4	0.34	0.5				
867	AE-20	円　形	0.3	0.22	0.38				

第11表　ピット計測表(4)

番号	位　置	形　態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
868	AE-20	楕円形	0.47	0.29	0.3				
869	AE-19	不整形	0.54	0.43	0.36			SJ313・P870	
870	AE-19	長方形	0.43	(0.22)	0.24			SJ313・P869	
871	AE-19	楕円形	0.28	0.23	0.47			SJ313	
872	AE-19	楕円形	0.5	0.43	0.47				
873	AD22	楕円形	0.68	0.5	0.22				
876	AD-17	楕円形	1.04	0.84	0.65				
877	AE-22	円　形	0.72		0.7				
878	AE-22	長方形	0.54	0.4	0.39				
879	AD-20	長方形	0.51	0.48	0.38				
880	AD-21	長方形	0.61	0.42	1.1	坏			SE133
882	AD-21	円　形	0.39	0.35	0.61				
883	AE-21	楕円形	0.81	0.55	0.42				
884	AE-21	不整円形	0.67	0.64	0.45				
885	AD-21	不整形	0.6	(0.5)	0.58				SE135
886	AE-21	不整円形	0.47	(0.4)	0.28				
887	AE-21	不整形	0.73	0.65	0.31				
888	AE-21	不整形	0.88	0.58	0.11				
889	AE-21	円　形	0.38	0.38	0.24				
890	AD-21	長方形	0.32	0.25	0.23				
891	AD20・21	円　形	0.4		0.4				
892	AD20・21	楕円形	1.0	0.58	0.72			P891	
893	AD-19	円　形	0.29		0.56	坏	古　墳		
894	AD-22	円　形	0.36		0.45				
897	AE-22	円　形	0.32	0.28	0.35				
898	AE-22	円　形	0.4	0.32	0.68				
899	AE-22	円　形	0.37		0.55				
901	AD-17	楕円形	1.0	0.75	0.58				
902	AD-17	円　形	0.6		0.36				
903	AD-17	円　形	0.4		0.47				
904	AD-17	円　形	0.45		0.42				
905	AD-17	楕円形	1.2	0.68	0.63				
906	AD-17	円　形	0.54		0.34				

(7) 溝跡

第38号溝跡（第537図～第541図）

R-9～AC-22グリッドから検出した。溝跡は、B区から連続していた。遺構は調査区を縦断するように北西から南東に延び、AC-22グリッドで調査区外へ展開していた。またX-15グリッド付近で屈曲していた。

遺構の規模は、幅1.0m～3.0m、深さ0.5m～0.7mであった。断面の形状は逆台形または皿状であった。

覆土は、粘性のあるオリーブ色味の強い褐色、暗褐色を主体とし、酸化鉄分、炭化物、地山ブロック等を含んでいた。

ただし、覆土の最上層には、下層とは異なる粘性のない黒褐色土が堆積していた(1層)。この1層は2層以下との層界がクラック状になっている所もあり、明らかに下層と区別できた。覆土の堆積環境、時期が異なる後世の堆積土の可能性がある。

出土遺物は土師器、須恵器が多量に出土し、灰釉陶器も出土した。また、砥石、管玉、土錘、土玉、刀子が出土した。出土遺物の記載は、後述する。

第48号溝跡（第537図）

Q・R-10グリッドから検出した。32号掘立柱建物跡の内側で検出した。遺構は、54号溝跡に壊されていた。溝跡の北東側は調査区外へ展開していた。

遺構の規模は幅0.4m、深さ0.2mであった。断面の形状は逆台形であった。

出土遺物は検出できなかった。

第54号溝跡（第537図・第546図）

Q-9・10、R-10グリッドから検出した。遺構は、32号掘立柱建物跡、48号・56号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は長方形で、長さ8.2m、幅1.2mであった。断面の形状は箱型で、深さは0.3mであった。

出土遺物は、土師器坏、甕が出土した。また、馬歯が出土した。

第55号溝跡（第537図）

R-10グリッドから検出した。遺構は、32号掘立柱建物跡に平行して検出したが、32号掘立柱建物跡に伴うかどうかは明らかにできなかった。

遺構の規模は、幅0.4m、深さ0.2mであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第57号溝跡（第537図）

Q-10～T-7・8グリッドから検出した。遺構は、56号溝跡と平行するように、蛇行しながら調査区を横断していた。

遺構の規模は、幅0.5m～1.0m、深さは0.2m前後であった。

遺構は、66・71号竪穴住居跡、33・34号掘立柱建物跡、3号性格不明遺構、38号溝跡、58号溝跡と重複していた。新旧関係は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、3号性格不明遺構を壊していたことを確認したが、他の遺構との新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第58号溝跡（第537図）

R-10～T-8グリッドから検出した。56号溝跡と平行するように、調査区を横断していた。

遺構の規模は、幅0.5m～1.0m、深さは0.2m前後であった。

遺構は、66・71号竪穴住居跡、32・33・34号掘立柱建物跡、188号土壙、38・57号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、66・67号竪穴住居跡、33・34号掘立柱建物跡、188号土壙を壊していたが、他の遺構との新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は検出できなかった。

第59号溝跡（第537図）

R-9～T-7・8グリッドから検出した57・58号溝跡と重なり合いながら、調査区を横断していた。

遺構の規模は、幅0.5m～1.0m、深さは0.2m前後であった。

遺構は、66・71号竪穴住居跡、33・34号掘立柱建物跡、38・57・58・61号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡を壊していた。また、61号溝跡に壊されていたが、他の遺構との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は検出できなかった。

第60号溝跡（第538図・第546図）

U-14～W-10グリッドから検出した。38号溝跡と直交するように調査区を横断していた。遺構の両端は、調査区外へ展開していた。

60号溝跡については、中世墓跡と関連があると思われるため、墓跡の項で詳述する。

第61号溝跡（第537図・第546図）

S-9～T-7グリッドから検出した。遺構は、56号溝跡と平行するように、調査区を横断していたが、遺構の北端は、S-9グリッドで立ち上がっていた。

遺構の規模は、幅0.4m～0.5m、深さ0.2m～0.3mであった。

遺構は、57・59号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構が最も新しかった。

出土遺物は、中世常滑産と思われる片口鉢の破片が出土した。片口鉢は、口縁部の破片である。胎土及び色調は、甕に似ていた。

第62号溝跡（第538図）

V-12～W-10グリッドから検出した。遺構は、60号溝跡と重複しながら、調査区を横断していた。遺構の新旧関係は、本遺構の方が古かった。また、38号溝跡を壊していた。

遺構の規模は、幅0.7m～0.8m、深さ0.6m前後であった。

出土遺物は、検出できなかった。

第63号溝跡（第538図・第546図）

V-11・12グリッドから検出した。遺構の大半は、60号溝跡に壊されていたため、遺構の全体を検出することができなかったが、本来は、60号溝跡とほぼ同じ位置で、調査区を横断していたと考えられる。また、38号溝跡を壊していた。

遺構の規模は、幅0.5m～0.7m、深さは0.4m前後であった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片が出土した。

第64号溝跡（第538図）

S・T-12グリッドから検出した。遺構の北端は調査区外へ展開していたが、南端は、立ち上がっていた。

遺構は、中世墓跡を区画する138・139号溝跡に壊されていた。

遺構の規模は、幅1.2m～1.3m、深さ0.8m～1.0mであった。断面の形状は、逆台形であった。

覆土は、地山のブロック・粒子を含む暗褐色～黒褐色土が主体で、自然堆積土であった。

出土遺物は、8世紀代と考えられる、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第65号溝跡（第538図）

U-11グリッドから検出した。遺構は、137号溝跡に壊されていた。また、140号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

遺構の両端は、立ち上がっていた。

遺構の規模は、長さ9.4m、幅1.1mの長方形で、深さは、0.25mであった。断面の形状は、逆台形であった。主軸方位は、N-36°-Wであった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第66号溝跡（第537図・第538図）

S-11～T-9グリッドから検出した。119号竪穴住居跡を壊し、38号溝跡に壊されていた。また、59号掘立柱建物跡、67号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

溝跡は、59号掘立柱建物跡と重複している部分で途切れるが、遺構が浅かったため、ブリッジとなっていたかどうかは確認できなかった。

遺構の規模は、幅0.5m～0.7m、深さ0.2m～0.3mであった。主軸方位は、N-53°-Eであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第67号溝跡（第537図・第538図）

S・T-11グリッドから検出した。遺構の両端は立ち上がっていた。

遺構の規模は、長さ9.5m、幅0.5m～0.7m、深さ0.2m～0.3mであった。

遺構は、66・137号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土した他、紡錘車が出土した。

第71号溝跡（第538図・第546図）

V-12・13グリッドから検出した。溝跡の北端は、62号溝跡に壊されていたが、62号溝跡の対岸に本遺構が展開していなかったことから、溝跡は、62号溝跡付近で立ち上がっていたものと思われる。

平面の形状は、緩やかに弧を描く長方形であった。遺構の規模は、長さは推定で12.0m、幅1.0m、深さ0.3m～0.5mであった。

溝跡は、140号竪穴住居跡、56号井戸跡、62号溝跡と重複していた。新旧関係は、140号竪穴住居跡より新しく、56号井戸跡・62号溝跡より古かった。

出土遺物は、土師器暗文坏、須恵器坏、須恵器甕が出土した。

第72号溝跡（第538図）

V-10・11グリッドから検出した。

遺構の規模は、長さは推定で、7.5m、幅0.6m、深さ0.15mであった。

遺構は、134・141号竪穴住居跡、254号土壙と重複していた、新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、図示不可能であったが、須恵器坏の破片が出土した。

第73号溝跡（第538図・第547図）

U-14～X-11グリッドから検出した。遺構は、調査区を横断していた。遺構の両端は、調査区外に展開していたため、全体を検出することはできなかった。

遺構の規模は、幅0.7m～0.4m、深さ0.10m～0.13mであった。

遺構は、38号溝跡に壊されていた。また、126・130・132・135～137・145号竪穴住居跡を壊していた。

出土遺物は、須恵器壺が出土した。

第74号溝跡（第539図・第547図）

V-16～Z-15グリッドから検出した。遺構の両端は、調査区外へ展開していたため、全体を検出することはできなかった。

遺構は、Z-15グリッド付近から調査区を横断し、X-17グリッドでほぼ直角に北上し、V-16グリッドで調査区外へ展開していた。

遺構の規模は、幅0.9m～1.6m、深さ0.3m～0.78mであった。

遺構は、63・65・70・71・73号掘立柱建物跡、38号溝跡を壊し、76号溝跡に壊されていた。75号溝跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、中世常滑産の甕・山茶椀系の片口鉢が出土した。

第75号溝跡（第539図）

W・X-16グリッドから検出した。溝跡の一端は、立ち上がっていたが、もう一方は、74号溝跡と合流するように重複していたため、明らかにできなかった。

遺構の規模は、幅0.9m～1.2m、深さ0.38m～0.42mであった。

遺構は63・70・71・73号掘立柱建物跡を壊していた。74号溝跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片などが出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第76号溝跡（第539図・第547図）

X-17グリッドから検出した。遺構は、両端がそれぞれ他の遺構と重複していたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

遺構の規模は、幅0.6m～0.8m、深さ0.3m前後であった。

遺構は、67・63号掘立柱建物跡、283号土壙、74号溝跡を壊していた。

出土遺物は、中世常滑産の甕が出土した。

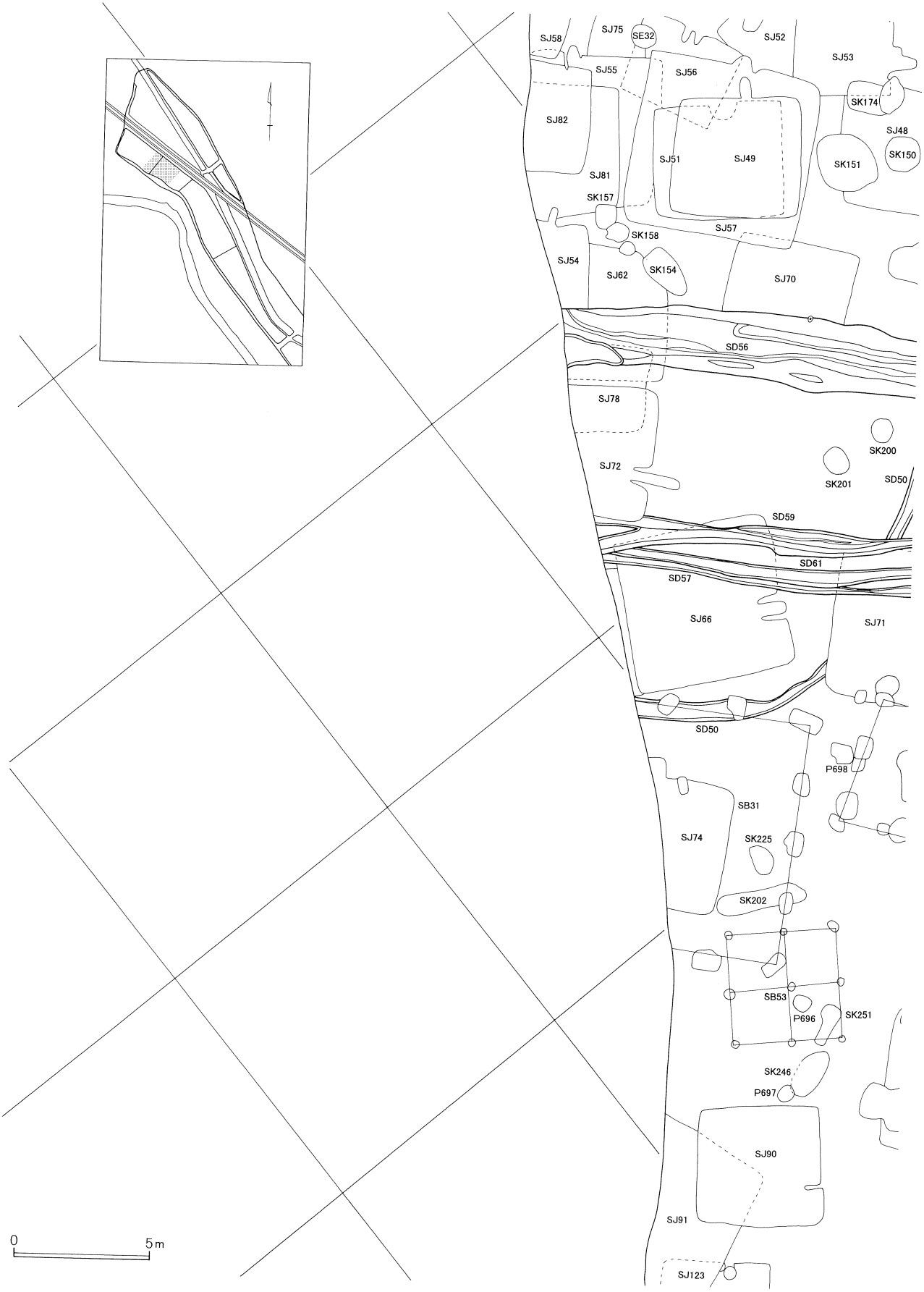
第77号溝跡（第539図・第547図）

X-18～Z-15グリッドから検出した。遺構は、74号溝跡と平行するように、調査区を横断していた。溝跡の両端は、調査区外へ展開していた。

遺構の規模は、幅1.5m～2.6m、深さ0.4m～0.75mであった。

遺構は、283号土壙、38号溝跡を壊していた。また、78・85号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

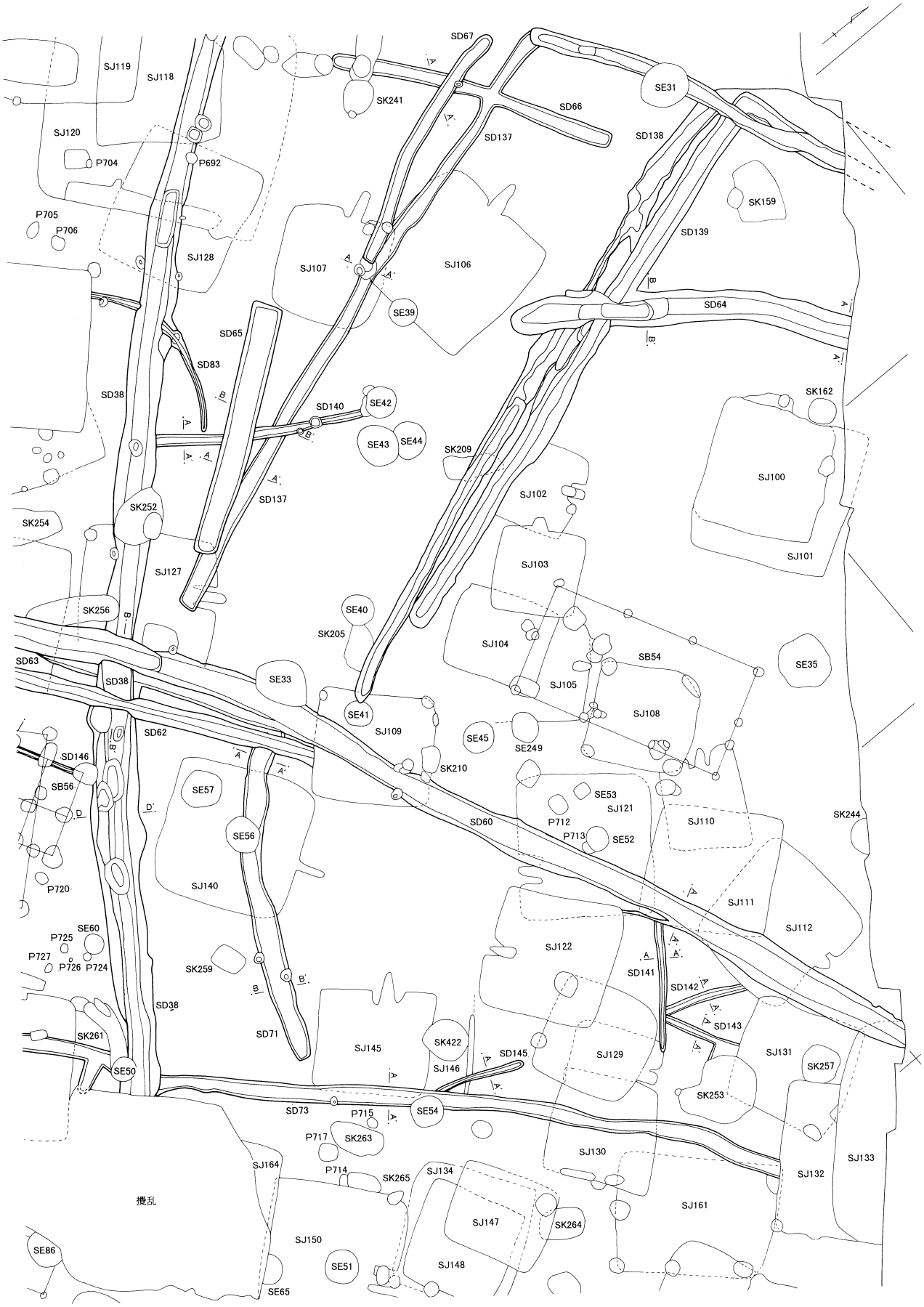
第537図　溝跡(1)


SJ58
SJ75
SE32
SJ52
SJ53
SJ55
SJ56
SK174
SJ82
SJ48
SK150
SJ51
SJ49
SK151
SJ81
SK157
SJ57
SK158
SJ54
SJ62
SK154
SJ70
SD56
SJ78
SK200
SJ72
SK201
SD50
SD59
SD61
SD57
SJ66
SJ71
SD50
P698
SB31
SJ74
SK225
SK202
SB53
P696
SK251
SK246
P697
SJ90
SJ91
SJ123
0
5m

SB13
SK140
SK130
SK135
SD49
SB14
SD51
SK122
SK124
SK131
SD50
SK137
SB20
SK143
SB16・17
SB21
SK221
SD56
SB33
SE30
SK180
SK184
SJ85
P688
SK189
P687
SX3
SB34
SD38
SK181
SK185
SD61
SD57
SK183
SD57
SK212
SD58
SK188
SD54
SD48
SD58
SB37～41・52
SK211
SK187
SB32
SB30
SK160
SD38
排水溝
SB50
SB51
SB49
SB50
SE47
SD55
SB42
SK186
P695
P694
SE34
SB59
SK245
P701
SE46
SK203
SK204
SK247
P702
SB43
SD66
SJ119
SD67
SK250
SJ118
SE37
SE31
SK241
P709
SD66
SJ120
SD137
P704
P692
SJ128
SD138
SK159
SK290
SJ106
SJ107
SD38
SD139

第538図　溝跡(2)

SJ90
SJ91
SE70
SJ123
SJ124
SK276
SK260
SJ125
SK255
SD83
SJ142
SJ134
SD72
SJ141
SD60
SD62
SJ176
SJ144
SD146
SJ143
P721
P722
SB57
SB55
P718
P719
SJ139
SK258
P708
SJ126
撹乱
SJ135
P707
SD73
SJ137
SJ136
SJ138
撹乱
SB76
SJ188
SB75
0
5m


SD67
SJ119
SJ118
SK241
SD66
SE31
SJ120
SD137
SD138
P704
P692
SK159
P705
P706
SD139
SJ128
SJ107
SJ106
SE39
SD64
SD65
SD83
SD38
SK162
SD140
SE42
SE43
SE44
SK209
SJ100
SK252
SD137
SJ102
SK254
SJ101
SJ127
SJ103
SK256
SE40
SK205
SJ104
SB54
SD63
SD38
SE33
SJ105
SE35
SE41
SJ108
SJ109
SE45
SE249
SD62
SD146
SK210
SB56
SE57
SE53
SJ121
SK244
SD60
P712
SJ110
SE56
P713
SE52
P720
SJ140
SJ111
SJ112
SE60
P725
SJ122
P727
P726
P724
SK259
SD141
SD142
SD38
SD143
SK261
SD71
SJ145
SK422
SD145
SJ129
SJ131
SE50
SJ146
SK257
SK253
SD73
P715
SE54
P717
SK263
SJ130
SJ133
SJ164
P714
SK265
SJ134
SJ132
撹乱
SJ161
SJ147
SK264
SJ150
SE86
SE51
SJ148
SE65

出土遺物は、中世常滑産の甕、山茶椀系の鉢、鉄製品として鎌、また鉄滓が出土した。

第78号溝跡（第539図）

Y・Z-15グリッドから検出した。溝跡は、74・77号溝跡に壊されていたため、全体を検出することはできなかった。

遺構の規模は、幅0.35m～1.70m、深さ0.06m～0.14mであった。

遺構は、74・77号溝跡、８号性格不明遺構と重複していた。遺構の新旧関係は、74・77号溝跡よりも古かったが、８号性格不明遺構との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第79号溝跡（第539図）

X-17～Z-15グリッドから検出した。遺構は、74号溝跡と77号溝跡との中間を、２つの溝跡と平行に調査区を横断していた。遺構は、X-17グリッドで立ち上がっていた。

遺構の規模は、幅0.25m～0.75m、深さ0.06m～0.14mであった。

遺構は、177・178・184・185号竪穴住居跡、63・73号掘立柱建物跡、38号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しかったが、他の遺構との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第80号溝跡（第539図）

Y-15グリッドから検出した。遺構の両端は８号性格不明遺構・74号溝跡と重複していたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

規模は、幅0.25m～0.4m、深さ0.22mであった。

遺構は、８号性格不明遺構、74号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第81号溝跡（第539図）

Y-14グリッドから検出した。183号竪穴住居跡の南側に隣接していた。遺構東側は立ち上がっており、西側は、調査区外へ展開していた。

遺構の規模は、幅0.2m～0.3m、深さ0.03mであった。

出土遺物は検出できなかった。

第82号溝跡（第539図）

Y-14～15グリッドから検出した。81号溝跡の南側で、一部81号溝跡と平行していた。溝跡は、Y-14・15グリッドの境界付近で南に折れ、74号溝跡と重複していた。遺構の西側は、調査区外へ展開していた。

遺構の規模は、幅0.1m～0.3m、深さ0.1m前後であった。

遺構は、74号溝跡・113号井戸跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構が最も古かった。

出土遺物は、検出できなかった。

第83号溝跡（第538図）

U-11～V-10グリッドから検出した。遺構は、60号溝跡付近から、134・125・124号竪穴住居跡を壊しながら大きく弧を描き、140号溝跡の北側付近で立ち上がっていた。

遺構の規模は、幅0.1m～0.5m、深さ0.15m～0.54mであった。

遺構は、124・125・134号竪穴住居跡、38号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、３軒の竪穴住居跡よりも新しかったが、38号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

また、60・62号溝跡を挟んだ対岸に、83号溝跡と規模の似た146号溝跡があるが、同一の遺構であったかどうかは明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第84号溝跡（第539図）

X-13グリッドから検出した。遺構の両端は、83号井戸跡、189号竪穴住居跡と重複していたため、全体を明らかにすることはできなかった。

遺構の規模は、幅0.2m～0.4m、深さ0.15m前後であった。

遺構は、189号竪穴住居跡を壊し、83号井戸跡に壊されていた。また、74・75号掘立柱建物跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第85号溝跡（第539図～第541図・第547図）

X-18～AG-18グリッドから検出した。遺構は、X-18グリッドから、ほぼ直線的に南進し、AE-21グリッドで直角に西に曲がり、AG-18グリッドで調査区外へ展開していた。また、AB-20グリッド付近で、土橋状に立ち上がっていた。

遺構の規模は、幅0.5m～1.0m、深さ0.38m～0.73mであった。

遺構は、多くの遺構と重複していたが、全ての遺構を壊していた。しかし、77号溝跡との重複関係は、明らかにできなかった。

また、77号溝跡の対岸に、遺構の幅、深さの似た76号溝跡を検出したが、連続していたかどうかは明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器片と共に、陶磁器片が出土したが、図示可能な遺物は、須恵器長頸瓶、青磁碗であった。また、鉄製品として、刀子、棒状の不明品が出土した。

第87号溝跡（第539図）

Y-18グリッドから検出した。遺構は、西側は308号土壙と重複し、東側は調査区外へ展開していたため、検出できたのは、長さ2.0mであった。

遺構の規模は、幅0.4m～0.6m、深さ0.1m前後であった。

遺構は、303号土壙に壊されていた。また、308号土壙と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第89号溝跡（第539図）

W-14～Y-14グリッドから検出した。遺構は、W-14グリッドから蛇行しながら南進し、Y-14グリッドで183号竪穴住居跡を壊しながら、調査区外へ展開していた。

遺構の規模は、幅0.2m～1.2m、深さ0.09mであった。

遺構は、183号竪穴住居跡・38号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、183号竪穴住居跡よりも新しかったが、38号溝跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第90号溝跡（第539図）

Z-15～17グリッドから検出した。遺構は、77号溝跡と重複する、Z-15グリッドから直線的に東進し、186号竪穴住居跡を壊しながら直角に南に折れ、92号溝跡と重複する部分まで続いていた。溝跡は、92号溝跡の対岸には展開していないことから、この付近で立ち上がっていたと考えられる。また、遺構は、77号溝跡の対岸まで展開していたと考えられるが、溝は浅く、79号溝跡付近で土壙上に広がっていた。

遺構の規模は、幅0.5m～0.7m、深さ0.44m～0.47mであった。

遺構は、322号土壙、77・91・92号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、322号土壙より新しく、77・91・92号溝跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土したが、図示可能な遺物は、検出できなかった。また、鉄製品として刀子が出土した。

第91号溝跡（第539図・第547図）

Y-16～17グリッドから検出した。溝跡の両端は、立ち上がっていた。このうちの一端は、90号溝跡を壊していたが、90号溝跡のほうが深かったため、立ち上がりは消滅してしまった。

遺構の規模は、推定の長さ7.6m、幅0.5m～0.85m、深さ0.35m～0.44mであった。

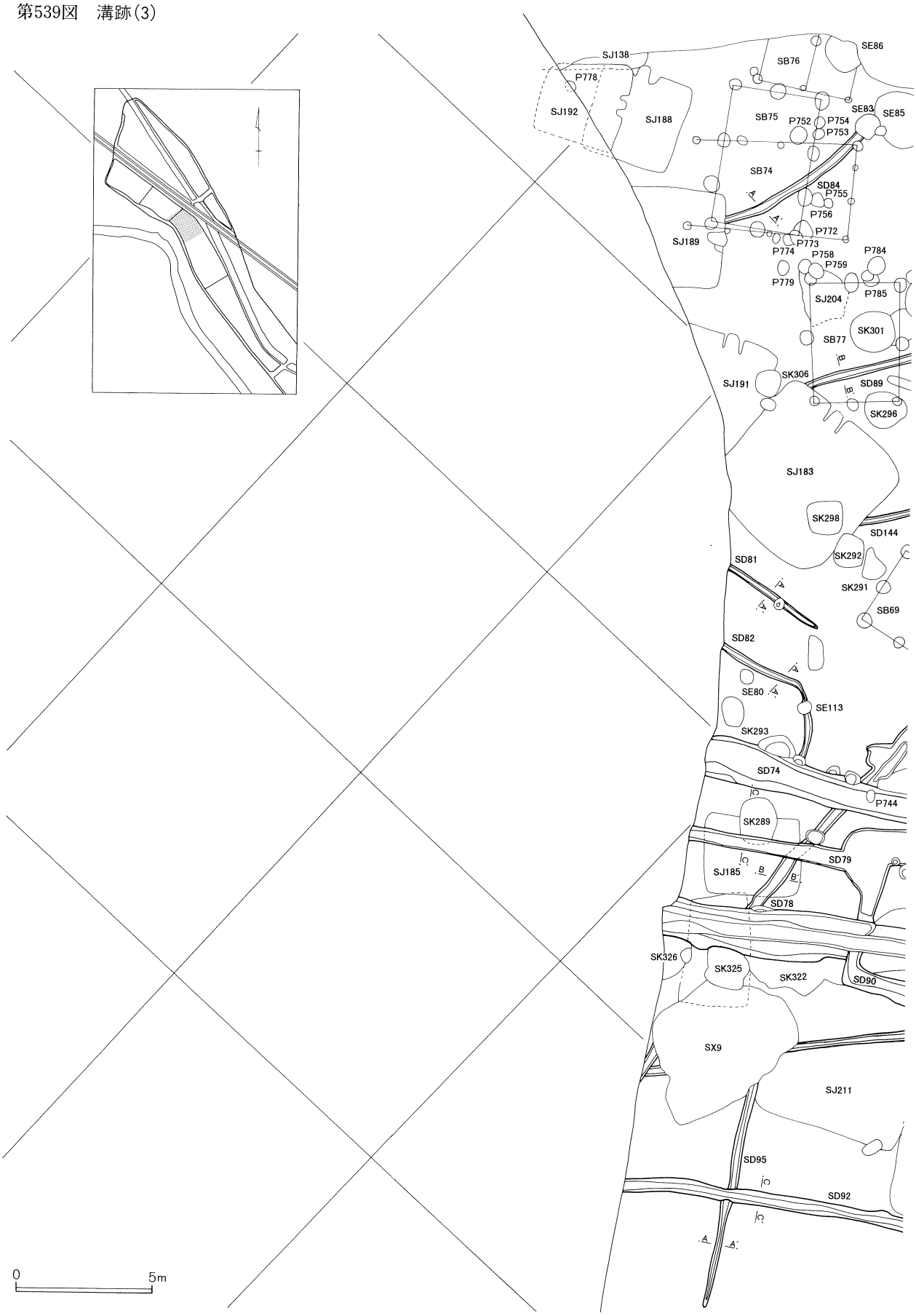
遺構は、90号溝跡、186号竪穴住居跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構が最も新しかった。

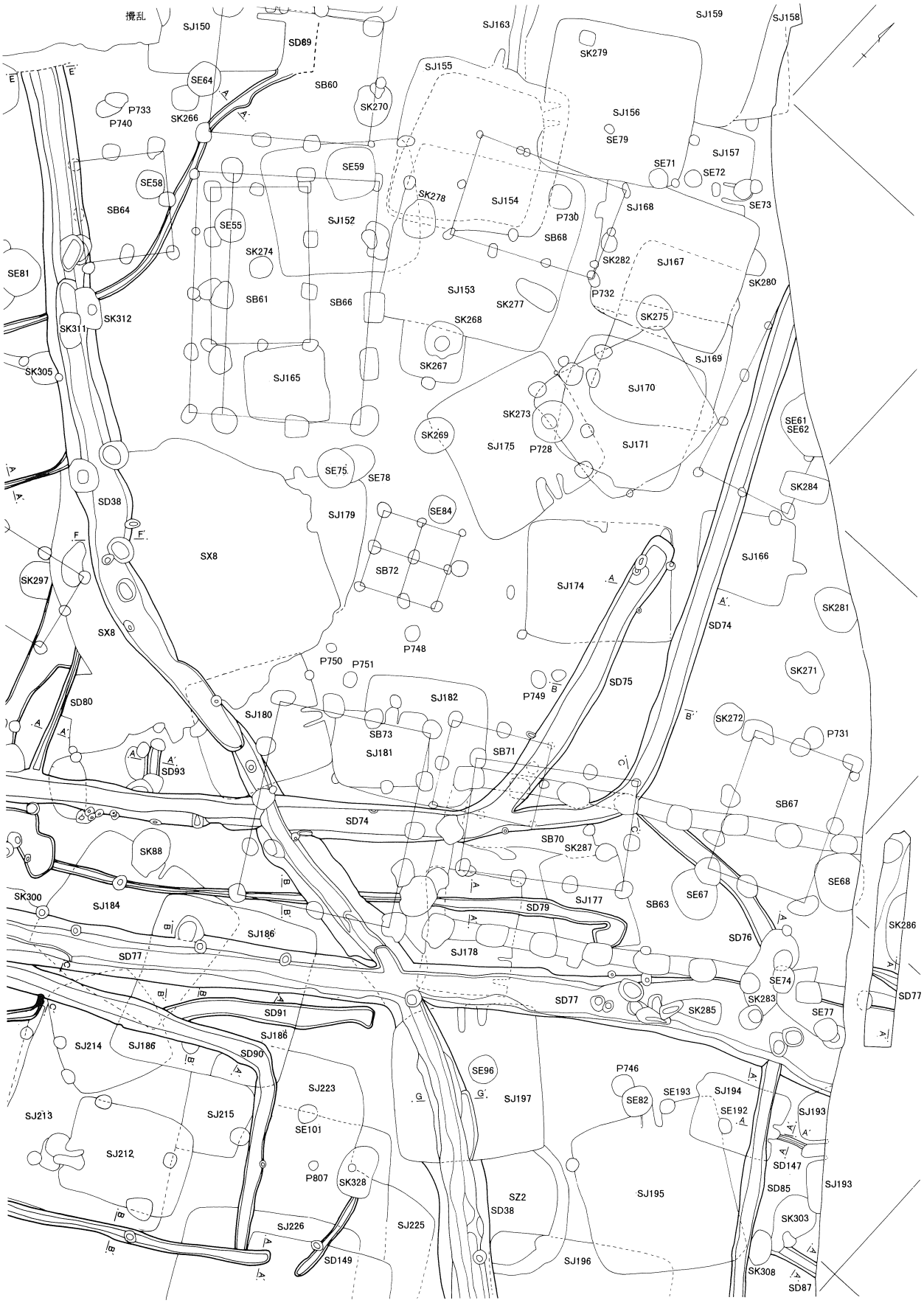
出土遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土したが、図示可能な遺物は、須恵器甕の破片1点と、鉄製品として斧が出土した。

第92号溝跡（第539図・第540図・第547図）

Z-17～AA-15グリッドから検出した。遺構はZ-17グリッドで立ち上がっていた。そこから調査区を横断するように直線的に西進し、AA-15グリッドで調査区

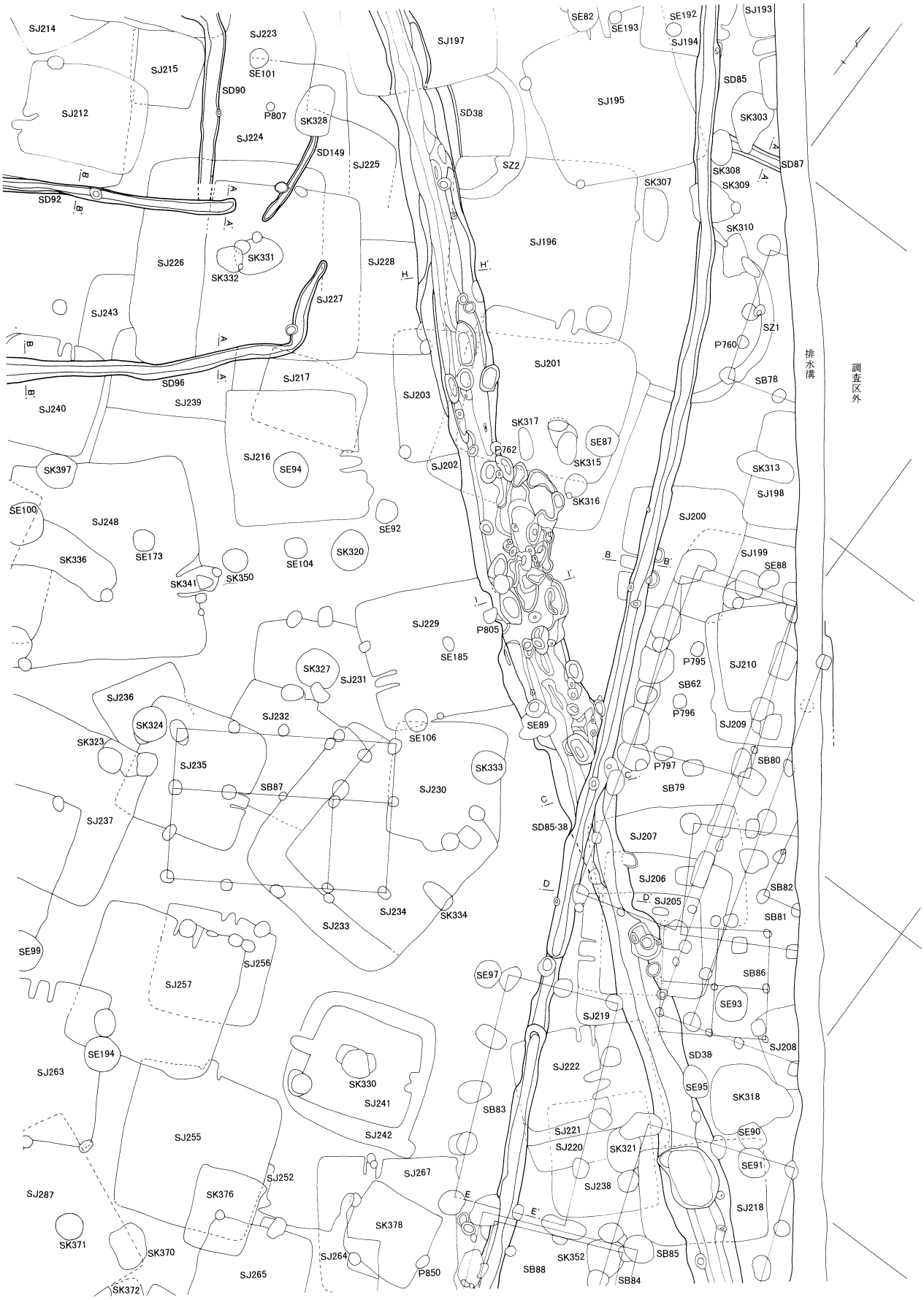
第539図　溝跡(3)


SJ138
P778
SJ192
SJ188
SB76
SE86
SB75
P752
P754
P753
SE83
SE85
SB74
SD84
P755
P756
P772
P773
SJ189
P774
P758
P759
P784
P779
SJ204
P785
SK301
SB77
SJ191
SK306
SD89
SK296
SJ183
SK298
SD144
SK292
SD81
SK291
SB69
SD82
SE80
SE113
SK293
SD74
P744
SK289
SD79
SJ185
SD78
SK326
SK325
SK322
SD90
SX9
SJ211
SD95
SD92
0
5m


撹乱
SJ150
SD89
SJ163
SJ159
SJ158
SK279
SJ155
SE64
SB60
SK270
SJ156
P733
P740
SK266
SE79
SJ157
SE71
SE72
SE59
SE58
SK278
SJ154
SJ168
SE73
SB64
SJ152
P730
SE55
SB68
SK274
SK282
SJ167
SE81
SK280
SJ153
P732
SB61
SB66
SK277
SK275
SK312
SK311
SK268
SJ169
SK305
SK267
SJ165
SJ170
SK273
SE61
SE62
SK269
SJ175
P728
SJ171
SE75
SE78
SK284
SD38
SJ179
SE84
SX8
SJ166
SK297
SB72
SJ174
SK281
SD74
SX8
P748
P750
P751
SK271
SD75
SD80
SJ182
P749
SJ180
SK272
SB73
P731
SJ181
SB71
SD93
SB67
SD74
SB70
SK287
SK88
SE68
SK300
SJ184
SJ177
SB63
SE67
SD79
SK286
SJ186
SD76
SD77
SJ178
SE74
SD77
SK283
SD77
SD91
SK285
SE77
SJ186
SJ214
SJ186
SD90
SE96
P746
SJ223
SJ197
SE82
SE193
SJ194
SJ213
SJ215
SE192
SJ193
SE101
SJ212
SD147
P807
SK328
SJ195
SJ193
SZ2
SD85
SD38
SK303
SJ226
SJ225
SD149
SJ196
SK308
SD87

第540図　溝跡(4)

SX9
SJ211
SJ213
SD92
SD95
SD94
SD96
SJ251
SJ254
SJ261
SK330
SD98
SK339
SE98
SJ260
SJ259
SK336
SJ262
SE63
SK337
SK351
SK340
SD97
SJ258
SK375
SK358
SK348
SE186
P806
SK361
SE190
SJ269
SK338
SJ275
SE189
SK343
SE187
SK362
SD100
SK342
SK346
SK344
SJ237
SK345
SK360
SJ273
SJ246
SJ245
SK353
SJ272
SJ276
SD148
SK354
SK359
SJ271
SJ274
SK355
SJ301
SJ263
SE109
P902
P903
P904
SJ277
SK373
SD148
SE107
SJ302
SJ309
P876
P906
SK392
P905
SE116
SJ311
SJ310
SE126
SE117
SK391
SJ287
SK448
SE110
SE118
SE108
SE132
SJ289
0
5m


SJ214
SJ215
SJ212
SJ223
SE101
SD90
P807
SK328
SJ224
SD149
SJ225
SJ197
SD38
SZ2
SE82
SE193
SE192
SJ194
SJ193
SJ195
SD85
SK303
SD87
SK308
SK309
SK307
SK310
SD92
SJ226
SK331
SK332
SJ228
SJ227
SJ196
SJ243
SZ1
P760
SJ201
SD96
SJ217
SJ203
SB78
排水溝
調査区外
SJ240
SJ239
SK317
SE87
SK315
P762
SJ202
SJ216
SE94
SK397
SK313
SJ198
SK316
SJ200
SE100
SJ248
SE92
SK336
SE173
SK320
SE104
SJ199
SE88
SK341
SK350
SJ229
P805
SE185
P795
SJ210
SK327
SJ231
SB62
SJ236
SJ232
P796
SJ209
SK324
SE106
SE89
SK323
SJ235
SK333
P797
SB80
SB87
SJ230
SB79
SJ237
SD85-38
SJ207
SJ206
SB82
SJ205
SJ234
SK334
SB81
SJ233
SE99
SJ256
SJ257
SE97
SB86
SE93
SJ219
SJ208
SE194
SD38
SJ263
SJ222
SK330
SE95
SK318
SJ241
SB83
SJ242
SJ221
SE90
SJ255
SJ220
SK321
SE91
SJ267
SJ252
SJ238
SJ287
SK376
SJ218
SK378
SK371
SK370
SJ264
SB85
SK352
SJ265
P850
SB88
SB84
SK372

外へ展開していた。

遺構の規模は、幅0.4m～0.6m、深さ0.23mから0.34mであった。

遺構は、90・95号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、90号よりも新しかったが、95号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片が出土した。

第93号溝跡（第539図・第548図）

Y-15グリッドから検出した。両端は、径0.5m～0.6m、深さ0.3mのピットとなっていた。遺構は、掘立柱建物跡の可能性もあったが、他にピットを検出できなかったため、溝跡とした。

遺構の規模は、長さ0.9m、幅0.4m～0.45m、深さ0.07mであった。

出土遺物は、中世常滑産の甕の破片が出土した。

第94号溝跡（第540図）

AA-16グリッドから検出した。遺構の北側は立ち上がっていたが、南側は96号溝跡に壊されていた。

遺構の規模は、幅0.3m、深さ0.07mであった。

遺構は、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあったが、伴う柱穴を検出できなかったため、溝跡とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第95号溝跡（第539図・第540図）

Z-15～AA-16グリッドから検出した。遺構は、AA-16グリッドから北進し、9号性格不明遺構でほぼ直角に東に折れ、90号溝跡まで続いていた。

遺構の規模は、幅0.4m、深さ0.12m前後であった。

遺構は9号性格不明遺構と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構が古かった。

本遺構は、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあったが、他に付属施設は検出できず、溝跡とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第96号溝跡（第540図）

Z-17～AA-16グリッドから検出した。遺構は、AA-16グリッドで調査区外へ展開していたが、そこからやや蛇行しながら東進し、Z-17グリッドで直角に北に折れ、立ち上がっていた。

遺構の規模は、幅0.5m～0.9m、深さ0.38m～0.78mであった。

遺構は、94号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構が新しかった。

出土遺物は、中世陶器片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第97号溝跡（第540図）

AB-17グリッドから検出した。遺構は、337号土壙に連結しているように見えるが、337号土壙を壊していた。

遺構の規模は、推定の長さ3.0m、幅0.45m～0.6m、深さ0.33mであった。

遺構は、337・348号土壙と重複していた。遺構の新旧関係は、337号土壙より新しかった。また、348号土壙との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器坏の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第98号溝跡（第540図・第548図）

AA・AB-16グリッドから検出した。遺構の両端は、339号土壙、98号井戸跡と重複していたため、検出できなかった。

遺構の規模は、推定の長さ7.0m、幅0.25m～0.5m、深さ0.1mであった。

遺構は、339号土壙・98号井戸跡と重複していた。遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、須恵器壺が出土した。

第99号溝跡（第541図）

AF-19～AG-18グリッドから検出した。西側は、調査区外へ展開し、東側は、283号竪穴住居跡と重複していたため、遺構の全体は検出できなかった。また、91号掘立柱建物跡の南側の梁行と平行していた。

遺構の規模は、幅0.2m～0.7m、深さ0.1m～0.2m前後であった。

遺構は、292・283号竪穴住居跡、92号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構が最も新しかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第100号溝跡（第540図）

AB-17～AC-17グリッドから検出した。遺構の両端は、立ち上がっていた。

遺構の規模は、推定の長さ4.7m、幅0.3m～0.4m、深さ0.09mであった。

遺構は、275号竪穴住居跡、189号井戸跡と重複していた。遺構の新旧関係は、275号竪穴住居跡を壊していたが、189号井戸跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器坏・須恵器坏の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第101号溝跡（第541図・第548図）

AE-23～AH-18グリッドから検出した。遺構は調査区を横断していた。遺構の両端は、調査区外へ展開していた。

遺構の規模は、幅0.8m～2.1m、深さ0.5m～0.74mであった。

断面の形状は、V字形、または逆台形であった。

遺構は、105号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、中世山茶椀系の鉢が出土した。また、鉄滓が出土した。

第102号溝跡（第541図）

AF-19～AG-18グリッドから検出した。遺構の東側は、立ち上がっており、西側は293号竪穴住居跡を壊しながら調査区外へ展開していた。

遺構の規模は、幅0.15m～0.3m、深さ0.14m前後であった。

遺構は、293・304号竪穴住居跡、91・92号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しかったが、掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第105号溝跡（第541図）

AD-23～AE-22グリッドから検出した。遺構は、101号溝跡と重複し、また調査区外へ展開していたため、遺構の全体を検出できなかった。

遺構の規模は、幅0.6m～0.95m、深さ0.76m前後であった。

断面の形状は、逆台形であった。

遺構は、338号竪穴住居跡、97・98号掘立柱建物跡・101号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡より新しかったが、101号溝跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

第140号溝跡（第538図）

U-11グリッドから検出した。遺構の両端は、42号井戸跡、38号溝跡と重複していたため、検出できなかった。

遺構の規模は、推定の長さ7.8m、幅0.2m～0.4m、深さ0.11mであった。

遺構は、42号井戸跡、38・65・137号溝跡と重複していたが、新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第141号溝跡（第538図）

U-14グリッドから検出した。遺構は、60号溝跡に壊されていたため、全体を検出できなかった。しかし、60号溝跡の対岸まで展開していないことから、60号溝跡付近で立ち上がっていたと思われる。

遺構の規模は、推定の長さ4.8m、幅0.2m～0.3m、深さ0.05mであった。

遺構は、60号溝跡に壊されていた。また、142・143号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

溝跡は、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあったが、他に付属施設が検出できなかったため、溝跡とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第142号溝跡（第538図）

U-14グリッドから検出した。遺構の両端は、他の遺構と重複していたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

遺構の規模は、幅0.25m～0.35m、深さ0.15m前後であった。

遺構は、60・141号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

第541図　溝跡(5)

P902
SJ301
SJ274
SE109
P903
P904
P900
SJ309
SK373
SD148
SJ302
SK413
SK392
P906
P876
P905
SJ311
SK391
SE116
SE126
SE117
SK448
SE110
SE108
SE118
SE125
SK383
SJ289
SE132
SK390
SK382
SJ288
撹乱
SJ423
SK387
SJ312
SK396
SJ290
SJ334
SB58
SJ324
SK385
撹乱
SE119
SK386
SK403
SJ335
P860
SE124
P861
SE120
SJ317
SK389
SB93
SJ319
SE188
SJ337
SJ322
SJ308
SJ318
SJ330
SB91
P869
P870
P872
SJ320
SJ313
P871
SJ307
SK407
SJ330
SK388
撹乱
P872
SJ304
SJ293
SB92
SB95
SJ315
SD102
SJ303
撹乱
SX12
SK384
SD99
SJ292
SJ295
SJ329
SJ283
P851
SJ294
SD85
SK399
SK400
SB89
P814
P815
SJ291
P812
SJ281
SK365
SK366
SJ285
SJ296
P813
P816
SJ279
SJ284
SJ297
SJ280
SD101
SB106
SJ282
SJ376
SJ377
SJ382
0
5m

SJ263
SJ241
SJ242
SE184
SK321
SE90
SE91
SD38
SJ255
SJ266
SB83
SJ220
SJ218
SK376
SJ267
SD85
SB84
SB85
SJ287
SK371
SK370
SJ265
SJ264
SE111
SE112
SK357
P850
SJ286
SJ250
SD38
排水溝
調査区外
SK372
SK367
SK349
SB88
P836
P835
SJ278
SE183
SK368
P848
SK369
SJ268
SK379
SK380
P849
SJ249
撹乱
SE105
P846
SK364
SK363
SE195
SJ270
SJ316
SJ321
SB90
SJ298
P819
SK404
P856
P857
SK377
SJ422
SX10
SZ3
P893
P865
SJ305
P892
SZ4
SK405
SE139
SK374
P818
P822
SJ317
P891
SJ336
SJ306
P864
P863
SJ300
P820
P857
P862
SE140
P821
SB96
SE134
SE127
SE137
SJ314
P855
SE121
SE128
SK406
P823
SJ299
SE138
SE136
SJ333
SE142
P866
SK397
SJ323
SJ342
P880
SE133
SJ340
SB94
P867
SX11
SE135
P885
SE122
SK412
SE123
P868
SJ328
SE131
SJ332
SJ341
P883
SJ339
SJ343
SB97
P858
SE141
SK411
P873
SE129
SD85
SJ331
P859
SB98
SJ338
SJ326
SJ325
SJ327
SE130
SK393
SK401
SK402
P884
SD105
SD101
SD101
SJ350
P899
P878
SJ347
SJ351
SK409
P877
SJ345
SK410
SJ349
SE142
SJ348
SD106
SJ346
SD107

溝跡は、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあったが、他に付属施設が検出できなかったため、溝跡とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第143号溝跡（第538図）

U-14グリッドから検出した。遺構の両端は、他の遺構と重複していたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

遺構の規模は、幅0.25m～0.8m、深さ0.1m前後であった。

遺構は、131号竪穴住居跡、141号溝跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

溝跡は、その形状から、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあったが、他に付属施設が検出できなかったため、溝跡とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第144号溝跡（第539図）

X・Y-14グリッドから検出した。遺構の両端は、38号溝跡、183号竪穴住居跡と重複していたため、検出できなかった。

遺構の規模は、幅0.2m、深さ0.9mであった。

遺構は、38号溝跡に壊されていた。また、183号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

溝跡は、その形状から、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあったが、他に付属施設が検出できなかったため、溝跡とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第145号溝跡（第538図）

V-13・14グリッドから検出した。溝跡の一端は、73号溝跡に壊されていたため、検出できなかった。

遺構の規模は、推定の長さ3.4m、幅0.2m～0.3m、深さ0.12mであった。

溝跡は、その形状から、竪穴住居跡の壁溝の可能性もあったが、他に付属施設が検出できなかったため、溝跡とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第146号溝跡（第538図）

V-12～W-11グリッドから検出した。遺構の両端は、他の遺構と重複していたため、検出できなかった。

遺構の規模は、幅0.2m～0.4m、深さ0.14m～0.48mであった。

遺構は、176号竪穴住居跡、55・56号掘立柱建物跡を壊していた。

出土遺物は、検出できなかった。

第147号溝跡（第539図）

X-18グリッドから検出した。遺構の両端は、他の遺構と重複していたため、検出できなかった。

遺構の規模は、幅0.2m、深さ0.05mであった。

遺構は、193・194号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第148号溝跡（第540図）

AC-17グリッドから検出した。遺構は、西側は調査区外へ展開し、東側は274号竪穴住居跡と重複していたため、全体を検出できなかった。

遺構の規模は、幅0.35m、深さ0.11mであった。

遺構は、276号竪穴住居跡を壊していた。また、274号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第149号溝跡（第540図）

Y-17・Z-17グリッドから検出した。遺構の一端は、227号竪穴住居跡内で立ち上がっていたが、もう一方は、328号土壙と重複しており、確認できなかった。

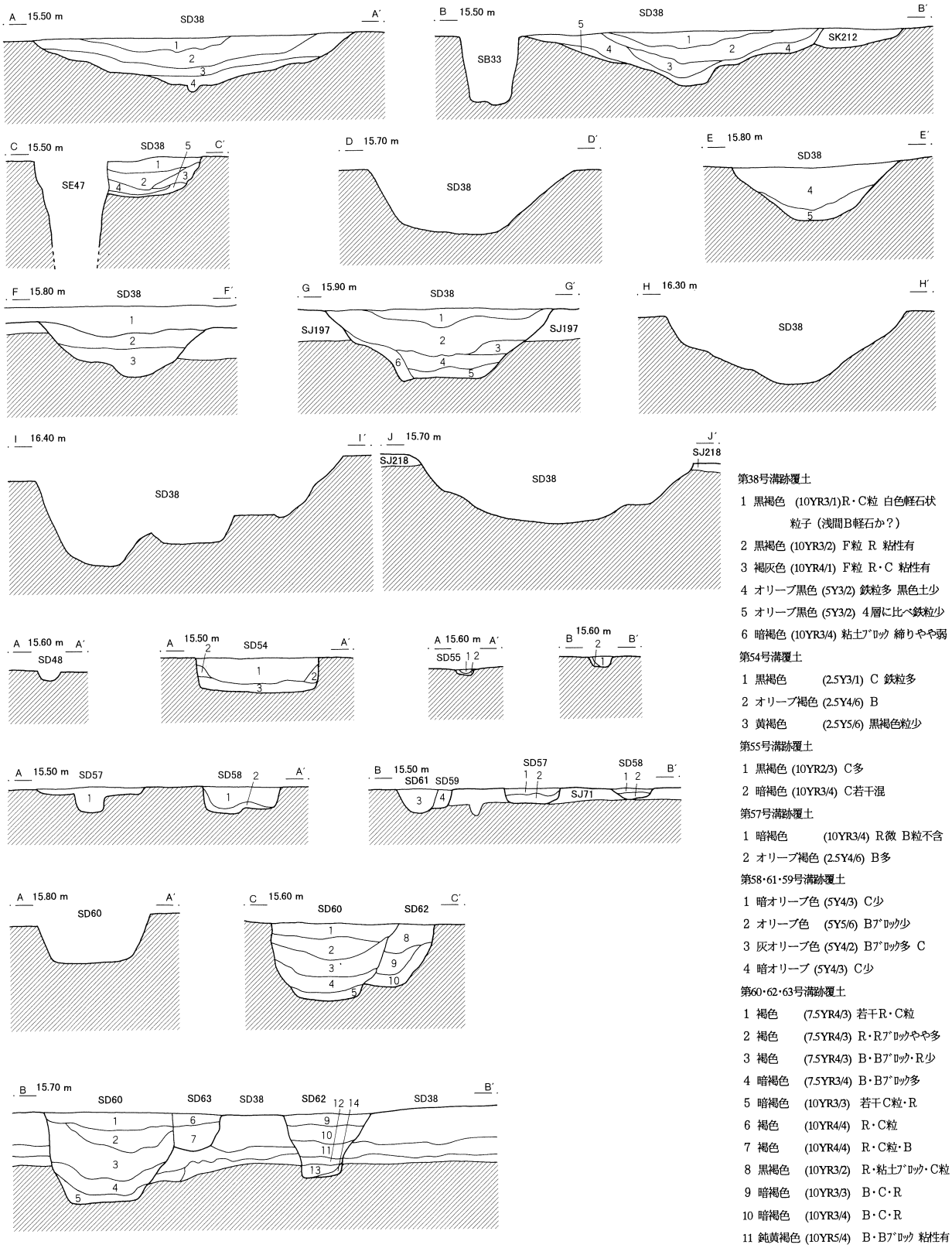
規模は、幅0.3m～0.35m、深さ0.4mであった。

遺構は、226・227号竪穴住居跡、328号土壙と重複していた。新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しかった。328号土壙との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

本遺構は、隣接する92号溝跡と、形状・深さが似ており、同一の遺構であった可能性もあるが、明らかにはできなかった。

第542図　溝跡断面図(1)



第38号溝跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/1)R・C粒 白色軽石状粒子（浅間B軽石か？）
2 黒褐色 (10YR3/2) F粒 R 粘性有
3 褐灰色 (10YR4/1) F粒 R・C 粘性有
4 オリーブ黒色 (5Y3/2) 鉄粒多 黒色土少
5 オリーブ黒色 (5Y3/2) 4層に比べ鉄粒少
6 暗褐色 (10YR3/4) 粘土ﾌﾞﾛｯｸ 締りやや弱

第54号溝覆土

1 黒褐色 (2.5Y3/1) C 鉄粒多
2 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) B
3 黄褐色 (2.5Y5/6) 黒褐色粒少

第55号溝跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) C多
2 暗褐色 (10YR3/4) C若干混

第57号溝跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) R微 B粒不含
2 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) B多

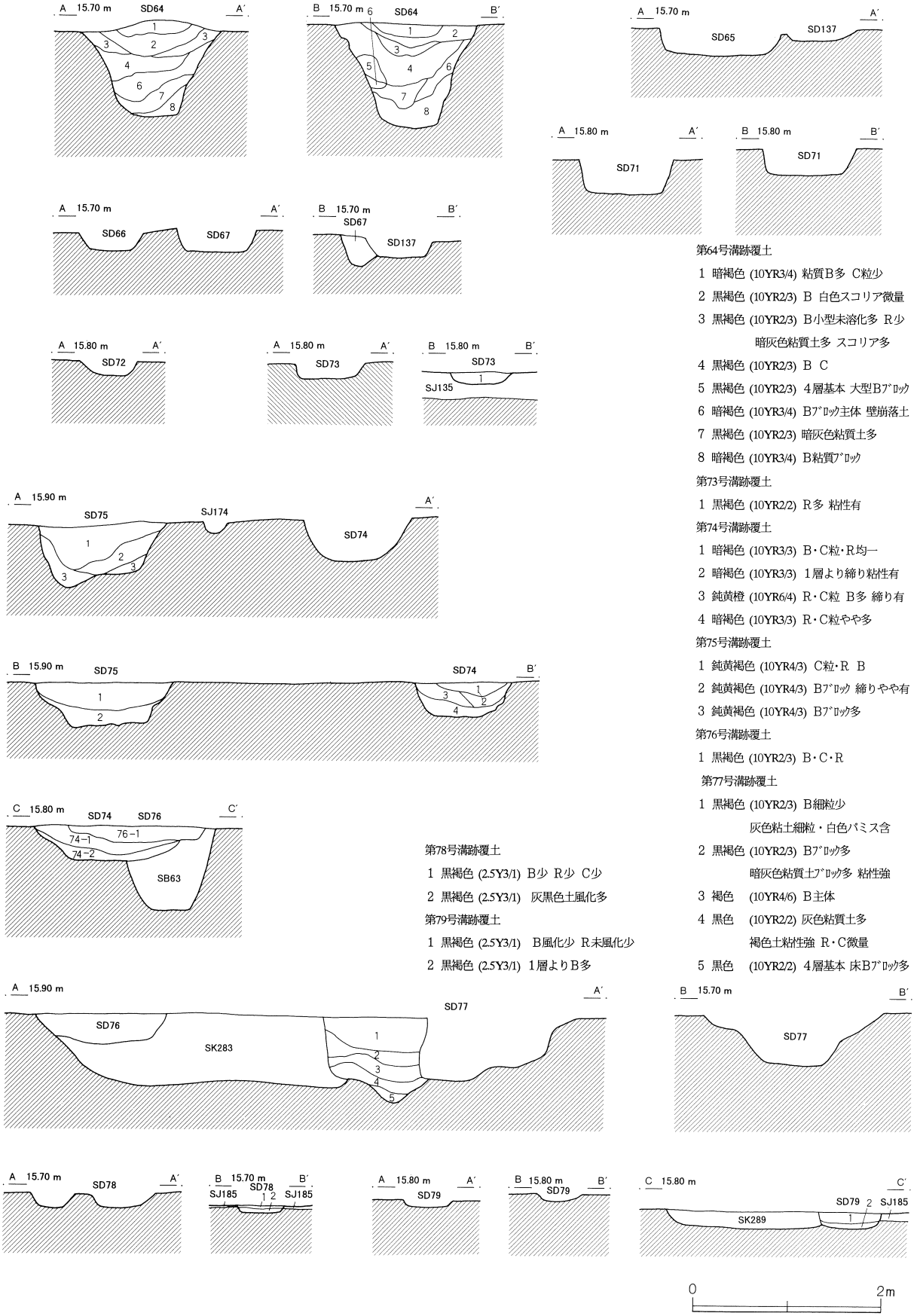
第58・61・59号溝跡覆土

1 暗オリーブ色 (5Y4/3) C少
2 オリーブ色 (5Y5/6) Bﾌﾞﾛｯｸ少
3 灰オリーブ色 (5Y4/2) Bﾌﾞﾛｯｸ多 C
4 暗オリーブ (5Y4/3) C少

第60・62・63号溝跡覆土

1 褐色 (7.5YR4/3) 若干R・C粒
2 褐色 (7.5YR4/3) R・Rﾌﾞﾛｯｸやや多
3 褐色 (7.5YR4/3) B・Bﾌﾞﾛｯｸ・R少
4 暗褐色 (7.5YR3/4) B・Bﾌﾞﾛｯｸ多
5 暗褐色 (10YR3/3) 若干C粒・R
6 褐色 (10YR4/4) R・C粒
7 褐色 (10YR4/4) R・C粒・B
8 黒褐色 (10YR3/2) R・粘土ﾌﾞﾛｯｸ・C粒
9 暗褐色 (10YR3/3) B・C・R
10 暗褐色 (10YR3/4) B・C・R
11 鈍黄褐色 (10YR5/4) B・Bﾌﾞﾛｯｸ 粘性有
12 暗褐色 (10YR3/3) B・C粒混入
13 褐色 (10YR4/4) B・C粒やや多
14 黒褐色 (10YR2/3) C粒・R 締り粘性弱

第543図　溝跡断面図(2)



第64号溝跡覆土
1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質B多 C粒少
2 黒褐色 (10YR2/3) B 白色スコリア微量
3 黒褐色 (10YR2/3) B小型未溶化多 R少
暗灰色粘質土多 スコリア多
4 黒褐色 (10YR2/3) B C
5 黒褐色 (10YR2/3) 4層基本 大型Bブロック
6 暗褐色 (10YR3/4) Bブロック主体 壁崩落土
7 黒褐色 (10YR2/3) 暗灰色粘質土多
8 暗褐色 (10YR3/4) B粘質ブロック

第73号溝跡覆土
1 黒褐色 (10YR2/2) R多 粘性有

第74号溝跡覆土
1 暗褐色 (10YR3/3) B・C粒・R均一
2 暗褐色 (10YR3/3) 1層より締り粘性有
3 鈍黄橙 (10YR6/4) R・C粒 B多 締り有
4 暗褐色 (10YR3/3) R・C粒やや多

第75号溝跡覆土
1 鈍黄褐色 (10YR4/3) C粒・R B
2 鈍黄褐色 (10YR4/3) Bブロック 締りやや有
3 鈍黄褐色 (10YR4/3) Bブロック多

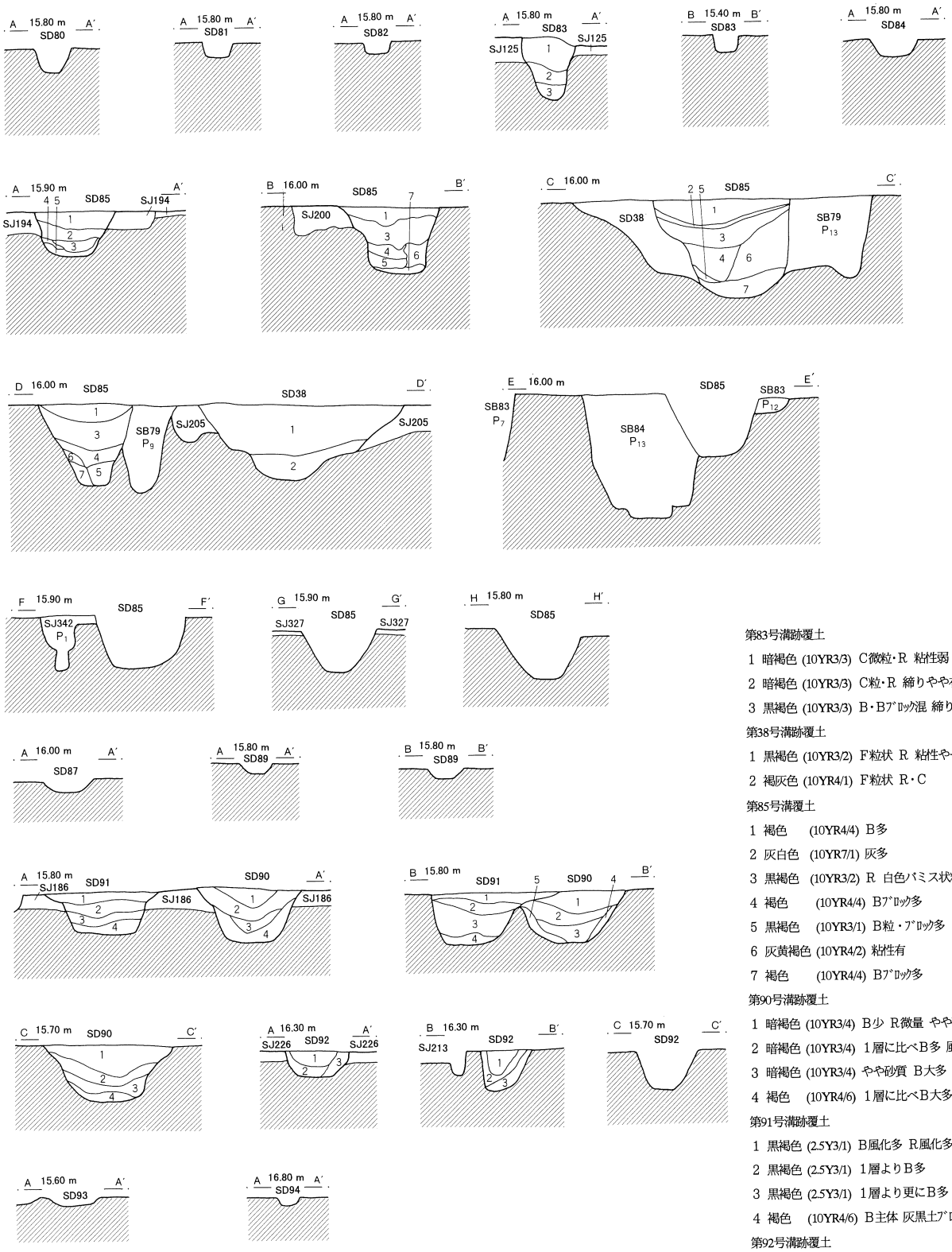
第76号溝跡覆土
1 黒褐色 (10YR2/3) B・C・R

第77号溝跡覆土
1 黒褐色 (10YR2/3) B細粒少
灰色粘土細粒・白色パミス含
2 黒褐色 (10YR2/3) Bブロック多
暗灰色粘質土ブロック多 粘性強
3 褐色 (10YR4/6) B主体
4 黒色 (10YR2/2) 灰色粘質土多
褐色土粘性強 R・C微量
5 黒色 (10YR2/2) 4層基本 床Bブロック多

第78号溝跡覆土
1 黒褐色 (2.5Y3/1) B少 R少 C少
2 黒褐色 (2.5Y3/1) 灰黒色土風化多

第79号溝跡覆土
1 黒褐色 (2.5Y3/1) B風化少 R未風化少
2 黒褐色 (2.5Y3/1) 1層よりB多

第544図　溝跡断面図(3)



第83号溝跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/3) C微粒・R 粘性弱

2 暗褐色 (10YR3/3) C粒・R 締りやや有

3 黒褐色 (10YR3/3) B・Bﾌﾞﾛｯｸ混 締り有

第38号溝跡覆土

1 黒褐色 (10YR3/2) F粒状 R 粘性やや有

2 褐灰色 (10YR4/1) F粒状 R・C

第85号溝覆土

1 褐色 (10YR4/4) B多

2 灰白色 (10YR7/1) 灰多

3 黒褐色 (10YR3/2) R 白色パミス状粒子

4 褐色 (10YR4/4) Bﾌﾞﾛｯｸ多

5 黒褐色 (10YR3/1) B粒・ﾌﾞﾛｯｸ多

6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性有

7 褐色 (10YR4/4) Bﾌﾞﾛｯｸ多

第90号溝跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) B少 R微量 やや硬い

2 暗褐色 (10YR3/4) 1層に比べB多 風化

3 暗褐色 (10YR3/4) やや砂質 B大多

4 褐色 (10YR4/6) 1層に比べB大多

第91号溝跡覆土

1 黒褐色 (2.5Y3/1) B風化多 R風化多少

2 黒褐色 (2.5Y3/1) 1層よりB多

3 黒褐色 (2.5Y3/1) 1層より更にB多

4 褐色 (10YR4/6) B主体 灰黒土ﾌﾞﾛｯｸ少

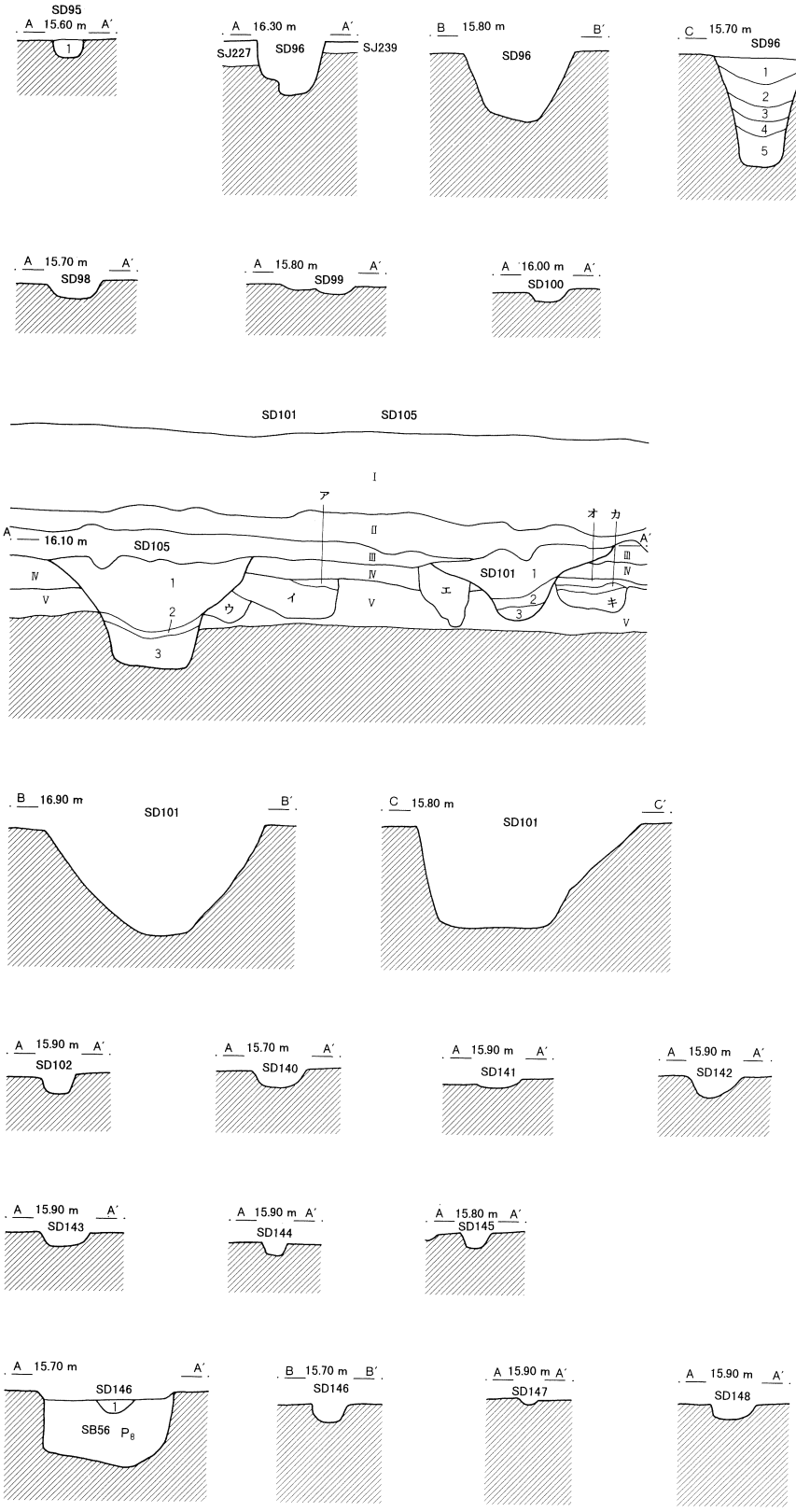
第92号溝跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) B少 R少 C未風化少

2 暗褐色 (10YR3/4) 1層に同 やや粒子大

3 暗褐色 (10YR3/4) 1層に同 B多量混

第545図　溝跡断面図(4)



第95号溝跡覆土

1 黒色 (10YR2/1) 黒色土主体 B未風化多少 R未風化少 全体粘性強

第96号溝跡覆土

1 黒褐色 (10YR2/3) B風化多少 やや砂質 硬く締る

2 黒褐色 (10YR2/3) 1層よりB大多

3 黒褐色 (10YR2/3) 1層より更にB大多

4 黒褐色 (10YR2/3) B風化多

5 黒褐色 (10YR2/3) 4層よりBやや多

第101・105号溝跡覆土

I 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土主体 白色粒子混入 締り粘性有

II 灰黄褐色 (10YR4/2) 若干R B若干混入

III 暗褐色 (10YR3/3) R・C粒・B 土器片若干混入 締りやや有

IV 黒褐色 (10YR3/2) R・C粒・B 土器片混在 II層よりやや暗い

V 黄褐色 (10YR5/6) B (二次堆積による) 粘性やや有 砂質粒混

第101号溝跡覆土

1 灰黄褐色 (10YR4/2) 白色粒・B

2 鈍黄褐色 (10YR4/3) B若干 R・C粒混入

3 灰黄褐色 (10YR4/2) Bﾌﾞﾛｯｸやや多

第105号溝跡覆土

1 灰黄褐色 (10YR4/2) 白色粒・B

2 鈍黄褐色 (10YR5/3) B・白色粒

3 灰黄褐色 (10YR4/2) R・C粒 B混入

古代 (古墳～平安遺構覆土)

ア 鈍黄褐色 (10YR4/3) やや粗粒 B混 締りやや弱

イ 褐色 (10YR4/4) R・C粒 締る

ウ 褐色 (10YR4/4) B・Bﾌﾞﾛｯｸ・C粒・R

エ 褐色 (10YR4/4) R・C粒・B混入

オ 褐色 (10YR4/4) R・C粒 締りやや有 (住居跡覆土の可能性有)

カ 褐色 (10YR4/4) B・Bﾌﾞﾛｯｸ多 (貼り床の可能性有)

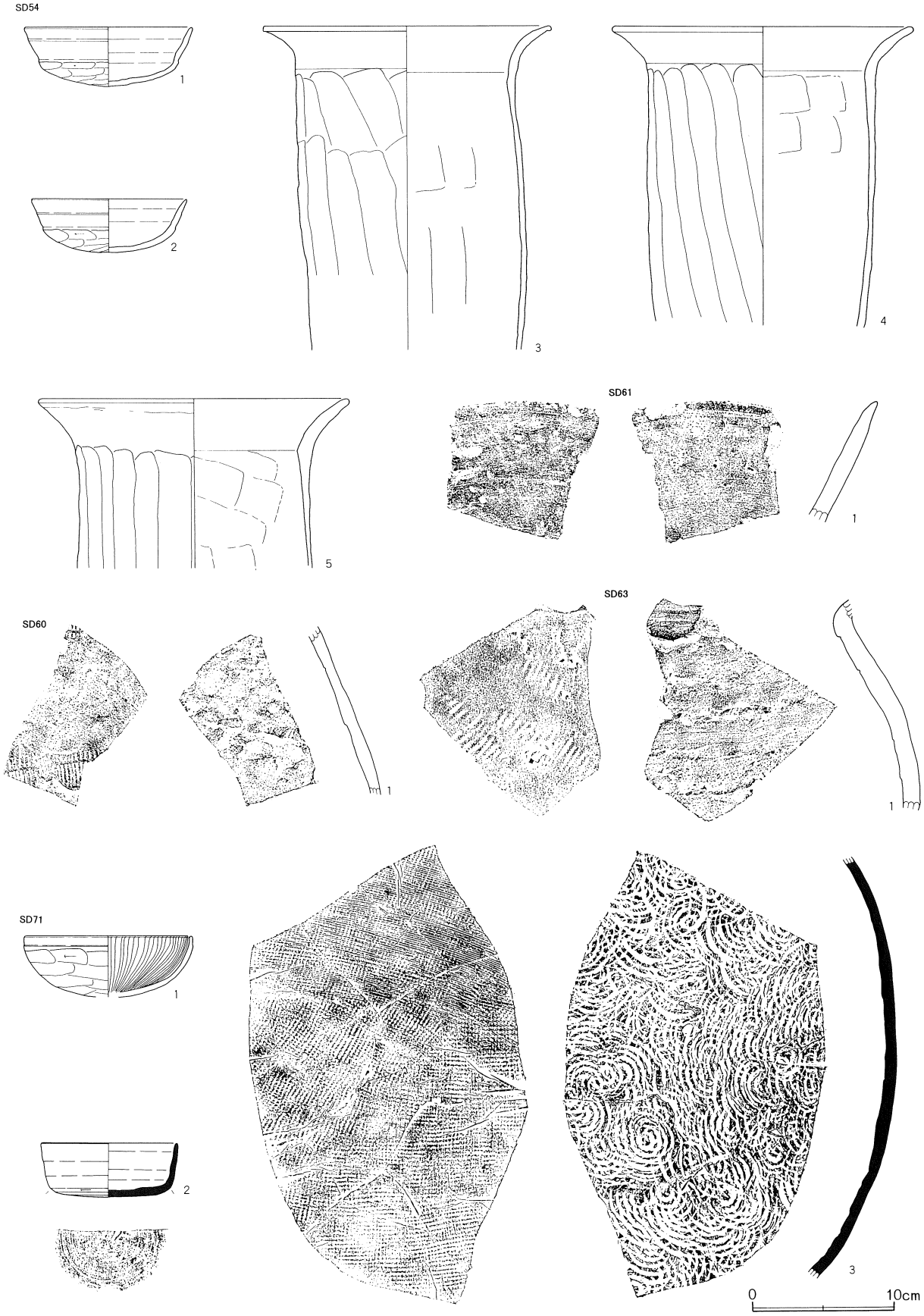
キ 灰黄褐色 (10YR4/2) R B 締りやや有

第146号溝跡覆土

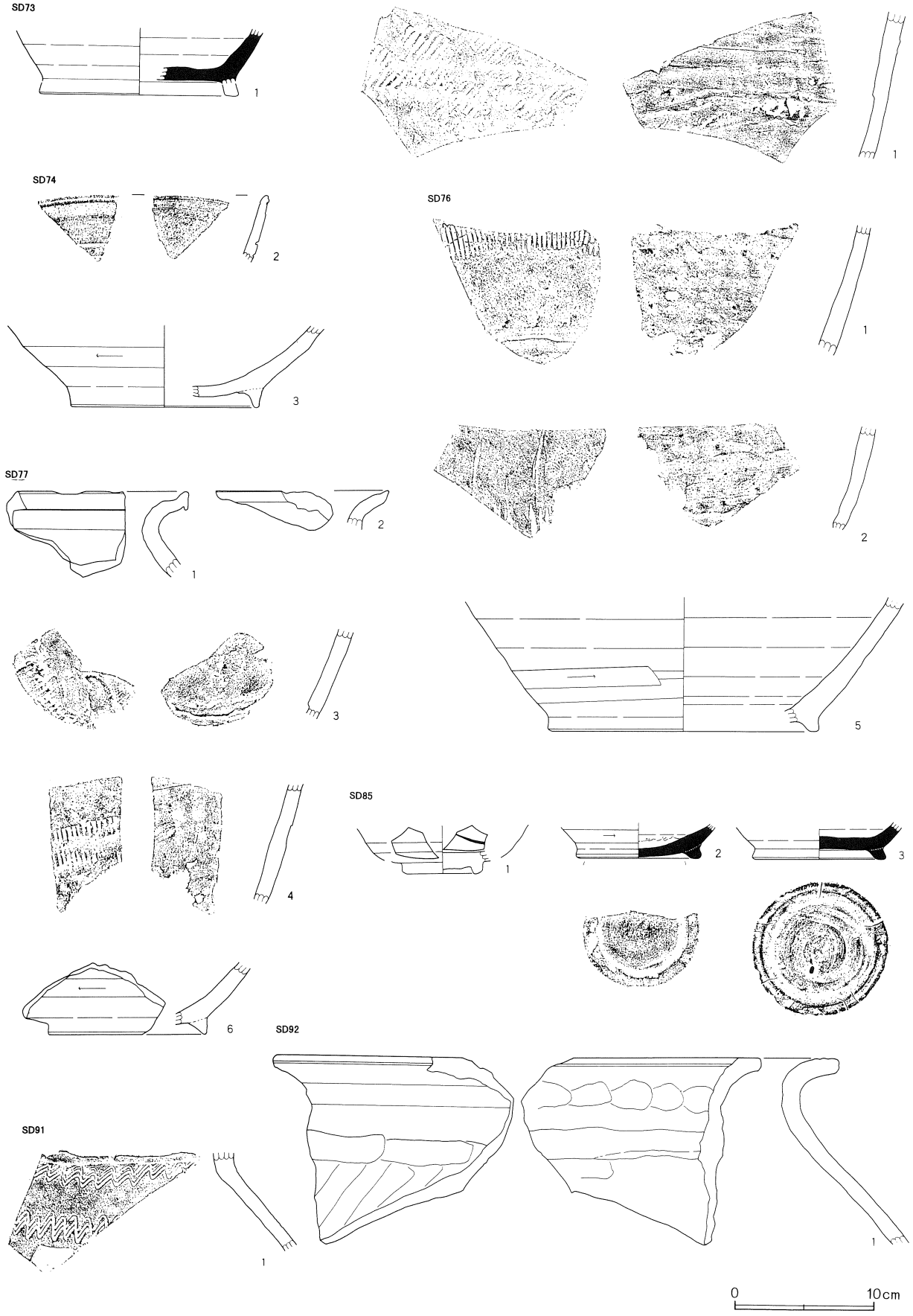
1 黒褐色 (10YR3/1) B微量

0　2m

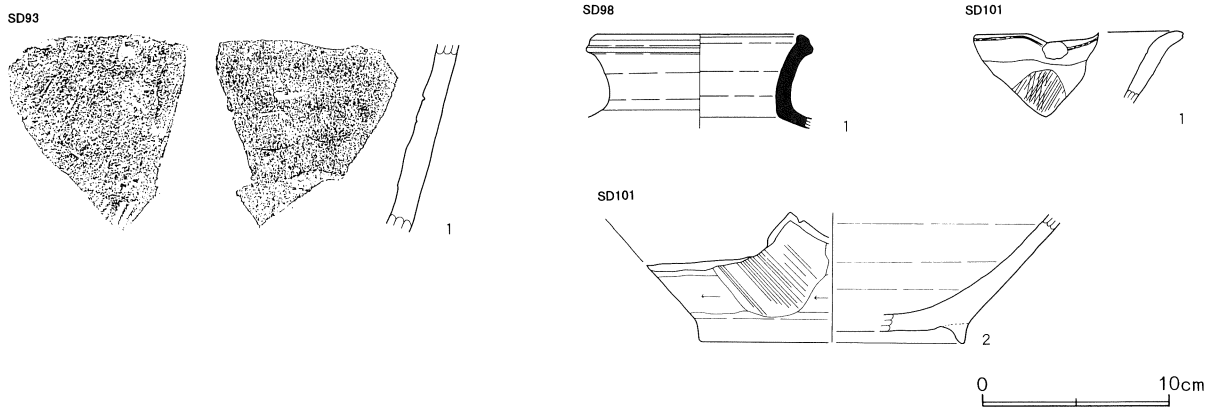
第546図　溝跡出土遺物(1)



第547図　溝跡出土遺物(2)



第548図　溝跡出土遺物(3)



溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
54-1	坏	11.8	4.2		BDEJ	4	浅黄橙	60	
54-2	坏	10.8	3.7		BDEJ	3	浅黄	50	
54-3	甕	20.2			ABDEFHJ	3	橙	60	
54-4	甕	21.2			ADEHJK	3	明黄褐	60	
54-5	甕	21.6			ABDEHJK	2	浅黄橙	60	
60-1	甕				BJL	2	鈍褐	破片	常滑
61-1	鉢				BJL	2	褐	破片	常滑
63-1	甕				BJ	1	灰	破片	常滑 肩部に自然釉
71-1	坏	(11.8)			ADFHJ	2	橙	40	暗文
71-2	坏	9.5	3.8	8.3	ADHL	2	青灰	50	在地
71-3	甕				BFJL	1	灰	破片	
73-1	甕			(14.0)	ABCFK	3	灰	40	南比企？
74-1	甕				BJ	2	暗灰	破片	常滑
74-2	鉢				BFJ	2	灰白	破片	常滑
74-3	鉢			(14.0)	BFJ	1	灰	40	山茶椀系
76-1	甕				ABJL	1	褐	破片	常滑
76-2	甕				ABFJL	1	褐	破片	常滑
77-1	甕				BFJ	1	鈍赤褐	破片	常滑
77-2	甕				BFJ	1	明赤褐	破片	常滑
77-3	甕				BJ	2	灰	破片	常滑
77-4	甕				BJL	3	褐	破片	常滑
77-5	鉢			(19.6)	BFJ	2	橙	10	常滑 甕系
77-6	鉢				BFJ	2	灰黄	破片	山茶椀系
85-1	青磁椀					1	オリーブ灰	破片	
85-2	長頸瓶			(9.0)	BF	1	灰白	60	湖西？ 内面自然釉
85-3	長頸瓶			9.6	AIJKL	2	橙	80	南比企 赤焼け 底部完存
91-1	甕				BJL	2	暗灰	破片	櫛描波状文
92-1	甕	(40.0)			BFJ	2	鈍赤褐	破片	常滑
93-1	甕				BFJ	2	鈍赤褐	破片	常滑
98-1	壺	10.8			BFJ	2	灰白	100	肩部内面赤焼け
101-1	片口鉢				BFJ	1	灰	破片	山茶椀系
101-2	鉢			(14.0)	BFJ	1	黄灰	25	山茶椀系

第38号溝跡出土遺物（第549図～第555図）

38号溝跡からは、奈良・平安時代の遺物を中心に多量の遺物が出土した。このうち、実測可能な土器は、土師器坏・甕・鉢、須恵器坏・椀・高台坏・皿・蓋・長頸瓶・甕、灰釉陶器、内黒土器、硯等122点であった。また、土玉、土錘、砥石、刀子などが出土した。

なお、遺物の計測値等の詳細については、遺物観察表に示した。

1～3は、土師器坏である。3点とも、偏平な底部であるが、1・2は、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部が僅かに外反していた。3は、外反気味に立ち上がり、口縁端部は内側に僅かに屈曲していた。3点とも、底部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ整形であった。体部下半部は、指頭押えと考えられるが、ナデによって不明瞭であった。

4～6は、土師器甕である。6は台付甕で、4も口径が小さく、小型の台付甕であったと思われる。

7は、土師器鉢である。底部は欠損していたが、平底であったと考えられる。

8～75は、須恵器坏である。須恵器坏は、出土点数が多い。底部の調整方法には、手持ちヘラケズリ(8)、周辺部回転ヘラケズリ（9～14)・糸切り後無調整（15～74）があった。また、回転ヘラ切りの坏も1点認められた（75)。

8は、底部全面手持ちのヘラケズリ調整が施された坏である。全体的に厚手であった。胎土には、黒色粒子、砂粒、チャートの小石を含んでいたが、産地は特定できなかった。

9～14は、糸切り後、底部周辺部に回転ヘラケズリされる坏である。9は体部下端部までヘラケズリされていた。胎土から、全て南比企産と考えられる。

15～74は、糸切り後、無調整の坏である。

15～28は、底径が口径の1/2以上のものである。口径は12cm～15cm、底径は6.5cm～7.5cm前後であった。胎土の特徴から、15～21は末野産、22～27は南比企産、28は東金子産と考えられる。

29～52・72は、底径が口径の1/2前後のものである。口径は11cm代～12cm前後、底径は6cm前後であった。胎土の特徴から、29～47・72が南比企産、48～50は末野産、51・52は東金子産と考えられる。また、72は墨書土器である。体部外面と内面底部に墨書が認められた。同一の文字と考えられるが、判読できなかった。

53～71・73は、底径が口径の1/2未満のものである。口径は11cm～12cm前後で、底径は5cm代であった。胎土の特徴から、53～64は末野産、65～70・73は南比企産、71は東金子産と考えられる。また、73には墨書が認められた。体部外面に、「○」と読める記号が書かれていたが、不鮮明であった。

74は、口径11cm前後の小型の坏である。全体的に厚手である。底部の調整は、糸切り後無調整であった。胎土には、黒色粒子、白色粒子、砂粒を多く含んでいたが、産地は明らかにできなかった。

75は、底部の切り離し技法が、ヘラ切りの坏である。全体的に薄手で、体部は直線的に立ち上がる。胎土、技法の特徴から、常陸産と考えられる。

76～81は、須恵器椀である。胎土の特徴から、全て南比企産と考えられる。底部の調整は、糸切り後全面ヘラケズリ（77)、周辺ヘラケズリ（76・78・79)、未調整（80・81）がある。

82～88は、高台付坏である。82は、底部のみの破片である。底部は、全面ヘラケズリされていた。83も底部の破片である。底部は厚く、高台が高い。胎土には、片岩を含んでいることから、末野産の可能性がある。84は、口径が11.4cmとやや小型の坏である。高台は、外側に開く。全体的に薄手であった。胎土の特徴から、南比企産と考えられる。85は、口径が10.7cmと小型の坏である。偏平な底部から直線的に立ち上がる。高台は、外側に開く。胎土には、片岩を含んでいることから、末野産と考えられる。86は、高台付坏と考えられるが、口縁部を欠損していた。体部は腰を造らずに上方へ立ち上がる。胎土に砂粒を含んでいたが、産地は特定できなかった。87・88は、口縁部を欠損していた。88は、内面底部が摩耗していた。墨痕は認められなかっ

たが、転用硯の可能性がある。

89は、高台付椀である。全体的に薄く、高台は大きく外側に開く。胎土には片岩を含んでおり、末野産と考えられる。

90～94は、無台の皿である。底部の調整は、すべて糸切り後無調整であった。胎土の特徴から、93は南比企産、90～92・94は末野産と考えられる。

95・96は、高台付皿である。２点とも、口縁端部は外反し、高台は外側に開く。胎土には白色針状物質を含んでいたことから、南比企産と考えられる。

97～106は、須恵器蓋である。天井部につまみを持つものと、つまみを持たないものがあった。

97は、須恵器皿の上下を反転させた形態の蓋である。天井部は、糸切り後、無調整であった。黄灰色の胎土で、砂粒、白色粒子、黒色粒子を含んでいたが、産地の特定はできなかった。

98～102・104～106は、口縁部を欠損していた。つまみは概ね小型であるが、100は径4.2cmで、大型で偏平なつまみである。101はつまみを欠損していたため、形状は不明である。胎土には、白色針状物質を含んでおり、全て南比企産と考えられる。

103は、つまみを持たない蓋と考えられる。口縁部を欠損していた。天井部は、ヘラケズリ調整が施されていた。胎土には、白色針状物質を含んでおり、南比企産と考えられる。

107～109は、内面に黒色処理を施した土器である。107は、底部は糸切り後無調整、内面は横方向のヘラミガキの後、黒色処理されていた。108は、高台付皿と考えられる。口縁部を欠損していた。高台の形状は、やや外側に開く三角形であった。内面は、ヘラミガキの後、黒色処理されていた。109は、坏と考えられるが、口縁部を欠損していた。底部は、糸切後無調整、内面は横方向のヘラミガキの後、黒色処理されていた。

110～112は、須恵器長頸瓶である。110は、底部を欠損していたが、高台を有していたと考えられる。肩部には、自然釉がかかっていた。全体的に薄く、硬質であった。産地の特定はできなかったが、搬入品と考えられる。111は、胴部上半部以上を欠損していた。胴部の下端部は、横方向にヘラケズリされていた。112は、高台は残存していたが、底部が円形に抜け落ちていた。また、胴部上半部以上を欠損していた。胴部の下端は、横方向にヘラケズリされていた。胎土には、白色針状物質を含んでおり、南比企産と考えられる。

113～120は、須恵器甕である。

113は、口径38cmと、大型の甕である。口縁部の破片であったため、全体の形状は不明である。頸部には、沈線で区画された、櫛描の波状文が、５段施されていた。胎土に白色針状物質を含んでおり、南比企産と考えられる。114・115は、底部を欠損していた。２点とも、胎土に白色針状物質を含んでおり、南比企産と考えられる。

116は、底部と口縁部を欠損していた。胎土には、白色針状物質を含んでおり、南比企産と考えられる。

117は、器高46.7cmと、比較的大型の甕である。第８号性格不明遺構から出土した破片と接合した。底部は丸底であった。底部付近には、焼台に使われたと考えられる甕の破片が付着していた。全体的に薄く、硬質であった。胎土には、白色針状物質を含んでいた。

118・119は、同一固体と考えられる甕である。胴部を欠損していたため、接合はできなかった。底部は平底で、全体的に薄く、硬質であった。胎土に、白色針状物質を含んでおり、南比企産と考えられる。

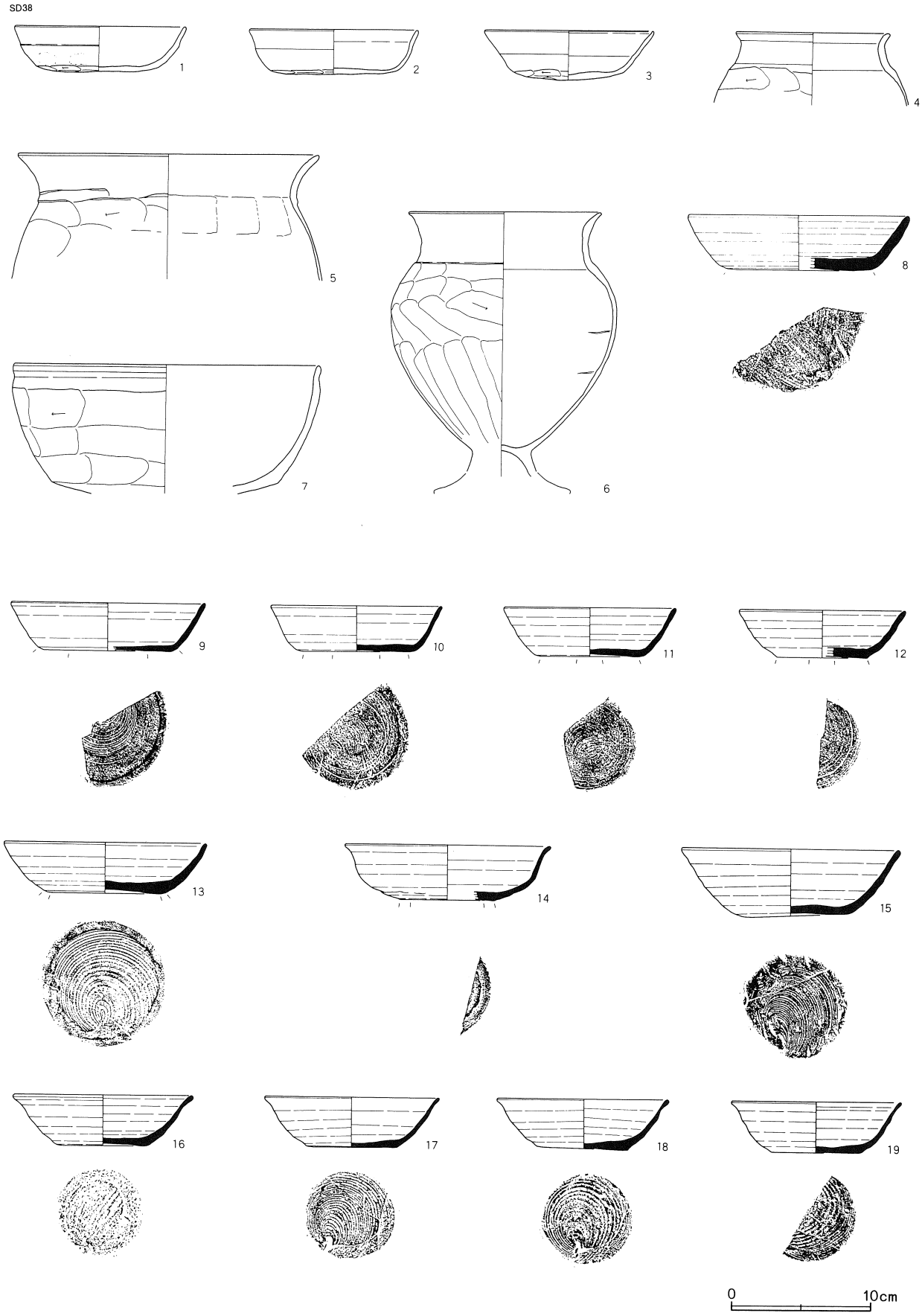
120は、胴部下半部以下を欠損していた。肩部は丸みを持った撫肩状で、頸部の屈曲は弱い。口縁端部は、粘土紐の貼り付けにより、厚くなっていた。口縁部はヨコナデ、胴部外面は粗い平行タタキが施され、内面には無文の当て具痕が認められた。胎土は粗く、砂粒・石英等を含んでいた。また、白色針状物質を含んでいたため、南比企産の可能性もあるが、上記の特徴から、千葉産とも考えられる。

121は、灰釉陶器である。内面は、釉によって緑色味が強い。

122は円面硯である。外堤と脚部を欠損していたため、全体の形状は不明である。

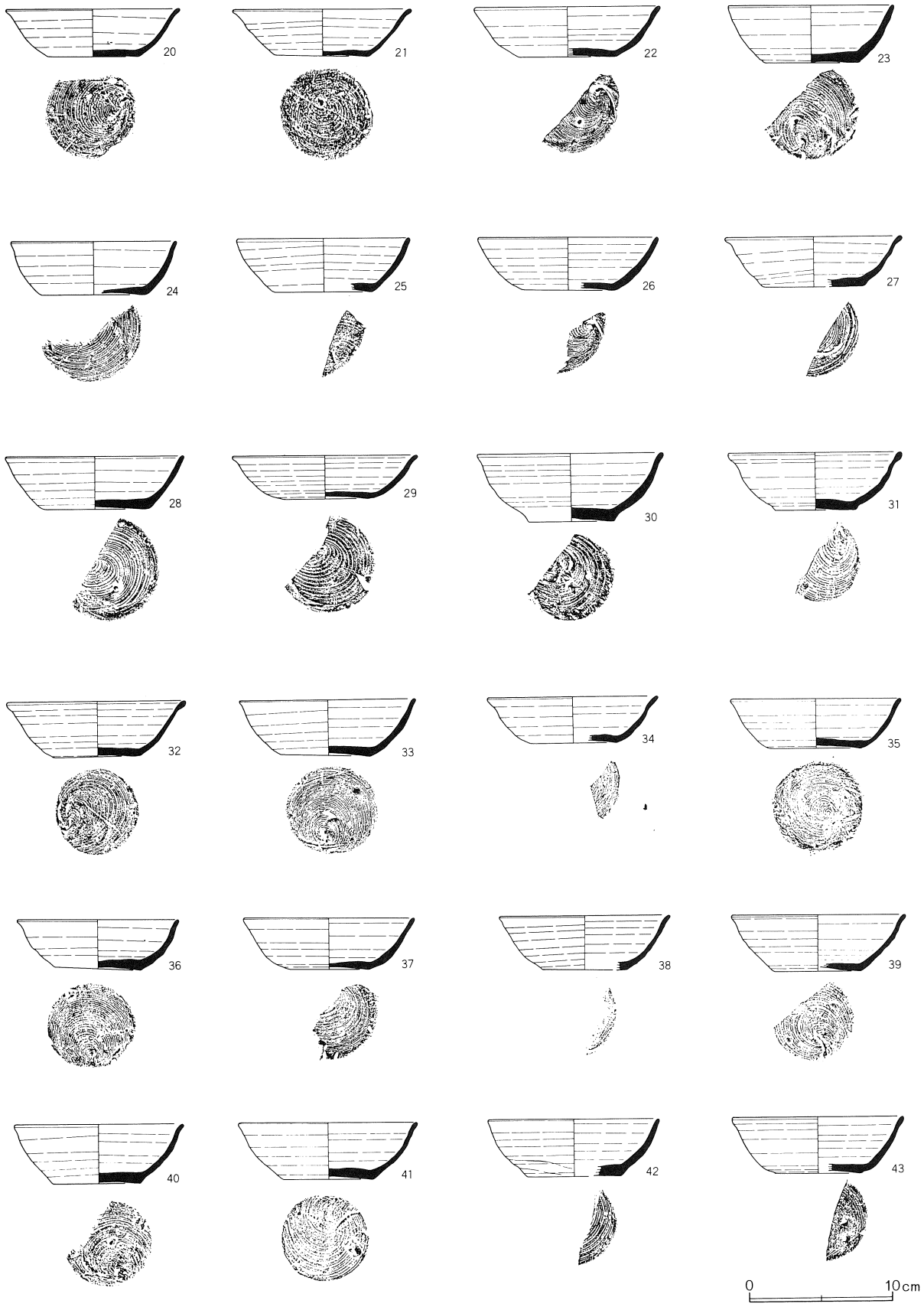
第549図　第38号溝跡出土遺物(1)

SD38



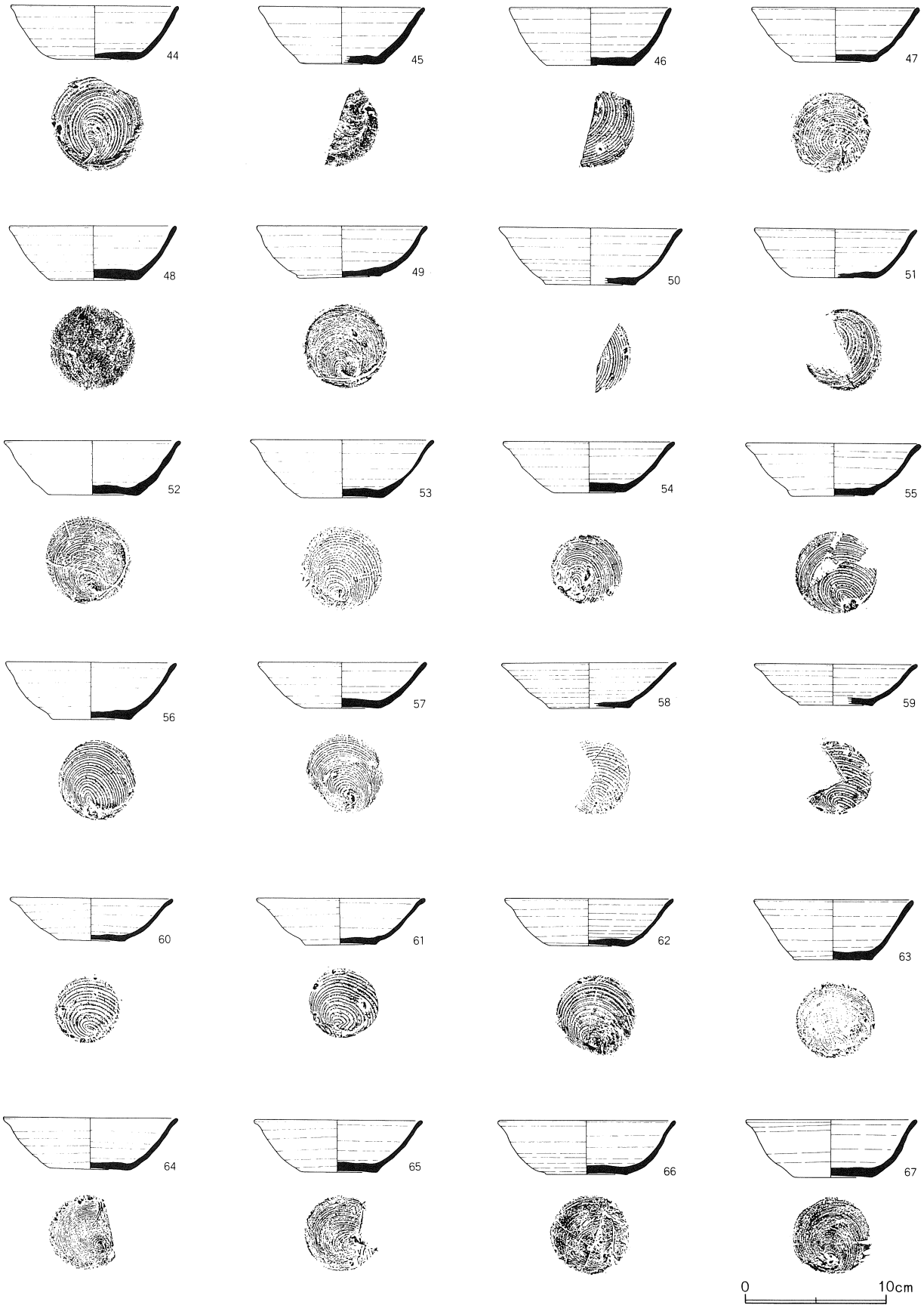
第550図　第38号溝跡出土遺物(2)

SD38



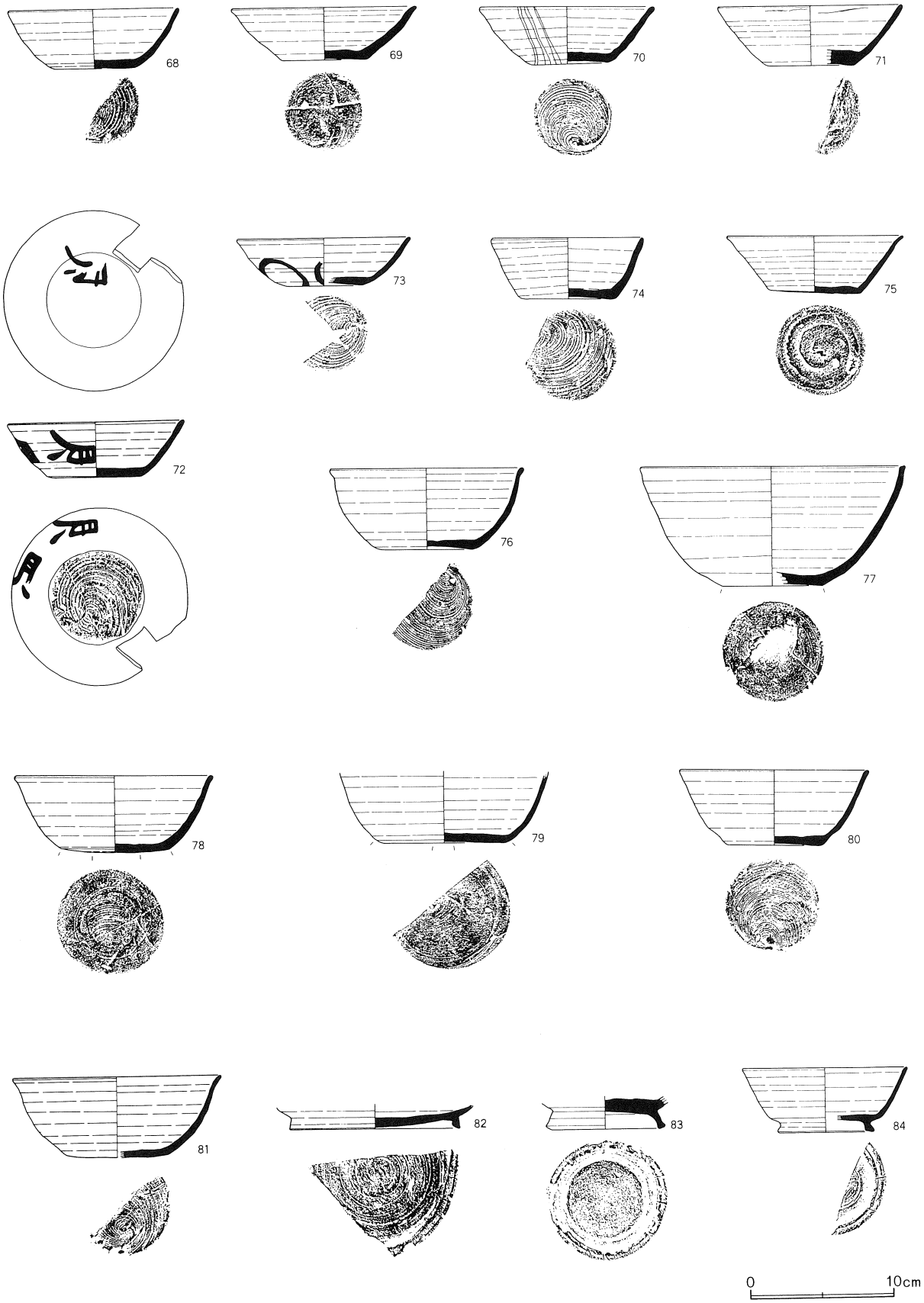
第551図　第38号溝跡出土遺物(3)

SD38

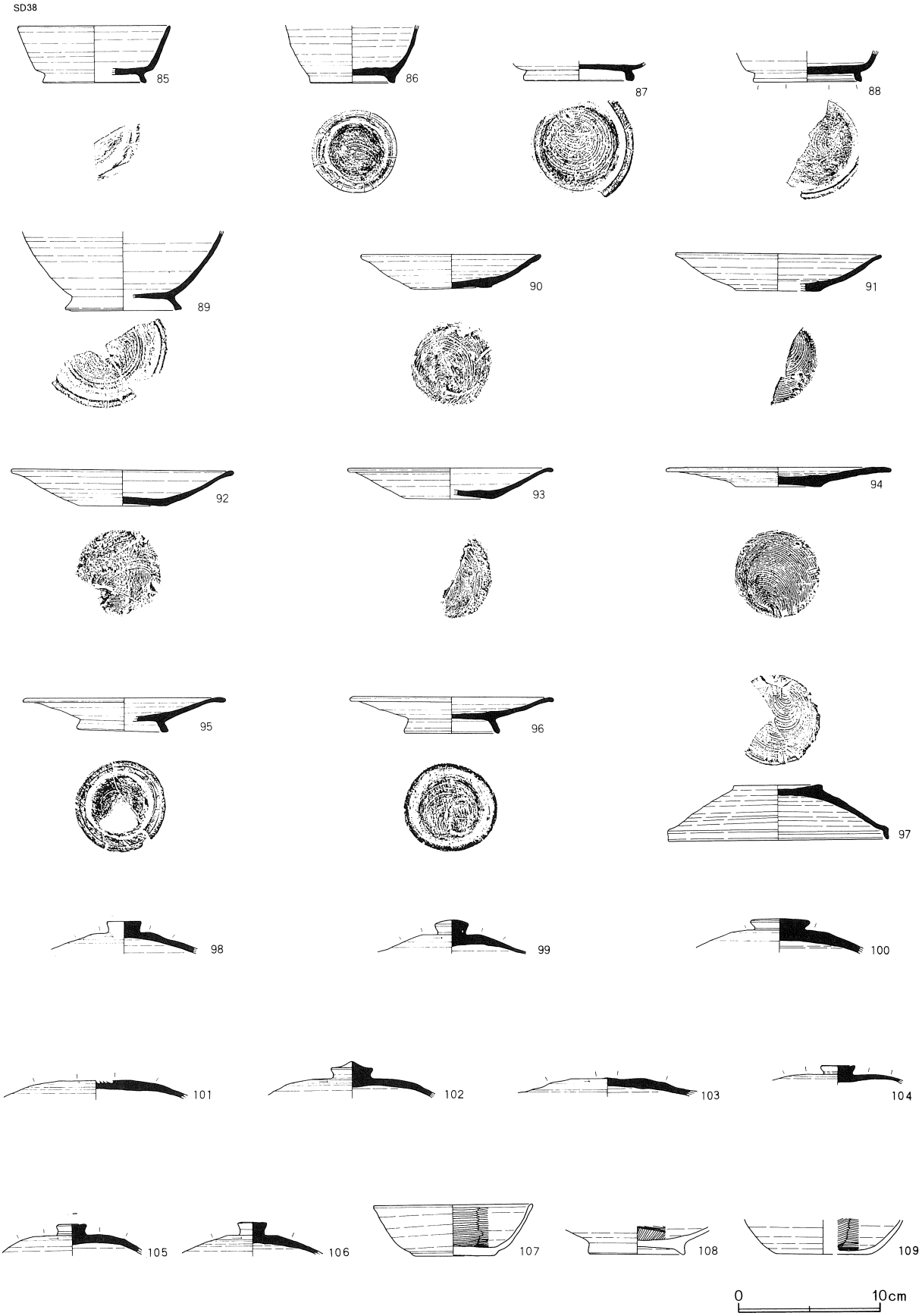


第552図　第38号溝跡出土遺物(4)

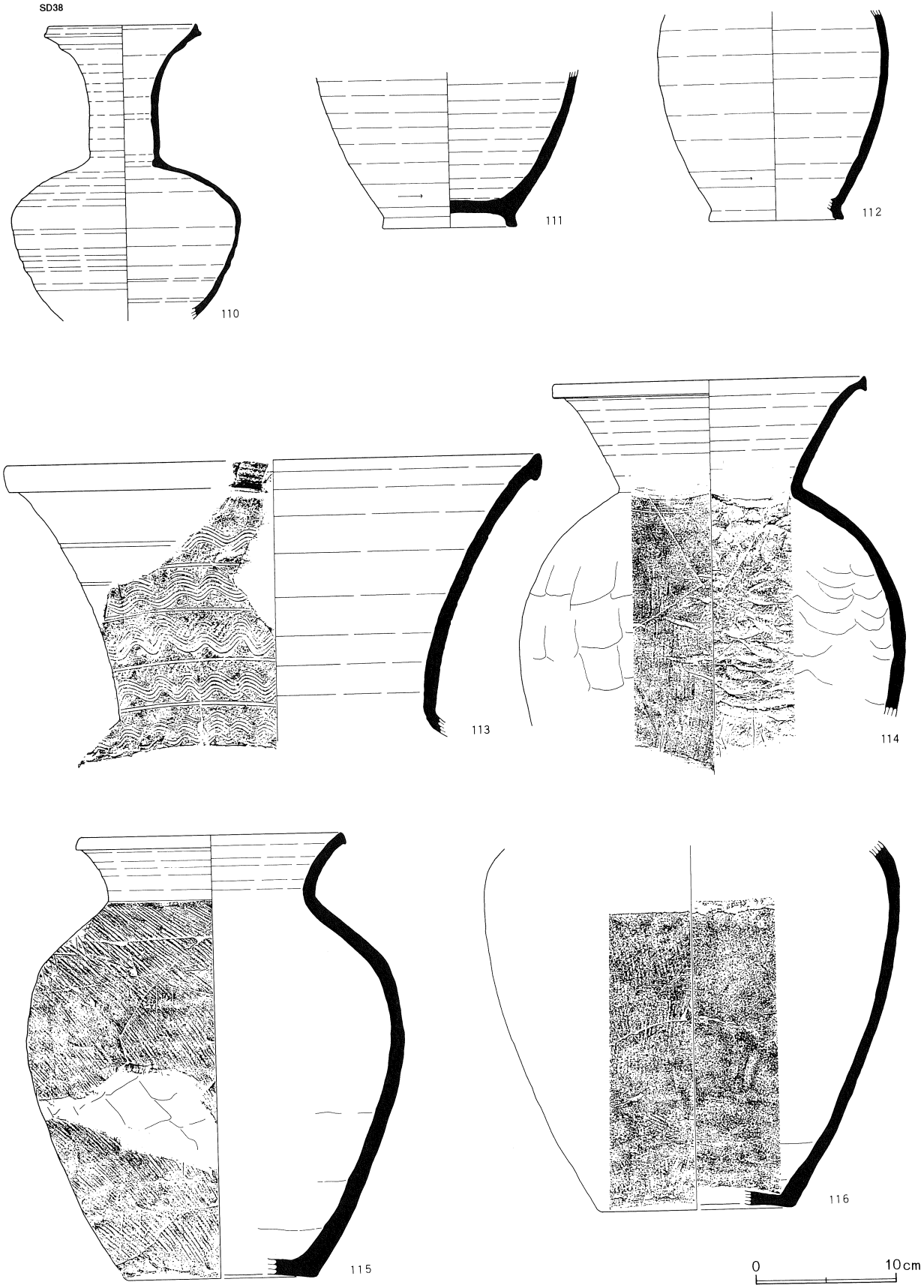
SD38



第553図　第38号溝跡出土遺物(5)

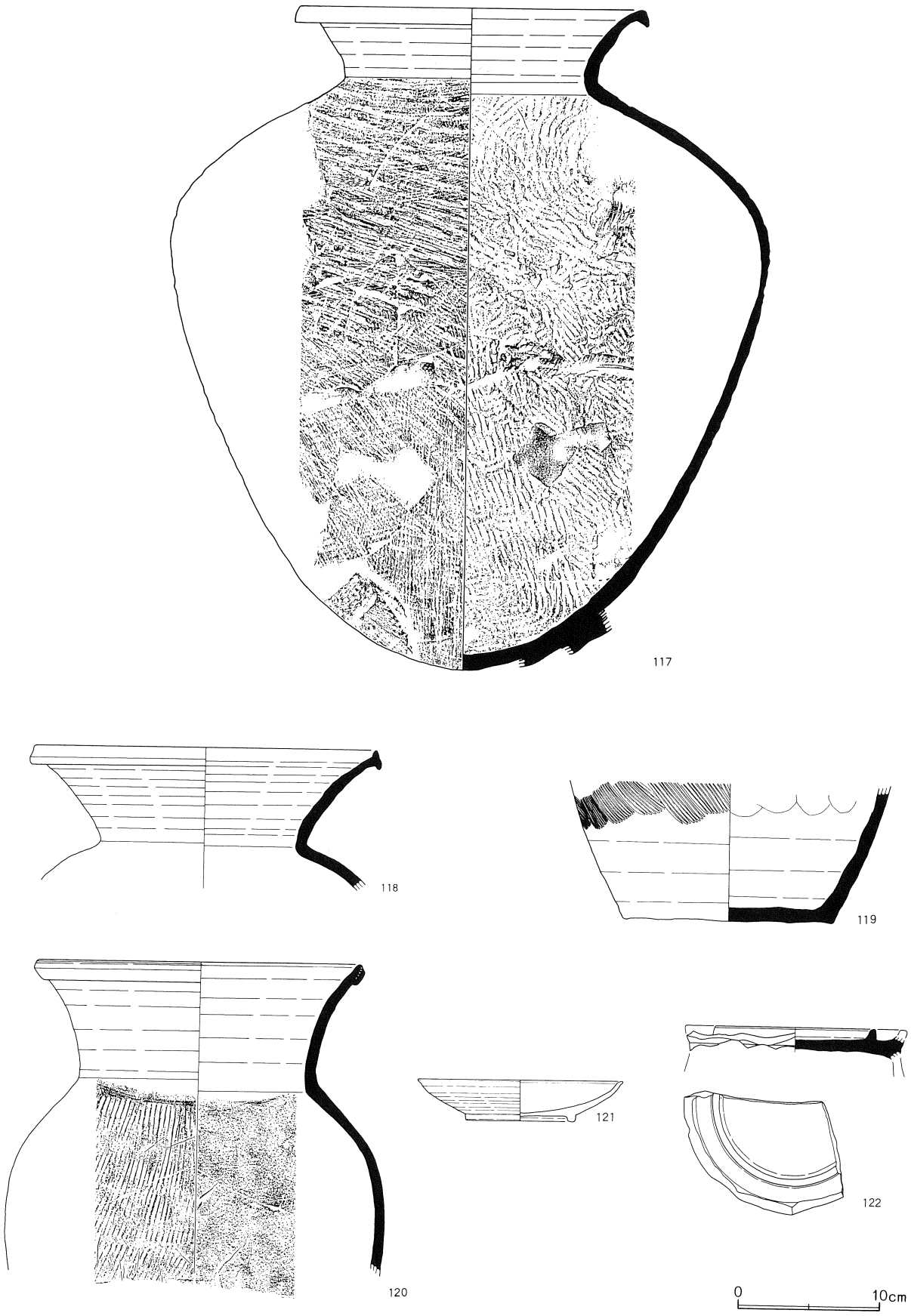


第554図　第38号溝跡出土遺物(6)



第555図　第38号溝跡出土遺物(7)

SD38



第38号溝跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.2	3.3		BDEHJK	2	橙	70	
2	坏	12.2	3.2		BDEHJ	2	橙	50	
3	坏	12.0	3.5		BDEHJ	3	橙	80	
4	甕	(11.0)			ABDEHK	2	明赤褐	20	
5	甕	(21.6)			ADEHJ	2	鈍黄褐	20	
6	台付甕	(14.0)			ABDEJ	2	橙	60	
7	鉢	(22.0)			ADEH	2	明褐	90	
8	坏	(15.8)	3.9	(10.5)	BFJK	2	灰	20	産地不明 手持ヘラ
9	坏	(13.8)	3.5	(9.0)	BIJK	2	灰	25	南比企 周辺ヘラ
10	坏	(12.3)	3.3	7.5	EIJ	2	灰	30	南比企 周辺ヘラ
11	坏	(12.2)	3.5	7.0	BFIJ	2	灰白	35	南比企 周辺ヘラ
12	坏	(11.8)	3.5	6.4	BIJ	2	灰	30	南比企 周辺ヘラ
13	坏	(14.4)	3.7	7.8	BFIJK	2	灰	70	南比企 外周ヘラ
14	坏	(14.8)	3.9	(6.8)	BFIJL	2	灰	30	南比企 外周ヘラ
15	坏	15.8	5.0	7.5	BDFHJKL	2	灰白	85	末野？ 糸切り
16	坏	(12.8)	3.6	6.6	ABDEFHJK	2	灰黄	80	末野
17	坏	12.6	3.6	6.7	AEFHJKL	2	灰白	95	末野
18	坏	12.5	3.6	6.6	FHJKL	2	灰白	90	末野？
19	坏	(12.2)	3.6	6.6	BFHJK	2	暗灰	30	末野
20	坏	(12.0)	3.3	6.5	AEFHJKL	2	灰	50	末野
21	坏	12.4	3.4	6.7	BEFHJK	2	灰白	100	末野
22	坏	(12.8)	3.6	(6.9)	EFIJKL	2	灰オリーブ	40	南比企
23	坏	(11.6)	4.0	6.7	BFIJL	2	灰白	40	南比企
24	坏	11.5	3.7	7.2	BEFIJ	2	灰	60	南比企
25	坏	(12.0)	3.8	(6.8)	FIJ	2	灰	20	南比企
26	坏	(12.6)	3.7	(6.6)	BEFIJ	2	灰白	20	南比企
27	坏	(12.4)	3.5	(6.8)	ABFJ	2	灰白	30	南比企
28	坏	(12.5)	3.7	7.1	AEFJKL	2	灰白	50	東金子？
29	坏	(12.7)	3.0	(6.0)	EFIJK	2	灰	30	南比企
30	坏	(12.8)	4.8	(5.6)	AFIJK	2	灰	50	南比企
31	坏	(12.0)	4.0	(5.8)	EIJKL	2	灰黄	40	南比企
32	坏	12.5	3.9	6.2	IJK	2	灰	80	南比企
33	坏	12.2	4.0	6.3	EFIJKL	2	灰白	75	南比企
34	坏	(11.8)	3.1	(6.1)	BEIJL	2	オリーブ灰	20	南比企
35	坏	(11.8)	3.5	6.2	AFIJKL	2	灰白	60	南比企
36	坏	11.0	3.5	6.0	CEFIK	2	灰白	85	南比企
37	坏	(11.8)	3.6	(5.6)	BFIJK	2	灰	40	南比企
38	坏	(11.8)	3.7	(6.0)	AIJK	2	灰	30	南比企
39	坏	(12.0)	3.9	(6.0)	BFIJK	2	オリーブ灰	55	南比企
40	坏	11.7	4.1	6.1	AFIJK	2	灰	70	南比企
41	坏	(12.4)	4.0	6.2	BFIJK	2	明灰	50	南比企
42	坏	(11.7)	4.0	(6.1)	BFIJ	2	灰	45	南比企
43	坏	(11.8)	3.9	(6.0)	BEFIJKL	2	灰	30	南比企
44	坏	(11.8)	3.8	(5.6)	BIJKL	2	褐灰	50	南比企
45	坏	(11.6)	4.0	(6.0)	BFIJK	2	灰白	20	南比企
46	坏	(11.4)	4.1	(6.2)	AIJK	2	灰白	40	南比企
47	坏	(11.7)	3.9	5.9	BFIJK	2	灰	60	南比企
48	坏	11.8	3.9	6.0	BDFHJK	2	灰白	75	末野？
49	坏	11.8	3.7	5.9	ADFHJL	2	灰	80	末野
50	坏	(12.8)	4.0	(6.4)	BDEFHJK	2	灰白	30	末野？
51	坏	(11.4)	3.4	(6.0)	BFJK	2	青灰	60	東金子？
52	坏	12.6	3.8	6.4	BJKL	2	青灰	90	東金子
53	坏	(12.9)	4.1	5.8	BCFHJ	2	灰白	60	末野

第38号溝跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
54	坏	(12.0)	3.6	(5.2)	BFHJKL	2	青灰	40	末野
55	坏	12.3	3.7	5.8	AEFHJK	2	灰白	90	末野
56	坏	12.0	4.0	5.6	ABHJL	2	灰	90	末野
57	坏	(11.8)	3.2	5.6	EHJK	3	橙	30	末野？
58	坏	(12.2)	3.2	(5.6)	BEHJK	2	オリーブ灰	60	末野
59	坏	(11.4)	2.9	5.2	BEHJK	2	オリーブ灰	30	末野？
60	坏	11.7	3.4	8.0	BDHL	2	緑灰	80	末野？
61	坏	11.8	3.2	5.1	HJKL	2	灰	75	末野？
62	坏	11.6	3.3	5.6	DFHJKL	2	灰	100	末野
63	坏	(11.2)	4.2	5.5	AEFHJK	2	灰	40	末野
64	坏	12.3	3.7	5.7	ABEFIJ	2	灰	50	南比企
65	坏	12.0	3.7	5.5	FIJK	2	灰	70	南比企
66	坏	(12.4)	3.8	5.8	BFIJK	2	灰	40	南比企
67	坏	12.0	4.0	5.6	AEFIJKL	2	灰	90	南比企
68	坏	(11.8)	4.1	(5.6)	BIJ	2	灰	40	南比企
69	坏	(12.8)	3.8	6.0	EFIJK	4	灰白	40	南比企
70	坏	12.1	4.0	5.5	BCFIL	3	灰黄	60	南比企
71	坏	(12.7)	4.1	(6.0)	AEFJK	2	灰白	30	東金子
72	坏	12.3	3.9	6.6	BFIJ	2	灰	60	墨書
73	坏	11.9	3.3	5.3	BEFHIJ	2	黄灰	50	墨書
74	坏	(10.5)	4.2	6.4	BFJ	2	灰黄	65	産地不明
75	坏	12.2	4.1	6.5	BEGJ	2	灰白	95	底部ヘラ切 常陸
76	椀	(13.4)	5.8	6.4	AFIJK	2	灰白	50	南比企
77	椀	18.4	8.4	7.0	BFIJK	2	灰	80	漆状付着物
78	椀	(13.8)	5.3	7.6	ADEHIJL	2	灰	75	南比企
79	椀			8.4	BEFIJK	2	灰	30	南比企
80	椀	(13.0)	5.3	6.6	BDEFJK	2	灰黄	40	産地不明
81	椀	(14.5)	5.6	(7.0)	BEFIJK	2	浅黄	70	南比企
82	高台付坏			(11.1)	BDFJK	2	灰白	30	産地不明
83	高台付坏			7.5	DFH	4	灰白	95	末野
84	高台付坏	(11.4)	4.5	6.8	BEFIJK	2	灰	40	南比企
85	高台付坏	(10.8)	3.9	(7.3)	ABEFHJK	2	灰	20	末野
86	高台付坏			6.0	BFJK	2	灰	85	産地不明
87	高台付坏			(7.6)	BEHJK	2	灰	25	末野
88	高台付坏			7.6	BF	2	灰	50	群馬？ 転用硯？
89	高台付椀			(7.6)	BEFHJ	2	灰	40	末野
90	皿	12.6	2.5	5.7	AEHJKL	2	暗青灰	75	末野
91	皿	(14.2)	2.6	(6.0)	BEJ	3	灰白	20	末野？
92	皿	(15.4)	2.6	6.0	BEFIJL	2	灰白	60	南比企
93	皿	(14.4)	2.3	(6.0)	BFHJ	2	灰	20	末野
94	皿	(15.8)	1.4	6.1	BEFJK	2	灰	40	末野？
95	高台付皿	14.1	2.3	6.5	BEIJL	2	灰オリーブ	75	南比企
96	高台付皿	(14.2)	2.6	6.6	ABFIJ	2	灰	75	南比企
97	蓋	15.4	3.9	6.0	BFJK	2	黄灰	50	
98	蓋				BEFGIJK	2	灰白	40	南比企 つまみ径2.3cm
99	蓋				BDFI	2	灰	60	南比企 つまみ径2.4cm
100	蓋				BEFIJK	2	灰	20	南比企 つまみ径4.2cm
101	蓋				BDFGIJ	2	灰白	80	南比企
102	蓋				BFGIJ	2	灰	30	南比企 つまみ径2.9cm
103	蓋				BEFGHIJK	2	灰白	60	南比企
104	蓋				BEFGHIJK	2	暗灰	70	南比企 つまみ径2.4cm

第38号溝跡出土遺物観察表(3)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
105	蓋				BFIJ	2	灰	30	南比企 つまみ径2.2cm
106	蓋				BFIJK	2	灰	10	南比企 つまみ径2.0cm
107	坏	11.1	3.6	5.6	BFJ	3	橙	60	内黒
108	高台付椀			6.7	BDJ	3	橙	80	内黒
109	坏			6.6	BJ	3	鈍橙	15	内黒
110	長頸瓶	(10.6)			BFJ	2	灰	40	自然釉
111	長頸瓶			(9.6)	BFJ	1	灰	50	群馬産？
112	長頸瓶			(9.6)	BFIL	1	灰	40	南比企
113	甕	(38.8)			ABEFIJ	1	褐灰	10	波状文
114	甕	(22.0)			ABEIJL	2	灰	60	
115	甕	(18.4)	31.6	(13.6)	BFIJ	2	灰白	20	
116	甕			(13.6)	ABFIJK	2	暗灰	40	
117	甕	24.0	46.7		BFIL	2	暗灰	80	底部付近に破片融着
118	甕	(24.5)			ABFIJ	2	暗灰	40	
119	甕			(15.0)	BCFI	2	灰	40	南比企
120	甕	(23.0)			ABIJ	2	灰オリーブ	20	千葉産？
121	灰釉陶器皿	(14.4)	2.9	(7.4)	BFJ	2	灰白	30	内面施釉
122	円面硯				BFJ	2	灰	25	

(8) 周溝状遺構

周溝状遺構は、溝が円形または方形に巡るもので、4基検出した。遺構は、その形状から、床面の消滅した竪穴住居跡と思われたが、貯蔵穴、柱欠が検出できなかった。また、近年こうした遺構が、円形または方形周溝状遺構と呼称され、報告されていることから、周溝状遺構として一括して報告することとした。

なお、遺構の性格としては、墓であったという報告もあるが、本遺跡の周溝状遺構の性格は明らかにできなかった。

第1号周溝状遺構（第556図）

Y-18・19グリッドから検出した。本来は円形に巡っていたと考えられるが、遺構の西半分は検出できなかった。

平面の形状は、円形と考えられ、遺構の規模は、径は推定で4.2m前後であったと考えられる。

溝は、幅0.3m～0.5m、深さ0.1m～0.2mであった。

遺構は、201号竪穴住居跡、78号掘立柱建物跡、85号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、78号掘立柱建物跡、85号溝跡より古かったが、201号竪穴住居跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第2号周溝状遺構（第556図）

Y-17・18グリッドから検出した。本来は円形に巡っていたと考えられるが、遺構の西半分は検出できなかった。

平面の形状は、円形と考えられ、遺構の規模は、径は推定で3.3m前後であったと考えられる。

溝は、幅0.3m～0.8m、深さ0.1m～0.2mであった。

遺構は、196・197号竪穴住居跡、38号溝跡と重複していた。遺構の重複関係は、竪穴住居跡より新しく、38号溝跡より古かった。

出土遺物は、検出できなかった。

第3号周溝状遺構（第557図）

AD-20グリッドから検出した。本来は、方形に巡っていたと考えられるが、遺構の東側は検出できなかった。

平面の形状は、方形と考えられ、遺構の規模は、長軸6.6m、短軸は5.5m前後であったと思われる。

溝は、幅0.4m～0.5m、深さ0.1m～0.2mであった。

遺構は、300・305・322号竪穴住居跡と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が最も新しかった。

本遺構は、竪穴住居跡の周溝とも考えられたが、溝の幅が広く、また、柱穴等の付属施設が検出できなかったため、周溝状遺構とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第4号周溝状遺構（第557図）

AC・AD-21グリッドから検出した。遺構は、一部を10号性格不明遺構に壊されていたため、全体を検出できなかったが、本来は、溝が全周していたと考えられる。

平面の形状は、丸みを持った方形で、遺構の規模は、長軸・短軸ともに5.1mであった。

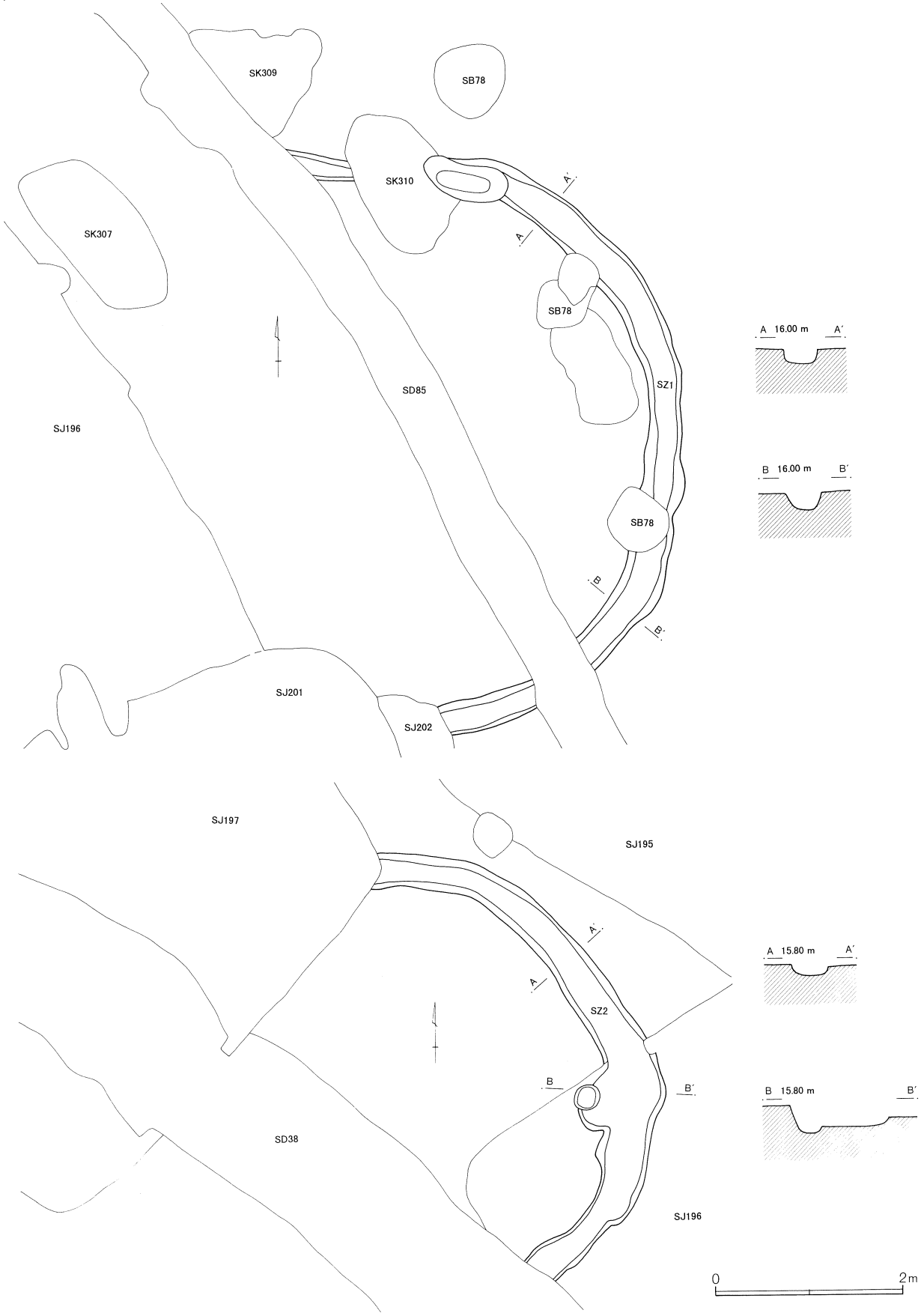
溝は、幅0.4m～0.5m、深さ0.2m前後であった。

遺構は、323号竪穴住居跡、121号井戸跡、ピット822、10号性格不明遺構と重複していた。遺構の新旧関係は、121号井戸跡、10号性格不明遺構より古かったが、323号竪穴住居跡、ピット822との新旧関係は、明らかにできなかった。

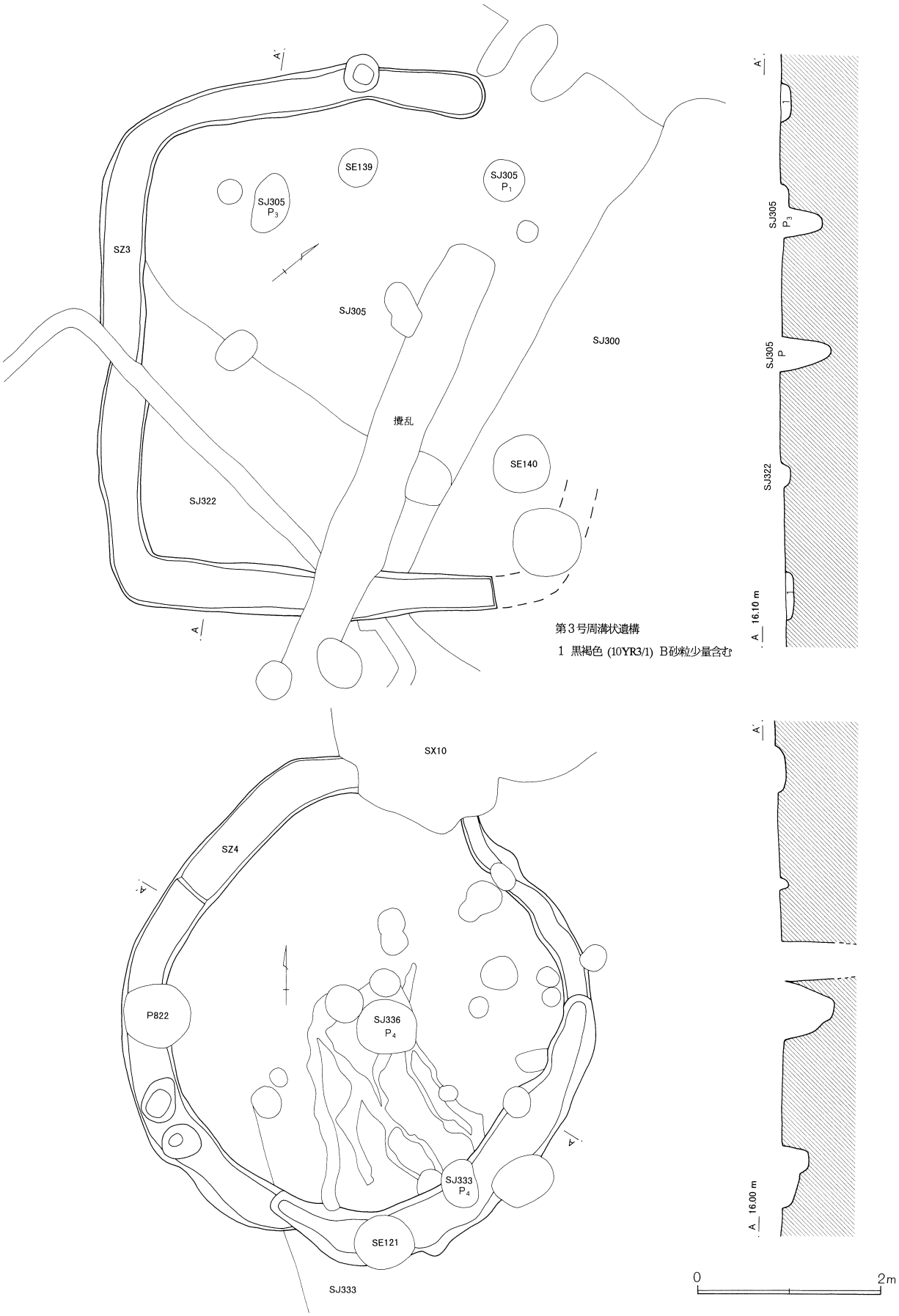
本遺構は、形状から、竪穴住居跡の周溝とも考えられたが、溝幅が広く、また、柱穴等の付属施設が検出できなかったため、周溝状遺構とした。

出土遺物は、検出できなかった。

第556図　周溝状遺構(1)



第557図　周溝状遺構(2)



(9) 墓跡

1 概要（第558図）

墓跡はB区の中央部、S～U-12～14グリッドにおいて検出された。築道下遺跡の中ではかなり北西に寄った地点である。周囲は概ね平坦となっているが、自然堤防の尾根筋上に当っているため、ここからは東側の後背地と西側の元荒川へ向け、それぞれわずかながら傾斜している。

墓跡の最上面は現地表から約0.7m下位、標高16.3m付近にある。その間は地表の耕作土を除き、無遺構無遺物の氾濫土（自然科学分析報告により確認済み）が厚く堆積している。この面を境界とし、下層は古代以前の遺物を包含する、厚さ0.35mほどの暗褐色腐植土となっている。

以上の観察所見に加え、当該面には流失した形跡も認められないことから、ここを墓跡の最終機能面、すなわち旧地表面と捉えることが可能である。

検出した範囲内では北・西・南の三辺に溝が巡り、これらが周堀となって、墓跡を方形に区画する様子が窺える。この区画内からは埋葬施設群3区、荼毘跡4基、掘立柱建物跡1棟、井戸跡2井が検出された。このほか、溝の外側には多くの井戸跡のほか、土師質土器焼成窯などの中世遺構が墓跡を取り巻くように分布している。

墓跡の主体となる埋葬施設群は、北西隅部を中心に一部を大型の礫からなる石列で区画し、内部に川原石を貼り詰めたものである。区画内とその周辺からは板石塔婆22基、これの台石1基、五輪塔3基以上、蔵骨器6個、埋納焼骨23基が検出された。また、貼石中には中世の陶磁器片が多く混入していた。

以下、冗長な記述となってしまうことを御寛容願ったうえで、墓跡を構成する諸施設とこれに関係する遺物の説明を、いくつかの項目に分けて行なうこととしたい。

なお、掘立柱建物跡と井戸跡については、墓跡との関連性が明確でないこともあり、それぞれの遺構項目中で扱った。南辺（第60号溝）の東端部に構築された土師質土器焼成窯（SF 1）についても、遺構本体の切り取り保存を実施しているため、今回は報告するに至らなかった。詳細は次年度以降の整理報告に委ねたい。

2 形状と規模（第558図）

墓跡は方形の区画をなすものと思われるが、北東部分は調査区外（上越・長野新幹線の軌道敷地）となっており、全体の形状や規模は明らかにしえていない。しかしながら、新幹線を挟んださらに北東部分（G区）の調査を平成9年度に実施したところ、北辺や東辺を画する溝、遺物などはまったく検出できなかった。

この結果から見て、北辺の溝は新幹線の高架下で収束するか、あるいは屈曲して南へ方向を変えるものと判断される。墓地ということからすれば、溝は周堀となって「コ」字形に巡り、南辺をなす第60号溝にとりつくのではなかろうか。

同様に、規模に関してもG区の検出状況からは、周堀北辺の外縁長が27mを越えないことが明らかである。したがって、墓跡を正方形の区画と捉え、南北の内法（約26m）を東西にもあてはめることは不可能である。それ以下とした場合の基準は求めにくいが、後述のように囲繞する2条の周堀は内側（SD139）が先行するものなので、その西辺の長さを根拠にして、東西の内法は約22mと見積っておきたい。

このように仮定すると、周堀内はこころもち長方形の区画となり、面積は約572m²を計れる。南北に主軸をとれば、その方向はおよそN-17°-Wである。

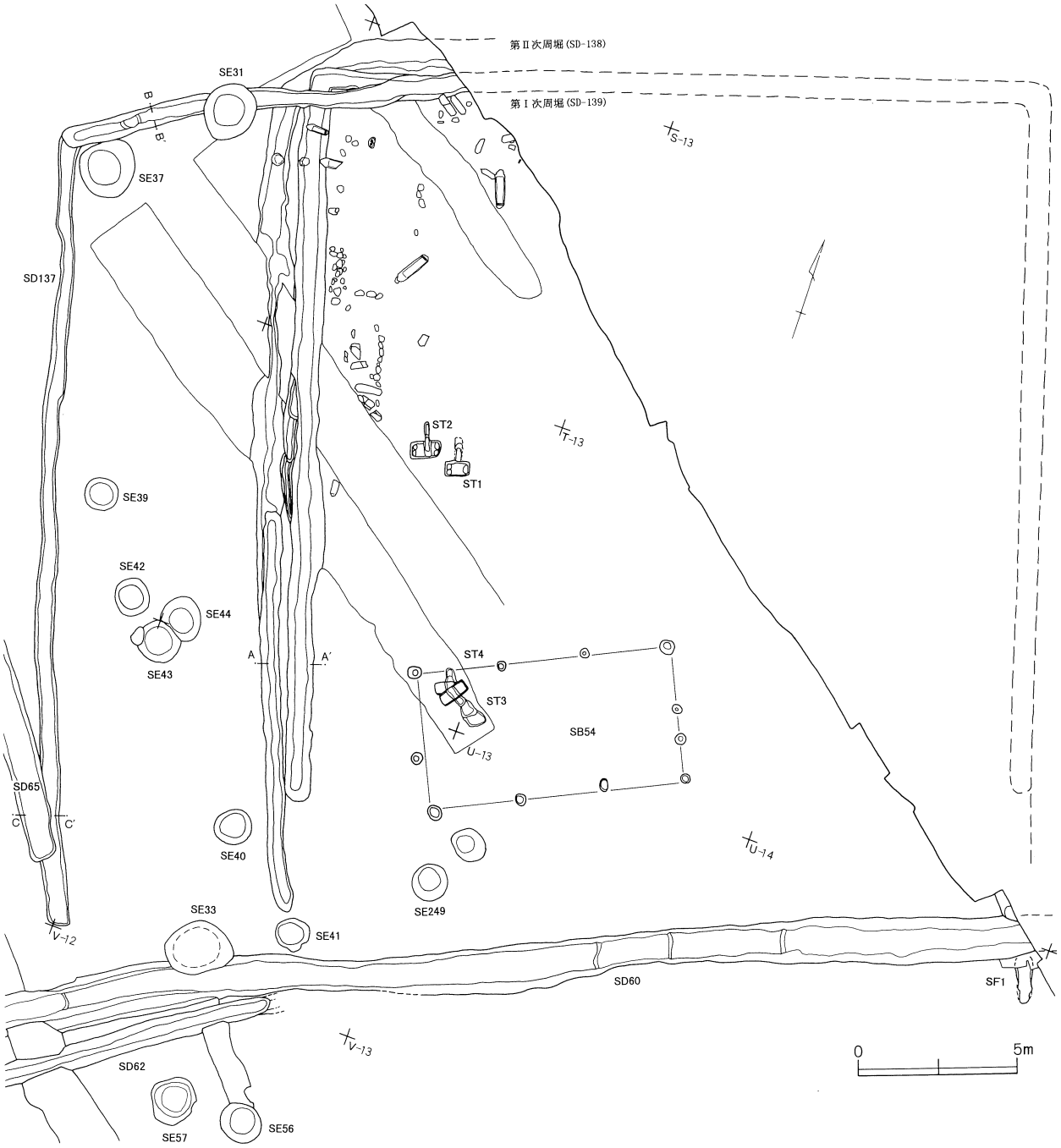
3 周堀

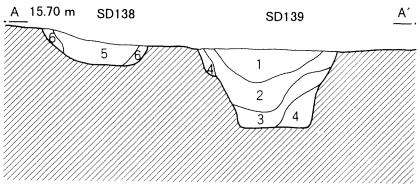
上述のように、墓跡を区画する周堀は第60号溝と、これに「コ」字形に（検出範囲内では「L」字形）にとりつく第138・139号溝である。第137号溝は周堀ではないが、同様の区画性を示すため付記しておく。

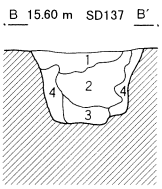
①第138・139号溝（第558図・第559図）

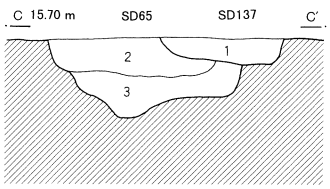
両溝は墓跡の北辺から西辺を画する周堀で、外側が第138号溝、内側が第139号溝である。二条の周堀は一部で重複しながらも、ほぼ並行して構築されている。土層観察からは、内側の第139号溝が完全埋没した後、やや外側に第138号溝の掘削されたことが確認され

第558図　墓跡(I)全体図









全体図　A－A′（SD138・SD139）
1　墓跡土層図11と同。
2　墓跡土層図12と同。
3　墓跡土層図13と同。
4　墓跡土層図14と同。
5　墓跡土層図10と同。
6　墓跡土層図15と同。

B－B′（SD137）
1　10YR4/2 地山・焼土・炭化物を少量含む。
2　10YR2/3 地山粒を多く含む他、炭化物を少量混じる。
3　10YR2/1 粘性強く、地山・炭化物粒を少量含む。
4　10YR4/4 ほとんど粘質の地山。壁の溶軟化流入土。

C－C′（SD65・SD137）
1　B－B′の1と同。
2　10YR3/2 焼土・炭化物粒の他、土器片を包含する。
3　10YR3/2　2に準ずるが、遺物は含まない。鉄分多い。

0　1m

第559図　墓跡(2)

第Ⅱ次周堀 (SD-138)
第Ⅰ次周堀 (SD-139)
S-12
第561図
第563図
撹乱溝
ST2
ST1
試掘トレンチ
第568図
0
5m

た。こうした事実から判断すれば、二条は同一の目的を有した新旧二時期の溝ということになる。そこで、内側の第139号溝に先行する本来的な区画溝として〈第Ⅰ次周堀〉、外側の第138号溝に新たに掘り加えられたものとして〈第Ⅱ次周堀〉と、各々に名称を付して説明を進める。

第Ⅰ次周堀とした第139号溝の北辺は、検出長約５ｍで直角に折れ、南へ約22ｍ延びて収束する。先端部から南辺の第60号溝までは約５ｍである。

溝の底面は平坦で、壁はこれより急角度で立ち上がる。上幅約0.9ｍ、下幅約0.45ｍを測り、横断面は逆台形を呈する。石の貼られた旧地表面から、溝底までの深さは約１ｍである。

覆土は全て自然堆積土（断面図土層11～16）で、主に区画内部からの流入である。特に護岸を行なったり、浚渫されたりした様子は窺えなかった。

覆土中からは上層を主体に五輪塔の破片と思われる凝灰岩、同じく板石塔婆の破片と思われる緑泥片岩、埋葬施設部分の区画に用いられた熔結凝灰岩、地表面に貼られた川原石、陶磁器片が多く包含されていた。これらの分布は埋葬施設のある西辺北部に集中する。

第Ⅱ次周堀とした第138号溝は、第139号溝の外縁をなぞるように重複している。掘り込みは浅く、北西隅部の屈曲も丸味を強く帯びている。さらに、西辺南半部は掘り足されたようになっているなど、総体的に見て不規則で簡易な掘削と言える。

西辺の長さは約26.5ｍ、第60号溝までは1.6ｍである。この間には第41号井戸跡が存在するが、これを意識した上での収束か否かは不明である。

幅は西辺中央までが0.7ｍ～1.2ｍ、旧地表面から溝底までの深さは0.6ｍである。南半部は幅0.7ｍ、深さは0.65ｍと一定している。

底面はいずれも緩い「U」字形から舟底形である。壁の立ち上がりは外側が多少急であるものの、概してなだらかである。加えて、区画内部からの崩壊が顕著であるため、内側の壁は大部分が失われ、極めて緩やかな傾斜面となっている。

覆土は自然堆積を示し、腐植土を主体とする層（断面図土層７～９）、氾濫土を主体とする層（同３～６）、砂層（同10）に大別できる。

内側の斜面部からは、埋葬施設部から転落した岩石類、陶磁器片が多く出土した。また、壁面より浮いた状態ながら、北東隅部のやや南へ寄った斜面部から溝底には、板石塔婆や五輪塔が散乱していた。いずれも自然に転落したと言うより、故意に投棄されたものとの印象が強い。五輪塔は貼石と混在するなど、第Ⅱ次周堀がさほど埋没していない時点での混入であるのに対し、板石塔婆はかなり浮いており、ほとんど埋没が終了してからの混入である。

②第60号溝（第560図）

墓跡の南辺を画す第60号溝は、自然堤防の尾根に対して直交するように掘削されており、西は元荒川の旧河道、東はG区まで延びている。溝の走向は直線的であるが、西辺の第138号溝との接点部を境に、これより西側はいくぶん南へ湾曲している。古墳時代の住居跡をはじめとする多くの遺構と重複し、かつそれら全てを切断している。

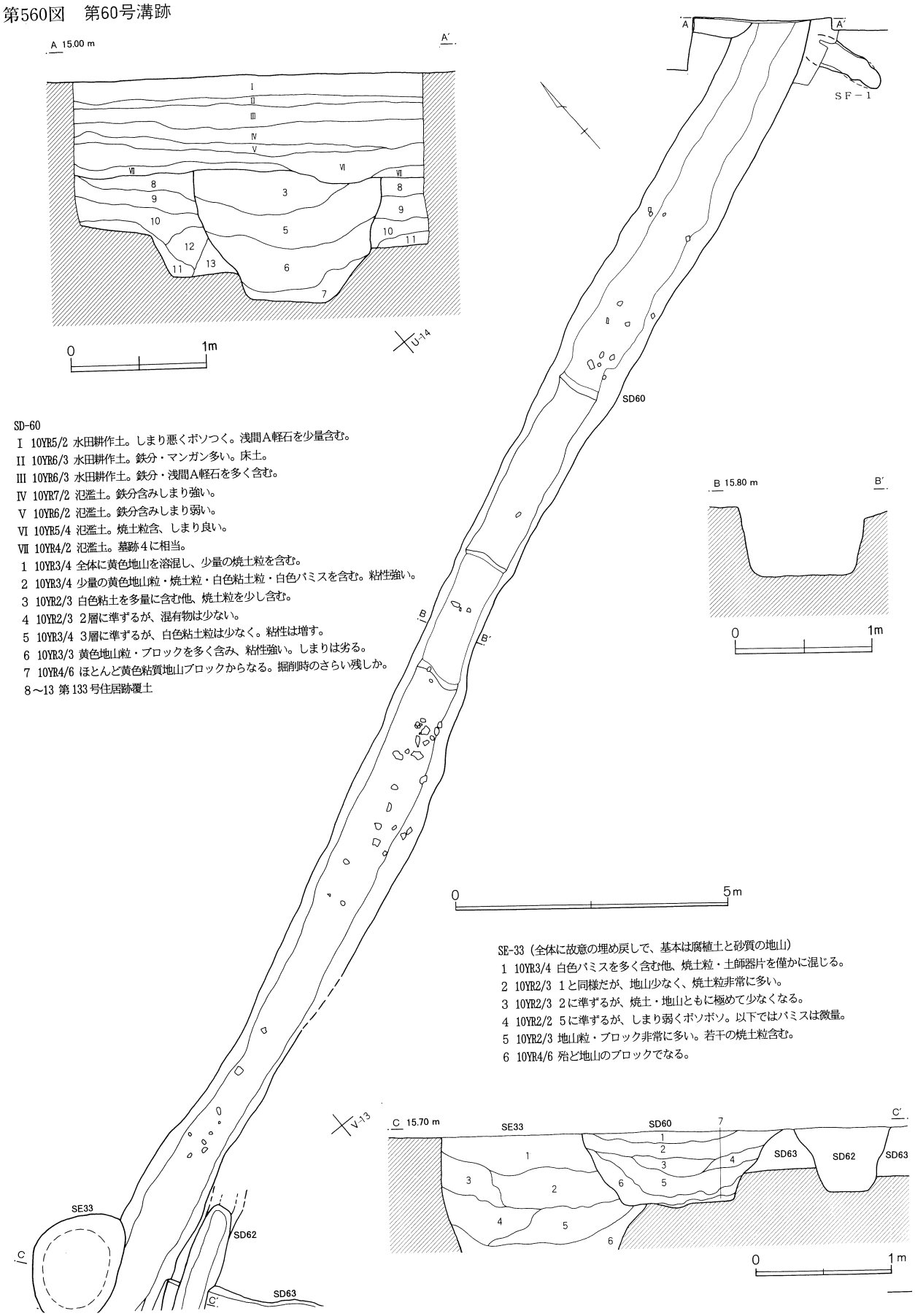
上幅は約1.4ｍ、下幅は約0.8ｍで横断面は箱形から逆台形を呈する。底面は平坦ながら、部分的には掘り残し状の高まりがある。深さは遺構確認面（墓が機能していた時の地表面は、これより約0.4ｍ上位に想定される。）から0.35ｍ～0.6ｍを測る。

覆土は腐植土を中心とした自然堆積を示し、氾濫土の堆積は見られない。

遺物はほとんどが覆土上位からの出土で、少量の陶磁器片（第583図）や凝灰岩、熔結凝灰岩、緑泥片岩の破片がある。

第60号溝は遺跡を横断して延びており、墓跡周堀に比して幅も広い。周堀の西辺が新旧ともに第60号溝に達していないことも考え合わせれば、第60号溝は墓の南辺をなしながらも、同時に開削されたものではないと判断される。出土遺物からは先後関係を明確としえないものの、墓独自には南辺を画していないので、第60号溝は先行する遺構であり、墓地はこれを利用して

第560図　第60号溝跡



SD-60
I 10YR5/2 水田耕作土。しまり悪くボソつく。浅間A軽石を少量含む。
II 10YR6/3 水田耕作土。鉄分・マンガン多い。床土。
III 10YR6/3 水田耕作土。鉄分・浅間A軽石を多く含む。
IV 10YR7/2 氾濫土。鉄分含みしまり強い。
V 10YR6/2 氾濫土。鉄分含みしまり弱い。
VI 10YR5/4 氾濫土。焼土粒含、しまり良い。
VII 10YR4/2 氾濫土。墓跡4に相当。
1 10YR3/4 全体に黄色地山を溶混し、少量の焼土粒を含む。
2 10YR3/4 少量の黄色地山粒・焼土粒・白色粘土粒・白色パミスを含む。粘性強い。
3 10YR2/3 白色粘土を多量に含む他、焼土粒を少し含む。
4 10YR2/3 2層に準ずるが、混有物は少ない。
5 10YR3/4 3層に準ずるが、白色粘土粒は少なく。粘性は増す。
6 10YR3/3 黄色地山粒・ブロックを多く含み、粘性強い。しまりは劣る。
7 10YR4/6 ほとんど黄色粘質地山ブロックからなる。掘削時のさらい残しか。
8～13 第133号住居跡覆土

SE-33（全体に故意の埋め戻しで、基本は腐植土と砂質の地山）
1 10YR3/4 白色パミスを多く含む他、焼土粒・土師器片を僅かに混じる。
2 10YR2/3 1と同様だが、地山少なく、焼土粒非常に多い。
3 10YR2/3 2に準ずるが、焼土・地山ともに極めて少なくなる。
4 10YR2/2 5に準ずるが、しまり弱くボソボソ。以下ではパミスは微量。
5 10YR2/3 地山粒・ブロック非常に多い。若干の焼土粒含む。
6 10YR4/6 殆ど地山のブロックでなる。

区画を行なったものと考えたい。

③第137号溝（第558図）

第137号溝は周堀（第138・139号溝）の北辺で重複し、さらに北西隅部を越えて６ｍほど西へ延びる。ここから南へ直角に折れ、第60号溝の２ｍほど手前で収束する。北辺はやや蛇行気味で、第31号井戸跡に切断されている。横断面は箱形をなし、上幅約0.6m、下幅約0.45m、遺構確認面からの深さ約0.4mを測る。西辺は24.5mにわたる極めて浅い掘り込みで、わずかに湾曲している。上幅は約0.65m、遺構確認面からの深さは約0.2mである。

第137号溝は墓跡の周堀を西側へそのままずらしたかのようで、形状は周堀と大変よく似ている。一見すると、あたかも墓跡に付随する「外堀」のような印象を受ける。しかし、重複部分での土層堆積は本溝が中位以上まで埋没した時点で、周堀（第139号溝）によって切断されたことを明示している。溝の覆土や周堀との中間部分からも、墓跡にかかわる遺物や岩石類は出土していないなど、直接的な関連性を示すものは何ら認められない。

反面、方向性などからすれば、本溝が墓跡と一連の施設ではないにせよ、まったく無関係のものとも思われない。西辺間に多くの井戸跡が集中する点も注意されるが、ここでは墓地を造営するにあたり、先行する区画性の遵守、すなわち第137号溝の存在を意識したがゆえの相似性と理解しておきたい。

４　埋葬施設群（第559図）

区画内の北西隅部を中心に、周堀に沿って帯状に展開する施設である。部分的に人頭大の熔結凝灰岩で区画され、内部に川原石が貼られる一画に相当する。区画に用いられた熔結凝灰岩は楕円礫の上下と一方の長側部を打ち欠き、平坦面を作り出したものである。当初、五輪塔の一部かとも思われたが、個々の詳細な観察を行なったところ、ほとんどが楕円礫を用いていること、面取りも雑であることから、その可能性はないと判断した。もちろん梵字などの刻字も一切ない。

行田市の古墳には、熔結凝灰岩――多くの場合、これを角閃石安山岩と呼びならわすが、本稿では正式名称で統一した。――を用いた横穴式石室が多く存在する。確証は得られないものの、あるいは区画にはこの石室の石が転用されたのではなかろうか。面取りの様子も符合すると考えられる。

貼石は拳大の川原石が用いられている。貼られていたのは一段のみで、扁平な円礫が中心である。これらも除去時にすべて観察したところ、文字が記されたり、加工されたりしたものは存在しなかった。

この花壇状の施設は、北方の一部を近世の溝によって切断されていることもあり、構造上の“単位”といったものは明確に捉えることができない。おおまかには、北辺に沿って南面を意識したと考えられる一群、西辺に沿って東面を意識したと考えられる一群に分けられる。さらに、後者は中央部に設けられた熔結凝灰岩の区画（石列３）によって、北側の一群と南側の一群に分化できる。そこで、これらを《第一墓群》、《第二墓群》、《第三墓群》と弁別して記述を進める。

墓跡説明の冒頭で触れたように、埋葬施設の表面を覆う礫や遺物は氾濫土に覆われており、貼石を境として、これより下部は腐植土層となっている。断面観察では墓地造成に際して、削平や土盛りなどの整地作業が行われたような様子は認められなかった。

貼石直下の腐植土（断面図土層１）は氾濫土をよく含み、しまりは良いがボソボソする。分布も貼石の施された範囲内に限られ、層厚は８cm程度ながら一様の堆積ではない。このことから、土層１は石列で区画された内部に貼られた被覆土で、この部分を花壇状の土壇としたものと判断される。ただ被覆土とは言っても、蔵骨器や焼骨は本層を掘り込んで埋納されるものと、掘り込みが分からずにすっかり覆われてしまっているものとが共存する。

土層２もほぼ同様の傾向があるが、蔵骨器と焼骨のほとんどはこれを切り込んでいるうえ、第三墓群には存在しない。

貼石および被覆土を取り除くと、蔵骨器と埋納焼骨が現れる。蔵骨器は第二墓群南端に２個、第三墓群に

4個と集中して存在する傾向がある。埋納焼骨は第一墓群に6基、第二墓群に5基、第三墓群に12基の検出があった。

埋納焼骨は1基を除き、他は全て短い円筒状に人骨がぎっしりと詰まったものである。なお、埋納穴は平面確認が困難であったため、平面図には断面観察で得られた規模から推定線を示した。

①第一墓群（第561図・第562図）

北辺に沿って東西に展開する一群である。東側は調査区外、西側は近世の溝で破壊されているため、墓群としての広がりや規模はまったく分からない。第二墓群との関係についても同様である。

墓群内に熔結凝灰岩の点在することから、土壇が区画された形跡は窺えるものの、規則性や規模は捉えづらい。貼石の集中する範囲からすれば、およそ第Ⅰ次周堀肩部の内側0.2mから2.6mまでとなる。中央部は第二墓群から続くような空白域が認められる。

貼石の散乱する部分からは、これに乗るような形で板石塔婆7基（1～7）が検出されている。5以外は全て裏面を上にし、水平からやや斜めの状態であった。

このうち、1と2は第Ⅱ次周堀に倒れ込むように並んでいた。傾斜の度合や出土レベルもほぼ同一である。造立位置でそのまま倒れたようにも見えるが、周堀との関係や埋納焼骨から隔たっていることがやや不自然である。また、5と6は双碑、7は位牌状の小型品である。いずれも原位置で自然転倒したものとは考えにくいが、頭部を南方に向け、同一面に検出された点は注意される。

被覆土の下から検出された埋納焼骨のうち、5基はほぼ一直線上に並び、残る1基はこれより周堀に寄って存在する。5基の並びは周堀の方向に対して軸がずれるものの、南面するように一列という意図は充分に汲み取れる。

1は一部調査区外となっており、被覆土上には板石塔婆6が乗る。焼骨部分は17cm×5.5cm（直径×厚さ。以下同。）である。2は17cm×7.5cm。3は18cm×11.5cmで、4を切断している。その4はおよそ13cm×6cmで、直上には板石塔婆3が横たわる。5は18cm×7.5cm、6は18cm×6cmである。

②第二墓群（第561図～第567図）

墓群全体がきれいに区画されているという状況ではないが、熔結凝灰岩のなす三つの石列により、周堀に沿って長方形に区画された様子を窺うことができる。区画石は周堀に転落したらしく、北側の境界は不明確である。貼石の分布状態からすれば、板石塔婆台石のやや北寄りに想定できるかもしれない。この場合、区画の規模は東西で約2.3m、南北で最大5.5mとなる。

貼石はこの区画に沿って帯状に分布し、中央部は空白域となる。西側では多量の貼石が第Ⅰ次周堀内に転落している。北部に比して南部は分布の範囲が狭く、密度も薄くなっている。

こうした事実に石列の残存状況、蔵骨器の偏在などを加味すれば、第二墓群は一つの区画ではなく、いくつかの小区画の集合であるとも考えられる。

周堀の説明でも触れたように、板石塔婆や五輪塔は区画の北半、西側の肩部から第Ⅱ次周堀斜面部にかけて散乱していた。

板石塔婆8と9は斜面に直交するように頭部を東へ向け、碑面を上にして出土した。ともに緩い斜面に投棄されたようで、基部を下にやや傾いている。

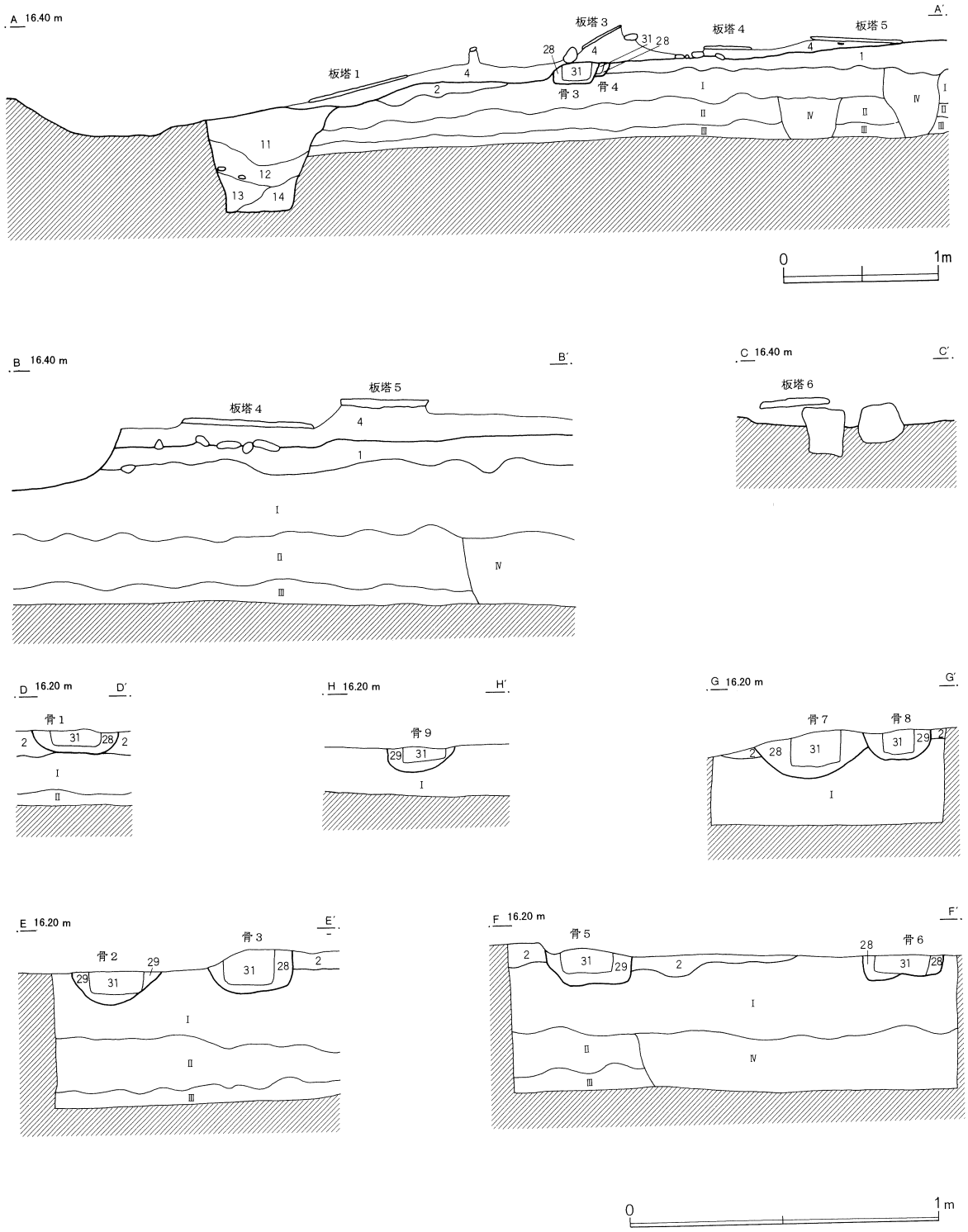
五輪塔には刃物で打ち砕いた痕跡が認められる。それは原型を留めないほど激しいもので、周囲には非常に細かい破片が散乱する。これらについては接合作業を行なったが、復元できるものはほとんどなく、破壊は徹底的と言ってよいほどである。

板石塔婆10はこれらより離れ、東南の隅部に単独で横転していた。西隣には2個の蔵骨器が埋納されるが、関連性については不明である。

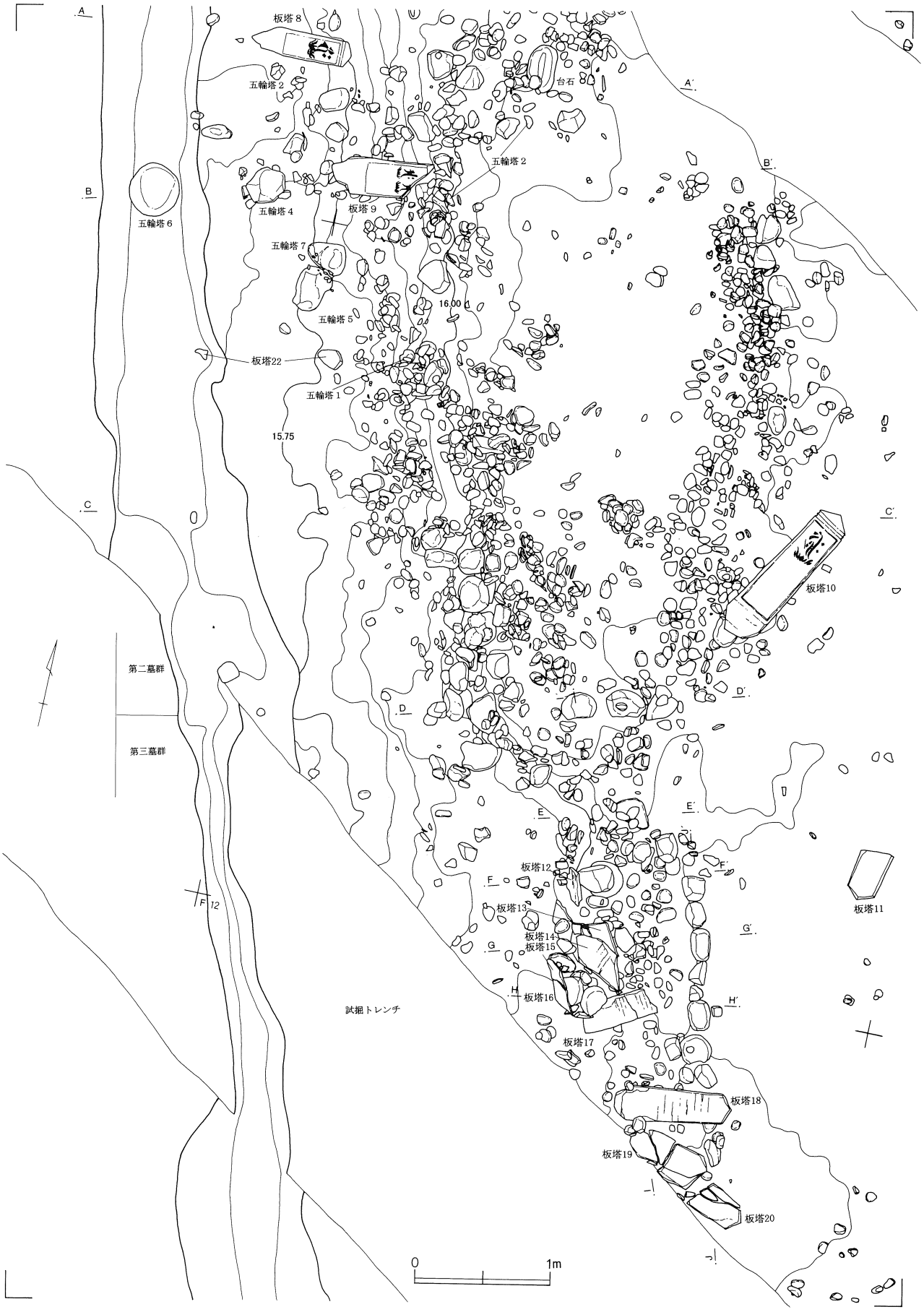
墓群の北端部から検出された板石塔婆の台石は、周囲を上面まで被覆土に覆われ、底部には焼骨10が密着していた。ゆえに、台石は原位置を保つものであり、差し込み部（ほぞ孔）の方向からすると、ここに立てられた板石塔婆は、碑面を東へ向けられていたと判断できる。差し込み部分には緑泥片岩の破片が挟まって

第561図　墓跡(3)　上：第Ⅱ次周堀と上部検出状況　下：第Ⅰ次周堀と下部検出状況

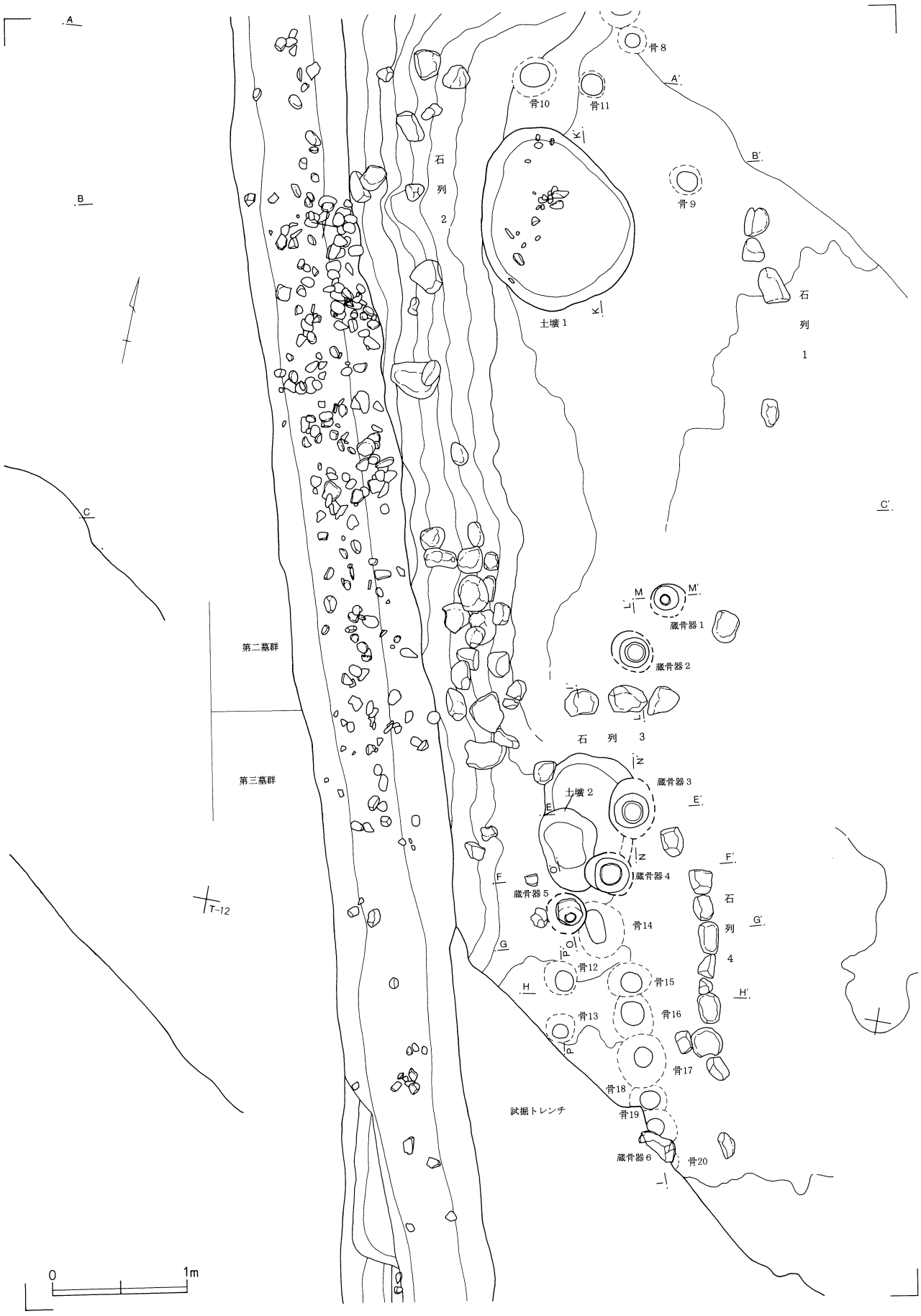
第562図　墓跡(4)


A 16.40 m
A′
板塔1
板塔3
板塔4
板塔5
骨3
骨4
B 16.40 m
B′
板塔4
板塔5
C 16.40 m
C′
板塔6
D 16.20 m
D′
骨1
H 16.20 m
H′
骨9
G 16.20 m
G′
骨7
骨8
E 16.20 m
E′
骨2
骨3
F 16.20 m
F′
骨5
骨6
0
1m

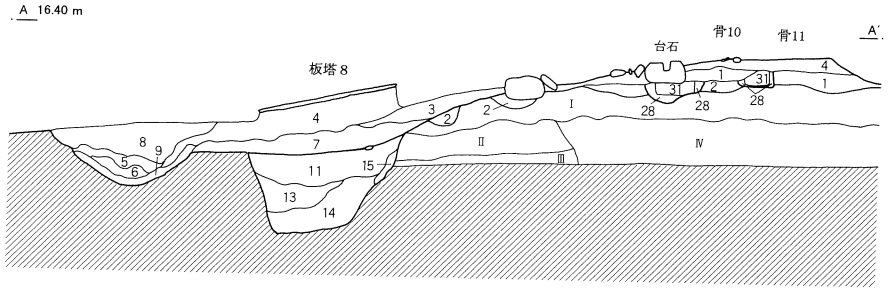
第563図　墓跡(5)　第Ⅱ次周堀と上部検出状況

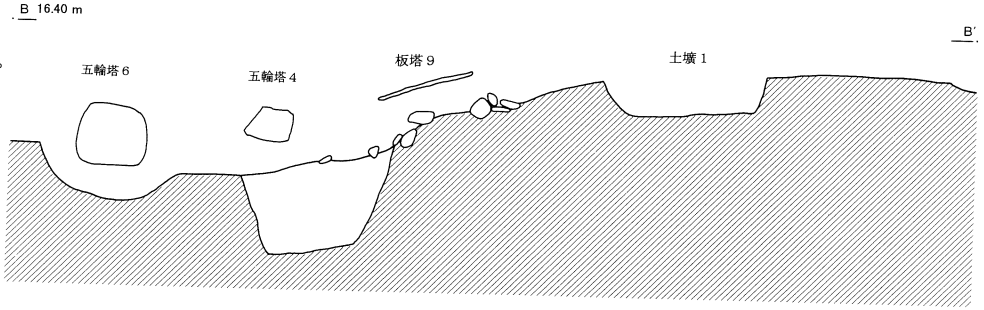


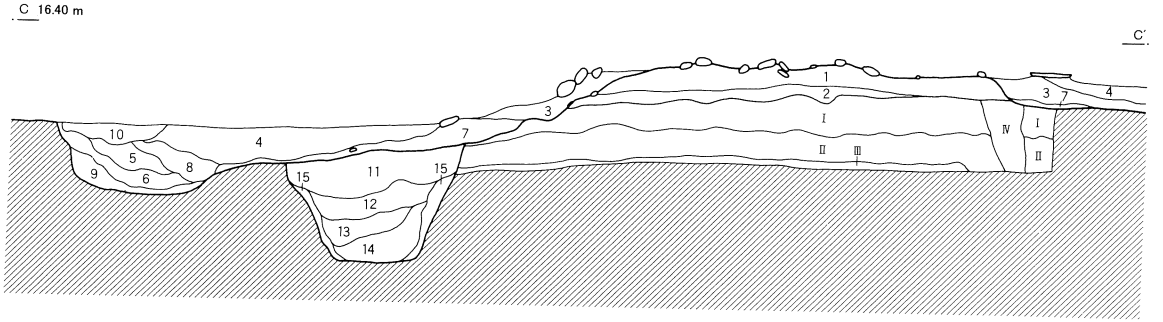
第564図　墓跡(6)　第Ⅰ次周堀と下部検出状況



第565図　墓跡(7)



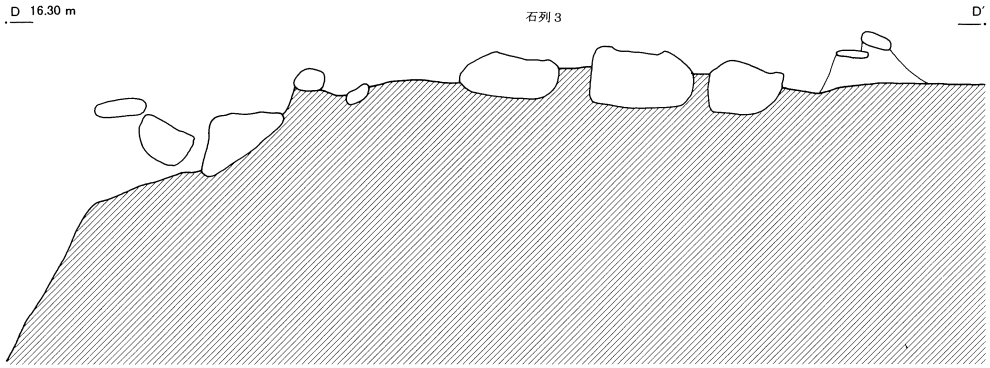


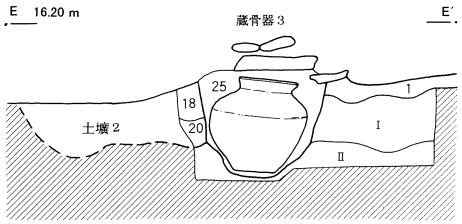


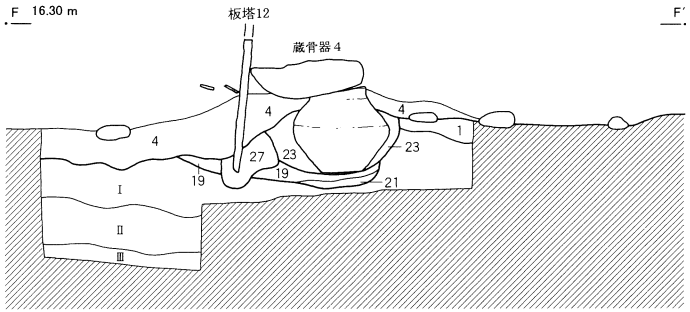
0　1m

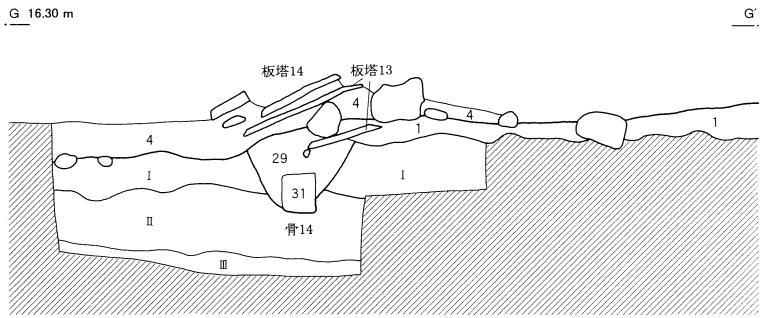
中世墓跡土層

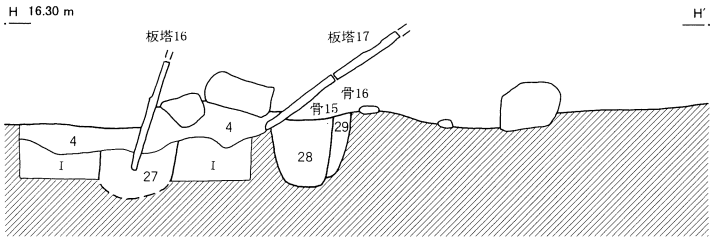
Ⅰ 10YR2/3 土師器・須恵器片等の遺物を包含する腐植土層。焼土・炭化物粒をよく含む。
Ⅱ 10YR2/3 基本はⅠ。黒色味、粘性を強く帯び、焼土・炭化物も含む。
Ⅲ 10YR4/3 黄色粘質土地山（遺構確認面）への漸移層。遺物は含まない。
Ⅳ 10YR2/3 平安時代以前の遺構覆土
Ⅴ 10YR2/3 基本はⅠ。時期不明土壙覆土
1 10YR3/4 基本はⅠ。これに黄褐色氾濫土粒・ブロックを混在させる。
2 10YR3/4 ほぼ上層に準ずる。但し、氾濫土ブロックは少ない。
3 10YR4/3 1に近似する。同層の流入堆積したものと思われる。Ⅰ層土をよく含む。
4 10YR4/3 主に黄褐色の氾濫土粒からなり、これに灰色粘色土が混じる。
5 10YR4/3 主に黄褐色の氾濫土粒からなり、これに灰色粘色土が混じる。全くの氾濫土層。
6 10YR4/3 主に黄褐色の氾濫土粒からなり、これに灰色粘色土が混じ、Ⅰ層土粒多く含む。
7 10YR2/3 Ⅰの流入土層。9に近似し、炭化物粒を含む。
8 10YR2/3 Ⅰの流入土層。灰色粘質土粒を多量に含む。締まり悪くボソつく。
9 10YR2/3 Ⅰの流入土層。灰色粘質土粒を多く含み、粘性強い。
10 10YR4/4 目の揃った細砂の純層。
11 10YR3/4 締まり強く、混有物は微量。北西隅部では骨片を少量含む。
12 10YR3/4 11に準ずるが、Ⅰ層土粒をよく含み、黒色味を増す。
13 10YR2/3 地山粒を多く含み、締まり粘性強い。
14 10YR2/3 基本は13。壁面崩落の地山ブロック多く含み、色調明るい。
15 10YR4/3 殆ど黄色シルト質地山。壁・底面の溶軟化したもの。
16 10YR4/3 黄色シルト質地山のブロック。
17 10YR2/3 Ⅰ層土主体。これに氾濫土ブロックを少し含む。また骨片が多く含まれる。
18 10YR3/4 主にⅠ層ブロックからなる。しまり強いがボソつく。
19 10YR4/3 24層に極似する。但し均質化せず粒土のまま。（径2～3㎜）
20 10YR2/2 炭化材と焼土ブロックからなる。骨片は少ない。
21 10YR3/4 23層に近似する。全体に粘質土化する。
22 10YR3/4 1層に準ずるが、より氾濫土ブロック多量に含む。骨片・凝灰岩片多く含む。
23 10YR3/4 主にⅠ層土のブロックで構成される。黄色地山粒を微わに含む。
24 10YR3/3 黄色粘質地山粒からなる。これにⅠ層土粒・炭化物・骨片を混ずる。
25 10YR2/3 基本はⅠ層土。しまり弱いが粘性強い。多量の炭化材を含む。
26 10YR2/3 基本はⅠ層土。堀込みは非常に不明瞭。Ⅰ層に比してわずかにしまり弱い。
27 10YR2/3 基本は26層。骨片を多く含む。
28 10YR2/3 Ⅰ層土を基本とし、これに氾濫土ブロックを多く含む。微量の骨粉を混じる。
29 10YR2/3 基本はⅠ層土。28層に比して氾濫土ブロックは少なく、小型化している。
30 10YR3/4 暗褐色の粘質土で、均質化している。
31 骨・灰・炭化物からなる。

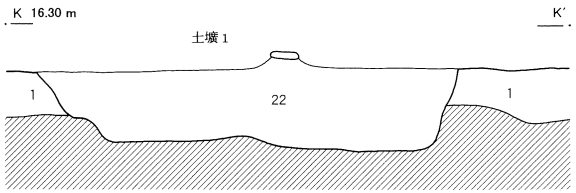

D 16.30 m
石列3
D′

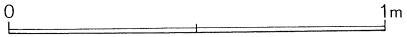

E 16.20 m
蔵骨器3
E′
25
18
20
土壙2
1
Ⅰ
Ⅱ

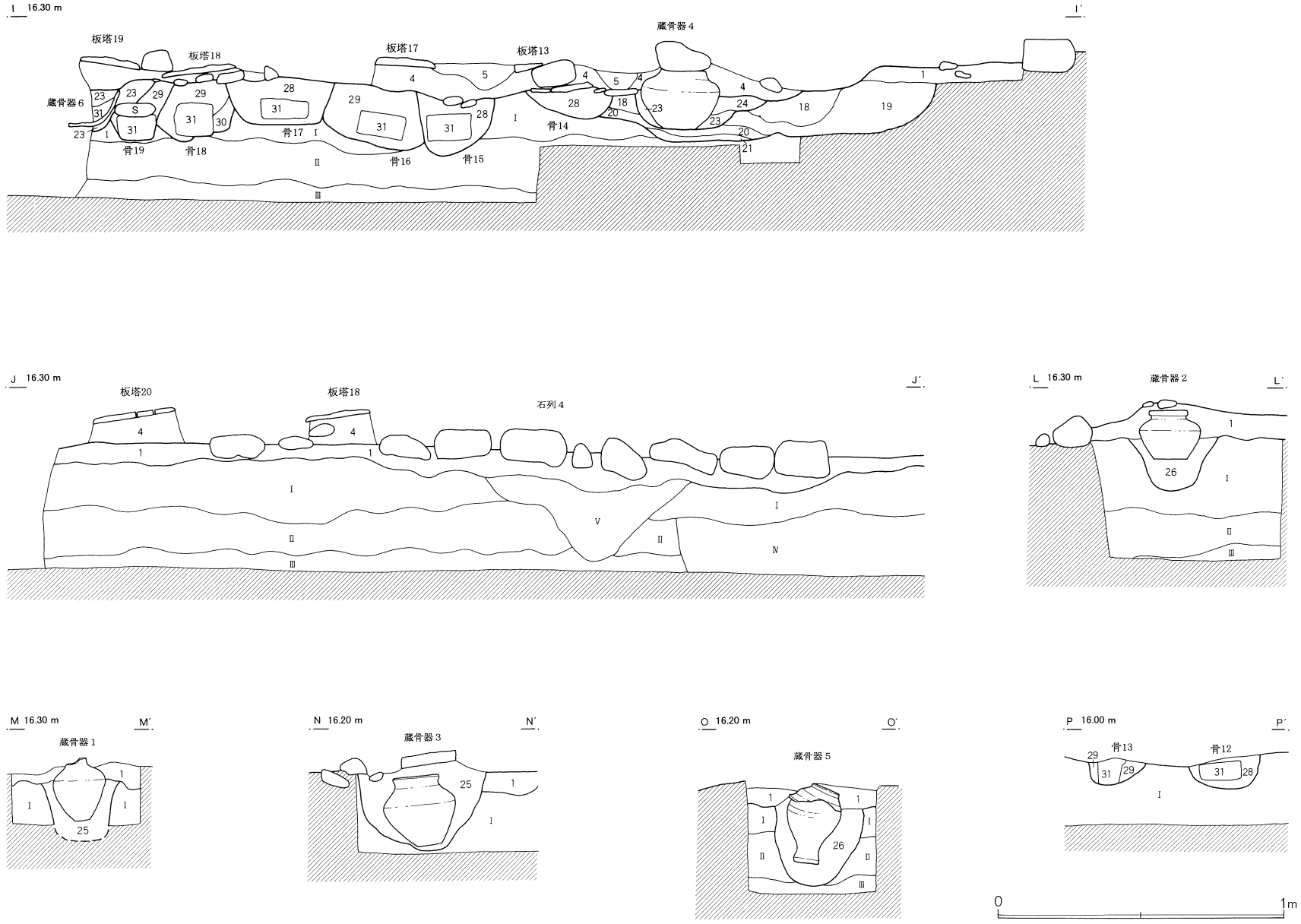

F 16.30 m
板塔12
蔵骨器4
F′
4
4
4
1
27
23
23
19
19
21
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ


G 16.30 m
G′
板塔14
板塔13
4
4
4
1
1
29
31
骨14
Ⅰ
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ


H 16.30 m
H′
板塔16
板塔17
骨16
骨15
29
4
4
27
28
Ⅰ
Ⅰ


K 16.30 m
K′
土壙1
1
22
1


0
1m


I 16.30 m
I′
板塔19
板塔18
板塔17
板塔13
蔵骨器4
蔵骨器6
骨19
骨18
骨17
骨16
骨15
骨14
J 16.30 m
J′
板塔20
板塔18
石列4
L 16.30 m
L′
蔵骨器2
M 16.30 m
M′
蔵骨器1
N 16.20 m
N′
蔵骨器3
O 16.20 m
O′
蔵骨器5
P 16.00 m
P′
骨13
骨12
0
1m

いたが、これは板石塔婆の基部ではなく、その安定を図るための詰め物と考えられる。墓跡から出土した板石塔婆をはじめ、全ての緑泥片岩との接合を試みたところ、適合するものは存在しなかった。出土位置からすれば、下方の２基（８・９）のいずれかが引き抜かれたとも考えられるが、確証は得られない。

下部の埋葬施設では焼骨５基が北端部寄りに、蔵骨器２個が南端部にそれぞれ集中して検出された。その中間部には、土壙以外の施設は確認できなかった。

蔵骨器は南端部に近接して検出された。ともに埋納は浅く、器の肩部以上は被覆土に覆われ、口端は貼石と接している。蓋と思しき大型の石や陶磁器類は見当たらず、板などの存在を示すような痕跡も観察できなかった。

蔵骨器１は、区画中央部のわずかに東寄りから出土した。すぐ脇の区画石上には、板石塔婆10が横転していた。頸部以上を欠く渥美の壺で、半分程度に焼骨が納められていた。焼骨の上には土が多少詰まってはいたものの、口の部分までには達していなかった。特に蓋などは見られなかったので、あるいは貼石が口を塞いでいたのかもしれない。埋納穴は直径25cm、被覆土下からの深さおよそ20cmの小穴である。

蔵骨器２は「不識壺」と呼ばれる常滑の小型広口壺である。焼骨は三分の一ほどに納められており、それ以外には残らず土が詰まっていた。埋納穴は直径28cm×34cmの楕円形で、深さは約18cmである。

埋納焼骨７の焼骨部は16cm×10.5cm（直径×厚さ。以下同。）、８は11cm×7.5cmである。両者は南北に接し、８が７の埋納穴の一部を切断する。９は16cm×５cmで、８から南へ約１m、石列１の近くに位置する。10は上述のように、台石が直上に乗っている。焼骨に乱れた跡などは観察できないので、両者は共伴するものと認められる。焼骨部はやや楕円形で、大きさは17cm×22cm×８cmである。11は16cm×８cmで、10の東方に隣接している。西側の一部を削り取られているが、これは10および台石の設置に伴うためと考えられる。

土壙１は埋納焼骨集中部の南側、貼石の空白部分に位置する。覆土中には人骨片を含むほか、それ以上に多くの凝灰岩片を含んでいた。この西側斜面から五輪塔が集中出土していることを勘案すれば、造立位置である可能性も含め、五輪塔との関連が深い土壙と捉えることができる。平面は不整な楕円形を呈し、長径1.35m、短径1.1m、深さ0.25mをそれぞれ測る。被覆土１を掘り込み、覆土には氾濫土を多く含む。

③第三墓群（第563図～第569図）

区画は石列３によって第二墓群と分化できる。南部は試掘時に分断してしまったため、端部の状況は把握できない。また、東辺は石列４によって境界が明瞭だが、西辺にはそれらしきものは存在しない。周堀内にも転落した様子が見られないこともあり、西辺は本来的に画されなかったものと考えられる。

北辺を限る石列３についても、石の設置レベルや構造上の適合性を見るならば、それは第二墓群の区画にこそふさわしい。よって第三墓群の区画は、第二墓群南辺を意識しつつも、前面（東辺）のみを画したに過ぎないものと言うことができる。

石列４には熔結凝灰岩が一直線に並べられている。北部は抜き取られたらしく、石列３までは続いていない。石列の示す方向は周堀にほぼ平行し、およそN-15°-Wである。

試掘時に南部を破壊してしまった危惧もあるため、墓群自体の範囲は把握しづらいものがある。仮に試掘トレンチの際までを石列で画された範囲とすれば、南北の長さは約3.6mとなる。一方、板石塔婆21や埋納焼骨23までを含めれば、それは約８mとなる。ここでは一応、後者を想定しておく。東西幅は第Ⅰ次周堀肩部までの約1.9mとなろう。

貼石は第二墓群に比して少なく、まばらな印象を受ける。周堀への転落もほとんどない。

さらに特徴的とも言うべき、第一・二墓群との大きな相違は被覆土の状況である。まず下位の土層を見ると、Ⅰとした腐植土層が前者の範囲よりもかなり薄くなっていることが挙げられる。第二墓群から第三墓群へは段状に落ち込んでおり、自然の傾斜とは思われな

い。これは造墓に際し、腐植土Ｉを削り取ったことに起因するものと考えられる。被覆土（？）についても１は区画外にまで広く分布し、２はまったく存在しない。区画内は第二墓群のように土壇状の高まりとはならず、区画外と同一レベルになっている。

板石塔婆は碑面を東へ向けて立ったままの状態のものが北側に、ほぼ原位置で東へ向けて横転したと思われるものが南側に、それぞれ集中する。これらには南北に一列、ないし二列に並んでいた様子を窺うことができる。横転していたものには完存品が多く、立った状態を保つものには上部を欠失するものが多い。後者は故意に打ち欠かれたようで、欠失部はまったく出土していない。

12は蔵骨器４の西側背後に立てられており、共伴する可能性は極めて高い。但し断面観察では、両者の埋納と造立は同時ではなく、板石塔婆が後に立てられたことは明確である。15と16は他より西へ奥まり、２基並立している。18と20は刻まれた碑文や字体が極似しており、出土位置も隣接している。双碑として造立されたものであろう。なお、19と20は試掘時に重機で引きずってしまったため、位置的には東へいくぶんずれている。

蔵骨器は区画の北寄りに３個がまとまり、１個は南へ離れて検出された。

３は在地の広口壺で、板石塔婆の基部を転用した石蓋が乗る。埋納は正立させた器の口に石蓋を被せたものと思われるが、その後蔵骨器が沈降したのか、検出時には３cmほど間があいていた。石蓋は周囲の貼石と同一高にあり、この上にさらに石が乗ってケルン状となっていた。蔵骨器の内部は三分の一ほどに焼骨が納められ、その上には焼けた破礫数個が詰まっていた。埋納穴は被覆土を掘り込んでおり、かつ土壙２を切断する。平面は45cm×35cmの楕円形で、貼石面からの深さは約30cmである。

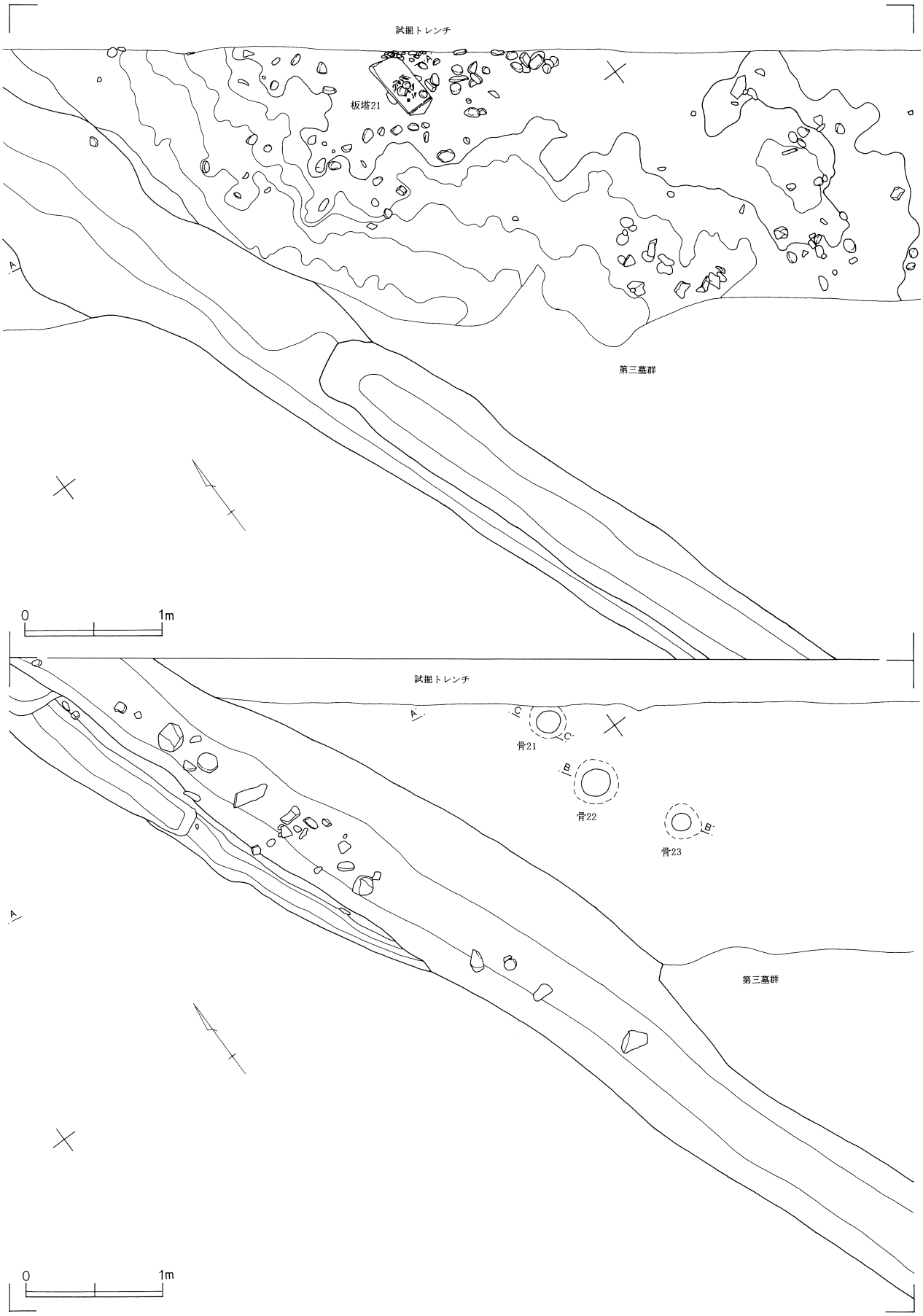
４も在地の広口壺である。上述のように、背後には板石塔婆12が立てられていた。他のものに比べて埋納はかなり浅く、蔵骨器の肩部付近に貼石の面がくる。これを境とし、以上の器面は荒れて剝落が著しい。こうした点から推せば、４は完全に埋納されたのではなく、肩部より上を地上に露出させていたものと言うことになる。地上へ出た部分についても、何ら被覆された様子は観察できなかった。器体の上には熔結凝灰岩が密着して乗り、これを石蓋としている。その重さと器壁の薄さからか、蔵骨器の肩部より上は、内部へ落ち込むように破損している。これも地上に露出していたことの証左となろう。中に納められた焼骨は、やはり器の三分の一程度までの量で、ほかは氾濫土４が充満していた。埋納穴は径約30cm×37cm、深さ13cmほどの掘り込みで、土壙２を切断する。

５は山茶椀系の片口鉢を蓋とする、古瀬戸灰釉の瓶子である。第三墓群の中ではやや周堀寄りに位置し、南の埋納焼骨12・13と一列に並ぶ。埋納穴は直径30cm、深さ27cmほどで、埋納焼骨14を切断する。掘り込みは腐植土Ｉからで、蓋部分より上を被覆土１で覆う。故意の打ち欠きではないと思われるが、蓋と分かった片口鉢は体部上半を大きく欠く。日常品の転用で、内面は摩耗し滑沢となっている。本体の瓶子も口頸部を欠き、肩部から上を覆うように片口鉢が被せられていた。瓶子内には肩部まで焼骨が納められていたが、器体の容量が小さいため、その量は他の蔵骨器よりもかなり少ない。蓋が密着していたので器内への土の流入はなく、焼骨の上は空隙となっていた。

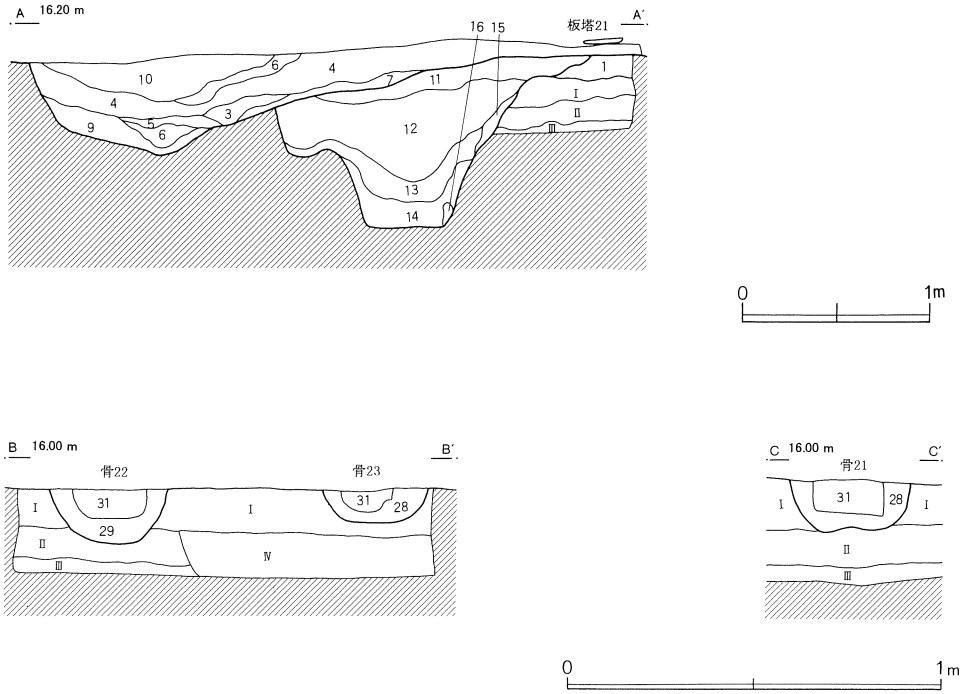
６は在地の片口鉢で、板石塔婆19の直下から検出された。半分ほどを試掘時に欠き取ってしまったこともあり、埋納穴の規模は明らかとしえない。残存分の調査では、埋納穴が埋納焼骨19・20を切断していること、蓋などが被せられた形跡のないことが観察された。焼骨は中位ほどまで納められており、上には被覆土１のブロックが充満していた。あるいは、被せていた木の板などが腐朽し、空隙となった部分へ被覆土が落ち込んだものかもしれない。

埋納焼骨は区画の北寄りには見られず、中央部から南に集中している。これらは南北に列をなしており、ほぼ石列４に沿うような状況で検出された。直上には

第568図　墓跡(10)　上：第II次周堀と上部検出状況　下：第I次周堀と下部検出状況



第569図　墓跡(11)



板石塔婆がこのラインと重なるように分布する。特に試掘トレンチの北側では、埋納焼骨15～20が大きく重複することもなく、きれいに一直線で並んでいる。埋納の深さも概ね同一である。12・13はこれより一列奥（西）に並び、トレンチを隔てた南側では21～23が並列している。トレンチ部については、試掘時にも焼骨の存在は確認されていない。しかし、以上のような分布状況からすれば、何基かは存在したであろうことが容易に想像される。

埋納焼骨12の焼骨部は14cm×７cm（直径×厚さ。以下同。）で、直上には板石塔婆15・16が並んで立っていた。13は11cm×９cmと小規模である。墓跡から検出された埋納焼骨はいずれも円筒状のまとまりであるのに対し、14のみはレンズ状の堆積で、しかも埋納穴の壁に沿って斜めに傾いている。焼骨の範囲は26cm×13cmの楕円形、厚さは５cm以下である。他がぎっしりと詰まっているという状態であるのに対し、14は締まりがなく詰めたという印象はない。直上には板石塔婆13・14が乗る。15は16cm×９cmで、16の埋納穴覆土（以下同。）を切断する。16は18cm×８cmで、15と17に切断される。上には板石塔婆17が斜めに倒れている。17は15cm×７cmで、16と18を切断する。18は14cm×12cmで、17と19に切断される。直上には板石塔婆18が横転していた。19は12cm×９cmで、18を切断し、蔵骨器６に切断される。焼骨の上には平らな川原石が乗り、これが蔵骨器埋納穴の掘り込み時に邪魔をしたようで、焼骨自体は切り込まれていない。20は蔵骨器６に大きく切断されているうえ、試掘で削り取ってしまったため規模は不明である。若干の焼骨が残存していたに過ぎない。21は16cm×９cm、22は21cm×7.5cm、23は13cm×5.5cmをそれぞれ測る。

土壙２は区画の北端に位置し、蔵骨器３および４の埋納穴に切断される。長軸1.02m、短軸0.72mほどの楕円形をしており、深さは約0.2mである。南西はこれよりわずかに深く、２基の土壙が重複しているような形状である。但し覆土は連続しており、新旧の関係は認められない。

底部には焼骨こそ少ないものの、炭化物・焼土・灰

からなる層が存在する。これは後述する荼毘跡に堆積する灰層と同じものである。その下は故意に埋め戻されたと考えられる、よく締まった土層となっている。壁面や底面はまったく焼けておらず、焼骨をきちんと「埋葬」したという状態でもない。

こうした点は他の荼毘跡、埋納焼骨の場合とは大きく異なっている。状況としては、焼骨を含む少量の灰を浅く掘り窪めた穴に敷き、これに土を被せたという印象である。

遺物の出土はなんら認められなかった。

5　出土遺物

墓跡からは五輪塔や板石塔婆といった石塔類、蔵骨器、陶磁器片など多くの遺物が出土している。出土位置は上述のように周堀内、あるいは各墓群と広範におよんでいる。そこで遺構の説明とは対応しないが、遺物の種類ごとに紹介していくこととする。

①五輪塔（第570図）

五輪塔は第二墓群北半、中央部から第II次周堀内にかけ集中して検出された。付近一帯には接合しないながらも、同じ石材である凝灰岩の破片が多量に散乱していた。なお、平面図中の五輪塔番号と、以下の遺物番号は一致する。

1は空輪である。石列2の外側、第II次周堀へわずかに転落した貼石中から出土した。80%ほどの残存で、風化がかなり進行している。もともと風輪部とは一石であったらしく、両輪の境界筋で折れている。表面には多くの打撃が加えられ、剥離欠損している。

形状は下膨れの宝珠様で、残存高は9.7cmである。最大径は12.3cmに復元される。接合する破片、同一の石質のものは見いだせなかった。

2は一石作りの空・風輪である。台石の脇から斜面にかけて出土した、三つの破片が接合した。いずれも拳大程度に破砕され、斜面部に転落したものと考えられる。復元率は60%にも満たない。

残存高13.5cm、空輪推定径12.3cm、風輪推定径12.5cmを測る。風輪部底面は平坦に整形され、中央部に径約3.4cm、深さ5.3cmの軸穴が穿たれている。

風輪の二箇所には梵字の一部が残っており、本来は東西南北、四門の梵字が刻まれていたものと思われる。図上では東方発心門の「カ」を復元したが、欠失部が大きく、実際は四門のいずれに相当するか不明である。石質は4の火輪、6の水輪とよく似ている。また規模上の整合性も強いので、この三個体（四輪）は塔として組み合っていたものと考えられる。

3は火輪の残欠である。これのみは板石塔婆20のやや東側、試掘トレンチ内に崩落した被覆土1に混じて出土した。30%程度の残存にすぎないうえ、風化も著しい。残存高は18.8cmで、軒端の幅は約30cmに復元される。上面は一辺9cmほどの方形となろう。軸穴も完全ではなく、およそ径3.2cm、深さ3.3cmである。

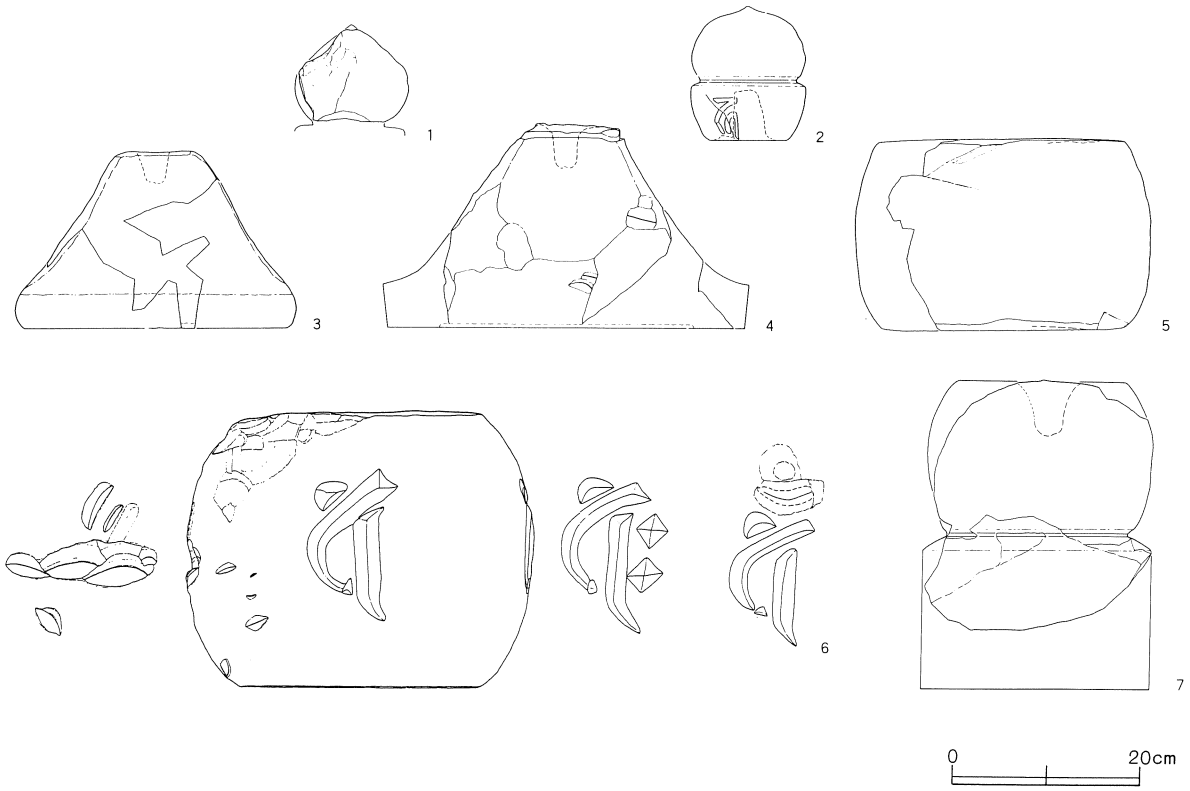
底面はほぼ平坦ながらも、軒部は風化により丸味を強く帯びる。屋根部はわずかに反り、一面に梵字と思しき刻字が残る。これも四門を表わしたものかもしれないが、判読はまったく不能である。同様の石質は他に見当たらない。

4は第II次周堀の斜面下部から出土した火輪で、周囲には大型残欠の5・6・7が散乱する。風化のほか、故意の破壊が著しい。50%程度の残存で、破壊時に用いられた鋭い刃物の痕跡が認められる。現状では最大下幅26.3cm、高さ21.5cmを測る。軒は四面ともに失っており、本来の形状や幅は不明である。屋根の上面は一辺11.8cm、高さ1.5cmほどが段状に削り出されている。中央に穿たれた軸穴は、径約2.8cm、深さ4.7cmである。屋根の稜部は、やはり破壊や風化のために丸くなっている。底面は復元径27.0cm、深さ0.4cmの盆状に掘り込まれ、そこに水輪が嵌まり込むように加工されている。接面は非常に丁寧に研磨され、滑沢な仕上りとなっている。

風化や破壊のため、表面に梵字の存在は確認できない。しかし、石質が近似していること、底面加工部の規模が合致することなど、本火輪は6の水輪と組み合っていた可能性が高い。

5は水輪である。第II次周堀の斜面下部、7の水・地輪と接して出土した。これも風化と破壊が激しく、

第570図　墓跡出土五輪塔



残存は30%程度である。高さは20.2cmで、最大径は復元で約32.0cmとなる。胴部の膨らみは小さく、直径に比して高さは低い。上下の区別は明確でないが、図示したとおりであれば上面はやや凸、下面は同じく凹となる。この時の直径はともに26.4cmほどとなる。

石質は他のものとかなり異なっており、明らかに組み合うと考えられるものはない。また表面に梵字などは観察できない。

6はほぼ完存する水輪である。火輪4のさらに下方、第II次周堀の底部から少し浮いた状態で出土した。風化や自然な剝離が観察されるほか、破砕しようとした利器の痕が深く残る。

全体は胴部の膨らみが小さく、直径に対する高さの比が大きい。最大径は37.6cm、高さは29.0cmである。上面径は27.0cm、下面径は25.9cmを測る。両面とも平坦に整形さていたと思われるが、風化のためかいくぶん凸面気味となっている。上面は4の火輪底面に設けられた、盆状の受け部分に大きさが合致する。

胴部中央には梵字が刻まれている。四門のうち、東方発心門の「バ」、西方菩提門の「バン」はきれいに残っている。北方涅槃門の「バク」も、一部を欠失するものの判読は容易である。しかし、南方修業門の「バー」については、刻まれたであろう位置にはまったく残っていない。これは図示したように、金属製の利器によって打ち欠かれたためと判断される。その痕跡は深く明瞭であり、数度にわたって打撃の加えられたことがよくわかる。それがどのような利器であるかは明らかとしえないが、痕跡から見ると刃先は非常に鋭利で、わずかながら湾曲したものであると思われる。岩石にこれだけの疵を残すことからすれば、鉈（ナタ）や鉞（マサカリ）などの類であろうか。おそらく他の五輪塔も同一の利器によって破壊、第II次周堀へ投棄されたものと考えられる。

7も風化と故意の破壊が激しく、本来の形状はまったくといってよいほどに失われている。現状では、球状を呈する部分と一部に軸穴（奉納孔？）が残ること、および球状部の端が溝状の切り込みによって画されていることなどから、一石作りの水輪と地輪であると推

定できるにとどまる。

こう仮定した場合、水輪の復元最大径はおよそ23.2cmとなる。地輪には一面も残存がなく、大きさは推測する術がない。残存状態から見れば、一辺の幅は水輪最大径より大きくなるようである。

②板石塔婆（第571図～第577図）

板石塔婆は発掘調査中に21基の出土を確認した。また、貼石に混じって散乱していた緑泥片岩の破片は全て取り上げ、接合作業を実施した。その結果、新たに1基が板石塔婆として復元できた。

出土状況については既述したとおりであり、第一墓群、第二墓群北寄り周堀斜面、第三墓群中央部にそれぞれ集中している。大半は貼石の上に乗っており、五輪塔の出土状況とは異なる。以下の遺物番号は、平面図中の板石塔婆番号と共通する。

1は第一墓群の第II次周堀肩部から出土した。頭部を南に、碑面を下にした状態で2と並んでいた。基部の一部を欠くものの、ほぼ完形と言ってよい。高さ72.7cm、上幅18.5cm、下幅21.5cm、厚さ2.7cmを測る。

碑面は風化が進行している。二条線の彫り出しは浅く、枠線は観察できない。種子は阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、蓮座の上に乗る。紀年銘は明瞭ではないが、「正安二年子（1300）七月八日」と読める。裏面には大きな剝離痕、側端に細かい整形の打ち欠き痕、横走する鏨（タガネ）、ないしは鑿（ノミ）状工具の痕跡が見られる。工具痕の幅は、約1.5cmである。

2は1の西側に並ぶようにして出土した。おおよそ完存はするが、中央部で二つに折断しているほか、碑面の剝落が著しい。高さ87.0cm、上幅21.5cm、下幅26.5cm、厚さ2.7cmである。

二条線とわずかに残った枠線が観察できる。種子は阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、その下にはかすかに蓮実らしきものが見られる。紀年銘などはまったく読み取れない。裏面の工具痕は基部に数条が認められるのみで、その幅は約1.8cmである。側端の整形はやや雑である。

3は第一墓群の中央部、埋納焼骨3・4の直上から出土した。裏面を上にして、頭部を南へ向けていた。概ね完存し、高さ65.0cm、上幅18.0cm、下幅19.0cm、厚さ2.8cmを測る。

二条線の彫り出しは浅く、枠線はない。種子は阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、蓮座の上に乗る。紀年銘の刻字は稚拙で、「正安元年（1299）」とある。裏面の工具痕はまばらに残り、その幅は約1.4cmである。側端の整形は、きちんと基部まで行なわれている。

4は裏面を上に、頭部を東へ向けて出土した。頭部は5の下に潜り込むようになっていた。高さ57.0cm、上幅16.8cm、下幅18.0cm、厚さ2.1cmを測る完存品である。

枠線の中には彫りのしっかりした種子と蓮座が刻まれる。種子は金剛界大日如来（バン）である。紀年銘はこれに較べると拙く、三行にわたって「明徳三年申（1392）　壬十月　十六日」と刻まれる。「壬」は「閏」の略であろう。裏面の工具痕は密で、幅は約1.0cmである。これも基部まで側端の整形が施されている。

5は第一墓群から出土した板石塔婆の中では唯一、碑面を上に向けた状態で検出された。基部を貼石部の最南端に置き、頭部は南へ向けていた。高さ124.6cm、上幅26.2cm、下幅31.7cm、厚さ3.1cmを測る大型の完存品である。

基部は区が設けられて舌状となる。この部分は未調整のままである。二条線は深く彫り出され、幅0.5cmの深くしっかりした枠線が二重に巡る。蓮座の上に乗る種子は阿弥陀如来（キリーク）で、三弁宝珠を戴く。これらは深く丁寧な薬研彫りである。下半には四行（8字・4字・4字・7字）にわたって光明真言が刻まれ、中央二行の下には「貞和二年丙戌（1346）　十月日道円逆修」と、紀年銘と供養者名が記される。なお、「逆修」の二字は横書きとなっている。裏面には平行する工具痕が密に見られる。工具痕は中心線付近でとぎれていることから、加工は両側端へ向かって施されたものと考えられる。工具痕の幅は約1.5cmである。側端の整形は山形部分のみで、基部を除いた部分は平らな面となっている。

6は区画に用いられた熔結凝灰岩の上に乗り、裏面を上に、頭部を西へ向けて出土した。直下には埋納焼骨1が存在する。高さ77.5cm、上幅21.5cm、下幅24.0cm、厚さ2.2cmを測る完存品である。

碑面は滑沢で、浅めの二条線ときれいな枠線が表出される。種子は阿弥陀如来（キリーク）で、蓮座の上に乗る。ともに丁寧な薬研彫りである。下半の中央には「貞和二年丙戌（1346）八月」、左へ行換えして「十九日　成阿禅尼」と、紀年銘と供養者の名が刻まれる。また右の行には「ア・バ・ラ・カ・ケン」の大日如来真言が梵字で刻まれる。裏面には中心から側端に向かい、平行する工具痕が残る。

板石塔婆の5と6は、規模や碑面に刻まれた内容こそ違え、紀年銘の年月日は近く、その字体も極似している。双碑として造立されたものであろう。

7は埋納焼骨6の西隣、貼石に混じって出土した。裏面を上にして傾き、頭部は北を向いていた。基部を欠失するため、本来の高さは不明である。それでも残存高17.3cm、上幅6.7cm、下幅7.3cm、厚さ2.0cmという極小品である。印象としては板石塔婆というよりも、むしろ位牌といった趣である。

山形は丸味を帯び、二条線ははっきりと彫り出されている。種子は蓮座に乗る阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、ともに稚拙な表現である。枠線や紀年銘は観察できない。裏面は打ち欠いたような整形で、特に工具痕は見られない。

8は第二墓群から第II次周堀へ落ち込んだ状態で検出された。碑面を上にし、周堀に直交するように頭部は東へ向けていた。完存品で、高さ76.7cm、上幅19.8cm、下幅21.7cm、厚さ2.5cmを測る。

二条線の彫り出しは浅い。枠線は直線部の通りが悪く、太さも一定せず部分的に途切れている。種子は釈迦如来（バク）で、蓮座の上に乗る。その下の右の行には「ア・バ・ラ・カ・キャ」の大日如来真言、中央と左の行には「延文三年戊（1358）　二月廿日」と紀年銘が刻まれる。裏面には、まばらながらも工具痕が観察できる。工具痕の幅はおよそ1.0cmである。

9は8の南側、周堀斜面のやや上方から出土した。8とは平行するような状態で、基部の西側には五輪塔4と6が存在する。阿弥陀三尊種子の板石塔婆であるが、主尊の乗る蓮座以上は欠失する。残存高64.5cm、下幅29.3cm、厚さ2.5cmをそれぞれ測る。

碑面は滑沢に仕上げられているが、枠線より下位は未調整である。脇待種子は右側に観音菩薩(サ)、左側に勢至菩薩（サク）が刻まれる。ともに蓮座の上に乗る。刻字は三行にわたり、中央から左の行にかけて「元徳元年（1329）　十一月十八日」と紀年銘が刻まれる。右の行には「太（大？）才巳（己）巳」と太歳干支が刻まれるが、彫りは稚拙で字も間違っている。このほか、種子や蓮座、枠線を彫るための薄い割り付けの線が観察できる。裏面には大きな剝離痕と、側端部の細かい整形痕が残るのみで、工具による加工痕は見られない。

10は第二墓群の東南端から出土した。ほぼ水平に碑面を上にし、頭部を北東へ向けていた。高さ118.7cm、上幅26.0cm、下幅31.4cm、厚さ3.7cmを測る大型の完存品である。

碑面には自然な剝離が見られるものの、全体は滑沢に仕上げられている。基部は未調整で、斜方向の工具痕が残る。二条線は深く丁寧に彫り出され、幅0.5cmほどの枠線が二重に巡る。月輪の中の種子は阿弥陀如来（キリーク）で、蓮座の上に乗る。なお、内側の枠線は月輪と重ならないよう途切れている。紀年銘は「嘉暦三年戊辰（1328）十二月十二日」で、干支は横書きである。紀年銘の両側には光明真言が刻まれている。裏面には側端部に整形の痕を残しながらも、工具によるはつり痕は観察できない。

11は第三墓群石列4の東、およそ1mから単独で出土した。上半部の残欠で、裏面を上に向けていた。残存高38.0cm、上幅20.8cm、厚さ2.5cmを測る。二条線はくっきりと彫り出され、幅0.5cmの深い枠線が巡る。月輪の中の種子は阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、蓮座の上に乗る。裏面にはわずかに工具痕が観察できる。その幅は約1.5cmである。

12は第三墓群の蔵骨器４に碑面を接し、直立した状態で検出された。上半部は欠失する。残存高38.5cm、下幅25.7cm、厚さ3.4cmである。

碑面は滑沢となっているが、基部は未調整である。枠線は幅0.5cmで、深く刻まれている。種子や蓮座は不明である。紀年銘は中央から左の行にかけて「□元年己　七月八日」とある。その右の行には「ラ・カ・キャ」と、大日如来真言の三字が残る。裏面には中央から側端部へ向け、まばらな工具痕が認められる。工具痕の幅は約1.5cmである。

接合をしなかったとはいえ、11と12は大きさをはじめ、碑面や枠線の状態もよく似ている。裏面の工具痕についても、その幅や方向は一致している。両者は同一体であったかもしれない。

13は12のやや南側で裏面を上に向け、東へ倒れたような状態で検出された。直上には板石塔婆14が密着して乗り、直下には埋納焼骨14が存在する。下半部のみの残欠で、さらに基部で二つに折れ、上下に重なっていた。残存高49.0cm、下幅27.7cm、厚さ2.8cmを測る。

風化の進行が著しいため、碑面・裏面ともに状態は悪い。碑面には枠線が確認できるが、紀年銘などはまったく観察できない。裏面はおおよそ平坦で、側端部も欠き取り整形していない。このため、全体は厚板状を呈している。

14は13の上に斜めに重なって出土した。蓮座部分から上を欠失し、残存高53.6cm、下幅23.5cm、厚さ2.3cmを測る。碑面は滑沢に研磨され、幅0.3cmの丁寧に彫り込まれた枠線が巡る。種子は不明で、蓮座は半分ほどが残る。その下には中央行から左行にかけ、「厂广二二年辛巳　二月二十一日」と紀年銘があり、右行には「ア・バ・ラ・カ・ケン」と大日如来真言が刻まれる。「厂广二二年」は「暦応四年」で、西暦1341年にあたる。裏面の工具痕はまばらで、かつ短いものが残存するに過ぎない。工具痕の幅は約1.5cmである。

15は第三墓群の中では一段奥(西)、ほぼ直立して出土した。南には16が並立しており、それぞれの側端をぴったりと合わせていた。この２基の直下には埋納焼骨12が存在する。概ね完存し、高さ48.5cm、幅15.0cm、厚さ2.2cmを測る。素材の板石はわずかに湾曲し、碑面が凹面となっている。

碑面は基部を除いて平滑に仕上げられているが、風化のためかやや荒れている。二条線の彫り出しは浅く、枠線はない。ただ、二条線と枠線の部分、および種子と蓮座の部分には、浅い割り付けのための線が引かれている。種子は金剛界大日如来（バン）で、小ぶりな蓮座の上に乗る。紀年銘は三行にわたり、「正慶元　年（1332）十二　月廿八日」と刻まれている。裏面の工具痕は中央付近、中心線上に短く残る。工具痕の幅は約1.2cmである。

16は15と碑面の向きを揃え、きれいに並立して出土した。山形部から種子の頭部にかけて欠失する。残存高55.5cm、下幅18.1cm、厚さ2.2cmである。

碑面は滑沢で、幅0.4cmの枠線がしっかりとした彫り込みで巡る。枠線の下には２条の浅い横線が引かれ、未調整の基部と碑面を分けている。種子は阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、蓮座の上に乗る。ともに深い薬研彫りで、碑面に対して大きなスペースを取っている。紀年銘は「正中二　年（1325）丑六月　十九日」と三行に刻まれている。裏面は大きな剝離痕と側端の整形痕のみで、鏨状ないし鑿状の工具痕は見られない。

17は15・16の南側前面、斜めに倒れかけたような状態で出土した。裏面を上に、頭部を東へ向けている。山形から二条線にかけ、袈裟掛けにその上部を欠失する。残存高68.0cm、残存部での上幅20.8cm、下幅22.3cm、厚さ2.4cmを測る。

碑面は平滑とはいえないながらも、基部よりも丁寧に仕上げられている。二条線はくっきりと彫り出されている。種子は蓮座に乗った阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、紀年銘は「徳治三年（1308）四月日」と拙く刻まれる。枠線は確認できない。裏面には、部分的に平行する工具痕が観察される。工具痕の幅は約1.5cmである。側端部の整形痕はあまり細かくなく、基部までぐるりと施されている。

18は石列４と直交するように、頭部を東に向けて出土した。やはり裏面を上にし、ほぼ水平に転倒していた。高さ87.0cm、上幅21.5cm、下幅25.7cm、厚さ2.5cmを測る完存品である。

基部を除き、碑面は滑沢に仕上げられている。二条線は幅広く丁寧に彫り出され、幅0.5cmの太い枠線が巡る。月輪の中の種子は阿弥陀如来（キリーク）で、蓮座の上に乗る。いずれも深い薬研彫りで、碑面に対して大きなスペースを占めている。下半には、右に「ア・バ・ラ・カ・ケン」、中央から左に「元徳三年ノ未（1331、ノは辛であろうか。）　四月廿四日」と、大日如来真言と紀年銘が三行にわたって刻まれる。裏面の工具痕は幅約1.5cmで、中央部に集中して残る。側端部の整形痕は粗めである。

19は18の南隣、やや頭部を南へ振って出土した。裏面を上にし、大きく三つに折断していた。これは試掘時に重機で引っ掛けてしまったためで、本来はいくぶん西、基部先端を18に揃える程度の位置にあったと思われる。ほぼ完存し、高さ63.5cm、上幅20.0cm、下幅22.1cm、厚さ2.5cmを測る。

二条線の彫り出しは浅く、下の条線は細く右上がりとなり、上と平行が保たれていない。碑面は風化と剝離が進行している。明瞭な枠線は引かれず、当該部分と中心線および紀年銘部分には、かすかに細線の引かれているのが観察できる。種子は阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、蓮座に乗る。紀年銘は二行にわたり、「元徳□□□　七月九」と読める。「元徳」は元年が８月29日に改元であるので、三・四字目は二年か三年（1330・1331）と刻まれていたものと考えられる。五字目は「禅」であろうか。また、左行「九」の下は剝離が深いため、「日」の存在は確認できない。裏面は側端に整形痕が残るものの、鏨ないし鑿状の工具痕は見られない。

20は大きく二つに割れ、半分ほどが19の下に重なって出土した。これも試掘時に破損し、かつ東へ移動させてしまった。一部を欠失するのは、この時に粉砕してしまったためである。接合後の計測値は、高さ90.7cm、上幅21.4cm、下幅25.2cm、厚さ2.4cmである。

碑面は丁寧に仕上げられており、基部以外はかなり滑沢となっている。二条線は深く彫り出され、幅0.5cmの太い枠線が巡る。月輪の中の種子は阿弥陀如来（キリーク）で、蓮座の上に乗る。下半の右行には「ア・バ・ラ・カ・キャ」の大日如来真言、中央行から左行には「元徳三年ノ□　四月十一日」の紀年銘が刻まれる。裏面側端には基部まで全周する整形痕が残るが、鏨ないし鑿状の工具痕は観察できない。

こうした全体の造りや計測値、碑面の内容や字体などは18と酷似する。その出土位置も含めれば、両者は双碑の関係にあると推知されよう。

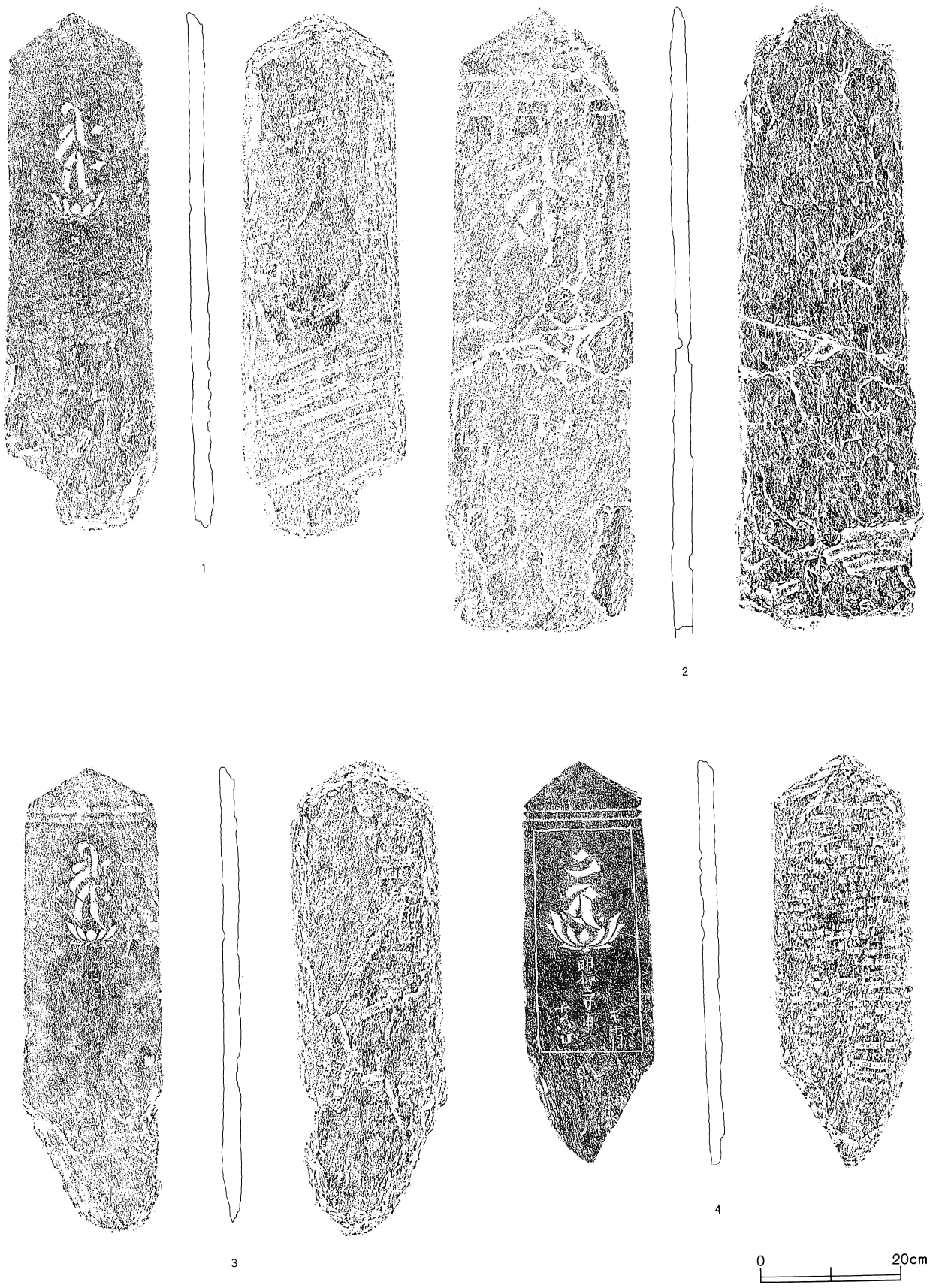
21は第三墓群内では、最南端から出土した板石塔婆である。これも試掘時に基部を粉砕してしまった。現状では、残存高59.2cm、上幅19.3cm、残存部下幅21.3cm、厚さ3.0cmである。大きさの割りには、厚味のある製品である。

碑面は平滑なものの、風化のためやや荒れている。二条線は太くしっかりと彫り出され、幅0.4cmの枠線が巡る。種子は阿弥陀如来（キリーク、異体梵字）で、紀年銘は「弘安六年（1283）十一月日」と刻まれる。他のものに比して、裏面側端の整形は深く内側まで入る。鏨状の工具痕は２条が観察できるのみで、その幅は約1.5cmである。

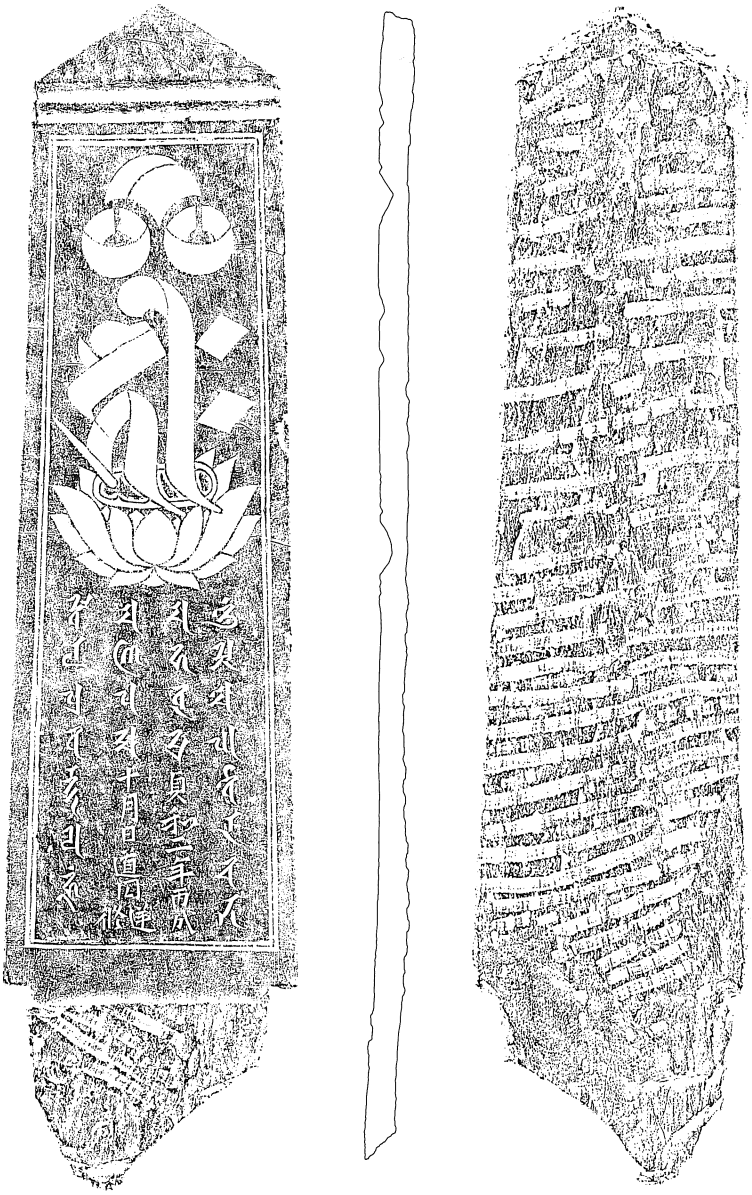
22は第二墓群西側、第Ⅱ次周堀の斜面から底部にかけて出土した。北側には五輪塔の集中出土した部分がある。二つの破片が接合したもので、基部よりやや上までの残欠である。接合した側端部には大きな打撃痕が認められる。残存高28.7cm、下幅14.0cm、厚さ2.1cmを測る。

碑面には深い石の摂理が走り、細かい凹凸を生じている。幅0.1cmの細い枠線が観察され、中央に「戌」、左に「日」と紀年銘の一部が残る。裏面側端部には深く細かい整形痕が見られる。

第571図　板石塔婆(1)



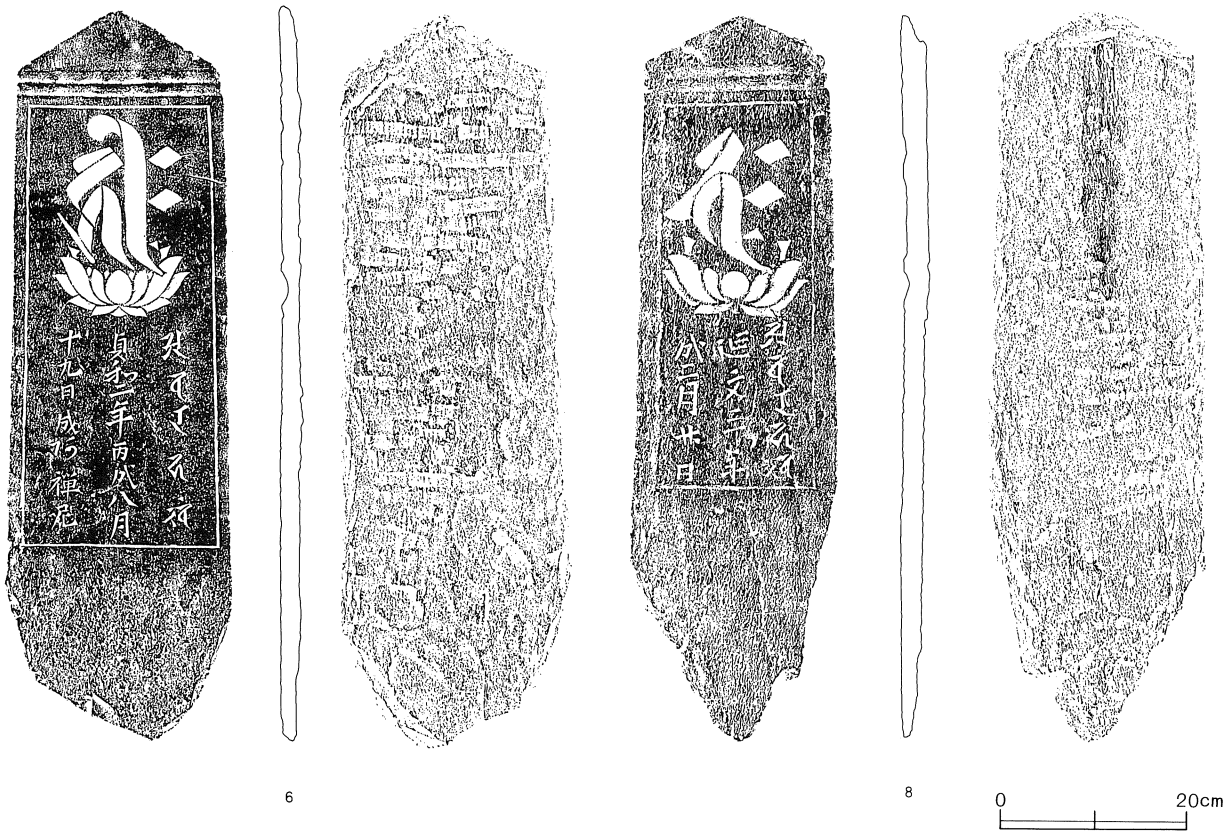
第572図　板石塔婆(2)

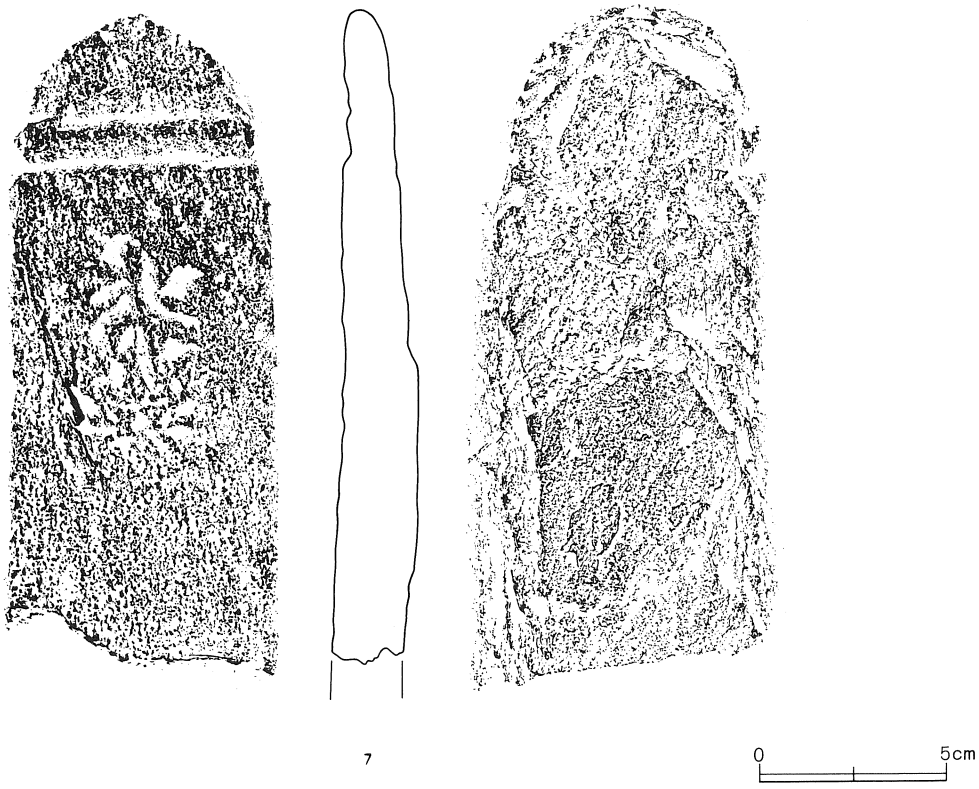


5

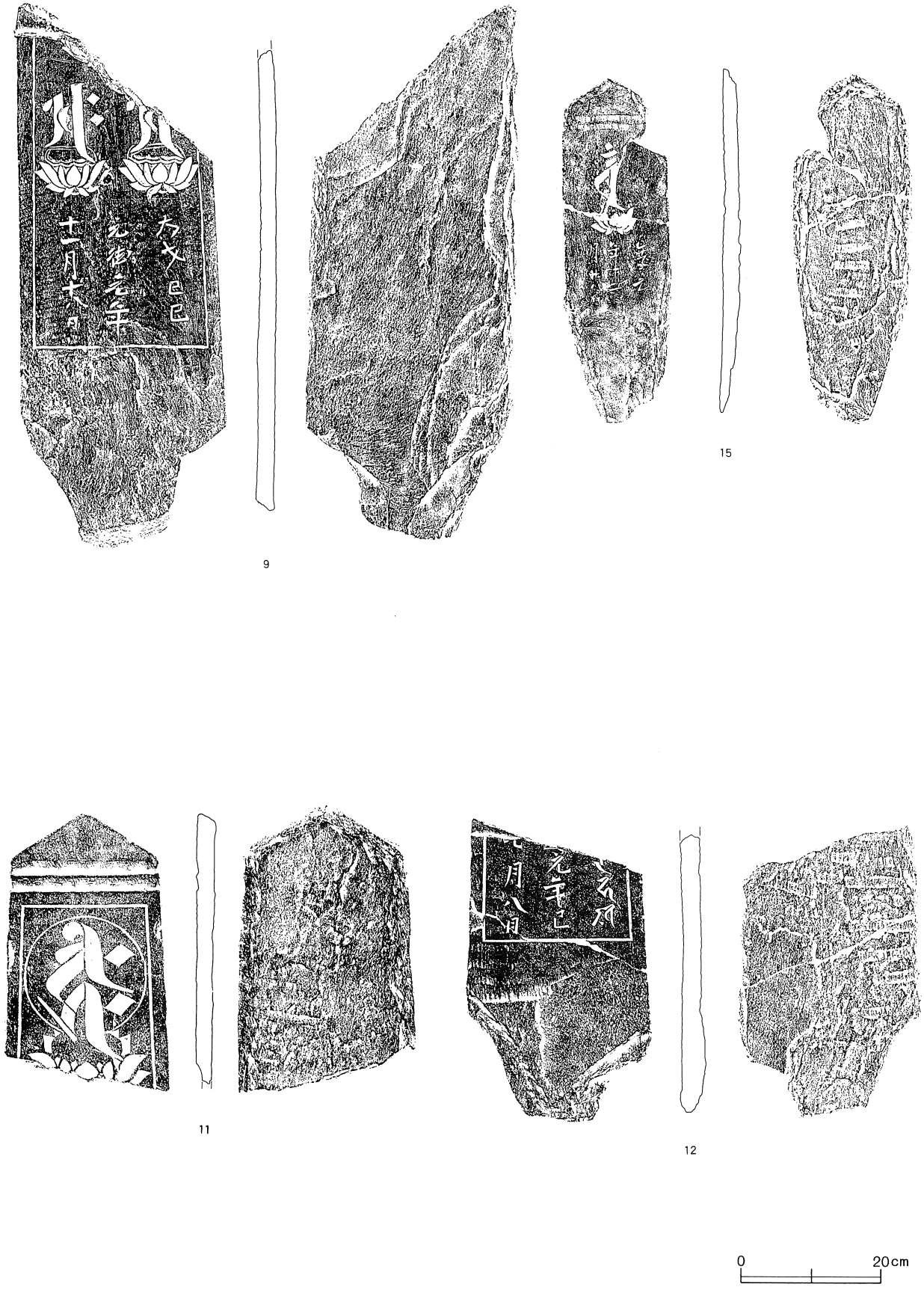
0　20cm

第573図　板石塔婆(3)

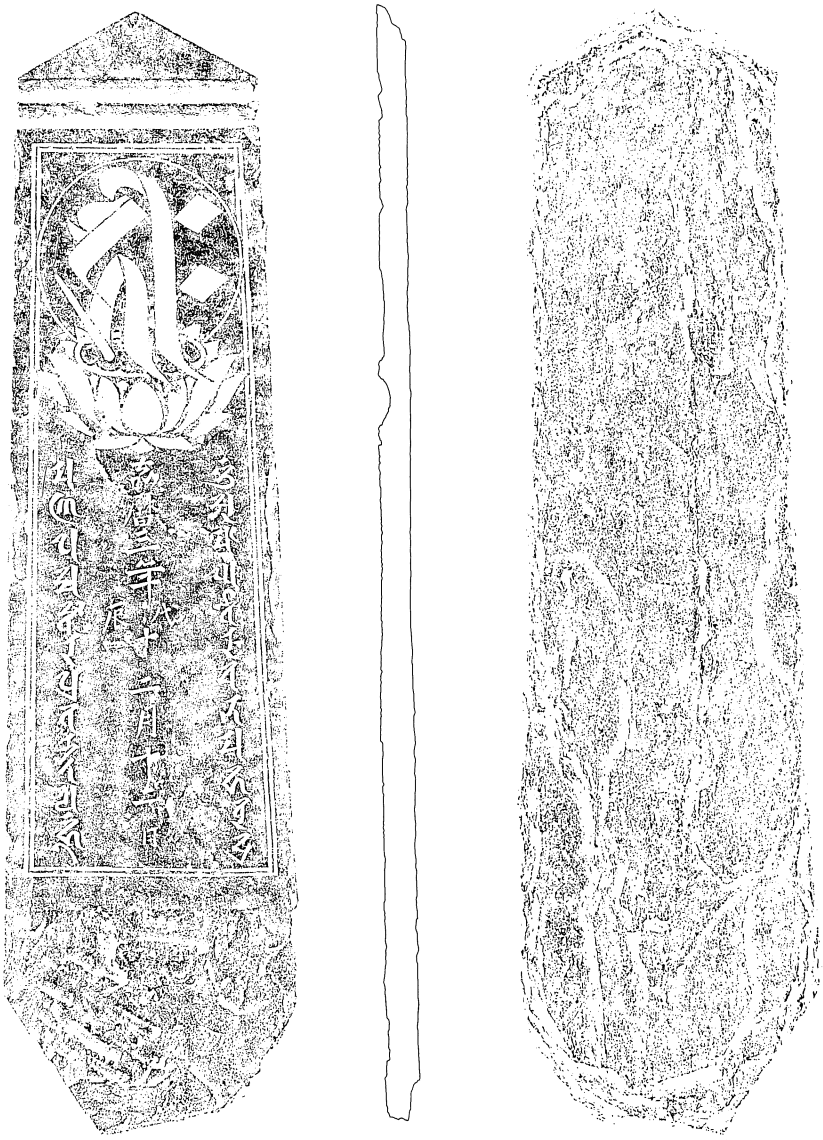




第574図　板石塔婆(4)



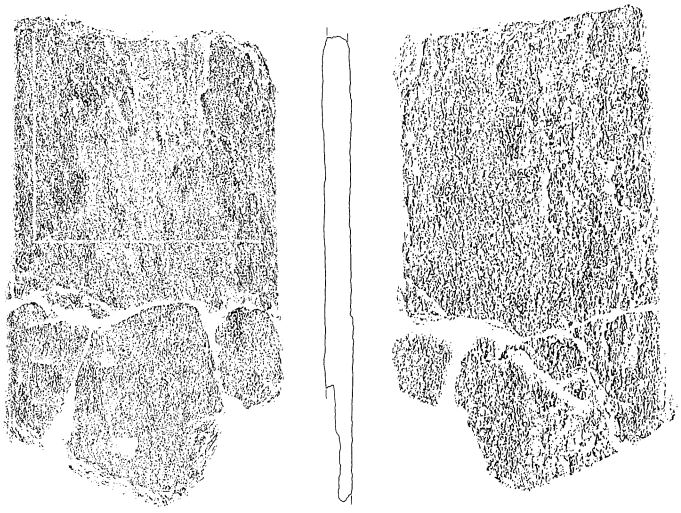
第575図　板石塔婆(5)



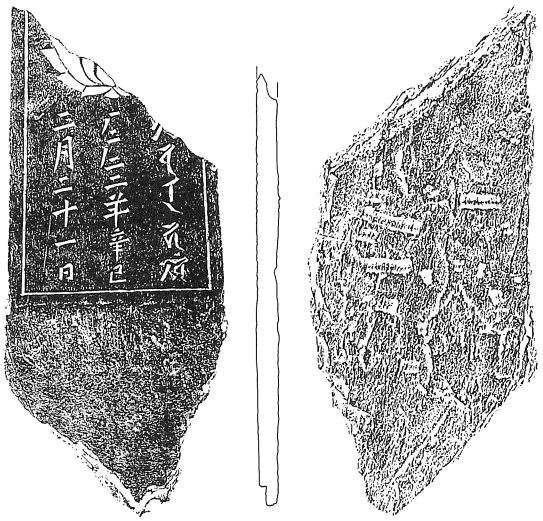
10

0　20cm

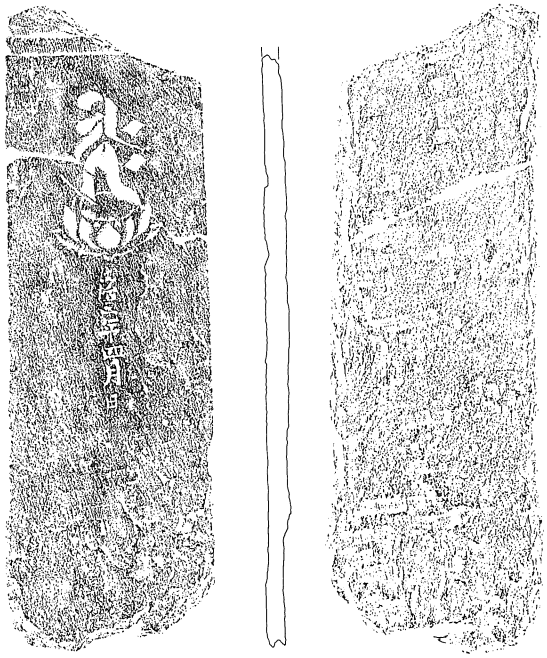
第576図　板石塔婆(6)



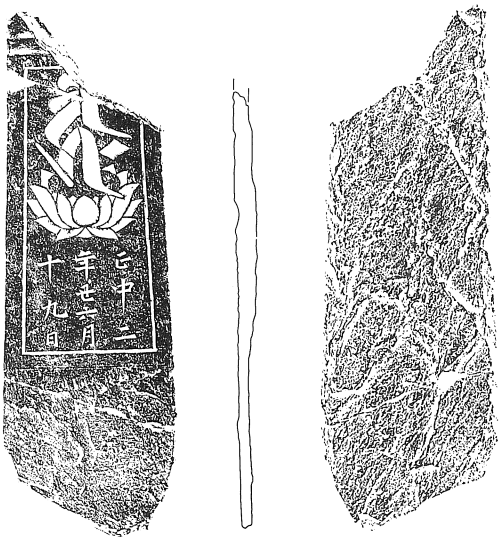
13



14



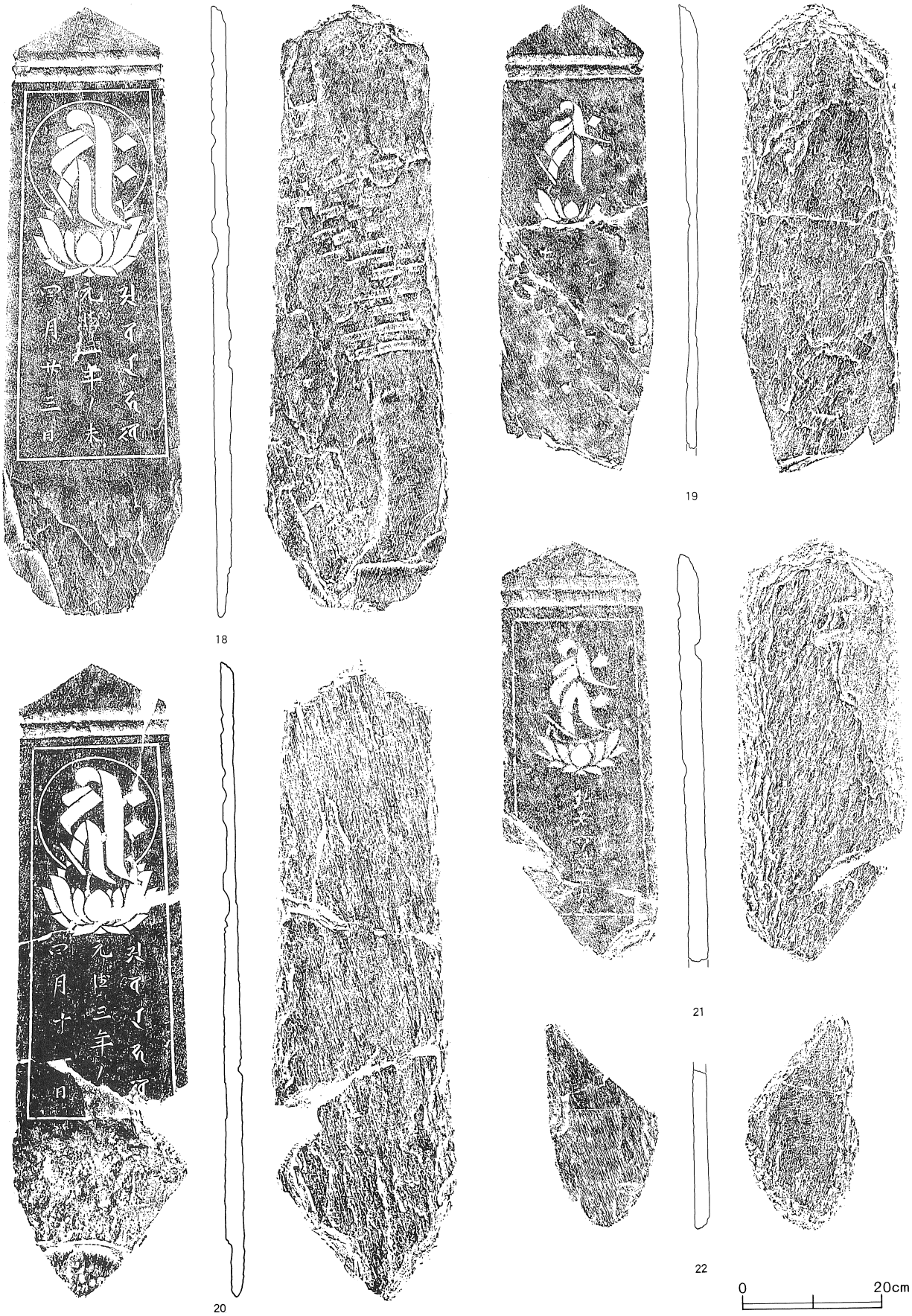
17



16

0　20cm

第577図　板石塔婆(7)



③蔵骨器（第578図・第579図）

蔵骨器は第二墓群南端から１・２が、第三墓群から３～６が出土している。このうち３・４は石蓋、５は片口鉢を転用した蓋を被っていた。遺物番号は平面図中の蔵骨器番号と一致するが、５のみは蓋と容器がセットであるため、これに子番号を付した。

１は渥美の壺で、頸部以上は故意に打ち欠かれている。体部は倒卵形を呈し、現存高22.0㎝、底径6.7㎝、胴部最大径17.5㎝を測る。

成形は粘土紐の巻き上げで、器表面に積み上げ痕が観察できる。器面は内外ともに、回転による横ナデ調整が施される。頸部から肩部にかけては、横方向の刷毛塗りによる灰釉がかかる。底部外面は未調整のままである。焼成は良好で、色調は灰色（N　5/0）から黒色（2.5GY　2/1）である。

２は常滑の「不識壺」と呼ばれる小型の広口壺で、器高17.2㎝、口径14.7㎝、底径14.5㎝を測る完存品である。底部は広く、安定感の強い器体となっている。

成形には粘土紐を用いているが、巻き上げなのか、輪積みなのかは断定できない。器壁は直線的に立ち上がり、胴上位で強く屈曲して肩部をなす。これよりは緩やかに外湾して口頸部へ至る。口縁部には幅1.2㎝ほどの薄い粘土紐を巡らせ、縁帯を形成している。器表内面は指による横ナデ、外面は肩部以下がヘラ状工具による下から上へのナデ、以上が回転によるナデである。肩部には押印文が１個押捺されている。硬く焼き締まっているという印象は弱く、色調は赤褐色（5YR　5/4）である。底面には静止糸切り痕が残る。

３は在地産と考えられる、いわゆる瓦質の広口壺である。器表面の一部を埋納以前に剝離欠失するものの、器体は完存している。器高24.1㎝、口径16.8㎝、底径11.5㎝で、全体はやや潰れた球形を呈する。底部は平坦ながらも、わずかに上げ底状である。

成形には粘土紐を用いているが、これも輪積みか巻き上げかは確認できない。器壁はごく緩やかに内湾して立ち上がり、胴部のやや上位に最大径を有する。肩部は直線的で、弱い「く」字状に屈曲する。口縁部断面は角頭状で、斜位に縁帯部が作出される。器表内面は下位が指頭、中位以上がヘラ状工具による横ナデである。外面は縦方向のヘラナデ後、指頭による回転横ナデが加えられる。さらに胴部下位は、縦方向のケズリ状の強いヘラナデが施される。色調は灰白色(2.5GY　8/1)を呈し、焼成は均一的である。底部外面は未調整のままとなっている。

直上には石蓋（第580図２）が覆っていたが、口縁には密着していなかった。

４も在地産と考えられる瓦質の広口壺である。器体の上には、熔結凝灰岩の石蓋（第580図３）が乗っていた。器面は風化に加え、石蓋の重みのために剝落、あるいは欠折していた。接合、復元した計測値は、器高22.0㎝、口径16.8㎝、底径11.0㎝である。

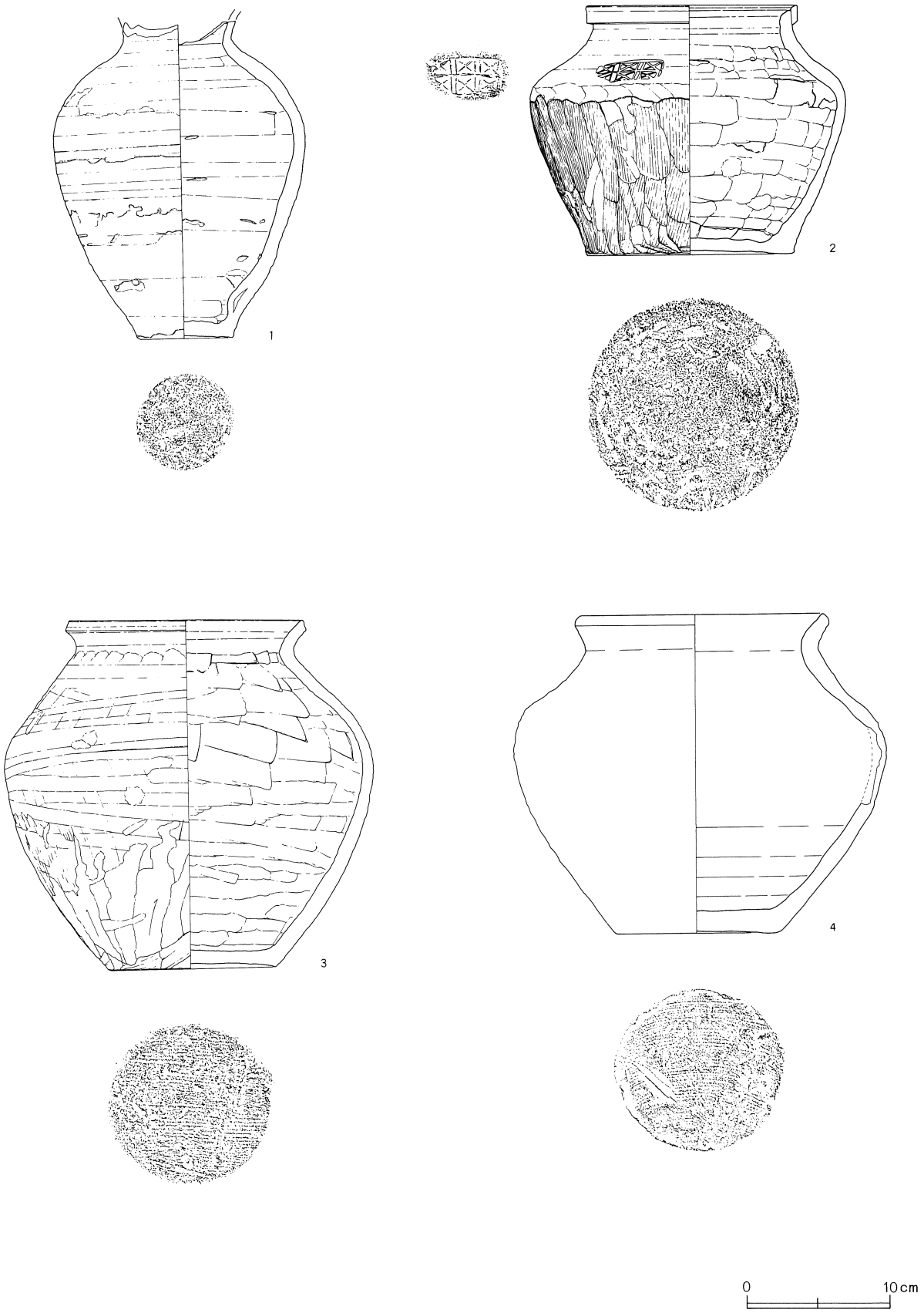
粘土紐の輪積みによる成形で、内面下位にその痕跡が残る。表面の調整痕は風化、剝落のため観察できない。器壁は底部から大きく開いて立ち上がるが、肩部の屈曲が強いため、全体は潰れたような形状となっている。口縁部の外反は弱く、端部は丸味を帯びる。底部はわずかに上げ底となり、底面には静止糸切り痕が残る。土師器状の軟質な焼成で、色調は灰オリーブ色（5Y　5/2）である。

５－１は蔵骨器５の蓋に転用された、山茶椀系の片口鉢である。片口部分以下、体部の40％ほどを欠失する。図上復元では器高8.8㎝、口径22.1㎝、高台径10.5㎝となる。

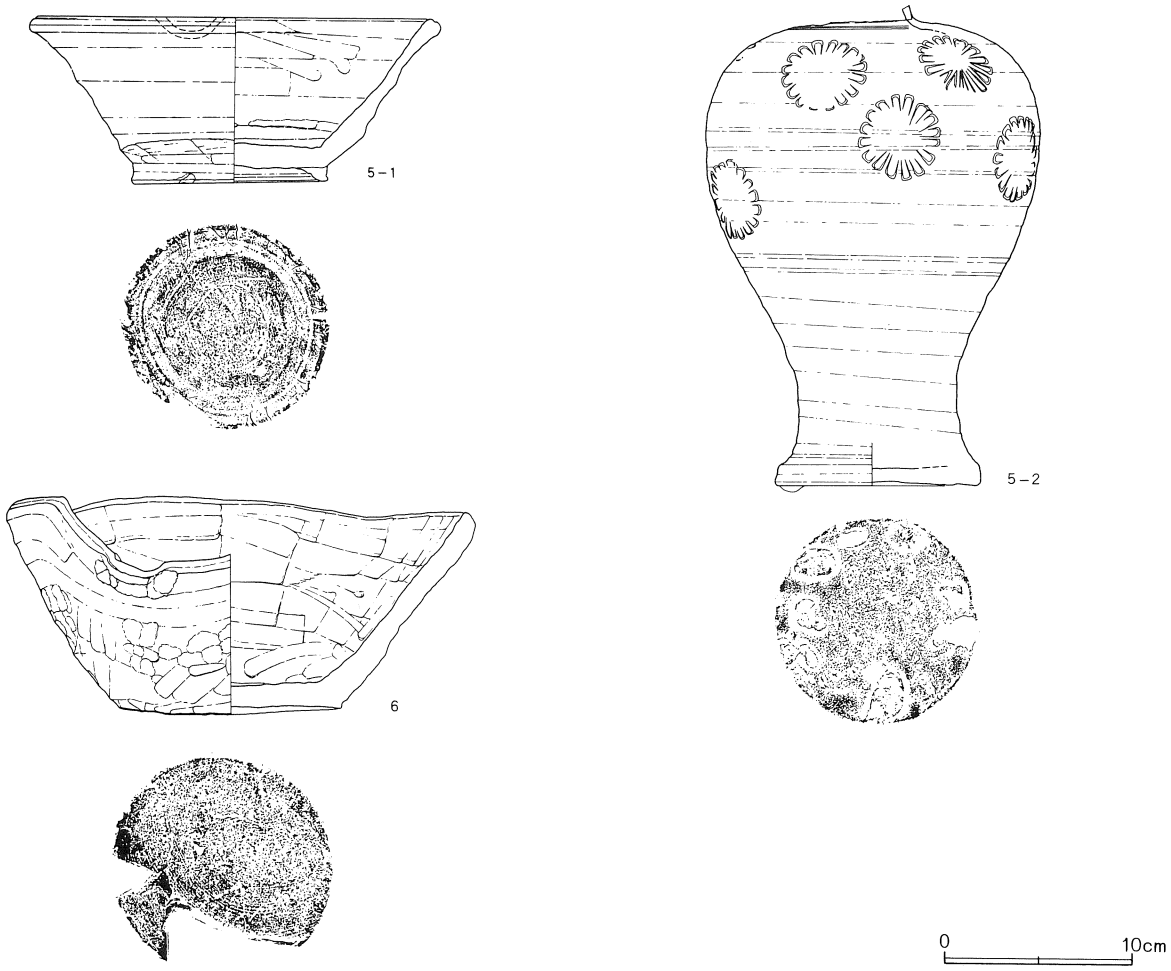
成形は粘土紐の巻き上げで、内外面ともに回転によるナデ調整が施される。その後、外面下端には一段の回転ヘラケズリが加えられ、底面には断面三角形に高台が貼付される。器壁は直線的に大きく開き、口縁部は肥厚して丸味を帯びる。その端部中央には、浅い条線が走っている。埋納以前の使用により、内面の中位以下は滑沢となっている。胎土中には小石を多く含み、焼成は非常に良好で、硬く焼き締まっている。色調は灰色（N　7/0）を呈する。

５－２は蔵骨器５の本体である。古瀬戸灰釉の瓶子（締腰型）で、頸部以上は打ち欠かれている。残存高

第578図　墓跡出土蔵骨器(1)



第579図　墓跡出土蔵骨器(2)



25.6cm、底径11.0cm、胴部最大径18.0cmで、器体は無花果の果実状を呈する。

成形は粘土紐の輪積みによるものと思われるが、下半部ではその痕跡がやや斜位となっている。器表外面には回転ナデ調整が施され、頸部直下には3条となるよう、これも回転により細い螺旋沈線が引かれる。肩部から胴部中位にかけては、二段にわたり印花文が押捺される。印花文は17弁の菊花で、各段に6個、計12個が互い違いに配されている。菊花の直径は約4.5cmで、中心部は押捺があまいため、ほとんど未刻となっている。開口部が小さいので内側はほとんど窺見することができないが、頸部の下には放射状に巡る指頭圧痕が観察できる。

灰釉は概ね緑色から淡緑色で、茶色味を帯びたところも一部見られる。施釉は未調整の底面を除き、全面にかかっている。釉層は薄く縞目もつくが、光沢があり、かなり安定したものと言うことができる。

6は在地産と考えられる瓦質の片口鉢である。試掘時に欠き取ってしまったため、残存するのは半分程度である。器体は歪みが著しく、器壁は大きく波を打っている。片口ながら、上から見ると四つの口を持つ角鉢のようである。歪みを矯正した場合の計測値は、器高10.3cm、口径26.2cm、底径11.9cmとなる。

成形は粘土紐の巻き上げである。器壁は厚く、本来的には直線的に大きく開くものであろう。器表内面は横位のヘラナデで、部分的に指頭ナデが加わる。外面は下半が縦方向のヘラナデ、上半は回転による指ナデである。なお、中位には指頭圧痕が多く見られる。片

口部は指頭成形によって作出されており、内面は平坦となっている。底面には静止糸切り痕が残る。胎土中に小石や粗砂粒を多含するため、器表面はかなりザラつく。内面には特に使用による摩耗の様子も窺えない。焼成は良く、瓦質というよりも須恵器質な印象を強く受ける。色調も灰色（N　4/0）で、全体に青味を帯びている。

④板石塔婆台石（第580図１）

上下および一長側の面取りをした、熔結凝灰岩の楕円礫が素材である。これは墓群を区画する石列に用いられたものと同一である。

長径34.3cm、短径20.5cm、厚さ11.2cmをそれぞれ測る。上面の中央には礫の長軸に沿って、板石塔婆を差し込むためのほぞ孔が穿たれる。孔は長方形で、上面が21.5cm×4.7cm、底面が17.5cm×2.4cmである。底面の凹凸は強いが、深さは平均7.0cmほどとなる。また上面は細かくはつり、平坦となるように整形している。下面は特に加工された痕跡はなく、素材のままの大きな剝離面が残るのみである。

ほぞ孔や上面の加工は、表面に残る工具痕から推して、刃部の幅2.0cmほどの鑿状工具によるものと思われる。

⑤蔵骨器石蓋（第580図２・３）

２は蔵骨器３の石蓋である。緑泥片岩の板石で、三角形の各角を折り取ったような形をしている。長辺24.2cm、高さ20.7cm、厚さ3.8cmを測る。

蔵骨器側となっていた下面は、剝離があるもののおおよそ平坦である。部分的に引っかいたような条痕が見られる。これに対し、上面は長辺部を除き、側端が斜めとなるような叩打による欠き取り加工が施されている。一部には鑿状の工具痕も観察できる。これは板石塔婆の特徴と合致する。枠線や紀年銘などはまったく観察できないが、形状からもその基部と考えて大過なさそうである。つまり、石蓋は板石塔婆の基部を転用したものということになる。但し蔵骨器の口縁に合わせて溝を截るなど、特に転用に際しての加工は施されていない。

この場合に問題となるのは、石蓋の検出が貼石と同一レベルにあったこと、これが蔵骨器と密着していなかったこと、である。すなわち、この板石塔婆の残欠は石蓋ではなく、文字どおり板石塔婆の残欠そのものである可能性も否定できないのである。しかし、蔵骨器に密着していなかったとはいえ、残欠は水平にぴったりと直上を覆っており、貼石もここだけは上に乗っていた。加えて、接合する板石塔婆も出土していない。こうした点を勘案すれば、やはり転用した石蓋と判断するのが妥当と思われる。

３は蔵骨器４の口を塞いでいた石蓋で、素材は熔結凝灰岩の楕円礫である。表土掘削時に一部を欠いてしまったが、およそ長径27.0cm、短径20.4cm、厚さ8.5cmを測る。

石蓋は楕円礫の上下、および一長側を打ち欠き、平坦面としたもので、面取りされた上面と側面は、さらに鑿状の工具で細かい整形が施されている。一方、蔵骨器と接する下面は、面取りの大きな剝離痕のままである。こうした加工は、全てが自然礫から行なわれたものではないと考えられる。なぜなら、おおまかな加工は墓群の区画（石列）に利用された、熔結凝灰岩と同じだからである。おそらく、区画のための礫を取り外し、細部に手を加えて石蓋としたのであろう。

⑥その他の出土遺物（第581図・第582図）

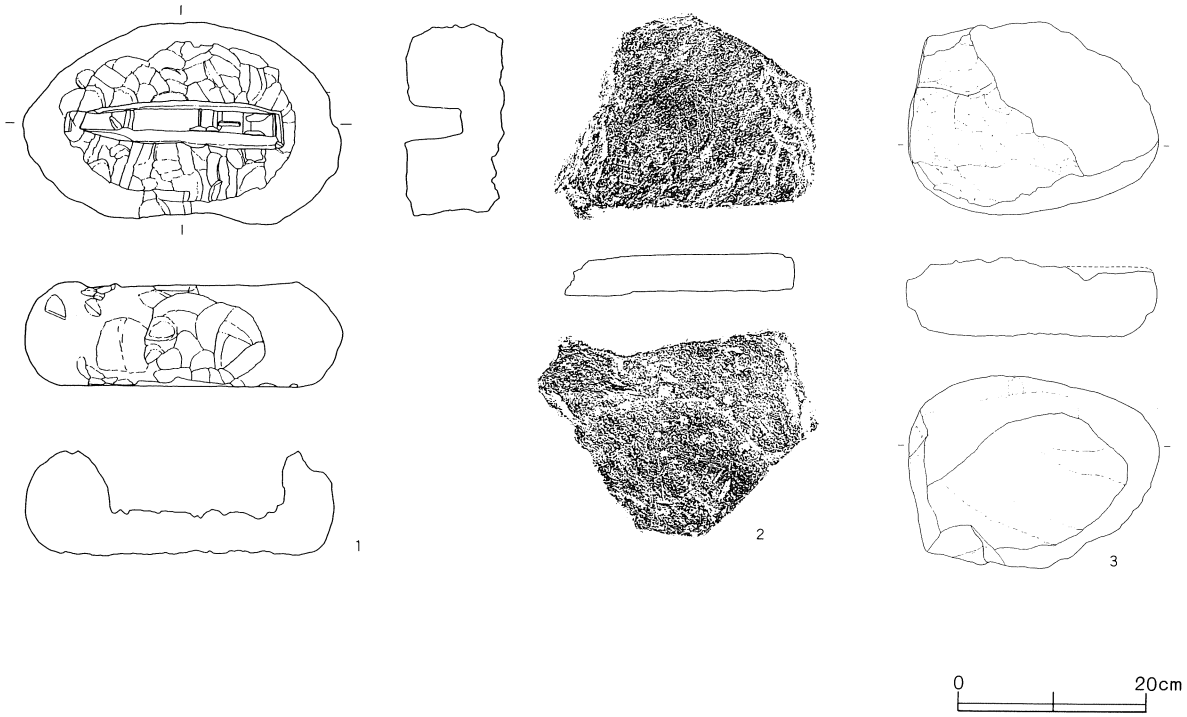
以下に掲載する遺物は、墓跡内より出土した陶磁器の破片である。大半は埋葬施設群を覆う貼石に混じ、広範囲に散乱していた。

１～３は舶載の青磁片である。いずれも小破片で、１は鎬蓮弁文の描かれた椀、２は大型の皿、３は椀の底部であろう。

４は舶載の合子である。いわゆる青白磁で、青味がかった釉がかかる。第二墓群中央部、西側斜面から第Ⅰ次周堀最上位にかけ、小破片となって散在していた。また、一片はかなり離れた第692号ピット中から出土している。蓋・身ともに30%～40%程度の残存で、破片には故意に打ち欠いた痕跡が見られる。

蓋は図上復元で口径11.2cm、器高2.75cmを測る。器

第580図　墓跡出土台・石蓋



壁の厚さは0.4cm弱である。器表面は型取りにより、連続するカマボコ状の浮文が2段に表出される。天井部は平坦で、無文となっている。釉は口縁部内面を除き、薄く全面に施されている。外面は口縁端部に釉がやや厚く溜り、ここを外削ぎ状に釉削りを行なっている。口縁部には一箇所、針先ほどの穿孔がある。釉で塞がっており、意識的なものか否か判然としない。生地はいくぶん青っぽい灰色であるため、釉は薄緑色を帯びている。

身は図上復元で口径8.6cm、受部径11.2cm、器高4.05cm、高台径9.2cmとなる。器体の成形は粘土紐の巻き上げで、これを型に入れている。但し、受部の立ち上がりのみは、別に粘土紐を巡らせている。高台を含めた器表面には、やはり型による3段の浮文が蓋と同様に表出される。高台の内側も同一の型により、花弁状に陰刻されている。釉は底面と受部外面を除き、薄く全面に施される。透明感のある青色を帯び、蓋とは色感が異なる。高台と受部の端は、これも外削ぎ状に釉削りされている。

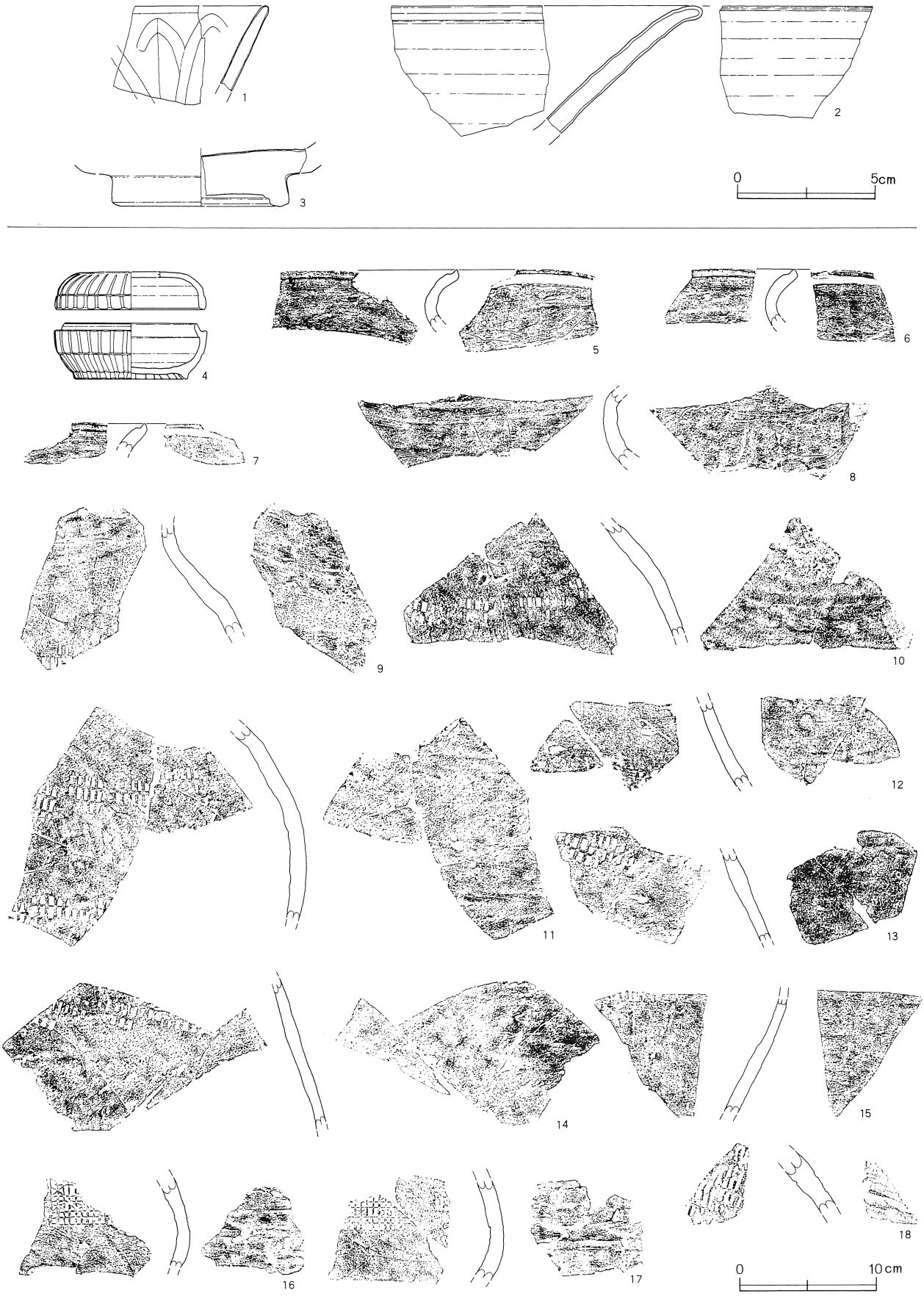
5～30は常滑の甕破片である。このうち、5～11は同一個体で、体部には格子状の押印文が施される。口縁部内面には浅い凹線が巡り、外面には幅の狭い平坦面が作出される。敢て口径を復元するならば、それは約18.5cmとなる。これよりも器壁は薄いが、12～15も同様の押印文を有する。同一個体とは断定できないものの、非常によく似ている。16・17は同一個体で、細かい格子状の押印文が施されている。18～30はいずれも押印文の施された破片で、23～26は濃緑色、27・28は灰色の自然釉がかかる。29・30は底部破片で、復元底径は29が13.6cm、30が14.9cmである。

31は常滑の壺の破片である。器壁は厚く、薄く濃緑色の自然釉がかかる。外面には平行する2本の浅い沈線が引かれている。

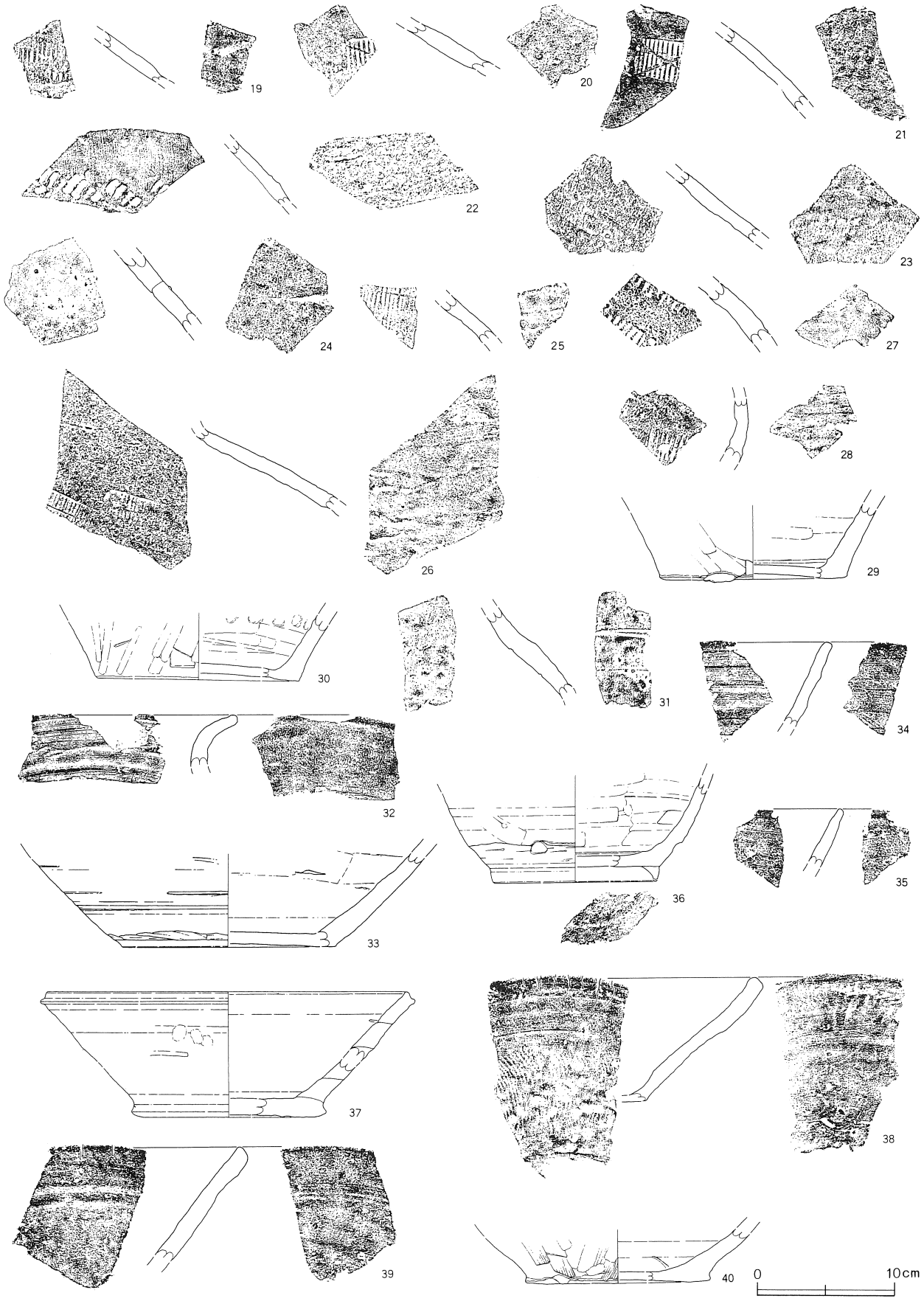
32・33は渥美の大型甕である。32は大きく広がる口縁部片で、端部は丸味を有している。内面は濃く、外面はうっすらと釉がかかっている。33は底部片で、復元底径は約15.6cmとなる。外面の最下部には一段のヘラ削りが加えられている。

34～36は山茶椀系の片口鉢である。36は小石を多く含み、内面は使用により滑沢となっている。外面の最

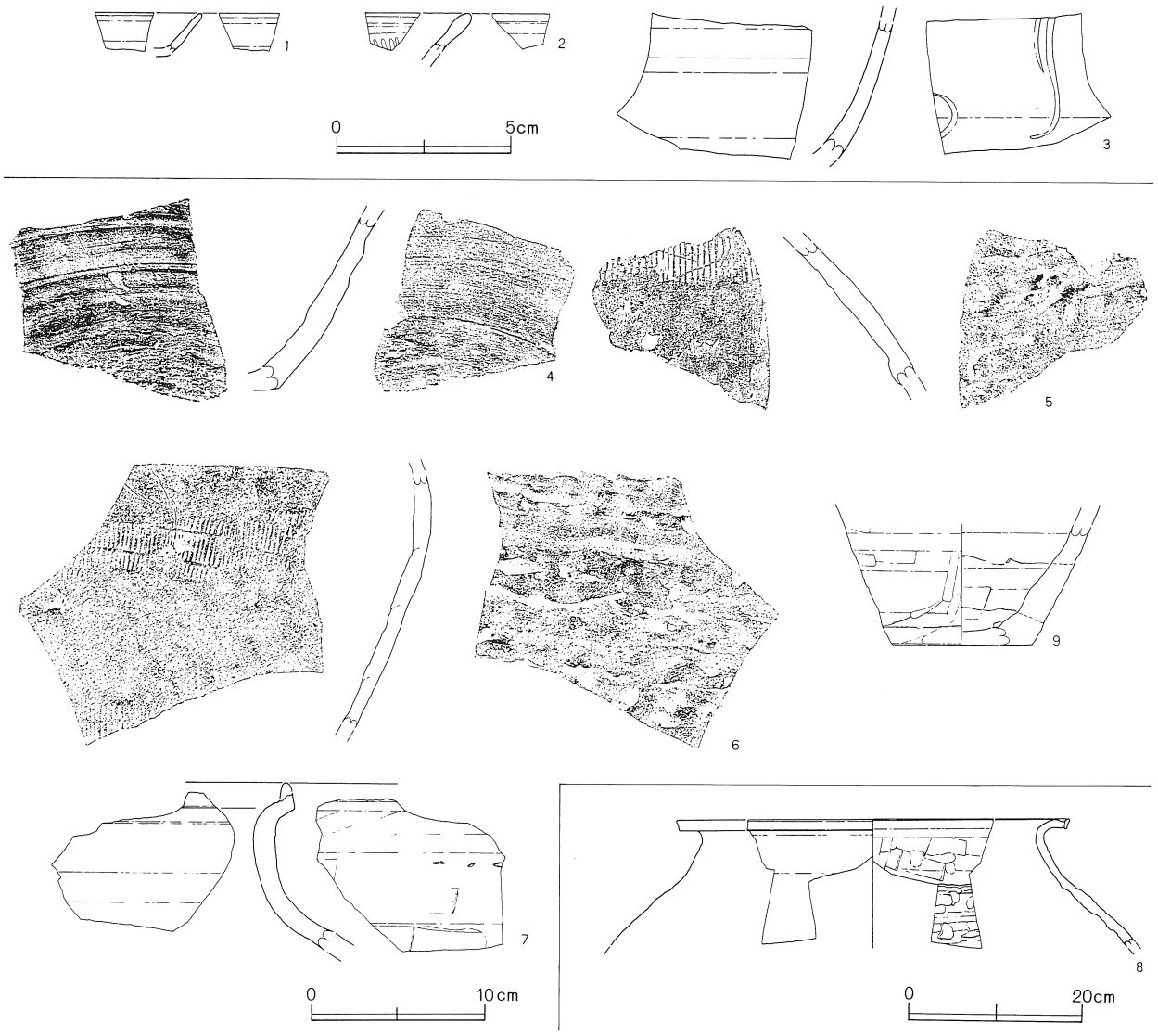
第581図　その他の出土遺物(1)



第582図　その他の出土遺物(2)



第583図　第60号溝跡出土遺物



下部は一段の回転ヘラ削りが施され、その後に段面三角形の高台が貼付される。高台部の直径は、図上復元で約10.8cmである。34も同様の器体と思われるが、その器壁は薄く、かつ直線的である。色調も褐色味を帯び、他の片口鉢とはやや異なっている。

37は常滑の甕系無高台の片口鉢である。図上復元した計測値は、口径25.4cm、器高9.1cm、底径14.3cmである。胎土には小石を多く含み、器表は内外面ともにナデ調整されている。器壁は直線的に大きく開き、口縁端部は浅い「M」字状を呈している。

38・39は在地の片口鉢片である。38は故意に打ち欠いたような痕跡があるうえ、二次的な火熱を受けている。器壁は緩やかに蛇行し、口縁部は肥厚する。器表面は木口状工具による縦方向のヘラナデの後、内面から外面上半にかけて横ナデが加えられる。外面下半には指頭圧痕が多く見られる。胎土中には小石を多く含んでいる。39の器壁は直線的であるが、外面の口縁下部は絞られている。胎土には細砂粒を多量に含むものの、小石はほとんど含まれない。焼成は瓦質と言うにふさわしく、よく焼き締まっている。

40は焼成のあまい常滑で、広口壺の底部と思われる。内面は剥離および風化のために判然としないが、外面には縦方向のヘラナデ痕がよく残る。底部は未調整のままで、底径は13.5cmに復原される。

⑦第60号溝出土遺物（第583図）

１～３は舶載の青磁片である。１は厚さ２㎜の極めて薄い製品で、器壁は直線的である。浅い小皿様のものであろうか。２は椀の口縁部と思われ、外面に縦方向の櫛描文が見られる。３は内面に劃花文の描かれる椀の体部片である。釉は薄く青味を帯びる。

４は山茶椀系の片口鉢で、肉厚で大型のものと思われる。外面下部には一段、幅広の回転ヘラ削りが加えられる。内面下半は使用により滑沢となっている。

５～８は常滑の甕で、５と６は押印文の施された胴部片、７と８は口縁から頸部にかけての破片である。７は頸部が直立し、それより口縁部が短く外屈する。欠失しているため明確ではないが、端部は上につまみだされて受け口状となる。その外面はやや内屈し、平坦な縁帯となるようである。８は頸部で強く屈曲し、口縁部は水平方向に延びる。端部には幅1.2㎝ほどの薄い粘土紐が巡らされ、縁帯としている。図上では口径約46.0㎝、残存高約14.7㎝に復元される大型の甕である。

９は渥美の壺で、図示した部分は70％ほど残存している。底径8.1㎝、残存高6.9㎝を測る。器体は故意に破砕され、底部も打ち抜かれている。成形は粘土紐の輪積みで、その痕跡がよく残る。器面調整は外面下端に一段の回転ヘラ削りが行なわれた後、内外面ともに横方向にヘラナデが施される。

6　茶毘跡

墓跡内からは４基の茶毘跡が検出された。２基（第１・２号）は第三墓群の東側に方向を揃えて、残る２基（第３・４号）は７ｍほど南で重複して、それぞれ構築されている。

基本的にはいずれも長方形の箱形土壙で、長辺の一方に煙道状の突出部が付設されている。「火葬跡」ないしは「Ｔ字形土壙」、などと呼ばれることが多い遺構である。

第１号茶毘跡（第584図上段　ST－１）

墓跡内のＴ-12グリッドに位置する。第三墓群の東約2.5ｍに設営されており、突出部の方向はほぼ第Ｉ次周堀の走向と平行する。燃焼部は長方形の箱形で、長軸0.78ｍ、短軸0.45ｍ、深さ0.35ｍを測る。直立する壁は火熱のため、極めて硬く焼き締まっている。底面は焼けておらず、厚く炭化物と灰、焼骨からなる層が堆積している。東西の壁下にはこの層に覆われ、三個の熔結凝灰岩が置かれている。石の上面と側面は煤けており、上には大型の炭化材が乗っていた。この石は墓群の区画に用いられているものと同様、上下と側面が面取りされている。おそらく、区画の石列から抜き取ったものであろう。

北壁の中央には幅0.23ｍ、高さ0.1ｍの四角い窓があき、これより長さ0.82ｍの突出部が延びている。突出部は燃焼部底面よりわずかに高く、途中から斜めに立ち上がり、地表に掘り抜けている。窓の部分はよく焼けているが、トンネル部分はまったく焼けておらず、灰などの堆積も観察できなかった。

これに対し、燃焼部には天井部が掘り残された様子はなく、覆土にも崩落を示すような焼土層は認められない。焼骨を取り出す際にきれいに除去したとも考えられるが、壁上端の焼けかたからすれば、本来的に天井はなかったものと判断される。

置石や焼骨以外、遺物の出土はなかった。

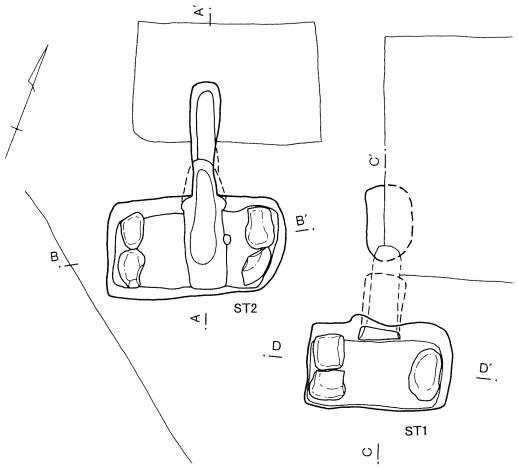
第２号茶毘跡（第584図上段　ST－２）

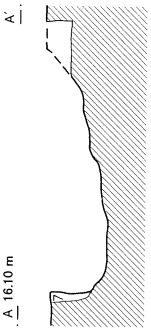
第１号の北西に方向を揃え、すぐ隣り合って検出された。東辺はやや斜行するが、燃焼部はほぼ箱形を呈する。長軸0.97ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.3ｍである。壁は直立し、レンガ状に硬く焼き締まっている。底面は平坦ながら、突出部の延長線上はわずかに深まっている。東西の壁下には２個ずつ、これも面取りされた熔結凝灰岩が置かれている。上面と側面は赤く焼けたり煤けたりしている。同様に、覆土最下層も炭化物と灰、焼骨からなっている。

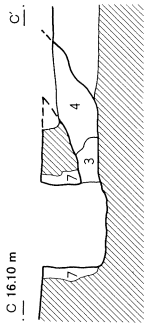
突出部は北壁中央から延びるが、崩落のためトンネルとはなっていない。幅は窓部で0.25ｍ、先端部で0.18ｍと狭まる。長さは0.6ｍである。側面、底面ともまったく焼けておらず、灰などの堆積もない。

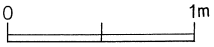
置石や焼骨以外、遺物の出土はまったくなかった。

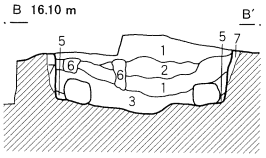
第584図　茶毘跡

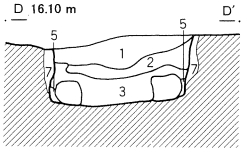




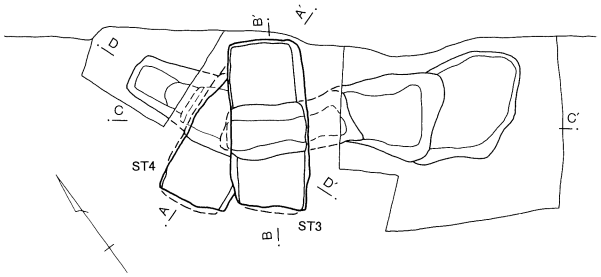


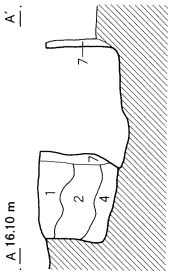


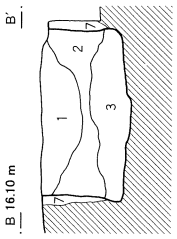


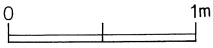


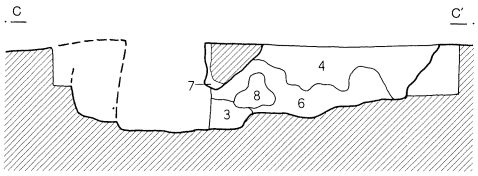
茶毘跡（1・2共通）
1　10YR3/2 ブロック状の腐植土からなる。やや茶色味を帯び、しまり良い。
2　10YR2/3 基本は1層、少量の炭化物と焼土粒を含む。色調暗い。
3　10YR2/3 多量の炭化物・焼土・人骨細片からなる。
4　10YR3/4 主に腐植土からなる。黄色地山粒・炭化物を含む。
5　10R4/4　焼土ブロック。
6　10R4/4　焼土ブロック。
7　10R4/4　壁面地山が火熱で変質したもの。

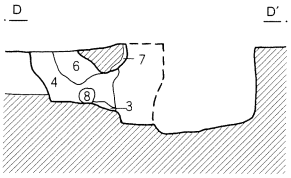












（3・4共通）
1　10YR3/2 ST-1・2と同。
2　10YR2/3 ST-1・2と同。但し色調暗く粘性強い。
3　10YR2/3 ST-1・2の3に相当するが、炭・骨は極めて少なく微細。焼土も殆ど含まない。
4　10YR3/4 ST-1・2と同。
5　10YR2/3 ST-1・2の2に準ずるが、炭・骨・焼土はともに微量。しまり弱くボソつく。
6　10YR4/4 基本は腐植土。これに黄色地山ブロックを多く混じる。しまりは弱い。
7　10R4/4　ST-1・2と同。
8　10YR4/4 天井部の崩落土(腐植土)。

第3号荼毘跡（第584図下段　ST-3）

T-12グリッドの東南隅部に位置する。第4号の完全埋没後、これを大きく切り込んで構築される。燃焼部は0.88m×0.42mの長方形で、深さは0.45mを測る。壁は直立からやや内傾しており、火熱により非常に硬く焼き締まっている。底面はほぼ平坦ながらも、中央部は一段低く、そのまま突出部へと続いている。ここには炭化物・焼土・灰・焼骨からなる灰層が厚く堆積する。炭と焼骨は極めて少なく、投入されたと思しき地山のブロックが多く詰まる。

南壁中央には幅0.26m、高さ0.24mの四角い窓があき、突出部が掘り抜かれる。トンネル部分は0.3mほどと短く、これより南側は土壙状に大きく広がる。この部分は不整な楕円が連なったようになり、底面は段を有して上がっていく。あたかも、作業のための「足場」のようである。突出部は壁面・底面ともまったく焼けていない。

燃焼部、突出部ともに遺物の出土はなかった。

第4号荼毘跡（第584図下段　ST-4）

第3号荼毘跡に大きく切断されるため、燃焼部は半分程度の残存である。突出部の方向はおおよそ第1号・第2号荼毘跡と同一で、第Ⅰ次周堀の走向と一致する。全体は箱形で、短軸0.39m、深さ0.43mを測る。長軸は0.8mほどであったと推定される。壁は内傾しており、火熱により非常に硬く焼き締まっている。底面はほぼ平坦で、中央部はわずかに低い。最下層は灰層で、炭化物・焼土・灰・焼骨を含んでいる。それぞれの量は第3号と同様、あまり多くはない。

北壁中央には、底面より7cmほど高い位置に幅0.32m、高さ0.19mの四角い窓が開く。ここから長さ0.42mの突出部が掘り抜かれる。トンネル部分は崩落の様子も認められないが、0.28mと極めて短い。突出部の縦断面は緩い「L」字形で、底面は平坦である。やはり灰の堆積などはなく、壁面も底面もまったく焼けていない。

遺物の出土はなかった。

⑽　その他の遺物

ａ縄文土器（第585図）

築道下遺跡の本年度報告範囲からは、縄文時代と確定できる遺構は、検出できなかった。

出土した縄文土器は、いずれも古墳時代の住居跡や、中世の井戸や溝の覆土中に混入していたもの、あるいは、重機による掘削の際に表土中から検出したものであり、数量もごく僅かで、全て著しく風化していた。いずれも、縄文時代後期後葉から晩期中葉の安行式土器である。

１から５は後期後葉の土器である。

１は安行１式の平口縁深鉢形土器である。胴部が張り、体部中位で括れ、口辺部が外傾気味に推移して立ち上がる形態の土器である。口縁部に２段に帯縄文が認められる。帯縄文は横位の沈線によって区画されている。口縁部に縦長の貼付文を施す。縄文はＲＬを横位に施している。

２～５は後期後葉の紐線文系深鉢形土器である。

２はごく弱く外傾気味に立ち上がる形態の土器である。口縁部には横位に刻み目のみを施す。口辺部には斜位に条線を施す。器面の摩滅が著しい。安行１式であろう。

３は直立気味に立ち上がる形態の土器である。口縁部はわずかに肥厚しており、１条の横線と刻み目が巡る。口辺部に条線を施す。安行１式であろう。

４は内湾気味に立ち上がる形態の土器である。口縁部は肥厚しており、１条の横線と刻み目が巡る。口辺部には横位の条線を施す。安行２式であろう。

５は胴下半部の破片である。斜位の条線文が施されている。

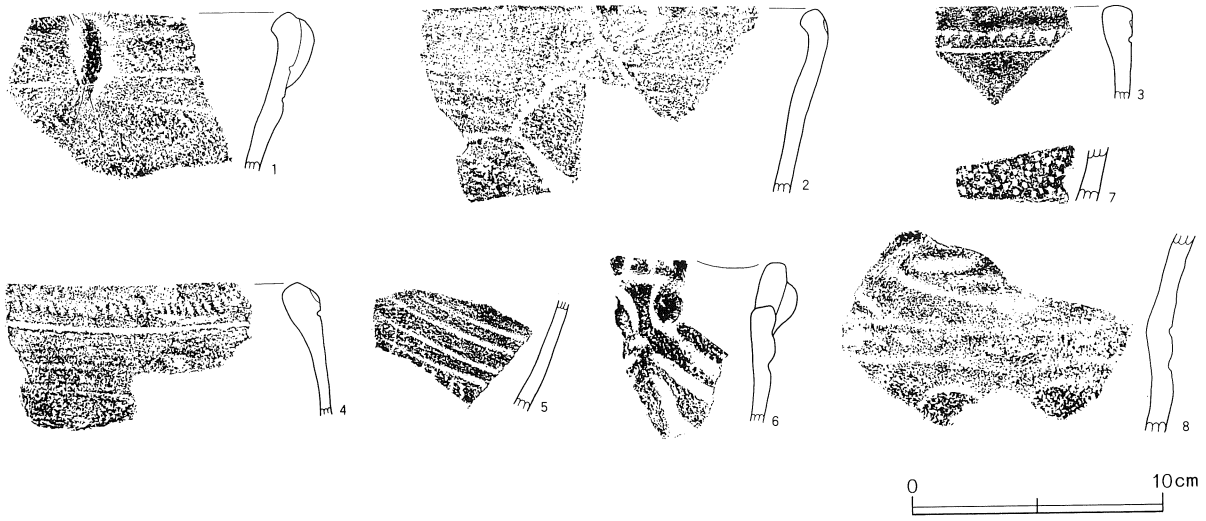
６～８は晩期の土器である。

６は大波状口縁深鉢形土器である。波状部の破片である。波頂部は魚鰭状の把手を施し、その下位には豚鼻状の貼付文を施す。波状の口縁部に沿って、２条の沈線が認められる。口辺部の区画内には沈線文が施されるが詳細は不明である。安行３ａ式である。

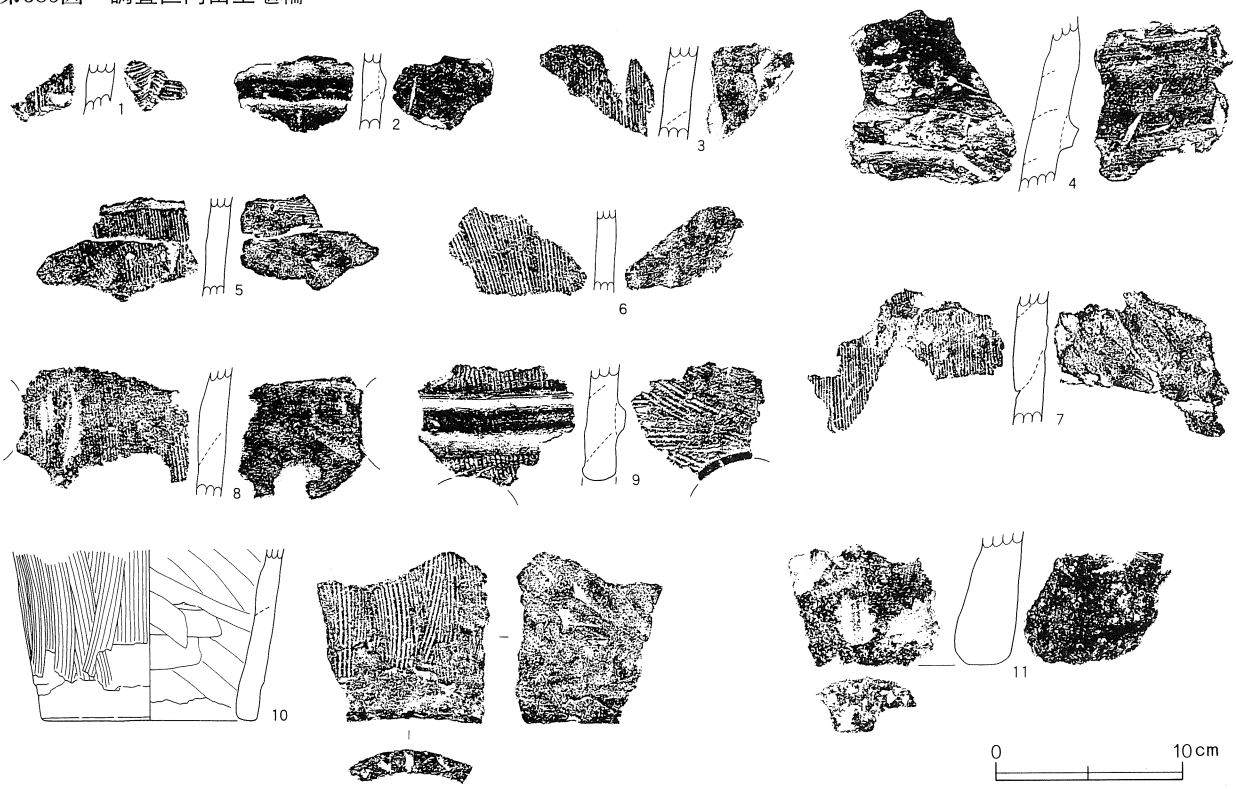
７も深鉢形土器の胴部破片と思われる。刺突文が施されている。横位の区画内に施されたものであろう。刺突は長さ２㎜ほどの細かいもので、長方形でやや深い。主に関東北部に多く認められる刺突文である。安行３ｃ式である。

８は胴部が張り、口辺部が外傾気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。緩く括れる体部付近の破片である。括れ部付近には２条沈線を巡らせ、沈線間に米粒状の列点文を施す。この横位区画帯の下位には連続弧線文を施す。横位区画帯の上位には曲線的なモチーフを施し、沈線間に米粒状の列点文を施す。安行３ｃ式である。

第585図　調査区内出土縄文土器



第586図　調査区内出土埴輪



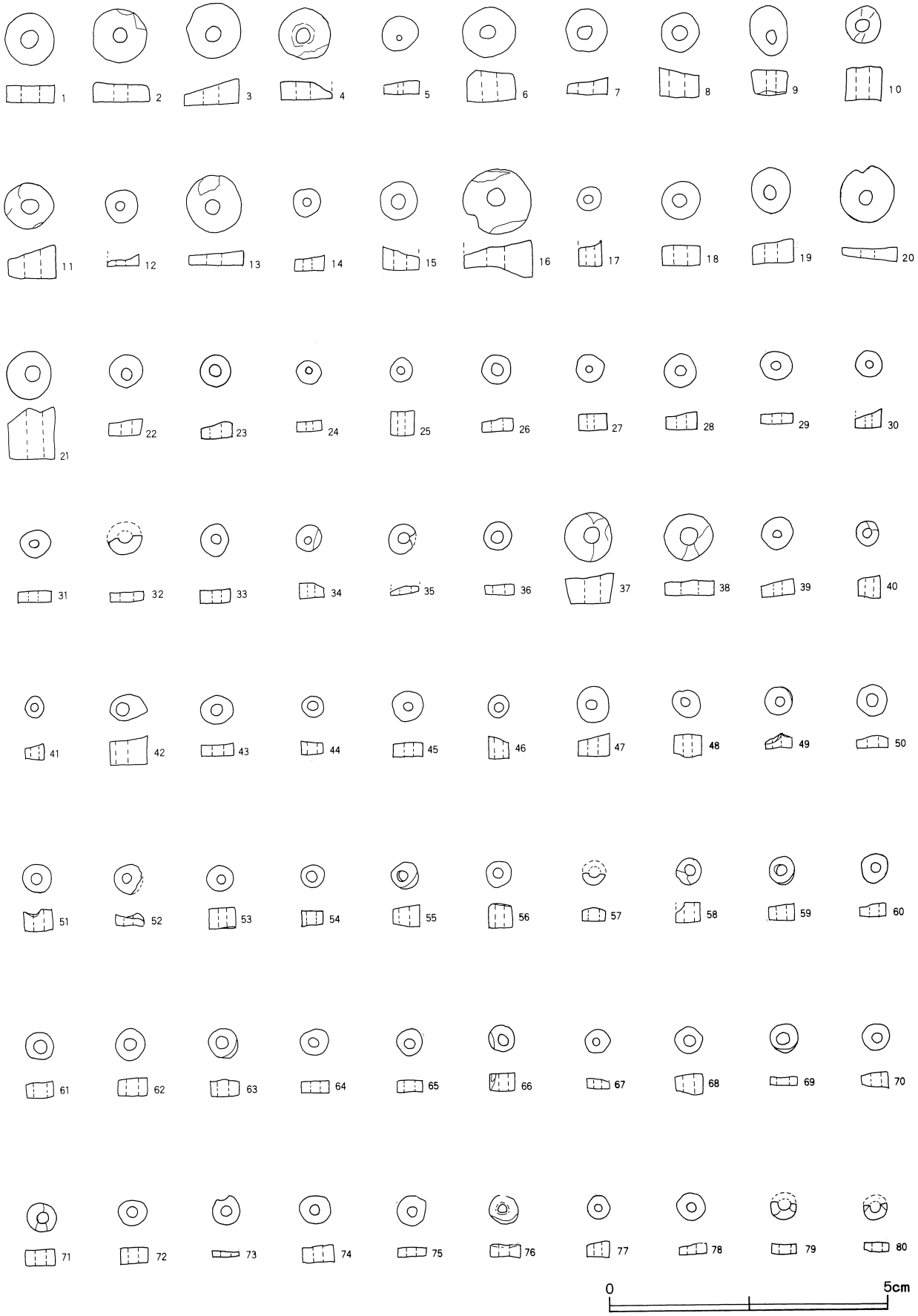
ｂ埴輪（第586図）

図示した円筒埴輪は、すべて普通円筒埴輪の破片で形象埴輪は含まれていない。全体の器形が判明する資料がないため、胎土、焼成、色調、内外面の調整手法、凸帯・透孔等の形状について説明する。胎土、焼成、色調等の特徴から、胎土Ⅰ・Ⅱに分類することができる。胎土Ⅰは柔らかい焼き上がりで、胎土に角閃石粒子を多量に含むものである。胎土Ⅱは光沢のある暗赤褐色の色調で、堅く焼き上がり胎土に赤色粒子や白色粒子を多量に含む。胎土Ⅱは鴻巣市生出塚埴輪窯跡群の製品に特徴的なもので１が該当する。ほかはおおむね胎土Ⅰに分類される。内外面の調整手法は、外面調整がタテハケ１次調整のみ、内面調整は右傾斜ハケ・ナデが主体である。ただし、４だけが内外面ともに横方向のナデ調整で仕上げており、調整手法が異なる。凸帯の形状は、２が上稜の突出した低M字形で、新しい様相が窺われるが、４の凸帯は突出度の高い台形で、調整技法を含め古い様相を残す。時期的には、胎土の特徴、焼成の具合、調整手法や凸帯の形状などの特徴から全体に６世紀後半を中心とした新しい時期のものが多い。しかし、４のみはナデ調整手法などやや古い特徴が窺われ若干古く位置づけられる。

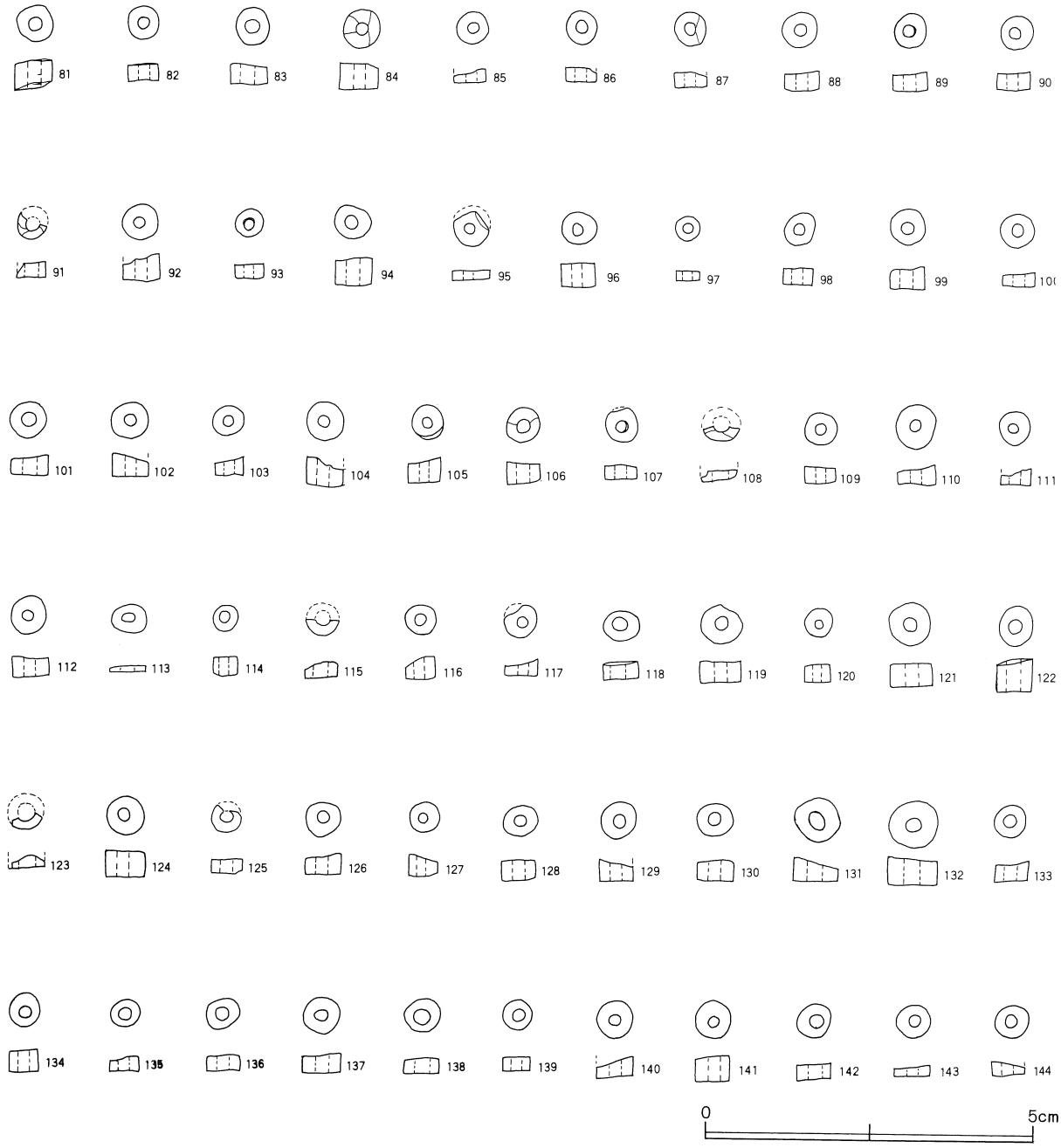
調査区内出土円筒埴輪観察表

番号	外面調整　本/2cm	内面調整　本/2cm	胎土	焼成	色　調	備　考
1	タテハケ　10～11	右傾斜ハケ　9～10	ＡＢＤＥＫ	2	暗赤褐色	ＳＪ312　胎土Ⅱ　生出塚窯跡群産
2	タテハケ　11	ナデ	ＡＤＥＫ	3	赤 褐 色	ＳＫ360　胎土Ⅰ　凸帯部分
3	タテハケ　12	ナデ	ＡＤＥＫ	3	橙 褐 色	ＳＤ101　胎土Ⅰ　基部破片
4	横位のナデ	横位のナデ	ＡＤＥＨＫ	2	橙 褐 色	ＳＤ101　胎土Ⅰ　凸帯部分　外面赤彩痕あり
5	タテハケ　14	横ハケ・ナデ　14	ＡＤＥＫ	3	赤 褐 色	ＳＫ360　胎土Ⅰ　凸帯部分
6	タテハケ　11	ナデ	ＡＥＤＪＫ	3	赤 褐 色	ＳＫ512　胎土Ⅰ　角閃石粒子多量混入
7	タテハケ　14	ナデ	ＡＤＥＫ	3	暗灰褐色	ＳＪ175　胎土Ⅰ　外面に剥離痕あり
8	タテハケ　10～11	ナデ	ＡＤＥＫ	4	橙 褐 色	ＳＥ120　胎土Ⅰ　透孔部分　右回り穿孔
9	タテハケ　8	右傾斜ハケ　8	ＡＤＥＫＬ	2	橙 褐 色	ＳＤ96　胎土Ⅰ凸帯部分　透孔穿孔後ナデ
10	タテハケ　10	ナデ	ＡＤＥＫ	3	橙 褐 色	ＳＤ38　胎土Ⅰ底径（11.6cm）基部内外面ナデ
11	タテハケ　10	ナデ	ＡＥＪＫ	4	赤 褐 色	ＳＸ８　胎土Ⅰ　底部　基部右巻き接合

第587図　調査区内出土臼玉(1)



第588図　調査区内出土臼玉(2)



c臼玉（第587・588図）

本年度報告の調査範囲からは、合計144個の臼玉が検出できた。

住居跡覆土の洗い出しや掘り方充塡土の詳細な調査、あるいはカマド構築土の洗い出し等を行っていないので、調査時の検出量は、実際に遺存していたもののごく一部であると考えられた。

検出した臼玉は、全て滑石片岩製のものであり、石材の剝片や、明瞭な未製品などの、製作跡を想定させるような遺物は検出できなかった。

臼玉の検出状況を見てみると、特に多く出土する遺構がある一方で、ほとんどの遺構では、全く検出できなかった。

SK-364からは13個の臼玉が検出できた。AB-20グリッドの遺構確認面には、祭祀を伺わせる臼玉の集中が認められた。

SJ-132・233・338については、住居跡の時期がやや下るので、流れ込みの可能性が考えられた。

第12表　調査区内出土臼玉一覧表(1)

番号	直径×厚/cm	検出場所	色　調
1	0.90×0.30	SJ66 No.1	暗　灰
2	1.00×0.35	SJ66 No.3	灰　白
3	1.00×0.45	SJ71 No.26	灰
4	0.90×0.30	SJ100覆土	灰
5	0.65×0.25	SJ132覆土	灰
6	0.95×0.55	SJ140覆土	褐　灰
7	0.70×0.30	SJ159覆土	灰
8	0.70×0.50	SJ175 No.10	灰　白
9	0.75×0.40	SJ233 カマド	灰　白
10	0.55×0.60	SJ252 No.1	灰　白
11	0.90×0.60	SJ259 覆土	灰
12	0.60×(0.20)	SJ264 No.5	灰　白
13	1.00×0.30	SJ272 覆土	灰　白
14	0.50×0.25	SJ305 No.2	灰オリーブ
15	0.65×(0.40)	SJ322 No.3	灰
16	1.20×(0.70)	SJ323 覆土	灰　白
17	0.40×(0.45)	SJ330 No.2	灰オリーブ
18	0.75×0.35	SJ330 No.3	灰
19	0.50×0.45	SJ338 No.5	灰
20	0.95×0.30	SJ338 No.6	灰
21	0.80×0.95	SK348 覆土	灰
22	0.55×0.25	SK363 No.1	灰
23	0.55×0.30	SK364 No.1	灰　白
24	0.40×0.20	SK364 No.2	灰オリーブ
25	0.40×0.40	SK364 No.3	灰　白
26	0.50×0.25	SK364 No.4	灰　白
27	0.50×0.30	SK364 No.5	灰　白
28	0.55×0.30	SK364 No.6	灰　黄
29	0.60×0.20	SK364 No.7	灰　白
30	0.45×(0.30)	SK364 No.8	灰　白
31	0.55×0.20	SK364 No.9	灰オリーブ
32	(0.60)×0.20	SK364 No.10	灰オリーブ
33	0.50×0.25	SK364 No.11	暗　緑　灰
34	0.45×0.30	SK364 No.12	灰　白
35	(0.55)×(0.15)	SK364 No.13	灰オリーブ
36	0.50×0.20	SK378 No.1	灰オリーブ
37	0.85×0.55	T-13 G.	灰オリーブ
38	0.90×0.30	T-13 G.	灰　白
39	0.55×0.30	X-17 G.	灰オリーブ
40	0.40×0.35	AB-20 G. No.1	暗　緑　灰
41	0.35×0.25	AB-20 G. No.2	暗　緑　灰
42	0.65×0.50	AB-20 G. No.3	灰オリーブ
43	0.60×0.25	AB-20 G. No.4	灰オリーブ
44	0.40×0.25	AB-20 G. No.5	灰オリーブ
45	0.55×0.25	AB-20 G. No.6	暗　緑　灰
46	0.35×0.40	AB-20 G. No.7	灰オリーブ
47	0.55×0.35	AB-20 G. No.8	暗　緑　灰
48	0.50×0.35	AB-20 G. No.9	灰　黄
49	0.50×0.20	AB-20 G. No.10	暗　緑　灰
50	0.55×0.20	AB-20 G. No.11	灰オリーブ
51	0.50×0.40	AB-20 G. No.12	灰オリーブ
52	0.50×0.20	AB-20 G. No.13	灰
53	0.50×0.35	AB-20 G. No.14	灰オリーブ
54	0.40×0.25	AB-20 G. No.15	灰オリーブ
55	0.50×0.35	AB-20 G. No.16	灰オリーブ
56	0.45×0.40	AB-20 G. No.17	灰オリーブ
57	(0.40)×0.25	AB-20 G. No.18	暗　緑　灰
58	0.45×0.35	AB-20 G. No.19	灰オリーブ
59	0.45×0.30	AB-20 G. No.20	灰オリーブ
60	0.45×0.25	AB-20 G. No.21	灰
61	0.50×0.30	AB-20 G. No.22	暗　緑　灰
62	0.55×0.30	AB-20 G. No.23	暗　緑　灰
63	0.55×0.25	AB-20 G. No.24	灰　黄
64	0.50×0.20	AB-20 G. No.25	灰オリーブ
65	0.45×0.20	AB-20 G. No.26	灰オリーブ
66	0.45×0.30	AB-20 G. No.27	暗　緑　灰
67	0.40×0.20	AB-20 G. No.28	暗　緑　灰
68	0.45×0.35	AB-20 G. No.29	灰オリーブ
69	0.50×0.15	AB-20 G. No.30	暗　緑　灰
70	0.50×0.25	AB-20 G. No.31	灰　黄
71	0.55×0.30	AB-20 G. No.32	灰オリーブ
72	0.50×0.30	AB-20 G. No.33	灰オリーブ
73	0.50×0.15	AB-20 G. No.34	暗　緑　灰
74	0.55×0.30	AB-20 G. No.35	灰オリーブ
75	0.45×0.20	AB-20 G. No.36	灰オリーブ
76	0.50×0.25	AB-20 G. No.37	灰
77	0.40×0.30	AB-20 G. No.38	灰オリーブ
78	0.50×0.20	AB-20 G. No.39	暗　緑　灰
79	0.45×0.20	AB-20 G. No.40	暗　緑　灰
80	0.45×0.20	AB-20 G. No.41	暗　緑　灰
81	0.55×0.40	AB-20 G. No.42	灰　黄
82	0.45×0.25	AB-20 G. No.43	灰オリーブ
83	0.50×0.30	AB-20 G. No.44	灰オリーブ
84	0.55×0.40	AB-20 G. No.45	暗　緑　灰
85	0.50×(0.20)	AB-20 G. No.46	灰
86	0.50×0.25	AB-20 G. No.47	暗　緑　灰
87	0.50×0.20	AB-20 G. No.48	暗　緑　灰
88	0.50×0.30	AB-20 G. No.49	灰オリーブ
89	0.45×0.20	AB-20 G. No.50	灰オリーブ
90	0.50×0.25	AB-20 G. No.51	灰オリーブ
91	(0.45)×(0.30)	AB-20 G. No.52	灰オリーブ
92	0.55×(0.40)	AB-20 G. No.53	灰オリーブ
93	0.45×0.25	AB-20 G. No.54	暗　緑　灰
94	0.55×0.45	AB-20 G. No.55	暗　緑　灰
95	(0.60)×0.15	AB-20 G. No.56	灰　黄
96	0.50×0.40	AB-20 G. No.57	暗　緑　灰
97	0.35×0.15	AB-20 G. No.58	灰オリーブ
98	0.45×0.25	AB-20 G. No.59	暗　緑　灰
99	0.55×0.35	AB-20 G. No.60	暗　緑　灰
100	0.50×0.25	AB-20 G. No.61	灰オリーブ
101	0.60×0.30	AB-20 G. No.62	暗　緑　灰
102	0.55×0.35	AB-20 G. No.63	灰　白
103	0.45×0.25	AB-20 G. No.64	灰
104	0.55×0.45	AB-20 G. No.66	暗　緑　灰

第13表　調査区内出土臼玉一覧表(2)

番号	直径×厚/cm	検出場所	色　調
105	0.50×0.35	AB-20 G. No.68	灰オリーブ
106	0.50×0.35	AB-20 G. No.69	灰
107	0.50×0.20	AB-20 G. No.70	暗　緑　灰
108	(0.60)×(0.20)	AB-20 G. No.71	灰オリーブ
109	0.45×0.25	AB-20 G. No.72	灰オリーブ
110	0.60×0.25	AB-20 G. No.73	灰オリーブ
111	0.45×0.25	AB-20 G. No.74	灰オリーブ
112	0.55×0.35	AB-20 G. No.75	灰オリーブ
113	0.55×0.10	AB-20 G. No.76	暗　緑　灰
114	0.40×0.30	AB-20 G. No.77	暗　緑　灰
115	(0.50)×0.20	AB-20 G. No.79	暗　緑　灰
116	0.45×0.35	AB-20 G. No.80	灰
117	0.50×0.25	AB-20 G. No.81	灰　　白
118	0.55×0.30	AB-20 G. No.83	灰オリーブ
119	0.60×0.35	AB-20 G. No.84	灰
120	0.40×0.25	AB-20 G. No.85	灰
121	0.65×0.35	AB-20 G. No.86	灰　　黄
122	0.55×0.50	AB-20 G. No.87	灰オリーブ
123	(0.60)×(0.20)	AB-20 G. No.88	暗　緑　灰
124	0.55×0.40	AB-20 G. No.89	灰オリーブ
125	0.45×0.25	AB-20 G. No.90	灰オリーブ
126	0.50×0.30	AB-20 G. No.91	灰オリーブ
127	0.45×0.30	AB-20 G. No.92	灰　　白
128	0.55×0.30	AB-20 G. No.94	暗　緑　灰
129	0.55×0.35	AB-20 G. No.95	灰　　黄
130	0.55×0.30	AB-20 G. No.96	暗　緑　灰
131	0.65×0.35	AB-21 G. No.1	暗　緑　灰
132	0.75×0.45	AB-21 G. No.2	灰
133	0.45×0.30	表土	灰
134	0.45×0.40	表土	灰オリーブ
135	0.45×0.25	表土	灰オリーブ
136	0.50×0.25	表土	灰
137	0.55×0.30	表土	灰オリーブ
138	0.55×0.25	表土	灰
139	0.45×0.20	表土	灰
140	0.50×0.30	表土	灰
141	0.55×0.40	表土	灰
142	0.50×0.20	表土	灰オリーブ
143	0.55×0.15	表土	灰　　黄
144	0.50×0.20	表土	灰

d 玉類・石製模造品（第589・590図）

本年度報告の調査範囲からは、合計42個の石製模造品と玉類が検出できた。出土した大型の石製模造品の中には、石材の破片も含まれていた。

1・2は小玉であった。1はガラス製の小玉で、SJ-79の柱穴 P3の覆土中から検出した。2もガラス製の小玉で、SK-383付近から出土した中世の人骨の横から検出した。

3は、碧玉製の管玉で、SJ-122の床面から検出した。4も碧玉製の管玉で、同様に SJ-257の覆土から割れた状態で検出した。5は黒色の滑石片岩製の管玉で、SJ-235の柱穴 P3から検出した。

6は碧玉製の管玉で、遺構との帰属関係が不明瞭であったので、AB-20グリッドで取り上げた。7は茶色の滑石製の管玉で、SD-38の覆土から検出した。先端がやや欠失していた。8は碧玉製の管玉で、SJ-124の床面から検出した。

9・10は土製の勾玉であり、9は端部を欠失していた。10は、やや粗製であった。

11～13は、滑石片岩製の勾玉で、11は灰白色で丸みを帯び、12は緑色で板状に作られていた。13はやや粗製で端部を欠失していた。

14はガラス製の勾玉で、住居跡の覆土から検出した。端部が欠失していた。付近の住居跡覆土を洗浄したが、欠失部分は検出できなかった。

15～20は有孔円板と考えられた。18は割れ口に穿孔の痕跡が認められた。17・20は大型のもので、中心に穿孔が認められた。周縁は大部分が欠失していた。

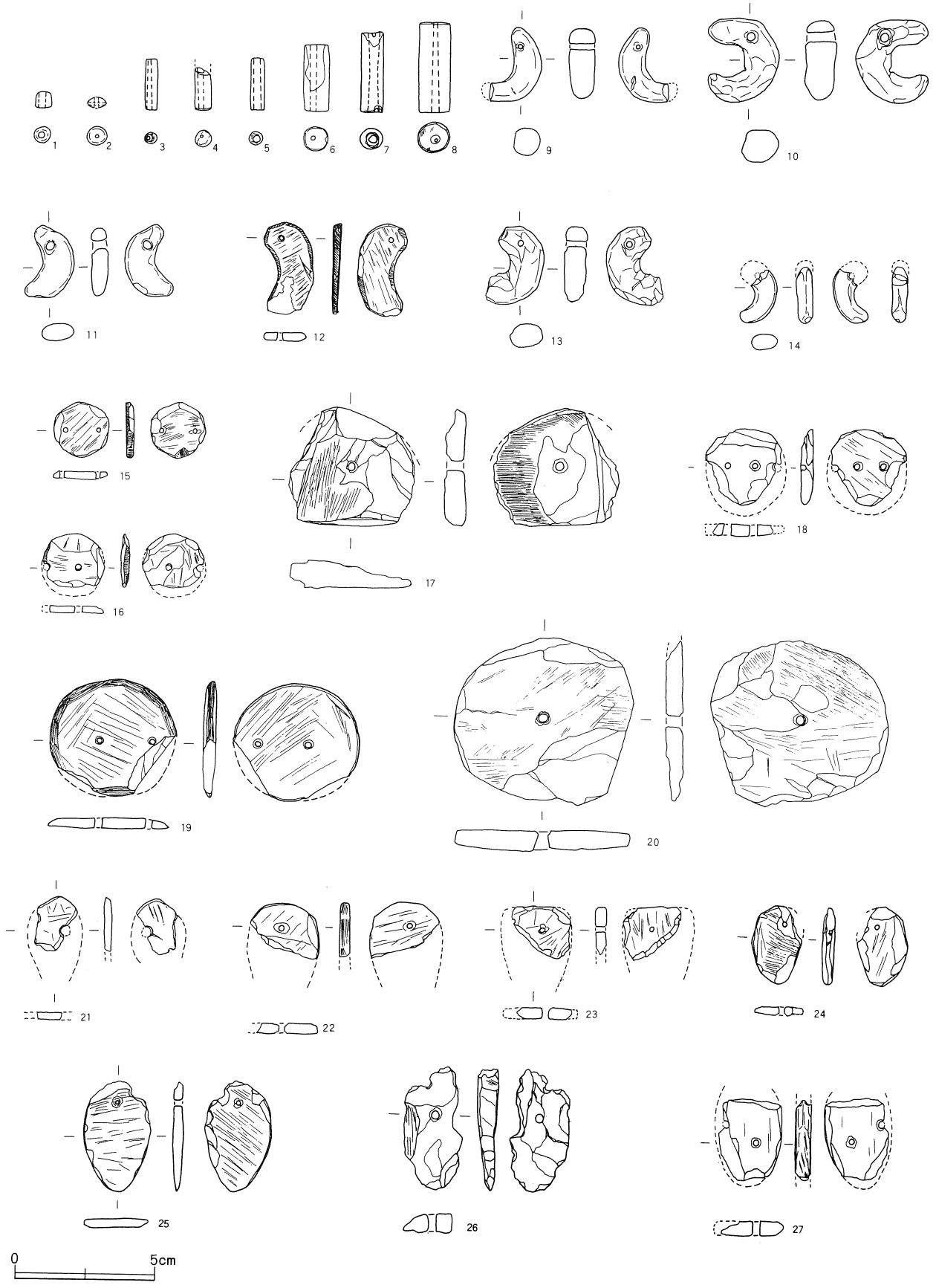
21～40は剣形石製模造品であった。欠損品も多く、剣形ではない他の模造品が含まれている可能性も考えられた。21は大半が欠失していた。

22は中央から下半部を欠失していた。23も周縁部の大半を欠失していた。24・25は遺存状態が良好であった。26はやや粗製の模造品であり、三カ所の穿孔が認められた。

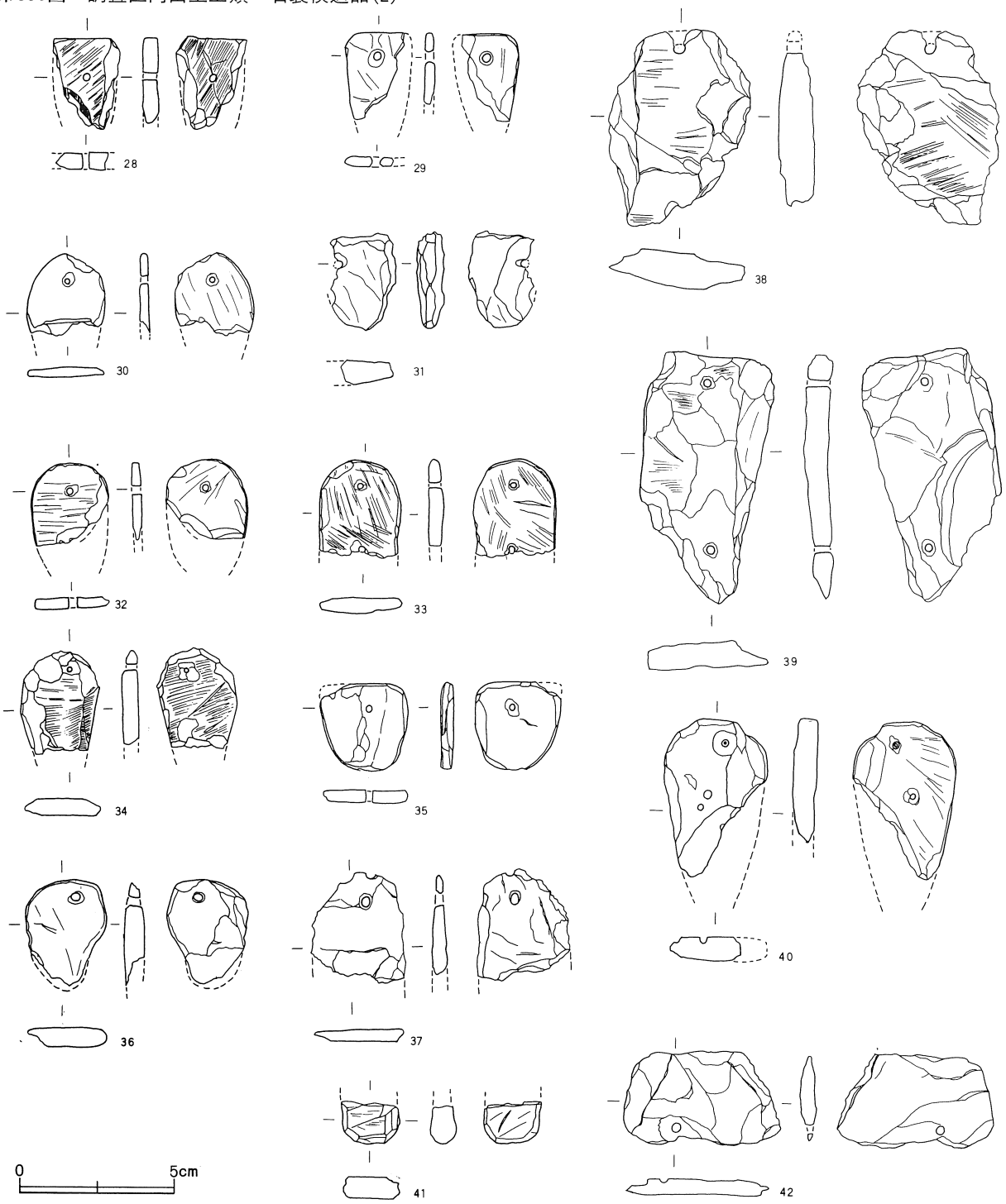
27は周縁の大半を欠失しており、二カ所の穿孔が認められた。28も周縁の大半を欠失していた。29は下半を斜位に欠失していた。30も下半を欠失していた。31はやや粗製の模造品で、周縁の大半を欠失していた。

32～34・36はいずれも下半を欠失しており、34はやや粗製であり、35は全体に摩滅が著しかった。36も摩滅しており、厚さが一定ではなく、やや粗製の模造品

第589図　調査区内出土玉類・石製模造品(1)



第590図　調査区内出土玉類・石製模造品(2)



であった。

37は葉理の発達した石材で周縁部の残存状態が悪かった。38は大型のもので、周縁部の残存状態は悪いが、楕円形を窺わせる形状で、上端部に穿孔が認められた。39も同様であるが、形態はやや短冊状で、上下二カ所に穿孔が認められた。

40は下半を斜位に欠失しており、二カ所の穿孔と、一カ所の未通の穿孔が認められた。

41・42は原型不明の石製模造品で、41には周縁に五カ所の面取りが認められ、八角形を呈していた可能性が考えられた。面取りは、表裏両面に認められた。42は粗製の板状の石材に、一カ所の穿孔が認められた。

第14表　調査区内出土玉類・石製模造品一覧表

番号	長軸×短軸×厚/cm	重量/g	出土位置	その他	色調	材質	種類
1	0.6×0.6	0.2	SJ79 P3		青	ガラス	ガラス小玉
2	0.4×0.7	0.2	SK383 人骨横		無色透明	ガラス	ガラス小玉
3	1.9×0.4	0.5	SJ122 No.2		オリーブ灰	碧玉	管玉
4	(1.5)×0.6	0.7	SJ257 覆土		オリーブ灰	碧玉	管玉
5	1.9×0.5	0.7	SJ235 P3		黒褐	滑石	管玉
6	2.4×0.9	3.1	AB-20 G. No.65		黒	碧玉	管玉
7	2.9×0.8	3.1	SD38 覆土		暗灰黄	滑石	管玉
8	3.3×1.1	8.0	SJ124 No.1		黒	碧玉	管玉
9	2.5×0.9×1.0	3.4	SJ150 覆土		黒褐	土師質	勾玉
10	2.9×1.3×1.1	6.5	AD-19 G.		にぶい橙	土師質	勾玉
11	1.9×1.2×0.6	3.7	SJ195 No.1		灰白	滑石	勾玉
12	3.2×1.6×0.3	3.0	AB-20 G. No.67		オリーブ灰	滑石片岩	勾玉
13	2.7×1.2×0.8	5.8	SJ-137 カマド		灰白	滑石	勾玉
14	(2.0)×0.9×0.5	1.5	SJ-186 覆土		青緑	ガラス	勾玉
15	2.0×2.0×0.3	2.2	AB-20 G. No.82	孔2	暗緑灰	滑石片岩	有孔円板
16	(1.9)×(2.1)×0.2	2.3	SJ102 覆土	孔2	灰白	滑石	有孔円板
17	4.3×4.5×1.0	24.6	SJ229 No.10	孔1	灰オリーブ	滑石片岩	有孔円板
18	(2.8)×(2.7)×0.4	5.4	表土	孔3	灰白	滑石片岩	有孔円板
19	4.2×4.5×0.4	14.4	SJ257 覆土	孔2	灰オリーブ	滑石片岩	有孔円板
20	5.7×6.2×0.7	46.9	SJ230 No.2	孔1	灰白	滑石片岩	有孔円板
21	(1.9)×(1.4)×0.2	0.9	SJ213 覆土	孔1	灰	滑石	剣形石製模造品
22	(2.0)×(2.4)×0.3	2.6	表土	孔1	黄灰	滑石片岩	剣形石製模造品
23	(1.8)×(2.0)×0.3	2.3	SJ322 覆土	孔1	黄灰	滑石片岩	剣形石製模造品
24	2.8×1.8×0.4	2.7	SJ122 覆土	孔1	灰	滑石	剣形石製模造品
25	4.0×2.4×0.3	6.4	SJ220 覆土	孔1	灰オリーブ	滑石片岩	剣形石製模造品
26	4.3×2.1×0.7	8.5	SJ233 No.1	孔1	灰白	滑石片岩	剣形石製模造品
27	(2.8)×(2.2)×0.5	6.4	SJ180 覆土	孔2	灰オリーブ	滑石片岩	剣形石製模造品
28	3.0×2.1×0.6	5.6	SK339 覆土	孔1	褐灰	滑石片岩	剣形石製模造品
29	(2.8)×(1.9)×0.3	3.0	SJ125 覆土	孔1	灰	滑石片岩	剣形石製模造品
30	(2.6)×2.5×0.3	3.7	SJ272 覆土	孔1	黄灰	滑石片岩	剣形石製模造品
31	3.1×(1.9)×0.9	6.9	SJ104 覆土	孔1	灰白	滑石片岩	剣形石製模造品
32	(2.5)×2.5×0.4	5.1	SB31 P5	孔1	灰オリーブ	滑石片岩	剣形石製模造品
33	(3.0)×2.7×0.5	8.7	SJ220 覆土	孔2	灰オリーブ	滑石片岩	剣形石製模造品
34	(3.2)×2.5×0.5	7.4	AB-20 G. No.78	孔1	灰	滑石片岩	剣形石製模造品
35	2.8×2.8×0.4	6.7	SE71 覆土	孔1	灰白	滑石片岩	剣形石製模造品
36	(3.4)×2.6×0.7	8.2	SJ124 覆土	孔1	灰白	滑石片岩	剣形石製模造品
37	(3.5)×2.9×0.5	8.0	SJ214 覆土	孔1	灰	滑石片岩	剣形石製模造品
38	6.2×4.5×1.0	42.1	SJ230 No.1	孔1	灰白	滑石片岩	剣形石製模造品
39	8.0×3.8×1.0	45.1	表土	孔2	灰	滑石片岩	剣形石製模造品
40	(5.0)×3.3×0.9	18.4	SK377 覆土	孔2 未通1	灰白	滑石片岩	剣形石製模造品
41	(1.3)×1.8×0.7	3.4	SJ141 覆土		灰	滑石片岩	不明
42	3.0×5.1×0.4	11.5	SJ66 覆土	孔1	灰	滑石片岩	不明

e 土玉（第591図）

本年度報告の調査範囲からは、合計36個の土玉が検出できた。

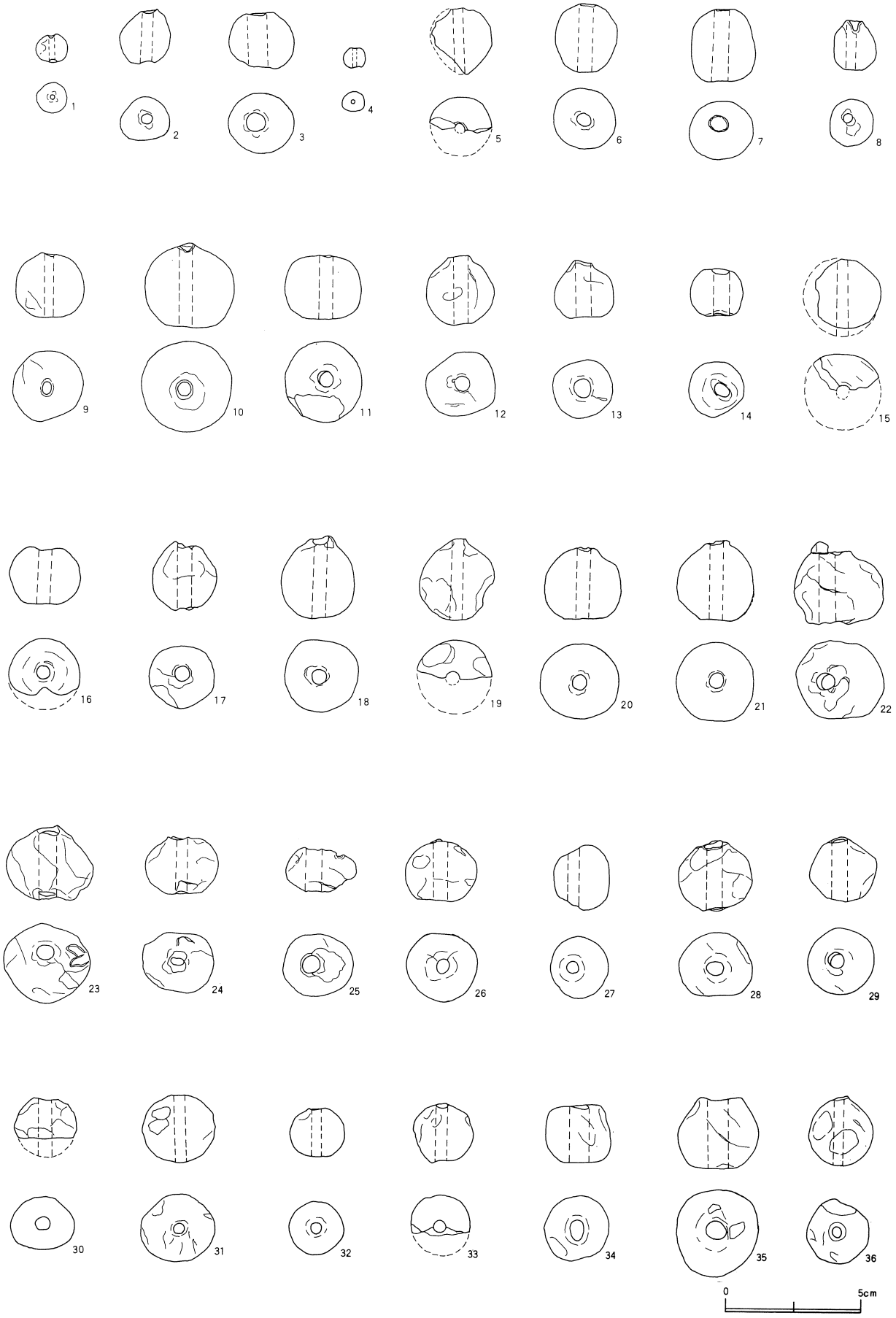
検出地点は、大半が住居跡の覆土であった。

土玉を出土した住居跡を見てみると、新しい時期を示すような遺物の出土は少なく、かつ、土器類自体の出土量が多い傾向が窺えた。つまり、遺存状態の良好な、あるいは覆土量の多い住居跡から出土している傾向が看取できた。

出土位置に関しても、床面上からのものは少なく、大半が覆土中からであった。

また、4点がまとまって覆土中から出土した、SK-250については、流入遺物ではなく、意図的な投げ込みが考えられた。

第591図　調査区内出土土玉



第15表　調査区内出土土玉一覧表

番号	縦×横/cm	重量/g	検出場所	色調
1	1.1×1.1	1.3	SJ66 覆土	鈍　橙
2	2.0×1.8	5.2	SJ129 覆土	鈍　橙
3	2.1×2.4	11.4	SJ135 覆土	鈍　橙
4	0.8×0.8	0.5	SJ175 カマド	黒　褐
5	2.4×(2.1)	4.9	SJ183 覆土	鈍　橙
6	2.5×2.2	13.9	SJ205 覆土	鈍　橙
7	2.7×2.3	15.7	SJ220 覆土	鈍　褐
8	1.9×1.5	5.2	SJ227 覆土	鈍　褐
9	2.4×2.5	17.6	SJ245 覆土	灰　褐
10	3.1×3.3	32.8	SJ260 No.1	鈍　褐
11	2.4×2.8	22.3	SJ272 覆土	灰　褐
12	2.5×2.5	15.0	SJ201 No.1	鈍　褐
13	2.1×2.2	8.0	SJ292 No.2	鈍　褐
14	1.8×1.9	5.6	SJ293 覆土	鈍　褐
15	(2.5)×(2.3)	7.3	SJ295 覆土	灰　褐
16	2.1×2.5	10.6	SJ311 覆土	鈍　橙
17	2.5×2.3	11.8	SJ312 覆土	鈍　橙
18	2.9×2.6	21.2	SJ315 No.1	鈍　橙
19	3.1×2.6	9.7	SJ316 覆土	鈍　橙
20	2.6×2.7	21.1	SJ330 No.1	鈍　褐
21	2.9×2.7	23.3	SJ330 P1 覆土	鈍　褐
22	3.0×3.2	26.0	SK250 覆土	灰　褐
23	2.7×3.2	24.0	SK250 覆土	灰　褐
24	2.1×2.6	14.4	SK250 覆土	灰　褐
25	1.6×2.5	8.0	SK250 覆土	灰　褐
26	2.3×2.6	16.3	SJ259 覆土	鈍　褐
27	2.4×2.1	10.5	SK338 覆土	鈍　橙
28	2.6×2.7	13.3	SD38 覆土	鈍　褐
29	2.4×2.5	13.2	SD38 覆土	鈍　褐
30	(1.4)×2.3	5.7	SD38 覆土	鈍　褐
31	2.5×2.7	19.4	SB92 P3 覆土	鈍　橙
32	1.8×2.0	7.6	Q-2 G.	鈍　褐
33	2.1×2.3	6.1	U-11 G.	鈍　褐
34	2.1×2.4	11.3	AF-19 G.	鈍　橙
35	2.5×3.0	28.0	AF-19 G.	鈍　橙
36	2.5×2.3	13.9	表土	鈍　橙

f 土錘（第592図）

本年度報告の調査範囲からは、合計18個の土錘が検出できた。土錘は玉類とは異なり、調査時に見逃す確率は低いと考えられた。したがって、報告数が実際の包含数にかなり近いと見ることが出来る。

土錘の検出は、特定の住居跡に偏っていた。SJ-150とSJ-289・299からは、合わせて10点検出でき、この数値は、全検出量の56%であった。

形態は、一般的な紡錘形のものの他に、1・2・10のような円筒形のものも散見できた。

1は円筒形で、上端はやや平坦、下端には指頭による凹みが認められた。側面にも指頭の圧痕が顕著に認められた。2も円筒形で大半を欠失していたが、残存部分には指頭の圧痕がわずかに認められた。

3～9・11～18は紡錘形で、3～6には、側面の上端から下端まで、粘土の繋ぎ目が認められた。したがってこれらの土錘は、心棒に円盤状の粘土を巻き付ける手法で作られたと考えられた。

11・14は他の土錘に比べて風化が著しく、胎土に含まれる混和材が表面に露出していた。18の胎土は砂粒があまり認められず、あたかも水簸したような粘土が用いられていた。

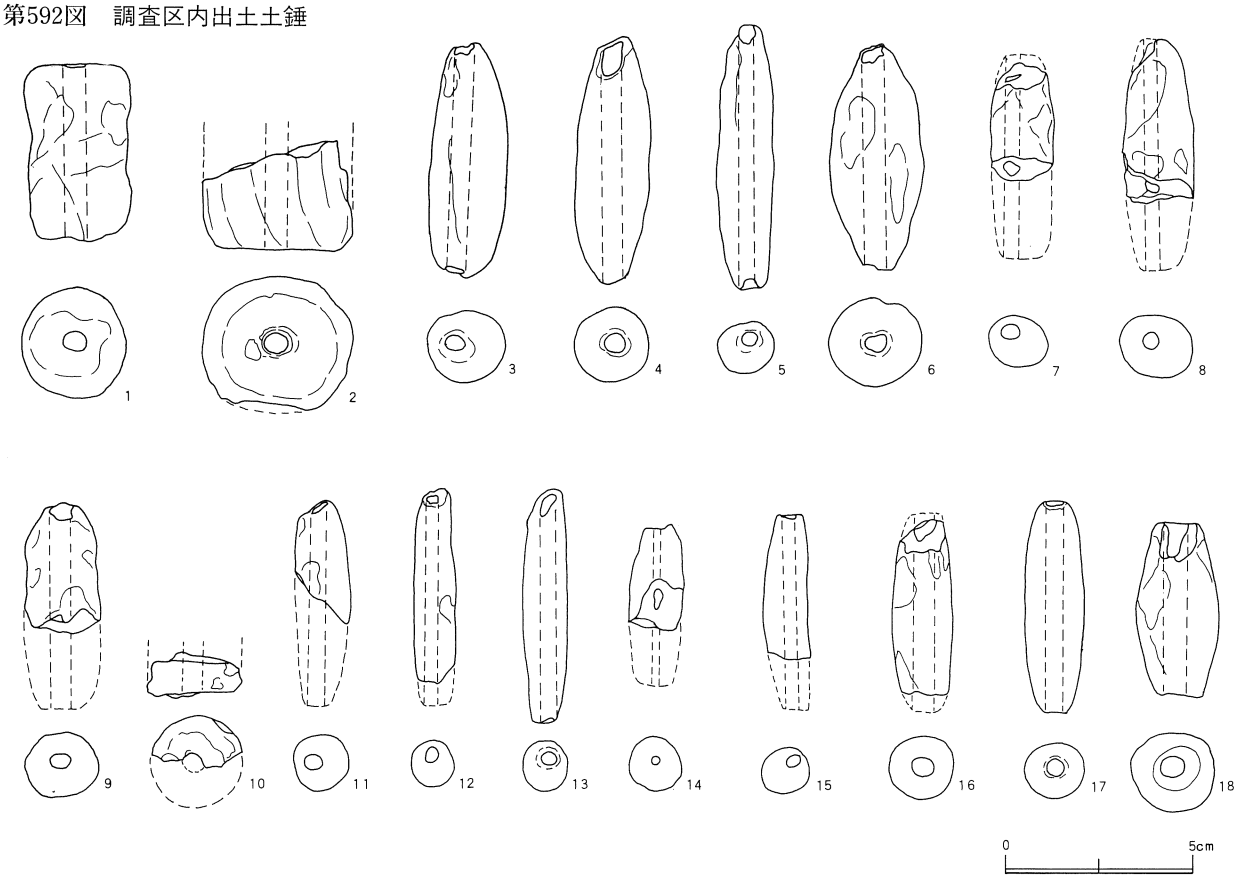
本遺跡は元荒川沿いの自然堤防上に立地しているが、他の同様な立地の遺跡と比べると、土錘の検出量が少なかった。これは時期的な傾向と共に、築道下遺跡の特徴を如実に物語っていると考えられる。すなわち、生業の中で、河川での漁撈活動に対する依存率の低さを窺うことができた。

SJ-197は時期的にやや新しく、混入の可能性が考えられた。

第16表　調査区内出土土錘一覧表

番号	縦×横/cm	重量/g	検出場所	色調
1	4.7×2.8	48.4	SJ91 覆土	鈍　褐
2	(3.0)×3.9	37.9	SJ143 覆土	鈍　褐
3	6.2×2.1	27.8	SJ150 覆土	黒　褐
4	6.2×1.9	24.1	SJ150 覆土	鈍　褐
5	7.0×1.5	15.8	SJ150 覆土	鈍　褐
6	6.0×2.5	30.2	SJ150 覆土	褐　灰
7	(3.1)×1.7	8.5	SJ150 覆土	褐　灰
8	(4.3)×1.9	14.7	SJ150 覆土	褐　灰
9	(3.5)×2.0	11.2	SJ150 覆土	褐　灰
10	(1.2)×2.4	3.0	SJ183 覆土	鈍　褐
11	(3.3)×1.4	7.1	SJ197 覆土	褐　灰
12	(5.1)×1.1	8.0	SJ289・299 覆土	鈍　橙
13	6.2×1.2	10.6	SJ289・299 覆土	鈍　橙
14	(2.8)×1.4	5.8	SJ289・299 覆土	鈍　褐
15	(3.9)×1.2	6.8	SJ310・312 覆土	褐　灰
16	(4.7)×1.6	14.9	W-14 G.	鈍　褐
17	5.6×1.6	15.2	P797 覆土	橙
18	4.6×2.2	19.9	SD38 覆土	明褐灰

第592図　調査区内出土土錘



g紡錘車（第593・594図）

本年度報告の調査範囲からは、合計17個の紡錘車が検出できた。これは一般的な集落と比べるとやや多い出土量である。

紡錘車を出土した住居跡の時期的な傾向についても、前述した他の遺物同様に、新しい住居跡からは検出できなかった。また、遺存状態の良好な住居跡から出土する傾向も、他の遺物と同様であった。

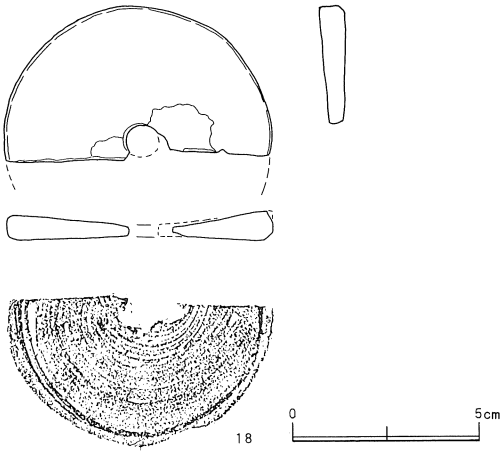
SJ-197からの出土例は、剝落した下面のみなので、流入と考えられた。

第17表　調査区内出土紡錘車一覧表

番号	長径×短径×厚/cm	重さ/g	出土位置	色調	材質	備考
1	4.2×3.3×1.4	40.9	SJ71 No.21	灰白	滑石片岩	下面にやや太めの線刻
2	3.8×1.0×1.5	27.8	SJ90 No.12	灰白	滑石片岩	下面が曲面
3	4.8×-×(1.2)	38.7	SJ126 No.86	灰	滑石片岩	下面剝落
4	4.4×2.6×1.8	45.2	SJ140 No.2	灰白	滑石片岩	斜面に多少放射状線刻
5	4.7×2.8×2.1	51.1	SJ149 No.1	にぶい褐	土師質	胎土に長石多含
6	4.2×3.0×1.7	41.8	SJ156 No.9	暗灰	滑石片岩	下面・斜面に疑似鋸歯紋
7	—×2.4×(0.9)	7.3	SJ197 No.95	灰白	滑石片岩	剝落した下面のみ
8	4.4×2.4×1.4	35.0	SJ279 No.1	オリーブ灰	滑石片岩	下面に端整な鋸歯紋
9	4.0×2.8×1.3	33.8	SJ289 No.1	灰オリーブ	滑石片岩	斜面に放射状線刻
10	4.1×2.7×1.7	39.8	SK262 No.31	灰白	滑石片岩	上面・斜面とも仕上げが雑
11	4.6×3.1×1.5	30.7	SK267 No.1	明黄褐	片岩	上面・斜面に放射状線刻
12	4.3×2.3×1.6	41.1	SK269 No.1	暗灰	滑石片岩	下面が小さい
13	(3.9)×2.2×2.2	21.5	SK273 No.1	灰	滑石片岩	半欠
14	3.8×2.4×1.8	35.0	SK314 No.1	灰オリーブ	絹雲母片岩	下面に放射状線刻
15	4.5×3.2×1.9	28.7	SD67 覆土	灰白	滑石片岩	上面に周回状窪み
16	4.0×2.4×1.4	35.5	SE51 覆土	灰白	滑石片岩	仕上げが雑
17	(4.5)×—×(1.3)	20.5	Z-16 G.	灰オリーブ	滑石片岩	下面剝落
18	7.2	24.6	SJ263 覆土	灰白	須恵器底部利用	半欠

第593図　調査区内出土紡錘車(1)

第594図　調査区内出土紡錘車(2)



検出した紡錘車の中には、4・9・10・12・13・14のように裏面の立ち上がりに、製作時のケズリの痕跡が顕著に認められるものがあった。

また、6・8のように、線刻されたものが認められた。これらには、やや薄いか、あるいは厚くなく、裏面の立ち上がりが凹み面を呈しているといった共通点が認められた。

材質では、ほとんどのものは片岩が使用されていたが、粘土で作られた5や、片岩質の11、須恵器底部を再利用したと考えられた18なども認められた。

第18表　調査区内出土砥石一覧表

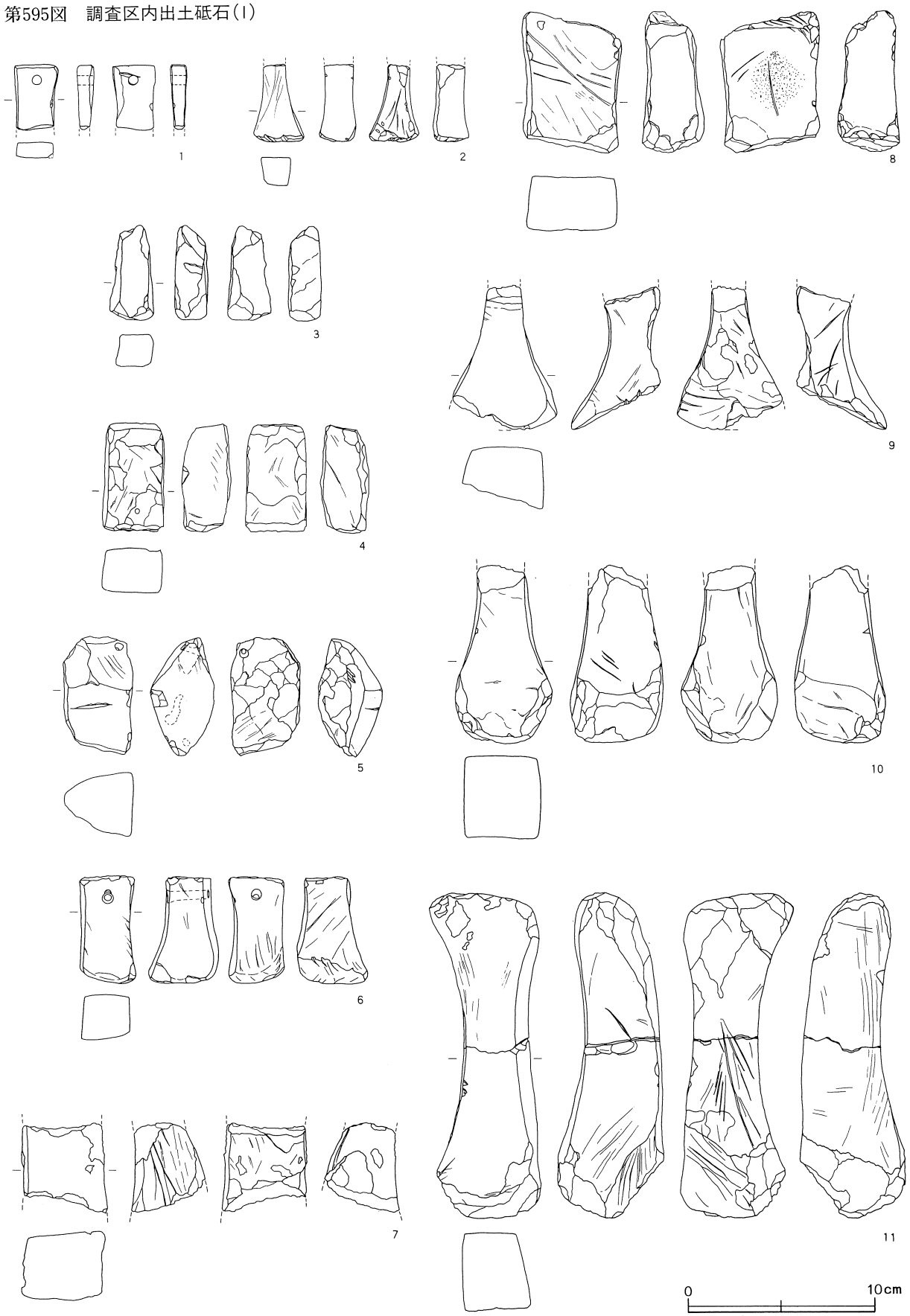
番号	長径×短径×厚/cm	重さ/g	出土位置	色調	材質	備考
1	(3.4)×2.3×0.8	11.8	SJ90 カマド	暗灰	凝灰岩	穿孔1カ所　二次被熱
2	(4.2)×2.7×1.5	22.2	SJ119 P2	灰	凝灰岩	
3	5.1×2.4×1.8	19.9	SJ134 覆土	暗灰	凝灰岩	二次被熱
4	5.8×3.2×2.4	84.1	SJ174 覆土	灰	凝灰岩	穿孔途中1カ所 二次被熱
5	6.4×3.7×3.4	88.9	SJ111・112 覆土	黄灰	凝灰岩	穿孔1カ所
6	5.7×3.0×2.5	87.8	SJ156 No.5	灰黄	凝灰岩	穿孔1カ所
7	(4.6)×4.5×3.6	105.9	SJ100・101 覆土	暗灰	凝灰岩	二次被熱
8	7.5×5.1×2.9	193.3	SJ109 覆土	黄灰	凝灰岩	
9	(7.8)×(5.4)×3.2	122.1	SJ134 覆土	灰黄	凝灰岩	二次被熱
10	(9.5)×5.2×4.4	294.6	SJ118 No.3	灰	凝灰岩	二次被熱
11	17.3×5.7×4.1	565.0	SJ100・101 No.59	灰白	凝灰岩	
12	(5.5)×3.4×3.2	92.3	SJ292 覆土	灰	凝灰岩	
13	9.7×6.4×3.3	252.4	SJ134 覆土	灰	凝灰岩	
14	(6.2)×5.1×1.5	81.4	SE132 覆土	灰黄	凝灰岩	
15	10.0×4.2×2.7	115.1	AB-20 G. No.93	灰黄	凝灰岩	穿孔痕跡程度2カ所
16	8.4×7.7×3.8	401.4	SJ227 覆土	灰	凝灰岩	二次被熱
17	(10.3)×5.9×4.4	350.8	SJ240 覆土	灰白	凝灰岩	
18	7.9×2.7×2.5	85.5	SD38 覆土	灰白	凝灰岩	
19	4.7×3.3×1.7	34.0	P741 覆土	灰白	泥岩	穿孔途中1カ所
20	(8.5)×(5.9)×(3.2)	163.1	SK370 覆土	黒褐	凝灰岩	二次被熱

h砥石（595・596図）

本年度報告の調査範囲からは、合計20個の砥石が検出できた。石材は概ね凝灰岩であった。この石材は古代から中世・近世まで埼玉県北部から出土する砥石に最も一般的な石材であった。

1は撥形で、周縁の四面は使用されており、上端は敲打され、下端は切断されていた。穿孔が認められた。2も撥形で、周縁の四面は使用され、上端は切断され、下端は敲打されていた。3も撥形で、周縁の二面は使用されていた。上下端は切断されていた。4は短冊形で周縁の四面と上端が使用され、下端は切断されていた。穿孔の痕跡が認められた。5は楔形で、周縁の四面が使用され、三面は敲打されていた。穿孔が認められた。楔形の砥石は、据え置きではなく、手で握り、砥石の方を動かして使われたものと考えられた。6は撥形で、周縁の四面が使用され、上端と下端は切断されていた。穿孔が認められた。7も撥形で周縁の四面は使用され、上下端は切断されていた。被熱による剝落が認められた。8も撥形で周縁四面が使用され、上下端は切断されていた。9も撥形で周縁四面が使用され、上下端が切断されていた。10は撥形で、周縁四面が使用され、上端が切断され、下端が敲打されていた。

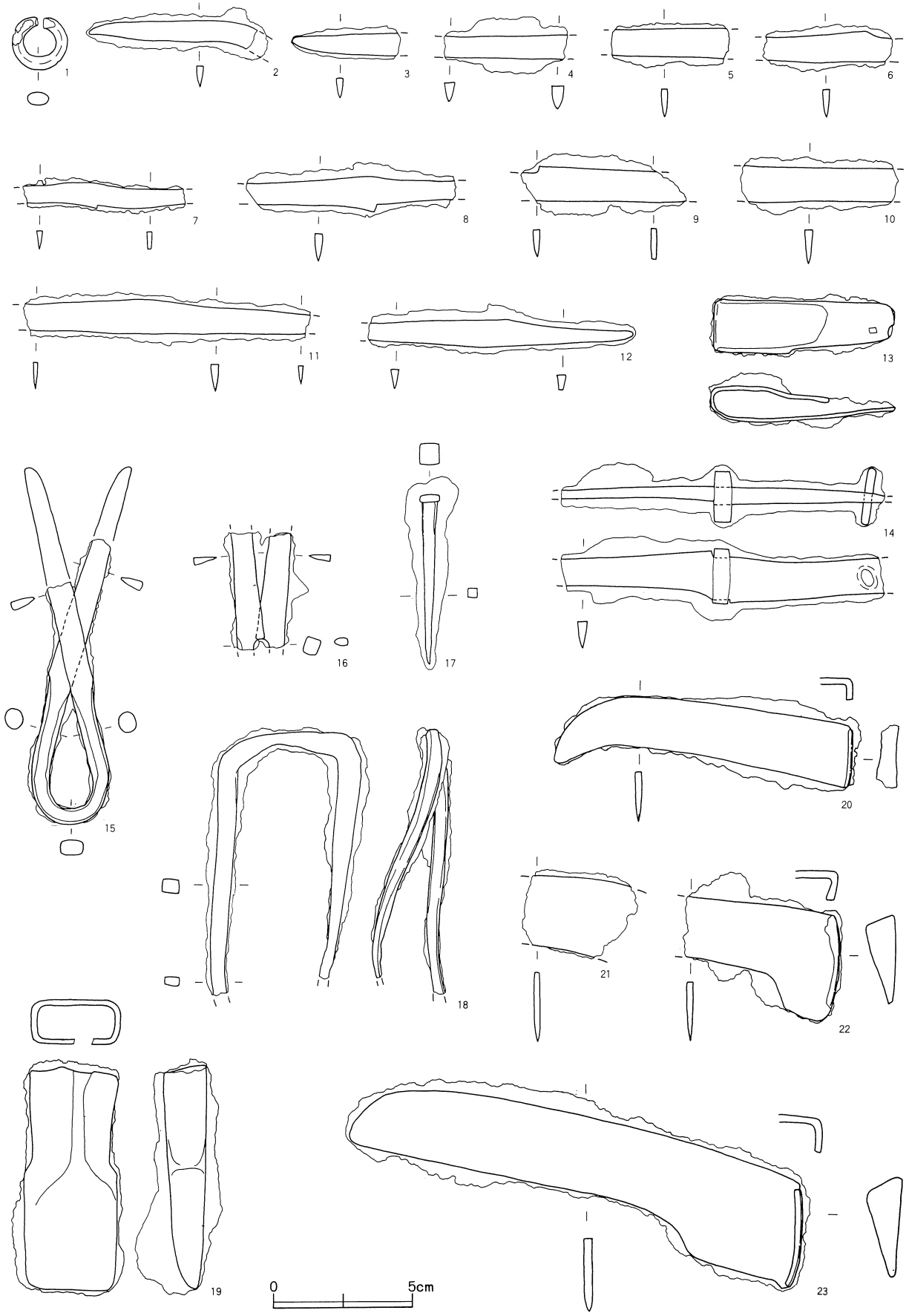
第595図　調査区内出土砥石(1)



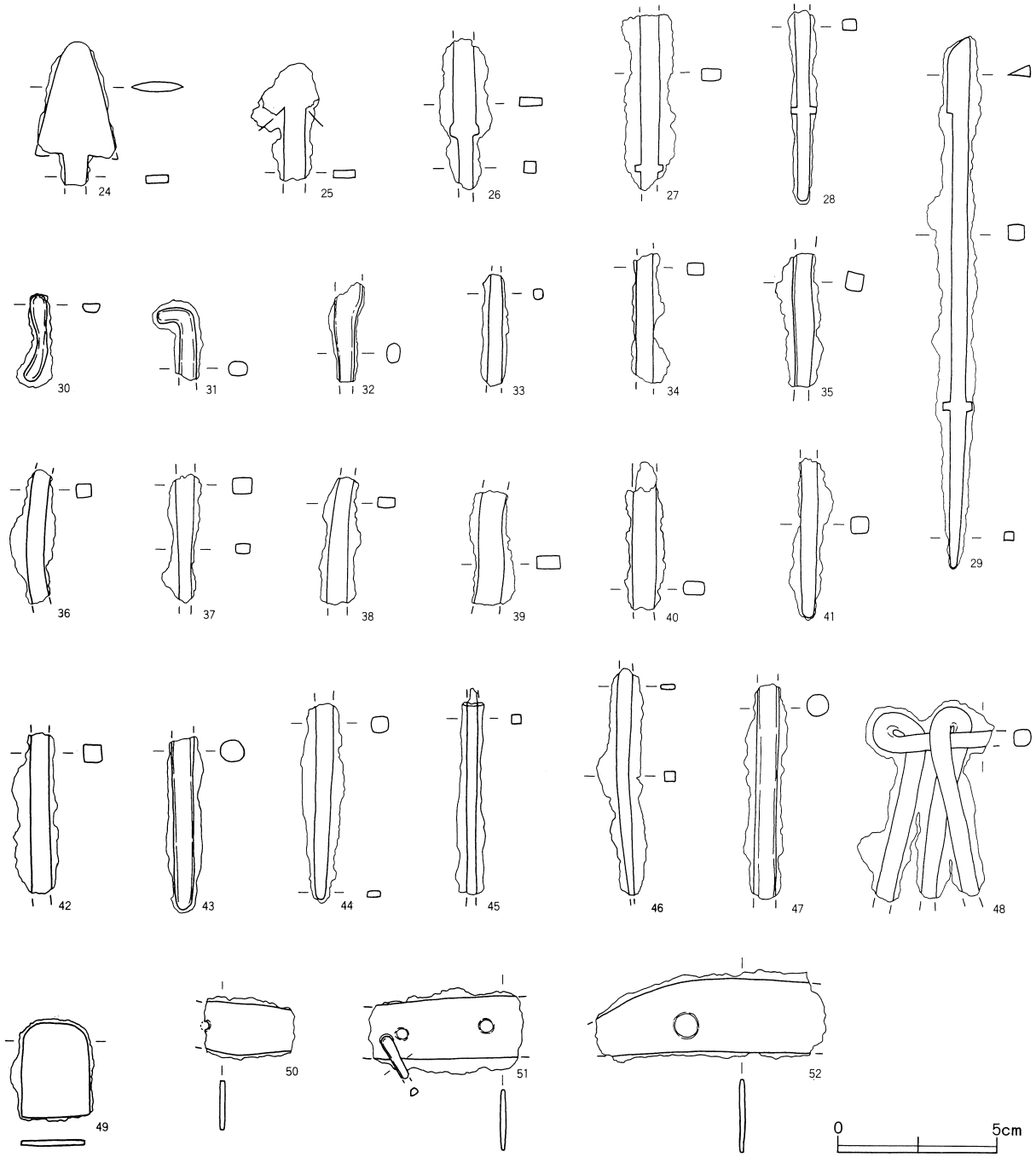
第596図　調査区内出土砥石(2)

11は分銅形で、周縁四面が使用され、上下端が敲打されていた。12・13は撥形で、周縁四面が使用され、上下端が切断されていた。14も撥形で、周縁四面が使用され、上端は敲打され、下端は切断されていた。15・16・17・18は撥形で、周縁四面が使用され、上端は切断され、下端は敲打されていた。19も撥形で、周縁四面と下端が使用され、上端が切断されていた。穿孔の痕跡が認められた。20も撥形で、周縁二面が破砕され、二面が使用されていた。上端は不明で、下端は敲打されていた。

第597図　調査区内出土金属製品(1)



第598図　調査区内出土金属製品(2)



ｉ金属製品（第597・598図）

本年度報告の調査範囲からは、53点の金属製品が検出できた。

検出した金属製品の内訳は、耳環１点、刀子13点、鋏２点、釘１点、鎹１点、斧１点、鎌４点、鏃６点、不明品24点であった。

不明品の中の１点は、破片であり、一覧表中には記載したが、実測は出来なかった。

１の耳環は、銅地に銀張りが施されていた。銅部分は緑青に覆われていた。銀張りは、環内側面部分で遺存状態が良好であった。断面形は楕円形を呈していた。

２～14は刀子で、この中には、マチが刃側にあるものと、棟側にあるものが認められた。13は折り曲げられており、埋葬との関連が想定された。14は、縁金具や目釘が残存していた。

15・16は鋏であった。15はクロス式で、刃部の先端を

第19表　調査区内出土金属製品一覧表

番号	遺構名	遺物種類	重量/g	備考
1	SE40 覆土	耳環	5.63	直径2.0cm 銅に銀張り
2	SJ266 覆土	刀子	9.58	現存長6.0cm
3	SJ240 覆土	刀子	4.25	現存長3.8cm
4	SK257 覆土	刀子	10.44	現存長4.4cm
5	SJ307 覆土	刀子	8.94	現存長4.2cm
6	表土	刀子	7.61	現存長4.6cm
7	SJ273 貯蔵穴 覆土	刀子	6.96	現存長5.9cm
8	SD38 覆土	刀子	15.46	現存長7.5cm
9	SD85 覆土	刀子	14.09	現存長5.8cm
10	SD90 覆土	刀子	14.51	現存長5.7cm
11	SX10 No.48・71	刀子	19.42	現存長10.2cm
12	SK186 No.3	刀子	14.54	現存長9.5cm
13	SJ264 覆土	刀子	19.52	現存長10.6cm 折り曲げられていた
14	SJ302 覆土	刀子	56.59	現存長11.7cm
15	SX8 No.17・18	鋏	26.51	現存長10.2cm クロス式
16	SJ150 覆土	鋏	10.67	現存長4.2cm 丸バネ式か
17	SJ153 No.1	釘	15.38	全長6.0cm
18	SJ159 No.8	鎹	43.64	現存長9.5cm
19	SD91 覆土	斧	148.31	全長8.0cm 刃幅3.4cm 厚さ1.5cm
20	SJ134 No.4	鎌	42.20	全長10.7cm
21	SD77 覆土	鎌	14.84	現存長4.1cm
22	SJ201 覆土	鎌	34.31	現存長5.6cm
23	SJ189 No.25	鎌	121.87	全長16.8cm
24	SB79 P2 覆土	鏃	7.59	現存長4.5cm
25	SJ237 覆土	鏃	6.69	現存長3.6cm
26	SJ274 覆土	鏃	7.42	現存長4.7cm
27	SJ66 カマド周辺	鏃	12.36	現存長5.5cm
28	SX10 No.13	鏃	5.12	現存長5.9cm
29	SJ226 No.2	鏃	28.02	全長16.6cm 片刃
30	SX10 No.48	棒状不明品	1.60	全長2.7cm
31	表土	棒状不明品	3.28	現存長2.2cm 先端部屈曲
32	SJ263 貯蔵穴 覆土	棒状不明品	2.00	現存長3.1cm
33	SX9 No.115	棒状不明品	3.14	現存長3.5cm
34	SJ91 No.5	棒状不明品	4.60	現存長4.1cm
35	P856 覆土	棒状不明品	6.75	現存長4.2cm
36	SD85 覆土	棒状不明品	6.58	現存長4.1cm
37	SJ91 No.5	棒状不明品	4.06	現存長4.0cm
38	SJ141 覆土	棒状不明品	4.71	現存長3.9cm
39	SJ255 覆土	棒状不明品	6.60	現存長3.5cm
40	SJ140 覆土	棒状不明品	5.67	現存長4.6cm
41	SJ91 No.5	棒状不明品	5.18	現存長5.0cm
42	SJ300 No.12	棒状不明品	9.66	現存長5.0cm
43	SJ251 覆土	棒状不明品	8.99	現存長5.4cm
44	SJ185 覆土	棒状不明品	11.26	現存長6.1cm
45	SJ240 覆土	棒状不明品	6.24	現存長6.4cm
46	SE75 覆土	棒状不明品	8.81	現存長7.0cm
47	SJ300 覆土	棒状不明品	13.53	現存長6.7cm
48	SJ240 覆土	棒状不明品	47.87	現存長6.1cm 曲棒状品の組み合わせ
49	SJ265 掘り方	板状不明品	6.26	縦3.6cm 横2.0cm 厚さ0.2cm
50	SJ176 覆土	板状不明品	4.02	現存長2.6cm 幅1.6cm 小孔
51	SD38 覆土	板状不明品	11.13	現存長4.8cm 釘状の付属品 小孔
52	SD38 覆土	板状不明品	15.45	現存長7.1cm 幅2.3cm 小孔
53	SJ145 覆土	破片	14.78	破片のため実測不能

欠いていた。16は丸バネ式で、刃部のみが残存していた。いずれも類例の少ない遺物であった。

17は釘で、サビに厚く覆われていた。

18は鋲で、先端を欠いていた。住居跡の覆土の上面から検出したもので、検出地点の近くに攪乱が認められたので、混入品の可能性も考えられた。

19は斧で、緩やかに肩が張り出す有袋のものであった。

20～23は鎌で、小形の20と大形の21～23に二分する事ができた。いずれも柄は鈍角に装着されるものと思われた。

24～29は鏃で、鏃身部が両刃と片刃に分けられた。片刃のものには、棘篦被が観察できた。29は完形であった。

30～53は不明品で、多くは棒状を呈していた。

30～48は棒状の不明品で、30～42・44～46・48は断面が方形であり、43・47は断面が円形であった。

30・35・39は緩やかなS字状に湾曲し、36・38・46は緩やかな弧状に湾曲していた。31は先端がL字状に曲げられており、32は途中から径がやや大きくなっていた。

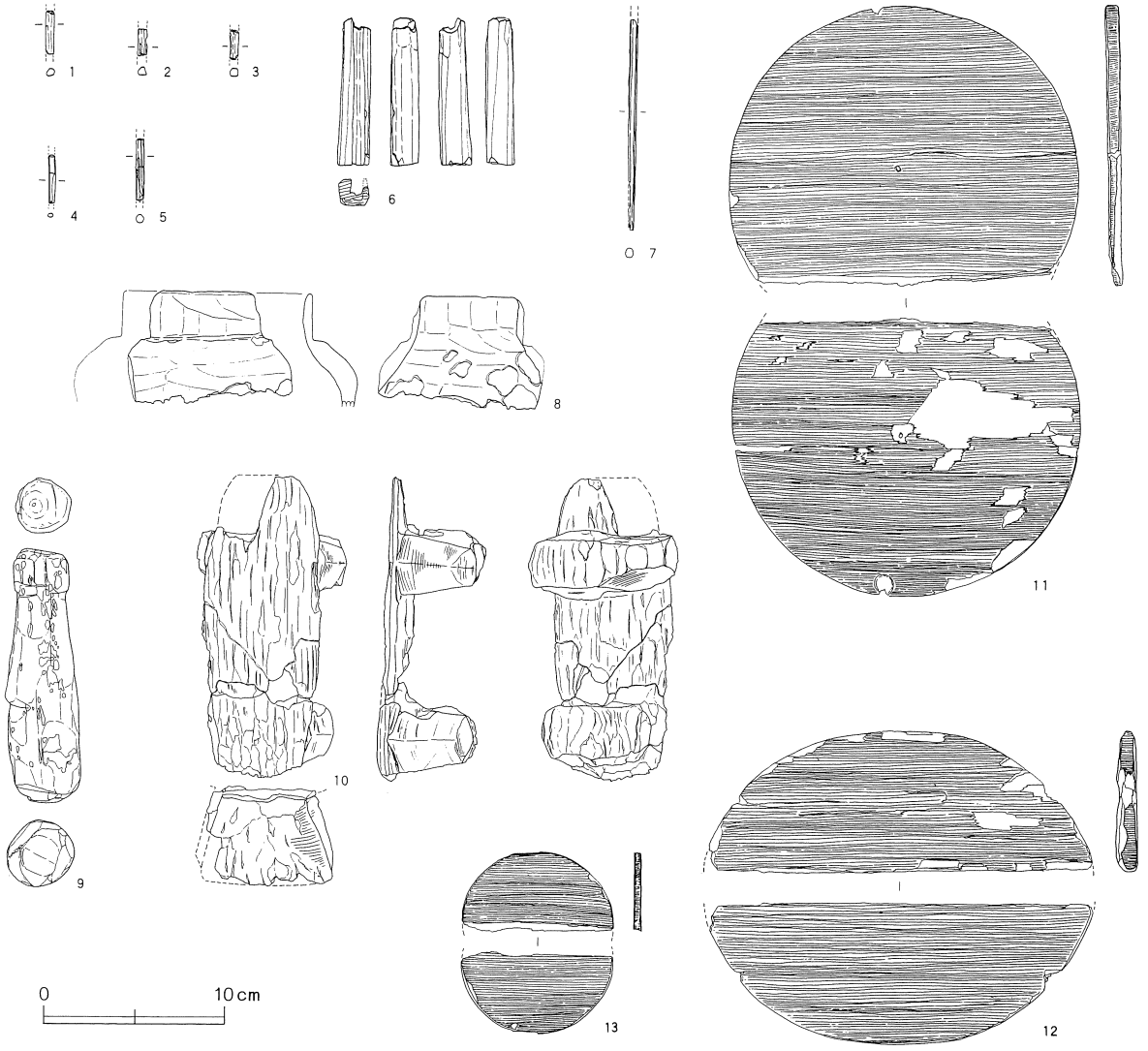
48は2本の棒状の金属が曲げられ、組み合わされていた。

49～52は板状を呈していた。いずれも厚さが極めて薄く、刃は確認できなかった。

50～52には小孔が認められ、51には釘状の付属品が観察できた。

51・52の小孔は、肉眼では確認できず、X線写真によって検出した。

第599図　調査区内出土木製品



j 木製品等（第599図）

本年度報告の調査範囲からは、合計42点の木製品が検出できた。29点は柱材であり、それ以外の製品としては、箸６点、壺１点、下駄１点、棒状木製品１点、曲げ物底板３点、凹状材１点がそれぞれ検出できた。

１～５は箸であった。６は中空の八角形の木製品が欠失したものと考えられた。７も箸であった。

８の壺は、口縁部から肩部にかけての小片であるが、下駄や棒状木製品と同様に一木作りのクリモノであった。９の棒状木製品は、側面に黒色の付着物の痕跡が認められた。10は一木作りの連歯下駄であった。鼻緒を通すための穴である「眼」は確認できなかった。釘などを用いて留めた可能性も考えられたが、その痕跡も認められなかった。下駄の歯は、前後ともに台形を呈していた。11の曲げ物底板は中央付近に一カ所の穿孔が認められた。

また、木製品とは異なるが、中世の所産と考えられる井戸の覆土中層に、炭化した大量の小麦類が含まれている事例が散見できた。井戸の覆土の中には、大型の二枚貝の貝殻痕跡を含むものも二例あった。また、SE-100の覆土下層からは、大型のヒョウタンも検出できた。

第20表　調査区内出土木製品一覧表

番号	種　類	長軸×短軸×厚/cm	出土位置	備　考
1	箸	2.4 ×0.4	SE81	
2	箸	1.4 ×0.5	SE81	
3	箸	1.7 ×0.5	SE81	
4	箸	2.7 ×0.2	SE81	
5	箸	3.4 ×0.4	SE81	
6	凹状材	8.1 ×1.4	SE120	
7	箸	12.0 ×0.5	SE88	
8	壺		SE192	
9	棒状木製品	14.0 ×4.0	SE44	側面に黒色付着物
10	下駄	16.4 ×5.5	SE81	
11	曲物	19.2 ×0.7	SE30	中央に１ヶ所穿孔
12	曲物	(21.0)×1.1	SE68	
13	曲物	8.3 ×0.4	SE56	

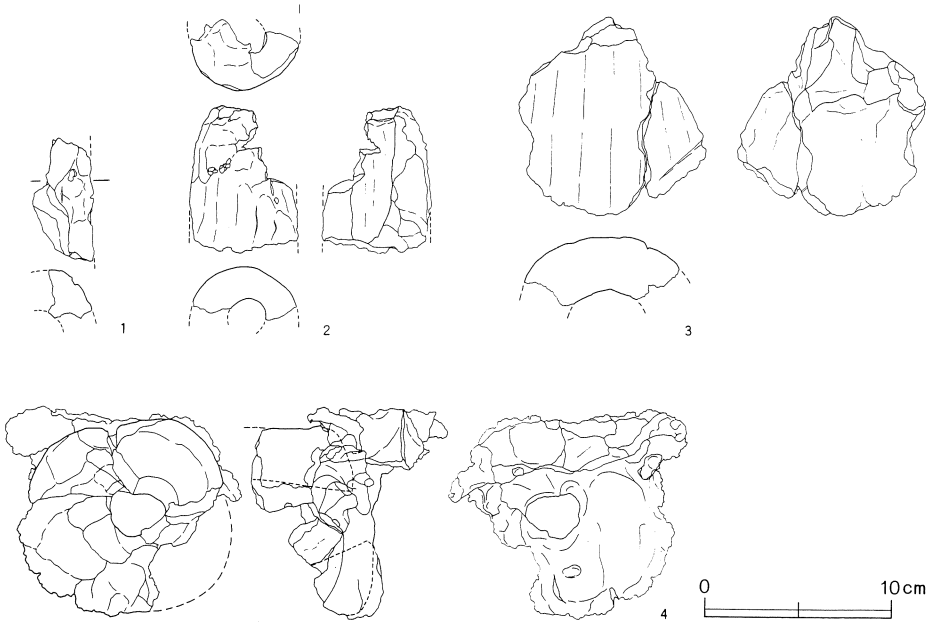
k 製鉄関連遺物

（第600図）

本年度報告の調査範囲からは、合計27個の製鉄関連遺物が検出できた。

この中で、20点は鉄滓であり、７点は羽口であった。鉄滓・羽口は、いずれも遺構覆土に流入した状況で検出できた。ただし、SX12については、廃棄の可能性も考えられた。２・４の羽口は、先端部が残存しており、他は両端を欠失していた。

第600図　調査区内出土製鉄関連遺物



第21表　調査区内出土製鉄関連遺物一覧表

番号	遺　構　名	種類	重量/g	備　　考
1	SJ131	鉄　滓	90.95	
2	SJ186	鉄　滓	199.88	
3	SJ197	鉄　滓	8.65	
4	SJ245	鉄　滓	166.69	破砕
5	SJ249	鉄　滓	117.65	椀形滓か
6	SJ255	鉄　滓	26.58	
7	SJ257 P3	鉄　滓	44.24	
8	SJ298	鉄　滓	7.95	
9	SJ302	鉄　滓	34.31	
10	SJ302	羽　口	20.75	
11	SJ302	羽　口	8.07	
12	SJ302	羽　口	5.03	
13	SJ316	鉄　滓	176.73	
14	SJ318	鉄　滓	39.68	
15	SJ338	鉄　滓	5.21	
16	SD77	鉄　滓	194.11	
17	SD81	鉄　滓	83.47	椀形滓か
18	SD101	鉄　滓	63.16	椀形滓か
19	ＳＺ４	鉄　滓	11.75	
20	SE75	羽　口	376.10	第600図４
21	SK319	羽　口	184.05	第600図３
22	SX10	鉄　滓	116.98	破砕
23	SX10 No.4	鉄　滓	203.79	椀形滓か
24	SX10 No.10	鉄　滓	32.48	破砕
25	SX12	鉄　滓	12.51	
26	SX12	羽　口	22.68	第600図１
27	SX12	羽　口	76.34	第600図２

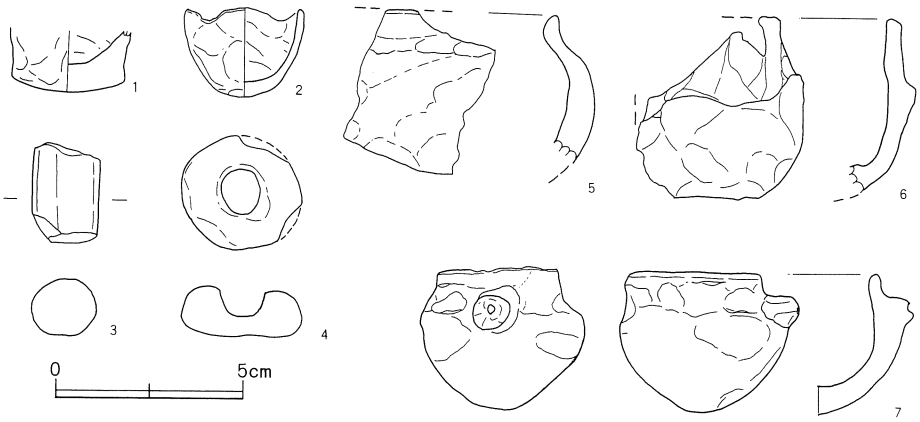
ｌ小形土製品（第601図）

本年度報告の調査範囲からは、合計７点の小形の土製品が検出できた。

１・２は、手捏ね土器と考えられるものであった。

１はやや厚い底部のみが残存していた。SJ-151の覆土の中から検出した。

第601図　調査区内出土小形土製品



２は完形品であり、口縁は薄く、やや欠落しているものの、指による摘み出しの影響で、緩やかに５単位の波状を呈していた。SJ-175の覆土の中から検出した。

３は棒状の土製品で、断面は押しつぶしたような形態をしていた。SJ-150から検出した。

４は中央部分に片側からの押圧によって、凹みがつけられた円盤であった。SJ-156の床面より検出した。

５～７は、壺や甕の模造品と考えられた。５はわずかに口縁部が残存する胴部の破片で、口辺部はヨコナデによって明瞭に作り出されていた。SJ-263から検出した。６は口縁部から底部まで遺存していた、1/2程度の破片であった。前者と異なり、口辺部は指頭押圧によって作り出されていた。SJ-153の P4から検出した。７は完形であった。口辺部は指頭の押圧によって作り出されていた。瘤状の突起が一ヶ所に作り付けられており、突起はやや円柱状で、わずかに中空の様な状況が窺えた。SJ-71のカマド周辺から検出した。６・７は、口辺部の作り出しにヨコナデが用いられておらず、かつ、胎土の状況も他のものと異なっているので、縄文時代の所産である可能性も考えられた。

調査区内出土小形土製品

番号	器　　種	口　径	器　高	底　径	胎　　土	焼成	色　　調	残存率	備　　考
1	手捏ね土器底部			3.0	ＡＣＥＦ	3	鈍い褐色	80	
2	手捏ね土器	3.0	2.4		ＡＣＤＥＦ	4	橙　色	90	
3	棒状土製品	2.6	1.6		ＡＣＥＦ	3	鈍い黄褐色	80	
4	円盤状土製品	3.1	1.2		ＤＦ	4	淡黄橙色	90	
5	小形土器				ＡＣＤＥＦＫ	4	鈍い黄褐色	10	縄文か
6	小形土器				ＡＣＤ	3	黄灰色	40	縄文か
7	小形土器	3.1	3.8		ＡＣＥＦ	3	黄灰色	100	縄文か

mグリッド取り上げ遺物

帰属遺構が不明瞭な遺物をグリッドで取り上げたが、この中で、15点が実測可能であった。

1は、土師器坏である。表面採集であったが、完形品であった。

2は、須恵器坏である。AA-15グリッドから出土した。胎土の特徴から、湖西産と考えられる。全体的に薄く、蓋受けの立ち上がりが高い。

3～6は、須恵器坏である。

3は、南比企産と考えられる坏で、AD-17グリッドから出土した。底部は、糸切離し後、全面ヘラケズリ調整されていた。

4・5も、南比企産と考えられる坏である。4は、AC-20グリッド、5はAE-17グリッドから出土した。2点とも、底部は、糸切り離し後、周辺部にヘラケズリ調整されていた。また、5には火襷痕が認められた。

6は、末野産と考えられる坏である。表面採集資料である。底部は、糸切後、無調整であった。

7は、須恵器蓋である。T-13グリッドから出土した。口縁部を欠損していたため、全体の器形は不明である。天井部は、ヘラケズリされていた。胎土の特徴から、末野産あるいは群馬産と考えられる。

8は、灰釉陶器の皿である。表面採集資料である。底部の破片であったため、全体の器形は不明である。

9は、須恵器瓿である。表面採集資料である。口縁部～頸部を欠損していた。球形の胴部には、刷毛状の工具の木口で、連続的な刺突が、押し引きによって施され、その後、径12㎜の円形の孔が穿たれていた。

10は、須恵器長頸瓶である。表面採集資料である。胴部以下を欠損していた。産地は明らかにできなかったが、硬質で、全体的に赤銅色を呈していた。また、部分的に自然釉がかかっていた。

11～13は、土師器甕である。

11は、AA-20グリッドから出土した。胴部には、縦方向のヘラケズリが施されていた。

12･13は、AD-18グリッドから出土した。2点とも、胴部には、縦方向のヘラケズリが施されていた。また、12の底部には、木葉痕が認められた。

14・15は、中世陶器の破片である。

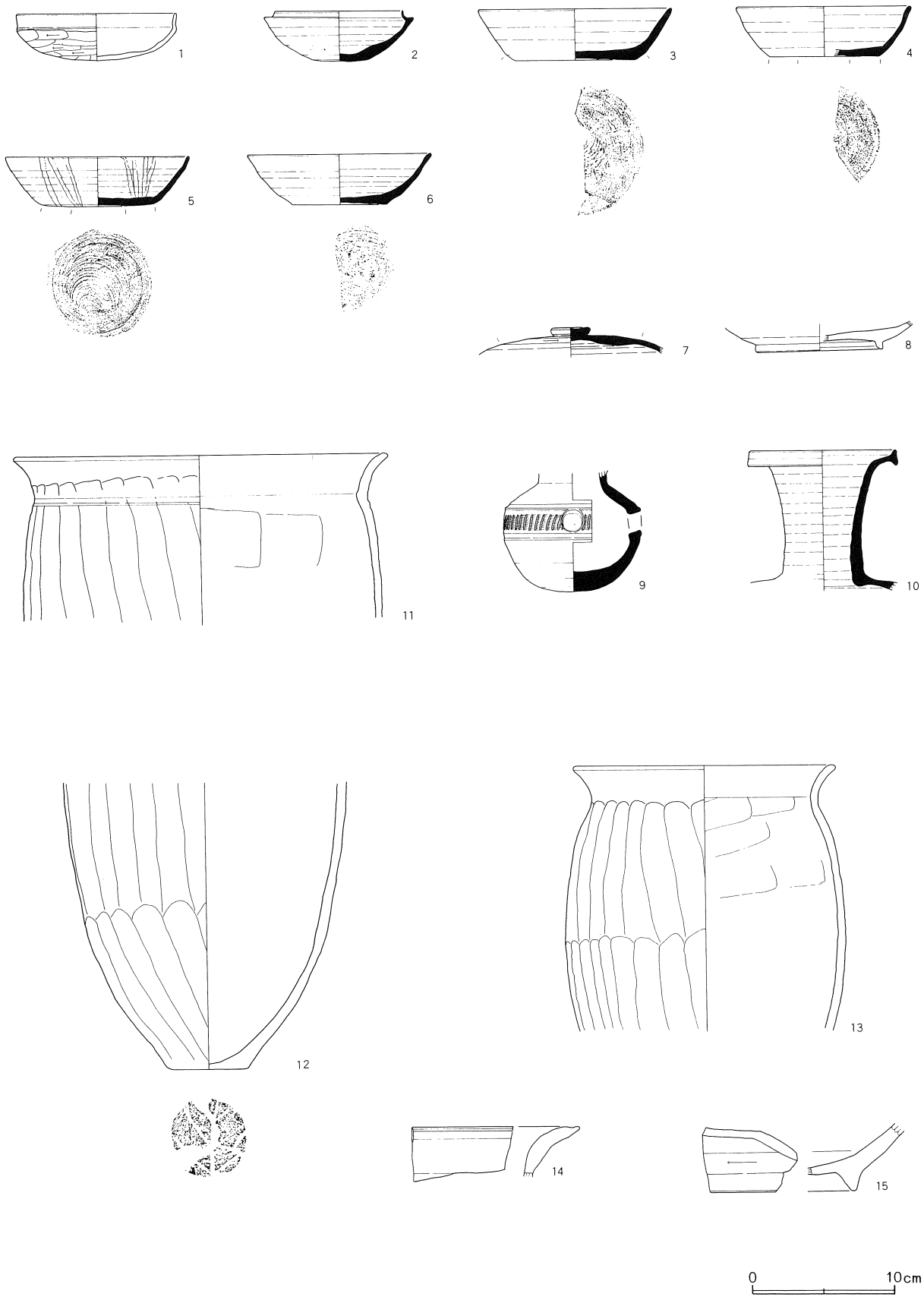
14は、常滑産の甕の口縁部の破片である。V-12グリッドから検出した。端部は舌状を呈し、古式の様相である。

15は、片口鉢の底部の破片である。AB-20グリッドから出土した。産地は特定できなかったが、山茶椀系の片口と考えられる。

グリッド取り上げ遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　　調	残存率	備考
1	坏	11.2	3.3		BDEHJ	2	橙	100	C区表採
2	坏	8.8	3.5		BF	1	灰	95	湖西 AA-15G
3	坏	(13.6)	3.6	(8.5)	ABFIL	2	灰	30	南比企 AD-17G
4	坏	(12.4)	3.5	7.8	ABI	2	灰オリーブ	40	南比企 AC-20G
5	坏	(13.0)	3.4	(7.8)	ABFI	2	灰	40	南比企 AE-17G
6	坏	(13.0)	3.6	(6.8)	ABDFHL	3	灰	40	末野C区表採
7	蓋				ABFL	1	暗　灰	40	群馬産？つまみ2.8cmT-13G
8	灰釉陶器皿			(9.0)	BF	1	灰　白	破片	内面施釉C区表採
9	瓿				BFJ	1	暗　灰	40	C区表採
10	長頸瓶	(10.2)			BF	2	暗　灰	70	外面自然釉C区表採
11	甕	(26.0)			ADHJK	4	鈍黄褐	20	湖西 AA-20G
12	甕			5.6	ABDEHJ	4	鈍黄褐	40	木葉痕 AD-18G
13	甕	18.0			ABDEHJK	3	橙	30	AD-18G
14	甕				BEFJ	2	赤　褐	破片	常滑 V-12G
15	片口鉢				BF	1	灰	破片	山茶椀系 AB-20G

第602図　表土出土・グリッド取り上げ遺物



V　結語

1．定型化以前の模倣坏

模倣坏定型化段階の一資料として、SJ-143と109から出土した坏類を検討してみたい。

1　SJ-143出土の坏類

SJ-143から出土した椀・坏類（第602図1～13）を見てみると、その形態の特徴から、

a：口辺に相当する部分が、内斜する椀（1～3）

b：いわゆる盌状の坏（5・6・8・11）

c：bの坏に近く、わずかに口辺がヨコナデで作り出された坏（7）

d：浅く、内面に暗文を持つ坏（12・13）

e：明瞭に口辺部が作り出された坏（4・9・10）

の五形態が認められた。

aの椀は、和泉期からの系統上に位置すると考えられるもので、SJ-143-1～3では、口辺部に相当する部分の内斜度合いは弱く、底部外面が丸底状を呈し、底央部がわずかに平らみを帯びていた。連続的なヨコナデは施されておらず、断続的なヨコナデで調整されており、掌上での調整が考えられた。外面はヘラケズリされているが器壁は大量には削り取られてはいなかった。底央部のわずかな平らみは、ケズリ残し部分であり、この点で後出の模倣坏のケズリとは異なっていた。

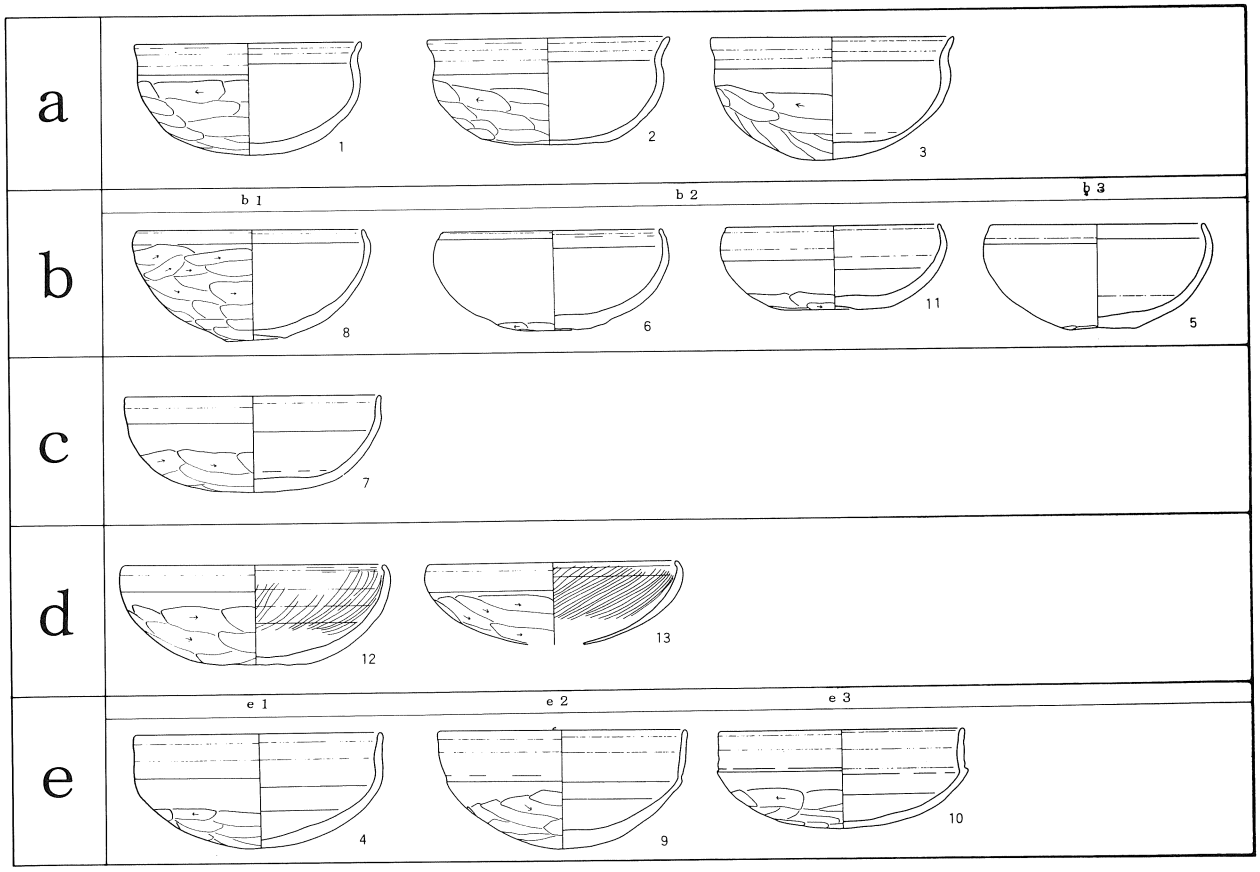
bの盌状の坏については、その中に、更に三つの底部形態、

b1：底部外周がやや出っ張った様になり、底央部がやや窪んだ上げ底状のもの（8）

b2：底部外周が切り取られ、底央部がやや窪んだ、上げ底状のもの（6・11）

b3：底部外面が切ったような平底のもの（5）

第603図　SJ-143出土坏類の形態



が認められた。

本来は製作途上で、８の様な外周がやや出っ張った形態を持っており、その後に、ヘラケズリを施したものが５・６・11であると考えられる。更に成形時に上げ底状態が著しかったものが11であり、顕著でなかったものが６であり、外周の出っ張りが弱く、底央部までヘラケズリが及んだものが５であると考えられる。

外面のヘラケズリについては個体差が大きく、８はやや顕著で、５にもわずかに認められ、６・11はヘラナデに近いものであった。底部の形態から、台上ではなく掌上で成形された可能性が考えられる。また、いずれにも赤彩が認められた。

ｃもｂに近い形態をしているが、ヨコナデで短い口辺部が作り出されていた。外面には赤彩が認められ、内面には暗文の痕跡も認められた。

ｄは浅い坏で、内面に規則的な暗文が認められた。

ｅは、前述したａ～ｄとは明瞭に異なる一群であり、広義の模倣坏の範疇に入るものである。

形態的には、幅広の口辺部が明瞭に作り出されており、赤彩もされておらず、暗文も認められなかった。これらの広義の模倣坏には、口辺部の作り出し方に三つの差異、

ｅ１：口辺部と底部の境界に稜を持たず、口辺部が外反する模倣坏（４）

ｅ２：口辺部と底部の境界に稜を持ち、口辺部が内湾する模倣坏（９）

ｅ３：口辺部と底部の境界に稜を持ち、口辺部が外反する模倣坏（10）

が認められた。

ｅ１（４）は、口辺部を作り出す際に、まず、口辺部を外面から上方に押し出すように圧迫して、外反気味の口辺部を作り出し、その後に、口辺部と底部の境界あたりを内面から圧迫して外側に突出させて、口辺部の下半としていた。この結果、口辺部下半の外面はやや膨らみ、器面に粘土の膨らみに由来する開裂が認められた。そしてその後の調整が、顕著な指ヨコナデではないために、口辺部下端に明瞭な沈線が作り出されていなかった。底部外面のヘラケズリも顕著ではなく、ヘラナデに近いものであった。口辺部の厚さは不安定で、口端部も直線的ではなかった。

ｅ２（９）は、口辺部を内面から上方に押し出すように圧迫して、底部と連続した内湾気味の曲線の口辺部を作り出し、その後に、口辺部ヨコナデを行い、口辺部下端に稜線を作り出していた。ただし、前二者と大きく異なる点は、口辺部が外反しておらず、底部と連続的な曲線となっていた点である。外面のヘラケズリも顕著ではなかった。

ｅ３（10）は、口辺部を外面から上方に押し出す様に圧迫して、外反気味の口辺部を作り出し、その後に、回転に強く依存したヨコナデを施していた。このために、口辺部はやや分厚いものの、厚さは一定となっており、口端部も直線的で、工具の上下端が明瞭で、特に工具の下端では、明瞭な稜線が作り出され、これが底部との境界となっていた。底部外面のヘラケズリもさほど顕著ではなかった。

２　SJ-109出土の坏類

次にSJ-109から出土した坏類（第603図１～６）を見てみると、

ｂ’　：いわゆる盌状の椀（１・２）

ｅ２’：口辺部と底部の境界に稜を持ち、口辺部が内湾する模倣坏（３・４）

ｅ３’：口辺部と底部の境界に稜を持ち、口辺部が外反する模倣坏（５・６）

といった三形態が認められた。

ｂ’の盌状の坏（１・２）については、SJ-143で認められた、b1～b3の様な多様性はなく、全て平らみを帯びた丸底となっていた。赤彩も認められたが、２では、内面では口辺部に相当する部分のみとなっていた。大きな特徴は、整形の痕跡が、回転により依存したものとなっている点であった。特に口縁に近い部分でこの傾向が顕著であった。又、外面では外周部と底央部の整形が明瞭に異なっており、外周部では、ナデあるいはヘラナデであり、底央部ではヘラケズリが用いられていた。口径もやや大きかった。

e 2'の坏（3・4）については、口辺部と底部の境界部分について、口辺部下端の沈線の描出がより顕著となっており、やはり整形時の回転に対する依存の高さが窺えた。

e 3'の坏は、口辺部と底部が明瞭に画された模倣坏であった。e 2～e 2'は口辺部と底部が同一の曲線に乗っており、e 3'は底部の上に口辺部が立ち上がっている点で、形態的に明瞭に異なっていた。

3　SJ-143と109の位置づけ

模倣坏の定型化を、稜をもって底部と明瞭に画された口辺部がわずかに外反気味に立ち上がり、口端部に面をもち、面上に沈線が認められる坏の出現におくならば、SJ-143-e 1～e 3、109-e 2'・e 3'は、定型化する以前の模倣坏である。

SJ-143・109ともに、坏類の残存率は高く、それらの坏類の中に口端部に面を持った模倣坏は検出されておらず、和泉期からの伝統上に位置づけ可能な形態a・bが認められた。したがって、これらを模倣坏が出現してから、定型化するまでの間の資料として位置づけることが可能である。

SJ-143の坏類の組成を見てみると、形態a・b・dは、形態・赤彩・暗文などの諸点から伝統的な土器群の中に位置づけが可能である。

形態cは、形態bの製作過程の中で、口辺部を作り出したものであり、須恵器坏の形態構成（底部と口辺部からなる）の影響を受けて、口辺部が作り出されたものであり、伝統を基としながらも影響を受けた土器群である。

形態eは、従来の系統の中からは出現してこないものであり、新たに出現した土器群である。つまり、伝統的な土器群＋影響を受けた土器群＋新たな土器群といった構成になっている。

SJ-109の坏類の構成を見てみると、形態b'は、伝統的な土器群の中に位置づけが可能である。

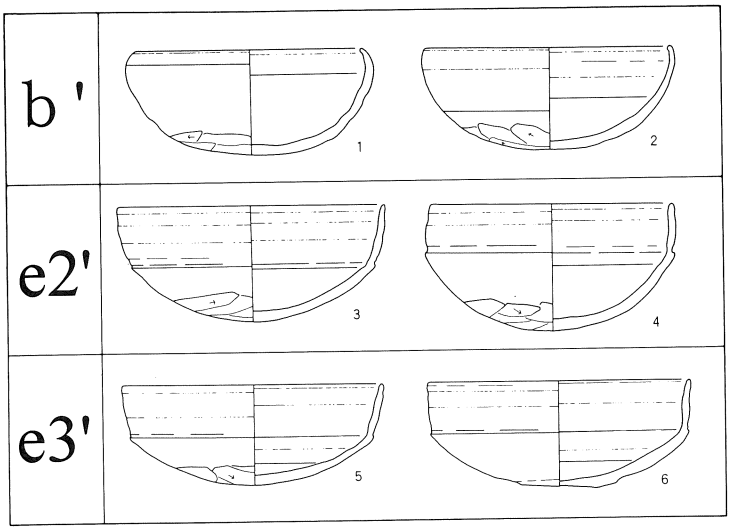
形態e 2'・e 3'は、新たな土器群に位置づけられるものである。つまり、伝統的な土器群＋新たな土器群といった構成になっている。

SJ-143の段階では、外的な要因から、伝統的な土器群の中で新しい影響を受けた折衷的な形態が出現する一方で、新たな形態が不安定な内容で出現していた。これらは時間の経過と共に、各形態内での型式論的な内容が安定化し、同時に三形態の比率が変遷して行くと考えられる。伝統が強ければ、新たな土器群に比して、影響を受けた土器群の出現比率と期間が長くなり、新たな土器群への組成の遷移に時間がかかるであろうし、外的な要因が強ければ、新たな土器群の出現比率は急速に高まり、比較的短時間に組成が遷移して行くと思われる。

SJ-143では、伝統的な土器群が種類、数量ともに多く検出されると共に、影響を受けた土器群が認められ、更には、新たな土器群が非常に不安定な斉一性を欠いた形態で出現していた。

一方のSJ-109では、伝統的な土器群は種類、数量ともに減少し、新たな土器群は一定の方向に収斂して行く様相を示していた。

第604図　SJ-109出土坏類の形態



4　模倣坏出現期の様相

埼玉県県北地域での模倣坏出現期の様相は、型式論的に非常に混沌としている。それは、外部で完成された（型式論的に安定した）型式が、製作者の移入によって、当該地域にもたらされたのではなく、在来

の製作者が、何らかの従来的ではない要素の影響（それは、須恵器指向といった観念的なものでもよいし、回転台の導入といった物理的・技術的なものでもよいし、大量生産の要求といった社会的な要請でもよい。ただし、ここで以上にあげた要素を具体的に模倣坏成立の要因として特定しているわけではない）を受けて、徐々に製作物が変容して行った結果、新しい型式の出現過程が混沌としたものとなった事を意味していると考えられる。

模倣坏の出現過程については、具体的な製作工程で、どのような要素が、どのような影響を与えたかについての検討が必要である。

5　模倣坏が定型化する過程

模倣坏が定型化する過程を形態ｅに注目して見てみよう。

e1は、口辺部を作り出す点では、須恵器坏の形態構成を意識している。しかし、口辺部下半を内面から圧迫して作り出しており、口辺部と底部を稜線で画してもいない。製作も回転台が用いられていない。模倣の重点は、口辺部を垂直に長く立ち上げるといった形態の第一印象的な特徴に置かれている。これらのことから、形態構成を意識しているが、形態構成は十分に理解されず、製作過程での技術が伴っていないものであると位置づけられる。

ｅ２は、底部から形態的に連続する口辺部に対して、沈線と稜で、両者を画している。沈線と稜がなければ、丸い盌のような形態である。ここでは形態構成の重点は稜線の描出による口辺部の作り出しに置かれている。底部と口辺部がおそらく同一単位の粘土塊から連続的に作られ、稜線を作り出すことによって口辺部を作出している。形態構成は理解されているが、形態構成に関わる製作過程の役割は十分に咀嚼されてはいない。

ｅ３は、底部と口辺部が形態的に連続せずに明瞭に分節化され、両者の間が稜線で画されており、製作過程で回転台も使用されており、明瞭な模倣坏である。底部と口辺部が異なった単位の粘土塊から作り出され、成形時から従来とは異なった工程を経ている。形態構成の上でも、製作過程での技術上でも後出の模倣坏的な要素を満たしているといえよう。

ｅ3'は、ｅ３の延長上でとらえることができるもので、定型化した模倣坏にかなり近づいている。口辺部形成上の大きな特徴は、口辺部上半は外側からの圧迫が強く外反し、口辺部下半は内側からの圧迫が強く内湾気味な点である。

ｂ形態とした半球形の坏は、椀・坏類の製作工程の当初に粘土によって形成された基本的な形態（基本体）に近いものである。この基本体に対して様々な工程を経ることによって多様な坏類が作り出されると考えられる。従って、時期や地域を問わずに省略形として出現しやすく、又、それらの多くは省略形であるが故に独自に変遷するものではなく、系統がたどりにくい。

模倣坏の出現期においては、この基本体に対して、ヨコナデと沈線の描出によって、口辺部を作り出す試みがなされる。ｅ２の形態はこのように解釈できる。また、基本体が回転台上で作られはじめる中から模倣坏の安定した製作工程が模索され始める。各地で認められるｅ３の多様性は、このように解釈できる。

そしてこのｅ３の様な模倣坏が様々な形態上の多様性を持って各地で生産され、その中で、形態的に収斂してゆき、ｅ3'の形態を経て定型化した模倣坏が成立したと考えられる。

2．赤彩された盌形の坏

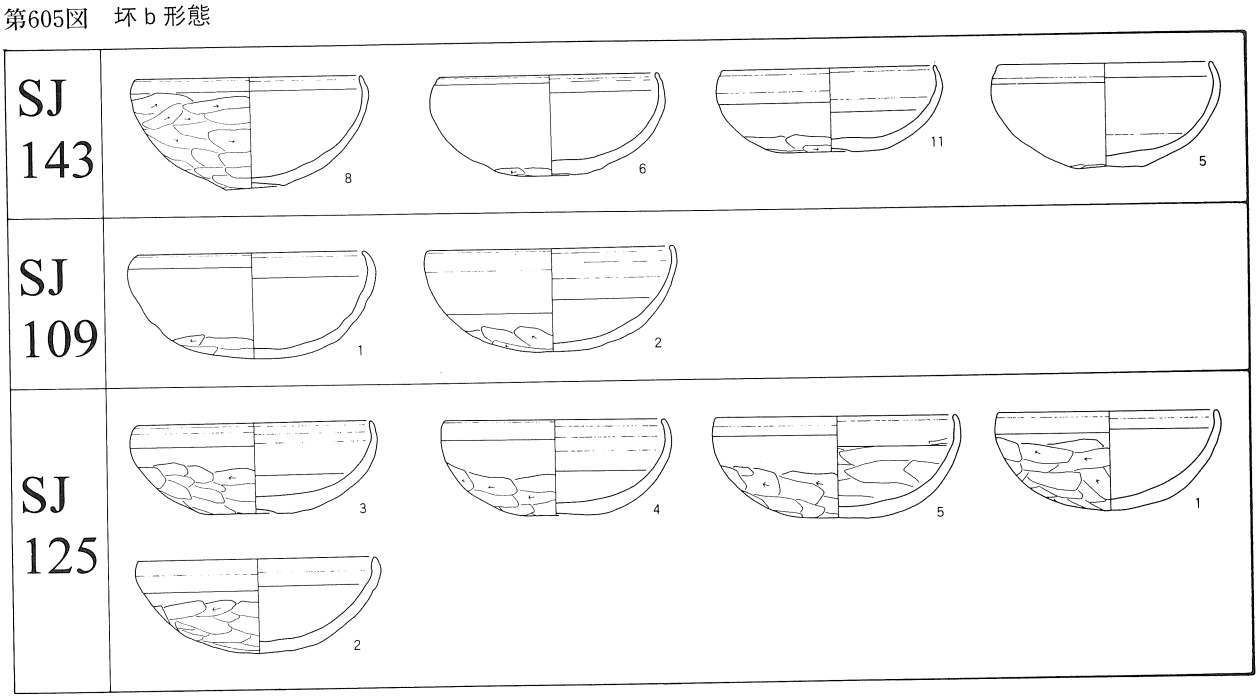
赤彩された盌形の坏の編年的な位置づけが、前年度の報文で問題となっていた。この形態をもった坏の編年の難しさは、先に述べたように、基本体に近い省略形の坏である事に起因する。

本年度の調査範囲からも、SJ-125からまとまって検出されているので多少検討してみたい。

1　SJ-125の組成と位置

SJ-125出土の坏類は、主として１～５の盌形の坏、７～９の有段口辺坏、10～12の北武蔵型坏によって構成されていた。

第605図　坏ｂ形態



先年度の吉田による報文中で編年的位置について問題が提起され、有段口辺の坏との共伴関係に留意しつつも最終的には、集落第Ⅰ期の所産とし、和泉式系の土師器の様相を残す坏として扱われた（SJ-83-1～12)。

SJ-125で認められた有段口辺坏（7～9）や北武蔵型坏（10～12）も、1～5の盌形の坏とは、時期を異にすると考えられる。本遺跡で調査時に認められた現象として、鬼高期でも古い様相を持った住居跡で、覆土の上層部分に真間期の遺物が、一括投棄と考えられるような状況で検出されたことをあげることが出来る。本住居跡の遺物の出土状況もこのようであり、本来的に住居跡に帰属する坏類は1～5であり、7～12は覆土上層への一括投棄であると考えられた。

このことは、重複関係からも見て取ることが出来る。SJ-125は、SJ-124との重複によって覆土のおよそ1/4程度を失っていた。土層観察によってSJ-125よりも新しいことが明瞭なSJ-124出土遺物を見てみると、それよりも古いSJ-125が真間期の所産ではないことは明瞭である。

次に、SJ-125出土坏類の1～5を先に述べた坏ｂ形態と比較してみよう。

赤彩が施されていたことは、SJ-143、109同様であった。ヨコナデは、SJ-109よりも更に強くなされている個体が散見された。ヘラケズリに関しては、ヨコナデ同様にSJ-109よりも更に多用されていた。胎土の表面の状況も、SJ-143のような緻密なものではなく、SJ-109よりも更に粗雑になっていた。口唇部の形態も、特徴的であった。SJ-143では丁寧に指で仕上げられ、やや薄く端整に作られていた。SJ-109では、回転に依存して成形を行う傾向が強く現れたため、口唇部はやや厚くなり、内面のヨコナデが口端部まで届いていないために、口唇部内面はやや玉縁状に肥厚する傾向がわずかに認められた。SJ-125では、この傾向が更に顕著で、口唇部内面はおしなべて丸く肥厚していた。

以上の観察結果から、SJ-125出土の坏は、SJ-143、SJ-109よりも後出的であるとする事が出来る。そして、類似性から単純に見比べるなら、SJ-109よりもかなり後出的な傾向が認められる。(大屋)

3．第9号性格不明遺構について

第9号性格不明遺構（以下SX9）からは、7世紀後半を中心とした土師器・須恵器の破片が多量に出土し、この地域の土器編年を考える上での良好な一括資料を

得た。以下、このSX９について、一部本文と重複するが、遺構の特徴及び出土土器について考察したい。なお、遺構・遺物の詳細については、事実記載を参照されたい。

１　遺構について

SX９の平面の形状は、複数の土壙が重複したような不整形であったが、覆土は連続していた。

覆土は、概ね黒褐色土が主体であったが、特に第３・４層は、それぞれ炭化物と灰、焼土と灰の互層となっていた。遺物は、３層の上面付近から出土した。

遺構は、覆土の状況から、この場で火を焚いた可能性があり、遺構の性格については、調査中は、土師器焼成遺構の可能性を想定したが、出土遺物には小破片が多いこと、土師器と須恵器が共伴すること、土師器の坏類に複数の系統が認められることなどから土師器焼成遺構とは考えにくい。

出土遺物は、焼土・炭化物層の上面から出土しており、また、土器には二次焼成を受けたものが殆どないことから、この場で木材等を燃やした後、一括して投げ込まれたものと考えられる。

２　出土遺物について

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が多量に出土した。特に土師器坏には、複数の系統が認められた。ここでは、土師器坏を中心に分類を試みた。なお、この分類は、SX９の出土遺物を整理する上での便宜的な分類であり、遺跡全体の出土遺物の分類とは異なるものである。以下、各分類を列記する。また、( )内の遺物番号は、本文中第521・522図に対応する。

坏A類　丸底で口縁が内屈するもの（１～９）

坏B類　丸底で口縁部に段を有するもの（10～13）

坏C類　丸底で口縁部は短く立ち上がり、口縁部と体部の間に弱い稜を有するもの（14～21）

坏D類　丸底で口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部と体部の間に稜を有するもの（22～25）

坏E類　口縁部が緩いＳ字状となるもの（26）

坏F類　底部は偏平気味で口縁部は直線的に立ち上がるもの（27）

坏G類　椀形の坏（28）

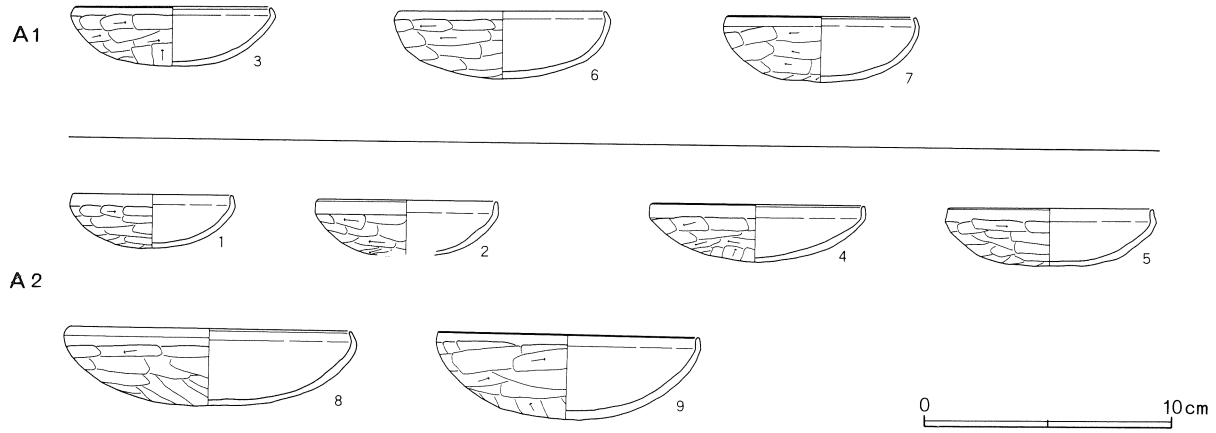
坏H類　内湾気味で、口縁部は短く立ち上がり、体部との境に稜を有し、暗文を有するもの（29・30）

A類は、北武蔵を中心に、７世紀中葉以降に出現する、いわゆる内屈口縁坏と考えられる。口縁部の形態は、屈曲の強いもの（Ａ１類、３・６・７）、内湾気味に直立するもの（Ａ２類、１・２・４・５・８・９）があった。(第606図)

Ａ１類は、口縁端部の屈曲は強く、端部はしっかりと調整され、口縁部が肥厚し、玉縁状になる部分もあった。坏の法量は、口径10～11cmに限られた。

Ａ２類は、Ａ１類に比べ屈曲は弱く、屈曲しながら

第606図　SX９出土坏Ａ類の細分



も上方へ立ち上がる。法量には、口径10cm未満のもの、10～13cm未満のもの、14～15cmのものがあった。口径15cmを超える大型の坏は含まれていなかった。また、底部はヘラケズリ、ケズリは口縁部直下まで及んでいた。

B類は、いわゆる有段口縁坏である。口径は10cm～11cmと小型である。埼玉県北部では、主に妻沼低地を中心とした大里地域で出土する土器である。

C類は、系統の不明な土器群である。鬼高系の模倣坏の小型版と見ることもできるが、口縁部は僅かに内傾し、稜は弱い。口径は全て10cm以下と小型で、体部下半部はヘラケズリ、上半部は指押えと思われる凹みが残っていた。

D類は、須恵器模倣坏の系譜を引く坏に似るが、全て口縁端部に沈線を有しており、また赤彩される等、県内では比企・入間地域で主体的に出土する土器で、比企型坏の影響下にある土器群と思われる。

E類は、いわゆる比企型坏と思われる。口縁部はS字状に外反する。口縁部と底部の境は明確な稜を持たず、丸みをもっている。小破片が多く、全体の形状を復元できるものはなかった。口縁端部には沈線を有し、赤彩が施されていた。

F類は、胎土は比企型坏と似るが、口縁部は直線的に立ち上がり、底部は偏平気味であった。小破片が多く、全体の形状が復元できたものは少ないが、全て口縁端部に沈線を有し、赤彩が施されていた。

G類は、出土点数が少なく、全体の形状を復元できたものは少ないが、口縁端部に沈線を有し、赤彩が施されていた。

H類は、深身のものと浅身のものがある。口縁端部は短く立ち上がり、内面に暗文が施されていた。

以上土師器坏の分類を試みたが、坏の破片は、形態の明確な口縁部の破片は、総数で358点出土した。このうち、A類は128点、B類は81点、C類は65点、D類は22点、E類は22点、F類は5点、G類は5点、H類は35点であった。この中で主体的なのはA類・B類となる。しかし、これらは、口縁部の破片数で、個体数ではない、したがって、必ずしも器種組成の実態を表しているものではない。出土した土器は、小破片が多く、個体数を導き出すことはできなかった。

これらの土器群は、出土状況から、一括性の高いものと考えられ、本遺跡あるいは行田市周辺地域における古墳時代終末の土器編年の軸となりうるものと考えられる。

今回は、本遺跡の出土土器全体の編年を行わなかったため、ここでは、SX9出土土器の、特に坏A類を中心に北武蔵での編年的な位置付けを試みてみたい。

北武蔵では、地域の土器編年を考える上で良好な遺跡として、本庄市今井遺跡群G地点・上里町八幡太神南遺跡・同立野南遺跡（富田・赤熊1985）がある。

このうち、今井G地点2号住居跡（以下今井G2・八幡太神南A地点1号住居跡（以下八幡A）・今井G地点5号住居跡（以下今井G5）・立野南2号住居跡（以下立野南）出土土器は、北武蔵における土器編年の基準資料となっている。

これらは、今井G2→八幡A→今井G5→立野南の順に変遷し、7世紀後半～末段階に位置づけられる（赤熊1988、坂野・富田1996）。

内屈口縁坏については、鈴木徳雄氏・赤熊浩一氏の分析に従えば、口縁部の形態は、内屈→内湾→直立、体部の形態は深身→偏平化という変化をたどる（鈴木1984、富田・赤熊1985、赤熊1988）。

SX9坏A1類・A2類はとしたものは、赤熊氏の分類では、坏B類として分類されているものに相当する。赤熊氏は、今井G・八幡A・立野南の出土土器の分析に際して、坏B類とした内屈口縁坏を、八幡Aの段階で、今井G2から続く口縁部の屈曲の強いものと、新たに口縁部が屈曲しながらもやや上方へ立ち上がる系列を設定している。SX9の内屈口縁坏は、その形態の特徴から、A1類は前者（仮にB類左列とする）に、A2類は後者（仮にB類右列とする）に相当するものと考えられる。

今井G2坏B類は、口縁の屈曲が強く、端部は内外面ともしっかりと調整され、玉縁状に肥厚する特徴を

持っている。

一方、今井G２から続く八幡AのB類左列では、屈曲・調整が弱い。

この２者とSX９のA１類と比較した場合、口縁部の屈曲は、今井G２よりやや上方に向き、端部の調整も、弱く、八幡Aにより近い形態を持っている。

また、八幡AのB類右列と、SX９A２類と比較した場合、口縁部の屈曲の度合いは、SX９の方がやや内側に向くため、八幡Aより前に置くことができるが、差はあまりない。

赤熊氏の提示した編年表では、今井G２の段階に、SX９A２類の形態の坏は提示されていない。しかし、今井G２出土遺物を観察すると、上方に立ち上がる、SX９A２類及び八幡AのB類右列に相当する一群が抽出できる(第607図)。これらを比較すると、SX９A２類の口縁端部の立ち上がりは、八幡Aにより近い形態を取りながらも、今井G２と八幡Aの中間形態となる。

このことは、SX９A２類は、八幡AのB類右列の祖形であった可能性を示唆するものであり、今井G２で新たに抽出したSX９A２類に相当する一群は、更にその祖形であった可能性がある。したがって、赤熊編年のB類右列は、今井G２ B類から分岐したものではなく、今井G２段階で、少なくとも２種類の系列が共存していた可能性がある。

以上SX９A１類・A２類について述べてきたが、A１類・A２類は、今井G２より新しく、八幡Aより古いか、或いはほぼ同時期のものである可能性がある。

一方、SX９では、土師器と共に、少量ではあるが、搬入品（湖西産か）と思われる須恵器が出土した。

須恵器には、坏・蓋・甕・長頸瓶があるが、形状の復元できたものは、坏と蓋のみであった。

坏は、蓋受けの立ち上がりを有するもの（43）と、蓋受けを持たないいわゆる「逆転後」の坏（44）が共存する。口径は、２点とも10cm以下と小型であった。

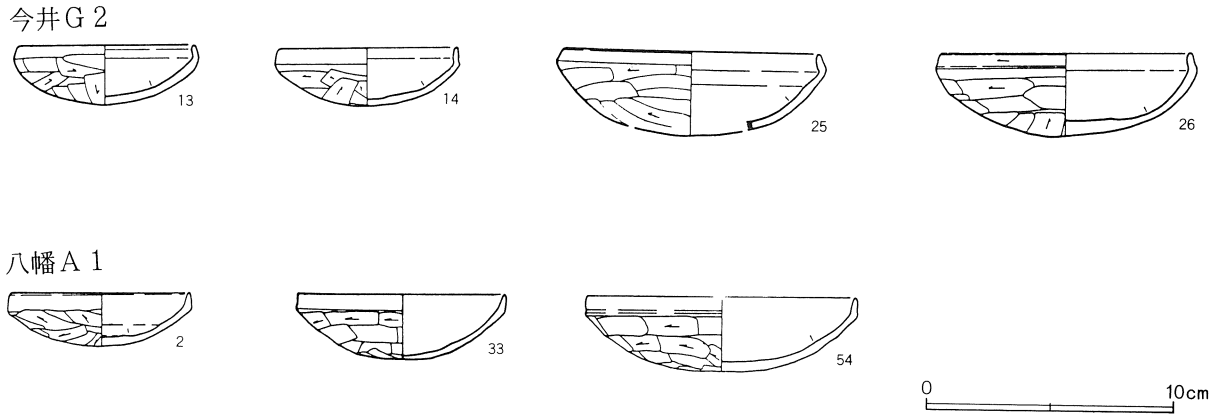
蓋は、かえりの無いもの（45・46）と、かえりの有るもの（47・48）が共存する。かえりの有る蓋にはつまみが無い。つまみの剝落した痕跡は認められなかったため、つまみを持たない蓋であった可能性もある。口径は４点とも10cm以下と小型であった。

今井G２・八幡Aからは、須恵器坏・蓋が多量に出土したが、合子状の蓋・坏と、いわゆる「逆転後」の蓋・坏が共存する点で、SX９と共通する。

今井G２・八幡Aの場合、いわゆる「逆転後」の坏が主体的である。SX９は、須恵器の出土量が少なく、組成比を導き出すことはできなかったが、かえりの有る蓋には、つまみを持ったものが含まれておらず、出土点数が少なかったため、判断できないが、八幡Aの須恵器の組み合わせより古相を示す可能性がある。

また、SX９出土須恵器坏・蓋は、胎土の特徴から湖西産の可能性があるが、口径10cm以下で、合子状の蓋・坏の中では、最も小型化する段階のものと考えられる。「逆転後」の坏・蓋も、最も小型のものになると考えられ、それらが混在する段階は、後藤健一氏の編年(後

第607図　SX９坏A２類に相当する土器



藤1989）によれば、湖西第Ⅲ期の古い段階に相当するものと考えられる。

今回は、坏A類を中心に、主に武蔵北部の編年との対比を行った。既に見てきたように、SX 9坏A類は、今井G 2段階より新しい可能性を指摘できた。しかし、SX 9では、有段口縁坏、比企型坏、在地の暗文土器等、多種多系統の土師器坏が出土しており、これらの分布の中心地域との対比を行っておらず不十分な検討となってしまった。今後の課題としたい。　　（栗岡）

4．北武蔵型坏の系統について

1 北武蔵型坏の既存の編年

鈴木による北武蔵型坏の型式論的研究

北武蔵型坏については、鈴木徳雄の「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」（1984）によって、間断のない変遷の傾向が示された。この中で鈴木は、須恵器模倣坏である坏A形態に対して、北武蔵型坏を坏B形態とし、丸底内屈口縁形態と呼び、更に、甕2類から甕5類に各々共伴する坏類を抽出して、

a　甕2類に伴う坏：小さく内屈する口縁を有し、口径11～12cm程度のものが一般的であり比較的小ぶりで、丸底を呈する

b　甕3類に伴う坏：甕2類に伴う坏に類似しているが、口径は12～14cmが一般的であり、また口縁の内屈部の長さが前類より長く明瞭である。

c　甕4類に伴う坏：甕2～3類に伴う坏に認められた口縁の内屈は弱まり、やや直立気味となり、あるいはこの屈曲部の内面は直立し外面のみでこれを表現する。口縁内屈部下にゆるい屈曲点（腰）を有し丸底を呈する。

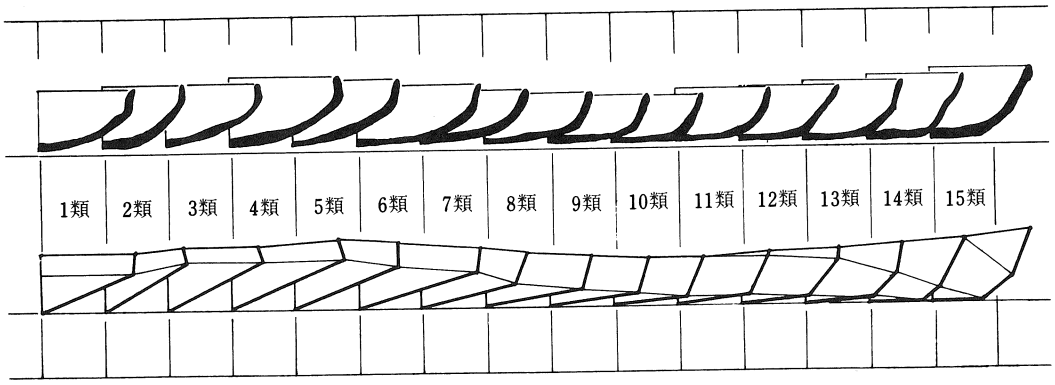
d　甕5類に伴う坏：口縁の内屈が4類よりも更に弱まり口縁外のみヨコナデによって内屈部を表現し、口縁は直立傾向が顕著である。丸底を呈するとはいえ体部屈曲点も前類より下方に存在し、より扁平である。

のように、変遷傾向を明示した。

この鈴木の論考は、土師器の編年のみを目的としたものではなく、範型論に代表されるような、分析者の存在位相に無批判的な型式論に対する批判であると共に、型式と年代の明瞭な弁別、人為的な製作物に対しての連続的な形態変遷とその要因の想定、および画期の抽出などを行い、操作の比較的行い易かった土師器を題材にして、型式論および型式論的取り扱いを整備しようとする試みであった。

ここで注目しておきたいのは、北武蔵型坏を、模倣坏との形態の間に飛躍があるとしながらも、全く別系統のものではなく、鬼高系の有稜の模倣坏を揚棄して成立したものである、と系統関係を模倣坏の延長上でとらえた点と、北武蔵型坏出現以降は、単系的累積的変化を辿るもので、異系統の複合・重層は認めがたいとした点である。

第608図　鈴木による動態的変遷模式



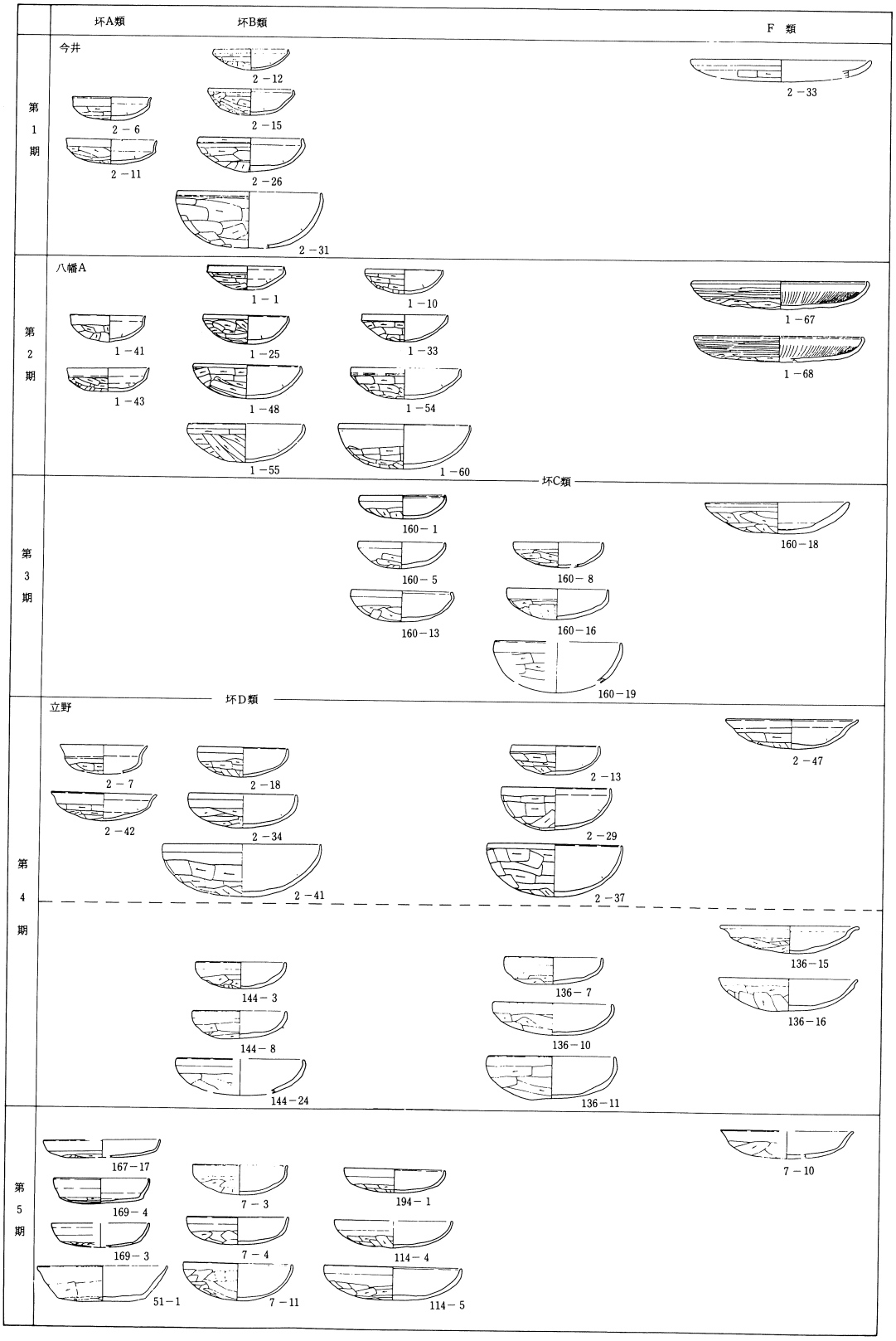
赤熊による編年案の提示

1985年及び、1988年には赤熊浩一が、今日の該期の基準資料となった一連の遺跡群の報告を行い、先に鈴木の示した変遷傾向の追試を行った。これらの豊富な

出土遺物の検討によって行われた、北武蔵型坏についての赤熊の主張の中で重要な点は、その起源を金属鋺模倣の坏であると想定したこと、成立当初から法量分化していると認定したこと、変遷傾向の異なるものが共伴すると見做したこと、などであった。

前二点は、北武蔵型坏が律令的な土器様式であると

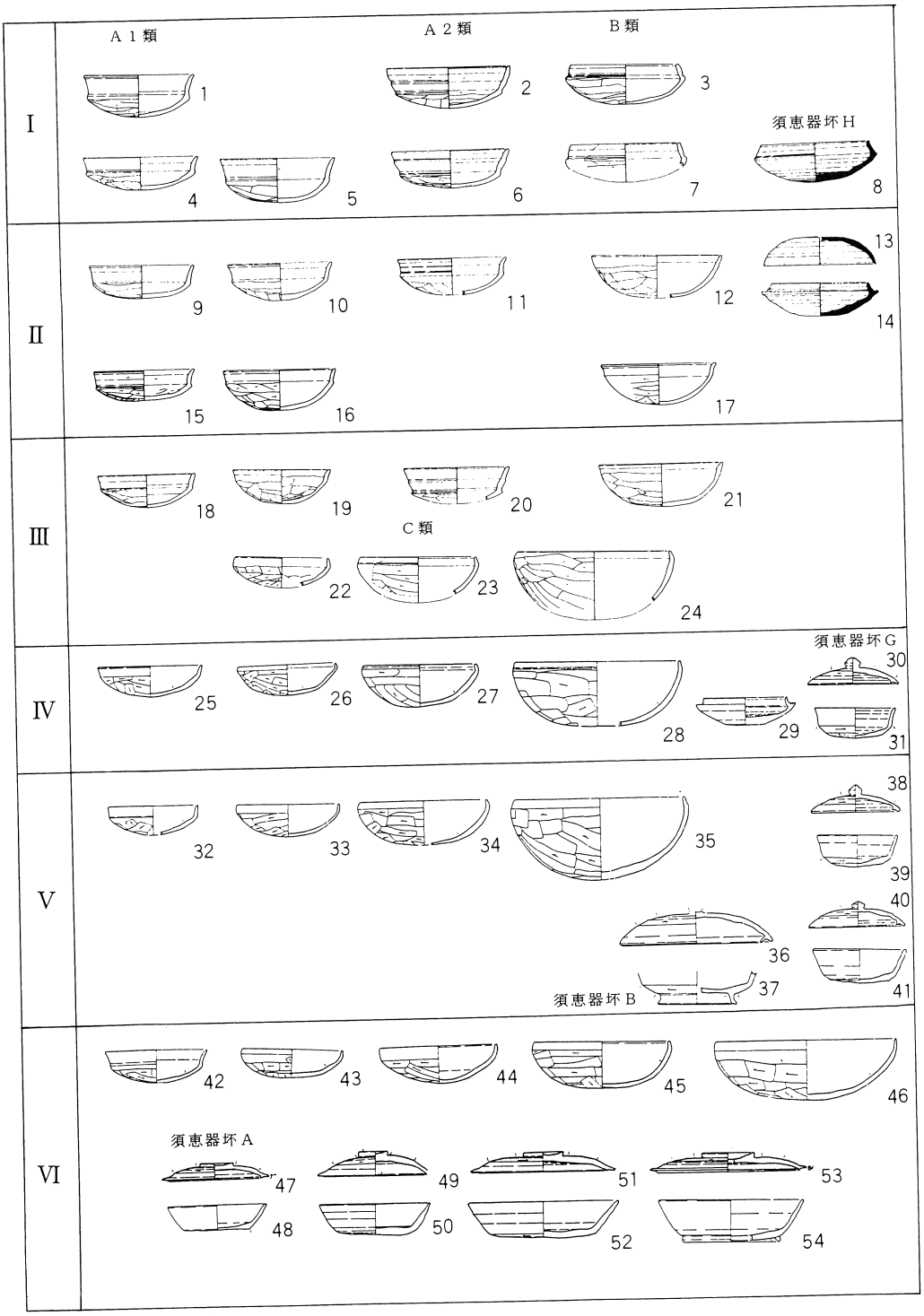
第609図　赤熊による編年図



いう前提から導かれたものである。

後者は、鈴木の提示した変遷傾向を実際の一括資料を用いて追試して行く中で、変遷傾向に合わないものを、側系統と認定して、齟齬解消を図ったことによる。つまり、今井G２→八幡太神南A１→将監塚・古井戸H160→立野南２といった編年的な序列を提示する(第609図)中で、鈴木によって提示された北武蔵型坏の変遷傾向を、赤熊はその口辺部形態から屈曲→内湾→直立と抽象化し、一括出土遺物の中でこの傾向に合致しないものを、随時側系統として派生（例えば将監塚・古井戸H160での坏C類）させた編年図を作成することとなった。

第610図　富田による土器様相



第611図　坂野・富田による年代案

北関東	標　識　遺　跡	飛　鳥	標　識　遺　跡	畿内系土師器
Ⅰ(古)	今井川越田42住	Ⅰ　600	小墾田宮ＲＤ050	
Ⅰ(新)	今井川越田42住	Ⅱ（古）	川原寺 SD02	
Ⅱ(古)	今井川越田98住	Ⅱ（新）640	山田寺整地土	国分僧寺・尼寺中間Ｊ区14住
Ⅱ(新)	今井川越田５住	Ⅲ	飛鳥池下層ＳＤ809 坂田寺ＲＧ100・雷丘北方ＳＤ3580	国分僧寺・尼寺中間Ⅰ区58住
Ⅲ	今井川越田33・55・58・74・87住			
Ⅳ(古)	今井遺跡群Ｇ地点２住	Ⅳ（古）660	水落石組体積層	
Ⅳ(新)	八幡太神南Ａ地点１住	Ⅳ（新）	大官大寺下層ＳＫ121	
Ⅴ	今井遺跡群Ｇ地点５住	Ⅴ（古）675	藤原宮ＳＤ1901Ａ下層	
Ⅵ	立野南２住	Ⅴ（新）695	藤原宮ＳＤ170	荒砥天ノ宮Ｂ６住

富田による北武蔵型坏の遡及

1996年の論考の中で富田和夫は、今井川越田遺跡第33・55・58・74・87号の各住居跡出土遺物を取り上げ、赤熊編年で古い様相と位置づけられた今井Ｇ２以前の段階で、既に半球形の丸底椀形態のものが定量組成に加わるとした。これは北武蔵型坏の出現期を遡及させた試みであった。口縁部内面が肥厚して内傾する面をもち、銅鋺を模倣したと思えるものが認められることや、口縁部形態に多様性が認められる事なども指摘し、こうした丸底椀形態が組成に加わる中から北武蔵型坏が出現したと推定し、この時期に金属器指向を反映した器種組成が認められるとした。また、小形の模倣坏についても、北武蔵型坏の影響であるとした。

編年に関わる二三の問題

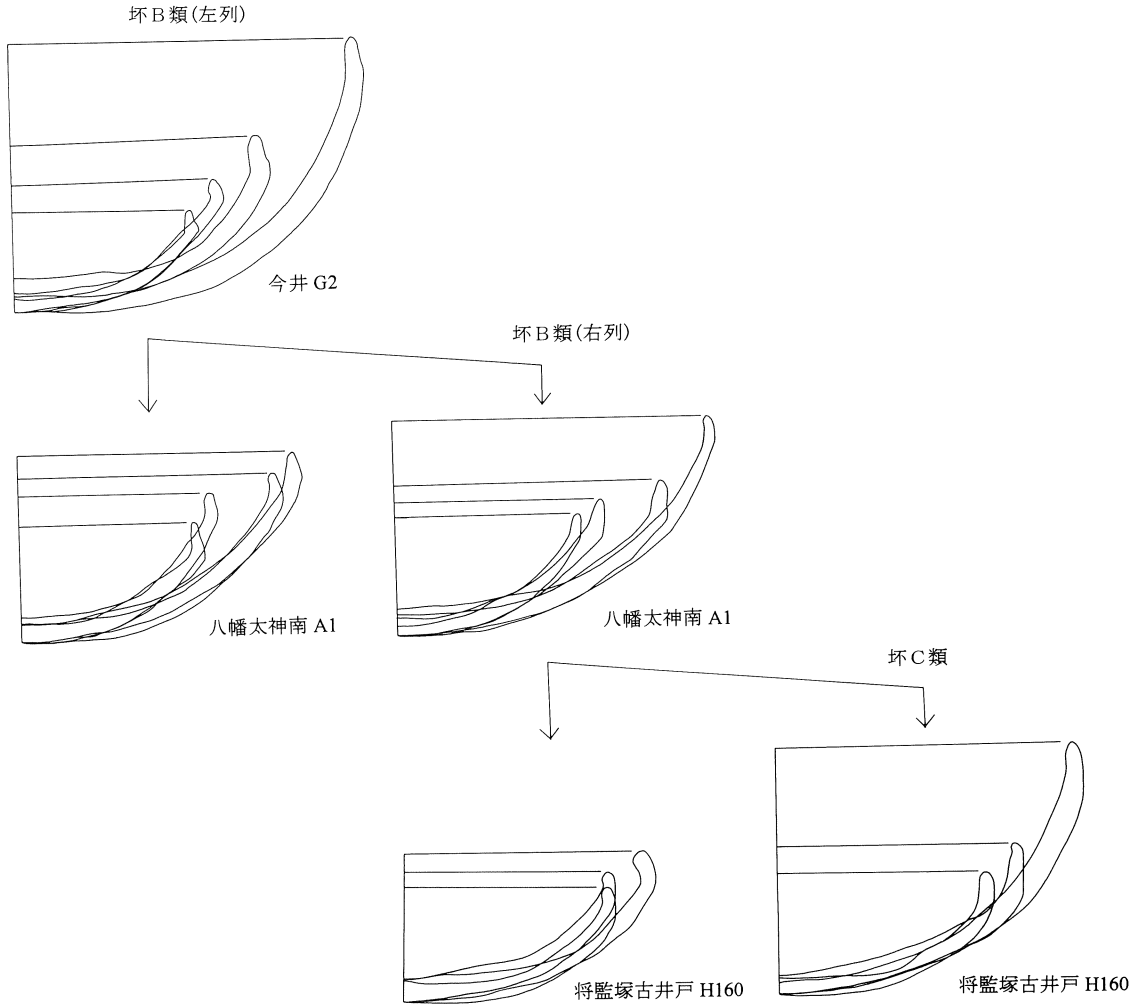
北武蔵型坏は、編年の基準資料での遺物量も多く、変遷傾向も、屈曲→内湾→直立（あるいは内屈→内湾→直立）と抽象化されているにも関わらず、具体的な出土遺物が編年的に位置づけにくいという特性を持っている。

屈曲→内湾→直立といった変遷傾向について、数量比的な傾向が認められるように見えるが、各形態の単独出土資料の蓄積は皆無に等しい。これは長時間の間に屈曲→内湾→直立といったように形態変遷したものが、消費の場で混在して使用されていると考えるには無理がある事を示している。

坂野・富田による、北関東第Ⅳ段階（古）今井Ｇ２→北関東第Ⅳ段階（新）八幡太神南Ａ１→北関東第Ⅴ段階今井Ｇ５といった変遷に基づく年代案の中では、Ⅳ段階開始からⅤ段階終焉までにおよそ40年間の時間幅が与えられている。40年の時間幅の中で、口縁部形態が内屈→内湾→直立といった変遷過程をたどるとすれば、今井Ｇ２、八幡太神南Ａ１、今井Ｇ５と言った各期の基準資料で、形態分類した遺物が、単独で検出されない理由が説明できない。須恵器よりも遙かに消費傾向の著しい土師器が、内屈→内湾→直立といったように単系的に変遷するならば、集落等の実際の消費現場で、混在して検出される事に対して、合理的な説明を加えることは非常に困難である。

つまり、実際の一括資料に絶えず内屈～直立に至る様々な形態のものが混ざっているのである。これらのことは、複数の系統が存在し、単に屈曲→内湾→直立といった形態の変遷傾向では括れない様相であるとい

第612図　赤熊による北武蔵型坏の系統関係



うことに他ならない。

ここで再び赤熊の提示した編年図を見てみよう。第612図は、1988年の編年図をもとに、1～3期までの坏B・C類を拾い出し、断面形態を累積させて、赤熊の主張する系統関係に沿って配列したものである。

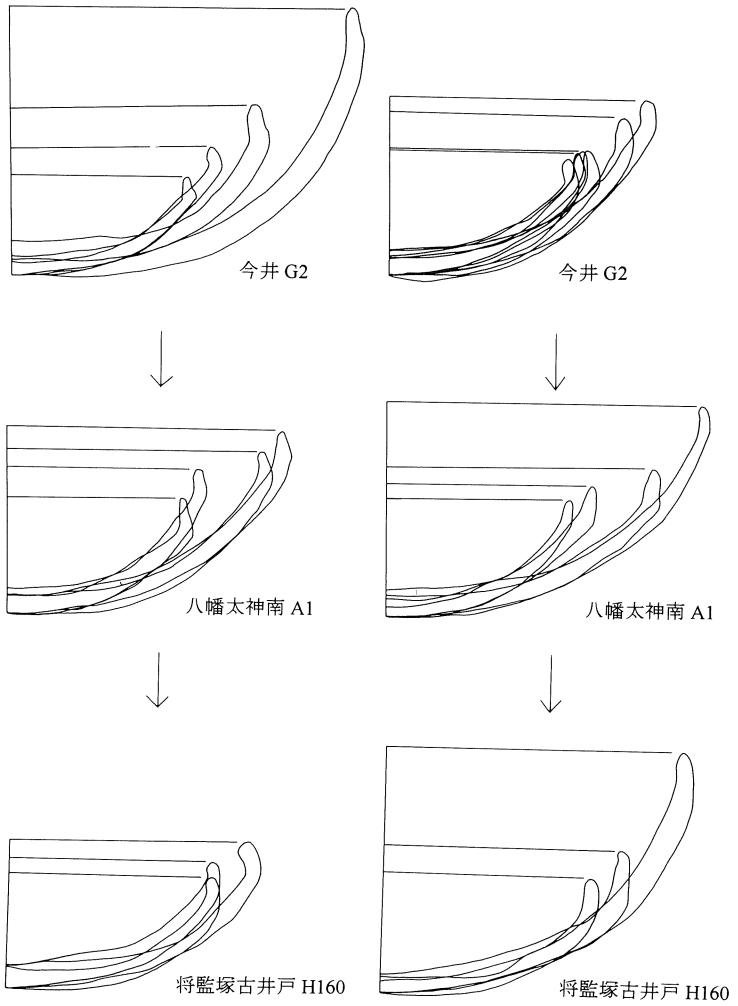
第一に問題となるのは、八幡太神南A１段階での坏B類右列から、将監塚・古井戸H160段階の坏B類右列と、坏C類が生成するという点についてである。断面形態で見る限り、将監塚・古井戸H160段階で出現したとされる坏C類は、前段階での坏B類右列に連続性が良いように感じられ、将監塚・古井戸段階の坏B類右列に置かれたものは、むしろ前段階の坏B類左列と連続性が良いように見える。

このように、八幡太神南A１段階から、将監塚・古井戸H160段階にかけて、二つの系統（坏B類左列・同右列）が連続的に変遷する可能性が出てくれば、第二の問題として、今井G２段階で坏B類右列に該当する遺物が存在するのではないかということが考えられる。今井G２段階での坏B類左列は、一括資料の中から恣意的に選び出されたものであり、選び残された大多数の土器の中に、坏B類右列に該当するものがあるのではないかという事が考えられる。

以上のように系統関係について修正を加え、新たに今井G２の編年表に取り上げられていなかった遺物の中から、坏B類右列の系列に該当しそうな個体を選び出して作成したのが第613図である。

右列、左列ともに、各段階を通じて、連続性が良くなっている。ただし、まだ異系統の個体が混入している可能性が考えられる。従って、系統関係をより純粋な形で抽出し、北武蔵型坏の系統関係をより鮮明化し、

第613図　系統関係に修正を加えた北武蔵型坏



編年作業をより客観化するために、基準資料に立ち返って、検討を行ってみたい。ここで言う基準資料とは、今井Ｇ２、八幡太神南Ａ１、将監塚･古井戸Ｈ160などである。

2　今井Ｇ２出土坏類

坏類の観察

今井遺跡Ｇ２号住居跡出土の坏類は様々な様相を含んでいたが、大別すると、

・模倣坏

・口唇部内面が玉縁状に肥厚するいわゆる古い様相の北武蔵型坏

・模倣坏と北武蔵型坏の中間的な様相で、模倣坏よりは口辺部が短く、古い様相の北武蔵型坏よりは口辺部が明瞭で口唇部内面が玉縁状を呈していない坏類

・その他の坏類

に分けることが出来た。

以下では便宜的に、模倣坏を坏ａ、古い様相の北武蔵型坏を坏ｃ、模倣坏と北武蔵型坏の中間的な形態のものを坏ｂ、以上に属さないものを坏ｄと呼称しながら、各々について観察してみた（以下で指示する図版番号と遺物番号は原典のものである）。

坏ａ

模倣坏は、第66図６・７・11等である。これらは小ぶりではあるが模倣坏の一般的な特徴を備えていた。模倣坏の一般的な特徴とは、形態では、口辺部と底部が明瞭に分節化されていることであり、調整では、口辺部がヨコナデされていることであり、整形では、底部外面がヘラケズリされていることである。

口辺部のヨコナデは強く、下端が稜線となっていた。口唇部のヨコナデも強く、外面では端部上面が隆起し、口辺部のヨコナデ上端に段が認められた。つまり、口辺部ヨコナデの上下両端は明確な段によって画されていた。

口径では、小（６･７）と中？（11）が認められた。

坏ｃ

北武蔵型坏は、外面では底部から口辺部まで器形の曲線が連続し、形態上からは、口辺部が明確に作り出されていなかった。内面も同様であるが、唯一口唇部が玉縁状に肥厚していた。

口辺部のヨコナデは、下端に稜線が作り出されておらず、下端が不明瞭であった。口唇部のヨコナデは内面の肥厚とともに、口端部外面でも僅かな粘土の肥厚による段が認められた。

口径では、小（15～19）のみが認められた。

坏b

坏bは、模倣坏と北武蔵型坏の中間的な存在であった。口辺部を作り出した北武蔵型坏ともいえるし、口辺部を屈曲によって表現した模倣坏ともいえるようなものである。

口辺部は屈曲により明瞭に作り出されていた。口辺部ヨコナデは、外面では下端に僅かな段を作り出していた。口唇部ヨコナデでも、外面端部に僅かな粘土の肥厚による段が認められた。

口径では、小（13・14・21）、中（23・25・26）が認められた。

模倣坏の製作工程

ここで、模倣坏の製作工程を考えてみよう。従来土器作りを行っていなかった者が、北武蔵型坏の製作に携わったのであれば、全く新しい製作工程をとっている可能性もあるが、模倣坏の製作者が北武蔵型坏の製作に携わったのであれば、鈴木の指摘するように、北武蔵型坏の製作工程もまた、模倣坏の製作工程を基として成立していたと考えられるからである。

今井遺跡G２号住居跡から出土した模倣坏は、小ぶりで口辺部も短い（第66図６・７・11）。これらの製作工程は、原則的には回転台に設置した粘土円柱上に、概ね口辺部に相当する部分の粘土紐を置き、円柱の粘土と一体化させながら、坏形に成形したと考えられる。

この時に、口辺と底部の境界である器形の変換点と、粘土紐と粘土円柱の境界を、必ず、一致させずにずらすことを原則としている。器形の変換点と粘土の境界が一致するならば、当該箇所に強度上の問題が発生するからであると考えられる。従って、粘土の境界は、口辺部の下位か、底部の外周、希に口辺部の中位から上位に認められることがある。

具体的な製作工程

具体的な成形過程は、

①粘土円柱上に粘土紐を設置する。

②粘土円柱に上から押圧を加え、凹みを作りながら口径を広げて行き、この工程の中で、粘土紐と一体化させ、椀形の基本体（模倣坏基本体）を作る。

③基本体の予定口辺部を二指で挟み込みヨコナデしながら、より垂直に立ち上げ、予定底部と形態的に分節化する。

④基本体の予定底部の外周を二指で押圧し、予定口辺部と形態的に分節化する。

⑤予定口辺部を再び二指で挟み込み、ヨコナデして、外反する口辺部を作り出す。

⑥口唇部を二指で挟みヨコナデして仕上げる。

⑦粘土円柱から切り離す。

⑧一定の乾燥の後にヘラケズリを行う。

といった、工程が想定される。

これらの各工程の中で、器面には適宜ナデとヨコナデが施され、製作痕跡は残っていない事が多いが、これらの工程の痕跡が認められることもある。

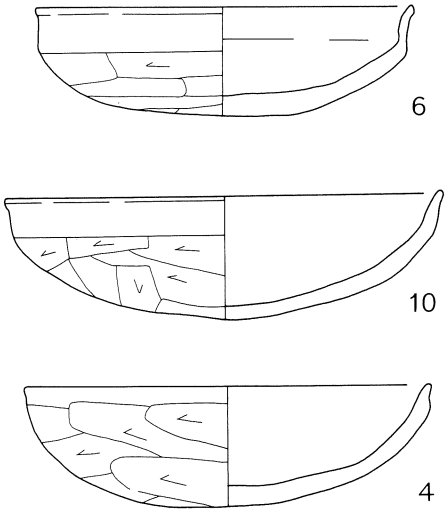
例えば、第66図７の個体を詳細に観察すると、底部外周に粘土の境界が認められ、口辺部に粘土紐の端緒と終端の繋ぎ目、更に、底部外周に予定底部の外周を二指で押圧した痕跡が明瞭に認められた。

工程の省略

これらの工程の中で、基本体が出来たあとの、⑦の切り離しまでの間に存在する③・④の工程は、口辺部を明瞭に分節化する工程であり、省略が可能である。これは口辺部が不明確になってくる須恵器の形態変化の方向性とも対応している。

このようにして模倣坏製作の具体的な工程を考えて

第614図　模倣坏と省略形



みると、先ほどの分類でその他とした個体の中に、模倣坏の製作工程の中から、その出現を説明できるものが存在する。

③での、基本体の予定底部の外周を二指で押圧し、予定口辺部と形態的に分節化するといった工程を省略した個体が、第66図10であると考えられる。

また、③のみならず、④での、予定口辺部を再び二指で挟み込み、ヨコナデして外反する口辺部を作り出すといった工程までも省略した個体が、第66図４であると考えられる。これは、③・④の両工程を省略しているので、より基本体に近い形を残していると考えられる。

いずれも、椀形の基本体に対して⑤以降の工程は経ているので、口辺部と底部の分節化は辛うじて認められる。

坏ｂの製作工程

このように考えたとき、先ほどの坏ｂは、基本体成形後の工程について、④工程の省略を前提として、③工程の際に、予定口辺部の屈曲を、予め強めに作り出したものであると考えられる。即ち、工程の省略が、その結果としての製作物を経て、再び工程の中でとらえ返され、前工程の部分的な強化で補われたものであろう。

坏ｃの製作工程

坏ｃは、形態的に口辺部を作り出す意識にかけており、③と④の両工程が省略されている。基本体の予定口辺部は、予定底部と連続的な形態で緩やかに外側を向いており、これに対して⑤の口辺部ヨコナデと⑥の口唇部ヨコナデをおこなって、調整による擬似的な口辺部を作り出している。この結果、基本体の端部は、内側に玉縁状に肥厚するとともに、口辺部全体が明瞭な形態の変換点無く屈曲している。従って、坏ｂでは口辺部が強く屈曲するものの口唇部内面が玉縁状のものは出現せず、坏ｃでは、口唇部内面が玉縁状になるものの、強く屈曲はしないし、口辺部外面下端にも稜線が認められないと考えられる。

形態構成の弛緩

これらの現象は、模倣坏製作工程中での工程の簡略化であり、簡略化の一要因として、口辺と底部を明瞭に分節化すると言った、古墳時代的な土器の形態構成に対する弛緩があげられる。その意味では、須恵器とも連動しているが、これを以て須恵器模倣とするべきではない。

今井Ｇ２でその他とした坏ｄ類が多く認められるのは、このような土器の形態構成に対する意識の弛緩から来るところの、工程の簡略化が多様な形で現れたためであると解釈できよう。

前段階で出現した丸底椀

このように考えるならば、富田（1996）によって川越田33・58・74・87などから抽出され、半球形の丸底椀形態のものと呼ばれている一群の土器は、銅椀を模したものではなく、模倣坏製作工程の中で特定工程が省略されて、基本体に近い形で焼成されたものであると考えられよう。従って、こうした丸底湾形態が新たに出現して組成に加わる中から北武蔵型坏が出現したと見るべきではない。又、これらの口径の多様性も、模倣坏の口径の多様性と意味は変わりなく、金属器の法量分化とは異質なものである。この段階での模倣坏製作工程での工程省略は、今井川越田第78号住出土坏類からも明瞭である。

3　八幡太神南Ａ１出土坏類

坏類の観察

八幡太神南遺跡Ａ１号住居跡出土の坏類も様々な様相を含んでいたが、前者同様に大別された。

坏ａ

模倣坏は、最終工程の口唇部のヨコナデが簡略化される傾向にある。このために、口唇部外面の段は認められなくなる傾向がある。

口径では、小（第28図37・43）と中？（第28図44）が認められた。前段階よりやや口径が大きくなる傾向が認められた。

坏ｃ

北武蔵型坏は、口唇部がやや厚くなり、模倣坏同様

に、最終工程の口唇部のヨコナデが簡略化される傾向にある。このために、口唇部外面の段は認められなくなる傾向がある。

口径では、小（第28図７・15・22・25・27・31)、中（第28図47・48、第29図52・53・57)、大（第29図60）が認められた。前段階よりやや口径が大きくなる傾向が認められた。

坏ｂ

坏ｂでは、口辺部ヨコナデ下端の稜線が認められるものが極めて少なくなり、これによって、ヘラケズリが口辺部調整の下端より上に侵入し、ヘラケズリ上端によって画された稜線が、やや上がってくる傾向が認められた。口辺部の曲げによる作り出しがやや弱くなり、口辺部と底部の境界がやや不鮮明になる傾向が認められた。

口径では、小（第28図１・２・３・５・６・８・10・12・13・14・16・17・21・23・26・30・32・35)、中？（第29図51・56)、大（第29図55・59）が認められた。前段階よりやや口径が大きくなる傾向が認められた。口径の中～大の分化が明瞭ではなく、やや連続的であった。

傾向

全般的には、ヨコナデの下端が不明瞭になり、口端部の調整が簡略化されたり、口辺部の作り出しが甘くなるなど、模倣坏的な工程の省略がよりいっそう進んだように考えられる。

口径では、中・大が増えるとともに、特に中～大の分化が不明瞭であったり、様々な口径のものが認められた。

4　将監塚・古井戸Ｈ160出土坏類

坏類の観察

将監塚・古井戸Ｈ160号住居跡出土の坏類も様々な様相を含んでいたが、前者同様に大別された。

坏ａ

模倣坏は、検出できなかった。ただ、同時期と考えられる他の遺構には検出例があるので、残存していると考えられる。

坏ｃ

北武蔵型坏は、明瞭な傾向として、ヘラケズリが後退し、口辺部のヨコナデ下端以下に、ケズリ残しのナデ調整部分が広がっていた。Ｈ160で検出されたものは、焼成が硬質である。

口径は、小（第301図１・３・４・５・７・９）のみであった。前段階よりやや口径が大きくなる傾向が認められた。口径のまとまりは良かった。

坏ｂ

坏ｂでも、明瞭な傾向として、ヘラケズリが後退し、口辺部のヨコナデ下端以下に、ケズリ残しのナデ調整部分が広がっていた。前者同様に焼成が硬質であった。

口径では、小（第301図２・６・８)、中（第301図11・12・14・16）が認められた。前段階よりやや口径が大きくなる傾向が認められ、口径のまとまりは良かった。

傾向

全般的には、ヘラケズリの後退が特徴的であった。胎土も硬質で、前者とは異なった製作場所も考えられる。興味深いことに、法量が安定し、それぞれのまとまりが良くなっていた。坏ｂでは、小・中がほぼ等量検出されており、坏ｃでは、小のみで中は認められなかったが、異なる系統と考えられる坏類の大半の口径が中であり、あたかも坏ｃでの中口径の不足を補完するような組成であった。

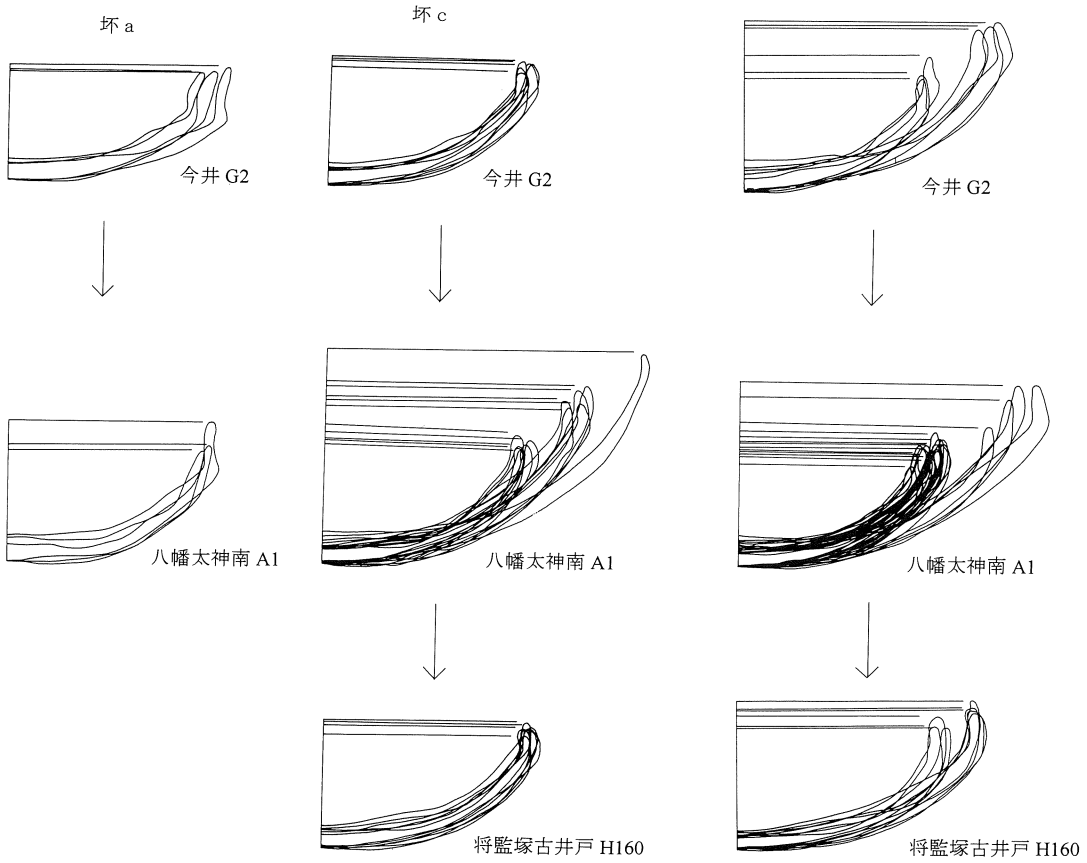
5　法量分化

以上の分析に基づいて、今井Ｇ２・八幡太神南Ａ１・将監塚・古井戸Ｈ160の該当遺物を配列したものが第615図である。各段階を通して二つの系統の存在は明らかであり、この二つの系統を分離することによって、形態の変遷傾向や、法量の分化の傾向も明瞭となった。

いわゆる法量分化は、模倣坏が須恵器指向の古墳時代的な土器である事に対して、北武蔵型坏が律令的な金属器指向の土器群であるとする前提から来ている。しかし、北武蔵型坏が模倣坏から系統関係がたどれる以上、無前提に法量分化を認めるわけには行かない。

今井Ｇ２段階では、坏ｂ類には小・中があり、坏ｃ類には小のみであった。これは、坏ｂ類の方が模倣坏

第615図　模倣坏と北武蔵型坏の系統と変遷傾向



に系統的に近く、模倣坏の口径の多様性が直接反映している事に起因する。

八幡太神南Ａ１段階では、坏ｂ類に大・中・小があり、中から大の間に明瞭な境界が無く、様々な口径のものが認められた。坏ｃ類にも大・中・小があり、この中で中・小が多く、大は少なかった。

これらの事から、今井Ｇ２、八幡太神南Ａ１では、口径小が基本に存在し、これに対する中～大を模索している過程と見なすことが出来る。中～大は法量的にも、数量的にも極めて不安定である。

そして重要なことは、各系統の中である程度のまとまりが認められても、実際の消費現場では複数の系統が混在して使われているので、系統内のみならず、少なくとも主要系統間においては同一基準の法量に分化していなければならない。この点に関して、今井Ｇ２や八幡太神南Ａ１は要件を満たしていない。

これに対してH160段階では、坏ｂ類には中･小があり、ほぼ等量で口径も安定していた。坏ｃ類では小のみであったが、あたかもこれを補うように他系統の中口径の土器が検出され、坏ｃ類の小口径と、他系統の中口径で、ほぼ等量に近づいていた。これは、小・中で食器の組み合わせが安定したと見なすことができる。この時の法量の一致傾向は、口端部が一定の範囲に重なり合う程度にまで進んでいた。

なお、他遺構の出土遺物から考えると、法量の組成は、小・中・大であるかもしれない。

いずれにしても前段階とは異なり、口径や数量比率などから考えて、食器の組み合わせが安定した一つの画期と見なせる。これは、当該地域に於ける律令体制の整備とも無縁ではあるまい。

これをもって食器の法量分化の一応の完成とみたい。

少なくとも、北武蔵型坏が出現当時から法量分化していたとする表現は、不適切であると考えられる。

6　同胞型式群の認定と系統関係

今回分析した北武蔵型坏のように、共通の祖型から

分かれた形態の類似した複数の系統が、分布地域の一部を共有して存在している現象がある。これは、生物学の同胞種と似た概念でとらえられるものである。仮にこれを同胞型式群と呼ぶと、北武蔵型坏は、本庄市今井遺跡周辺においては、模倣坏から分岐し口辺部形態の特徴で弁別可能な、主たる二つの同胞型式によって構成され、この同胞型式群は分布圏の一部を共有し経時的な変化の方向も類似している、と記載できよう。

遺伝子が次世代の個体を形成し、長期間の生殖的隔離によって、種が固定し、集団内での交配によって遺伝子が交換され、均一性が保たれる生物とは異なり、人為物である土器は、原則的に全ての型式が同胞型式群から成っていると考えられる。特に紋様が無く、型式論的な把握が難しい土師器においては、これら同胞型式群内の各系統の弁別は容易ではない。

北武蔵型坏の初期的な様相をもった、口縁部内屈形態の坏は、特定個人が一元的に製作したものではないであろうし、単一の製作者集団のみによる製作物でもないであろう。型式論的に把握された系統といえども、お互いに、客観的な弁別が困難な程度近似した、複数の製作者集団によって作られた個体群、或いは、微妙に異なった製作工程に基づく複数の個体群からなっているわけであり、これらを同胞型式群として型式論的にとらえておきたい。

7　SX９出土坏類の意味

SX９出土の坏類には、前節で述べたように様々な系統のものが含まれていた。その時期も前節で検討したように僅かに古い様相を帯びているが、相対的には、八幡太神南Ａ１に近い時期であり、赤熊が提唱した八幡太神南パターンとSX９の廃棄の類似性が問題となる。

八幡太神南パターンはその住居で使われていたものではなく、備蓄されていた小型品が一括廃棄されたような状況である。坏類に比べて、甕類の完存個体は皆無であり、検出されている場合でも、一括廃棄に伴うものではなく、住居に伴うものである。赤熊は、今井Ｇ２から立野南２に至る広い年代幅の中で定義を行っている。現象としての八幡太神南パターンに対して、八幡太神南Ａ１やSX９に関しては、法量分化の完成とそれに伴う前代の食器類の廃棄が、その実体として想定できる。また、今井Ｇ２や立野南２に関しては、どのような実体が想定できるか、再検討の必要がある。

また、前代の遺制にまつわる遺物の廃棄が一括貯蔵品に対して行われるならば、それに含まれる須恵器は、土師器と年代を異にする場合もある。

8　小結

以下に、今回の分析を通じて明らかになったことを列挙する。

鬼高期の末には、模倣坏の製作過程で、小型化と工程の省略が急速に進み始めた。これは、口辺と底部といった形態構成の弛緩と不可分であり、須恵器坏の小型化、稜線の消失とも連動的であると考えられる。

このような、模倣坏製作工程の省略の中から北武蔵型坏が出現した。出現当時の北武蔵型坏は、当然のことながら、基の模倣坏の口径と同様の多様性を持っていた。出現当時から北武蔵型坏には、省略された工程の違いに基づく大きな二つの系統があり、この二つの系統は平行して存在した。

模倣坏も又、少量ながら作られ続けた。

かなり長い期間にわたって、北武蔵型坏と模倣坏が生産の場で共存できたのも、北武蔵型坏が全く異なった新たな製作工程により出現したものではなく、模倣坏の伝統的な製作工程の中から、その簡略型として出現したからに他ならない。

北武蔵型坏の二つの系統と、模倣坏の三者はともに、口径をわずかずつ大きくしながら、口辺部が不明瞭になる方向に変化していった。

出現時の北武蔵型坏の基本的な法量は小であり、この小に対する中～大の口径のものが模索されながら製作された。しかし、数量的には、小に比べれば少なく、口径も一定していなかった。

将監塚・古井戸遺跡Ｈ160段階で、口径小に対する中（大）の法量が安定し、数量的にも同数に近くなり、法量分化が成立した。この時点で、法量分化成立前段

階の食器は、八幡太神南パターンなどと呼ばれるような特異な一括廃棄の対象となることがあった。SX９に認められた一括廃棄も、同様の動機に基づくものであると推定された。SX９で北武蔵型坏に共伴する須恵器がやや古い様相を帯びているのも、法量分化完成に伴う一括廃棄の過程で、日常雑器のみならず、保管されていた須恵器も又、前時代の遺物として廃棄された事によると考えられた。

今井Ｇ２から将監塚・古井戸Ｈ160に至る土師器坏類の変化の過程は、その端緒は伝統的な模倣坏の製作工程の中から出現したものである。しかし、その法量分化が完成することや形態の収斂に代表される動向を含み、狭義の型式圏で捉えられるとされる伝統的な在地の経済領域（坂野1997）を超越して行く大きな変革の契機をもたらした。やがて、将監塚・古井戸Ｈ160に至って一定の土器組成が成立した。このような動向にみられる社会的変容について考察することが次の課題のひとつである。　　（栗岡・大屋）

５．古代の掘立柱建物跡について

１　はじめに

掘立柱建物跡は、今回の調査範囲からは、62棟の建物跡を検出した。「築道下遺跡Ｉ」（吉田1997）で報告した掘立柱建物跡と合わせると、106棟となる。次年度以降に報告予定のＣ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ区からも、掘立柱建物跡を約100棟前後検出しており、今後の調査報告によって、掘立柱建物跡の検出棟数は、倍増するものと思われる。

今回の調査までに検出した掘立柱建物跡は、全体の約50％前後であったため、詳細の検討、時期の細分については、混乱を避けるため行わなかった。ここでは、前回報告の44棟と、今回検出した62棟を合わせた106棟の掘立柱建物跡のうち、古代に属すると考えられる建物跡101棟の、遺構の特徴等について検討する。なお、遺構の詳細は、本文事実記載及び掘立柱建物跡一覧表（第22～24表）を参照されたい。

２　掘立柱建物跡の形状と規模

古代の掘立柱建物跡は、検出した101棟のうち、調査区外へ展開し、全体が明らかにできなかった10棟を除き、側柱建物62棟と総柱建物25棟、そして１間×１間の掘立柱建物跡４棟がある。

側柱建物は、建物の外周に柱が配置され、建物の内部には柱が存在しない建物である。

総柱建物は、側柱に加え、対になる側柱どうしを結んだ線の交点に柱が配置される建物である。

また、桁行・梁行が共に１間の掘立柱建物跡は、これまで埼玉県内では、狭山市宮ノ越遺跡（駒見他1982）・同城ノ越遺跡（柳田他1978）、岡部町六反田遺跡（石岡他1981）等で検出例がある。これらは、倉庫として認識されている。しかし、本遺跡の場合、竪穴住居跡のなかには、カマド・床面等が削平された遺構もあり、１間×１間の建物跡は、こうした床面の失われた竪穴住居跡の柱穴であった可能性もあり、必ずしも掘立柱建物跡であると断定することはできなかった。検出した４棟の遺構は、面積が6.0m²～8.8m²と本遺跡では最小規模となる。柱穴間の距離は、2.5m～３m前後であった。

以下、側柱建物、総柱建物の順にその形状と規模について述べる。

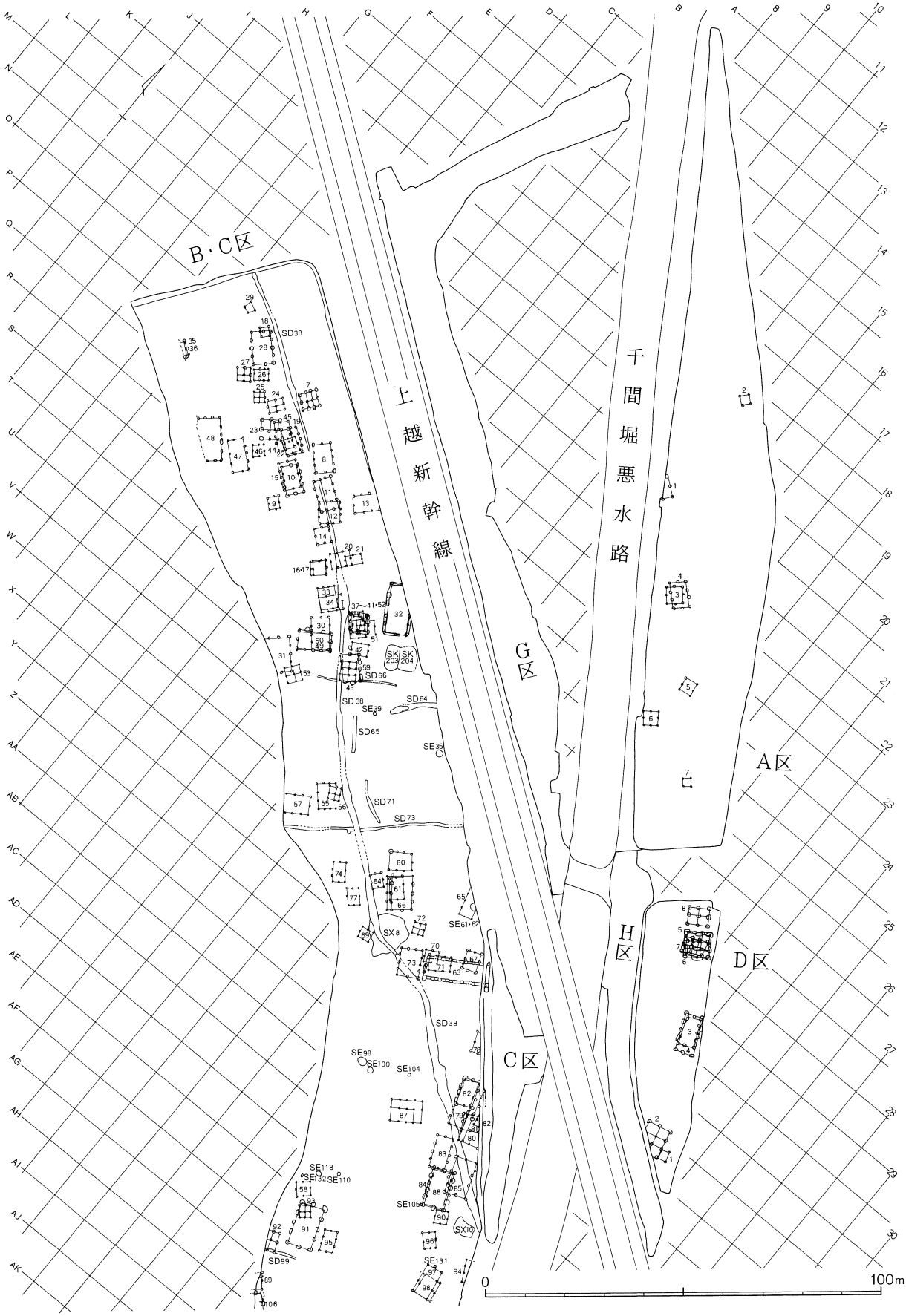
３　側柱建物跡

側柱建物跡は、62棟検出した。建物の規模は、桁行×梁行が、２間×１間が１棟、２間×２間が13棟、３間×２間が18棟、３間×３間が３棟、また桁行が４間のもの19棟、桁行５間のもの５棟、桁行６間のもの１棟、７間を超えるもの２棟であった。62棟の掘立柱建物跡のうち、半数以上の35棟は、桁行３間以下の小規模な建物跡であった。

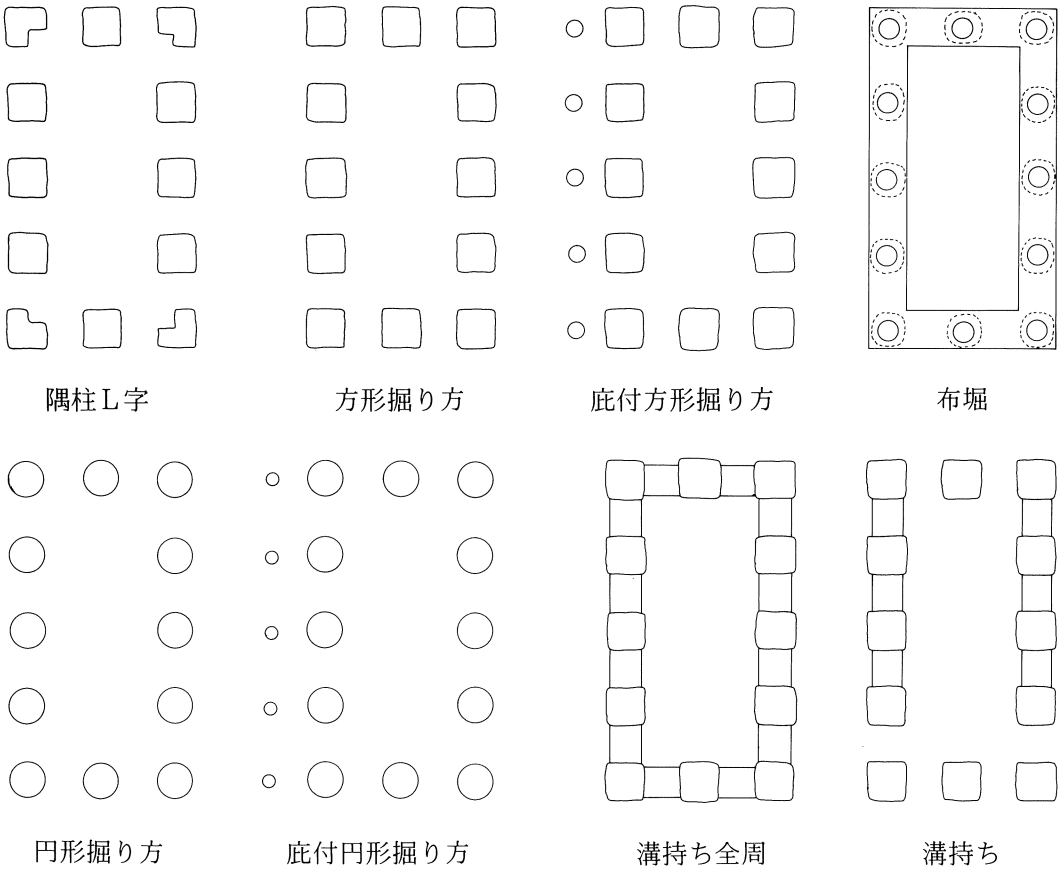
また、桁行が４間を超える掘立柱建物跡には、庇を有するものが２棟、柱穴どうしを溝で連結した「溝持ち」建物が４棟あった。

この「溝持ち」建物は、32号掘立柱建物跡を除き、溝部分の深さが、遺構確認面から15cm前後と、柱掘り方の深さに対して極めて浅かった。溝は、柱穴間を連

第616図　掘立柱建物跡全体図



第617図　掘立柱建物跡形態模式図



結するように浅く掘り込まれており、いわゆる「布掘」と呼ばれる建物と構造上同一視できないため、「溝持ち」建物と呼称した。なお、「溝持ち」建物については、中田英氏（中田1981）の研究が詳しい。

建物の面積は、桁行２間のものは、10m²～20m²前後、桁行３間のものは、20m²～40m²、桁行４間のものは、30m²～70m²前後、桁行が５間を超える建物跡は、50m²～100m²前後であった。

桁行が３間以下の小規模な掘立柱建物跡は、県内の一般的な集落遺跡でも認められるものであるが、桁行が５間を超える大型の掘立柱建物跡は、一般集落では見られない規模のものであり、官衙遺跡を連想させる建物である。特に、第63号掘立柱建物跡は、桁行が９間以上という溝持ちの長大な掘立柱建物跡であった。

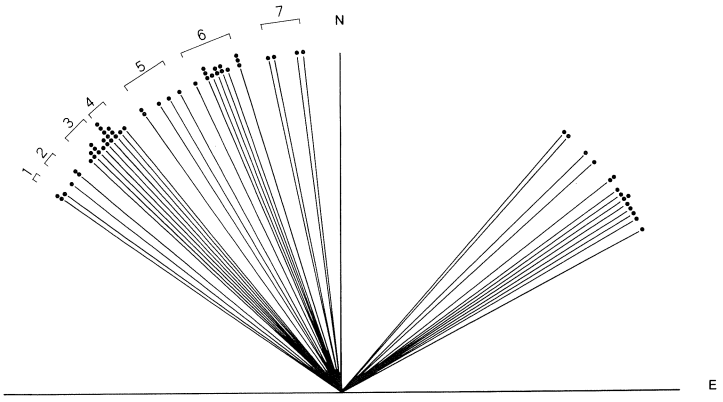
この63号掘立柱建物跡は、梁行の側柱の一端が調査区外へ展開し、遺構の全体を検出することはできなかったが、平成９年度に、連続する地点の調査を実施し、桁行が10間～11間以上となることが明らかになった。仮に桁行11間とした場合、面積は112m²前後となる。

柱掘り方の形状は、桁行が３間以下の小規模な建物については、円形または楕円形を基本とし、掘り方の径、深さ共に１ｍを超えるものはなかった。

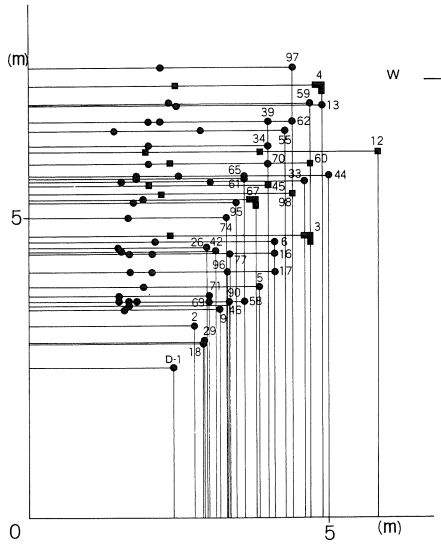
桁行が４間を超える掘立柱建物跡は27棟検出したが、柱掘り方が方形を基本とするもの、または隅柱の掘り方が「Ｌ」字形となる掘立柱建物跡が半数以上の17棟あった。こうした建物跡は、掘り方の径、深さともに１ｍを超えるものが多く、掘り方も版築状に土が充填されるなど、堅固な造りの建物跡で、明らかに他の円形を基本とする掘立柱建物跡とは区別できるものであった。

以上のように、本遺跡の側柱建物には、掘り方が円形を基本とする面積の小さなな掘立柱建物跡と、方形を基本とした建物を含む規模の大きい掘立柱建物跡の２種類に分れるようである。

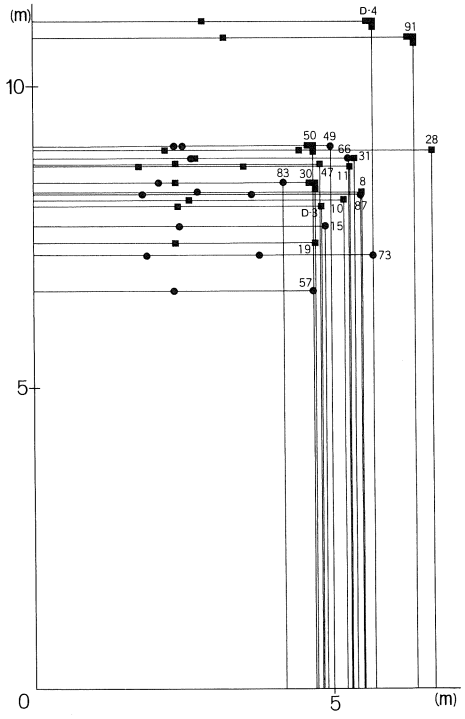
第618図　側柱建物跡規模グラフ



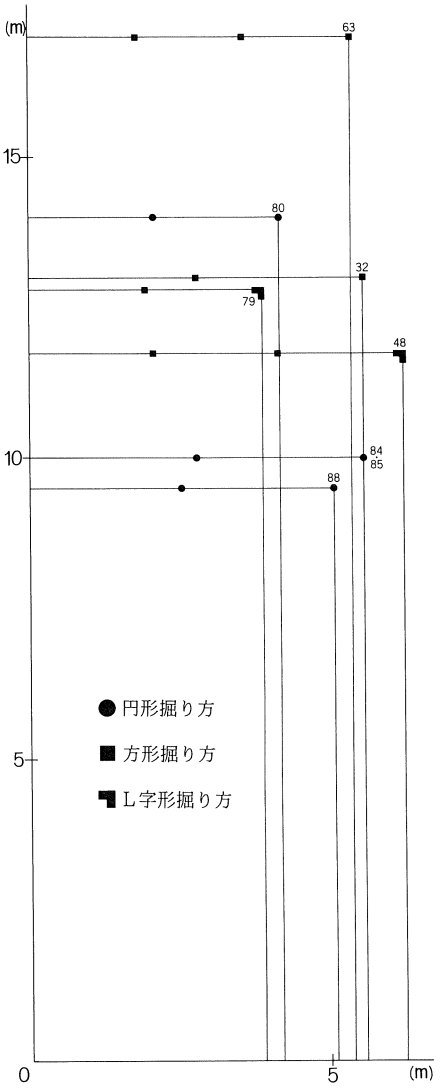
側柱建物跡主軸グラフ



桁行１～３間



桁行４間



桁行５間以上

4　総柱建物

総柱建物は25棟検出した。建物の規模は、桁行×梁行が２間×２間のもの17棟、３間×２間が５棟、３間×３間が２棟、６間×２間が１棟であった。

建物の面積は、２間×２間については、25～30m²前後の規模の大きいものと、20m²以下で小型のものの２つに分れる。また、３間×２間のものは20～30m²、３間×３間は40～50m²、６間×２間（D区２号掘立柱建物跡）は、90m²前後という大型の建物であった。

このD区２号掘立柱建物跡は、平成８年度報告（吉田1997）では、３間×２間の総柱と報告されていたが、平成９年度にD区南側に接するH区の調査を実施したところ、桁行が更に３間南に延びることを確認し、６間×２間の総柱建物であることが明らかとなった。桁行の全長は15m前後になると考えられ、面積は90m²前後と考えられる。本遺跡の中では他に類を見ない突出した存在となっている。詳細は、次年度以降に報告予定である。

総柱建物の柱掘り方の形状は、円形を基本とするもの、方形を基本とするものの２種類に分けられる。

２間×２間の建物では、円形を基本とする建物は、面積が10～20m²以下、掘り方の径も１m以下と小規模な建物で、方形を基本とする建物は、25～30m²前後、掘り方の径も１m以上と規模の大きいものであった。同じ２間×２間の建物でも大きく２種類に分れる傾向がある。

他の３間×２間、３間×３間の建物については、検出棟数が少なく、こうした傾向を導き出すことはできなかった。

また、３間×３間の建物は、２棟のみであったが、２棟とも方形の掘り方を基本とし、溝持ちの建物であった。（D区５号・D区６号掘立柱建物跡）

これら総柱建物は、概ね高床の倉庫と考えられる。側柱と、内部の束柱の掘り方の規模は同一であった。

ただし、D区２号掘立柱建物跡のみは、「築道下遺跡Ⅰ」（吉田1997）の報告では、束柱掘り方は、側柱掘り方より規模が小さく、他の３間×３間までの総柱建物とは異質で、上部構造の異なる建物であった可能性もある。総柱式高床倉庫であったかどうかも含め、遺構の詳細については、次年度以降の報告に委ねたい。

5　掘立柱建物跡の分布

古代の掘立柱建物跡の分布は、今回までに調査した地点の中では、ほぼ全域にわたって検出したが、注意深く観察すると、その分布は、概ね４個所に集中する傾向が認められた。第616図は、平成８年度及び今回報告した調査地点で検出した遺構のうち、古代の掘立柱建物跡を抽出したものである。

第616図によれば、先ずB区の北西部分に遺構が密集する（Ⅰ群）。U～W－11～14グリッド付近に分布の空白があり、空白部以南とD区に密集部分がある（Ⅱ群）。長大な掘立柱建物跡である第63号掘立柱建物跡以南は、主軸方向が真北に近い建物群が多く分布し、C区東壁沿いからD区にかけて南北に並ぶ一群（Ⅲ群）、西壁沿いに集中する一群（Ⅳ群）がある。

なお、この分布の区分は、あくまでも遺構の密集状況による分布の傾向を示したもので、便宜的なものである。

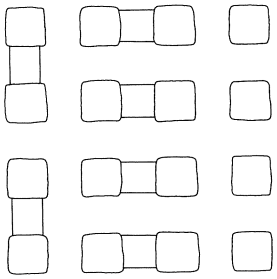
また、B・C区とA・D区の間は、JR上越新幹線と千間堀悪水路によって分断され、遺構の所在が明らかになっていない。しかし、平成９年度に新幹線沿いの道路部分のG区と、D区の西に隣接したH区の調査を実施したところ、掘立柱建物跡は、G・H区からも検出しており、特にⅡ群～Ⅳ群は、調査地点の南西に接する元荒川に向かって開く、大きなコの字型に密集していたことも考えられ、分布の傾向も大きく変わる可能性がある。

6　掘立柱建物跡の主軸方位について

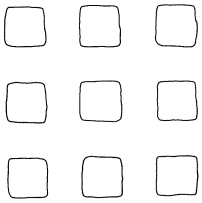
検出した建物跡は、主軸方位が概ね次のように７方向に分布する傾向が認められた。（第618・619図）

1　N-55°-W前後とそれに直交するもの
2　N-50°-W前後とそれに直交するもの
3　N-45°-W前後とそれに直交するもの
4　N-40°-W前後とそれに直交するもの
5　N-33°-W前後とそれに直交するもの

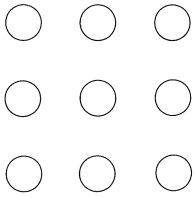
第619図　総柱建物跡形態・規模グラフ



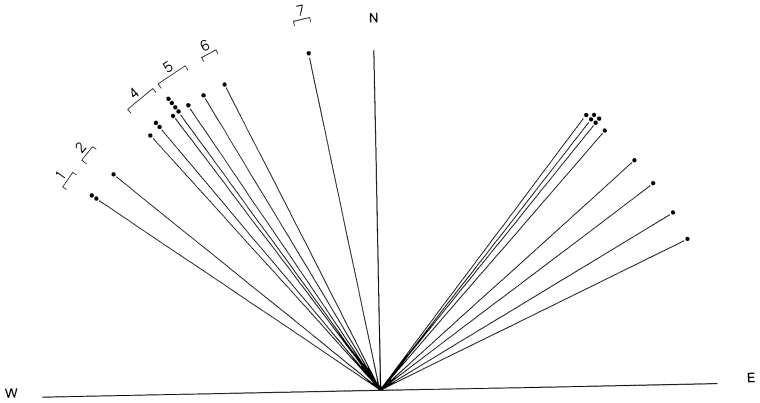
溝持ち方形掘り方



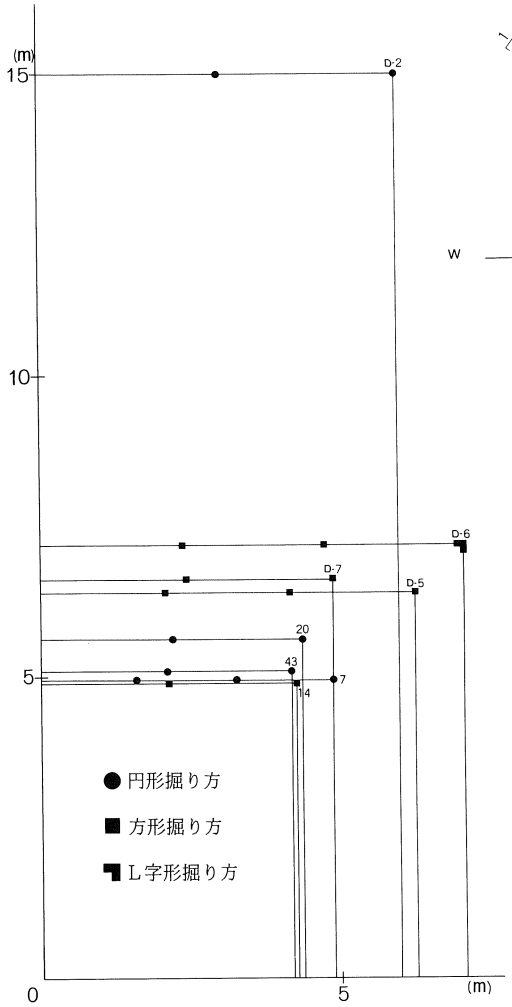
方形掘り方



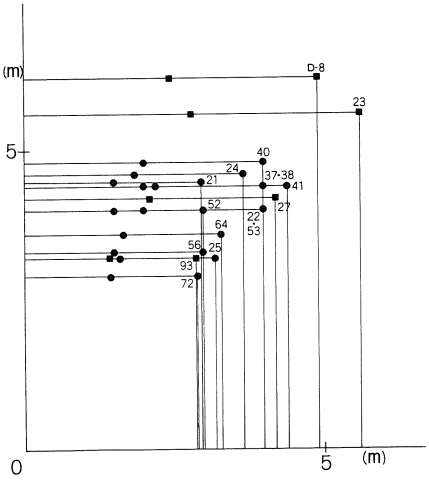
円形掘り方



総柱建物跡主軸グラフ



桁行３間以上



桁行２間

6　N-20°-W前後とそれに直交するもの

7　N-10°-W前後とそれに直交するもの

なお、このうち6類としたものは、分布のⅢ群・Ⅳ群に集中するが、6類の中でも重複があり、特にⅢ群に属する62・79・80号掘立柱建物跡と84・83・85号掘立柱建物跡は、それぞれ3棟ずつほぼ同じ位置で重複していた。このことから、6類に属する建物群は、3時期に分れる可能性がある。

主軸方位については、本遺跡の場合、河川沿いの細長い自然堤防という限定された範囲にに立地しており、建物の配置が地形に制約されていたことも考えられる。遺構の分布図を見ると、分布の項で便宜的に設定したⅠ群とⅡ群では、建物の主軸方位が主にN—30～50°—Wの南北棟か、それに直交する東西棟が主体となり、Ⅲ群・Ⅳ群では、真北に近いN—7～25°—Wの南北棟か、それに直交する東西棟が主体となる。建物跡は、遺跡の北から南に向かうに従い、主軸方位が真北に近くなっている。これは、遺跡の南西を流れる元荒川の流路に対応していると見ることもできるため、同一時期でも遺跡の南端と北端では主軸方位が異なっていた可能性もある。

7　掘立柱建物跡の時期区分の見通し

今回までに検出した掘立柱建物跡は、その多くが重複しており、数時期にわたって営まれていたと考えられる。このため、遺跡の変遷を知る上で、掘立柱建物跡の時期区分が必要となる。しかし、検出した101棟の掘立柱建物跡は、検出総数の約50%であったため、全ての調査が終了した段階で検討することが妥当と考え、今回は敢えて行わなかった。ここでは、時期区分の見通しを述べるにとどめる。

時期区分上、重要なのは、出土遺物、重複遺構との新旧関係の他に、建物の形状・規格の同一性や、主軸方位の同一性がある。

出土遺物は、遺構に伴っていたと考えられる遺物が少なかったため、遺物から建物の時期を特定するのは困難であった。

遺構の重複関係については、先ず、重複する掘立柱建物跡群の中で古いものは、分布のⅠ群では、12・23号掘立柱建物跡である。これらと主軸方位が同一の建物跡を同時期と考えた場合、主軸方位の5類が古相となる。この5類に属する26号掘立柱建物跡は、前回報告（吉田1997）で7世紀後半に位置づけられた8号竪穴住居跡を壊していることから、5類の建物群は、7世紀後半～末以降に建てられた可能性がある。

次にⅡ群～Ⅳ群については、一群で検出した主軸方位5類に属する建物跡が、ここでも検出している。

この5類をⅠ群で検出した掘立柱建物跡と同時期とした場合、5類に属するD区5・6号掘立柱建物跡に壊されたD区7号掘立柱建物跡は、さらに時期が溯る可能性もある。

また掘立柱建物跡の最も新しいものは、重複関係からは、主軸方位の4類に属する建物群が該当する。これらを壊している遺構は、中世の遺構であったため、明確な時期の特定は困難であった。しかし、今回までに調査した遺構のうち、古代で最も新しい遺物が出土したのは98号井戸跡・38号溝跡で、覆土から9世紀末～10世紀初頭に属する遺物が多く出土した。このことから、特に38号溝跡は、10世紀初頭前後には埋没していたと考えられる。この38号溝跡と重複する掘立柱建物跡は、全て溝跡に壊されていることや、本遺跡の38号溝跡より時期の新しい遺物を出土する遺構は、13～14世紀代と考えられること、また、今回までに調査した範囲では、10世紀以降の古代の遺物は出土しなかったことなどから、古代の掘立柱建物跡も、概ね9世紀末～10世紀初頭前後か、それ以前まで存続していたものと思われる。

8　まとめ

今回は、掘立柱建物跡の時期区分を行わなかったが、今後は同時期に存在した竪穴住居跡や他の遺構との関係を含めた遺跡の性格付けを行っていく必要がある。

掘立柱建物跡の形状の項でも触れたが、本遺跡の掘立柱建物跡には、側柱建物・総柱建物ともに、方形の掘り方や、庇や溝を有する規模の大きい掘立柱建物跡と、円形の掘り方を基本とする規模の小さい掘立柱建

第22表　掘立柱建物跡一覧(1)

番号	規模	種類	庇	長さ		柱間寸法		身舎-庇	面積	隅柱	掘り方	主軸方位	出土遺物	出土状況	備考
				桁行	梁行	桁行	梁行								
D－1	1×1		×	2.50	2.40	2.50	2.40		6.00			N－11°－W	坏	掘り方	
D－2	6×2	総	×	15.00	6.00	2.50	2.70		90.00	円	円	N－11°－W	坏	掘り方	
D－3	4×2	側	×	8.00	4.84	1.90	1.90		38.72	方	方	N－23°－W	坏	掘り方	
D－4	4×2	側	×	11.06	5.70	2.30	2.10		63.04	L	方	N－23°－W	坏	掘り方	
D－5	3×3	総	×	6.40	6.27	2.10	2.10		40.13	方	方	N－35°－W	なし		
D－6	3×3	総	×	7.20	7.10	2.10	2.10		51.12	溝・L	溝・方	N－35°－W	なし		建替え
D－7	3×2	総	×	6.62	4.90	2.00	1.80		32.44	方	方	N－65°-E	なし		
D－8	2×2	総	×	6.20	4.90	2.20	2.00		30.38	方	方	N－60°-E	土玉	掘り方	建替え
1	不明	不明	不明	不明	不明	2.70	2.50		不明	円	円	N－55°－W	なし		
2	1×1	側	×	3.20	2.75	3.20	2.75		8.80	円	円	N－50°－W	なし		
3	2×2	側	×	4.70	4.70	2.10	2.10		22.09	L	方？	N－40°－W	なし		建替え
4	3×2	側	×	7.20	4.90	2.20	2.20		35.28	L	方	N－47°－W	なし		建替え
5	2×1	側	×	3.85	3.85	1.90	1.60		14.82	円	円	N－12°－W	なし		
6	2×2	側	×	4.60	4.10	2.00	1.80		18.86	円	円	N－52°-E	坏	掘り方	
7	3×2	総	×	4.94	4.86	1.50	2.00		24.01	円	円	N－38°-E	坏	掘り方	建替え
8	4×2	側	×	8.24	5.51	1.80	2.40		45.40	L	円	N－45°－W	坏・蓋	掘り方	
9	2×2	側	×	3.46	3.18	1.60	1.40		11.00	円	円	N－50°－W	なし		
10	4×2	側	×	8.10	5.22	1.80	2.20		42.28	方	方	N－52°－W	坏	掘り方	
11	4×3	側	×	8.66	5.32	2.00	1.60		46.07	方	方	N－55°－W	坏	掘り方	
12	3×3	側	×	6.10	5.84	1.75	1.70		35.62	方？	方？	N－35°－W	なし		
13	3×2	側	×	6.86	4.90	1.60	2.20		33.61	円	円	N－42°-E	坏	掘り方	
14	3×2	総	×	4.90	4.28	1.40	1.90		20.97	方	方	N－55°－W	坏	掘り方	
15	4×2	側	×	7.68	4.90	1.75	2.30		37.63	円	円	N－52°－W	なし		
16	3×2	側	×	4.40	4.10	1.35	1.90		18.04	円	円	N－48°-E	なし		
17	3×2	側	×	4.10	4.10	2.00	2.00		16.81	円	円	N－46°-E	なし		
18	1×1	側	×	2.90	2.90	2.90	2.90		8.41	円	円	N－45°－W	なし		
19	4×2	側	×	7.40	4.74	1.75	2.00		35.08	方	方	N－55°－W	坏・壺	掘り方	
20	3×2	総	×	5.64	4.38	1.75	2.00		24.70	円	円	N－39°-E	なし		
21	2×2	総	×	4.48	2.96	2.00	1.30		13.26	円	円	N－40°-E	なし		
22	2×2	総	×	4.00	4.00	1.85	1.85		16.00	円	円	N－39°-E	なし		
23	2×2	総	×	5.60	5.60	2.50	2.50		31.36	方	方	N－54°-E	坏・甕	掘り方	
24	2×2	総	×	4.60	3.66	2.10	1.60		16.84	円	円	N－40°-E	なし		
25	2×2	総	×	3.20	3.20	1.45	1.45		10.24	円	円	N－49°-E	なし		
26	3×2	側	×	4.50	2.96	0.90	1.30		13.32	円	円	N－54°-E	なし		

第22表　掘立柱建物跡一覧(2)

番号	規模	種類	庇	長さ		柱間寸法		身舎-庇	面積	隅柱	掘り方	主軸方位	出土遺物	出土状況	備考
				桁行	梁行	桁行	梁行								
27	2×2	総	×	4.20	4.20	1.80	1.80		17.64	方	方	N—35°—W	なし		
28	4×3	側	×	8.94	6.70	2.00	1.90		59.90	方	方	N—41°—W	坏・壺・長頸瓶他	掘り方	建替え
29	1×1	側	×	2.92	2.92	2.50	2.50		8.53	円	円	N—68°—W	なし		
30	4×2	側	×	8.40	4.74	2.10	2.37		39.80	L	方	N—42°—W	坏・蓋	掘り方	
31	4×2	側	×	8.80	5.40	2.20	2.70		47.50	長方	方	N—42°—W	石製品	掘り方	建替え
32	5×2	側	×	13.00	5.60	2.60	2.80		72.80	溝・方	溝・方	N—32°—W	高台坏・長頸瓶	掘り方	
33	3×3	側	×	5.60	4.60	1.87	1.53		25.80	円	円	N—39°—W	破片		
34	3×2	側	×	6.20	4.00	2.04	2.00		24.80	円	円	N—41°—E	破片		
35	不明	不明	×	5.00	不明	2.00	不明		不明	方	方	N—45°—W	坏・甕・長頸瓶	掘り方	
36	不明	不明	×	3.90	不明	1.80	不明		不明	円	円	N—59°—W	なし		
37	2×2	総	×	4.40	4.00	2.20	2.00		17.60	円	円	N—36°—W	破片		
38	2×2	総	×	4.40	4.00	2.20	2.00		17.60	円	円	N—33°—W	坏	掘り方	
39	3×2	側	×	6.60	4.00	2.20	2.00		26.40	円	円	N—46°—W	破片		
40	2×2	総	×	4.80	4.00	2.40	2.00		19.20	円	円	N—39°—W	破片		
41	2×2	総	×	4.40	4.40	2.20	2.20		19.36	円	円	N—41°—W	破片		
42	2×2	側	×	4.44	3.12	2.20	1.56		13.73	円	円	N—60°—E	なし		
43	3×2	総	×	5.10	4.20	1.70	2.10		21.42	円	円	N—35°—W	破片		
44	3×2	側	×	5.70	5.00	1.70	1.90		28.50	円	円	N—54°—W	なし		建替え
45	3×2	側	×	5.54	4.00	1.70	1.80		22.16	方？	方？	N—45°—W	なし		
46	2×2	側	×	3.54	3.34	1.60	1.60		11.82	円	円	N—43°—W	なし		
47	4×2	側	×	8.70	4.82	2.05	1.45		41.93	方？	方？	N—50°—W	坏	掘り方	拡張
48	5×3	側	×	11.74	6.26	2.20	1.95		73.49	L	方	N—45°—W	坏・甕	掘り方	拡張
49	4×2	側	×	9.00	5.00	2.25	2.50		45.00	円	円	N—52°—E	坏	掘り方	
50	4×2	側	×	9.00	4.70	2.25	2.35		42.30	L	楕円	N—58°—E	破片		
51	不明	不明	×	3.50	不明	1.75	不明		不明	円	円	N—48°—W	破片		
52	2×2	総	×	4.00	3.00	2.00	1.50		12.00	円	円	N—42°—E	破片		
53	2×2	総	×	4.00	4.00	2.00	2.00		16.00	円	円	N—55°—W	破片		
55	3×3	側	×	6.45	4.29	2.15	1.43		40.57	円	円	N—42°—W	破片		
56	2×2	総	×	3.30	3.00	1.65	1.50		9.90	円	円	N—30°—W	なし		
57	4×2	側	×	6.60	4.70	2.20	2.35		31.00	円	円	N—56°—E	なし		
58	2×2	側	×	3.60	3.60	1.80	1.80		12.96	円	円	N—42°—W	破片		
59	3×2	側	×	6.90	4.70	2.30	2.35		32.43	円	円	N—43°—W	なし		
60	3×2	側	×	5.90	4.70	1.97	2.35		27.73	方	方	N—56°—E	坏・長頸瓶	掘り方	
61	3×2	側	×	5.65	3.60	1.88	1.80		20.34	方	方	N—41°—W	坏	掘り方	

第22表　掘立柱建物跡一覧(3)

番号	規模	種類	庇	長さ		柱間寸法		身舎-庇	面積	隅柱	掘り方	主軸方位	出土遺物	出土状況	備考
				桁行	梁行	桁行	梁行								
62	3×2	側	×	6.60	4.40	2.20	2.20		29.04	楕円	楕円	N−21°−W	なし		
63	9×3	側	×	17.00	5.40	1.90	1.80		91.80	溝・方	溝・方	N−59°−E	破片		10間以上　建替え
64	2×2	総	×	3.60	3.30	1.80	1.65		11.88	円	円	N−50°−W	破片		
65	3×2	側	×	5.70	3.60	1.90	1.80		20.52	円	円	N−17°−W	破片		
66	4×2	側	○	8.80	5.30	2.20	2.65	1.30	46.64	円	円	N−42°−W	破片		
67	2×2	側	×	5.30	3.80	2.65	1.90		20.14	L	円	N−22°−W	坏	掘り方	
68	3×2	側	×	5.60	3.80	1.87	1.90		20.16	円	円	N−65°−E	なし		
69	2×2	側	×	3.60	3.00	1.80	1.50		10.80	円	円	N−11°−W	なし		
70	3×2	側	×	6.00	4.00	2.00	2.00		24.00	円	円	N−55°−E	破片		
71	2×2	側	×	3.70	3.00	1.85	1.50		11.10	円	円	N−62°−E	破片		
72	2×2	総	×	2.90	2.90	1.45	1.45		8.41	円	円	N−26°−W	なし		
73	4×3	側	×	7.20	5.70	1.80	2.85		41.04	円	円	N−30°−W	破片		
74	3×2	側	×	5.00	3.30	1.67	1.65		16.50	円	円	N−35°−W	破片		
77	2×2	側	×	4.40	3.35	2.20	1.68		14.74	円	円	N−44°−W	破片		
78	不明	側	×	不明	不明	2.00	2.45		不明	L ?	円	N−70°−E	破片		
79	6×2	側	×	12.80	3.90	2.13	1.95		49.92	L	長方	N−17°−W	鉄鏃	掘り方	建替え
80	7×2	側	○	14.00	4.20	2.00	2.10	1.30	58.80	円	円	N−17°−W	破片		7間以上
81	不明	側	×	4.40	4.20	2.20	2.10		不明	方	方	N−59°−E	破片		
82	不明	側	×	不明	不明	1.60	1.40		不明	円	円	N−16°−W	破片		
83	4×2	側	×	8.40	4.20	2.10	2.10		35.28	楕円	楕円	N−23°−W	破片		
84	5×2	側	×	10.00	5.60	2.00	2.80		56.00	溝・方	溝・方	N−20°−W	坏	溝覆土	
85	5×2	側	×	10.00	5.60	2.00	2.80		56.00	円	円	N−21°−W	破片		
87	4×3	側	8.2	8.20	5.50	2.05	1.83		45.10	円	円	N−57°−E	破片		
88	5×2	側	×	9.50	5.10	1.90	2.55		48.45	円	円	N−20°−W	破片		
89	不明	不明	×	4.00	不明	2.00	不明		不明	方	円	N−35°−W	破片		
90	2×2	側	×	3.60	3.35	1.80	1.68		12.06	円	円	N−28°−W	なし		
91	4×2	側	×	10.80	6.40	2.70	3.20		69.12	L	方	N−19°−W	破片		
92	不明	不明	×	不明	不明	不明	不明		不明	方	方	N−21°−W	土玉	掘り方	
93	2×2	総	×	3.20	2.88	1.60	1.44		9.22	方	方	N−39°−W	破片		
94	不明	不明	不明	5.90	不明	2.10	不明		不明	円	円	N−26°−W	破片		
95	3×2	側	×	5.25	3.46	1.75	1.73		18.17	円	円	N−25°−W	破片		
96	2×2	側	×	4.10	3.32	2.05	1.66		13.61	円	円	N−41°−W	なし		
97	3×2	側	×	7.50	4.40	2.50	2.20		33.00	円	円	N−7°−W	破片		
98	2×2	側	×	5.40	4.40	2.70	2.20		23.76	方	方	N−6°−W	なし		

物跡が存在する。円形掘り方を基本とする掘立柱建物跡は、県内の一般的な集落遺跡でも検出例が多い。

しかし、方形掘り方や、桁行が5間を超える庇や溝を有する掘立柱建物跡は、これまで県内では、坂戸市・鶴ヶ島市に所在する若葉台遺跡群(田中他1984)、坂戸市稲荷前遺跡(富田1992)、所沢市東の上遺跡(粕谷他1995)、上里町中堀遺跡(田中・末木1997)、児玉町将監塚・古井戸遺跡(井上1986 赤熊1988)、岡部町仲宿遺跡(鳥羽1995)・同熊野遺跡(鳥羽1997)、熊谷市北島遺跡(浅野他1989)等、官衙もしくは官衙に関連するとされる遺跡から検出している。

本遺跡の大規模な掘立柱建物跡は、奈良時代～平安時代における遺跡の性格を示唆するものとして注目できる。

今回は、遺跡の性格まで検討することはできなかったが、そのためには、遺跡の立地環境、遺構の変遷、他の遺構、特に同時に存在した竪穴住居跡との関係、出土遺物の検討、周辺遺跡との関係など、検討する課題は多い。今回までの調査は、全体の50%前後であるため、こうした問題の検討は早急と考える。全ての調査が終了した段階で改めて検討したい。　(栗岡)

6　中世の墓跡について

前章までに報告したとおり、築道下遺跡からは墓跡をはじめ、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土師質土器焼成窯といった、数多くの中世遺構が検出されている。これらの分布は濃密かつ広範であり、遺跡の乗る自然堤防全体に生活の痕跡が刻み込まれている。なかでも区画性の強い溝が連続する状況などは、ここに大規模な集落の消長があったことを雄弁に物語るものである。

しかしながら、発掘調査は現在も継続中(平成10年3月末終了予定)であるため、今回の報告で対象とならなかった部分も多く残っている。よって、中世遺構全体の検出状況や遺跡の性格などについては、次年度以降となる最終報告のなかで検討することとし、ここではその前段として、墓跡の展開や出土遺物について一通り触れておきたい。

1　五輪塔

五輪塔は第二墓群の北寄り、土壙1の上面から第II次周堀の溝底にかけて集中的に出土した(第570図3の火輪のみ第三墓群付近)。個体数にして7個、9輪分である。内訳は空輪1、空・風輪1、火輪2、水輪2、水・地輪1となっている。いずれも凝灰岩製で、かなり風化が進行している。加えて、著しい破壊を受けており、ほとんど原型をとどめていない。

出土した五輪塔の形態的な特徴についても、破壊はその類推を許さないほどである。しいて残存部位から伺察するならば、おおよそ次のようになる。空輪は第570図1・2ともに宝珠形で、後者は扁平となっている。2は空輪と風輪の一石造りで、両輪間のくびれは浅く四門梵字の一部が残る。風輪は丸味を帯びて下がすぼまり、底面にほぞ穴が穿たれる。火輪3は屋根の上面が段状に高まり、中央にほぞ穴が穿たれる。さらに軒の底面は浅く盆状に彫り窪められる。水輪は6が大型で高さもあり、扁平さの増す5よりも球形に近い。6の四門梵字は薬研彫りで、太く大きく刻まれている。7は一石造りの水輪と地輪で、水輪部上面には奉納孔(ほぞ穴?)が穿たれる。

このうち、火輪3は屋根の頂に露盤状の表現のあること、軒底面が盆状に丸く彫り窪められることなど、宝塔的とも言える特異な形状である。また、7も一石造りの水輪と地輪という点で特異である。図上では両輪間に浅いくびれのある形に復元したものの、写真図版に示すごとく破壊は特に著しい。地輪の肩部に丸味を有することが気にかかるが、地輪の下に表現される返花ではないだろう。

個々にはこうした特徴を挙げうるとはいえ、所属時期を検討するとなると、その条件の悪さは否めない。磯部淳一氏は、「群馬県内で紀年銘によって製作年代のはっきりしている完形の五輪塔を基本に」、各部分の計測作業をとおしての編年観を示されている(磯部1992)。群馬県の資料に限られているため、これを無条件に適応させることはできないかもしれないが、客観

的な視点で分析されていることは重要である。残念ながら、出土した五輪塔のなかで条件にかなうものは6の水輪のみである。計測方法や数値は省略するが、磯部氏の方法から得られた時期は南北朝期（1330年代）から室町中期(1440年代)で、それも取りようでは1330年代～1350年代となる。図上復元した5の水輪の場合も、同様に南北朝期から室町中期であった。

これに室町時代以降、凝灰岩がほとんど用いられなくなるという指摘（駒宮・大久保　1995）を加慮すれば、概ね墓跡出土の五輪塔は、南北朝期のなかに収まるのではないかと考えられる。

なお、石材や大きさから見て、第570図2の空・風輪、4の火輪、6の水輪は組み合う可能性が高いが、破壊が激しいため断定することは避けておきたい。本来の造立基数も不明と言わざるをえない。最も多く確認された水輪の数からすれば、墓跡には最低3基の五輪塔が造立されていたことになる。

冒頭のように、五輪塔の出土位置は集中しており、周囲にも破片と思しき凝灰岩が多量に散在していた。おそらくこれらの破片は、故意に破壊を行なった際のもので、図示した7個体とともに第II次周堀へ転落、ないし投棄されたものと判断される。散乱する範囲か

第25表　板石塔婆一覧

No.	主尊	記年銘	真言	高さ/cm	上幅/cm	下幅/cm	厚さ/cm
1	阿弥陀	正安二年子(1300) 七月八日		72.7	18.5	21.5	2.7
2	阿弥陀			87.0	21.5	26.5	2.7
3	阿弥陀	正安元年(1299)		65.0	18.0	19.0	2.8
4	金剛界大日	明徳三年申(1392) 壬(閏)十月十六日		57.0	16.8	18.0	2.1
5	(三弁宝珠) 阿弥陀	貞和二年丙戌(1346) 十月日　道円　逆修	光明真言	124.6	26.2	31.7	3.1
6	阿弥陀	貞和二年丙戌(1346) 八月十九日　成阿禅尼	大日如来真言	77.5	21.5	24.0	2.2
7	阿弥陀			(17.3)	6.7	7.3	2.0
8	釈迦	延文三年戊(1358) 二月廿日	大日如来真言	76.7	19.8	21.7	2.5
9	阿弥陀三尊	元徳元年(1329) 十一月十八日　太才己巳		(64.5)	—	29.3	2.5
10	(月輪) 阿弥陀	嘉暦三年戊辰(1328) 十二月十二日	光明真言	118.7	26.0	31.4	3.7
11	(月輪) 阿弥陀			(38.0)	20.8	—	2.5
12		元年己 七月八日	大日如来真言	(38.5)	—	25.7	3.4
13				(49.0)	—	27.7	2.8
14		厂广二二年辛巳(1341) 二月二十一日	大日如来真言	(53.6)	—	23.5	2.3
15	金剛界大日	正慶元年(1332) 十二月廿八日		48.5	—	15.0	2.2
16	阿弥陀	正中二年丑(1325) 六月十九日		(55.5)	—	18.1	2.2
17	阿弥陀	徳治三年(1308) 四月日		(68.0)	20.8	22.3	2.4
18	(月輪) 阿弥陀	元徳三年ノ未(1331) 四月廿四日	大日如来真言	87.0	21.5	25.7	2.5
19	阿弥陀	元徳□□□ 七月九□		(63.5)	20.0	22.1	2.5
20	(月輪) 阿弥陀	元徳三年ノ□(1331) 四月十一日	大日如来真言	90.7	21.4	25.2	2.4
21	阿弥陀	弘安六年(1283) 十一月日		(59.2)	19.3	—	3.0
22		戌日		(28.7)	—	14.0	2.1

らすれば、五輪塔は第二墓群の北寄り、土壙１を中心とする場所にまとまって造立されていたと考えられる。これより北側には、板石塔婆の台石や埋納焼骨群が存在し、南側は広く空白部となる。

2　板石塔婆

墓跡から出土した板石塔婆は22基で、完存ないしほぼ完存するものが12基ある。出土位置は第一墓群と第三墓群に集中する傾向があり、埋納焼骨や蔵骨器とともに第二墓群中程は分布が途絶える。第三墓群から検出された９基は、直立したままの状態のものもあり、現位置を保つと考えられるものが多い。

埼玉県では県内に所在する板石塔婆についての調査が実施され、『埼玉県板石塔婆調査報告書』(埼玉県教育委員会　1981) として刊行されている。確認された基数は、1980年９月30日現在で20201基である。また築道下遺跡の所在する行田市でも、上記の報告書に独自の調査結果を加えたものを、『行田の板碑』(行田市教育委員会　1983) としてまとめている。基数は418基である。そこで主に両書を比較の材料とし、墓跡から出土した板石塔婆について見ていくこととしたい。

大きさ

総高の判明する11基のうち、最大は第一墓群出土の５（第572図）で124.6cmである。次いで第二墓群南端部から出土した10(第575図)が118.7cmとなっている。この２基以外に１ｍを越えるものはなく、両者の卓越性は際立っている。残る９基におおよその高さが知れる４基を加えると、10cm単位での内訳は40cm台が１基、50cm台が１基、60cm台が４基、70cm台が４基、80cm台が２基、90cm台が１基となる。

次に、下幅として計測した最大値を５cm単位で比較してみると、５cm以上10cm未満、および10cm以上15cm未満が各１基、15cm以上20cm未満が４基、20cm以上25cm未満、および25cm以上30cm未満が各６基、30cm以上35cm未満が２基となる。『埼玉県板石塔婆調査報告書』（以下『報告書』と記す）で示されたように、幅と高さの比は１：３から１：４の間に収まる。

厚さは2.0cmから3.7cmまであるが、３cm以下のものがほとんどで、３cm以上は４基のみである。しかも、うち２基は大型の５と10である。

このほか、特筆すべき例として７（第573図）を挙げることができる。基部を欠くため総高は不明だが、現存高17.3cmという小型品である。同様の板石塔婆は北埼玉郡川里村広田小学校、児玉郡美里町如来堂Ｃ遺跡からも出土している。広田小学校のものは高さ22cm、上幅８cm、下幅９cmで、枠線の中には蓮座に乗る阿弥陀如来と、永仁元（1293）の紀年銘が刻まれる（行田市教育委員会　前掲)。如来堂Ｃ遺跡のものは基部を欠いており、残存高18cm、上幅７cm、下幅８cm、厚さ0.8cm～0.9cmを測る。碑面には異体梵字で阿弥陀如来を表現する（埼玉県教育委員会　1980)。

これらは大きさから見ると位牌のようでもあり、確かに特異な印象を受ける。しかし、本遺跡と如来堂Ｃ遺跡のものは、他の通常大の板石塔婆とともに墓跡から出土しており、特別に扱われたような状況は認めることができない。形態的にも大きな差異があるわけではなく、板石塔婆の表現方法としてはまったく同じである。ゆえに、板石塔婆個々の大きさが異なる意味は別としても、造立する目的と行為には、大小の区別はなかったものと判断される。

主尊

確認された主尊は阿弥陀如来15基（うち三尊１基、但し主尊種子を欠く)、金剛界大日如来２基、釈迦如来１基である。いずれも梵字種子で表現され、蓮座の上に乗っている。

阿弥陀如来では月輪の巡るものが４基、三弁宝珠を戴くものが１基含まれる。異体梵字（イー点がクー点の間に入っているもの）は９基である。『報告書』によれば主尊の確認できる板石塔婆のうち、一尊・三尊を合わせた阿弥陀如来の比率は89.4％である。また、これに追加調査分を加えた『行田の板碑』では、行田市におけるそれは79.3％となっている。ちなみに、本墓跡では83.3％の比率となる。

同様に、金剛界大日如来は『報告書』が2.1％であるのに対し、『行田の板碑』では12.4％となっている。こ

の数値を受け、前者では報文中に入間地区とともに、行田市（40基）と北埼玉郡騎西町（17基）などを中心とする北埼玉地区が、これの多く分布する地域であることを特記している。

釈迦如来は『報告書』が2.9%、『行田の板碑』が2.5%の数値を挙げている。『報告書』では1300年代と1350年代に大きな増加が見られ、県西北部と県東南部を除き、ほぼ全県に分布することが指摘されている。本墓跡のものは延文三年（1358）の紀年銘を有するので、二度目の増加時のものとなる。

紀年銘

出土した22基のうち、紀年銘の明確なものは15基、一部の残るものは3基である。15基を年代順に並べると、最古は21の弘安六年(1283)、次いで3の正安元年（1299）、1の同二年（1300）、17の徳治三年（1308）、16の正中二年（1325）、10の嘉暦三年（1328）、9の元徳元年（1329）、18と20の同三年（1331）、15の正慶元年（1332）、14の暦応四年（1341）、5と6の貞和二年（1346）、8の延文三年(1358)となり、最も新しいものは4の明徳三年（1392）である。時代的には鎌倉時代後期から南北朝時代いっぱいにあたる。なお、南北朝時代の紀年銘はすべて北朝年号である。

これらの年号を見ると、前後110年間のなかでは、13世紀末から1340年代に集中する傾向が看取される。反面、14世紀のはじめには17年間の空白期も見られる。『報告書』は県内における板石塔婆造立を、1300年代に急増し、1360年代に頂点を迎えるとしている。一方、『行田の板碑』では1280年代の元の来寇後に急増し、1330年前後にピークを迎えるとしている。本例も後者の傾向に合致するものといえる。

次に下半部のみの残存で、紀年銘は一部しか確認できないが、第三墓群から検出された板石塔婆12の年号について考えてみたい。なぜなら、12は蔵骨器4の背後に立てられたままの状態で出土しており、両者が共伴することは明らかなためである。基準資料化ができるか否かの判断は蔵骨器の検討の後に行なうとして、ここでは該当する元号の抽出を試みたい。

まず、「元年」が十干の「己」の年にあたる元号は、13～15世紀の300年間に14ある。また誤刻の可能性を考慮して「己」を十二支の「巳」と読めば、同様に四つの元号を取り出すことができる。ここにそのすべては挙げないが、他の板石塔婆の紀年銘からすれば、「己」年では正安元年（1299）、元応元年（1319）、元徳元年（1329）、康暦元年(1379)、康応元年(1389)が、「巳」年では永仁元年（1293）、文保元年（1315）が候補となろう。

「元年」の直上には「一」の字状の年号部分が見られ、文字の残り方から「徳」ではないかと思われる。「安」や「応」、「保」にはもちろんそぐわず、「暦」や「仁」にしても左に寄りすぎて字のバランスが悪い。銘文全体の印象からも「元徳」が最もふさわしいと感じられる。ところが、「元徳」改元は8月29日であり、「七月八日」はまだ嘉暦四年である。「七」の字も上半部が欠け、拓影図では「九」のようにも見えるが、「七」であることは間違いない。紀年銘が板石塔婆造立の年月日を刻んだものとの前提にたてば、「元徳」は該当候補とはなりえなくなる。

翻って、これを「元徳」と仮定した場合、記された日付が造立の年月日ではないということがありうるのだろうか。『報告書』には、紀年銘の判明するものが9757基掲載されている。見落しがあるかもしれないが、このうち「元年」銘を有するものは798基を数えることができる。これらについてそれぞれの改元日を照合したところ、その9.4%にあたる75基は改元日以前の月（日）、1基は当日の月日を刻んでいた。改元の通達がいつの時点で行なわれたかは問題としても、最も早い日付では11ケ月と19日も前という例がある。

75基の大半は紀年銘と法名を記しただけのもので、数基に題目や光明真言を有するものがある。他方、結衆銘や交名のものはまったくない。なかには日付の下に「逝」と記されたものがある一方、法名に「逆修」と加えたものも存在する。このため、改元以前の日付をもって、ただちに死亡日であると断言することはできない。あるいは、これを誤刻・誤認（年号が干支と

相違する例もある。）としたり、現状観察での誤読であるとすることができるかもしれない。しかし、すべてをそのように解釈するには数が多過ぎないだろうか。

このように、紀年銘の日付が死亡日なのか造立日なのかは明らかとしえない。ただ、そこに改元日以前の日付が記されたことだけは否定ができない。これを強牽付会させようとするわけではなく、無論断定もできるものではないが、板石塔婆12が「元徳元年」である可能性もまた否定しきれないのではなかろうか。根拠としては脆弱ながらも、一応、板石塔婆12の年号は「元徳」と見ておきたい。

真言

出土した22基のうち、真言の記されたものは８基と多い。『報告書』での県平均は約10%、『行田の板碑』での市平均は11.7%である。

真言の内訳は大日如来真言が６基、光明真言が２基である。大日如来真言（他の真言などとの組合せを除く）を刻んだ板石塔婆は、全県下でも『報告書』に22基が報告されているにすぎない。それが墓跡という狭い範囲に６基も含まれているという事実は、特異ともいうべき大きな特色である。

これら６基は全体的に作りが丁寧で、種子や紀年銘も深くしっかりと刻まれている。主尊別に見ると、釈迦如来が１基あるほかはすべて阿弥陀如来である。紀年銘は元徳三年（1331）から延文三年（1358）におよんでいる。

光明真言を有するものは大型の２基で、ともに二重の枠線が巡り、主尊は阿弥陀如来である。板石塔婆５は三弁宝珠を戴き、板石塔婆10は月輪を配する。前者の真言は四行にわたって記され、紀年銘のほか法名と逆修の文字が刻まれる。後者の真言は紀年銘を挟んだ左右二行に記される。

『報告書』では真言全体の85%、『行田の板碑』では同じく75.5%が光明真言である。

双碑

藤澤典彦氏によれば、『双碑とは同一形式・同年月日紀年銘を有する２基の板碑のことで、「双式板碑」とも呼んでいる。』（藤澤　1997）ものである。この定義に従えば、ここで示そうとする本墓跡出土のものは、厳密には双碑と認められないかもしれない。しかし、墓跡からの一括出土という好条件を備えており、まったく異質で無関係のもの同士とは考えられない。むしろ比較検討することにより、一対になる板石塔婆の類型、ひいては双碑の内容もより明らかとなっていくのではなかろうか。ここで取り挙げたいのは第一墓群出土の５と６、第三墓群出土の８と20それぞれの板石塔婆である。

５と６は大きさをはじめ基部や枠線のあり方、主尊の状態や真言の内容、さらには紀年銘の日付も異なっている。なによりも最も相違する点は、５は逆修のための造立が明確なことである。反面、両者は出土位置が近接していること、紀年銘の日付が近く、しかも字体が酷似していること、ともに法名が記されていること、などの共通点も見いだせる。特に紀年銘は書き手と刻み手が別としても、同一人物の手による可能性は極めて高そうである。日付は男性名「道円」の５が「貞和二年（1346）十月日」、女性名「成阿禅尼」の６が同じく「八月十九日」と、２ケ月前後の差しかない。ここには女性と男性が対になり、日付の遅い後者だけが逆修であることを読み取れる。

これに対し、18と20はやや蓮座の表現が異なるものの、各々の大きさや形状、碑面に記された内容や構成がそっくりで、同一形式というにふさわしい。出土位置もほぼ隣合っている。字体はやはり酷似しており、同一人物の手によるものと判断される。紀年銘の日付は18が「元徳三年（1331）四月廿三日」、20がその12日前の「四月十一日」である。

５と６はともかくとして、18と20は別途に誂えたものとは考えにくい。当時、素材となる板石がどのように流通し、流通する時点ではどの程度の加工が施されていたかを明示することはできない。とは言うものの、わずか12日の違いで二度の手間をかけるであろうか。それにいくら日が近いといっても、間を開けて両者に見られるほどそっくりに誂えられるものであろうか。

それよりも素材は同時に調達し、刻（書）字も同一人物が同時に行なったと考えたほうが自然ではあるまいか。では、同時に作られたとすれば、なぜ双碑の条件である同年月日ではないのであろう。

このように見てきた場合、問題となるのは5の「道円」と6の「成阿禅尼」、18の「某」と20の「某」がそれぞれいかなる関係にあるのか、また造立されたのは同時なのか異時なのか、という点である。

この二対が双碑の条件にかなうか否かはひとまず置くとして、前出の藤澤氏は双碑の意味を、「男女の一対になるものが多く、先に述べたように、夫婦の供養塔であり双碑の背景にあるのは夫婦の関係である。」としている。そこで、本例をともに夫婦のものと仮定し、その可否や日付のずれについて考えてみたい。これを推測する手がかりは、5と6に見られる「逆修」銘の存否にあると思われる。

先に紀年銘のところでも触れたように、そこに記された日付は造塔供養日だけを示すものとは限らない。もちろん断定できるわけではないが、解釈のうえからはいくつかの状況が想定できる。まず板石塔婆5と6については、「八月十九日」に夫が亡き妻の追善供養を行ない、「十月日」に自分の逆修供養を行なった可能性である。いま一つは夫が亡き妻の追善供養と同時に、自分の逆修供養をも行なった可能性である。この際、亡妻の板石塔婆には死亡日を、自分のものには供養の執行日（月）を記した。

これに対して18と20は法名や逆修の文字がなく、同様に捉えることはできない。両者が同時に造られたとしても、それはあらかじめ用意しておいただけで、供養の執行は12日間開いているのかもしれない。この時の紀年銘は、それぞれの命日にちなんで記されたとも考えられる。また逆修銘のないことは、造塔供養の実行者が残された配偶者ではなく、亡き夫婦の子供や親族であることを示すのかもしれない。

以上、二対の板石塔婆についてとりとめもなく述べてきた。紀年銘の字体の相似性や日付の近いことを主な根拠としたため、「夫婦」関係を前提とする双碑であるという確証は得られなかった。形式的に見れば、「成阿禅尼」と「道円」が夫婦とは断定できないし、18と20についても、上述のように日付のずれは説明しきれない。しかしながら、18と20は一見して同一形式と認識できるうえ、5と6も深い関係で結ばれているとしか思えない。従って定義上はそぐわないとしても、これら二対の板石塔婆については、それぞれ双碑の一類型と見ることができるのではなかろうか。

3　蔵骨器その他の陶磁器類

墓跡からは6個（7個体）の蔵骨器が出土したほか、貼石中や周堀内からも、舶載磁器や常滑、渥美や在地製品の破片が検出されている。以下では蔵骨器を中心にそれらを大別し、それぞれの所属時期について見ておきたい。

舶載磁器

中国産の舶載時期は出土が少なく、かつ小破片ばかりである。唯一、青白磁の合子のみが図上に復元できた。理由は分からないが、蓋・身ともに故意に破砕され、撒き散らされていた。

山本信夫氏の分類に従えば、この合子は白磁Ｘ類とされたなかに含まれよう（山本　1995）。「白磁Ｘ類は小型、精巧品の類で鎌倉に多い。出土例は少数であるがＦ期を特徴づける。」ものと述べられている。Ｆ期は13世紀中頃～14世紀初頭の設定である。

破片は図示したものがすべてで、第60号溝出土の小皿（第583図１）が同安窯系、他（第581図１～３、第583図２・３）は龍泉窯系の青磁製品である。いずれも13世紀前半から14世紀前半にかけてのものである。

常滑

常滑窯産の製品は破片を含め、最も多く出土している。蔵骨器２（第578図）は肩部に押印文を有する小型の広口壺で、いわゆる「不識」壺（形）と呼ばれるものである。埼玉県内では本庄市東谷中世墳墓址群、羽生市須影上川崎出土のものが知られる（浅野　1981）。「不識」壺は生産地では２基の窯が確認されているだけ（中野　1994）で、むしろ本例のように蔵骨器として、各地で発見されることの多い製品とされている（赤

羽　1977)。

中野晴久氏と赤羽一郎氏は344基の常滑窯出土資料をもとに、生産地における各器種の変遷を示されている（中野　前掲)。そこでは「不識」と呼ばれる製品が、13世紀第Ⅳ四半期に設定される６ｂ型式期に多く認められることが指摘されている。

山茶椀系の片口鉢（第579図）は、蔵骨器５（古瀬戸瓶子）に蓋として被せられていた。片口部は埋納以前に欠失しているものの、故意の打ち欠きとは見えない。内面も使用による摩滅が顕著であり、日常品を転用したことが知られる。

中野氏によれば、「回転ヘラ削りを伴う山茶碗系」の片口鉢Ⅰ類は、６ｂ型式期には消滅したものとされている。その前段階の６ａ型式期は、片口鉢Ⅰ類の特徴として、「底部から屈曲して立ち上がる直線的な体部をもち、体部器壁の変化が乏しくなっている。口縁部はかすかに膨らみを持ち、端部は丸みを帯びた平坦面ができる。高台は帯状の高台でやや低くなり、高台周辺のヘラ削りは一・二段程度と範囲が狭くなる。」ことが挙げられている。本例もこの内容に該当すると考えられる。設定された実年代は13世紀第Ⅳ四半期である。

その他の破片は12世紀後半から、14世紀前半のものが含まれる。中心となるのは13世紀代である。

渥美

常滑に比して出土は少ない。蔵骨器１（第578図）のほかは、口縁部（第582図32）と底部（第583図９）破片が挙げられるにすぎない。蔵骨器１の壺は口頸部が打ち欠かれているが、観察しうる特徴から見て、中野氏の示された編年（中野　1995）で言う２型式、ないし３型式に該当するものと思われる。氏は小型の壺については、「肩から口頸部にかけて灰釉を施したものが、この段階から次型式にかけて生産されており、しばしば肩部にヘラ描き刻文を伴う。」と述べている。実年代は２型式を12世紀第Ⅲ四半期、３型式を同じく第Ⅳ四半期に求めている。

古瀬戸

蔵骨器５本体（第579図）のほかは、壺の破片が１点出土しているのみである。釉のかかった胴部破片であるが、小さい破片のため図示できなかった。埼玉県内で確認された古瀬戸製品では、瓶子が最も多く10例ほどが知られている（浅野　1993)。うち６例は墓跡に伴うものとされている。

古瀬戸製品の分類や編年については、藤澤良祐氏が多くの研究を行なっている。（藤澤　1982・1991・1995a・1995b)。氏の分類によれば、蔵骨器５はⅠ類とされた締腰形に属する。さらに口頸部の形状から二細分されているが、本例はこれを欠くために所属は判明しない。それでも、瓶子Ⅰ類がⅡ期までには姿を消すこと、中期様式の前半に盛行するとされる印花文が施されていることなどから、蔵骨器５は中期前半（Ⅰ・Ⅱ期）のものに比定できると思われる。実年代はⅠ期の成立が13世紀末、Ⅱ期が14世紀前葉とされている。

在地産

在地産と考えられる製品には、蔵骨器３・４の広口壺と６の片口鉢がある。

埼玉を中心に、栃木・群馬を含めた三県の出土蔵骨器を検討した浅野晴樹氏は、在地産の製品を古代末以来の須恵器生産の系統を引くものとし、「須恵器系陶器」の名称で分類を行なっている（浅野　1981・1983)。これによれば、本例の蔵骨器３・４は第Ⅱ類とされた「武蔵型」に該当する。「武蔵型」については、埼玉県の比企・入間郡から児玉・大里郡にかけての一帯を中心に、一部は群馬県にも分布するものとされている。氏の分類は基本的な製作技法や焼成、器形の特徴などから行なわれており、「焼成、形状とも個体差が著しく、画一的な生産体制が十分なされていなかったようにも考えられる。」ものと指摘されている。

近年になって、浅野氏と服部実喜氏は関東地方の中世土器を８時期に細分し、その形成と展開を示されている（浅野・服部　1995)。墓跡出土の蔵骨器３・４・６は、このうちの第６期(13世紀後葉から14世紀中葉)の特徴を備えている。但し、在地産の瓦質壺は生産地が解明されていないことから、各時期の年代観は伴出した古瀬戸や常滑などの搬入陶器、板石塔婆から求め

られている。

両氏は第6期を、「13世紀後葉の北武蔵から上野、下野に蔵骨器として瓦質の壺が多用され」た時期で、この壺は「東国全域を見回してもこの地域以外に分布が見られない特異な製品で」、「当時蔵骨器に多用された常滑焼の補完品として成立したものと推定でき」るとしている。

片口鉢についても、「関東全域では常滑焼片口鉢が圧倒的な量を占めるが、北関東では瓦質片口鉢が常滑焼片口鉢を凌駕する」とし、その背景として「広域流通品の搬入が沿岸地域に比較して少なく、補完品への依存度が高かったものと推定」している。

以上の見解をふまえ、ここで蔵骨器4と板石塔婆12の関係について見ておきたい。両者は出土状況から見て共伴することは確実で、板石塔婆12は蔵骨器4のために造立されたものと判断できる。

先に触れたとおり、板石塔婆12は年号部分を失うものの、干支から永仁元年（1293）、正安元年（1299）、文保元年（1315）、元応元年（1319）、元徳元年（1329）、康暦元年（1379）、康応元年（1389）がその候補となるとした。そして、このなかでは敢て元徳元年を想定しておいた。

浅野・服部両氏の示された時期区分に従えば、蔵骨器4は13世紀後葉から14世紀中葉のものである。これは上に挙げた年号のうち、康暦元年と康応元年を除いた13世紀末から14世紀前葉のものを包括する。さらに板石塔婆12を「元徳元年」に限定できれば、蔵骨器4は同年7月8日以前の製品ということになる。

しかし、墓跡から出土する瓦質壺が蔵骨器専用に生産されたものとして、製作から埋納までは一体どれほどの期間があるのだろうか。また、板石塔婆が供養のために造立されたものとしても、そこに記された紀年銘の日付は、蔵骨器の埋納とどれほどの隔たりがあるのだろうか。こうした意味では、両者に厳密な同時性を求めることはむずかしい。これをせいぜい数年程度と見積れるならば、蔵骨器の製作は1320年代の後半ということになるのだが。

「屋上屋を架す」の例えどおり、板石塔婆12の年号を「元徳」であると仮定したうえで、憶測から蔵骨器4の製作年代を推定してしまった。前掲した元号のいずれかに相当することは確かと思うが、やはり「元徳」と限定するには、改元日に関する問題を解決せねばならない。

4　埋納焼骨

検出した埋納焼骨は23基で、1基を除けば他はすべて短い円筒状を呈していた。ちょうど缶詰の中味をそっくり取り出したような感じで、多くはこの形のなかにぎっしりと人骨が詰まっていた。大きさは直径11cm～18cm、高さ5cm～12cmほどである。

こうした状況から見て、焼骨は墓壙（埋納穴）に直接投入されたのではなく、何らかの円筒状容器に詰めてから埋納されたものと考えられる。容器そのものはまったく残存していなかったので、それは腐朽しやすい材質のもの、すなわち木製であった可能性が高い。このような大きさや形状の木製容器では、まず「曲物」や「桶」が想起されよう。

実際、北陸地方の中世遺跡から出土した木製容器を集成・報告した、『中世北陸の木製容器』（北陸土器研究会　1995）には新潟県上越市子安遺跡に1例、石川県金沢市普正寺遺に2例、焼骨の容器として使用された曲物が紹介されている。ともに完存はしないが、底板の直径は20cm前後である。このうち子安遺跡のものは、底板に直径4㎜の釘穴が1箇穿たれていることから、「あか桶」と呼ばれる納骨容器とされている（新潟県教育委員会　1984）。

築道下遺跡で検出された焼骨が曲物に納められていたとしても、曲物が子安遺跡例のような納骨用容器なのか、あるいは柄杓などの小型品を転用したものなのかは明らかとしえない。ただ、その当否は置くとしても、大きさにはある程度の規格性が認められる。容器の大きさが同様であるということは、納める焼骨の量にもさほどの差がないということになる。このことは埋納する焼骨の量に、一定の基準があったことを物語るのではなかろうか。そしてそれが慣習的な不文律で

あったにせよ、ある種の規則性に基づき、同程度の曲物が選ばれたのではなかろうか。

23基の埋納焼骨は、陶器製蔵骨器に比較して焼骨量が少ないとはいえ、それほどの差があるものではない。「曲物」と「陶器製蔵骨器」の違いが何を示しているのかわからないが、どちらも人間一体分の骨を納めたとは到底思えない。蔵骨器2に納められた人骨の鑑定では、四肢骨および頭骨一個体分を含み、被葬者が成人であることが報告されている(Ⅵ　付編　参照)。この結果から、量的に成人一体分はなくとも、部位は全身におよんでいることが分かる。とすれば、納骨はある程度の部位と量で目的を達したものと判断できる。荼毘跡に多量に残されていた焼骨も、これを裏づけるものと言えよう。

一方これらの埋葬についても、特徴的な状況を看取ることができる。ことに、第三墓群では一列に6基以上の埋納焼骨が並び、しかも埋納の深さが概ね同一である点は注意される。埋納穴には切り合いが見られるが、焼骨まで切り込んだものはわずかである。これは、6基の埋葬が同時ではなく順次、しかも規則正しく行なわれたことを示唆している。但し、端から順番にというような様子は認められない。むしろ、当初はいくぶん間隔を開けて埋葬し、次第にその間を埋めていったように思える。明言はできないが、2基を一つの単位としているようである。

なお、埼玉県立民俗文化センターから報告された『曲物』(埼玉県立民俗文化センター　1985)には、曲物や篩の主要部となる「曲輪」の規格が表示されている。それによれば、曲輪の直径は3寸から1寸刻みに尺3寸まで、および尺5寸となっている。これを埋納焼骨の大きさにあてはめれば、おおよそ4寸から6寸の製品ということになる。近現代の規格と思われるので、当時の製品に直接応用はできないが、寸刻みで生産されている点はおおいに参考としたい。

5　墓跡の構造と展開

墓跡は厚い氾濫土で覆われていたので、遺存状態はきわめて良好でであった。豊富な遺物の出土は無論のこと、埋葬施設を覆う岩石類や周堀などのあり方は、墓跡がどのように造営され、どのように廃絶していったかを推測する大きな手がかりを提供している。そこで、遺物の出土状況や遺構の検出状況を通して、墓地としてはいかような展開があったのかを考えてみたい。

規模と造成

既に遺構の各節においても述べたように、墓跡は周堀を巡らせた方形の区画である。規模は南北約26m、東西約22mで、面積は約572m²となる。未調査区があるため断定はできないが、おそらく南辺をなす第60号溝に、周堀が「コ」字形にとりつくものと推定される。

墓地の造成と成立については、第60号溝と第137号溝の存在が大きく関わっている。両溝は周堀との形状の相違や重複の状況などから見て、この地点が墓地に選定される以前より存在したことは確実である。そして、墓地はこの先行する溝の区画性を遵守し、新たに造成が行なわれたものと考えられる。

造成に際しては、特に削平や土盛などの整地作業は行なわれていない。

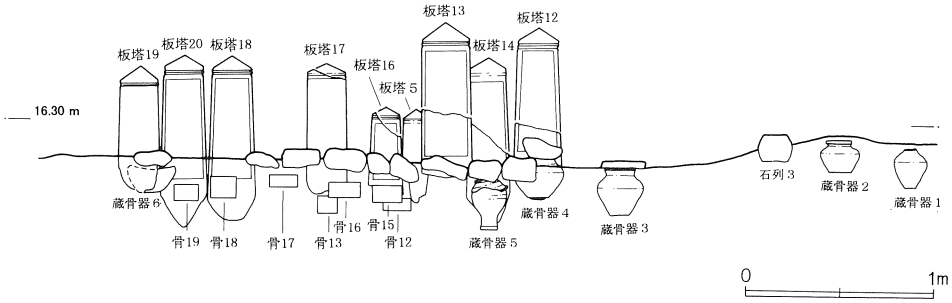
墓群

墓地には三つの埋葬施設群（墓群）が営まれている。いずれも人頭大以上の熔結凝灰岩で区画され、内部は被覆土や貼石で覆われている。各墓群にはさらに小さな区画、すなわち蔵骨器や埋納焼骨ごとの単位が存在する可能性もあったが、調査ではこれをまったく認定できなかった。

第一墓群から第二墓群にかけては、埋納焼骨が周堀の北辺に沿って並ぶ様子が看取される。ところが、第二墓群北端で検出された台石は、明らかに挿し込まれた板石塔婆が東を向くように据えられていた。このことは、周堀北辺に沿って第一墓群が展開した後、第二墓群が隅部で重複しながら西辺に沿って造営されたことを示すのかもしれない。しかしながら、紀年銘の最も新しい板石塔婆（4）は第一墓群から出土しているので、この点は俄かに判断がつかない。

第三墓群は第二墓群の南側に一段低く展開してお

第620図　第二・第三墓群側面観（板石塔婆は復元）



り、北辺の区画（石列３）は共有している。被覆土や貼石も第二墓群から流れ込んだ様子が見られ、後続的であることが窺える。出土位置をそのまま造立位置に置き換えるわけにはいかない反面、第三墓群には紀年銘の最も古い板石塔婆（21）の出土がある。加えて板石塔婆や蔵骨器、埋納焼骨の検出量は第一・第二墓群を凌駕している。

このように、各墓群には埋葬ごと（各蔵骨器・埋納焼骨単位での）の区画性は薄く、多少の時期差はあるとしても、３墓群の区画造営はそれぞれの完了を待ってからではなく、ほとんど並行して行なわれたものと推測できる。つまり、各墓群は造営当初から長方形の区画を有しており、そこへ多くの焼骨が順次埋葬されていったと言うことになる。但し、造営に際して採られたであろう３区分の根拠は不明である。

それでは、この当初から長方形に区画される墓群の意図とは、いったい那辺に求められるのだろうか。藤澤典彦氏は夫婦墓を形態から４分類し、単基の墓の並立から、あらかじめ用意された長方形区画への展開過程を示されている（藤澤　前掲）。そして、最終段階に位置づけられた長方形区画の墓は、「初めから夫婦墓が準備される段階は逆修双碑を造る場合と意識の面で共通するものがある。その段階は13世紀末から14世紀初頭である。」とされている。

氏の言う長方形区画の墓は夫婦二人を前提としているようであり、本例にそのまま適応できないのかもしれない。ただ次のようにも述べられている。「墓地構造では石組墓の集団化と、石組の長大化そして石組墓内における個人区画の消滅化へと展開する。これは石組区画が個人のものでなく家のものへと展開してゆく過程を示している。そしてこの時期の墓地とはその家の墓所としての石組区画の集合体なのである。」と。これを恣意的に解釈しようとする企図はないが、石組区画が「家」のものへと転じていくならば、本例のごとき一区画内への多次埋葬は、夫婦を越えたさらなる「家」意識の体現であるとも解せよう。

墓地全体が「家」の墓所であるならば、各墓群は「家」を構成する血縁的小単位としての、「家族」の墓所とは言えないだろうか。墓群の区画が配偶者の死を契機になされたとしても、そこには夫婦の埋葬場所だけではなく、子供達（夫婦、あるいは孫まで）の分も同時に用意された。そしてこの原理に従い、順次埋葬されていったと理解したいのだが。

第620図は第二墓群から第三墓群にかけての埋葬施設を、東側から透視した状態を示した。地上の板石塔婆は出土状況から造立位置を推定、復元してみた。

放棄と廃絶

墓地を区画する周堀は、ほぼ同位置に２条検出されている。埋没状況からは内側のもの（第Ⅰ次周堀）が埋没してしまったため、新たに外側（第Ⅱ次周堀）に掘削したことが明らかである。第Ⅰ次周堀には第二墓群から多くの貼石が転落しており、少なくとも第二墓群の造営は、第Ⅰ次周堀の埋没完了よりも早い。

第Ⅱ次周堀は溝底がわずかに埋まった後、洪水による氾濫土の堆積を繰り返す。第Ⅱ次周堀にはこれを浚渫した様子はなく、埋まるに任せていたようである。

あるいは、洪水の頻度があまりに高かったからかもしれない。やがて墓地は氾濫土で覆い尽くされ、結果的に廃絶してしまう。おそらく、集落全体も命運をともにしたと考えられる。その後も氾濫は長く続き、築道下遺跡は歴史の中にも埋もれてしまう。遺跡は狭長な自然堤防に乗っているが、氾濫源はこれに沿って蛇行南流する元荒川であろう。

第Ⅱ次周堀の埋没、すなわち墓地の廃絶過程では、五輪塔や板石塔婆に異状が現われる。五輪塔は鋭利な刃物で細かく破砕され、板石塔婆も折られたり引き抜かれたりしている。両者の出土状況はやや異なっているので、破壊や投棄は同時ではないと判断される。五輪塔は第Ⅱ次周堀の底や壁から浮いてはいるものの、氾濫土の堆積は未だ薄い。これに対し、板石塔婆は周堀がほぼ埋まりつくし、地表も氾濫土で覆われ始めた時点で投棄されたようである。いずれにせよ、この行為は墓地の放棄、廃絶を意味するものである。

石塔類の破壊や墓地の放棄の原因を一概に求めることはかなわないが、築道下遺跡の墓地の場合、度重なる洪水が大きく関わっていることは疑いない。けれども、第Ⅱ次周堀の堆積状況は、一時だけの氾濫で埋まりきったものではないことを示している。ということは、石塔類や蔵骨器などは埋まるに任せず、別所への改葬が可能だったはずである。墓地が「家」意識を体現したものであるならば、それは「家」の正当性や権威を主張する手段にほかならない。にも拘わらず改葬せずに放棄せざるをえなかった原因は、こうした自然の猛威ではなく、「家」の解体や再編に絡む社会的・政治的な変動にあるのだろうか。しかし、たとえそうであるにしても、それは結果的なものに思える。なぜなら、この墓地を造営した「家」は元荒川の氾濫によって、周囲に展開するであろう居住域、あるいは財政基盤である耕地をも同時に失ったと想像されるからである。やはり、墓地放棄の直接的な原因は、急速な埋没をもたらした頻繁な洪水にあったと考えたい。

造営期間

出土遺物の時期については既述したとおり、五輪塔を南北朝期、蔵骨器は２点の常滑を13世紀第Ⅳ四半期、渥美を12世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期、古瀬戸を13世紀末～14世紀前葉、在地産では２点を13世紀後葉～14世紀中葉、１点（蔵骨器４）を13世紀末～14世紀前葉とした。また、板石塔婆の紀年銘は弘安六年（1283）～明徳三年（1392）の110年間、破片の常滑は12世紀後半～14世紀前半におよんでいる。

このように、出土遺物から求められる時期は、12世紀後半～14世紀前半という幅を有している。遺物それぞれには時期的な偏在も多少見られるが、中心となるのはおおよそ13世紀末～14世紀中葉となろう。破片資料を別とすれば、蔵骨器とされた渥美の壺のみがかなり古いものとなる。伝世を考慮しても、他の蔵骨器とは１世紀もの開きがある。あるいは浅野晴樹氏の御教示のように、生産地と消費地での編年観に齟齬があるのかもしれない。消極的ながら、この点については今後の研究を待つこととしたい。

墓地の造成時期の解明には上述した問題のほか、先行する区画が存在するなど、遺跡全体の中世遺構について検討が必要でもある。現時点において墓地の消長を推測するならば、それは13世紀後葉に造成され、同末～14世紀中葉を盛期として同末まで造営される。そして、15世紀に入って間もない頃、度重なる元荒川の氾濫によって放棄、廃絶するということになる。

造営主体者

思いつくままに冗言を弄してしまったが、最後に墓地造営の主体者について若干触れておきたい。

言うまでもなく、それまで天皇や貴族のものであった仏教は、法然や弟子の親鸞による布教活動を通し、広く支持を集めるようになっていく。こうしたなか、武力衝突の中心であり、常に死と直面していた武士達に、新しい仏教が浸透していくのは当然の成り行きであった。

桃崎祐輔氏は関東以東の例をとり、中世墓の成立・変遷・解体を７期に区分している（桃崎　1997）。このうち、本例が対応するであろうⅢ期（13世紀後半～14世紀中葉）は、「律・念仏葬送集団と三昧。密教荘厳化

と石塔＋蔵骨器の盛行。」の段階で、「火葬造塔は本宗家権威の荘厳化に置き換えられ、惣領制と結合して武士階級が広く受容した。」とされている。

桃崎氏や先の藤澤典彦氏の論説を引くにつけ、築道下遺跡の墓跡もそれに合致するやに思われてくる。すなわち、造墓の主体者は武士である在地の領主層であり、この時期の墓は「家」意識の体現であったと。

中世の武蔵国では武蔵七党と呼ばれる多くの武士団の蟠踞が知られており、特に埼玉県北部では分布が濃密である。いま『行田市史　上巻』(行田市役所　1963)から本遺跡周辺の武士だけを拾ってみても、久下・忍・河原・長野・行田・麻績・渡柳・広田・野・津之戸・笠原・真名板・多賀谷、等々といった数多くの氏を挙げることができる。これら氏の名は現在も地名として残っており、館跡の伝えられるものも多い。築道下遺跡の所在地は行田市大字野(の)であることから、まずは上記「野」氏との関係に想到する。「野」氏は『吾妻鏡』に野五郎の名が一度登場するだけで、その実態はよく分からない。また、遺跡付近には館跡の伝承などもまったく残っていない。よって「野」氏を含め、ここに墓地を造営した人物、ないし氏は特定することがかなわない。ただ、「津之戸(つのと)」氏については興味深い記録があるので、造墓の背景を探る一助とするため、以下に掲げておきたい。

津之戸三郎為守は鎌倉時代の御家人で、遺跡の西方約1.3km、吹上町角戸の地に館跡が伝わる(埼玉県教育委員会　1988)。この口伝については、既に『新編武蔵風土記稿』が多摩郡に城蹟のあることをもって、「此説ウケガタシ。」としている。しかし、建治元年（1275）『六条八幡宮造営注文』の記事では、「忍入道跡」・「箕田入道跡」の後に「津戸入道跡」と記され、次いで「弘田人々」・「柏間左衛門入道跡」・「多加谷六平二跡」と続く（海老名・福田　1992)。これはいずれも遺跡周辺の武士達、あるいは土地の人々である。この配列を見れば、後に多摩郡へ移ったとしても、津之戸氏がこの地と関わっていたことは否定できないと思われる。

津之戸三郎為守に関しては、『法然上人絵伝』の詞書では次のように語られている。彼は18歳のときに石橋山の合戦に参加。以来、御家人として長く頼朝に仕える。建久六年(1195)、頼朝に従って上洛。そこで法然の教えを受けてからは念仏三昧に励み、出家した後は尊願と名のる。仁治三年（1242）11月18日には極楽往生を願い、割腹のうえ自害を謀るが果たせず。明くる年の正月13日、「来たる15日の午刻にお迎えしよう」との法然の夢告を得る。当日は念仏を唱えながら、80歳でついに往生を遂げる。

もちろん、津之戸三郎為守と築道下遺跡の墓跡が直接関係あるというのではない。重要なのはこの地域に住したであろう彼のような武士が、極楽往生を願い篤く仏教を信奉していたということである。彼の死後半世紀、ここを領していた一族もまた仏教を尊び、かつ「家」の正当性を誇示すべく墓地を造営する。そこでは手厚い埋葬と供養が繰り返されたのである。

築道下遺跡での墓跡の検出は、当地域における中世の政治的、経済的、宗教的な研究分野に貴重な資料を提供するものである。にも拘わらず、資料検討が不充分なうえ焦点も定まらず、いたずらに紙数ばかりを費やしてしまった。類例の収集もままならず、基礎的作業をなおざりにしてしまった感は否めない。日頃の不勉強がなせる業と自戒するものである。　　(劔持)

引用参考文献

赤熊浩一他　1988　『将監塚・古井戸Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第71集

赤羽一郎・小野田勝一　1977　『日本陶磁全集　8』常滑・渥美

浅野晴樹　1981　「埼玉県出土の中世陶器(1)」『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第3号

浅野晴樹　1983　「埼玉県出土の中世陶器(2)」『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第5号

浅野晴樹　1984　「埼玉県出土の中世陶器(3)」『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第6号

浅野晴樹　1988　「関東における中世在地産土器について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』4

浅野晴樹他　1989 『北島遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第81集
浅野晴樹　1993　「北武蔵出土の中世陶磁器」『つぼ・かめ・すりばち』埼玉県立博物館　特別展図録
浅野晴樹・服部実喜　1995　「関東」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会
石岡憲雄他　1981 『六反田』　岡部町六反田遺跡調査会
石田茂作　1969 『日本仏塔の研究』　講談社
磯部淳一　1992 「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究』2　高崎市
梅沢太久夫　1991 「崇徳寺の調査」『埼玉県立歴史資料館　研究報告』第13号
海老名尚・福田豊彦　1992 「六条八幡宮造営注文について」『国立歴史民族博物館　研究報告』第45集
小野塚克之他　1993 『中川水系　Ⅲ人文』　中川水系総合調査報告書２　埼玉県
金子真土他　1980 『埼玉県指定史跡　八幡山古墳石室復原報告書』　埼玉県教育委員会
金子直行他　1996 『新屋敷遺跡　Ｃ区』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第175集
川本町教育委員会　1984 『畠山重忠墓』
木戸春夫　1985 『白鳥田遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第54集
行田市教育委員会　1983 『行田の板碑』
行田市役所　1963 『行田市史　上巻』
栗原文蔵　1995 「壺の石蓋」『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第17号
後藤建一他　1989 『静岡県の窯業遺跡』　静岡県文化財調査報告書第42集　静岡県教育委員会
駒宮史朗・大久保かおり　1995 「深谷市高島の中世石造遺物群」『埼玉県立歴史資料館　研究紀要』第17号
埼玉県教育委員会　1980 『甘粕山』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集
埼玉県教育委員会　1981 『埼玉県板石塔婆調査報告書』
埼玉県教育委員会　1988 『埼玉の中世城館跡』
埼玉県立民族文化センター　1985 『曲物』　埼玉県民俗工芸緊急調査報告書第２集
斉藤国夫　1979 『野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　行田市文化財調査報告書第５集　行田市教育委員会
斉藤国夫　1980 『池守遺跡発掘調査概報―昭和54年度―』　行田市文化財調査報告書第８集　行田市教育委員会
斉藤国夫　1980 『小針遺跡発掘調査報告書―Ｂ地区―』　行田市文化財調査報告書第10集　行田市教育委員会
斉藤国夫　1981 『池守遺跡』　行田市文化財調査報告書第12集　行田市教育委員会
斉藤国夫　1981 『小針北遺跡』　行田市遺跡調査会報告書第１集　行田市遺跡調査会・東京電力（株）埼玉支店
斉藤国夫　1990 『小針遺跡―第３次調査報告書―』　行田市遺跡調査会報告書第２集　行田市遺跡調査会
坂詰秀一編　1982 『板碑研究入門』　考古学ライブラリー12　ニュー・サイエンス社
坂詰秀一編　1991　増補改訂版『板碑の総合研究　総論』　柏書房
塩野　博他　1994 『川里村史』　資料編１　原始・古代／中世　川里村教育委員会
鈴木徳雄　1984 「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」　『土曜考古』第９号
高崎光司　1992 『新屋敷遺跡―Ｂ区―』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第123集
高橋一夫他　1982 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』　埼玉県県史編さん室
高橋俊男他　1982 『袋・台遺跡』　吹上町教育委員会
高橋俊男他　1983 『下忍・向遺跡』　吹上町教育委員会
瀧瀬芳之　1985 『愛宕通遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第51集
田中一郎他　1984 『若葉台遺跡群　Ａ・Ｂ・Ｂ地点南発掘調査報告書』　鶴ヶ島町教育委員会・若葉台遺跡発掘調査団
田中正夫　1994 『新屋敷遺跡―Ａ区―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第140集
田部井功他　1977 『鴻池・武良内・高畑』埼玉県遺跡調査会発掘調査報告書第11集　埼玉県教育委員会
塚田良道他　1988 『瓦塚古墳・下埼玉通遺跡』行田市文化財調査報告書第19集　行田市教育委員会
富田和夫　1992 『稲荷前遺跡（Ａ区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第120集
富田和夫・赤熊浩一　1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第46集
中島利治他　1976 『小針遺跡の調査―Ａ地区―』行田市文化財調査報告書第３集　行田市教育委員会
中島　宏他　1984 『池守・池上』　埼玉県教育委員会
中島洋一　1992 『陣場遺跡（５次）発掘調査報告書』　行田市文化財調査報告書第26集　行田市教育委員会
中島洋一他　1993 『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　行田市文化財調査報告書第28集　行田市教育委員会
中島洋一　1994 『馬場裏遺跡（18次）発掘調査報告書』　行田市文化財調査報告書第29集　行田市教育委員会
中島洋一　1996 『石田堤遺跡発掘調査報告書』　行田市文化財調査報告書第32集　行田市教育委員会
中野晴久　1994 「赤羽・中野　生産地における編年について」全国シンポジウム『中世常滑焼をおって』資料集
中野晴久　1995 「常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会
新潟県教育委員会　1984 「第Ⅴ章子安遺跡の調査」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告１』今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡

坂野和信・富田和夫　1996 「飛鳥時代の関東と畿内—北関東における7世紀の土器様相—」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』　国際古代史シンポジウム実行委員会
坂野和信　1997 「日本仏教導入期の特質と東国社会—その歴史的背景と変革について—」『埼玉考古』第33号
藤澤典彦　1997 「板碑資料からみた中世墓地構造の展開」『帝京大学山梨文化財研究所　研究報告』第8集
藤澤良祐　1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号
藤澤良祐　1991 「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要』X
藤澤良祐　1995a 「瀬戸古窯址群—古瀬戸前期様式の編年—」『瀬戸市埋蔵文化財センター　研究紀要』第3輯
藤澤良祐　1995b 「古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会
北陸中世土器研究会　1995 『中世北陸の木製容器』
桃崎裕輔　1995 「関東・甲信地域の様相」シンポジウム『中世の火葬』資料集
桃崎裕輔　1997 「中世墓の成立と終焉（関東以東の事例）」静岡県考古学シンポジウム1996年度　『静岡県における中世墓』　静岡県考古学会
山崎　武他　1984 『宮地三丁目遺跡』　鴻巣市遺跡調査会報告書第4集　鴻巣市遺跡調査会
山崎　武他　1987 『鴻巣市遺跡群II』　鴻巣市文化財調査報告第2集　鴻巣市教育委員会
山崎　武他　1988 『鴻巣市遺跡群IV』　鴻巣市文化財調査報告第4集　鴻巣市教育委員会
山崎　武他　1989 『鴻巣市遺跡群V』　鴻巣市文化財調査報告第5集　鴻巣市教育委員会
山崎　武他　1990 『鴻巣市遺跡群VI』　鴻巣市文化財調査報告第6集　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1995 『伝源経基館跡』　鴻巣市遺跡調査会報告書第7集　鴻巣市遺跡調査会
山本信夫　1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会
吉田　稔他　1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第95集
吉田　稔　1997 『築道下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第188集

付編

築道下遺跡における自然科学分析報告（火葬骨分析部分の抜粋）
蔵骨器の被葬者の推定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．試料

試料は、中世（14世紀代）の墓城から検出された蔵骨器と埋納焼骨（各１基）に納められていた、火熱を受けた人骨である。いずれも細片化しており、火熱を受けたためか変形したり、ひび割れたりしていた。蔵骨器２はタッパー２個に分けて、埋納焼骨18はタッパー１個に、それぞれ多数の骨片が収納されていた。

断片的な試料ではあるが、中世蔵骨器の被葬者に関する情報を得られるものと期待されたので、可能な限り同定を行うことにした。

2．結果

同定結果を、蔵骨器毎に述べる。

(1) 蔵骨器２

２個のタッパーに分けて収納されていた人骨は、原形をとどめるものがほとんどみられず、火葬時の被熱によって変形し、細片化している。ほぼ原形をとどめていて、部位等が明らかになったものは極めて少なく、以下の通りである。

頭骨：前頭骨頬骨突起・左
頬骨・左
錐体部・左、右
下顎骨骨体部・右
下顎骨関節突起部・右
椎骨：軸椎突起部・左、右

これらのほかに、頭骨片、四肢骨片がみられたが、変形や細片化がはげしく、部位を特定することはできなかった。

(2) 埋納焼骨18

人骨片は、蔵骨器２同様、原形をとどめるものがほとんどみられず、火葬時の被熱によって変形し、細片化している。ほぼ原形をとどめていて、部位等が明らかになったものはほとんどなく、頭骨片、四肢骨片、膝蓋骨片、椎骨片、肋骨片などを確認するにとどまった。

3．考察

ヒトの焼骨片は、いずれも変形・細片化がはげしく、部位等を明らかにできたのは蔵骨器２のみであり、極めて少なかった。

原形をとどめている試料が幾つかあった蔵骨器２では、左右１対ずつの頭骨錐体部・軸椎が認められたことから、１個体分の頭骨および四肢骨片を中心に蔵骨器内に納めたものと考えられる。椎骨や四肢骨片等の状況から、この被葬者は成人であった可能性がある。なお、性別は不明である。

一方、埋納焼骨18では、蔵骨器２で確認したような、個体数を推定できる特定骨や年齢・性別を推定できる特定骨を検出できなかった。そのため、被葬者の個体数・年齢・性別等について、明らかにすることができなかった。